鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　19

平成14年度発掘調査報告

平成15年３月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　19

平成14年度発掘調査報告

平成15年３月

鎌倉市教育委員会

調査区北半分全景　西から

調査区南半分全景　西から

ごあいさつ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ６割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成12・13年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅の建設に伴う発掘調査の記録として９ヶ所の調査成果を掲載しています。

特に北条小町邸跡(地点③)では鎌倉幕府が初期の大倉の地から若宮大路の東側に位置する地に移転された時期に相当する年代の溝、掘立柱建物、井戸などで構成される屋敷跡が発見され、大きな成果をあげることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成15年３月31日
鎌倉市教育委員会

例　言

1　本書は平成１４年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書である。

2　本書所収の調査地点は別表、調査地点位置図及び目次のとおりである。

3　現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

4　出土遺物及び写真・図面等の資料は鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。

5　各調査内容の詳細は、それぞれの報文を参照されたい。

総　目　次

ごあいさつ…… Ⅰ
例言…… Ⅱ
平成14年度調査の概観 …… Ⅴ

1　華光院跡やぐら群(No.101)扇ガ谷二丁目191番地点
第１章　環境と立地…… 1
第２章　調査の概要…… 4
第３章　遺構…… 5
第４章　遺物…… 8
第５章　調査成果…… 10

2　能蔵寺跡(No.314)材木座二丁目297番地１地点
第１章　調査の概要…… 19
第１節　調査地点の位置と環境…… 19
第２章　グリッド配置と土層堆積…… 21
第１節　グリッド設定…… 21
第２節　層序…… 21
第３章　発見された遺構と遺物…… 26
第１節　遺構と遺物…… 26
Ⅰ　第１面の遺構と遺物…… 26
Ⅱ　第２面の遺構と遺物…… 32
Ⅲ　第３面の遺構と遺物…… 35
Ⅳ　第４面の遺構と遺物…… 42
Ⅴ　第５面の遺構と遺物…… 43
第４章　まとめ…… 46

3　北条小町邸跡(No.282)雪ノ下一丁目401番５ほか地点
第１章　調査地点概観…… 74
１．位置と地勢…… 74
２．歴史的環境…… 74
第２章　調査の概略…… 81
１．調査にいたる経緯…… 81
２．調査方法…… 81
３．調査経過…… 82
第３章　調査結果…… 83
第１節　概要…… 83
１．層序と面のあり方…… 83
第２節　各説…… 83
１．上層１群…… 83
２．上層２群…… 86
３．上層３群…… 87
４．下層…… 102
５．一括採集遺物 …… 111
第４章　まとめと考察…… 124
１．遺跡年代と性格…… 124
２．東西溝とその意義…… 126

4　多宝寺跡(No.187)扇ガ谷二丁目238番７地点
第１章　環境と立地…… 153

第２章　調査の概要…… 155
第３章　遺構と遺物…… 156
第４章　調査成果…… 157
5　名越ヶ谷遺跡(No.231)大町三丁目2356番11地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境…… 163
第２章　調査経過とグリッド配置、基本土層…… 165
第３章　検出遺構と出土遺物…… 167
第４章　まとめ…… 181
6　若宮大路周辺遺跡群(No. 242)雪ノ下一丁目200番３地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境…… 207
第２章　調査の経緯と成果と概要…… 209
第1節　調査の経緯 …… 209
第2節　成果の概要 …… 211
第３章　発見された遺構と遺物…… 213
第１節　調査地内基本土層層序 …… 213
第２節　第６面 …… 213
第３節　第５面 …… 214
第４節　第４面 …… 219
第５節　第３面 …… 223
第６節　第２面 …… 246
第７節　第１面 …… 249
第４章　まとめ…… 254
7　横小路周辺遺跡　(No.259) 二階堂字荏柄10番１地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境…… 279
１．遺跡の位置…… 279
２．歴史的環境…… 279
第２章　調査の概要…… 282
１．調査の経過…… 282
２．測量軸の設定…… 284
３．層序と生活面…… 284
第３章　検出遺構と出土遺物…… 285
１．第１面の遺構・遺物…… 285
２．第２面の遺構・遺物…… 295
３．第３面の遺構・遺物…… 294
４．第４面の遺構・遺物…… 297
５．第５面の遺構・遺物…… 303
第４章　調査のまとめ…… 312
8　史跡鶴岡八幡宮境内　雪ノ下二丁目39番３地点
第１章遺跡の位置と歴史的環境 …… 340
第２章調査経過・グリッド配置 …… 340
第３章検出遺構 …… 342
第４章まとめ …… 342
9　名越ヶ谷遺跡(No.231)大町三丁目2356番10地点
第１章遺跡の位置と歴史的環境 …… 352
第２章調査の経過と層序 …… 354
第３章検出した遺構と遺物 …… 354
第４章まとめ …… 356

平成14年度調査の概観

平成14年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査１件を含む25件であり、調査対象面積は1,721.03㎡であった。これを前年度の15件、1,097.30㎡と比較すると件数が前年度より10件増加し、面積も前年度に対して57％の増加となっている。依然、景気は低迷状態にあると言われる社会情勢にもかかわらず、むしろ埋蔵文化財の保存に影響をおよぼすような鋼管杭打ち工事や地盤改良工事を内容とする個人専用住宅等の建設工事 は増加の一途をたどっている傾向が顕著に窺える。

調査原因の内訳は、個人専用住宅の建設が22件、自己用店舗併用住宅の建設が２件、そして零細な個人事業の宅地造成が１件となっている。宅地造成を除いた24件のうち、鋼管杭打ち工事及び表層ないし柱状の地盤改良に該当するものが20件、地下室の築造が２件、車庫及び擁壁の築造が２件みられた。以下、各地点の調査毎に至る経緯と調査成果の概要を紹介する。

1　北条時房・顕時邸跡(NO，278)

市内中心部の若宮大路の西側に位置し、鶴岡八幡宮の社頭いわゆる二の鳥居からはわずか30ｍ程の場所にあたる雪ノ下一丁目に所在している。調査に至る経緯については、昨年度の本書「平成13年度調査の概観」に記しており、同書を参照されたい。現地での発掘調査は昨年度からの継続事業として平成14年２月４日から４月30日まで実施した。

調査の結果、柱間の寸法からかなり規模の大きな建物であったことが推定される礎石建物跡や掘立柱建物跡等の建築遺構が数多く確認され、溝跡、柵列によって整然と区画させた武家屋敷の跡が発見された。当該地周辺には従前から鎌倉幕府の要職をになった北条氏の屋敷地の存在が予想されていたが、今回の調査では北条氏の家紋である三鱗文を刻んだ木材が出土するなど、若宮大路の西側地域における土地利用の一端を明らかにすることができた。

2　台山遺跡(NO，29)

市内中央部からやや北よりの山ノ内地区に所在し、地元で台峰と称される丘陵地の東麓部分にあたる山ノ内字宮下小路に位置する。平成13年２月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、計画が敷地の一部を切り下げ、車庫及び擁壁を築造するものであったため、確認調査を実施したところ、現地表下210cm 以下に中世遺物包含層及び遺構面の存在が確認され、これにより当該土木工事による埋蔵文化財への影響が避けられないことが判明した。建築主との協議において工事計画の変更は困難との意向が示されたため、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年４月１日 から４月19日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、おおむね14世紀中頃以降のものと考えられる掘立柱建物等の遺構が発見された。従来、近隣には発掘調査の実施例がほとんどないため、今後、当該地周辺における中世期の土地利用解明に重要なデータを提示する調査となった。

3　笹目遺跡(NO，207)

市内中心部を東西に貫く県道鎌倉葉山線から北側に所在し、南北に細長くのびる谷戸のほぼ中央部分にあたる笹目町に位置する。平成13年12月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、工事計画が地盤の柱状改良を伴うものであったため、確認調査を実施したところ現地表下180cm 以下に中世遺物包含層及び遺構面の存在が確認され、これにより当該土木工事による埋蔵文化財への影響が避けられな

いことが判明した。建築主との協議において工事計画の変更は困難との意向が示されたため、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年４月１日から４月22日まで現地での発掘調査を実施した。

調査は谷戸部という立地条件により遺構の埋没深度が非常に深いことから、発生土の処理と多量の湧水に悩まされながらの実施となったが、良好な地業層を形成したうえで掘立柱建物等を構築している状況等が確認された。

4　大倉幕府周辺遺跡群(NO，49)

市内中心部から東側の地域にあたる雪ノ下四丁目に所在し、県道金沢鎌倉線と滑川とに挟まれるかたちで形成された沖積地上に位置している。平成14年４月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事に際して地盤の柱状改良を行うものであったため、確認調査を実施したところ現地表下40cm以下に中世遺物包含層及び遺構面の存在が確認され、これにより当該土木工事による埋蔵文化財への影響が避けられないことが判明した。建築主との協議において工事計画の変更は困難との意向が示されたため、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年６月25日から７月22日まで現地での発掘調査を実施した。

調査は25㎡という決して広くない調査区において、発生土の敷地内処理という制約の下に実施することとなったため、多少の困難を伴うものとなったが、鎌倉時代初期の遺構の存在等が確認され、貴重な成果を得ることができた。なお、敷地が南側を流れる滑川に向って傾斜する立地にあるためであろか、当該地周辺の幾つかの調査地点で確認されたいるような弥生時代中期頃の竪穴住居跡等の遺構は確認されなかった。

5　長谷小路周辺遺跡(NO，236)

市内中心部のやや南側にあたる海浜部の砂丘上に所在する由比ガ浜三丁目に位置している。平成13年８月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事が杭長５ｍの鋼管杭を打設するものであったため、確認調査を実施したところ現地表下60cm以下に中世遺構面が確認された。このため当該建設工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断され、建設工事着工前に埋蔵文化財の発掘調査を実施することで建築主と合意に達した。この後、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整に入ったが平成13年12月なって建築主から建築工事の着工が平成14年７月以降に延期となった旨の連絡がもたらされた。このため現地での発掘調査は建設工事着工のスケジュールに合わせ、平成14年７月１日 から７月25日まで実施した。

調査は建築の予定されている建物の基礎の設置箇所を包括するかたちとし、調査区を２箇所に別けて設定し実施した。遺跡の立地が海浜部に連なる砂丘上ということもあって、調査区の壁が部分的に崩落をしかねない悪条件の下で実施する状況となったが、おおむね13世紀中頃から14世紀前半にかけての時期の建物跡等を部分的に確認するところとなった。

6　無量寺跡(NO，196)

市内中心部の扇ガ谷一丁目に所在し、無量寺ヶ谷呼ばれる南ないしは南西に向って開く谷戸の最奥部に位置する。平成14年４月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、住宅の基礎工事に際し杭長７ｍ50cmに達する鋼管杭の打設を含む計画であったため、確認調査を実施したところ現地表下245cm以下に中世遺構面を形成する岩盤面が確認された。このため当該土木工事の実施による埋蔵文化財への

影響は避けられないものと判断されたが、事業者との協議において工事計画の変更は困難との意向が示されたため、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整を経て平成14年７月15日 から９月13日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、14世紀代のやぐら４基をはじめ、岩盤上に柱穴や溝跡等の遺構群が営まれている状況を発見することができた。

7　玉縄城跡（NO，63）

市内の北西部にあたる植木字相模陣に所在する。玉縄城跡のなかでは南東の外郭部にあたり、ちょうど東側から七曲坂を上り詰めた丘陵の頂上部付近に位置する。平成14年４月に個人を事業主とする宅地造成（３区画）の実施について事前相談があり、造成工事に際して最大で現地表下２ｍに達する掘削工事が計画された。このため確認調査を実施したところ、玉縄城跡の南側に巡らされたと考えられる土塁状の遺構が確認された。これにより当該造成工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断された。このため事業者と発掘調査の実施について数回にわたる協議を実施したが、今回の宅地造成によって創出した宅地の販売によって得た利益を相続税等の支払に充てるとする事業者からは、発掘調査経費の負担が困難である旨の発言があり、発掘調査の実施に先だって経費負担の取扱について、県教育委員会を含めた協議・調整を経て当該宅地造成工事を個人による零細な事業と認定したうえで、発掘調査の実施にあっては事業者からの応分の協力を得たうえで最終的に国庫補助事業市内遺跡発掘調査として実施することとなった。あわせて文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成13年７月15日 から８月14日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、玉縄城跡を巡って設けられた土塁の構築が良好なかたちで把握可能となり、大きな成果を得ることができた。

8　北条政村屋敷跡（NO，131）

市内中心部の西側にあたる深沢地区のうち常盤字常松下に所在し、南から北に向って開く細長い谷戸の入口部分西側に位置している。平成14年５月に地下室の築造を含む個人専用住宅の建設に係る事前相談がもたらされた。地下室の築造に係る掘削深度から勘案して、埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、確認調査を実施したところ、現地表下60ｃｍ以下に中世遺構面の存在が確認された。これにより事業者との協議を経て、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成13年７月23日 から８月９日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、発掘調査の対象となった面積が狭小であったにもかかわらず、中世後半の時期の柱穴等の遺構及び当該期の土器類等、若干の出土遺物を発見することができた。

9　名越ヶ谷遺跡（NO，231）

市内中心部から逗子方面に通じる県道鎌倉葉山線の名越四ツ角を北に入り、東西に細長く広がる名越ヶ谷と呼ばれる谷戸の東側最奥部、大町六丁目に位置している。平成14年６月に敷地の一部をスロープ状に切下げようとする車庫の築造工事に係る事前相談がもたらされた。当該地には今回の車庫築造計画以前から民間不動産会社による建売住宅の建築工事が計画され、それにともなって平成14年３月に実施した確認調査の成果から、現地表下40cm 以下に中世遺物包含層の存在が確認されている経過があった。このため、当該土木工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたことから、

事業者との協議を経て、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年７月27日 から８月20日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、車庫の築造範囲という狭小な発掘調査にもかかわらず、良好な地業面が存在し、掘立柱建物跡を構成する柱穴等が発見された。

10　大倉幕府跡(NO，253)

市内中心部のやや東側に所在し、かつて源頼朝が開いたとされる初期の鎌倉幕府(大倉幕府)があったと推定される区域の中心からやや西側にあたる雪ノ下三丁目に位置している。平成14年６月に自己用店舗併用住宅の建設に係る事前相談があり、当該工事計画には現地表下6.5ｍに達する杭構造の基礎工事が含まれるものであった。これにより当該土木工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと予想されたため、確認調査を実施したところ、現地表下50ｃｍ以下に中世遺構面の存在が確認された。このため埋蔵文化財の保護措置に関する協議を建築主と数回にわたって実施したところ、当該工事計画の変更は不可能との意向が示されたため、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年７月29日 から９月６日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、現地表下約３ｍまでのなかに11層に及ぶ中世遺構面のあることが判明した。調査区の壁が崩落することのないよう、最下層の遺構面に調査が到達するまで慎重に掘り下げを実施した。この結果、最下層では大倉幕府の存続年代に見合うと推定される12世紀末頃の遺構も、部分的な状況ながら確認することができた。

11　材木座町屋遺跡(NO，261)

市内中心部の南側にあたる材木座六丁目に所在し、海岸部から約200ｍほど北東に入った、弁ヶ谷と呼ばれる谷戸の入口付近に位置している。当該地は従前、一つの広大な敷地であったが、敷地の分割によって６区画の敷地に宅地化された場所である。平成14年５月に当該敷地の北西角地において個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事に際して杭長４ｍに達する鋼管杭の打設を含む計画であったため、埋蔵文化財に影響は避けられないものと予想された。このため確認調査を実施したところ、現地表下80ｃｍ以下に中世遺物包含層の存在が確認された。このため事業者との間で数回の協議を経て、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年８月12日 から９月10日まで現地での発掘調査を実施した。

発掘調査は発生土の敷地内処理を勘案した結果、極めて狭小な面積に限定して実施することとなり、中世遺構群の層位的な存在や掘立柱建物を構成するものと考えられる柱穴等の部分的に発見するにとどまり、遺構群の面的な広がりを把握するまでには至らなかった。なお本年度は従前、同一敷地であった６区画の敷地のうち、本調査地点の発掘調査を皮切りに合計４区画の敷地において発掘調査を実施することとなった。(地点12 、17 、22)

12　材木座町屋遺跡(NO，261)

前述の調査地点11の東側に位置している。平成14年６月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事に際して杭長４ｍに達する鋼管杭の打設を含む計画であったため、埋蔵文化財に影響は避けられないものと予想された。事前相談のあった１ヶ月前に西側の敷地において実施した確認調査の成果から既に現地表下80ｃｍ以下に中世遺物包含層及び遺構面の存在が確認されていることから、当該

地について新たに確認調査を実施する必要はないとの判断を経て、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行った。現地での発掘調査は平成14年８月12日 から９月26日まで実施した。

調査は前述の地点11と同様に調査区を狭小な面積に限定せざるを得ない状況の下で実施することとなったが、柱穴や礎石等の部分的な建物遺構や縦板に横桟を組み合わせた井戸枠を有する井戸跡等の遺構が発見された。

13　天神山城(NO，384)

市内の北西部、深沢地区の山崎字宮廻りに所在している。天神山と呼ばれる南北にやや長いかたちの独立丘陵の東側、山裾部分に位置している。平成14年４月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎の構造に長さ７ｍに及ぶ鋼管杭の打設をともなう計画であったため、確認調査を実施したところ、現地表下160ｃｍ以下に中世遺物包含層及び遺構面の存することが明かとなった。これにより当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、建築主から文化財保護法第57条 の２の届出を受け、発掘調査の実施にむけた協議を開始した。しかしながら建築主からは再三にわたり発掘調査の実施後に建築物に沈下等の不都合が生じた際の保障措置を発掘調査の着手前に担保せよとの意向が示され、市教育委員会と建築主との間に意見の対立が生じ、こうした問題解決に多くの時間を要したため、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整い、ようやく平成14年９月11日 から現地での発掘調査に着手することとなり、９月26日に調査を終了した。

調査の結果、長らく水田の耕作土として利用されていた厚い堆積土の除去等に時間を費やしながらも、中世後半頃の遺物が包含層から一定量出土することが確認されたが、具体的な意向の在り方については判然としない結果となった。敷地の西側には天神山の裾部分の岩盤が露出している状況を勘案すると、当該調査地点のやや西側から東側に向って地盤が大きく落ち込んでいる可能性が推定されよう。

14　妙本寺遺跡(NO，232)

市内中心部に広がる平野部の東側山裾に展開する比企ヶ谷の谷戸の入口部分にあたる大町一丁目に位置している。当該地は平成13年２月に４名の建築主の連名で実施された個人専用住宅の建設を含む宅地造成により創出された敷地の一角にあたる。その当時、宅地造成工事に係る敷地の切下げ及び擁壁の築造部分について、既に埋蔵文化財の発掘調査が実施されている敷地である。平成14年８月に当該地において地盤の改良工事が実施されている状況が判明したため、施工業者に対して緊急に工事の一時中断を要請し、急遽、建築主及び施工業者と文化財保護の措置について協議を開始することとなった。建築主によれば昨年、宅地の造成時に発掘調査が実施済みであったことから今回の建物建築に際しては、改めて発掘調査が必要であるとの認識がなく、工事の着工に至ったとの説明がなされた。こうした経過を受け、既に埋蔵文化財への具体的な影響が発生している状況をふまえ、ただちに文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、平成14年９月17日 から９月26日まで現地での発掘調査を実施した。

調査は部分的に構造物が設置された範囲内での狭小な面積を対象としたものとなったため、多くの困難をともなうこととなったが、おおむね13世紀前半から14世紀中頃にかけての複数の地業面が確認され、一定量の土器、陶磁器等も発見された。

15　大倉幕府周辺遺跡群(NO，49)

市内東部の二階堂字荏柄に所在し、荏柄天神社の参道を横切って西に続く道筋の南側に位置している。荏柄天神社からは直線距離で80ｍ程の場所にあたる。平成14年７月に個人専用住宅の建替え工事につ

いて事前相談があり、住宅の基礎工事に現地表下２ｍまでの表層地盤改良を含む計画であったため、確認調査を実施したところ、現地表下50ｃｍ以下に中世遺物包含層及び遺構面の存在することが明かになった。これにより当該建設工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断され、事業者との協議を経て文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年９月27日 から11月27日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、鎌倉幕府の草創期に相当する12世紀末から14世紀中頃までの遺構群が連綿と継続して営まれる状況が確認され、具体的な遺構としては掘立柱建物や礎石建物跡等の武家屋敷的な様相を呈する遺構が発見された。

16　西瓜ヶ谷遺跡(No，213)

市内北部の大船地区の山ノ内字東瓜ヶ谷に所在し、北鎌倉駅前を北西から南東に結ぶ主用地方道横浜鎌倉線から南西側に広がる谷戸の入口部分から丘陵部を東側に上った山腹に位置する。平成14年３月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎の構造に長さ８ｍ50ｃｍに及ぶ鋼管杭の打設をともなう計画であったため、確認調査を実施したところ、現地表下120ｃｍ以下に中世遺物包含層及び遺構面の存することが明かとなった。これにより当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、文化財保護法第57条 の２の届出を受け事業者との協議を開始したが、発掘調査の実施方法や所用期間の調整等について合意に達するまでに一定の期間を要したこともあり、発掘調査は平成14年９月30日 に開始することとなり、この後、11月７日をもって終了することとなった。

調査の結果、急峻な丘陵の中腹にあたる斜面部分を大規模に埋め立てて、人工的な平場を形成している状況が確認され、その平場の形成時期がおおむね14世紀の中頃以降と推定された。

17　材木座町屋遺跡(No，261)

前述の調査地点12の南側に位置する。平成14年９月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事の段階で現地表下３ｍまでの地盤の柱状改良を内容とするものであった。既に実施されている隣接地の発掘調査成果から勘案して、当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、確認調査は実施せずに本発掘調査を実施する方針で本件工事計画に対応することとした。これにより早速、事業者との協議を開始し、文化財保護法第57条 の２の届出を受け、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年10月８日 から11月８日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、北側隣接地では現地表下80ｃｍ以下に最も新しい年代の中世遺物包含層が確認されていたが、本調査地点は北側隣接地に比較するとより海岸線方向に近いためであろうか、最も新しい中世遺物包含層が現地表下120ｃｍ以下に確認されることとなった。おおむね13世紀前半から14世紀中頃にかけての中世遺構群が確認され、当該期の土器類をはじめとする遺物が出土している。

18　大倉幕府跡(No，253)

前述の調査地点10の北隣となる雪ノ下三丁目に位置する。平成14年８月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事の段階で長さ６ｍの鋼管杭の打設を内容とするものであった。既に実施されている隣接地の発掘調査成果から勘案して、当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、確認調査は実施せずに本発掘調査を実施する方針で本件工事計画に対応

することとした。これにより事業者との協議を経て文化財保護法第57条 の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年11月16日 から２月28日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、南側隣接地での発掘調査成果と同様に12世紀末から14世紀後半までのものと考えられる遺構群の存在が明らかになった。特に上層で発見された複数の「かわらけ」焼成遺構は人頭大の破砕泥岩を用いて地業された遺構面上に営まれたもので、おおむね14世紀中頃のものと推定される。遺跡地図上では大倉幕府跡の推定地とされているが、具体的の発見された遺構の様相からは、むしろ町屋的な様相が強く、幕府跡の中枢部からはずれた場所の土地利用が明らかになったと考えられる。また出土品では断片的な残存状況ではあるが、本年度鎌倉市の指定文化財に指定された板締染型板と同様の木製品が出土しており注目を要する遺物である。

19　感応寺跡(No，225)

市内中心部から南東側にあたる海浜部の材木座六丁目に所在する。海岸線からは直線距離で200ｍほどの場所に位置している。平成14年８月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎の構造に長さ３ｍの鋼管杭の打設をともなう計画であったため、確認調査を実施したところ、現地表下70ｃｍ以下に中世遺物包含層及び遺構面の遺存することが明かとなった。これにより当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、事業者との協議を経て文化財保護法第57条 の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年11月13日から12月25日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、近世段階に大きく発達した風成砂層の直下に部分的ながらも半地下式の建物である方形竪穴建築址等の遺構が発見され、遺物についても当該期のものが出土した。

20　北条小町邸跡(No，282)

市内中心部の雪ノ下一丁目に所在し、若宮大路と小町大路の中間にあたり、鶴岡八幡宮の社頭からは南側に100ｍ程の場所に位置している。平成14年９月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事の段階で現地表下１ｍ10ｃｍまでの表層地盤改良を内容とするものであった。これまでに近隣で実施されている発掘調査の成果から勘案して、当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、確認調査は実施せずに本発掘調査を実施する方針で本件工事計画に対応することとした。事業者との協議を経て文化財保護法第57条 の２の届出手続きを行い、調査に必要な機材等の準備が整った平成14年11月25日 から平成15年１月25日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、本調査地点における最下層(中世の市街地の中世基盤層となる黒褐色粘質土層)では、東西方向の軸線を有する断面が箱薬研状の溝跡とこの溝跡の北側に大型の柱穴が発見され、柱穴内には一辺が30ｃｍ程度の大型の礎板が確認された。従前から北条氏の小町邸の存在が推定されている当該地にあって、これらの遺構は遺跡の性格を検討するうえで重要な発見であると評価できよう。

21　極楽寺旧境内遺跡(No，291)

市内中心部から極楽寺坂切通しを超えた西側となる極楽寺三丁目に所在し、月影ヶ谷と呼ばれる南北に長い谷戸の入口に近く、谷戸のなかでは西側の山裾部分にあたり、谷戸内を西から東に向って延びる尾根を人為的に切り崩されて造成された平場部分に位置している。平成14年９月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、地下室の築造をともなう計画であったため、確認調査を実施したところ、現

地表下45ｃｍ以下に中世遺物包含層及び遺構面の存することが明かとなった。これにより当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、事業者との協議を経て文化財保護法第57条 の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年12月２日 から平成15年２月６日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、丘陵の斜面を人為的に削平したうえで谷戸の内側(東側)に向って埋め立てを行うかたちで平場を徐々に拡大した様子が明らかとなった。平場の造成は短期間のうちに数回にわたって繰り返し行われたことが土層断面の観察によって確認された。

22　材木座町屋遺跡(No，261)

前述の調査地点17の東側に位置する。平成14年11月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事の段階で現地表下２ｍ50ｃｍまでの地盤の柱状改良を内容とするものであった。既に実施されている隣接地の発掘調査成果から勘案して、当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、確認調査は実施せずに本発掘調査を実施する方針で本件工事計画に対応することとした。これにより事業者との協議を経て文化財保護法第57条 の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年12月16日 から平成15年１月31日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、調査地点17とほぼ同様に最も新しい中世遺物包含層が現地表下120ｃｍ以下に確認されることとなった。本地点における特徴的な成果としては、調査区の最下層から中世以前に遡るおおむね７世紀代の土器類が一定量まとまって出土していることをあげることができる。

23　坂ノ下遺跡(No，217)

市内中心部から西寄りの海浜部にあたる坂ノ下に所在し、極楽寺坂切通しに向って南側の場所に位置している。現在の海岸線からはわずかに70ｍ程内陸(北側)に入った場所である。平成13年11月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎の構造に長さ４ｍに及ぶ鋼管杭の打設をともなう計画であったため、確認調査を実施したところ、現地表下40ｃｍ以下に中世遺物包含層及び遺構面の存することが明かとなった。これにより当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、事業者との協議を経て文化財保護法第57条 の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成15年１月10日 から２月13日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、宝永年間に富士山が爆発した際に降灰した火山灰の直下に近世の柱穴や土壙等が発見された。中世にまで遡る時期の遺構は非常に希薄であったが、中世の遺物が一定量出土していることから、中世の遺構は近世の段階で大半が削平を受けたものと推定された。

24　名越ヶ谷遺跡(No，231)

市内中心部から逗子方面に通じる県道鎌倉葉山線の名越四ツ角からやや東寄りとなる県道の北側、大町四丁目に位置している。平成14年12月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、建物の基礎工事にあたって現地表下１ｍ50ｃｍまでの表層地盤改良を含む計画であった。このため確認調査を実施したところ、現地表下98ｃｍ以下に中世遺物包含層及び遺構面の存在が判明した。これにより当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、事業者との協議を経て文化財保護法第57条 の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成15年２月12日 から３月17日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、上層では後世の撹乱により遺構の遺存状況が必ずしも良好ではなかったが、下層の中世基盤層となる黒褐色粘質土層(地山)上では柱穴、土壙、井戸等の遺構が発見され、鎌倉市内の市街地部分の遺跡によく見受けられる町屋的な遺構群が発見された。

25　今小路西遺跡(No,201)

市内中心部のやや西側山裾となる御成町に所在し、鎌倉市役所の北側60ｍほどの場所にあたる。現在の鎌倉の市街地を南北に貫く今小路からは西側に120ｍ程の位置関係にある。平成14年12月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎の構造に長さ３ｍ50ｃｍに及ぶ鋼管杭の打設をともなう計画であったことから、当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断された。当該地の北東に隣接する敷地において平成13年５月に確認調査を実施した事例があることから、確認調査は実施せずに本発掘調査を実施する方針で本件工事計画に対応することとした。この後、事業者との協議を経て文化財保護法第57条 の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成15年３月３日 から７月１日までの予定で現地での発掘調査を開始した。

本誌所収の平成12・13年度発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
①	華光院跡やぐら群	扇ガ谷ニ丁目198番	個人専用住宅	墳墓	36.00㎡	平成12年12月21日
◎	(N0,101)		(防災工事)			～平成13年1月18日
②	能蔵寺跡	材木座ニ丁目297番1	個人専用住宅	社寺	75.00㎡	平成13年1月23日
◎	(N0,314)		(杭基礎構造)			～平成13年3月9日
③	北条小町邸跡	雪ノ下一丁目401番5外	個人専用住宅	都市	80.00㎡	平成13年1月24日
◎	(N0,282)		(杭基礎構造)			～平成13年3月31日
④	多宝寺跡	扇ガ谷ニ丁目238番2	個人専用住宅	社寺	15.00㎡	平成13年1月25日
◎	(N0,259)		(杭基礎構造)			～平成13年2月5日
⑤	名越ヶ谷遺跡	大町三丁目2356番11	個人専用住宅	都市	35.00㎡	平成13年1月30日
◎	(N0,231)		(杭基礎構造)			～平成13年2月23日
⑥	若宮大路周辺遺跡群	雪ノ下一丁目200番3外	個人専用住宅	都市	80.00㎡	平成13年2月19日
★	(N0,242)		(杭基礎構造)			～平成13年5月19日
⑦	横小路周辺遺跡	二階堂字荏柄10番1の一部	個人専用住宅	都市	40.00㎡	平成13年2月22日
★	(N0,259)		(杭基礎構造)			～平成13年4月20日
⑧	史跡鶴岡八幡宮境内	雪ノ下二丁目39番3	個人専用住宅	社寺	30.00㎡	平成13年3月1日
			(擁壁・道路後退)			～平成13年3月7日
⑨	名越ヶ谷遺跡	大町三丁目2356番10	個人専用住宅	都市	65.23㎡	平成13年4月26日
	(N0,231)		(地下室)			～平成13年6月2日

◎印は平成12年度の調査、★印は平成12～13年度の継続調査をそれぞれ示す。

平成14年度発掘調査地点一覧

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ★	北条時房・顕時邸跡 (N0,278)	雪ノ下一丁目264番4	自己用店舗併用住宅	城館	188.00㎡	平成14年2月4日 ～平成14年4月30日
2	台山遺跡 (N0, 29)	山ノ内字宮下小路819番1外	個人専用住宅 (擁壁及び車庫)	都市	12.00㎡	平成14年4月1日 ～平成14年4月19日
3	笹目遺跡 (N0,207)	笹目町330番11外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	43.50㎡	平成14年4月1日 ～平成14年4月22日
4	大倉幕府周辺遺跡群 (N0, 49)	雪ノ下四丁目567番7	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	25.00㎡	平成14年6月25日 ～平成14年７月22日
5	長谷小路周辺遺跡 (N0,236)	由比ガ浜三丁目194番50	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	51.75㎡	平成14年7月1日 ～平成14年７月25日
6	無量寺跡 (N0,196)	扇ガ谷一丁目26番27外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	360.00㎡	平成14年7月15日 ～平成14年９月13日
7	玉縄城跡 (N0, 63)	植木字相模陣425番３外	個人事業の宅地造成	城館	160.00㎡	平成14年7月15日 ～平成14年8月14日
8	北条政村屋敷跡 (N0,131)	常盤字常松下1005番2外	個人専用住宅 (地下室)	城館	28.19㎡	平成14年7月23日 ～平成14年8月９日
9	名越ヶ谷遺跡 (N0,231)	大町六丁目1708番4の一部	個人専用住宅 (車庫)	社寺	27.29㎡	平成14年7月27日 ～平成14年8月20日
10	大倉幕府跡 (N0,253)	雪ノ下三丁目701番14	自己用店舗併用住宅 (杭基礎構造)	官衙	45.00㎡	平成14年7月29日 ～平成14年9月６日
11	材木座町屋遺跡 (N0,261)	材木座六丁目647番15	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	21.00㎡	平成14年8月12日 ～平成14年9月10日
12	材木座町屋遺跡 (N0,261)	材木座六丁目647番10	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	34.30㎡	平成14年8月12日 ～平成14年9月26日

13	天神山城 (N0,384)	山崎字宮廻747番3	個人専用住宅 (杭基礎構造)	城館	28.00㎡	平成14年9月11日 ～平成14年9月26日
14	妙本寺遺跡 (N0,232)	大町一丁目1140番2	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	28.50㎡	平成14年9月17日 ～平成14年9月26日
15	大倉幕府周辺遺跡群 (N0, 49)	二階堂字荏柄27番3の一部	個人専用住宅 (表層地盤改良)	都市	54.39㎡	平成14年9月27日 ～平成14年11月27日
16	西瓜ヶ谷遺跡 (N0,213)	山ノ内字東瓜ヶ谷1294番4外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	71.19㎡	平成14年9月30日 ～平成14年11月7日
17	材木座町屋遺跡 (N0,261)	材木座六丁目647番8外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	35.00㎡	平成14年10月8日 ～平成14年11月8日
18	大倉幕府跡 (N0,253)	雪ノ下三丁目701番3	個人専用住宅 (杭基礎構造)	官衙	81.00㎡	平成14年11月16日 ～平成15年2月28日
19	感応寺跡 (N0,225)	材木座六丁目722番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	54.00㎡	平成14年11月13日 ～平成14年12月25日
20	北条小町邸跡 (N0,282)	雪ノ下一丁目407番3の一部	個人専用住宅 (表層地盤改良)	城館	54.49㎡	平成14年11月25日 ～平成15年1月25日
21	極楽寺旧境内遺跡 (N0,291)	極楽寺三丁目358番外	個人専用住宅 (地下室)	社寺	75.88㎡	平成14年12月2日 ～平成15年2月6日
22	材木座町屋遺跡 (N0,261)	材木座六丁目647番9	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	34.40㎡	平成14年12月16日 ～平成15年1月31日
23	坂ノ下遺跡 (N0,217)	坂ノ下53番3の一部	個人専用住宅 (表層地盤改良)	散布地	54.15㎡	平成15年1月10日 ～平成15年2月13日
24	名越ヶ谷遺跡 (N0,231)	大町四丁目2395番2の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	30.00㎡	平成15年2月12日 ～平成15年3月14日
25 ◎	今小路西遺跡 (N0,201)	御成町200番2の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	124.00㎡	平成15年3月3日 ～平成15年7月1日

調査面積の合計　1,721.03㎡

★印は平成13年度からの継続調査を示す。

◎印は平成15年度への継続調査を示す。

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成14年度発掘調査報告
巻次	19
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	汐見一夫・小泉衣理／伊丹まどか・石元道子・川又隆央／馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子／汐見一夫／宮田眞／宗臺秀明／原廣志・須佐直子／宮田眞・滝沢晶子／福田誠
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
けこういんあとぐんぐら 華光院跡やぐら群	神奈川県鎌倉市 扇ガ谷二丁目 198番	14204	101	35° 21′ 19″	139° 33′ 59″	20001221 ～ 20010118	36.00	個人専用住宅
のうぞうじあと 能蔵寺跡	神奈川県鎌倉市 材木座二丁目 297番1	14204	314	35° 19′ 13″	139° 33′ 46″	20010123 ～ 20010309	75.00	個人専用住宅
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 401番5外	14204	282	35° 18′ 42″	139° 32′ 58″	20010124 ～ 20010331	80.00	個人専用住宅
たほうじあと 多宝寺跡	神奈川県鎌倉市 扇ガ谷二丁目 238番2	14204	187	35°	139°	20010125 ～ 20010205	15.00	個人専用住宅
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町三丁目 2356番11	14204	231	35°	139°	20010130 ～ 20010223	35.00	個人専用住宅
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 200番3外	14204	242	35°	139°	20010219 ～ 20010519	80.00	個人専用住宅
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字荏柄 10番1の一部	14204	259	35° 19′ 10″	139° 34′ 00″	20010222 ～ 20010420	40.00	個人専用住宅
しせきつるがおかはちまんぐうけいだい 史跡鶴岡八幡宮境内	神奈川県鎌倉市 雪ノ下二丁目 39番3	14204				20010301 ～ 20010307	30.00	個人専用住宅
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町三丁目 2356番10	14204	231			20010426 ～ 20010602	65.23	個人専用住宅

報告書抄録

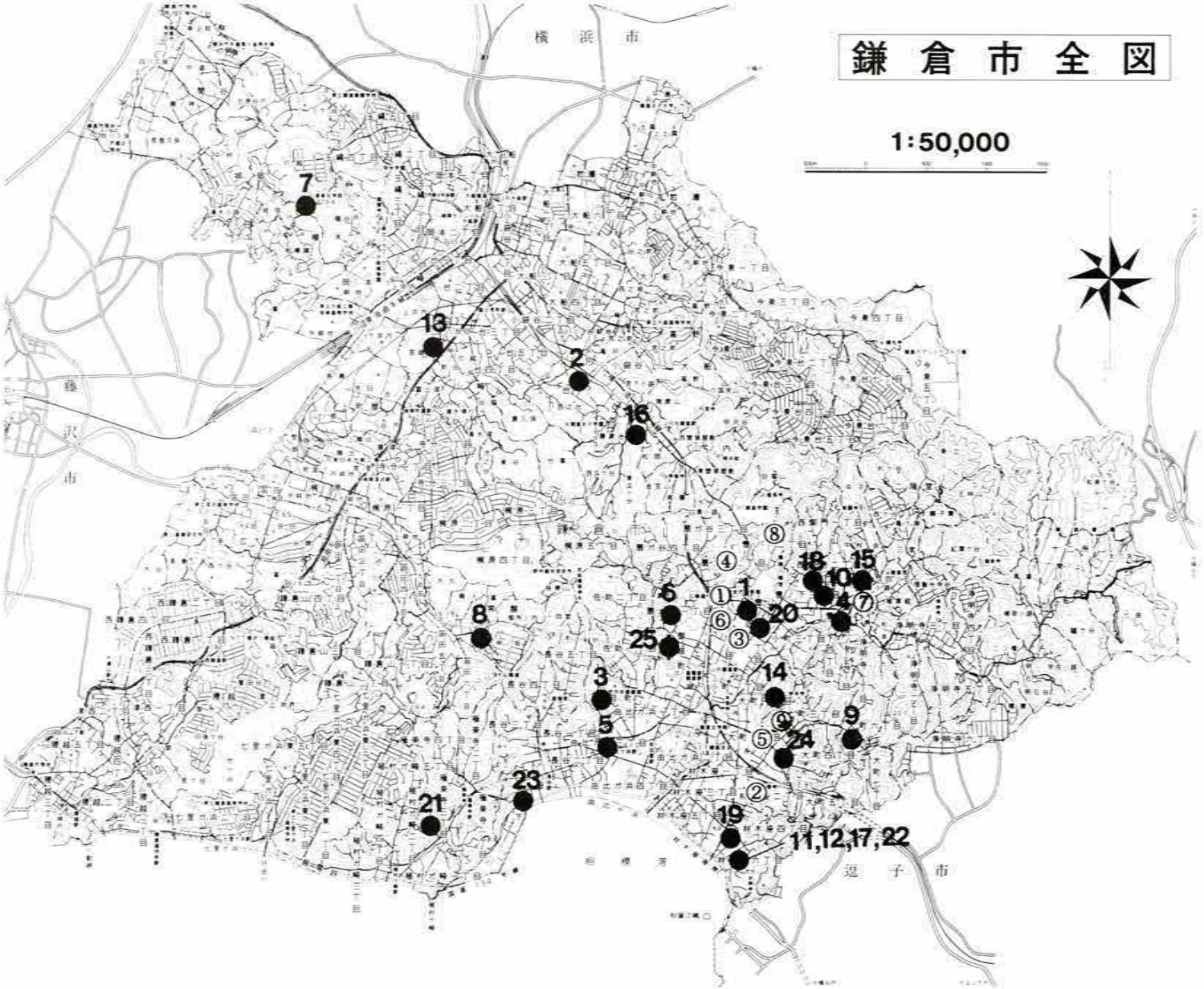
ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成14年度発掘調査報告
巻次	19
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	汐見一夫・小泉衣理／伊丹まどか・石元道子・川又隆央／馬淵和雄・鍛治屋勝二・松原康子／汐見一夫／宮田眞／宗臺秀明／原廣志・須佐直子／宮田眞・滝沢晶子／福田誠
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
けこういんあと ぐんくら 華光院跡やぐら群	神奈川県鎌倉市 扇ガ谷二丁目 * ~~198番~~ 191番	14204	101	35° 21′ 19″	139° 33′ 59″	20001221 ～ 20010118	36.00	個人専用住宅
のうぞうじあと 能蔵寺跡	神奈川県鎌倉市 材木座二丁目 297番1	14204	314	35° 19′ 13″	139° 33′ 46″	* 20010120 ~~20010123~~ ～ 20010309	* ~~75.00~~ 64.00	個人専用住宅
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 401番5外	14204	282	35° 18′ 42″	139° 32′ 58″	20010124 ～ * ~~20010331~~ 20010330	80.00	個人専用住宅
たほうじあと 多宝寺跡	神奈川県鎌倉市 扇ガ谷二丁目 * ~~238番2~~ 238番7	14204	187	35°	139°	20010125 ～ 20010205	15.00	個人専用住宅
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町三丁目 2356番11	14204	231	35°	139°	20010130 ～ 20010223	35.00	個人専用住宅
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 200番3外	14204	242	35°	139°	20010219 ～ * ~~20010519~~ 20010427	80.00	個人専用住宅
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字荏柄 10番1の一部	14204	259	35° 19′ 10″	139° 34′ 00″	20010222 ～ * ~~20010420~~ 20010427	* ~~40.00~~ 74.07	個人専用住宅
しせきつるがおかはちまんぐうけいだい 史跡鶴岡八幡宮境内	神奈川県鎌倉市 雪ノ下二丁目 39番3	14204				* 20010302 ~~20010301~~ ～ 20010307	* ~~30.00~~ 12.00	個人専用住宅
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町三丁目 2356番10	14204	231			20010506 ~~20010426~~ * ～ ~~20010602~~ 20010521	65.23	個人専用住宅

＊令和6年1月22日報告書本文の内容に訂正(鎌倉市教育委員会)

収容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
華光院跡やぐら群	やぐら	中世	やぐら	かわらけ、舶載陶磁器 国産陶器・土器	
能蔵寺跡	社寺	中世	柱穴、井戸、溝、土壙	かわらけ、舶載陶磁器 国産陶器・土器	
北条小町邸跡	都市	中世	建物跡、土壙、溝、井戸	かわらけ、舶載陶磁器 国産陶器・土器、石製品、木製品等	
多宝寺跡	社寺	中世	柱穴、井戸、溝、土壙	かわらけ、舶載陶磁器 国産陶器・土器等	
名越ヶ谷遺跡	都市	中世	建物跡、土壙、溝、井戸	かわらけ、舶載陶磁器 国産陶器・土器、石製品、木製品等	
若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	建物跡、土壙、溝、井戸	かわらけ、舶載陶磁器 国産陶器・土器、金属製品、石製品、木製品	
横小路周辺遺跡	都市	中世	建物跡、土壙、溝、井戸	かわらけ、舶載陶磁器 国産陶器・土器、金属製品、石製品、木製品	
史跡鶴岡八幡宮境内		中世	やぐら		
名越ヶ谷遺跡	都市	中世	建物跡、土壙、溝、井戸	かわらけ、舶載陶磁器 国産陶器・土器、金属製品、石製品、木製品	

鎌倉市全図



平静14年度の緊急発掘調査地点（1～25）
本書掲載の平成12・13年度調査地点（①～⑨）
※遺跡名は一覧表参照

華光院跡やぐら群（No.101）

（けこういんあと）

扇ガ谷二丁目191番地点

例　言

1　本報文は、華光院跡やぐら群(神奈川県遺跡台帳№101)内、鎌倉市扇ガ谷二丁目191番地点に於ける個人専用住宅に隣接する防災工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告である。

2　調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が平成12年12月21日から平成13年１月18日まで実施した。調査の対象はやぐら一基である。

3．調査及び整理作業の体制は以下の通り。

調 査 担 当　継　実

調　査　員　汐見 一夫　田畑 衣理　渡邊 美佐子

作　業　員　奥山 利平　多田 徳蔵　吉本 脩三　渡辺 輝彦　北島 清一

4．本報文に関わる整理作業は汐見・田畑・鍛治屋勝二・松原康子が分担して行った。原稿執筆は第１～３章を汐見が、第４章を田畑が執筆し、第５章は両名討議の上汐見が文責を負い編集した。又、本報に使用した写真は遺構を汐見が、遺物を田畑が撮影した。

5．現地調査から本報作成に至るまで、次の機関･各氏から御指導・御教示・御協力を賜った。

大木勘次氏　(社)鎌倉市シルバー人材センター　東国歴史考古学研究所　鎌倉考古学研究所

7．本調査に係わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目次

本文目次

第１章　環境と立地……1
第２章　調査の概要……4
第３章　遺構……5
第４章　遺物……8
第５章　調査成果……10

挿図・表目次

図１　調査地点と周辺のやぐら群……1
図２　国土座標との位置関係と周辺のやぐら……4
図３　やぐら平面図・正面図……6
図４　やぐら断面図……7
図５　出土遺物(１)　……8
図６　出土遺物(２)　……8
図７　出土遺物(３)　……9
表１　出土遺物計測表……10

写真図版目次

図版１……11
　１．調査やぐら前景
　２．やぐら奥壁
　３．堆積土層(断面図ｈ)
　４．底面中央玉砂利
　５．壁面(奥に向い左壁)
　６．壁面(奥に向い右壁)
図版２……12
　７．入口付近ピット(内側から)
　８．入口側左壁面ピット
　９．堆積土層(断面図ｂ)
図版２
　10．周辺のやぐら現況
　11．周辺のやぐら(図２－Ｃ・Ｄ)
　12．周辺のやぐら(図２－Ｈ)
図版３……13
　出土遺物(１)　かわらけ
図版４……14
　出土遺物(２)　その他の遺物

第１章　環境と立地

華光院跡やぐら群（神奈川県遺跡台帳№101）はＪＲ鎌倉駅の北方約600ｍ、ほぼ真西に開口する泉ヶ谷の南側尾根の先端部で、現在は護国寺のある小谷に位置する。

真言宗竜興山華光院は、開山や開基及び創建年は未詳、浄光明寺の向いの谷戸に在ったという。元は寿福寺の塔頭であったが、貞享二年（1685）刊行の『新編鎌倉志』に拠れば、室町時代以降鶴岡供僧の支配である佐助谷稲荷別当の居所とある。明治初年廃院。やぐら群は標高50ｍ程の尾根先端部山裾、西に開口する小支谷内に21窟が確認されている。現況では山裾まで宅地が迫り、前面は削平され物置や駐車場に転用されてはいるが、玄室幅が５ｍ以上ある大型のものが多い（図２・図版２）。今回は確認し得なかったが、現護国寺北方の特に大型のやぐら内の壁面には龕が五ヶ所あり、内１ヶ所の底面には納骨穴らしき丸穴が穿たれ、『□正禅門』応永卅八月十日』銘の宝篋印塔、崩れた五輪塔が在るという。

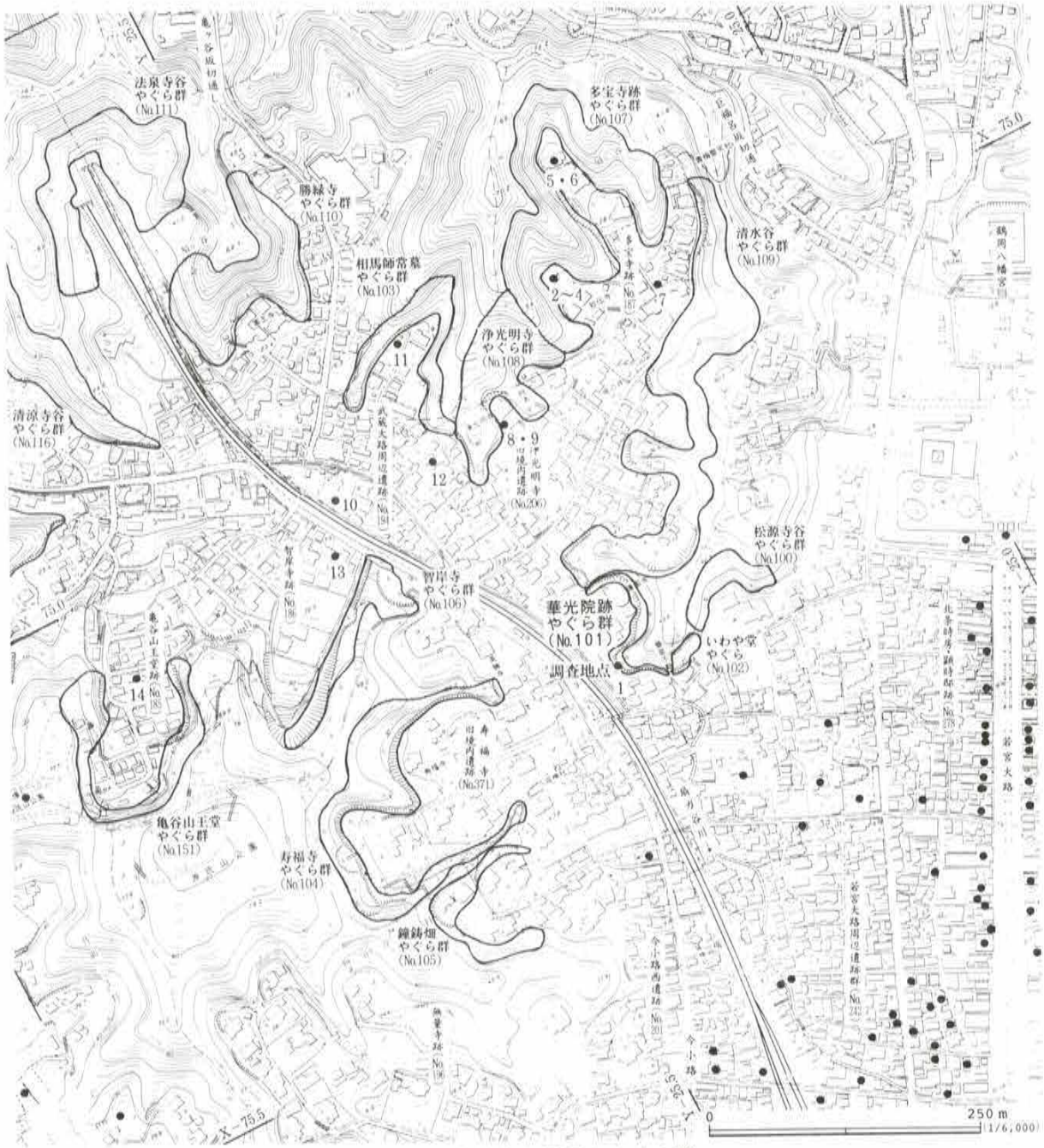


図１　調査地点と周辺のやぐら群

遺跡地の周囲には他にも多くの寺院址とやぐら群が知られる。尾根先を東に廻ると源頼朝入府以前から在るとされる窟堂があり、その裏手のいわや堂やぐら(神奈川県遺跡台帳№102)は羨道と玄室が分れた鎌倉期の形態を残している。さらにその東には松源寺谷やぐら群(同№100)がある。日金山弥勒院松源寺(廃寺)は真言宗の寺で、『吾妻鏡』弘長三年(1263)4月7日条に見える「地蔵堂」はこの松源寺の前身という。やぐら群は背後の山腹に30窟確認され、羨道と玄室を備えたものが多く、天井が低く船底形で平入の珍しいタイプもあり、奥壁だけを彫り込んだ龕状のものも多くある。

尾根先を西に廻った泉ヶ谷は『吾妻鏡』にも「泉谷」とその名が見え、共に創建年が鎌倉期まで遡る律宗多宝寺(廃寺)と古義真言宗浄光明寺の寺域を内包し、谷戸内の山裾には多くのやぐらが遺存している。北尾根の現浄光明寺裏手一帯は浄光明寺やぐら群(同№108)で、本堂の背後三方の山裾から山腹には20窟以上が確認されている。風化が著しいところもあるが、壁面に華瓶に蓮華の花と葉をさした浮き彫りが残るものもある。網引地蔵やぐら内には安山岩製等身大地蔵像が安置され『供養導師性仙長□」正和二年十一月」施主真覚」大工宗□』とある。また、山上には冷泉為相墓と呼ばれる宝篋印塔があり、その背後のやぐら内には五輪塔が、壁面には龕が穿たれている。浄光明寺やぐら群の東側、南に開口する小支谷一帯は多宝寺跡やぐら群(同№107)で、山裾から山腹の三段に亘って、羨道部が残る大型のもの2窟をはじめ多数のやぐらが確認されている。「嘉暦二年」(1327)・「正應元年」(1332)他紀年銘文の残る五輪塔他も多数発見されている。これらについては後掲の多宝寺跡に関わる既刊調査報告書に詳しい。泉ヶ谷の南尾根一帯は清水谷やぐら群(同№109)で、多くが近世以降に再利用されているものの浄光明寺の向側の谷を中心に山裾に10窟以上が確認される。なかには壁面に龕状に浅く上下二段に多数彫られているものもある。防災ネットで阻まれて詳細は不明ながら、多宝寺の谷の向い側壁面にも龕状或はやぐらしき彫り込みは垣間見える。又、かつてやぐら内や付近の山腹から和鏡や多数の石塔類が採集されているが、石塔類は松源寺谷から運ばれたものだという。

さらに視野を拡げると、泉ヶ谷北側尾根を北に廻ると相馬師常墓やぐら群(神奈川県遺跡台帳№103・やぐら数13窟)、武蔵大路周辺遺跡(同№194)を挟んだ向い側に智岸寺跡(同№186)と智岸寺やぐら群(同№106・やぐら数5以上)、その東西には正治2年(1200)創建と伝える寿福寺旧境内遺跡(同№371)と寿福寺やぐら群(同№104・やぐら多数)、亀谷山王堂跡(同№185)と亀谷山王堂やぐら群(同№151)がある。北に目を転じて現況ではJR横須賀線の開通に伴いどの程度鎌倉期の地形等が残されているかは不明とはいえ、亀ヶ谷切通しと化粧坂切通しに挟まれた地域に勝縁寺やぐら群(同№110)・法泉寺谷やぐら群(同№111・やぐら数9以上)・清涼寺谷やぐら群(同№116・やぐら数100以上)がある。扇ガ谷一帯は廃寺を含めて創建が鎌倉期と思われる寺院が多く、寺院址とやぐら群の関係が濃密で、石塔類に残る在銘資料も鎌倉幕府滅亡前の年代が多く観られる地域であろう。

引用・参考文献

第1・3・5章

高柳光寿　『鎌倉市史　総説編』　1959年　吉川弘文館

赤星直忠　『鎌倉市史　考古編』　1959年　吉川弘文館

高柳光寿・貫達人他　『鎌倉市史　社寺編』　1959年　吉川弘文館

貫達人・川副武胤　『鎌倉廃寺事典』　1980年　有燐堂

白井永二　『鎌倉事典』　1976年　東京堂出版

鎌倉市教育委員会編　鎌倉市文化財資料第7集「としよりのはなし」　鎌倉市教育委員会

宮田眞　「扇ガ谷地域内のやぐら群について」『鎌倉』第55号　1985年　鎌倉文化研究会

田畑佐和子　「やぐらの研究(1)　－鎌倉における分布と出土遺物について－」『中世都市研究』第1号　1991年　中世都市研究会

第４・５章

河野眞知郎　「中世鎌倉火鉢考　－東国との関連において－」『考古論叢神奈河』第２集　神奈川考古学会　1993年

『日本国語辞典』　小学館　1974年

服部実喜　「南武蔵・相模における中世の食器様相（５）－中世後期の様相Ⅲ－」『神奈川考古』第34号　1998年

服部実喜　「戦国都市小田原と北条領国の土師質土器」『中近世土器の基礎研究ＸⅣ』　日本中世土器研究会　1999年

神奈川県考古学会　平成13年度考古学講座「かながわの中世 ～鎌倉から小田原へ～ －土器様相を中心として－」　2002年

調査地点・報告書

華光院下やぐら群（神奈川県遺跡台帳No.101）

１．　扇ガ谷二丁目191番地点　本調査地点。

多宝寺跡（神奈川県遺跡台帳No.187）

２．　扇ガ谷二丁目268番３地点　1969年調査。　『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』　1976年３月　多宝律寺遺跡発掘調査団 ／ 鎌倉市教育委員会

３．　扇ガ谷二丁目268番３地点　1974年調査。　『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ　多宝律寺跡』　1983年３月　鎌倉市教育委員会

４．　扇ガ谷二丁目268番３地点（第7次調査）　1977年調査。　『多宝律寺遺跡第７次発掘調査報告書』　1977年３月　多宝律寺遺跡発掘調査団 ／ 鎌倉市教育委員会

５．　扇ガ谷二丁目250番１・４地点　1989年調査。　『多宝寺跡 －扇ヶ谷２丁目250番１・４地点－』　1998年３月　多宝寺跡発掘調査団

６．　扇ガ谷二丁目250番６地点　1991年調査。　「多宝寺跡（No.187）（扇ヶ谷二丁目250番６外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９　平成４年度発掘調査報告（第３分冊）』　1993年３月　鎌倉市教育委員会

７．　扇ガ谷二丁目238番２地点　2001年調査。　本誌所収。

浄光明寺旧境内遺跡（神奈川県遺跡台帳No.206）

８．　扇ガ谷二丁目12番１地点　1987年調査。未報告。

９．　扇ガ谷二丁目12番１地点　2001年調査。未報告。

武蔵大路周辺遺跡（神奈川県遺跡台帳No.194）

10．　扇ガ谷二丁目382番１地点　1989年調査。　『武蔵大路周辺遺跡発掘調査報告書 － 扇ヶ谷二丁目382番１地点 －』　2000年10月　武蔵大路周辺遺跡発掘調査団

11．　扇ガ谷三丁目397番６地点　2000年３月調査。　「武蔵大路周辺遺跡（No.194）　扇ガ谷三丁目397地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第２分冊）』　2001年３月　鎌倉市教育委員会

12．　扇ガ谷二丁目298番１イ地点　2000年７月調査。　「武蔵大路周辺遺跡（No.194）　扇ガ谷二丁目298番イ」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第１分冊）』　2002年３月　鎌倉市教育委員会

智岸寺跡（神奈川県遺跡台帳No.186）

13．　扇ガ谷四丁目380番１地点　1988年調査。未報告。

亀谷山王堂跡（神奈川県遺跡台帳No.194）

14．　扇ガ谷四丁目327番５地点　2000年調査。「亀谷山王堂跡（No.185）　扇ガ谷四丁目327番５地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第２分冊）』　2002年３月　鎌倉市教育委員会

註　・調査地点及び刊行報告書は2002年３月末日現在。

・調査地点No.は、上記６遺跡の全調査地点を各遺跡毎の調査年順に付した。

・何れも渡邊美佐子の協力に依り筆者調べに拠る。

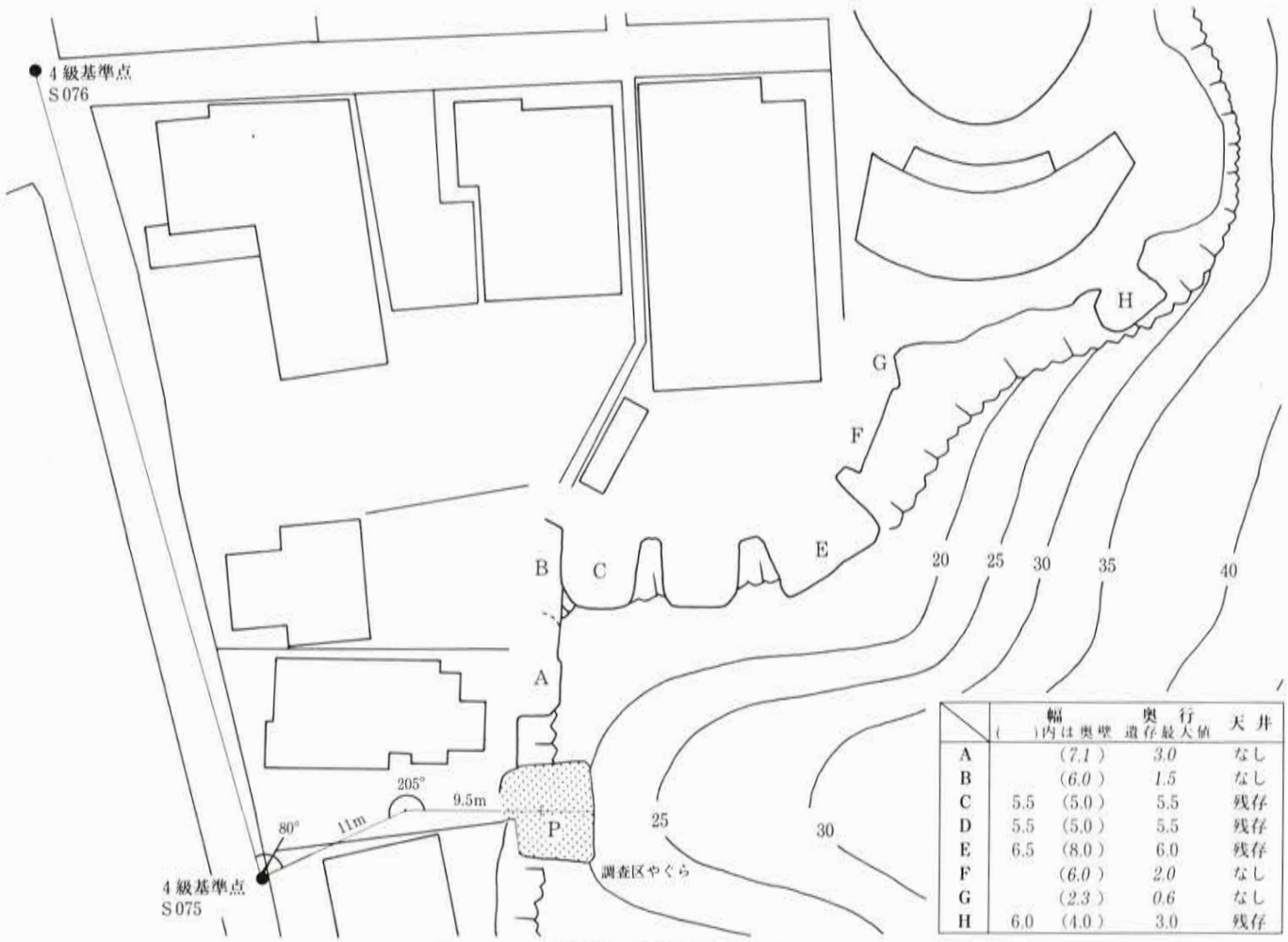
第２章　調査の概要

・調査に至る経緯と経過、結果の概要

本調査は、個人専用住宅の東側に隣接する崖面が崩落し防災工事の事前相談を受け、当該工事に因り埋め立てられるやぐら１基を対象として実施された。当初からやぐらは開口しており、近世以降に転用されてはいたものの、現地表面以下の堆積土は殆ど撹乱されずに遺存していることが判断された。調査では残土置場を確保し難い為、やぐら内を二分してまず南半分の堆積土の掘り下げと記録保存を行い、その後人力で残土を移動し、残り北半分の掘り下げと記録保存を行った。調査の結果、本やぐらは中世期に少なくとも２回はやぐら内が改削され、近世以降に壁面から採石されたり、馬小屋さらには物置等に転用されつつ現在に至ることが確認された。周辺のやぐらの分布状況を視認し、全ての記録保存終了後に関係各方面に連絡の上出土遺物と諸器材を撤収し調査終了とした。

・調査軸線と国土座標との位置関係

調査に際しての軸線は、奥壁の中心と入口側の左右両壁の中心とを結ぶ線を基本軸とし、その線上の奥壁から3.5ｍの点Ｐから直交する軸線を設定し測量の基準とした。付近の４級基準点Ｓ075（Ｘ -75 280.445　Ｙ -25 395.428）とＳ076（Ｘ -75 224.768　Ｙ -25 416.052）との位置関係は、図２に示した様に点Ｐから基本軸の延長線上9.5ｍに仮点Ｑを設けそれぞれの角度距離を求めた。又、図２には華光院跡やぐら群の内、調査地点付近の視認できる範囲で、既に開口し近世以降に転用されたやぐらの位置を模式的に示し、調査の際に測量したやぐらの概寸（ｍ）を表に表した。



	幅（ ）内は奥壁	奥行 遺存最大値	天井
A	(7.1)	3.0	なし
B	(6.0)	1.5	なし
C	5.5 (5.0)	5.5	残存
D	5.5 (5.0)	5.5	残存
E	6.5 (8.0)	6.0	残存
F	(6.0)	2.0	なし
G	(2.3)	0.6	なし
H	6.0 (4.0)	3.0	残存

図２　国土座標との位置関係と周辺のやぐら

第３章　遺構

調査対象となるやぐらは既存住宅と近接しており、調査に伴う残土置場を確保し難いことから、やぐら内を奥壁に向って左右に二分して調査することとした。右半の調査の際には崩落防止の土嚢袋を積みながら残土を左半に盛り上げ、やぐら前面の現地表下60㎝の底面まで掘り下げた。右半はやぐら入口側壁が遺存していることもあり外光が遮ぎられ、調査は投光器を照らしながらの作業であった。この為、左右方向の土層断面は設定し得ず、堆積土は土層サンプルを採取した後に自然光の下で確認し左半の土層と照合した。右半の調査と記録保存終了後、人力で土嚢袋と残土を移動し、同様に残り左半分の掘り下げと記録保存を行った。左半分は入口部分の壁が下方を除き崩落していたため採光が良く、左右方向の土層断面を設定することができた。

図３にはやぐら底面の平面図・奥壁正面図・(奥に向って)左右両壁の正面図・入口部の正面図(内側から)を図示、図４には図３の断面図ａ～ｉを図示した。以下、底面と壁面等の様相について述べる。

底面：底面は多少の歪みがあるが約6.3ｍ内外の正方形、左半が微かに下がるもののほぼ平坦で海抜約11ｍ、奥壁と右壁には幅20～40㎝で底面から20～50㎝高い段差が付き、左壁下には上幅20㎝前後、深さ10㎝程の溝が入口まで廻る。奥壁下左隅(Ｐ１)・右壁下(Ｐ２)・入口付近(Ｐ３～８)にピットが、中央やや右壁寄りに極浅い窪みがあり玉砂利が集中して発見されている。Ｐ１は100㎝×70㎝の楕円形で深さ約30㎝、覆土は６層に炭が混ざる。壁面には鑿痕が顕著で被熱痕はない。Ｐ２は60㎝前後の円形で深さ約30㎝、覆土は６層、壁面には鑿痕が顕著で被熱痕はない。Ｐ１・２からはかわらけ極小破片が２～３点出土している。入口付近のＰ３～６は、底面から不整形に10㎝程穿たれた中が径15㎝前後の円形ピット状に窪んでいる。入口施設のピットとも考えられるが、対向する位置の天井部には、Ｐ６の上方にそれらしき窪みが観えるが、それ以外は崩落しており確認し得なかった。覆土は６層で、鑿痕は顕著ではなく遺物も出土していない。Ｐ７・８は上幅約30㎝で方形に近く、深さはＰ７が約15㎝、Ｐ８は約30㎝。やぐら底面から約40㎝上がった平坦な岩盤から掘り込まれている。この平坦な岩盤は調査対象域外へと延びる様だが、範囲の天井部は崩落と削平に拠り遺存していない。玉砂利は１ｍ強の不整形に５～６㎝程窪んだ範囲に集中して発見されたが、窪みに被熱痕や玉砂利に墨書は観られなかった。

天井：中央部がやや高くなる屋根型で、崩落した入口付近を除いて鑿痕が全体に観られ良好に遺存している。屋根型は奥壁に顕著で底面からの高さ約３ｍ、入口側ほど曖昧になり、底面の下がり方に合わせるが如く左半が微かに低く約2.8ｍ前後。Ｐ１・２の上方には対向と観られる痕跡は認められない。

壁面：左壁は最大幅6.8ｍ、溝の上場からの高さは2.5～2.7ｍ。やぐら袖部に接して幅約40㎝・高さと奥行約20㎝の方形のピットが穿たれる。入口寄り上方には近世駒繋ぎ状のピットが６ヶ所、奥壁際上方には近世の石切りであろうか、幅120㎝・高さ60㎝・奥行40㎝の方形に彫り込まれている。奥壁は最大幅約7.0ｍ、やぐら底面からの高さは2.9ｍ前後で左半がやや高い。段差は右壁から左壁に向って傾斜し、その高さは右端で約50㎝、左端付近で約20㎝である。中央右寄りに近世駒繋ぎ状ピット１ヶ所、中央に幅100㎝・高さ80㎝・奥行約40㎝の範囲に採石痕がある。長さ３尺×１尺角の石材を採取したのであろう。右壁は最大幅6.7ｍ、やぐら底面からの高さ2.7ｍで奥壁寄りがやや高い。全体的に風化している。段差は奥壁から手前に向って傾斜し、その高さは奥壁端で約50㎝、入口寄りで約20㎝で入口側袖内壁にかけては階段状に上がっている。近世駒繋ぎ状ピットが４ヶ所、奥壁寄りには幅40～70㎝・高さ90～110㎝・奥行約30㎝が龕状に穿たれている。入口側袖内壁は、右手は良く残るが壁面は崩落、左手は下方に鑿痕が観られるが上方は崩落して遺存せず風化が著しい。

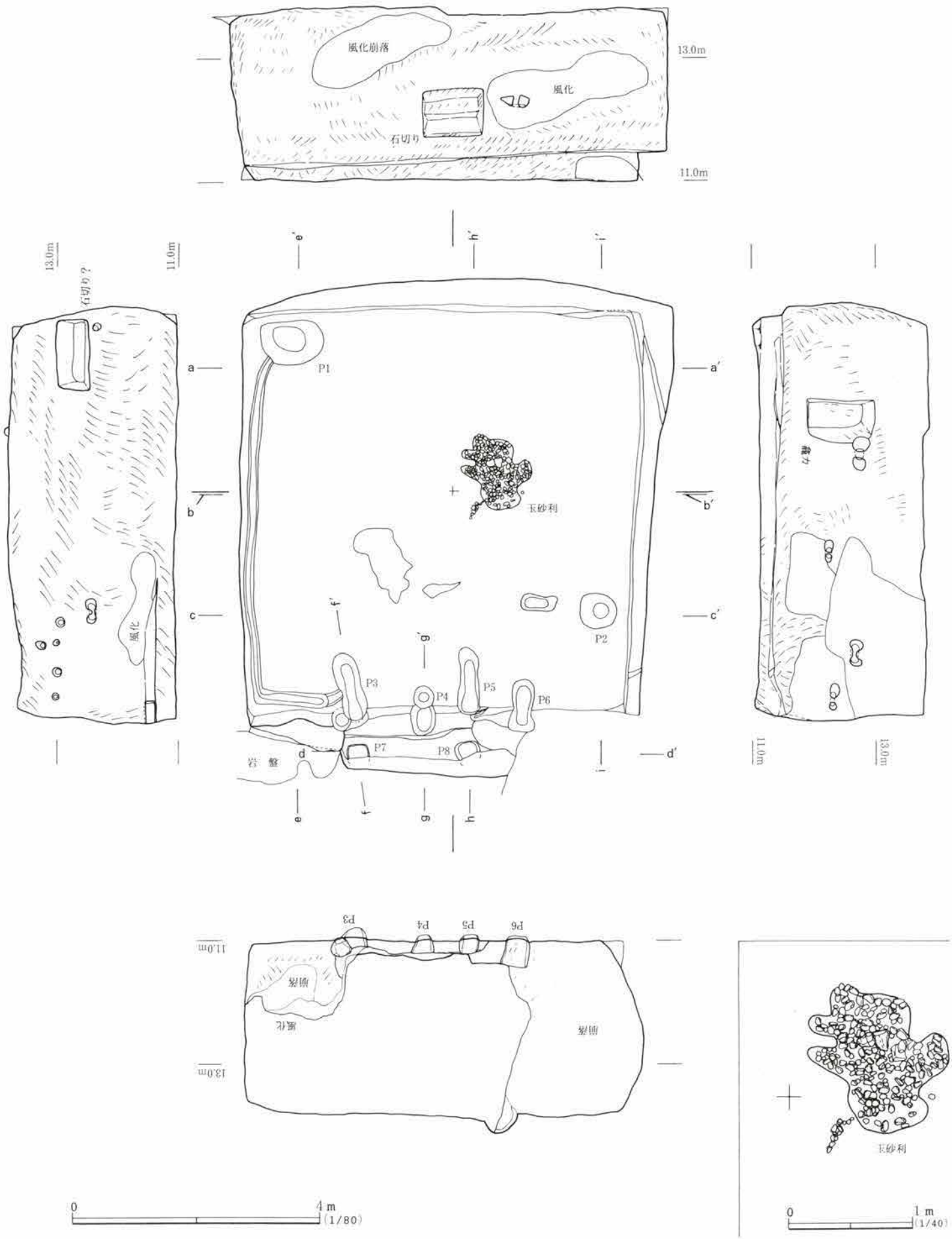


図３　やぐら平面図・正面図

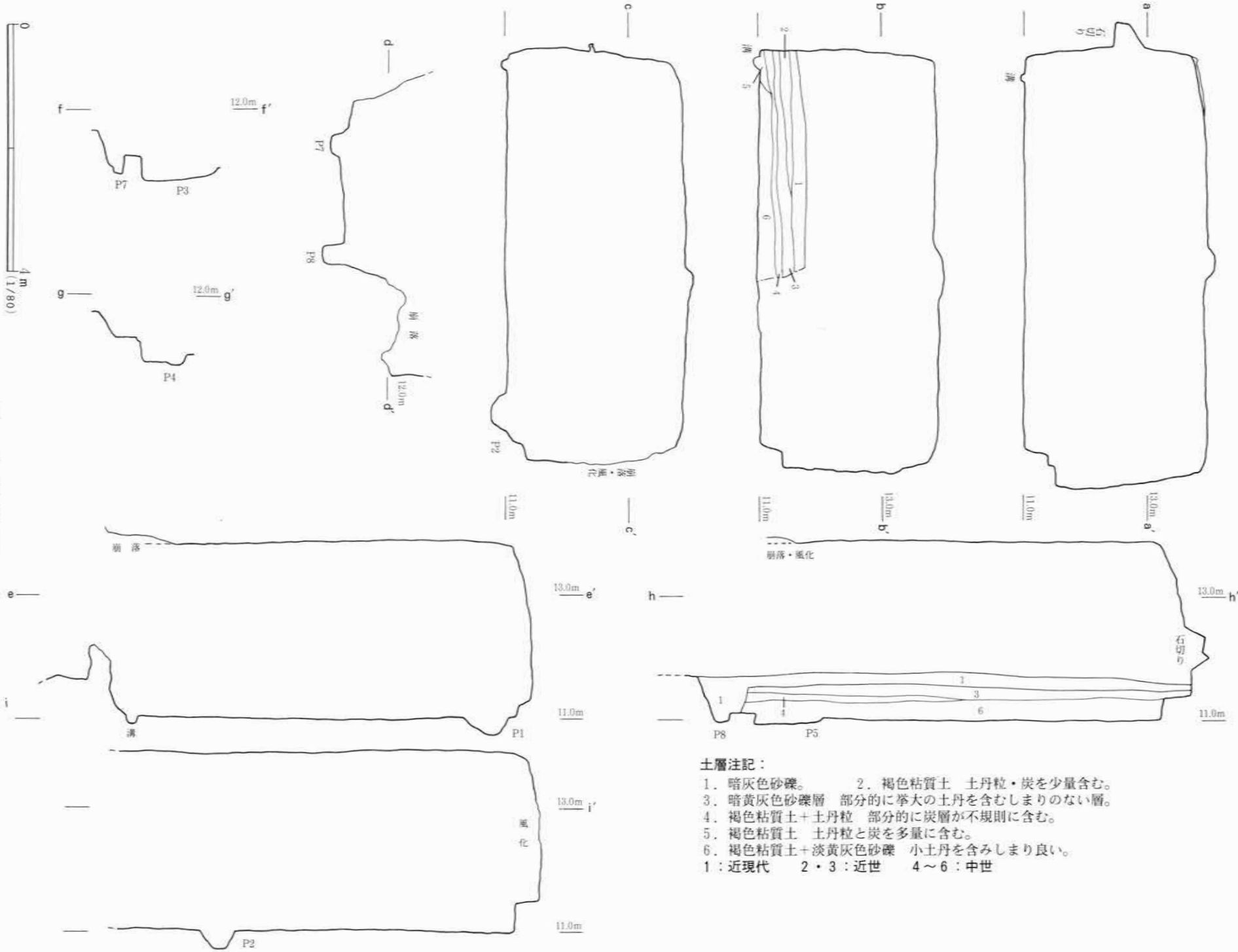


図4　やぐら断面図

土層注記：

1．暗灰色砂礫。　　2．褐色粘質土　土丹粒・炭を少量含む。
3．暗黄灰色砂礫層　部分的に拳大の土丹を含むしまりのない層。
4．褐色粘質土＋土丹粒　部分的に炭層が不規則に含む。
5．褐色粘質土　土丹粒と炭を多量に含む。
6．褐色粘質土＋淡黄灰色砂礫　小土丹を含みしまり良い。
1：近現代　　2・3：近世　　4～6：中世

第４章　遺物

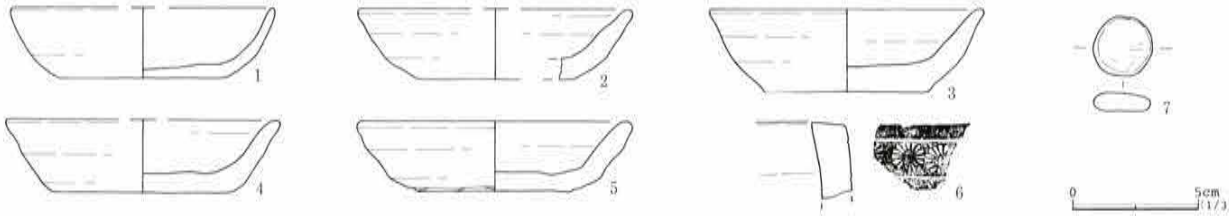


図５　出土遺物（１）

図５の１～７はやぐら内岩盤直上より出土した遺物。１・２・７は奥壁・右壁の段差上、その他は段差下の底面上を精査した際に出土した。

１～５は口径が10cm代の中型糸切り底かわらけ。１は肌色を呈する弱粉質土。器壁は体部・底部ともに薄く、いわゆる薄手丸深型の系統である。他は胎土が橙色を呈する粉質土。器壁は体部・底部ともに厚く、体部は直線的に開くものが多い。口唇部のみがやや外反するものも混じる。６は瓦器質火鉢。沈線間に菊花文の小型スタンプと連珠文貼付け。胎土は夾雑物を多く含み、灰白色を呈する。器表は二次焼成により、黒色処理がはげて露胎。河野分類では火鉢Ⅳ類の製品。７は石製品で双六のコマ。

図６の８～21は図３の土層番号４～６層より出土した遺物。

８～19は糸切り底かわらけ。８～11は７cm代の小型品、12～14は10cm代の中型品、15～19は12～13cm代の大型品。胎土は概ね橙色を呈する粉質土。器壁は体部・底部ともに厚く、体部は直線的に開く傾向で、なかには口唇部のみがやや外反するものも混じる。８～９・12～14・16～17は工具等による芯だしの痕が残る。削りの方向は内から外、外から内、または両方向から削るなど規則性はないようである。なかには12のように灯明皿として使用した後、芯だしのために再利用しているものもある。20は瓦器質火鉢。沈線間に菊花文の小型スタンプと連珠文貼付け。胎土は夾雑物を多く含み、灰白色を呈する。器表は二次焼成により、黒色処理がはげて露胎し、外面胴下部は横方向のミガキ、内面胴下部は指頭痕、口縁部は横ナデの調整。河野分類では火鉢Ⅳ類の製品。図８－６と同一個体。21は舶載品の天目茶碗底部片。素地は灰色を呈し、夾雑物を多く含み粗雑である。

図７の22～46は土層注記番号１～３層より出土した遺物。

22～39は糸切り底かわらけ。22～30は６～７cm代の小型品、31～37は10～11cm代の中型品、38～39は12～13cm代の大型品。概ね橙色ないし淡橙色を呈する粉質土。器壁は体部・底部ともに厚く、体部は

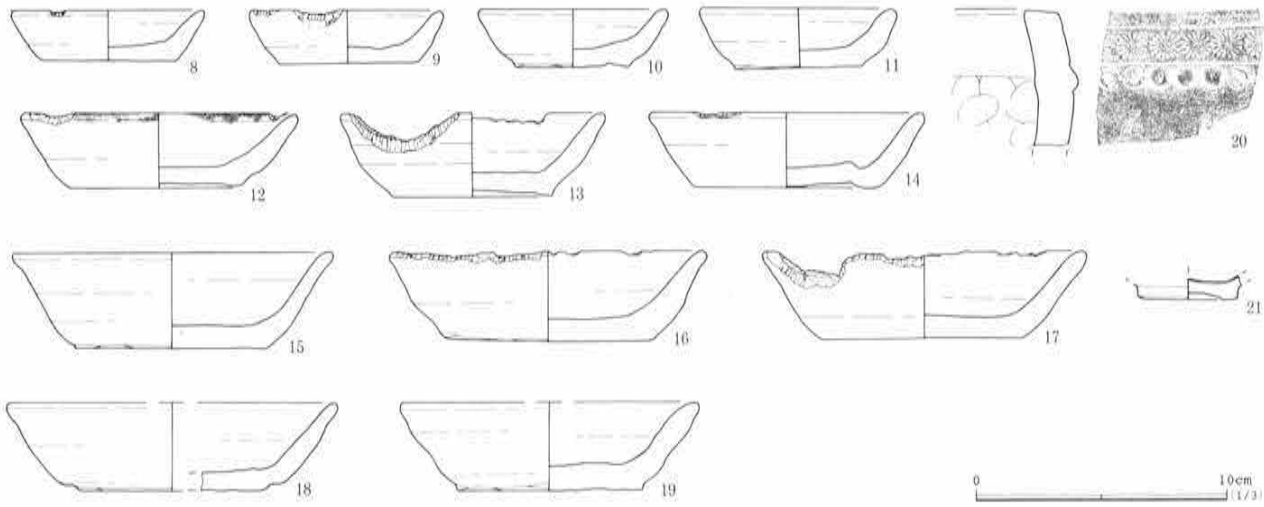


図６　出土遺物（２）

直線的に開き、口縁部が外反する傾向である。また体部外面はナデ調整により明確な稜を形成し、内底面の調整は全体的に強いナデ。特に34～37のように強い外周のナデにより見込みの中央部が盛り上がり、底部脇は外側に突出する器形もみられる。22・25は灯明皿として使用。27・29～30は工具等による芯だしの痕が残る。また28には口唇部に擦った痕があり、工具をいれる前の痕跡なのだろうか。37は外底面に墨書で「三界」とある。小学館の日本国語辞典では「三界」とは仏教用語で「いっさいの衆生の生死輪廻する三種の迷いの世界。すなわち欲界・色界・無色界。」とある。40～46は国産陶器類。40は瀬戸もしくは美濃壺底部片。胎土は夾雑物を含む粘性に欠けた淡黄色土。鉄釉を刷毛塗りで薄く施釉し、高台は削り出し。18世紀代の製品。41は美濃小皿。胎土は狭雑物を含むやや粘性の欠けた灰色土、釉は淡い灰緑色を漬け掛け、高台は削り出し。18世紀前半の製品。42は瀬戸もしくは美濃長石釉皿。胎土は夾雑物を含む粘性に欠けた淡黄色土。釉は乳白濁色に厚く漬け掛けされ、釉溜まりがある。低い高台は削り出し。17世紀後半の製品。43は堺擂鉢底部片。胎土は夾雑物を多く含み、器表と共に赤褐色。内面磨滅する。18世紀後半～19世紀初めの製品。44は唐津刷毛目鉢底部片。胎土は夾雑物を含む茶褐色堅密土。内面は透明釉をかけた後、白化粧土の釉を波状に刷毛目を施す。17世紀後半～18世紀前半の製品。45は丹波系擂鉢口縁部片。胎土は夾雑物を多く含んだ暗灰色土、器表は赤褐色。17世紀後半の製品。46は関西系陶器の鍋もしくは壺の蓋。胎土は黄土色粘質土で、内面のみ釉がかかる。19世紀にはいる近代陶器。

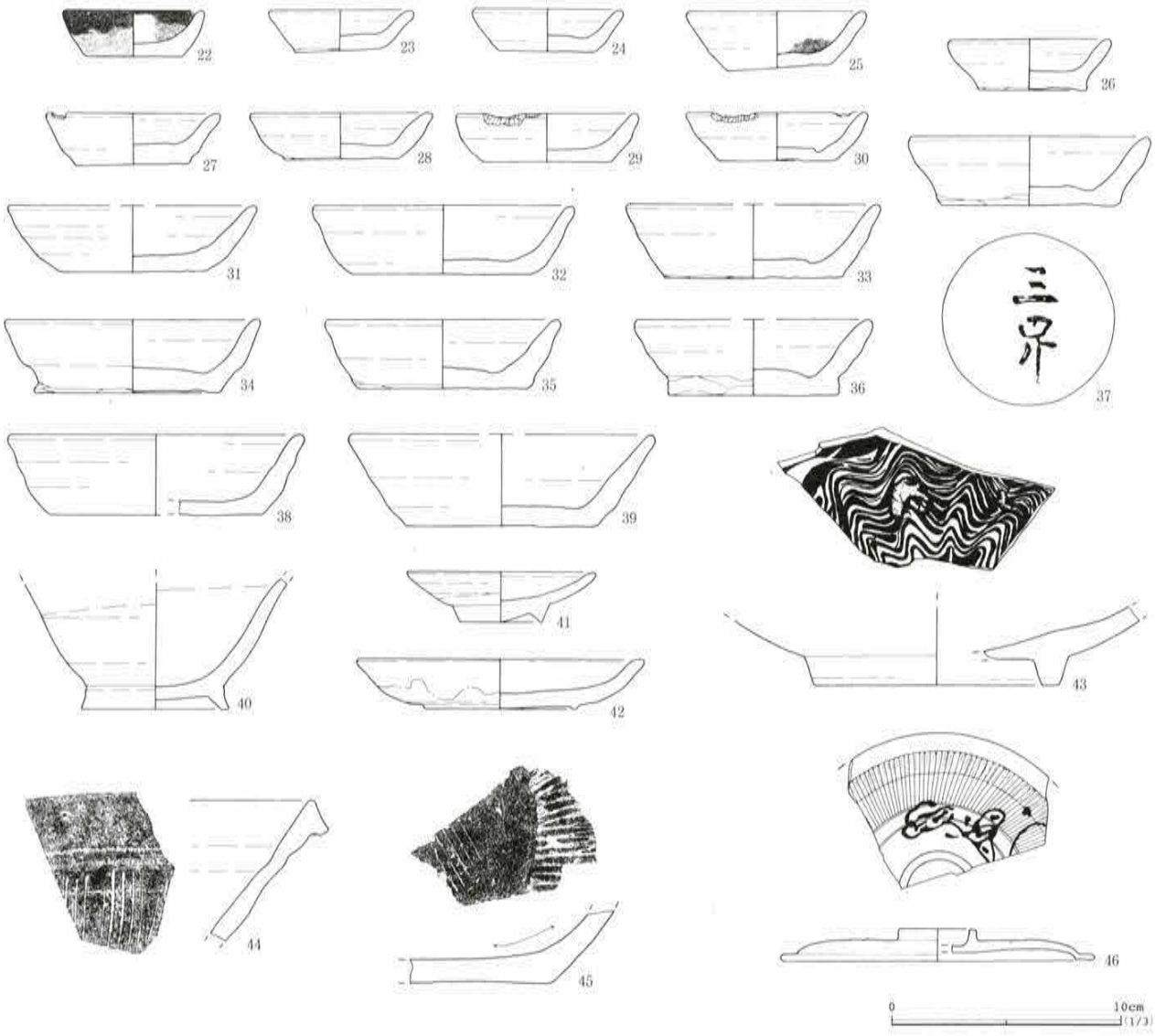


図7　出土遺物（3）

第５章　調査成果

調査やぐらは、少なくとも２回以上の改削が考えられる。天井部の屋根型の位置や底面の遺構を基にその変遷を考えてみる。当初は奥壁と左壁の段差上のレベル及び範囲で天井が屋根型に彫られ、Ｐ４・６の配置から図４の断面図ｅライン付近に左壁があったと推定する。Ｐ４・６から入口施設も考え得るが改削に拠りその状況は失われている。その後、左壁を拡張しつつ底面は調査レベルまで深く彫り直され、天井も左半の屋根型の傾斜を平滑にする様に手を加えられ、入口にＰ３・７、対になるＰ５・８が穿たれる。やぐら左前面の現地表に露出している岩盤とＰ７・８が穿たれた岩盤のレベル差約50cmを考えると、この時期は羨道部と玄室が入口施設に拠り分れる形態であった事が推定される。玉砂利とＰ１はこの時期に帰属し、その廃棄年代が図６に観る遺物、概ね14世紀末～15世紀前半と考えられよう。翻ってこの改削前の年代は、図８－１に観る精良胎土の薄手丸深型かわらけに求めたいが、図８－6の瓦器質火鉢が図９－20と接合はしないが同一個体と観られ、改削の状況から見ても根拠に乏しく、やぐらが最終的に廃棄する際に混ざり込んだものと判断するのが妥当であろう。左壁下に入口まで廻り込む溝は、断面図ｂから改削後さらに６層堆積後に排水溝として彫られている可能性がある。右壁下段差上の岩盤面に手が加えられていることを併せ観てもさらに細かな時期区分が考え得るが、昼猶暗きやぐら内を崩落土に怯えながら左右に分割した調査状況では、観察の結果から推定することで調査のまとめとしたい。

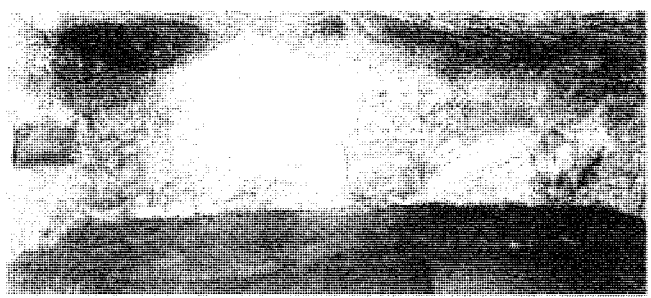
表１　出土遺物計測表

図	遺跡No	種別	計測値 単位：cm　（）＝復元値			写真
図５	1	土器 かわらけ・系	口径 (10.4)	底径 (6.6)	器高 2.8	
岩盤上	2	土器 かわらけ・系	口径 (10.4)	底径 (6.2)	器高 2.8	
	3	土器 かわらけ・系	口径 (10.8)	底径 (6.6)	器高 3.3	
	4	土器 かわらけ・系	口径 (10.8)	底径 (7.2)	器高 2.9	
	5	土器 かわらけ・系	口径 (10.8)	底径 (6.2)	器高 2.8	
	6	瓦器質 火鉢Ⅳ類				
	7	石製品 双六のコマ	径 1.8	厚み 0.7		
図６	8	土器 かわらけ・系	口径 7.4	底径 5.3	器高 2.0	
図３－４～６層中	9	土器 かわらけ・系	口径 7.4	底径 5.5	器高 2.0	
	10	土器 かわらけ・系	口径 (7.4)	底径 (4.6)	器高 2.3	
	11	土器 かわらけ・系	口径 7.5	底径 5.0	器高 2.4	
	12	土器 かわらけ・系	口径 10.7	底径 6.9	器高 3.0	○
	13	土器 かわらけ・系	口径 10.3	底径 6.4	器高 3.3	○
	14	土器 かわらけ・系	口径 10.7	底径 7.6	器高 3.0	
	15	土器 かわらけ・系	口径 12.5	底径 7.6	器高 3.8	
	16	土器 かわらけ・系	口径 12.2	底径 8.4	器高 3.6	○
	17	土器 かわらけ・系	口径 12.8	底径 8.0	器高 3.5	○
	18	土器 かわらけ・系	口径 (13.0)	底径 (7.4)	器高 3.5	
	19	土器 かわらけ・系	口径 (11.8)	底径 (7.4)	器高 3.5	
	20	瓦器質 火鉢Ⅳ類	口径			○
	21	舶載 天目茶碗		底径 4.0		
図７	22	土器 かわらけ・系	口径 5.9	底径 4.2	器高 2.0	○
	23	土器 かわらけ・系	口径 6.0	底径 3.8	器高 1.8	

図	遺跡No	種別	計測値 単位：cm　（）＝復元値			写真
図７	24	土器 かわらけ・系	口径 6.3	底径 4.3	器高 1.9	○
図３－１～３層中	25	土器 かわらけ・系	口径 7.6	底径 4.5	器高 2.5	
	26	土器 かわらけ・系	口径 6.9	底径 4.7	器高 2.2	○
	27	土器 かわらけ・系	口径 7.4	底径 5.0	器高 2.3	○
	28	土器 かわらけ・系	口径 7.7	底径 5.0	器高 2.0	
	29	瓦器質 火鉢Ⅳ類	口径 7.8	底径 5.6	器高 2.1	○
	30	石製品 双六のコマ	口径 7.8	底径 5.0	器高 2.1	○
	31	土器 かわらけ・系	口径 7.6	底径 (6.4)	器高 2.9	
	32	土器 かわらけ・系	口径 (10.6)	底径 (7.8)	器高 3.0	
	33	土器 かわらけ・系	口径 (11.2)	底径 (7.8)	器高 3.2	
	34	土器 かわらけ・系	口径 (10.9)	底径 7.8	器高 3.2	
	35	土器 かわらけ・系	口径 10.9	底径 7.4	器高 3.0	○
	36	土器 かわらけ・系	口径 10.0	底径 7.4	器高 3.3	○
	37	土器 かわらけ・系	口径 (10.2)	底径 7.6	器高 3.0	○
	38	土器 かわらけ・系	口径 10.3	底径 (9.2)	器高 3.5	
	39	土器 かわらけ・系	口径 (12.6)	底径 (8.4)	器高 4.0	
	40	瀬戸or美濃 小皿	口径 (13.1)	外底径 6.4		○
	41	土器 かわらけ・系		外底径 3.6	器高 2.2	
	42	瀬戸or美濃 長石釉皿	口径 8.2	外底径 6.6	器高 2.2	○
	43	堺 摺鉢	口径 12.4			○
	44	唐津 刷毛目鉢		外底径 10.7		○
	45	丹波系 摺鉢				○
	46	関西系陶器 鍋or壺	口径 3.4	径 13.8	器高 1.4	○

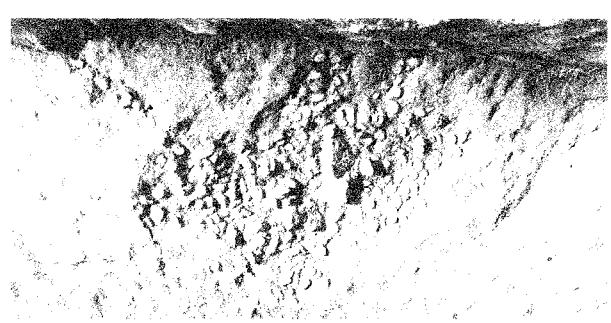
表作成　田畑　衣理

1．調査やぐら前景



2．やぐら奥壁

3．堆積土層(断面図h)

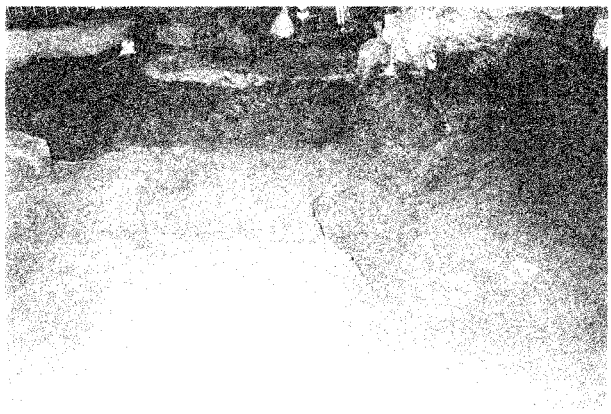


4．底面中央玉砂利

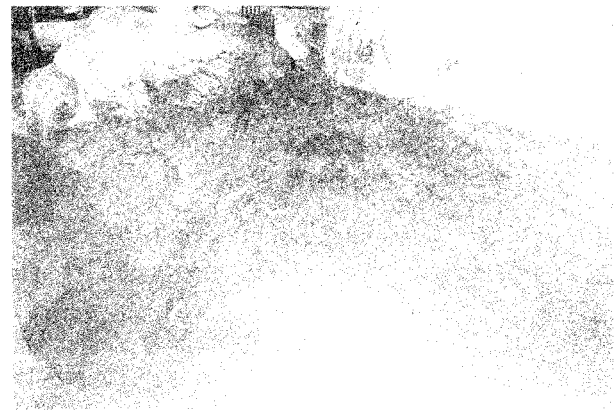
5．壁面(奥に向い左壁)

6．壁面(奥に向い右壁)

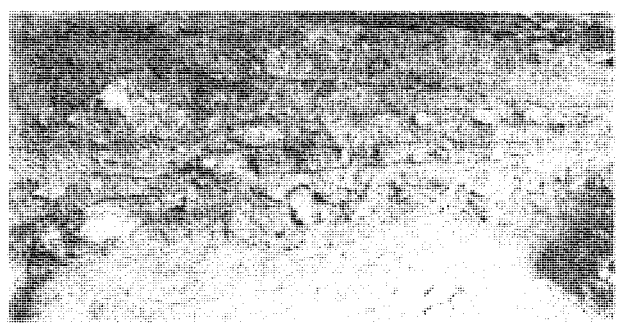
図版2



7．入り口付近ピット（内側から）



8．入口側右壁面ピット



9．堆積土層（断面図b）

10　周辺のやぐら現状況

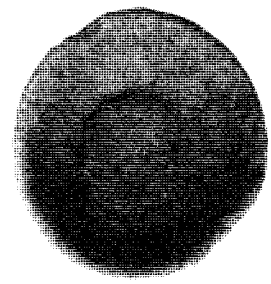
11．周辺やぐら（図2－C・D）

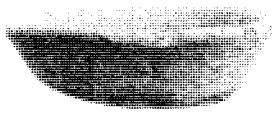
12．周辺のやぐら（図2－H）

7　22

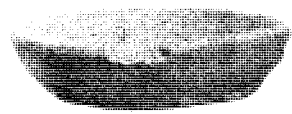
7　24

7　26





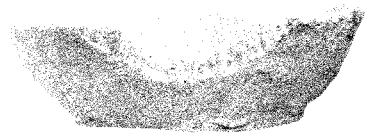
7　27



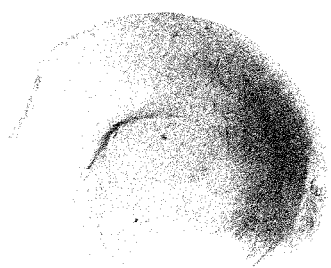
7　29

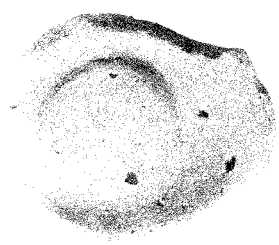
7　30

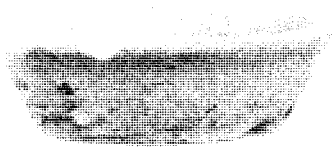
7　12



7　13

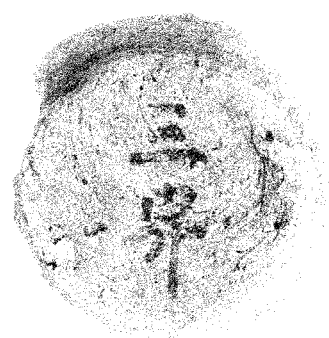




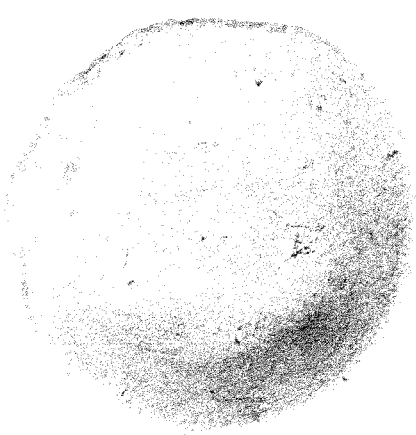


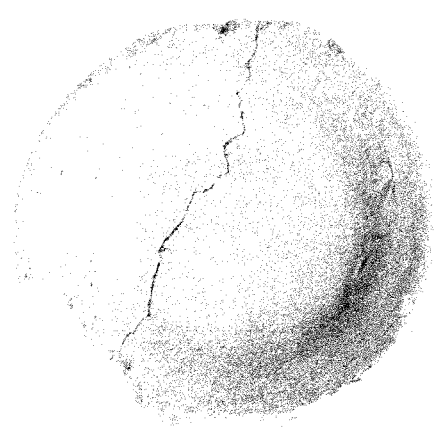
7　35

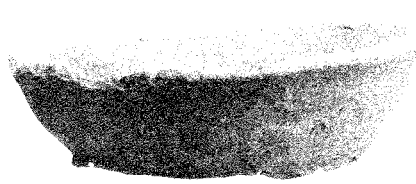
7　36



7　37





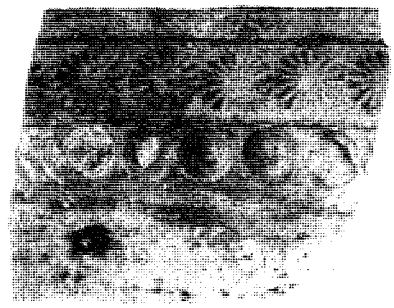


6　16

6　17

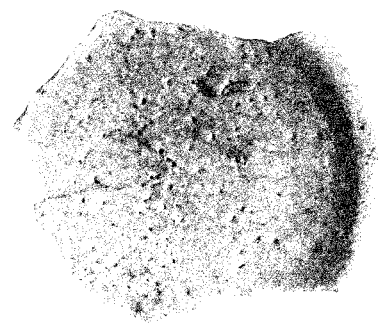
出土遺物(1)　かわらけ

図版4

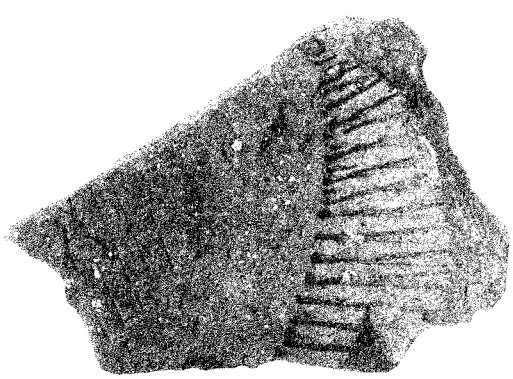


6－20

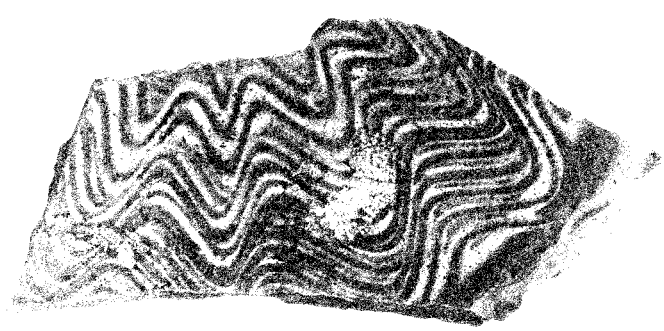
7－10



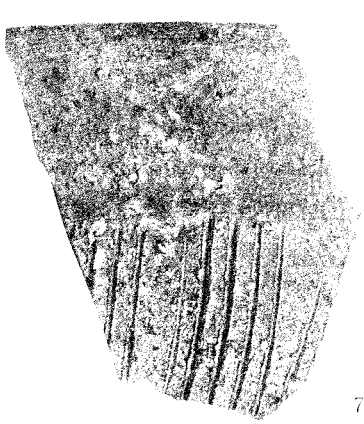
7－12



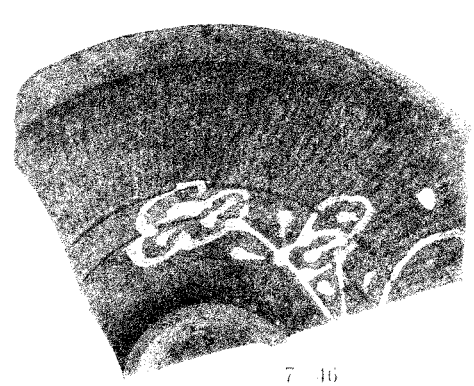
7－13



7－14



7－15



7－16

出土遺物（2）　その他の遺物

能蔵寺跡（No. 314）

のうぞうじあと

材木座二丁目297番地１地点

例　言

1　本報は、神奈川県鎌倉市材木座二丁目297番１地点における個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成13年１月20日から３月９日にかけて、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査対象面積は64㎡である。

3　現地での調査体制は以下の通りである。

主任調査員　大河内　勉
調査員　　川又　隆央・伊丹　まどか
調査補助員　石元　道子・沖元　道
調査作業員　石渡　辰男・蓑田　孝善・河原　龍雄・藤枝　正義・荻野　勲・多田　得蔵
協力機関名　(社)鎌倉市シルバー人材センター
　　(株)鎌倉日本土木
　　鎌倉遺跡調査会

4　整理作業および本報の作成は以下の分担で行なった。

遺物水洗い　　高橋　寛・福田　洋三・向後　博之・平川　康展
遺物実測　　石元・伊丹
遺構写真撮影　大河内・川又
遺物写真撮影　石元
挿図作成　　石元・伊丹
図版作成　　石元・伊丹

5　本文は、第２章第１節を川又が、第３章は伊丹と石元が協議のうえ伊丹が執筆した。法量表は石元が、その他を伊丹が執筆した。

6　・挿図は全測図1/80・個別遺構図1/40・遺物実測図1/3の縮尺で掲載している。
・遺構の個別図、および註記は原則として遺物が出土している遺構を掲載している。
・「かわらけ」とだけ表記してある場合は「ロクロ成形」の土器であり、「手づくね成形」の土器には「てづくね」と表記した。
・実測図に表記した記号は、｜←――→｜は使用面。　｜←　→｜は生産地加工痕。　｜←－－→｜は二次加工痕を表す。
・遺物に付着した油煤痕は黒色で表し、漆付着痕はスクリーントーンで表している。
・出土遺物の法量は法量表に掲載しているが、(　　)内は復元数値および、遺存値である。
・遺構に付したナンバーはプラン確認の時点で付してあり、遺構の新旧を表すものではない。

7　出土品等発掘資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

8　現地調査および資料作成に際しては、次の諸氏・各諸機関から貴重な御教示、ご協力を賜った。
(順不同・敬称略)
宮田眞・滝沢晶子・森孝子(宮田調査事務所)・手塚直樹(青山学院大学)・菊川英政(鎌倉遺跡調査会)宗台富貴子(東国歴史考古学研究所)・馬淵和雄・汐見一夫(鎌倉考古学研究所)・姜大奎(韓国国立博物館)韓盛旭(松廣寺聖寶博物館)・中山清隆(女子聖学院短期大学)

本文目次

第１章　調査の概要……19
　第１節　調査地点の位置と環境……19
第２章　グリッド配置と土層堆積……21
　第１節　グリッド設定……21
　第２節　層序……21
第３章　発見された遺構と遺物……26
　第１節　遺構と遺物……26
　　Ⅰ　第１面の遺構と遺物……26
　　Ⅱ　第２面の遺構と遺物……32
　　Ⅲ　第３面の遺構と遺物……35
　　Ⅳ　第４面の遺構と遺物……42
　　Ⅴ　第５面の遺構と遺物……43
第４章　まとめ……46

挿入目次

図１　調査地点・周辺遺跡図……20
図２　グリッド軸設定図……21
図３　調査区壁土層堆積図……22
図４　第１面・第２面全側図……23
図５　第３ａ面・第３ｂ面全側図……24
図６　第３ｃ面・第３ｄ面全側図……25
図７　第４面・第５面全側図……26
図８　第１面遺構（遺構７・９・11・12・14）……28
図９　第１面遺構（遺構13・15）……29
図１０　第１面遺構出土遺物（遺構７・９・13）……30
図１１　第１面遺構出土遺物（遺構11・12・14）……31
図１２　第１面面上出土遺物……31
図１３　第１面～第２面出土遺物……32
図１４　第２面遺構（遺構22・26・27・28・30・31・礎板列）……34
図１５　第２面遺構出土遺物（遺構22・26・27・30）……35
図１６　第２面～第３面出土遺物……36
図１７　第３ａ面遺構（遺構40・43・45・48・58・70・73・78・79）……37
図１８　第３ａ面遺構出土遺物（遺構36・43・45・48・70・73）……39
図１９　第３ａ面遺構出土遺物（遺構79・80・81）……40
図２０　第３ａ面面上・第３ａ面～第３ｂ面出土遺物……40

図２１　第３ｂ面遺構(遺構88･89)・第３ｂ面面上・第３ｂ面～第３ｃ面出土遺物 ……41
図２２　第３ｃ面遺構(遺構90･杭列) ……42
図２３　第３ｃ面遺構(遺構90)・第３ｃ面～第３ｄ面出土遺物 ……42
図２４　第３ｄ面遺構(遺構101･110･112) ……43
図２５　第３ｄ面遺構(遺構101･110)・第３ｄ面～第４面出土遺物 ……43
図２６　第４面遺構(遺構125･128･144) ……43
図２７　第４面遺構(遺構125･144)・第４面面上・第４面～第５面出土遺物 ……44
図２８　第５面遺構(礎板列･遺構152) ……44
図２９　撹乱・側溝・表土掘削時出土遺物 ……45

図版目次

図版１　１．遺跡地調査前全景　２．第１面全景(東から) ……53
図版２　１．第１面全景(北から)　２．第２面全景(東から) ……54
図版３　１．第３ａ面全景(北から)　２．第３ｂ面全景(西から) ……55
図版４　１．第３ｃ面全景(北から)　２．第３ｄ面全景(西から) ……56
図版５　１．第４面全景(北から)　２．第５面全景(西から) ……57
図版６　１．調査区北壁セクション　２．調査区西壁セクション ……58
　３．第１面遺構(遺構３・６・７・８・19)　４・第１面遺構(遺構７・９)
　５．第１面遺構(遺構14・15・16・17)　６．第２面遺構(遺構26)
　７．第２面礎板列　８．第３ａ面遺構(遺構43)
図版７　１．第３ｂ面遺構(遺構87)　２．第３ｃ面遺構(遺構90) ……59
　３．第３ｄ面遺構(遺構101)　４．第３ｄ面遺構(遺構110)
　５．第３ｄ面(烏帽子出土状況)　６．第５面遺構(遺構147)
　７．第５面遺構(遺構150・152)　８．第５面遺構(遺構153)
図版８　第１面遺構出土遺物 ……60
図版９　第１面遺構出土遺物 ……61
　第１面～第２面出土遺物
図版10　第１面～第２面出土遺物 ……62
図版11　第２面遺構出土遺物 ……63
　第２面～第３面出土遺物
図版12　第３ａ面遺構出土遺物 ……64
図版13　第３ａ面遺構出土遺物 ……65
　第３ａ面面上・第３ａ面～第３ｂ面出土遺物
　第３ｂ面遺構・第３ｂ面面上・第３ｂ面～第３ｃ面出土遺物
図版14　第３ｃ面遺構・第３ｃ面～第３ｄ面出土遺物 ……66
　第３ｄ面遺構・第３ｄ面～第４面出土遺物
　第４面遺構・第４面面上・第４面～第５面出土遺物
図版15　撹乱・側溝・表土掘削時出土遺物 ……67

第１章　　調査の概要

第１節　調査地点の位置と環境（図１）

調査地点は鎌倉市遺跡台帳で「能蔵寺跡」に登録され、鎌倉市材木座二丁目297番１地点に位置する。調査地一帯の字名として「能蔵寺」の名称は残っているが、「能蔵寺」という寺社は宗旨未詳の廃寺であり、『鎌倉廃寺事典』等の記録を参照してみても、伝承地は「小町ヵ」「乱橋材木座ヵ」と正確な所在は不明である。調査地の周辺には多くの寺社がある。調査地から西に向かって170mの地点に「妙長寺」。250mの地点に「啓運寺」。南西方向に向かって300mの地点に「向福寺」。南に向かって130ｍの地点には「真言宗能蔵寺」の旧跡、本尊は三浦大介義明の守本尊と伝えられる「来迎寺」。200mの地点には明治41年に近在の五社を合わせて遣られた「五所神社」。270ｍの地点には、工藤祐経の旧邸蹟と伝えられる「実相寺」。370mの地点で「感応寺（廃寺）」東に130mの地点には「長勝寺」がある。さらに長勝寺の500m先には三浦方面からの防禦施設「名越の切通し」があり、「切通し」に至る名越坂の一帯は、北条政子の御産所ならびに北条一門の一党が居を構えた地であると伝えられる。また、「長勝寺」から「切通し」に至る名越坂の南北に広がる谷戸では、南北朝期から室町期を中心にした墓域が広がる。現代においても名越坂山頂に火葬場があり、明治の中頃までは「来迎寺」の東側の山裾では野焼きに近い形で火葬が行なわれていたそうである。調査地の北を東西に走る国道134号線は、「切通し」の下をトンネル道にして逗子（三浦）から鎌倉市中を通り、「長谷観音」「大仏」前を通り深沢・藤沢に抜けるが、この道路は「古東海道」をほぼ踏襲していると考えられている（現在の国道134号線の１本南を東海道とする意見もある）また、中世鎌倉においては国道134号線の名越から現在の若宮大路下馬四つ角付近までの間が、「大町大路（町大路）」であったと推定されている。

調査地の前を南北に走る小道は前述した「来迎寺」「実相寺」門前を通り、現在の水道路（昭和初期敷設）に突き当たる手前で道が二股に分かれる。今は住宅が建っているが、突き当たりには明治の初頭までは大きな塚が残っていたそうである。

これまでに「能蔵寺跡」内での調査は、南に200ｍの地点２の「五所神社」社頭で行なわれた調査のみである。この調査では12世紀末から14世紀前半の遺構・遺物を発見している。また周辺の調査成果では「長勝寺遺跡」で、室町時代に位置づけられる土壙墓群、13世紀末から14世紀前半の礎石建物、掘立柱建物、溝、土間が発見されている。地点７の材木座町屋遺跡からは、13世紀中頃から15世期初頭に至る遺物と遺構が発見されている。

＜参考文献＞

『鎌倉廃寺事典』　貫達人・川副武胤　(株)有隣堂　1980年12月
『鎌倉市史』（総説編）（考古編）（社寺編）　(株)吉川弘文館
『鎌倉大仏の中世史』　馬淵和雄　新人物往来社刊
『長勝寺遺跡』　大三輪龍彦他　(株)かまくら春秋社
『能蔵寺跡』　能蔵寺遺跡発掘調査団　鎌倉市教育委員会　1995年７月
『神奈川の古代道』　木下良　藤沢市教育委員会博物館準備担当
『古代文化』45　財団法人古代学協会
『中世の風景を読む』2　新人物往来社刊

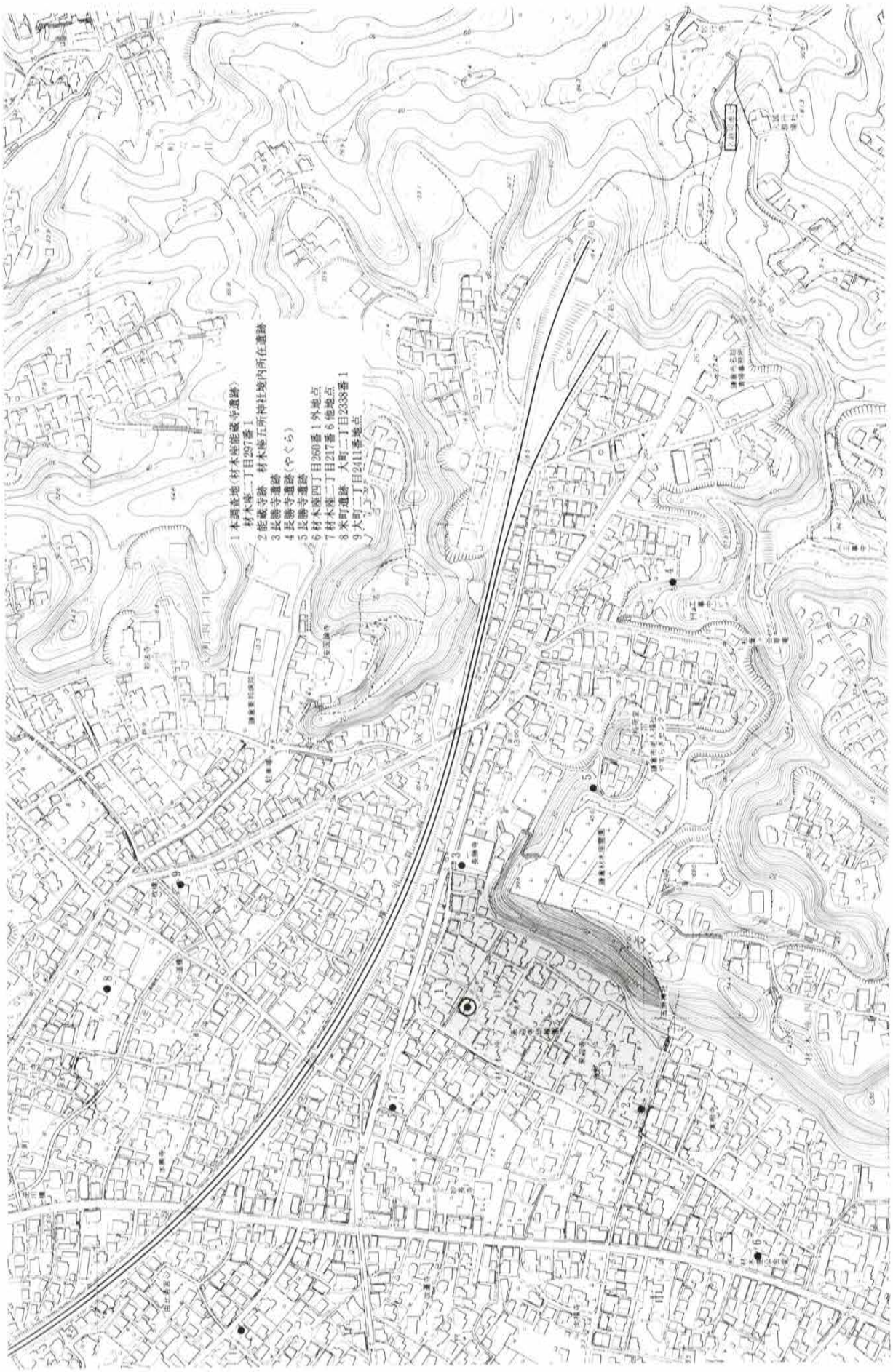


図1　調査地点・周辺遺跡図

第２章　　グリッド配置と土層堆積

第１節　グリッド設定

調査地の位置と調査地内の遺構を国土座標軸にもとづいた地図上で掌握するために光波測量機によるトラバース測量を行なった。調査区内の基準杭の観測成果、周囲の４級基準点の成果、および、真北などの関係は図(図2)に示した。調査にあたり設定したグリッドは４ｍ間隔に設定した。国土座標値を振込んだ基準杭をＢ１グリッドと称し、ｘ軸の南北方向にアルファベットをＹ軸の東西方向にアラビア数字を与えている。

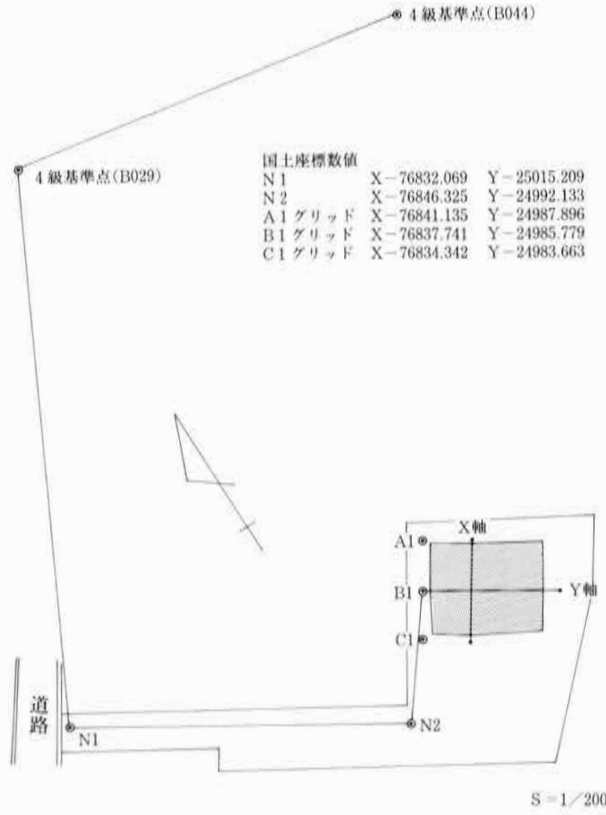


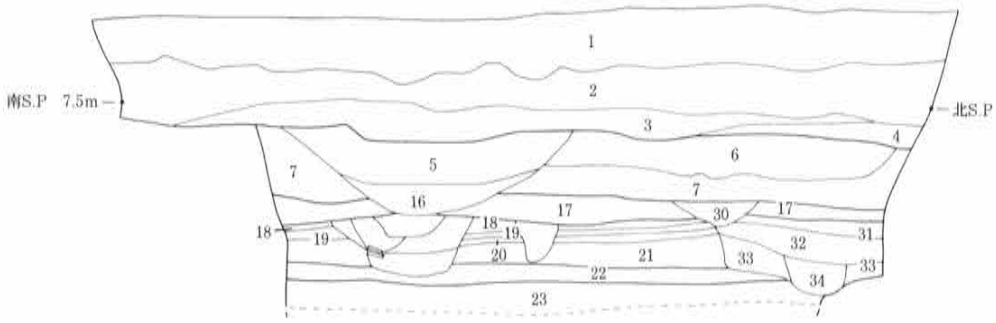
図２　グリッド軸設定図

第２節　層序(図３)

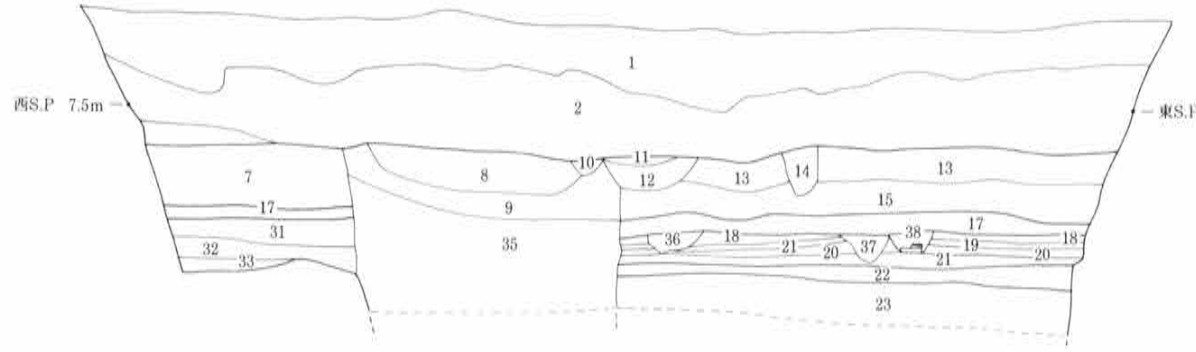
調査地の北壁と西壁で確認した土層堆積図(図3)を用いて堆積状況を上層より説明する。

調査前現地表海抜高は8､2ｍであった。第１面までの土層は現代の撹乱層と近世の客土が約80㎝の厚さで堆積していた。近・現代の堆積土(第1･2層)を重機により取りのぞいた後、中世の遺物包含層(第3層)を検出したが、調査区の東側では第３層の堆積が確認できず、生活面としては希薄な層であったため取りのぞき第13層上面を第１面とした。第１面は調査区内全体で比較的良好な、土丹を利用した地業がなされていた。第１面の構成土は、土丹塊、土丹粒で構成された硬く締まった黄茶色土と砂質土の多く混じる黒灰色弱粘質土で構成される。約50㎝の厚さで堆積していた。第２面は第17層上層を調査面とした。第２面は調査区東側では遺構が希薄である。礎板を伴う柱穴、土壙等を検出している。第２面の構成土は土丹粒、暗褐色粘質土、細粒砂を含む黒灰色砂質土10㎝から30㎝の厚さで堆積していた。第３面は第18層上層を調査面とした。第３面は発見した多くの遺構のうち、調査区中央で確認した土丹を使用した地業が何層かに別れていたため、第３ａ～第３ｄ面に細分して示した。第３面構成土は土丹地業部分を除いて褐鉄を含む硬く締まった黄褐色砂が37㎝～66㎝の厚さで堆積していた。第３ａ面の構成土は貝殻、土丹粒を含む青灰色砂層で5～10㎝の厚さで堆積していた。第３ａ面で一部確認 していた土丹塊(拳大から人頭大)を全体に混入した暗褐色粘質土よる版築が、調査区中央で広がることを確認したため、第３ｂ面として示した。第３ｂ面で確認した土丹版築層上でも新に土壙、ピットを発見している。第３ｂ面土丹地業構成土下層には木片が多く堆積していた。第３ｃ面は、第３ｂ面の土丹地業構成土を取り除いた時点で確認した版築部分である。第３ｃ面の土丹地業構成土は青灰色砂である。第３ｄ面は第３ｃ面土丹地業構成土を取り除いた時点で確認した。第３ｄ面地業構成土は粗い灰色砂が20㎝～30㎝の厚さで堆積していた。第22層上面で確認した第４面では湧水が調査区全体に浸み出ておりやや軟弱な面ではあったが柱穴、礎板などを検出した。第４面構成土は黒褐色粘質土が10～15㎝の厚さで堆積していた。第５面は第23層上層を調査面とした。第５面の構成土は

有機質を多く含んだ黒褐色粘質土である。第５面以下は湧水量が激しく、安全を考慮して掘り下げて確認しなかったが、側溝の断から第５面検出レベルの約30㎝下までは遺物包含層であることを確認している。



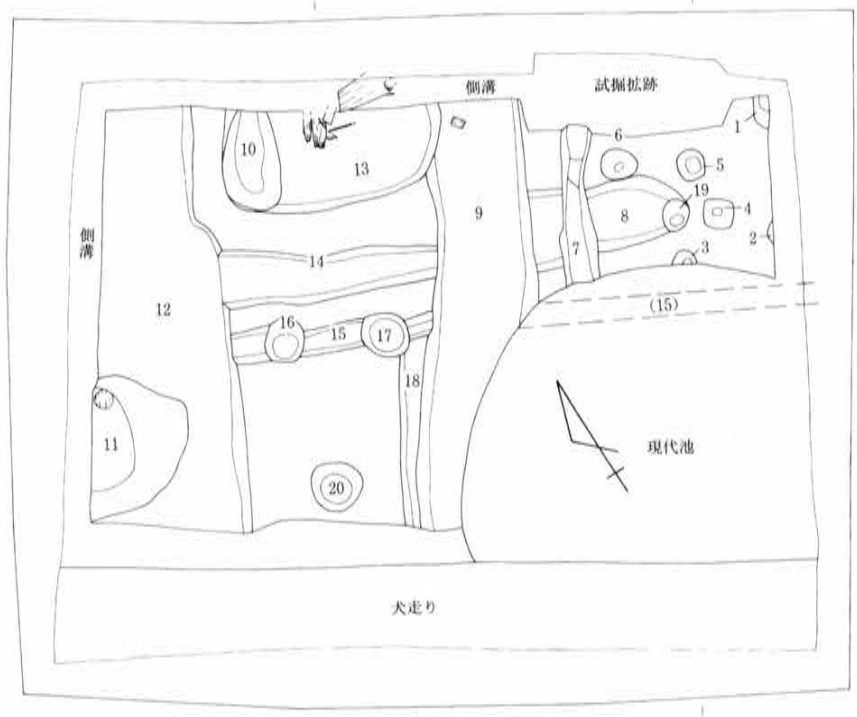
〈調査区西壁堆積土層図〉



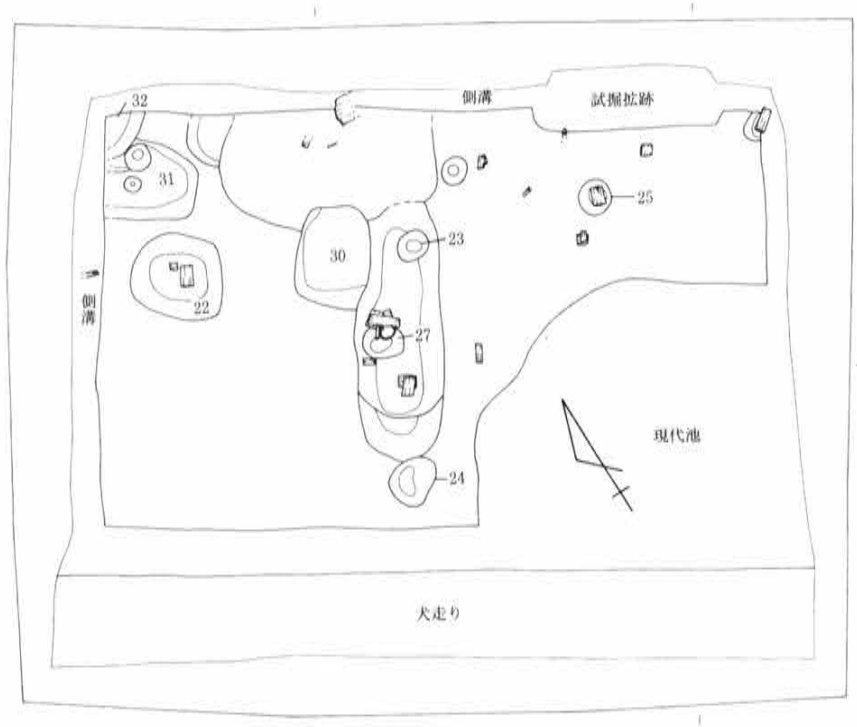
〈調査区北壁堆積土層図〉

1	表土		20	灰色砂	細粒砂、木片少量含む
2	茶褐色土	土丹粒多量に混入　近世客土	21	黄褐色砂	硬くしまる。褐鉄を含む細かい砂
3	茶褐色土	土丹粒多量、炭化物微量	22	暗褐色弱粘質土	砂質土　木片を含む
4	暗茶褐色土	土丹粒、粘性あり	23	黒褐色粘質土	粘性強く　硬くしまる
5	暗褐色弱粘質土	土丹粒多く、炭化物少量	24	黒灰色砂	土丹塊少量　貝殻片含む
6	暗茶褐色弱粘質土	土丹粒多量、炭化物微量	25	暗茶褐色砂	木片、土丹粒　粘質土含む
7	暗褐色弱粘土	土丹塊を多く含む	26	暗茶褐色粘質土	有機質土　多量の木片
8	茶褐色弱粘土	土丹塊　炭化物少量	27	明黄褐色粘質土	有機質土　多量の木片
9	暗茶褐色砂質土	しまり弱く　土丹少量、炭化物微量	28	灰褐色砂	木片少量　暗褐色粘土を少量含む
10	茶褐色弱粘土	土丹粒少量　炭化物微量	29	暗褐色粘質土	木片少量　土丹塊を多く含む　灰褐色砂含む
11	暗褐色土	炭化物を帯状に含む　土丹粒少量	30	暗褐色粘質土	しまり弱い　土丹粒少量含む
12	茶褐色弱粘質土	土丹粒を多量に含む	31	青緑色砂	土丹粒やや多く少量の貝殻片を含む　粗い砂
13	黄褐色土	土丹粒と土丹塊で構成されている炭化物微量（１面構成土）	32	黒灰色砂	土丹粒を多く含む　少量の木片
15	黒灰色弱粘土	土丹粒　炭化物少量　灰褐色砂を含む、しまり弱い	34	暗茶褐色砂	微量の土丹粒、木片を含む
16	暗灰褐色弱粘質土	しまり弱く　土丹粒少量含む	35	暗褐色粘質土	多量の土丹粒、土丹塊　灰褐色砂を含む
17	灰褐色弱粘質土	土丹粒、貝殻片を多く含む　黒灰色砂少量	36	茶褐色砂	しまりややあり　土丹粒、木片少量
18	黒灰色砂	土丹粒　少量の炭化物を貝殻片を含む	37	茶褐色砂	少量の木片　微量の土丹粒　炭化物を含む
19	青灰色砂	やや硬くしまる　土丹粒少量、炭化物微量	38	茶褐色砂	土丹粒を少量含む

図３　調査区壁土層堆積図



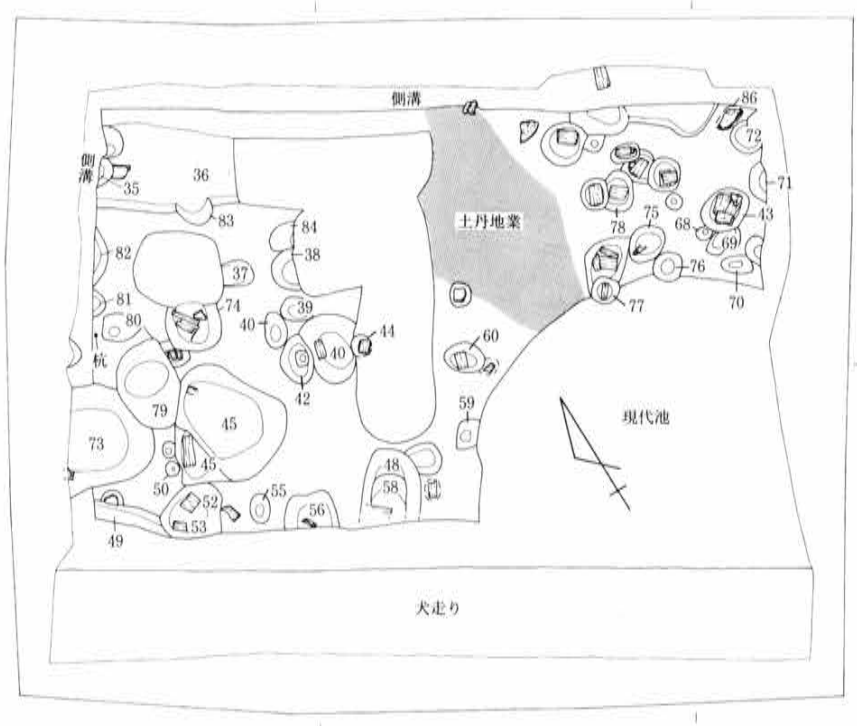
〈第１面全側図〉



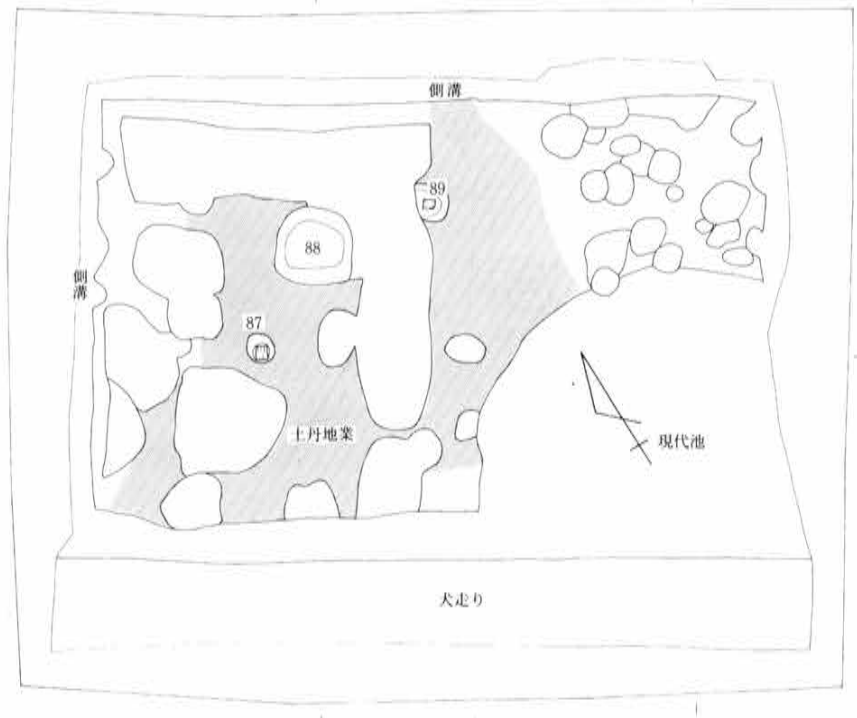
〈第２面全側図〉

0　2m

図４　第１面・第２面全側図



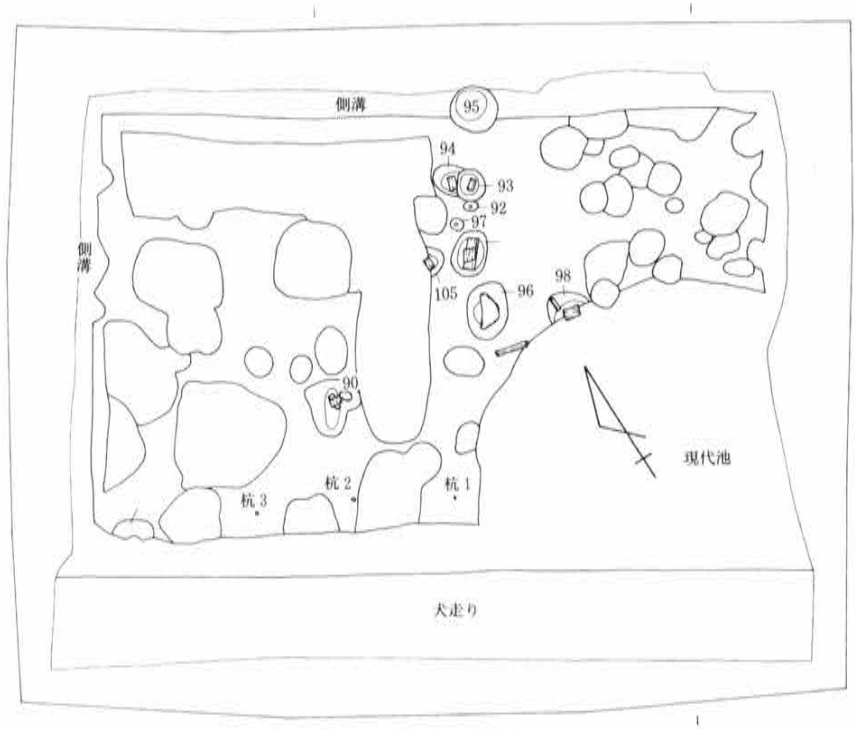
〈第３a面全側図〉



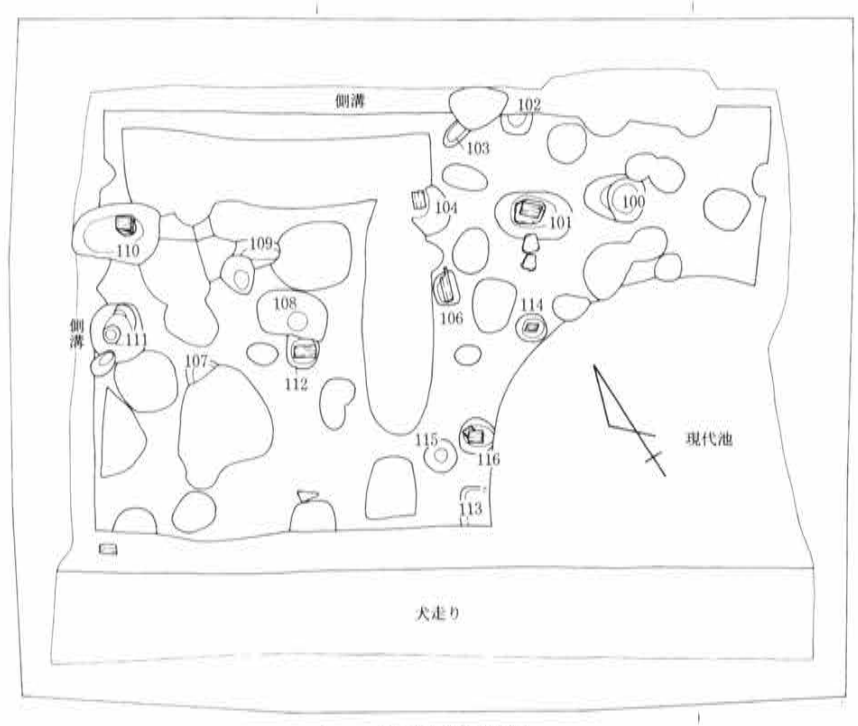
〈第３b面全側図〉

0　2m

図５　3a 面・3b 面全測図



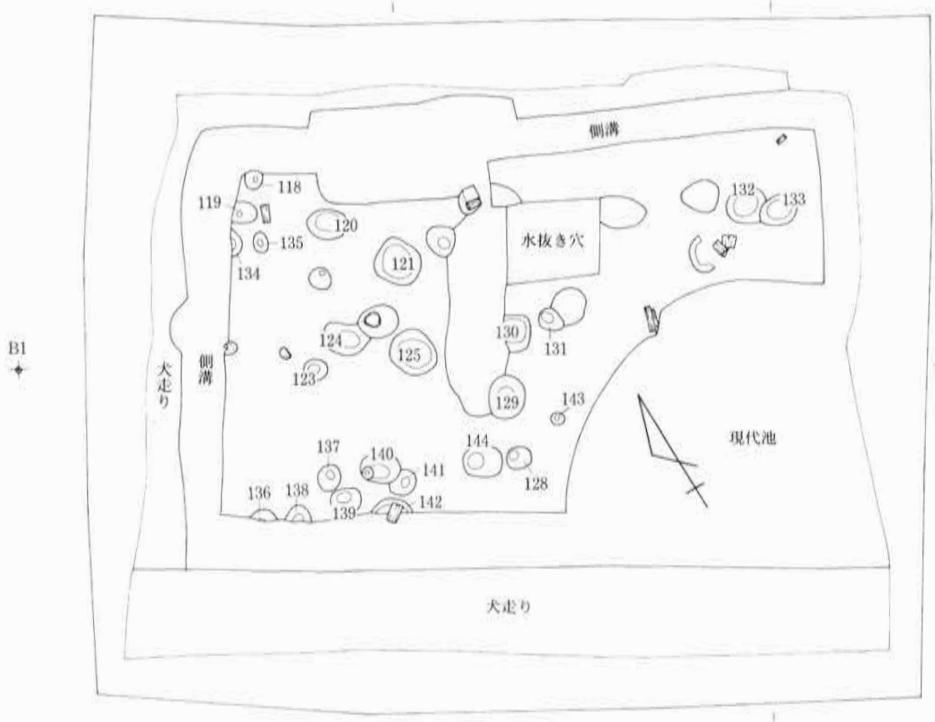
〈第３c面全側図〉



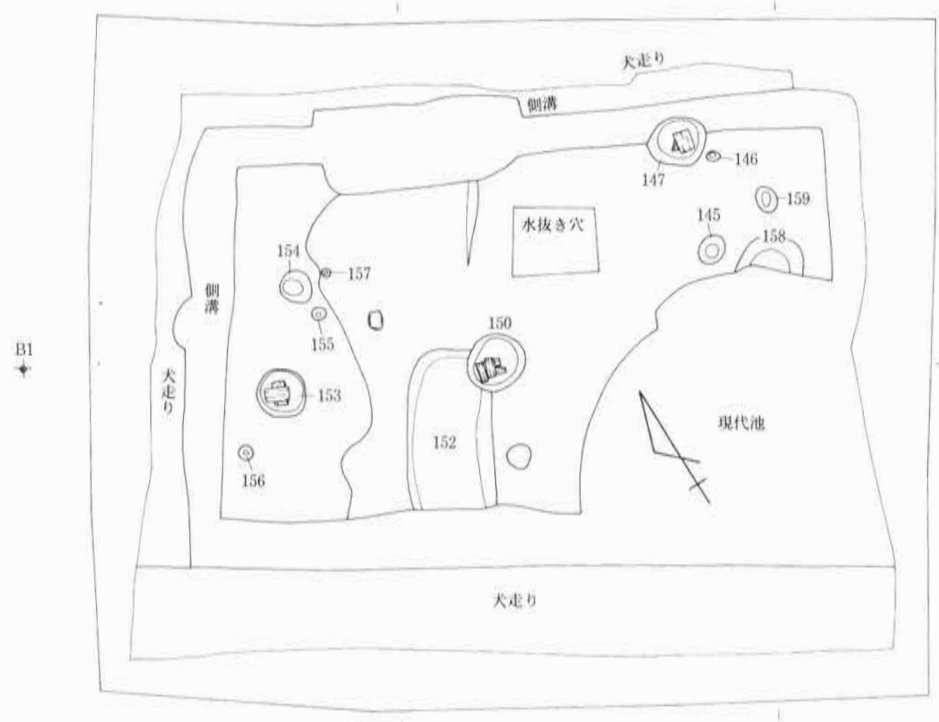
〈第３d面全側図〉

0 2m

図６　第３c面・第３d面全側図



〈第４面全側図〉



〈第５面全側図〉

0　2m

図７　第４面・第５面全側図

第３章　　発見された遺構と遺物

本調査では現地表から約90㎝下まで重機による表土掘削を行ない、その後人力によって５面にわたる遺構面を検出した。調査地は現地表下140㎝のレベルで湧水するため、安全を考慮して表土掘削後に調査区内四周に側溝を設け、調査区の南側に幅約１ｍの犬走りを残して調査を行なったため、調査面積が下層に至るほど狭くなっている。また、調査区の東は現代の池跡で大きく削平されてしまっていた。

狭い面積での調査であったため建物址等の規模・形状を復元することは難しかったが、多くの遺構を発見し生活面を確認した。

発見した遺構は上層から下層に、検出した順に報告している。

第１節　遺構と遺物

Ⅰ　第１面の遺構と遺物（図４）

第１面は、地表レベル海抜7､2ｍ～7､25ｍを測り、緩やかに西から東に向かって傾斜している。第１面では井戸１基・溝４条・溝状土壙１基・土壙３基・ピット10穴を検出した。東西に走る溝（遺構14･15）は南北に走る溝（遺構7･9）に切られており、短期間に調査区内での地割りに変化があったのではないかと考えられる。遺構９の東側は小さな土丹･土丹粒を使用して丁寧な地業がなされており、ピットを数穴発見したが、建物、或は塀等を想定させるものではない。遺構９・遺構12・遺構15に囲まれた調査区中央、南側の四角を呈する部分も、粗い整地ではあったが土丹による地業が確認できた。井戸（遺構13）は上層からの堀込みであり、第１面に伴う遺構ではない。

遺構７（図８）

南北に延びる溝状遺構。幅22～39㎝、深さ約15㎝を測る。遺構の北側を試掘壙・調査区壁に、南側を撹乱に切られており、規模、流路方向は不明。主軸方位はＮ－31°－Ｅ。

図10－１は砥石。鳴滝産仕上げ砥。両側面に生産地加工痕が残る。

図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ（大）４点、かわらけ（小）２点、常滑甕２点、瀬戸入れ子１点。

遺構９（図８）

南北に延びる溝状遺構。幅100～117㎝、深さ29㎝を測る。北に向かって調査区外に遺構が延びることを北壁土層断面にて確認している。流路方向は南から北に向かって流れる。主軸方位はＮ－33°－Ｅ。

図10－２～８は遺構９出土。２は瓦質火鉢。３～５はかわらけ。６は砥石。鳴滝産仕上げ砥。小口、両側面に生産地加工痕残る。７は泥岩製加工品。用途不明。８は銭。

図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ（大）79点、かわらけ（小）11点、常滑甕17点、常滑片口鉢Ⅰ類３点。土器質火鉢１点、瀬戸入れ子１点、鋳型１点。

遺構10（図４）

土壙。長軸は北側の側溝によって切られており規模は不明。短軸59㎝。深さ24㎝。平面楕円形を呈する。主軸方位はＮ－33°－Ｅ。個別の遺構図は図示していない。

破片でかわらけ（大）６点、かわらけ（小）２点が出土している。

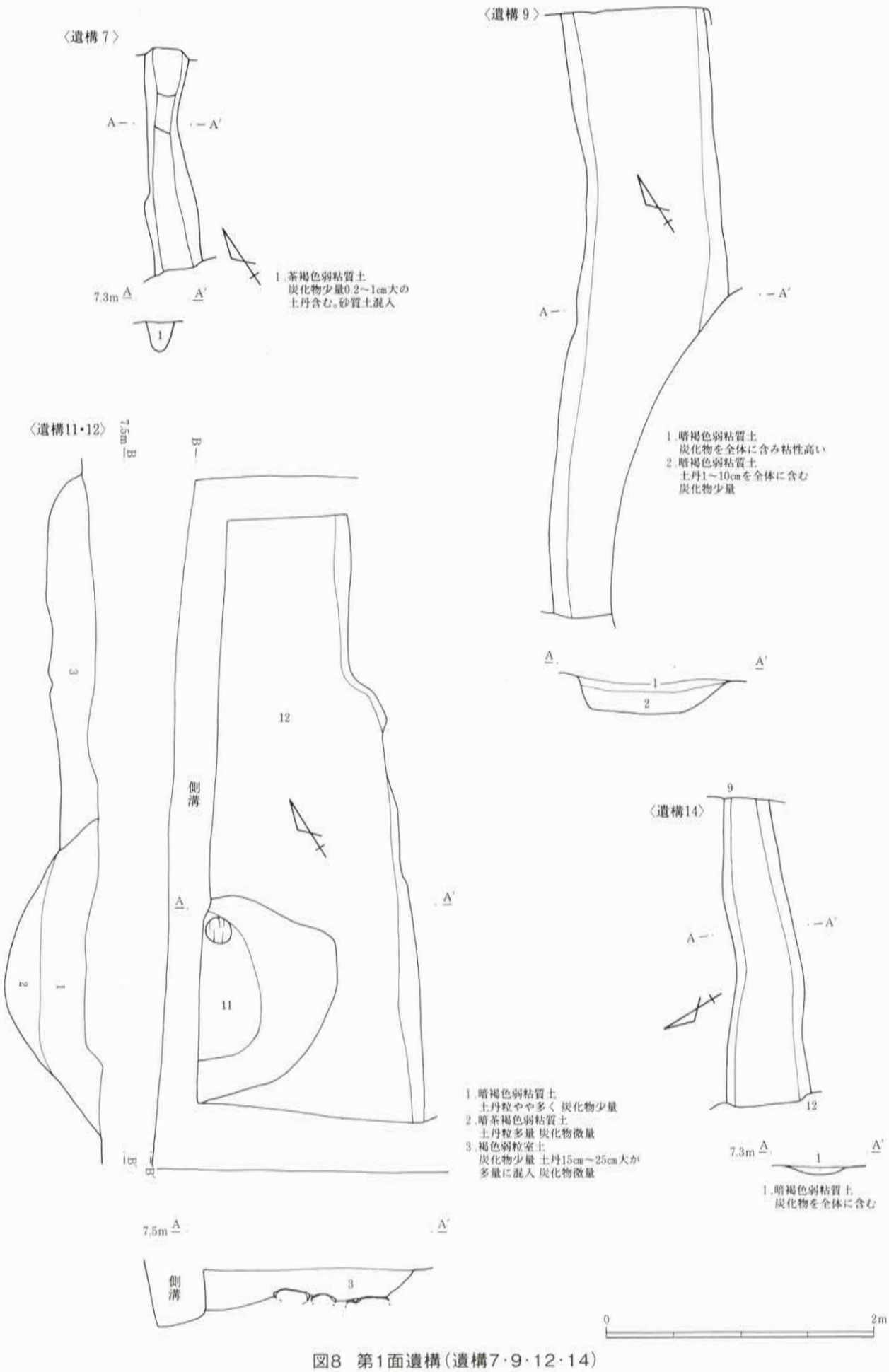


図8　第1面遺構（遺構7・9・12・14）

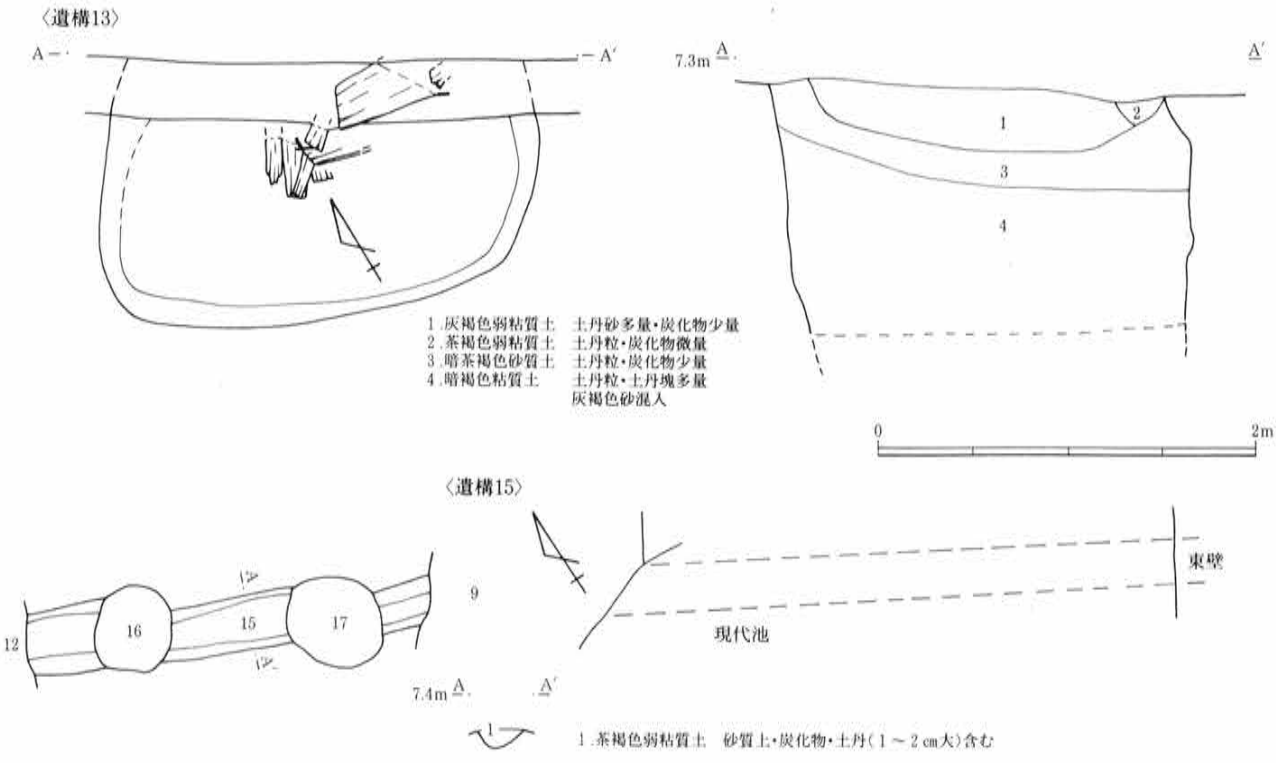


図9　第1面遺構(遺構13·15)

遺構11（図８）

土壙。遺構の西側が調査区外に延びているため規模、形状、主軸方位は不明。最大幅152㎝、深さ62㎝を測る。覆土に大型の土丹が多く含まれる。

図11－22～28は遺構11出土。22、23は瀬戸入れ子。22は小型の輪花型である。23は外底部糸切りの後、箆で整形。24は常滑甕。25は瓦質火鉢。16弁の菊花のスタンプ押印。26、27はかわらけ。28は砥石。鳴滝産仕上げ砥。側面片側に生産地加工痕残る　図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ(大)111点、かわらけ(小) 11点、てづくね１点、常滑甕 10点、常滑壷１点、常滑片口鉢Ⅰ類２点。山茶碗１点、瀬戸入れ子１点、瀬戸折縁深皿１点、青白磁梅瓶１点、鉄滓１点、木製品曲物底板１点。

遺構12（図８）

遺構の南北、西側が調査区外に延びているため、規模、形状などは不明。幅は最大で146㎝、深さは16～28㎝を測る。遺構ではなく、落ち込みであった可能性もある。

図11－29～32は遺構12出土。30～32はかわらけ。31は内面および、外面口唇部に煤痕付着。29はてづくねかわらけ。図示出来なかった遺物は、かわらけ(大) 44点、かわらけ(小) ７点、常滑甕 １点。

遺構13（図９）

井戸。第１面の上層遺構である。遺構の北側が調査区外に延びているため、規模は不明である。底面を検出することは出来なかったが、井戸の枠材に使用したと考えられる板が出土している。

図10－９～21は遺構13出土。９は黄釉盤(泉州・13世紀中葉)。10は山茶碗、貼り付け高台。11～13は常滑甕。14は常滑片口鉢Ⅱ類。15は土器質鍔釜。内面木口状工具による整形。16は土器質火鉢。外面口縁部辺と、斑に内面に漆付着。17はてづくね。18～20はかわらけ。21は滑石。砥石として使用か？

図示出来なかった遺物はかわらけ(大) 34点、かわらけ(小) ９点、てづくね(大) 11点、てづくね(小) 14点、常滑甕 ６点、常滑片口鉢Ⅰ類３点、土器質火鉢２点、鋳型１点、凸部布目痕、凹部ハガレ砂付着、灰色で硬質な胎土を持つ瓦１点、褐釉壷１点、青白磁合子蓋１点、青磁劃花文碗１点、青磁蓮弁文碗１

点、土師器１点。

遺構14（図８）

東西に延びる溝状遺構。幅35～60cm、深さ８～14cmを測る浅い溝である。遺構の東を遺構９に、西を遺構12に切られる。流路方向は西から東に向かって流れる。主軸方位はＮ－118°－Ｅ。

図11－33はかわらけ。34は鉄製品釘。図示出来なかった遺物はかわらけ(大)２点、てづくね(大)２点、てづくね(小)３点、鋳型１点。

遺構15（図９）

東西に延びる溝状遺構。遺構の西側は遺構12に切られ、東は途中遺構９に切られるが調査区外に延びていることを調査区東壁の土層断面によって確認している。遺構７との新旧関係は現代の池で削平され　おり不明である。幅24～38cm、深さ６～11cmを測る。軸方位はＮ－118°－Ｅ。発見した遺物は常滑甕の破片が１点である。個別に図示しなかった第１面の遺構で発見した遺物の破片数は、かわらけ(大)６点、かわらけ(小)３点、常滑甕２点である。

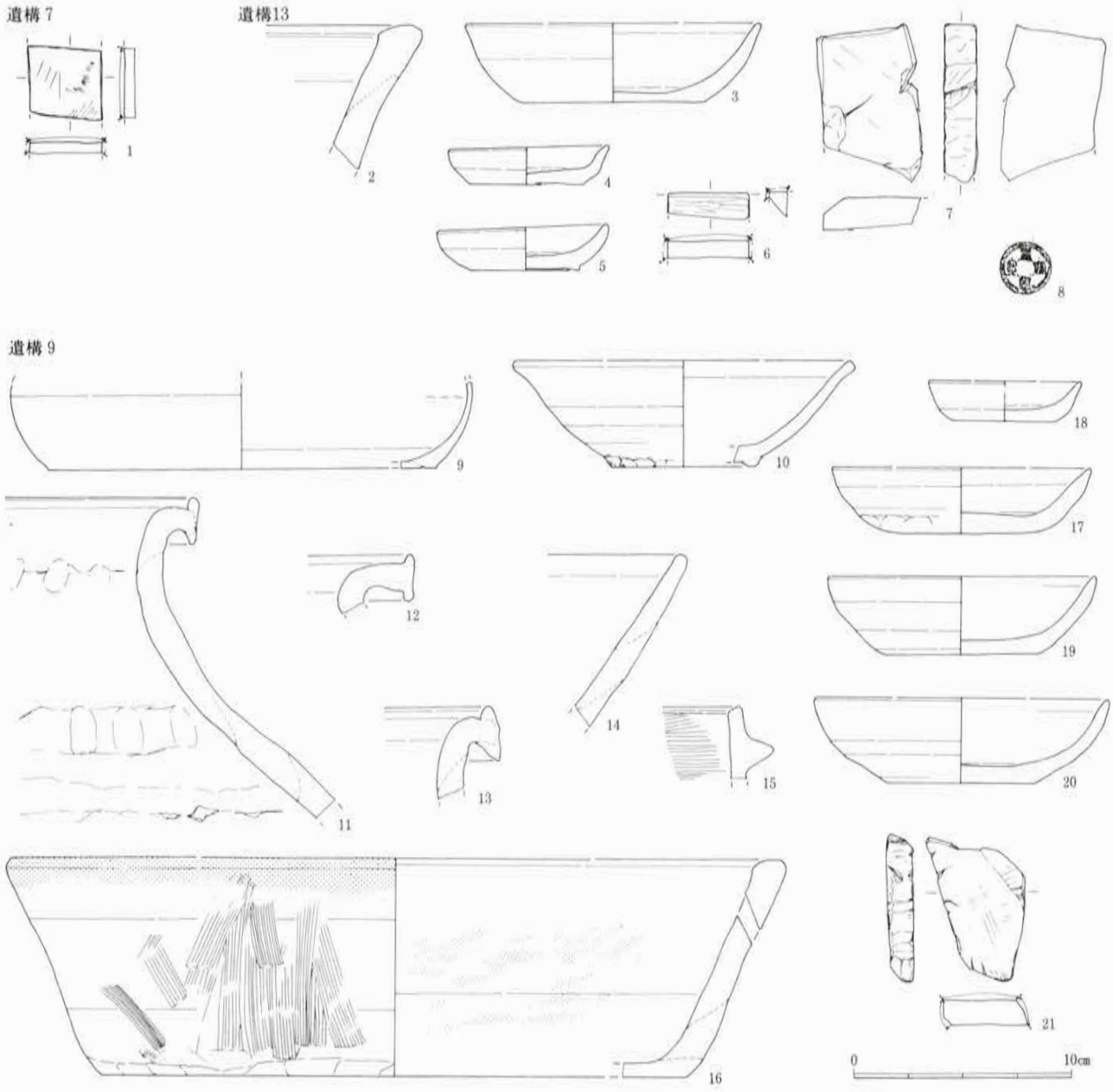


図10　第1面遺構出土遺物

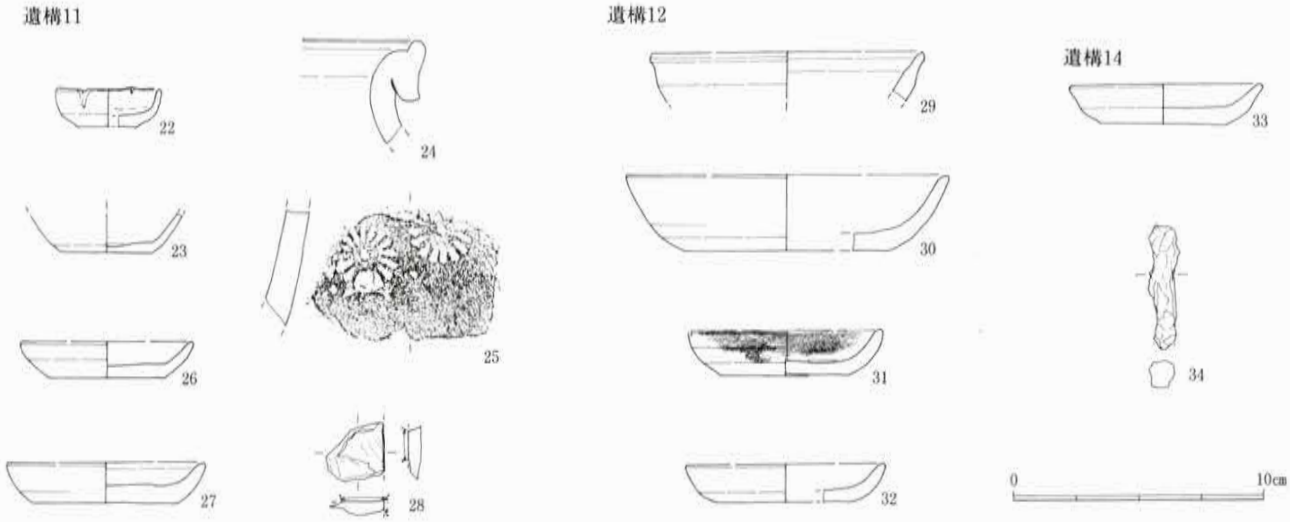


図11　第1面遺構出土遺物

第１面面上出土遺物(図12)

第１面の面上で発見した遺物である。35・36は常滑片口鉢Ⅱ類。37～42はかわらけ。38は口唇部を打欠いており、煤痕が残る。43は砥石。鳴滝産仕上げ砥、両側面に生産地加工痕残る。44はチャート薄片。45は鉄製品。46･47は銭。図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ(大) 306点、かわらけ(小) 18点、常滑甕 23点、常滑片口鉢Ⅰ類４点、常滑片口鉢Ⅱ類４点、瓦器質火鉢４点、鋳型２点、鉄滓が付着した鋳型１点、青白磁壷１点、青磁碗２点、伊勢系土鍋１点である。

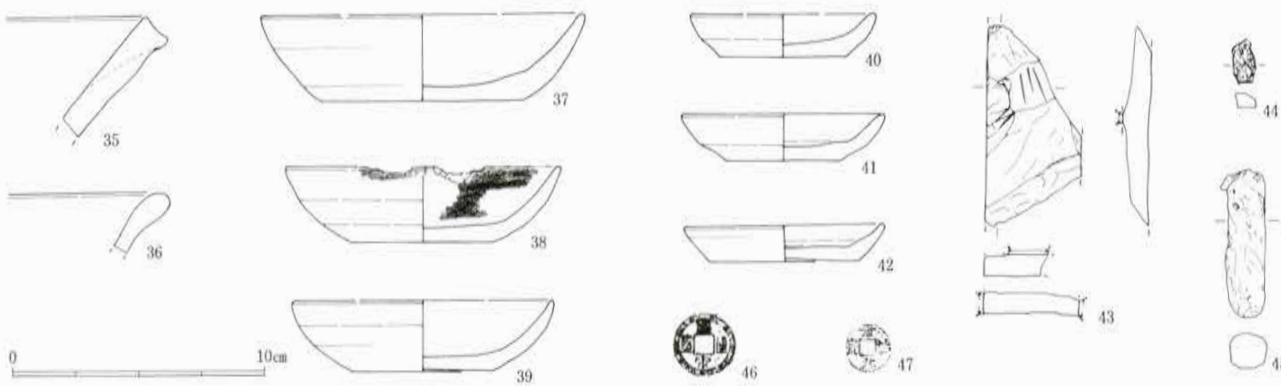


図12　第1面面上出土遺物

第１面～第２面出土遺物(図13)

第１面構成土で発見した遺物である。48は青白磁口兀碗。内面、印花文。素地は灰白色を呈し堅緻、釉は不透明な水色。49は白磁合子。50は青磁蓮弁文碗。51は白磁口兀碗。高台部分を全面打欠いている。52は瀬戸行平鍋。53・62・63は常滑片口鉢Ⅱ類。54は常滑壷。胎土は褐色を呈し堅緻。55～57は常滑甕口縁部片。58～61は常滑甕、押印拓影。64は瓦質の灯明台。胎土灰白色を呈し、肩部に17弁の菊花ふたつの間に梅花の押印、菊花の判は同判と思われる。65はてづくね。胎土褐色で精緻、底部指頭痕が顕著に残り、口縁部を内に曲げたコースター状の形。66～78はかわらけ。71は口唇部に煤痕。79は鉄製品、釘。図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ(大) 118点、かわらけ(小) 21点、てづくね(大) １点、常滑甕 46点 常滑片口鉢Ⅰ類５点、常滑片口鉢Ⅱ類１点、鋳型８点、鋳型は一部に木痕が残り、繊維質を含んだ粗い胎土。青磁蓮弁文碗３点。

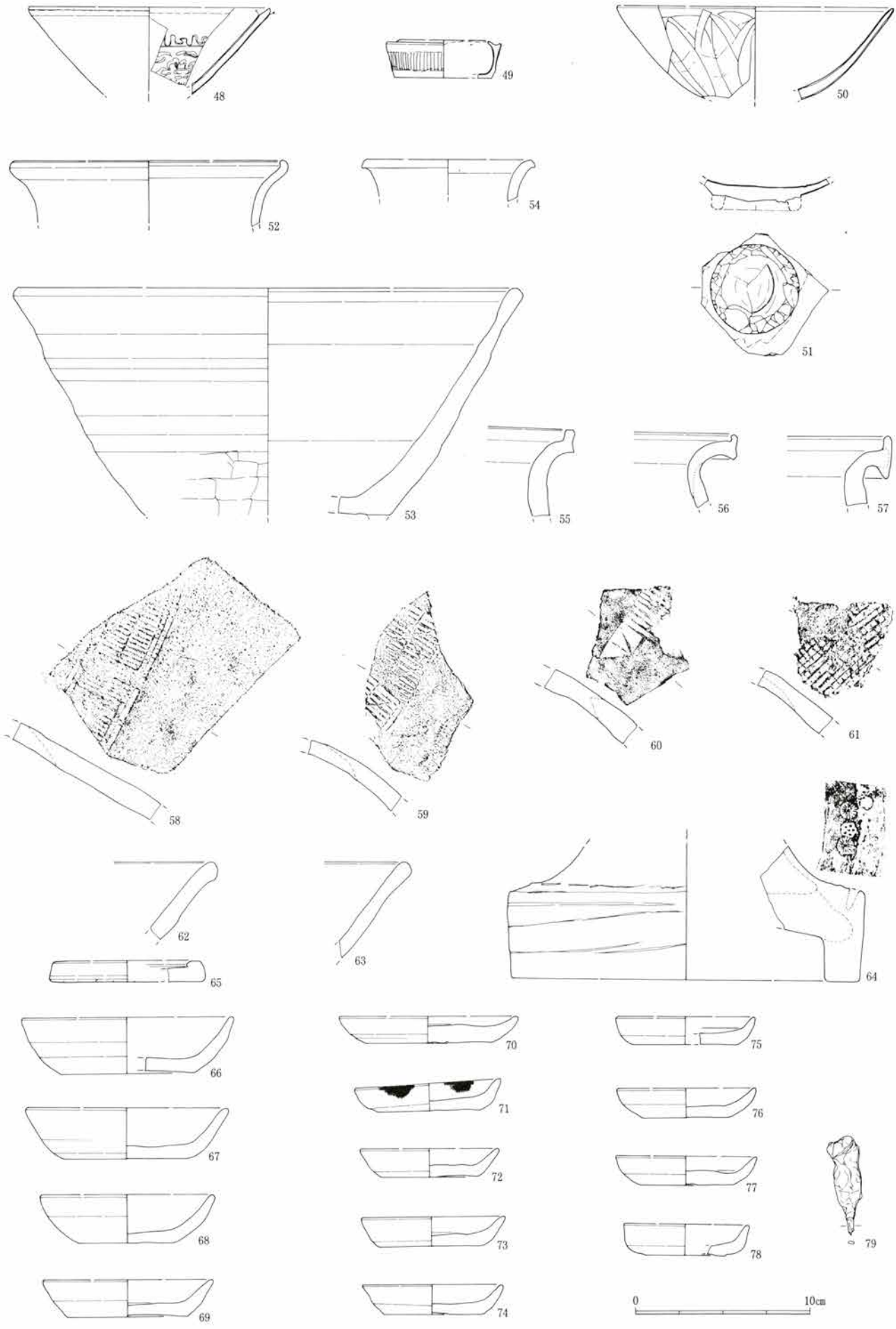


図13　第1面～第2面出土遺物

Ⅱ　第２面の遺構と遺物(図4)

第２面では溝状土壙１基、土壙６基、柱穴４穴、ピット７穴を検出した。調査区中央で溝状土壙(遺構26)を検出したが、この遺構26を界に東と西では地業の様相が異なる。東側は土丹粒の混じる硬く締まった黒灰色砂質土による地業で海抜6,7ｍ、西側は粗い土丹塊、砂質土の混入する暗褐色粘質土による地業で海抜約6,8ｍを測る。地表レベルは緩やかに西から東に向かって傾斜している。

遺構22（図14）

土壙。長軸で98㎝、短軸で90㎝、深さ41㎝を測り平面ほぼ円形を呈する。土壙底面に礎板を有するが、遺構22に伴っていたかどうかは不明。主軸方位はＮ－127°－Ｅ。

図15－80・81はてづくね。82はかわらけ。図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ(小)３点、てづくね(大)６点、常滑甕 ３点。

遺構26（図14）

溝状土壙。遺構の北側を遺構13によって若干壊されているが、長軸で228㎝、短軸で76～92㎝、深さ67㎝を測り、平面形は楕円形を呈する。湧水が激しかったため細かく観察できなかったのだが、土層堆積図(図14)を見てもわかるように、いくつかの土壙が切りあっていたとも考えられる。南側で切り合っている土壙まで含めると長軸で275㎝を測る。土壙の下層には茶色有機質土が堆積し木片が多く含まれていた。遺構26を界に東と西で地業が異なっていることから考えて、区画のための土壙であったのかもしれない。主軸方位はＮ－33°－Ｅ。

図15－83は常滑片口鉢Ⅱ類。84～86はかわらけ。85は灰褐色を呈し、全体に火熱を受けている。87は鉄製品。掛け金具。88～91は木製品。88は篦。89は箸。90は串状製品。91は用途不明。図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ(大)８点、かわらけ(小)５点、てづくね(大) 12点、てづくね(小)２点、常滑甕 ７点 、常滑片口鉢Ⅰ類２点。

遺構27（図14）

遺構26の上層で検出したピット。平面形で44×38㎝、深さ20㎝を測る。ほぼ円形を呈する。

図15－92は石製品砥石。産地不明。

遺構28（図14）

遺構27の下層で検出した柱穴。礎石の上に礎板が重ねて据えられていた。湧水が激しく、柱穴の形状は確認できなかった。遺物は出土していない。

遺構30（図14）

土壙。遺構の北を遺構13に、東を遺構26に切られていた。深さ約40㎝を測る。下層に茶色有機質土が約20㎝の厚さで堆積していた。遺構22に堆積土層は近似している。

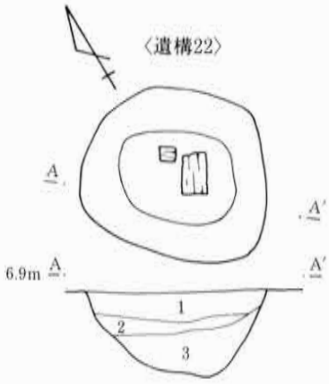
図15－93はてづくね。94はかわらけ。底部糸切痕を篦によってナデ消している。外面火熱を受ける。95は石製品砥石。西彼杵産滑石鍋の転用品。96は木製品円盤。曲物底板か？

図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ(大)９点、かわらけ(小)５点、てづくね(大)１点、てづくね(小)１点常滑甕 ２点、鋳型１点、瓦１点。

遺構31（図14）

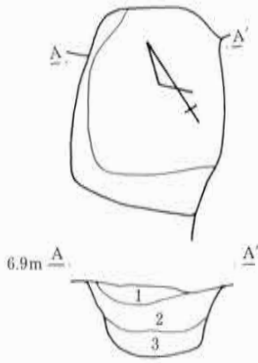
土壙。遺構の西側が調査区外に延びていたため、正確な形状、規模は不明。深さ13㎝を測る。

〈遺構22〉



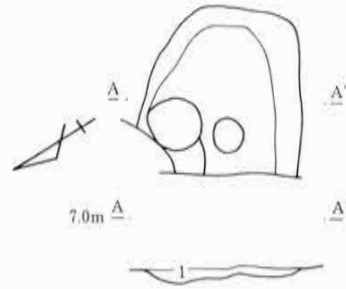
1.茶色弱粘質土　粘性高い、ほりなし
砂質土混入　貝・炭化物
2.茶褐色弱粘質土　有機質土　貝・炭化物・木片
砂質土、小土丹微量
3.茶色有機質土　砂質土　貝・炭化物・木片

〈遺構30〉



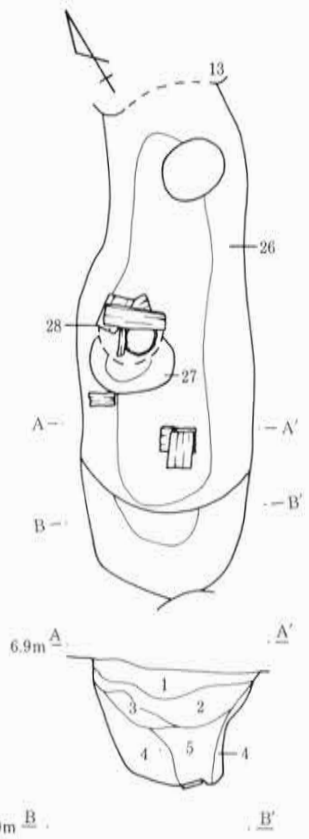
1.茶褐色弱粘質土　貝・貝粒子・炭化物・土丹(1～4cm)
2.褐色砂質土　弱粘質土　炭化物・貝・土丹粒
3.茶色有機質土　炭化物・貝粒子・木片

〈遺構31〉



1.褐色弱粘質土
木片・貝・砂質土
炭化物
土丹(0.5～12cm)混入
しまりあり

〈遺構26・27・28〉



1.茶褐色弱粘質土　砂質土・土丹・貝
炭化物・しまりあり
2.茶褐色弱粘質土　砂質土・貝粒子
3.青灰色砂質土　粘質土
4.茶色有機質土　木片
5.褐色弱粘質土　砂質土・有機質土・土丹(1～5cm)
貝・微量の炭化物
6.茶褐色弱粘質土　砂質土・土丹(1～3cm)・炭化物
しまりあり
7.茶褐色弱粘質土　砂質土・炭化物・粘性高い
8.茶色有機質土　炭化物・木片

〈礎板列〉

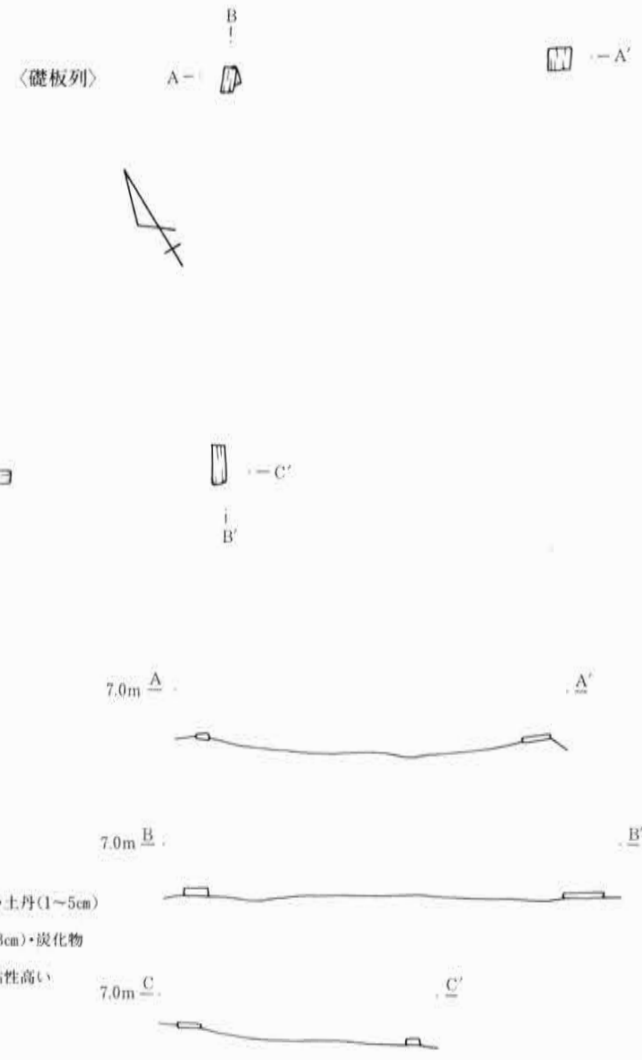


図14　第2面遺構(遺構22・26・27・28・30・31・礎板列)

図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ(大)６点、常滑甕３点、瓦質火鉢１点。

礎板列(図14)

調査区のほぼ中央で検出した礎板列である。１軒の建物址として考えたいのだが、礎板列の軸方向しか建物址を裏付ける確証が無く、遺構の広がりも調査区内では確認できなかった。それぞれの礎板の芯芯距離は、Ａ－Ａ′が178cm、Ｂ－Ｂ′が207cm、Ｃ－Ｃ′が120cmであった。

第２面面上で個別に図示しなかった遺構で発見された遺物の破片総数は、かわらけ(大) 13点、てづくね(大) ３点、常滑甕 3点、常滑片口鉢Ｉ類１点、瓦器質火鉢１点。

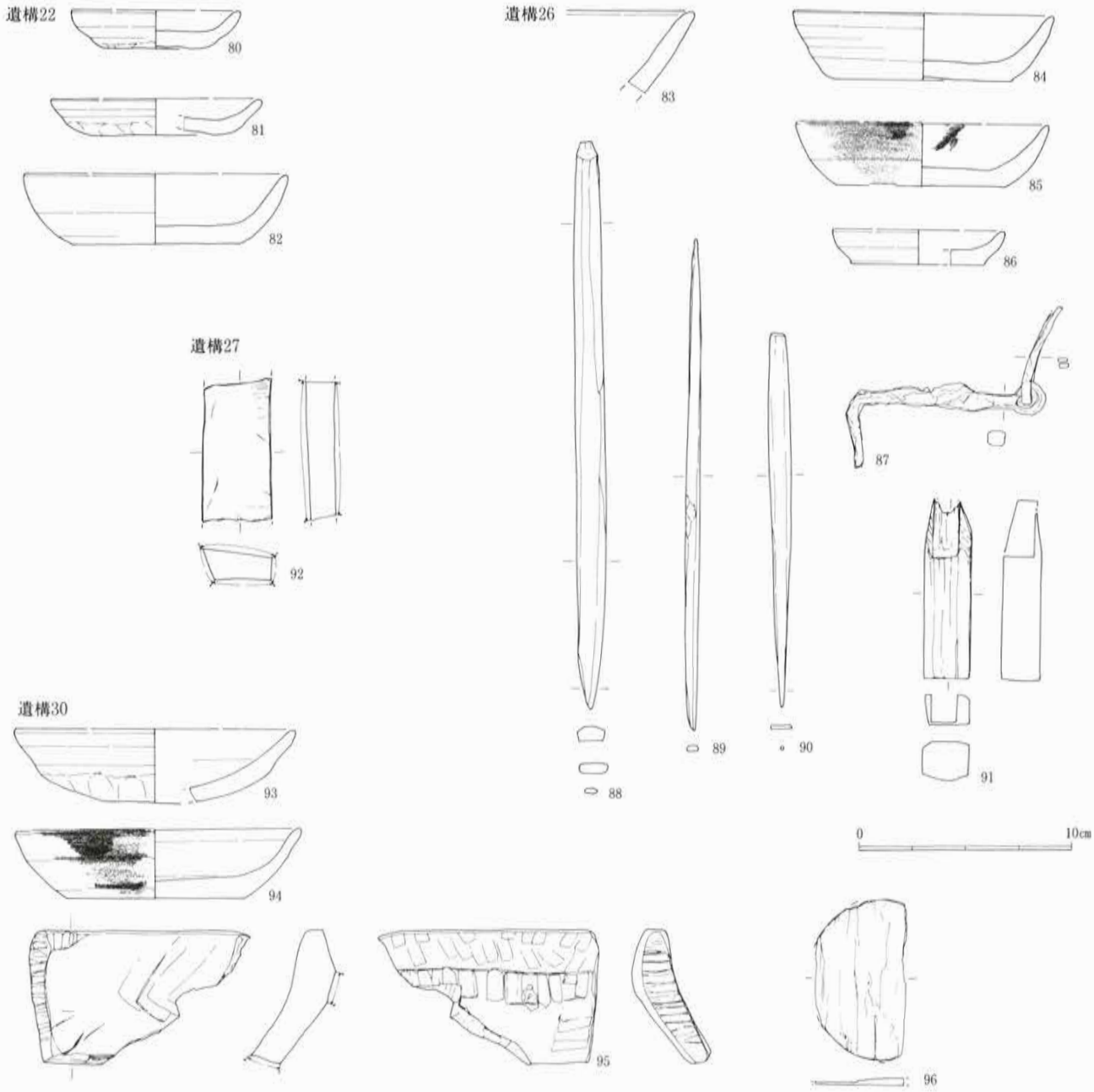


図15　第2面遺構出土遺物(遺構22･26･27･30)

第２面～第３面出土遺物(図16)

第２面構成土で発見された遺物である。

97は青磁劃花文碗。高台を残し全体を打欠いている。98は瓦器碗。外底面指頭による整形痕が残る。

内面側壁に横位の暗文、外面篦による押し込みあり。口唇部、内面は磨きが施される。99は常滑甕。100・101はてづくね。102～104はかわらけ。103は口唇部２箇所を打欠き、内外面に油煤痕残る。105は石製品硯。海部の一部が遺存している。原型は楕円形を呈していたと思われる。石材の産地は鳴滝か鳴滝近郊と考えられる。106は砥石。滑石鍋の転用品。煤付着。107は鉄製品、用途不明。108は木製品、串？

図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ(大) 48点、かわらけ(小) ６点、てづくね(大) 15点、てづくね(小) ２点常滑甕 22点、常滑片口鉢(特)類２点、青磁碗１点、青磁櫛掻文皿１点、青白磁小皿２点、鋳型16点。鋳型はワラ状の繊維を含んだ粗い胎土で、１点約３cm四方の小片で出土した。

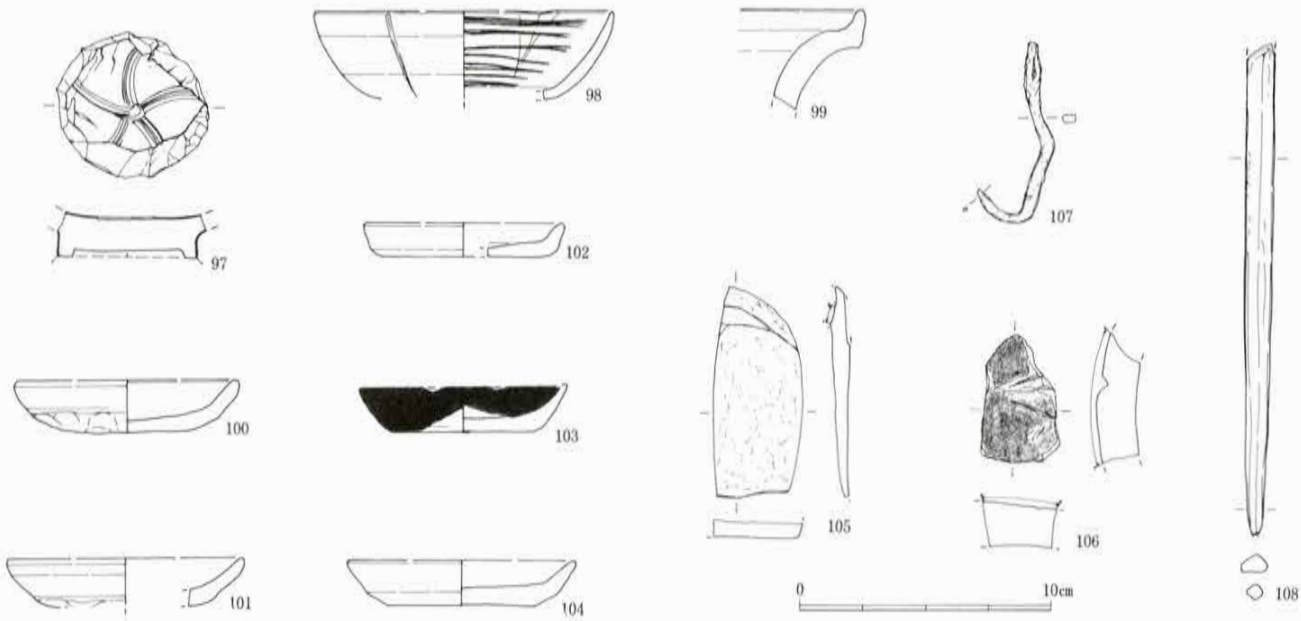


図16　第2面～第3面出土遺物

Ⅲ　第３面の遺構と遺物(図５～６)

第３面では土壙10基、柱穴18穴、ピット23穴を発見した。柱穴には礎板あるいは伊豆石を石材として利用した礎石を伴うものを数基検出しており建物址があったと思われるが、規模は不明である。前述したように、第３面は第３ａ面から第３ｄ面まで細分して示している。これは第３ａ面で一部確認していた土丹による地業が下層で広がり、何度かの造替えが行なわれている事を確認したためである。第３ｂ面・第３ｃ面に関しては、土丹版築土で発見した遺構面である。調査地表レベルは海抜6､5ｍから6､7ｍを測り西から東に向かって緩やかに傾斜している。土丹地業部分はスクリーントーン貼付で示している

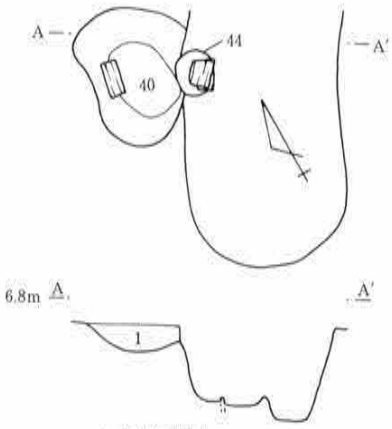
１　第３ａ面(図５)

第３ａ面では土丹地業を一部しか確認していない。確認した地業の西側で検出した遺構は地業を掘り込んでいる。また東側の遺構は第３ａ面から第３ｂ面の遺構を同時に検出してしまった可能性もある。多くの礎板・礎石の据えられた柱穴を検出したが、それぞれの関係を掴むことが出来ず、建物址を復元することは出来なかった。

遺構36（図５）

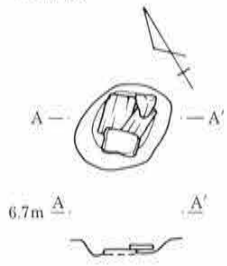
土壙。南側僅かに遺構の壁が残っていただけだったので規模、形状は不明である。深さ35cmを測る。堆積土は、砂質土を中心に茶色有機質土が混入していた。個別の遺構図は掲載していない。

〈遺構40〉

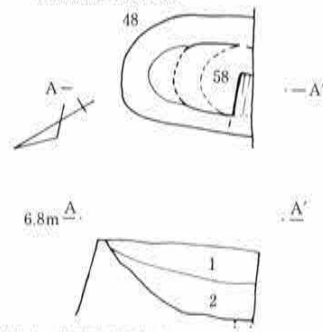


1.茶色有機質土
粘質土・炭化物土丹微量ながら混入

〈遺構43〉

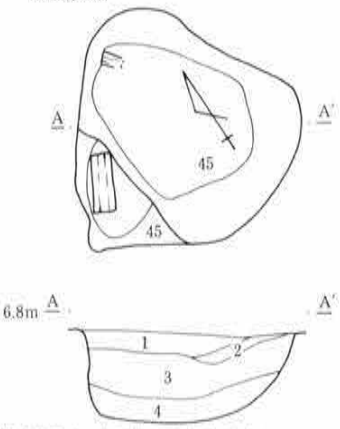


〈遺構48・遺構58〉



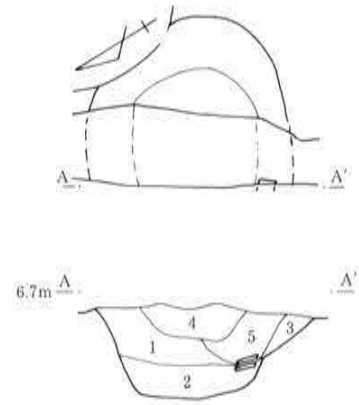
1.暗褐色砂質土　青灰砂暗褐色土がシミ状に含まれる
2.暗茶褐色土　有機質土多量の木片

〈遺構45〉



1.暗褐色砂質土　土丹粒・貝・灰褐色砂含む
2.灰褐色砂　細粒砂シミ状に褐色土を含む　緑青砂少量混入
3.暗茶褐色土　有機質土　木片多量
4.茶褐色土　有機質土　しまりあり多量の木片

〈遺構73〉

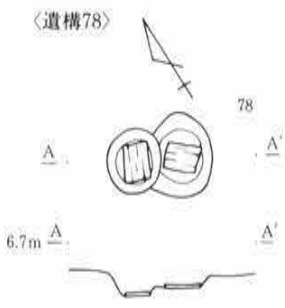


1.暗茶色粘質土　有機質土多量の木片
2.明黄褐色粘質土　有機質土層　極めて多量の木片
3.灰褐色砂　木片少量　暗褐色粘土を少量混入
4.黒灰色砂　土丹塊少量
5.暗茶褐色砂　木片土丹粒少量

〈遺構73〉

1.暗褐色砂質土　緑青砂を多く含む
2.暗褐色砂質土　やや粘性強い灰褐色砂混入
土丹粒　木片少量
3.暗茶褐色土　しまりやや弱い　有機質土に褐色の粘土ブロック
4.茶褐色土　有機質土　多量の木片

〈遺構78〉



〈遺構70〉

図17　第3a面遺構（遺構40・43・45・48・58・70・73・78・79）

図18－109は高麗青磁壺。雲文と雷文が線刻される。発色の良い良品である。外底部、高台畳付きにも釉がかけられる(12世紀前半)。110･111は常滑片口鉢Ⅰ類。112～115はかわらけ。116は 鉄製品釘。117～121は木製品。117は用途不明楔か？ 118～121は串状製品。図示出来なかった遺物は、かわらけ(大) 10点、てづくね(大) 1点、てづくね(小) 6点、常滑甕 8点、木製品箸・草履芯。

遺構40（図17）

土壙。遺構42･44に切られる。長軸で75cm、短軸で約55cm、深さ23cmを測る。主軸方位はN-5°-E。遺物は出土していない。

遺構43（図17）

調査区の東で確認した、3枚の礎板と伊豆石を遺構内に持つ柱穴である。3枚の礎板は接合出来、1枚の板を割って柱穴内に据えたようである。伊豆石は礎石として使うには小さく、根固めの役を負っていたと思われる。

図18－122は常滑片口鉢Ⅰ類。図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ(小) 1点、てづくね(大) 1点、白磁皿1点

遺構45（図17）

土壙。遺構検出時に礎板を伴うピットを遺構45が切っている事を確認したのだが、平面プランではひとつの土壙として考えていたため、遺物は同遺構内出土として扱っている。長軸で127cm、短軸で83cm 深さ53cmを測る。遺構の下層は茶色有機質土が厚く堆積していた。主軸方位はN-12°-W。

図18－123・124は山茶碗。124は内面油煤痕あり、外面も煤ける。図示出来なかった遺物は、かわらけ(大) 2点、てづくね(大) 17点、てづくね(小) 1点、常滑甕 2点、青磁蓮弁文碗1点、木製品草履芯・箸

遺構48（図17）

土壙。南側の遺構58に切られる。深さ26cm、規模は不明である。土壙下層には、約15cmの厚さで有機質土が堆積していた。遺構58は平面プランで確認できなかったため図化した形状は推定である。

図18－125はかわらけ。図示出来なかった遺物はかわらけ(大) 2点、てづくね(小) 1点、常滑甕3点。

遺構70（図17）

調査区東端で確認したピットである。長軸で34cm、短軸で18cm、深さ7cmを測る。

図18－126はかわらけ。図示出来なかった遺物破片数はかわらけ(小) 1点。

遺構73（図17）

土壙。調査区外に遺構が延びているため、正確な規模、形状は不明。深さ55cmを測る。含土は青灰色砂を含む茶色有機質土で構成されている。

図18－127～136は木製品。127・128は草履芯。129は灯明台部品。130は杓子。131は漆工具、篦。132は箸。133～136は串状製品。図示出来なかった遺物は、てづくね(大) 1点。常滑片口鉢Ⅰ類1点。

遺構78（図17）

礎板を伴う柱穴。遺構78の周りには、幾つかの礎板を伴う柱穴を確認しており建物址があったことを想像させるが、調査面積が狭いためそれぞれの柱穴のつながり、関係などは確認できなかった。図示出来なかった遺物破片数はてづくね(小) 1点、鋳型2点。

遺構79（図17）

土壙。遺構45に切られる。長軸で95cm、短軸で63cm、深さ38cmを測る。主軸方位はN-2°-W。

図19－137は常滑甕、138は常滑片口鉢Ⅰ類。139はてづくね。図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ(大) 2点、てづくね(大) 6点、常滑甕3点。

遺構80（図５）

ピット。長軸で42cm、短軸で28cm、深さ38cmを測る。含土は暗褐色砂質土。緑青砂、茶色有機質土、土丹粒を含む。個別の遺構図は掲載していない。

図19－140はてづくね。141･142は木製品。141は織機用具、手押木。142は串状製品。図示出来なかった遺物破片数は、てづくね（大）２点。

遺構81（図17）

ピット。調査区外に延びているため、規模、形状は不明。深さ13cmを測る。含土は暗褐色砂質土。貝片を多く含む。個別の遺構図は掲載していない。

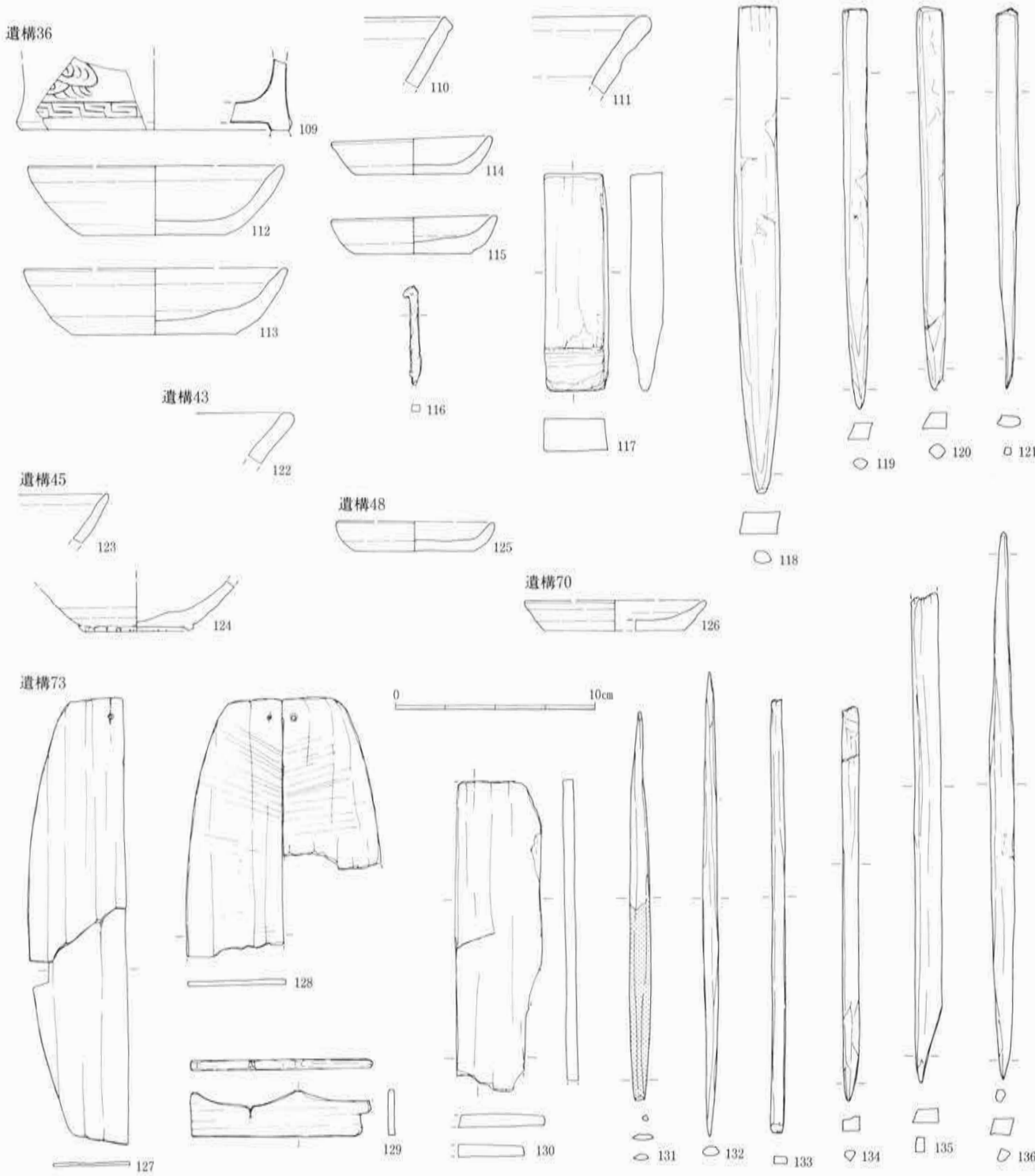


図18 第3a面遺構出土遺物

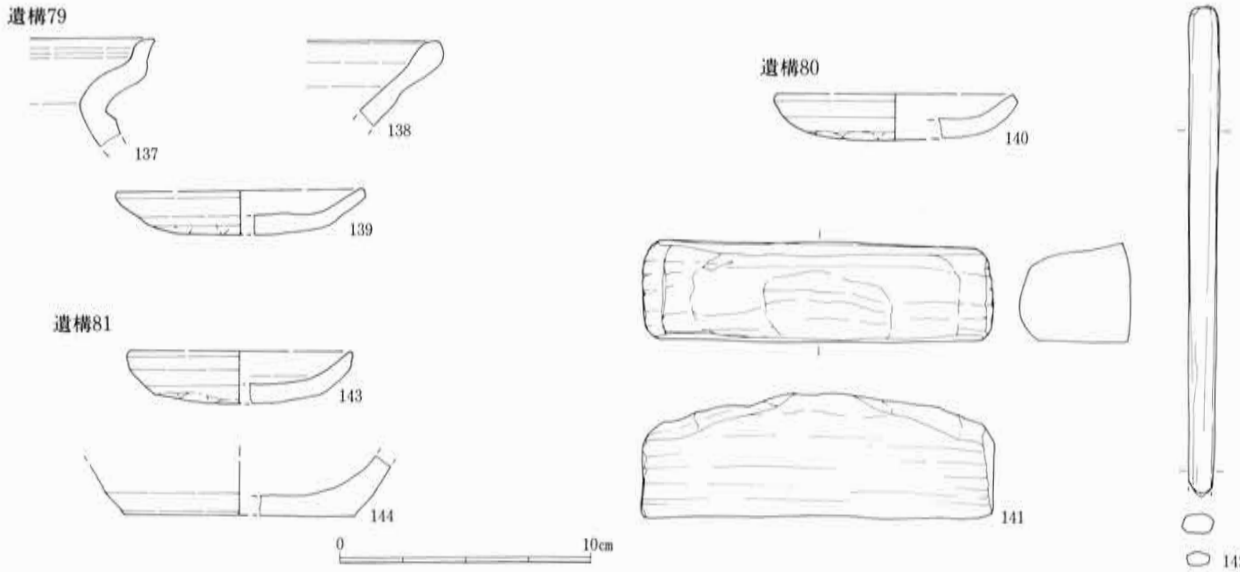


図19 第3a面遺構出土遺物

図20 第3a面・第3a面～第3b面出土

図19－143はてづくね。144はかわらけ質土器。胎土褐色を呈し、内底見込みにナデあり。外底部糸切り。篦状工具によって浅く高台部を削り出している。図示出来なかった遺物破片数はかわらけ(大)１点、てづくね(小)１点、常滑甕１点。

第３ａ面の遺構内から出土した図示できなかった遺物破片数はかわらけ(大)６点、てづくね(大) 15点、常滑甕６点、瓦器碗底部片１点。

第３ａ面出土遺物(図20)

第３ａ面面上出土遺物である。153はかわらけ。

第３ａ面～第３ｂ面出土(図20)

第３ａ面地業構成土から出土した遺物である。154は鉄製品釘。第３ａ面地業構成土出土で図示出来なかった遺物の破片数は、かわらけ(大)４点、てづくね(大)４点、常滑甕１点。

２　第３ｂ面(図５)

第３ｂ面は第３ａ面で確認した土丹版築が広がることを確認した。上層の遺構群に壊されてしまったためか不整形ではあるが、小土丹と土丹粒による丁寧な地業である。また、部分的に版築面上面では炭化物が集中している箇所があった。その他に土壙１基、礎板の伴う柱穴２穴を発見、海抜6.6ｍを測る。

遺構87（図５）

個別の遺構図は提示していない。平面円形を呈し、30×32cm、深さ24cmを測る。底面に礎板が据えられる。図示出来なかった遺物破片数はてづくね(大)２点。

遺構88（図21）

土壙。82cm×88cm、深さ30cmを測り、やや四角形を呈する。遺構底面はやや大きな土丹を多く含み硬く締まっていた。主軸方位はN-33°-E。

図21－147は常滑甕。148はてづくね。149はかわらけ。内外面共に火熱を受けたためか黒く変色。図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ(小)５点、てづくね(大)８点。

遺構89（図21）

深さ約18cmを測る。礎板が据えられていたと思われるが、柱を抜き取るときに撹乱されたためか、底面より上層で確認した。

図21－150は串状木製品。図示出来なかった遺物破片数はてづくね（大）２点。

第３ｂ面面上出土遺物（図21）

第３ｂ面面上出土遺物である。151はてづくね。

図示出来なかった遺物破片数はてづくね（大）10点、てづくね（小）１点、常滑甕４点。

第３ｂ面～第３ｃ面出土遺物（図21）

第３ｂ面地業層構成土から出土した遺物である。152～155は木製品。152は篦。153は串状製品。154･155は箸。

第３ｂ面地業層構成土出土で図示出来なかった遺物破片数は、かわらけ（大）１点、かわらけ（小）１点、てづくね（大）３点、てづくね（小）４点、常滑甕 ８点、木製品箸・草履芯。鋳型１点。

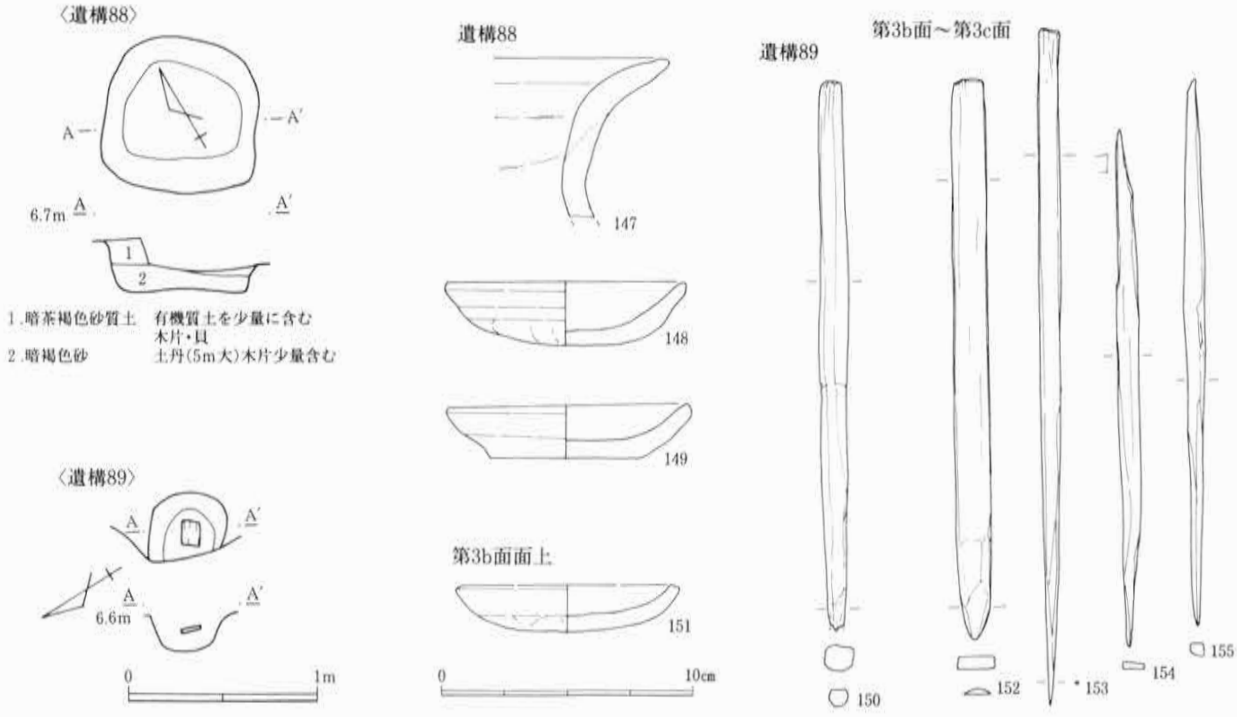


図21　第3b面遺構・第3b面遺構・面上・第3b面～第3c面出土遺物

３　第３ｃ面（図６）

第３ｂ面から第３ｃ面上に堆積していた土丹による版築を取り除き、青灰色砂層上面で検出した遺構面である。柱穴５穴、ピット２穴、杭列を検出した。海抜6、55ｍを測る。

遺構90（図22）

柱穴。底面に17、5cm×8、5cm、厚さ5、0cmを測る伊豆石を置き、礎板を置いている。鮑を柱穴底面で確認している。地鎮等の意味が含まれているのかも知れない。

図23－156は木製織機用具、手押木。

杭列（図22）

調査区の南側で検出した杭列である。杭と杭の間は芯芯で110cmを測る。検出した杭はいずれも地中に刺さった先端を荒くではあるが尖らせていた。主軸方位はN-119°-E。

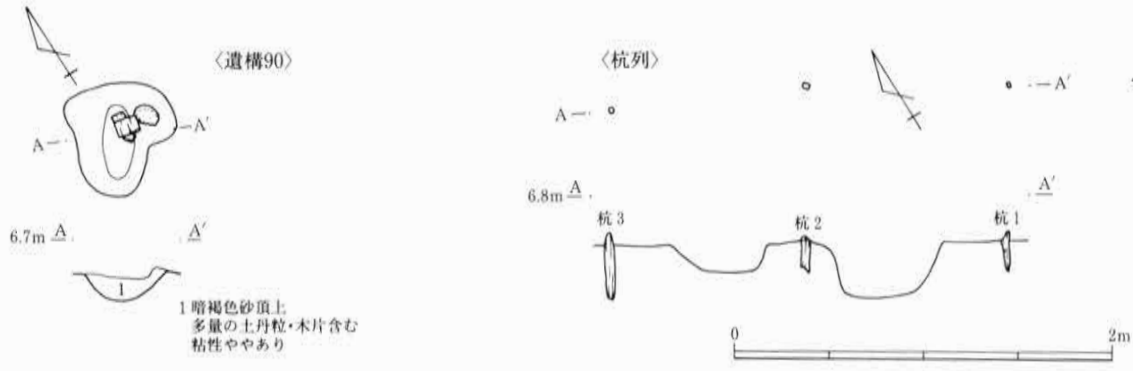


図22 第3c面遺構

個別に図示しなかった、第３ｃ面の遺構内から出土した遺物破片数はかわらけ(大)１点、かわらけ(小)１点、てづくね(小)１点、常滑甕２点、鋳型５点。

第３ｃ面～第３ｄ面出土遺物(図23)

157は青白磁合子蓋。158はてづくね。大きく変形している。

図示出来なかった遺物破片数はかわらけ(大)３点、かわらけ(小)６点、てづくね(小)４点、常滑甕 ５点、鉄製品１点。

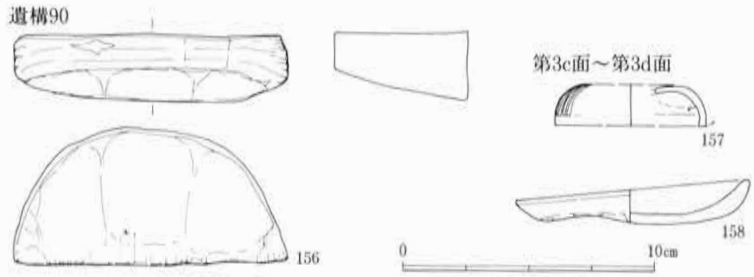


図23 第3c面遺構・第3c～第3d面出土遺物

４　第３ｄ面(図６)

第３ｄ面は海抜6.45ｍを測り、平坦である。検出した遺構は土壙４基、柱穴８穴、ピット８穴。

この面では、土丹による版築は確認出来ていない。

遺構101（図24)

柱穴。長軸で70cm、短軸で50cm、深さ26cmを測る。土壙底面に27×20.5cm、厚さ12cmの伊豆石を置き礎石の上に礎板を据えている。主軸方位はＮ－54°－Ｗ。

図25－159は鉄製品釘。図示出来なかった遺物破片数は、てづくね(大)２点。

遺構110（図24)

柱穴。長軸で94cm、短軸で65cm、深さ36cmを測る。土壙底面に22×20cm、厚さ12cmの伊豆石を置き、礎板を置いている。遺構110の東に、遺構101という伊豆石、礎板を伴う楕円形を呈する柱穴がある。この遺構101と遺構110の芯芯の距離は435cmを測る。柱穴の形状、規模、含土から見て、関連のある柱穴 と考えている。主軸方位はＮ－54°－Ｗ。

図25－160は鉄製品釘。図示出来なかった遺物破片数はかわらけ(大)１点、かわらけ(小)１点、てづくね (小)１点、常滑甕２点。

遺構112（図24)

礎板を伴う柱穴。遺構108に切られる。35×32cm、深さ24cmを測りほぼ円形を呈する。遺構内に遺物は出土していない。

個別に図示しなかった第３ｄ面の遺構出土の遺物の破片数は、てづくね(大)１点、常滑甕３点。

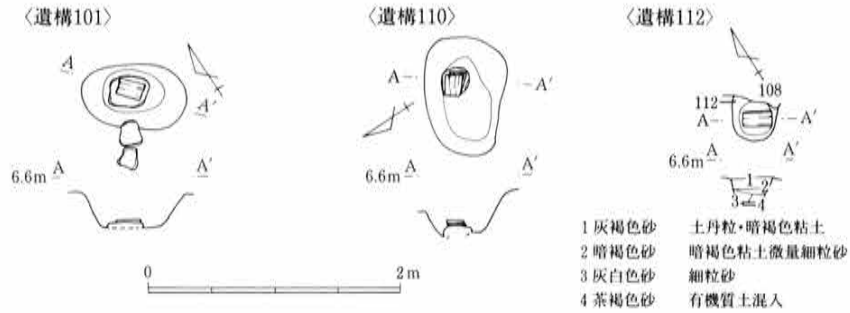


図24　第3d面遺構

第３ｄ面～第４面出土遺物(図25)

第３ｄ面地業層構成土から出土した遺物である。161は青白磁合子。162はチャート片。163・164は鉄製品釘。165は木製品栓。166は箸。図示出来なかった遺物破片数はかわらけ(大)２点、かわらけ(小)２点、てづくね(大) 49点、てづくね(小)７点、常滑甕１点、常滑片口鉢Ⅰ類１点。また、遺存状態が悪く取り上げることが出来なかったが、烏帽子(図版７)がほぼ完形のまま構成土中より出土した。

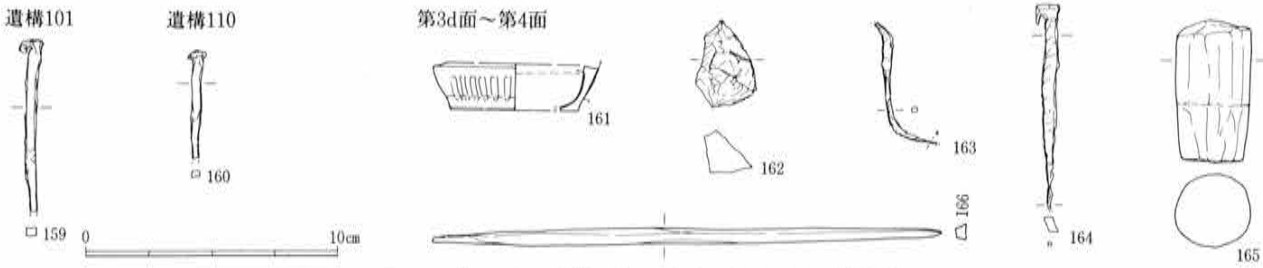


図25　第3d面遺構・第3d面～第4面出土遺物

Ⅳ　第４面の遺構と遺物(図７)

第４面は調査区の西で海抜6.1ｍ、東で6.2ｍを測り、東から西に向かって緩やかな傾斜をしている。第４面ではピット27穴、柱穴２穴、礎板を検出した。多くの遺構を検出しているが、それぞれの関係は不明である。また、上層遺構に比べて遺物の出土量が大きく減する。

遺構125（図26）

ピット。50×45cm、深さ7cmを測り、ほぼ円形を呈する。含土は灰色砂を多く含む暗茶褐色弱粘質土。木片混入。

図27－167はてづくね。

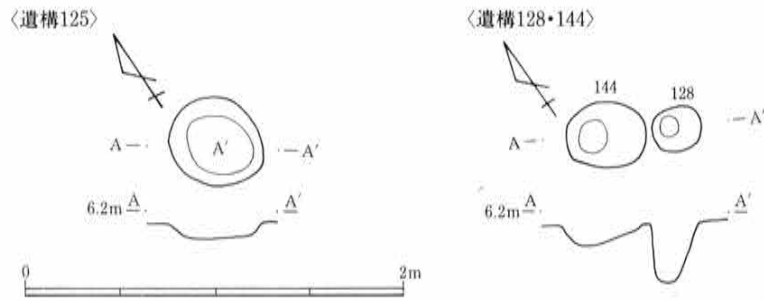


図26 第4面遺構(遺構125・128・144)

遺構144（図26）

ピット。長軸42cm、短軸35cm、深さ10cmを測り、平面楕円形を呈する。含土は暗茶褐色弱粘質土。木片含む。

図27－168はてづくね。

個別に図示しなかった第４面の遺構出土の遺物破片数はてづくね(大)５点。

遺構144（図26）

ピット。長軸42cm、短軸35cm、深さ10cmを測り、平面楕円形を呈する。含土は暗茶褐色粘土。木片を含む。

図27－168はてづくね。

個別に図示しなかった第４面の遺構出土の遺物破片数はてづくね(大)５点。

第４面面上出土遺物(図27)

第４面面上出土遺物である。169はかわらけ。170は木製品、部材。図示出来なかった遺物は、かわらけ(大)３点、てづくね(大) 29点、てづくね(小)２点。

第４面～第５面出土遺物(図27)

第４面構成土から出土した遺物である。171は白かわらけ、てづくね。胎土は白色を呈し、精緻で硬質。コースター型。172は鉄製品釘。図示出来なかった遺物破片数はかわらけ(小)２点、てづくね(大) 46点 てづくね(小)７点、青磁劃花文碗１点。

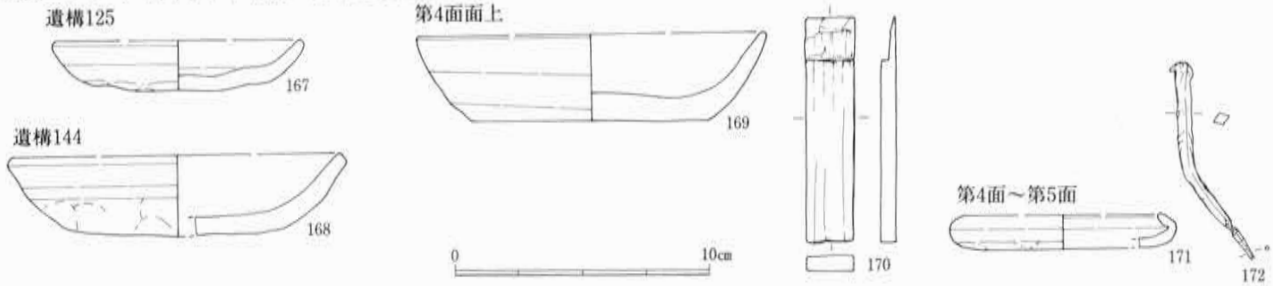


図27　第4面遺構·面上·第4面～第5面出土遺物

Ⅴ　第５面の遺構と遺物(図７)

第５面は海抜6.1ｍを測る。調査区中央辺りがやや落ち込むが、全体的に平坦である。土壙２基、柱穴３穴、ピット７穴を検出した。発見した遺構数だけを見ると上層に比して疎な感じがするが、掘立柱建物址が建っていたと思われる。建物の規模は不明であるが、柱穴の形状などから見て全体の規模は比較的大きなものと思われる。また、個別に提示しなかった遺構からは、てづくね(大)２点・破片でてづくね(小)４点が出土したが、出土遺物数はこの面になって大きく減じた。湧水量が多く調査区壁の 崩落などの危険を感じたため、調査は第５面を確認して終了した。調査区四周に掘った側溝から、第５面以下にも地業層・遺構面が遺存することを確認しているが、未調査である。

遺構147 (図28)

礎板を伴う柱穴。60×50cm、深さ47cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。含土は灰褐色砂。有機質土を含む。遺物は出土していない。

遺構150 (図28)

礎板を伴う柱穴。62×59cm、深さ34cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。含土は明灰褐色砂。暗褐色粘質土を少量含む。遺物は出土していない。

遺構153 (図28)

礎板を伴う柱穴。50×51cm、深さ38cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。含土は多量の灰褐色砂を含む暗褐色弱粘質土。

図示出来なかった遺物破片数はてづくね(大)２点。

狭い調査区の中で判断する事は難しいが、遺構147・150・153は１軒の建物址を構築する柱穴であったと考えている。遺構150の礎板と遺構153の礎板の芯芯距離は222cmであった。調査区外に延びてしまっているため、建物址の規模等は不明。建物の主軸方位は遺構150と遺構153を基準に考えて、N-33°-E。

遺構152（図28）

土壙。調査区外に延びてしまっているため規模は不明。長軸で最大幅170cm、短軸で90cm深さ13cmを測る浅い土壙である。遺構150に切られる。主軸方位はN-33°-E。てづくね(大)の破片が１点出土している。

個別に図示しなかった第５面面上出土の遺物破片数はてづくね(大)２点である。

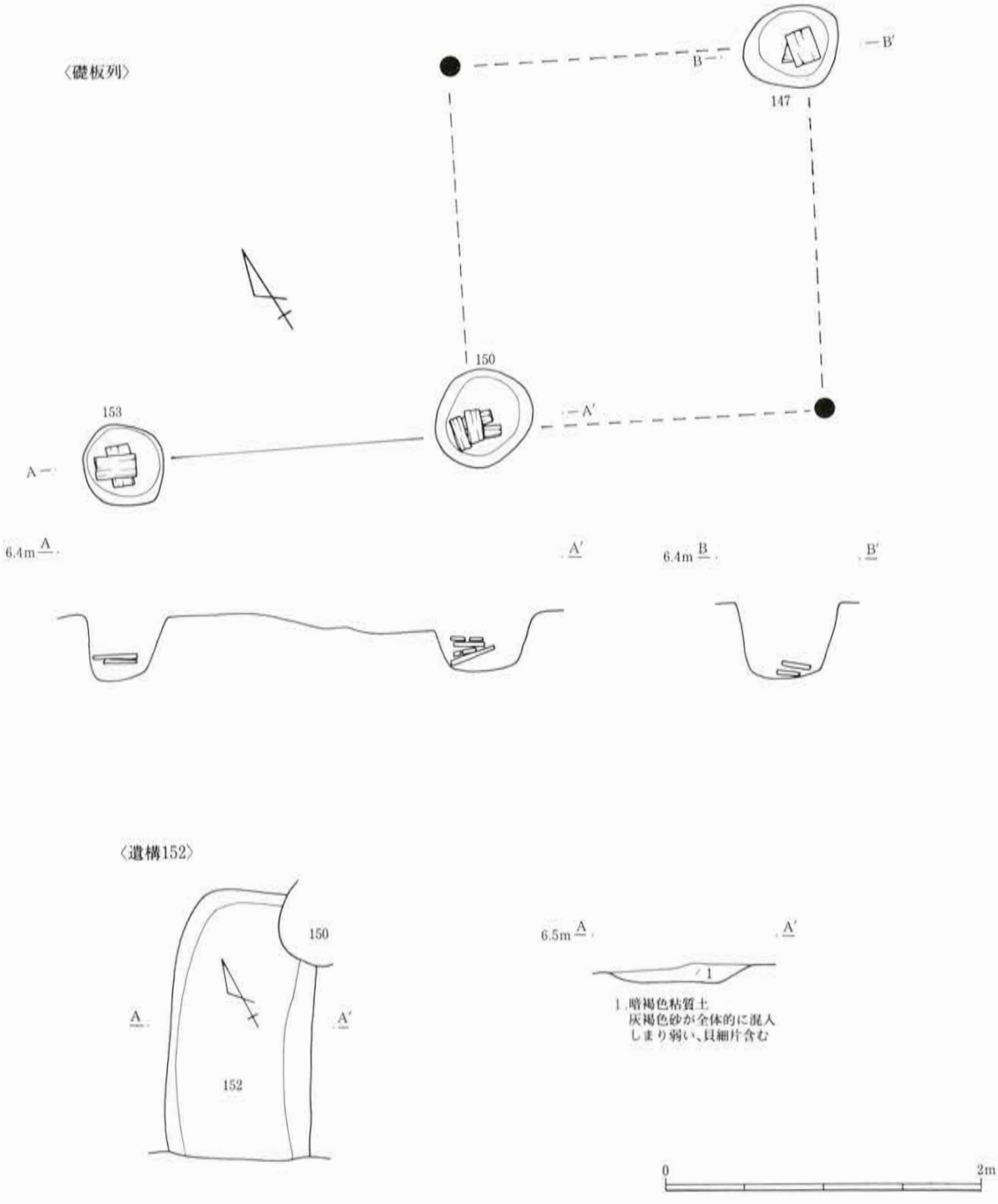


図28 第5面遺構

撹乱・側溝・表土掘削時出土遺物(図29)

176～186は側溝出土遺物。176・177は常滑片口鉢Ⅰ類、178は常滑片口鉢Ⅱ類鉢。179～182は常滑甕。184～185はかわらけ、183はてづくね。185は胎土橙色を呈し、内底ナデあり、底部糸切痕を篦によってナデ消している。186は串状木製品。図示出来なかった側溝出土遺物は、かわらけ(大) 29点、かわらけ(小) 1点、てづくね(大) 6点、てづくね(小) 5点、常滑甕51点、常滑片口鉢Ⅱ類2点、白磁口兀皿1点、青磁蓮弁文碗1点、青白磁合子蓋1点、渥美甕4点。

173～175は撹乱出土遺物。173は円盤。かわらけの底面を使用している。174は用途不明・木製玉。孔が球中央に開けられている。貫通はしていない。175も木製玉。174に比べて、成形が丁寧である。

189～187は表土掘削時出土。187は常滑片口鉢Ⅰ類。188はかわらけ。189は瓦である。

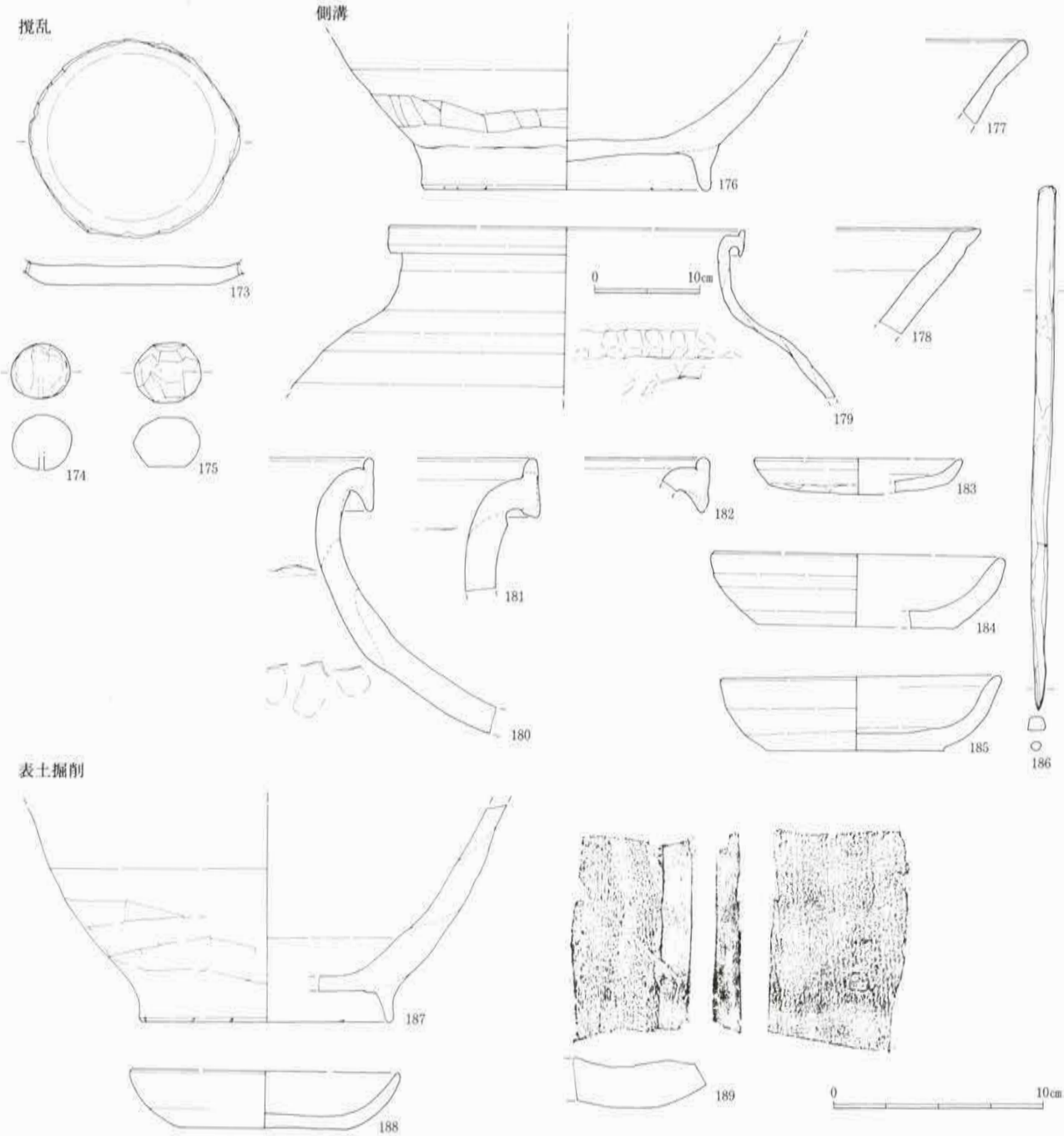


図29 撹乱・側溝・表土掘削時出土遺物

第4章　まとめ

本調査では、１～５面にわたる遺構面を検出した。「能蔵寺遺跡」内の調査例としては僅か２件目ではあるが、近隣の調査成果を含めて若干の考察を加え、まとめとしたい。

検出した遺構と遺物

本報告で第１面から第５面に分けて示した遺構面は、出土した遺物の年代観および、遺構の構築状況から、遺構構築年代を３期に分けて考えることが出来ると思われる。

１期は第１面が相当する。調査面積の狭さから断定は難しいが、調査区内を東西に走る溝によって分けていた区画の東限、あるいは西限を南北に走る溝によって区画し直していると思われ、溝によって短期間に地割りが変化した様相が想像される。遺物はかわらけ・てづくねをはじめに、常滑・瀬戸・舶載品と多種にわたって出土し、出土量も多い。報告した第１面面上出土遺物の中にてづくねは含まれていないが、破片では、第１面の遺構内および面上で、大・小合わせてかわらけ141点、てづくね31点。第１面構成土からは、かわらけ139点、てづくね２点が出土しており、かわらけは 所謂薄手で精良な粉質土を胎土に持つ型が破片でも数点出土しているが、多くは器壁が厚く、整形が粗雑な型が目立った。舶載品は多種出土している。なかでも、黄釉の盤は鎌倉市街地の遺跡の調査では数点報告例があるとはいえ、他の舶載陶磁器に比べると出土は稀な遺物である。（近隣の長勝寺遺跡（図1 －3地点）では12点のまとまった出土例がある。）１期の年代観は出土したかわらけから13世紀後半から14世紀初頭が与えられる。

２期は第２面と第３面が相当する。２期では、土壙・柱穴・ピット等の遺構とともに短期間に造り替えられたと思われる土丹地業が確認された。調査面積の関係から正確な形状・規模は不明である。構築方法として、大小の土丹を築き固め上面は平坦に仕上げられているが、地業の周囲に土留めをした様子が見られないという特徴がある。第２面で確認した土丹による地業は、溝状土壙（遺構26）を界に東と西で構築土の違いはあるものの、細かく砕いた土丹による地業である。地業を掘り込んだピット・柱穴が確認される。第３面で確認した土丹地業は、ａからｄに分けて示したように、同一の場所で、短期間に造り替えを行なっていたようである。地業の周囲を土丹あるいは鎌倉石などによって固めるといった様子は今回確認した範囲では見られない。出土遺物は、第１面に比べると出土量が減り、常滑、青磁等が数点混じるが、殆どはかわらけ・てづくねであり、てづくねの比率が高い。出土した舶載磁器のなかでは鎌倉市街地遺跡全体を見ても出土例の少ない高麗青磁の梅瓶（註1）が出土している。また、１期と２期からは数点であるが、鋳型が出土しており、調査地あるいは調査地近辺で鋳造が行なわれていたと考えられる。

近隣の長勝寺遺跡（図1-3地点）の調査成果で、13世紀末から14世紀前半に至る時期の遺物と共に『土間状遺構』群が発見されている。この遺構の構築方法は『地表に盛り土をし、その上に細かく砕いた土丹を敷きつめ、これを付き固めて平坦な、地表より10～30㎝高い土間を作った』とあり、土間の周辺部に部分的に土留めをしているものもあるようだが、殆どは、『上面からゆるやかな斜面をなして消失してしまう』とある。また、特徴として『短期間の後に廃棄されている』『新造の土間は、廃棄された土間と時間的に連続して作られたらしい』『土間の内部に柱穴上のピットがあり、上屋の存在が予想される』等を上げている。長勝寺遺跡の報告者は、この遺構を屋地内の非常に小規模な小屋状建物と性格づけて

いる。狭い範囲で判断することは難しいが、本調査地で発見した土丹地業はこの『土間状遺構』と構築方法等類似点も多く、同じ性格を持った遺構と考えられないだろうか。最もその場合、土丹地業に続く礎石建物、あるいは掘立柱建物といった屋敷的な建物が調査区外に広がると想定しての事ではあるが。

２期の年代観はかわらけ・てづくねから、13世紀中頃が与えられる。

３期は第４面・第５面が相当する。

第４面はしっかりとした地業を確認することは出来なかったが、複数のピットを検出した。それぞれのピットの関係・性格は今回の調査範囲では確認できず、生活を営んだ痕跡としか言えない。

第５面は、礎板を底面に据えた柱穴を３基確認し、規模・軸方位は不明であるが、掘立柱建物が建っていたと考えられる。遺物は図示した遺物以外では、第４面でかわらけの破片が４点、てづくね26点、第４面構成土からてづくね53点、青磁の劃花文碗が１点、第５面でてづくね９点と、上層に比べ極端に減するため、遺物からも３期の様相を判断することは難しい。３期はてづくねの年代観から、13世紀初頭から13世紀第２四半期が与えられる。

遺跡の変遷

本調査地の北に東西に走る大町大路の南は、本調査地周辺を含め、歴史的環境から墓域の広がる地域と考えられる。本調査では南北朝・室町期の寺院址、或は墓域に関連した調査成果も得られるものと期待していたが、現代の造成によって、上層の遺構は削平を受けたためか14世紀以降の生活面を発見することは出来なかった。また、調査の安全を考慮し第５面より下層は確認出来なかったため、13世紀以前の様相も明らかにすることは出来なかった。。

調査地の北東、名越一帯には建長五年(1253)に鎌倉に入り布教をした日蓮の草庵跡と伝えられる地が多く残っているが、前述した「長勝寺」はその一つである。寺伝に因ると、草創は日蓮宗に帰依した石井長勝という武士の屋敷跡に建てられた寺であるとも、京都本国寺旧地に日静が貞和元年(1345)に寺を再興したとも伝えられる。「長勝寺遺跡」の調査成果から、寺が草創される以前に御家人等の有力者の存在が考えられる礎石建物とともに、屋地内に付随施設として構築された小町屋的な建物(土間状遺構)が立ち並び、砥石・滑石スタンプといった遺物の出土から、工人の存在を示唆している。

今回確認した３期にわたる遺構から、遅くとも13世紀初頭には調査地には生活面が構築され、13世紀半ば以降から、土丹地業を持つ小規模な建造物が短期間に繰り返し構築された様子が伺え、13世紀後半或は14世紀初頭に至まで、当地で活発に生活を営んでいた様子が確認できた。また、出土遺物からは、小片ではあるが黄釉の盤・高麗青磁の梅瓶と言った舶載品と、数点の鋳型の出土が「長勝寺遺跡」と同様に、有力者の屋地と工人の存在を伺わせる。

＜註＞　註１　姜大奎氏(韓国国立博物館)から、「破片ではあるが、雲文の丸みと雲文下の波状に線刻された文様が12世紀前半の特徴を表している。」とのご教示をいただいた。

＜参考文献＞　・『長勝寺遺跡』㈱まくら春秋社
・『鎌倉市史』（総説編）（社寺編）(株)吉川弘文館

法量表

図No.	No.	出土地	種　別	口径	底径	器高	図No.	No.	出土地	種　別	口径	底径	器高
図10	1	1面 遺構7	鳴滝産仕上砥	長(3.2)	幅3.5	厚(0.5)	図11	33	1面 遺構14	轆轤成形かわらけ	7.6	5	1.55
図10	2	1面 遺構9	瓦質火鉢				図11	34	1面 面上	鉄釘	長(4.9)	幅(1.1)	厚(1.0)
図10	3	1面 遺構9	轆轤成形かわらけ	(13.4)	8.4	3.7	図12	35	1面 面上	常滑片口鉢Ⅱ類			
図10	4	1面 遺構9	轆轤成形かわらけ	7.2	5.2	17	図12	36	1面 面上	常滑片口鉢Ⅱ類			
図10	5	1面 遺構9	轆轤成形かわらけ	7.2	5.0	2.0	図12	37	1面 面上	轆轤成形かわらけ	(12.6)	(8.2)	4.4
図10	6	1面 遺構9	鳴滝産仕上砥	長(1.5)	幅3.7	0.8	図12	38	1面 面上	轆轤成形かわらけ	(10.8)	5.6	3.0
図10	7	1面 遺構9	泥岩製不明品				図12	39	1面 面上	轆轤成形かわらけ	(10.2)	(5.6)	(3.8)
図10	8	1面 遺構9	銭　皇宋通寶	北宋　初鋳1038年篆書			図12	40	1面 面上	轆轤成形かわらけ	(7.2)	5.0	1.7
図10	9	1面 遺構13	舶載黄釉盤			(18.0)	図12	41	1面 面上	轆轤成形かわらけ	8.0	4.4	1.85
図10	10	1面 遺構13	山茶碗	(15.4)	(6.6)	(4.9)	図12	42	1面 面上	轆轤成形かわらけ	7.8	6.0	1.45
図10	11	1面 遺構13	常滑甕				図12	43	1面 面上	鳴滝産仕上砥	長(0.8)	幅3.8	厚1.0
図10	12	1面 遺構13	常滑甕				図12	44	1面 面上	火打石(チャート)	長1.8	幅0.9	厚(0.6)
図10	13	1面 遺構13	常滑甕				図12	45	1面 面上	鉄釘	長(5.9)		
図10	14	1面 遺構13	常滑片口鉢Ⅱ類				図12	46	1面 面上	銭　皇宋通寶	北宋　初鋳1038年真書		
図10	15	1面 遺構13	鍔釜				図12	47	1面 面上	銭　景祐通寶	北宋　初鋳1034年真書		
図10	16	1面 遺構13	瓦質火鉢	(35.2)	26.8	10.3	図13	48	1面-2面	青白磁口兀碗	(14.0)		
図10	17	1面 遺構13	手捏成形かわらけ	(11.8)		(3.0)	図13	49	1面-2面	白磁合子	(5.0)		
図10	18	1面 遺構13	轆轤成形かわらけ	(7.0)	4.6	(1.8)	図13	50	1面-2面	青磁蓮弁文碗	(15.8)		
図10	19	1面 遺構13	轆轤成形かわらけ	12.2	7.0	3.6	図13	51	1面-2面	白磁口兀碗			
図10	20	1面 遺構13	轆轤成形かわらけ	13.4	6.8	3.9	図13	52	1面-2面	瀬戸行平鍋	(25.2)		
図10	21	1面 遺構13	滑石製砥石	(4.0)	(2.4)	(1.5)	図13	53	1面-2面	常滑片口鉢Ⅱ類	(28.4)	(14.0)	(13.0)
図11	22	1面 遺構11	瀬戸入子		3.6		図13	54	1面-2面	常滑壺	(9.4)		
図11	23	1面 遺構11	瀬戸入子				図13	55	1面-2面	常滑壺			
図11	24	1面 遺構11	常滑甕				図13	56	1面-2面	常滑壺			
図11	25	1面 遺構11	瓦質火鉢	(6.8)	(4.6)	(1.6)	図13	57	1面-2面	常滑壺			
図11	26	1面 遺構11	轆轤成形かわらけ	(7.8)	(5.6)	(1.6)	図13	58	1面-2面	常滑甕　押印拓影			
図11	27	1面 遺構11	轆轤成形かわらけ	長(2.1)	幅(2.3)	厚0.5	図13	59	1面-2面	常滑甕　押印拓影			
図11	28	1面 遺構11	鳴滝産仕上砥	(11.0)			図13	60	1面-2面	常滑甕　押印拓影			
図11	29	1面 遺構12	手捏成形かわらけ	(12.8)	(8.0)	(3.0)	図13	61	1面-2面	常滑甕　押印拓影			
図11	30	1面 遺構12	轆轤成形かわらけ	(7.6)	(5.0)	(1.8)	図13	62	1面-2面	常滑片口鉢Ⅱ類			
図11	31	1面 遺構12	轆轤成形かわらけ	(7.6)	(5.0)	(1.8)	図13	63	1面-2面	常滑片口鉢Ⅱ類			
図11	32	1面 遺構12	轆轤成形かわらけ	(7.8)	(5.2)	(1.5)	図13	64	1面-2面	瓦質燈明台		(20.0)	

法量表

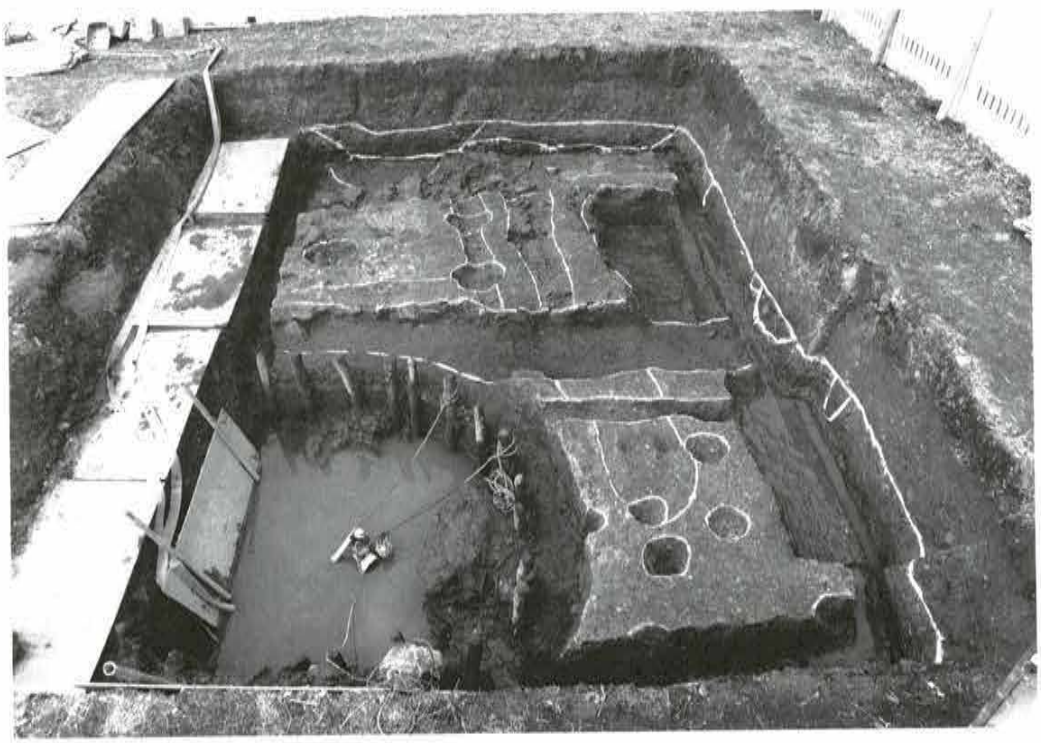
図No.	No.	出土地	種　別	口径	底径	器高	図No.	No.	出土地	種　別	口径	底径	器高
図13	65	1面-2面	手捏成形かわらけ	(7.8)	(9.0)	(1.2)	図16	97	2面-3面	青磁劃花文碗	(5.5)		
図13	66	1面-2面	轆轤成形かわらけ	(12.0)	(7.6)	(3.2)	図16	98	2面-3面	瓦器質碗	(11.8)		
図13	67	1面-2面	轆轤成形かわらけ	(11.4)	(7.0)	(2.9)	図16	99	2面-3面	常滑甕			
図13	68	1面-2面	轆轤成形かわらけ	(9.8)	(5.4)	(2.8)	図16	100	2面-3面	手捏成形かわらけ	(8.8)		(2.1)
図13	69	1面-2面	轆轤成形かわらけ	(10.8)	(7.0)	(2.1)	図16	101	2面-3面	手捏成形かわらけ	(9.4)		
図13	70	1面-2面	轆轤成形かわらけ	(10.2)	(7.0)	(1.5)	図16	102	2面-3面	轆轤成形かわらけ	(7.8)	(6.4)	(1.3)
図13	71	1面-2面	轆轤成形かわらけ	8.2	6.0	1.45	図16	103	2面-3面	轆轤成形かわらけ	8.1	5.6	1.85
図13	72	1面-2面	轆轤成形かわらけ	(7.8)	(5.6)	(1.6)	図16	104	2面-3面	轆轤成形かわらけ	(8.9)	(5.8)	(1.8)
図13	73	1面-2面	轆轤成形かわらけ	8.1	6.0	(1.7)	図16	105	2面-3面	鳴滝産系硯	長(8.5)	幅(3.6)	厚(0.7)
図13	74	1面-2面	轆轤成形かわらけ	8.2	5.6	1.7	図16	106	2面-3面	滑石鍋転用砥石	長(5.1)	幅(2.9)	厚(1.7)
図13	75	1面-2面	轆轤成形かわらけ	(7.8)	(6.0)	(1.6)	図16	107	2面-3面	鉄不明品	長(8.3)	幅(0.5)	厚(0.3)
図13	76	1面-2面	轆轤成形かわらけ	(7.8)	(5.0)	(1.7)	図16	108	2面-3面	木製品串状	長(19.6)	幅1.0	厚0.7
図13	77	1面-2面	轆轤成形かわらけ	(8.0)	5.2	1.6	図18	109	3面 遺構36	高麗青磁壺		(13.8)	
図13	78	1面-2面	轆轤成形かわらけ	(7.2)	(4.6)	(1.8)	図18	110	3面 遺構36	常滑片口鉢Ⅰ類			
図13	79	1面-2面	鉄釘	長(5.7)	幅(0.3)	厚(0.2)	図18	111	3面 遺構36	常滑片口鉢Ⅰ類			
図15	80	2面 遺構22	手捏成形かわらけ	(7.8)		(1.8)	図18	112	3面 遺構36	轆轤成形かわらけ	(12.8)	7.2	(3.5)
図15	81	2面 遺構22	手捏成形かわらけ	(10.8)		(1.7)	図18	113	3a面 遺構36	轆轤成形かわらけ	(13.2)	8.2	(3.3)
図15	82	2面 遺構22	轆轤成形かわらけ	(12.2)	7.8	(3.3)	図18	114	3a面 遺構36	轆轤成形かわらけ	7.8	5.8	1.8
図15	83	2面 遺構26	常滑片口鉢Ⅱ類				図18	115	3a面 遺構36	鉄釘	8.2	5.8	1.8
図15	84	2面 遺構26	轆轤成形かわらけ	12.2	8.4	3.15	図18	116	3a面 遺構36	木製品楔状	長(3.0)	幅(0.4)	厚(0.3)
図15	85	2面 遺構26	轆轤成形かわらけ	(11.8)	8.0	(2.9)	図18	117	3a面 遺構36	木製品串状	長11.0	幅3.1	厚1.6
図15	86	2面 遺構26	轆轤成形かわらけ	(8.0)	(6.2)	(1.6)	図18	118	3a面 遺構36	木製品串状	長24.7	幅1.9	厚1.1
図15	87	2面 遺構26	鉄製掛け金具	長12.2 長(4.9)	幅0.7 幅0.4	厚0.8 厚0.2	図18	119	3a面 遺構36	木製品串状	長20.3	幅1.0	厚1.0
図15	88	2面 遺構26	木製品箆	長26.9	幅1.4	厚0.5	図18	120	3a面 遺構36	木製品串状	長19.3	幅1.2	厚0.8
図15	89	2面 遺構26	木製品箸	長23.2	幅0.7	厚0.3	図18	121	3a面 遺構36	木製品串状	長19.2	幅1.1	厚0.6
図15	90	2面 遺構26	木製品串状	長17.7	幅1.0	厚0.2	図18	122	3a面 遺構43	常滑片口鉢Ⅰ類			
図15	91	2面 遺構26	木製不明品	長8.5	幅2.2	厚1.8	図18	123	3a面 遺構45	山茶碗			
図15	92	2面 遺構27	産地不明砥石	長(6.7)	幅3.3	厚1.4	図18	124	3a面 遺構45	山茶碗		5.3	
図15	93	2面 遺構30	手捏成形かわらけ	(13.1)			図18	125	3a面 遺構48	轆轤成形かわらけ	(7.8)	(6.0)	(1.5)
図15	94	2面 遺構30	轆轤成形かわらけ	13.2	8.4	3.2	図18	126	3a面 遺構70	轆轤成形かわらけ	(9.0)	(7.0)	(1.5)
図15	95	2面 遺構30	滑石鍋転用砥石	長(6.7)	幅(10.0)	厚(2.0)	図18	127	3a面 遺構73	木製品草履芯	長25.5	幅4.0	厚0.2
図15	96	2面 遺構30	木製品円板	長(8.0)		厚(0.3)	図18	128	3a面 遺構73	木製品草履芯	長(13.0)	幅4.9	厚0.3

法量表

図No.	No.	出土地	種　別	口径	底径	器高	図No.	No.	出土地	種　別	口径	底径	器高
図18	129	3a面 遺構73	木製品燈明台	長(9.1)	幅0.5	厚2.3	図25	161	3d面 -4面	青白磁合子身	(5.4)	(5.0)	(1.8)
図18	130	3a面 遺構73	木製品杓子	長(15.7)	幅(4.2)	厚0.6	図25	162	3d面 -4面	火打石(チャート製)	長3.5	幅2.4	厚1.6
図18	131	3a面 遺構73	木製品漆筺	長19.7	幅1.1	厚0.3	図25	163	3d面 -4面	鉄釘	長(6.1)	幅(0.2)	厚(0.2)
図18	132	3a面 遺構73	木製品箸	長23.4	幅0.8	厚0.5	図25	164	3d面 -4面	鉄釘	長(8.2)	幅(0.3)	厚(0.6)
図18	133	3a面 遺構73	木製品棒状	長22.0	幅0.7	厚0.4	図25	165	3d面 -4面	木製品栓	径3.0	長5.6	
図18	134	3a面 遺構73	木製品串状	長20.0	幅0.9	厚0.8	図25	166	3d面 -4面	木製品箸	長20.3	幅0.6	厚0.4
図18	135	3a面 遺構73	木製品串状	長(24.8)	幅1.3	厚0.7	図27	167	4面 遺構125	手捏成形かわらけ	(9.6)		(2.0)
図18	136	3a面 遺構73	木製品串状	長(27.8)	幅1.2	厚0.8	図27	168	4面 遺構144	手捏成形かわらけ	(13.0)		(3.2)
図19	137	3a面 遺構79	常滑甕				図27	169	4面 面上	轆轤成形かわらけ	(13.8)	9.4	(3.4)
図19	138	3a面 遺構79	常滑片口鉢Ⅰ類				図27	170	4面 面上	木製品部材	長9.0	幅1.9	厚0.6
図19	139	3a面 遺構79	手捏成形かわらけ	(9.8)		(1.75)	図27	171	4面 -5面	手捏成形かわらけ	(7.6)		(1.3)
図19	140	3a面 遺構80	手捏成形かわらけ	(9.4)		(1.8)	図27	172	4面 -5面	鉄釘	長(8.3)	幅0.4	厚(0.4)
図19	141	3a面 遺構80	木製品手押木	縦5.0	横14.0	厚4.0	図29	173	撹乱	かわらけ転用円板	径(9.2)		厚(1.0)
図19	142	3a面 遺構80	木製品串状	長(19.6)	幅1.2	厚0.8	図29	174	撹乱	木製品球	径2.8		
図19	143	3a面 遺構81	手捏成形かわらけ	(8.8)		(2.1)	図29	175	撹乱	木製品球	縦2.3	横3.2	厚2.9
図19	144	3a面 遺構81	かわらけ質土器		(9.0)		図29	176	側溝	常滑片口鉢Ⅰ類		7.0	
図20	145	3a面 面上	轆轤成形かわらけ	(8.8)	(5.8)	(1.5)	図29	177	側溝	常滑片口鉢Ⅰ類			
図20	146	3a面 -3b面	鉄釘	長(5.8)	幅(0.4)	厚(0.3)	図29	178	側溝	常滑片口鉢Ⅱ類			
図21	147	3b面 遺構88	常滑甕				図29	179	側溝	常滑甕	(16.8)		
図21	148	3b面 遺構88	手捏成形かわらけ	9.5		2.5	図29	180	側溝	常滑甕			
図21	149	3b面 遺構88	轆轤成形かわらけ	9.5	6.0	2.1	図29	181	側溝	常滑甕			
図21	150	3b面 遺構89	木製品串状	長(22.0)	幅1.1	厚1.0	図29	182	側溝	常滑甕			
図21	151	3b面 面上	手捏成形かわらけ	(8.2)		(1.85)	図29	183	側溝	手捏成形かわらけ	(9.8)		(1.7)
図21	152	3b面 -3c面	木製品筺状	長22.3	幅1.5	厚0.5	図29	184	側溝	轆轤成形かわらけ	(13.6)	(9.4)	(3.4)
図21	153	3b面 -3c面	木製品串状	長27.0	幅1.0	厚1.0	図29	185	側溝	轆轤成形かわらけ	13.2	8.4	3.5
図21	154	3b面 -3c面	木製品箸	長20.6	幅0.8	厚0.3	図29	186	側溝	木製品串状	長25.0	幅0.8	厚0.7
図21	155	3b面 -3c面	木製品箸	長22.8	幅0.6	厚0.5	図29	187	表土 掘削	常滑片口鉢Ⅰ類		(12.0)	
図23	156	3c面 遺構90	木製品手押木	縦5.5	横10.8	厚2.7	図29	188	表土 掘削	轆轤成形かわらけ	(12.8)	(6.0)	(2.7)
図23	157	3c面 -3d面	青白磁合子蓋	(6.0)	3.6	(1.7)	図29	189	表土 掘削	平瓦			厚2.0
図23	158	3c面 -3d面	手捏成形かわらけ	(9.2)		(1.3)							
図25	159	3d面 遺構101	鉄釘	長(6.8)	幅0.4	厚0.3							
図25	160	3d面 遺構110	鉄釘	長(4.3)	幅0.3	厚0.2							

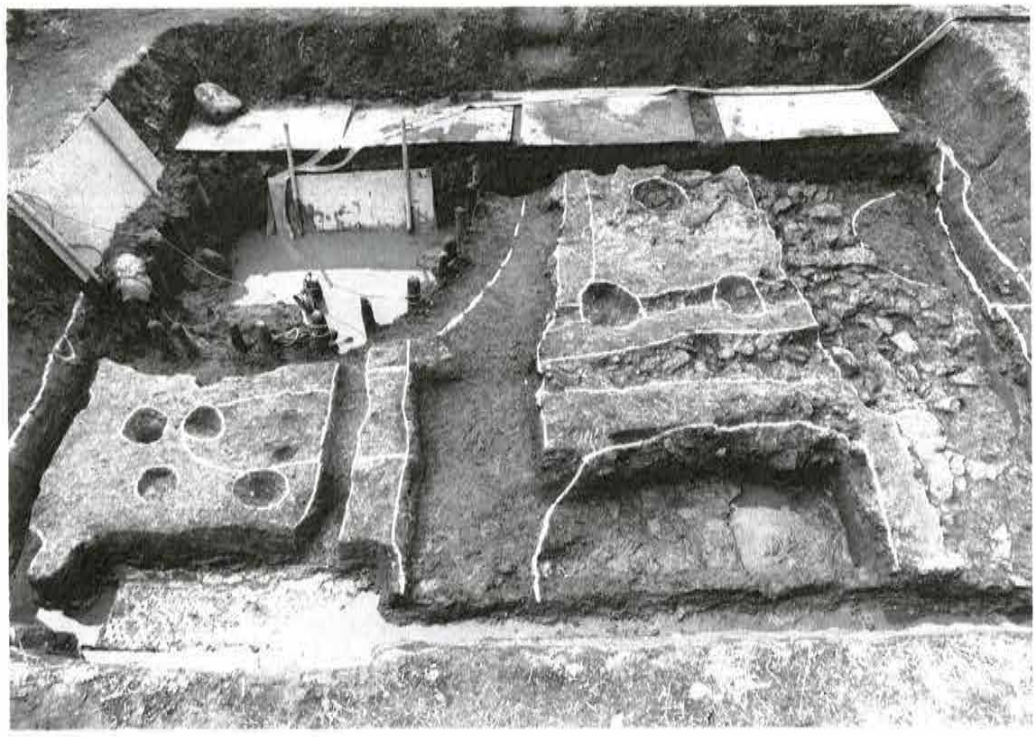
図版1　全景

1．遺物地調査前（南西より）

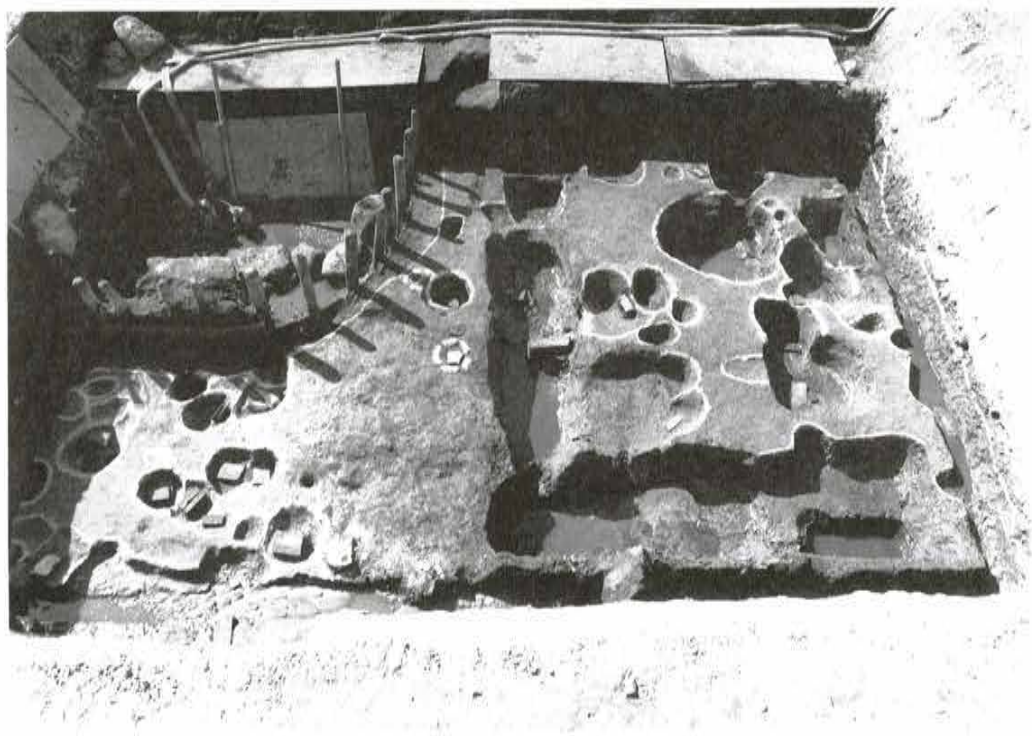


2．第1面全景（東より）

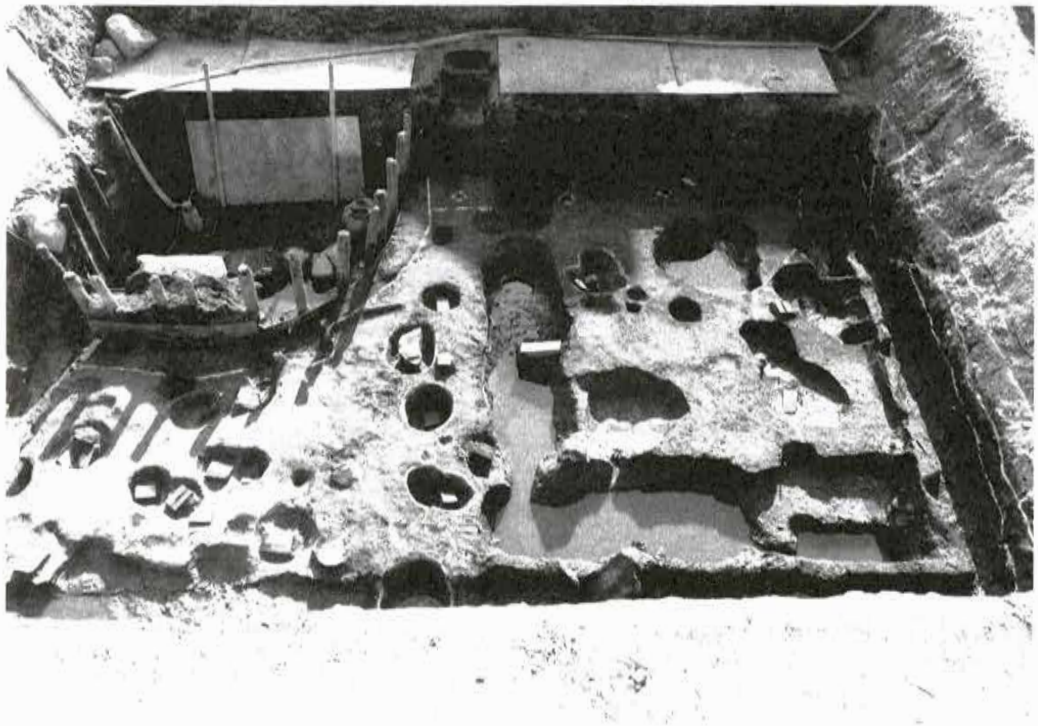
図版２　全景



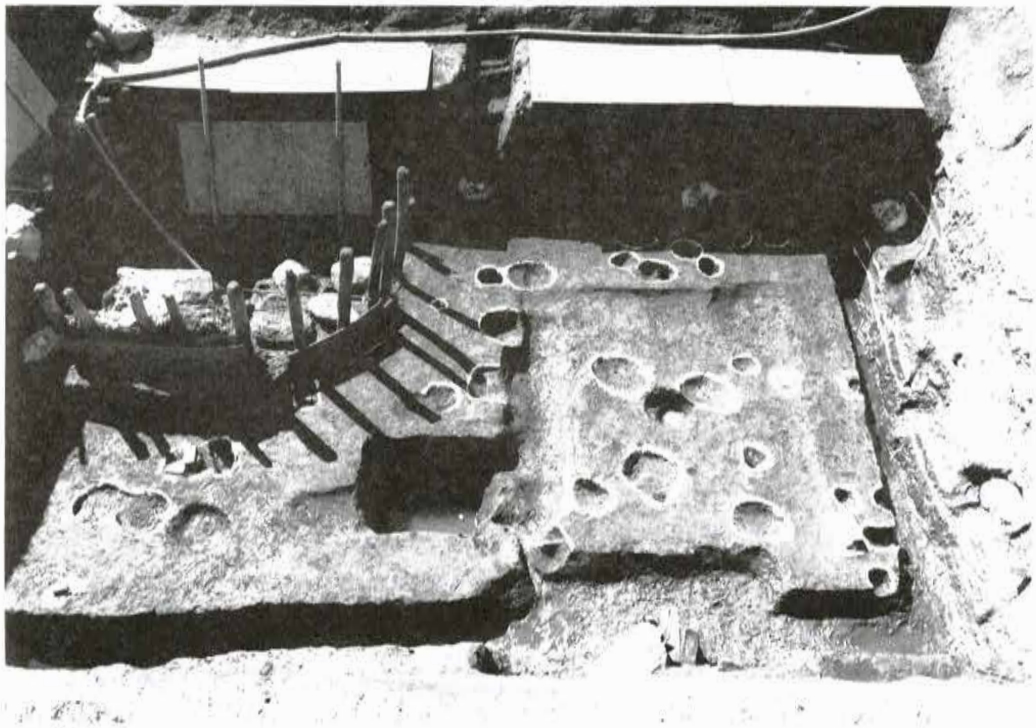
1．第１面全景（北より）



2．第２面全景（東より）

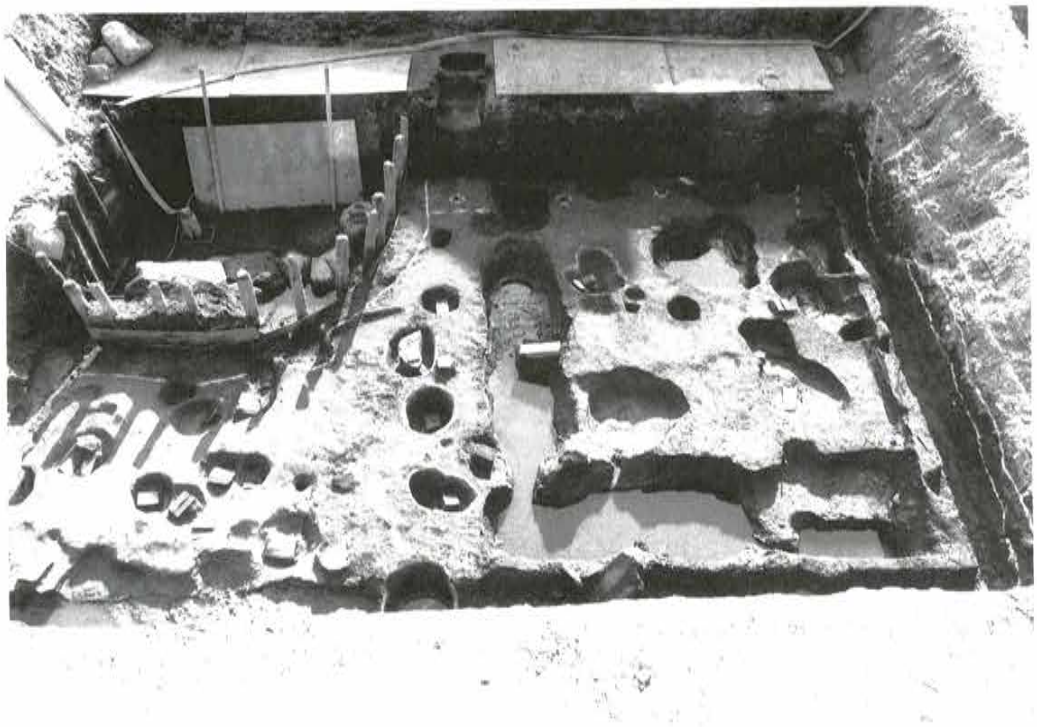


1．第３a面全景（北より）



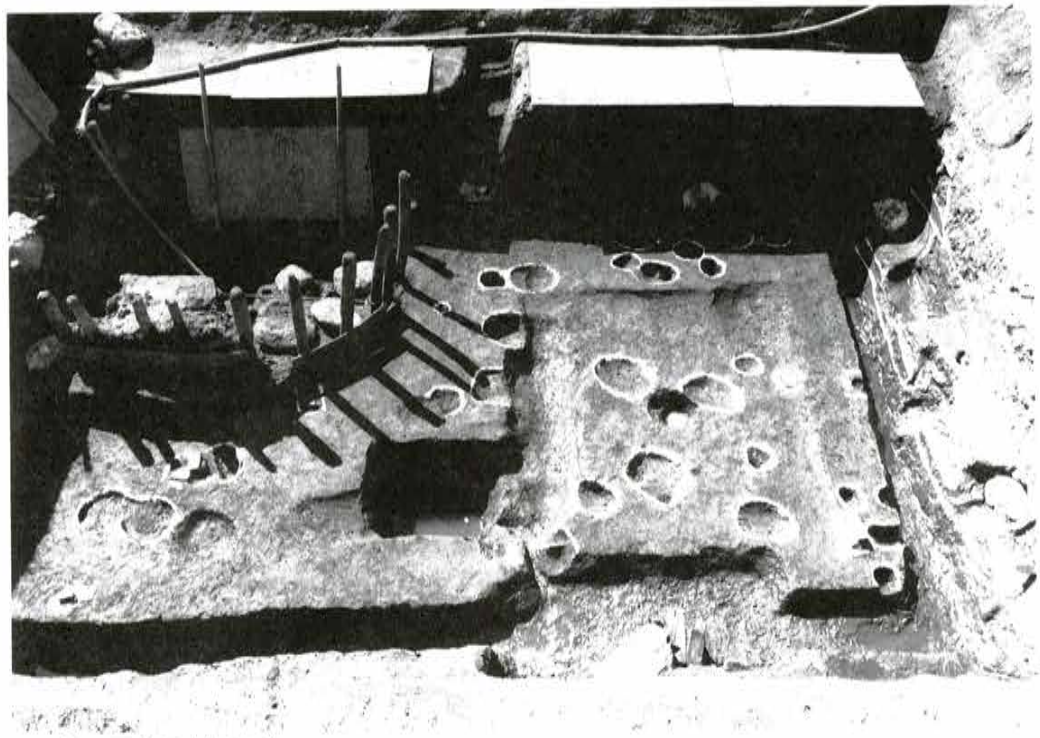
2．第３b面全景（西より）

図版４　全景

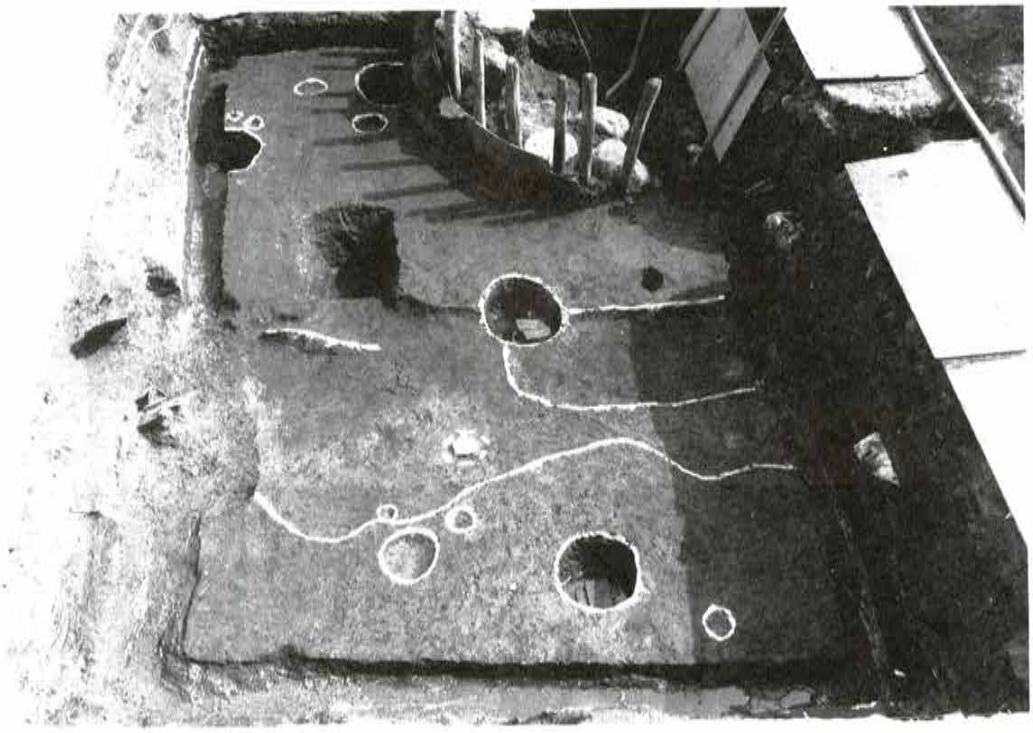


1．第３c面全景（北より）

2．第３d面全景（西より）

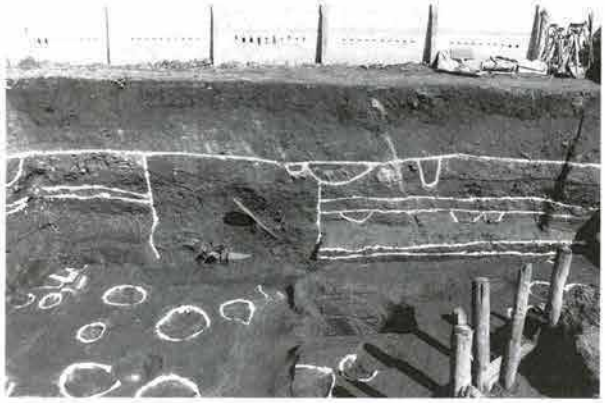


１．第４面全景（北より）



２．第５面全景（西より）

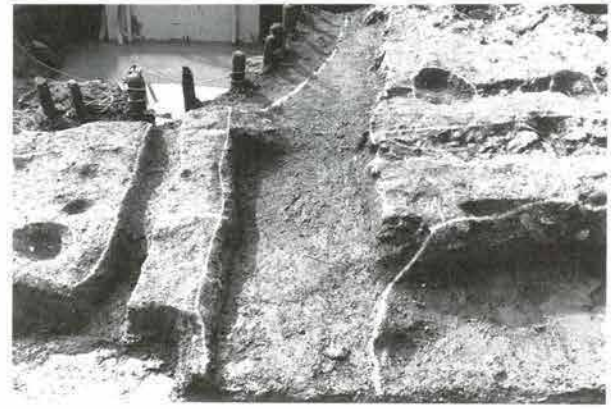
図版６　検出遺構



1．調査区北壁セクション

2．調査区西壁セクション

3．第１面遺構３・６・７・８・19（西より）



4．第１面遺構７・９(北より)

5．第１面遺構14・15・16・17（西より）

6．第２面遺構26　東西セクション(南より)

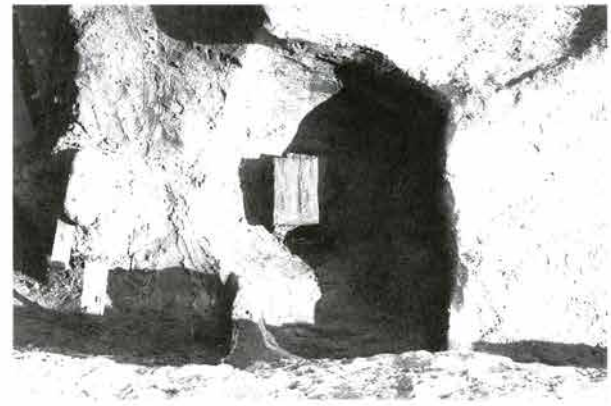
7．第２面礎板列(北より)

8．第３a面遺構43（南より）

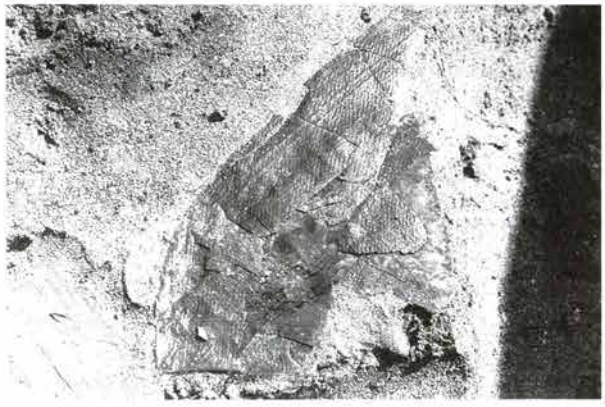
1．第３b面遺構87（南より）

2．第３c面遺構90（南より）

3．第３d面遺構101（西より）

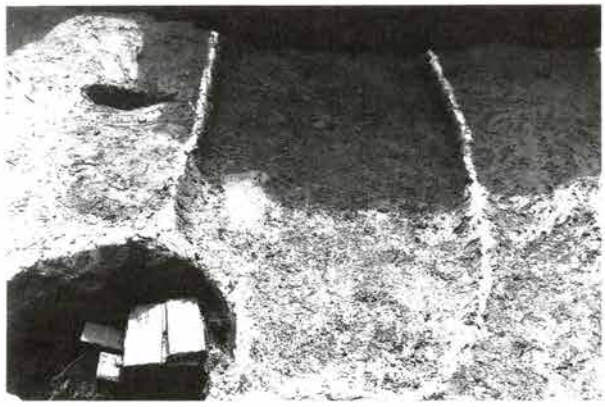


4．第３d面遺構110（南より）



5．第３d面出土鳥帽子(西より)

6．第５面遺構147（西より）



7．第５面遺構150・152（北より）

8．第５面遺構153（北より）

図版８　出土遺物

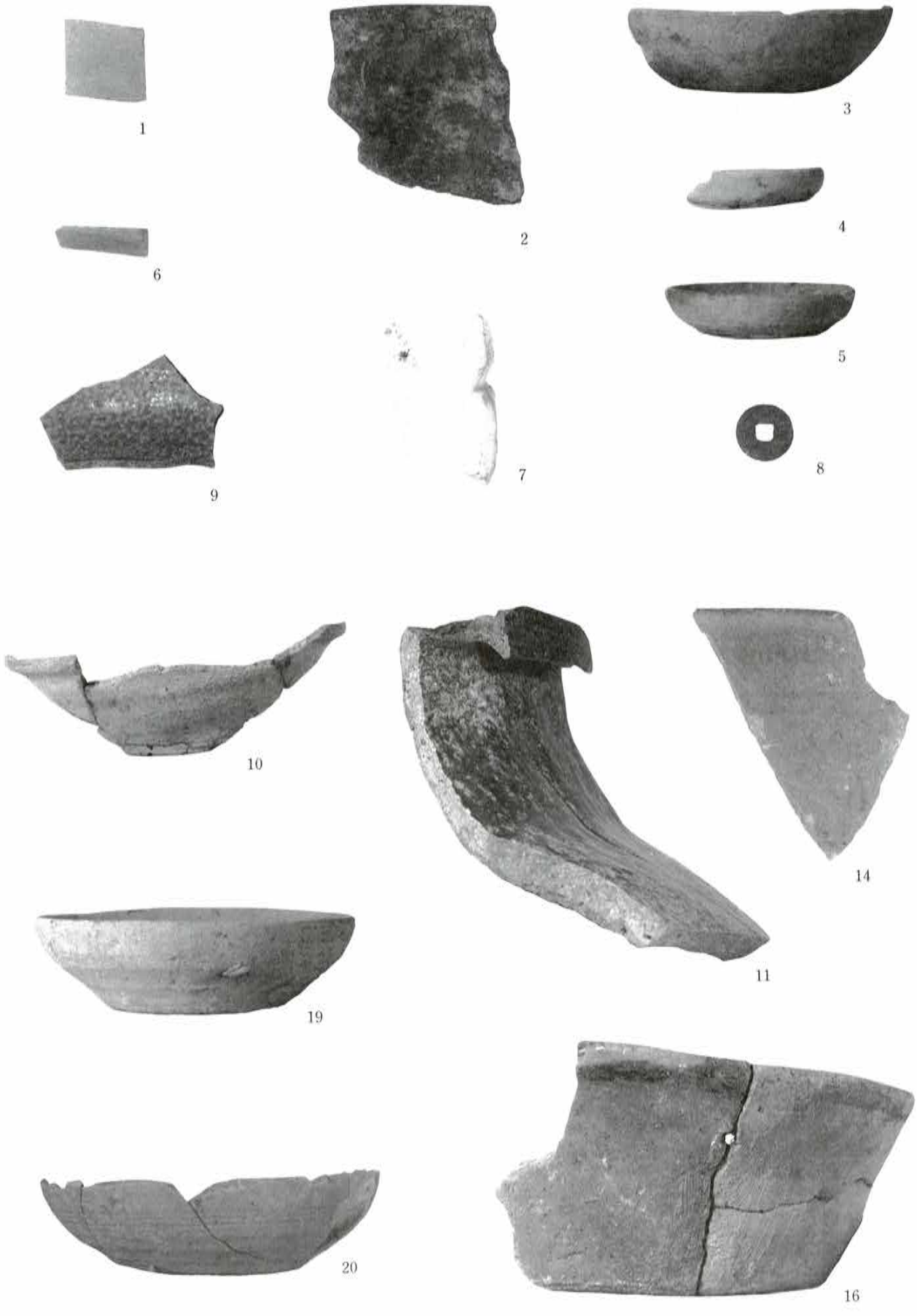


図10　第１面遺構出土遺物

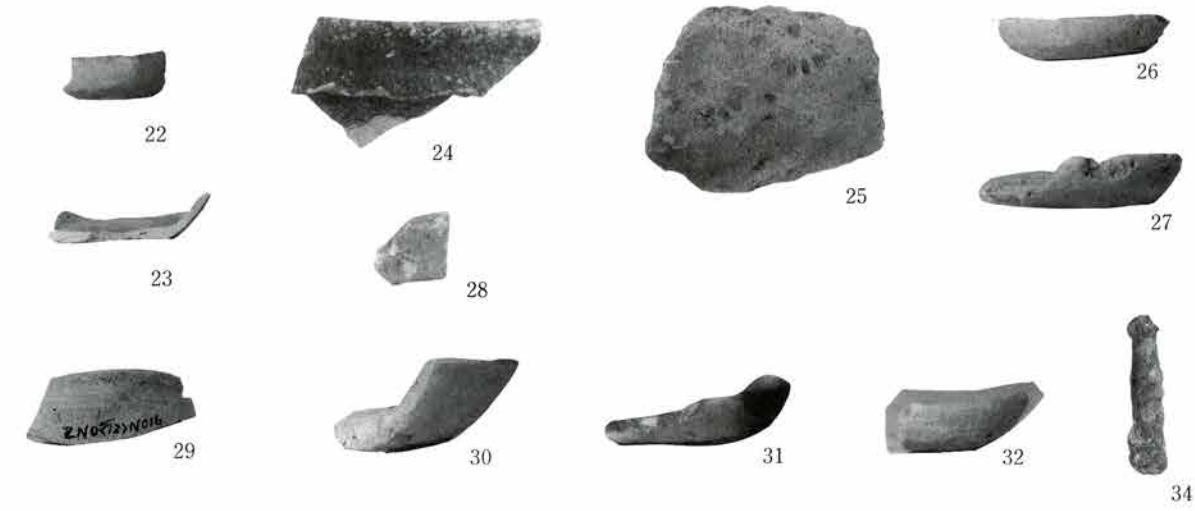


図11　第１面遺構出土遺物

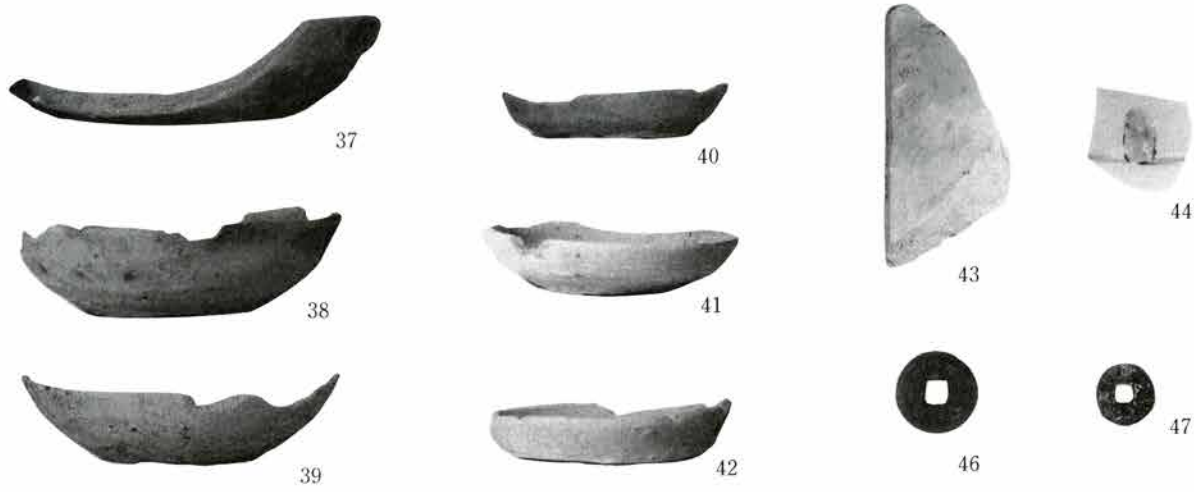


図12　第１面遺構出土遺物

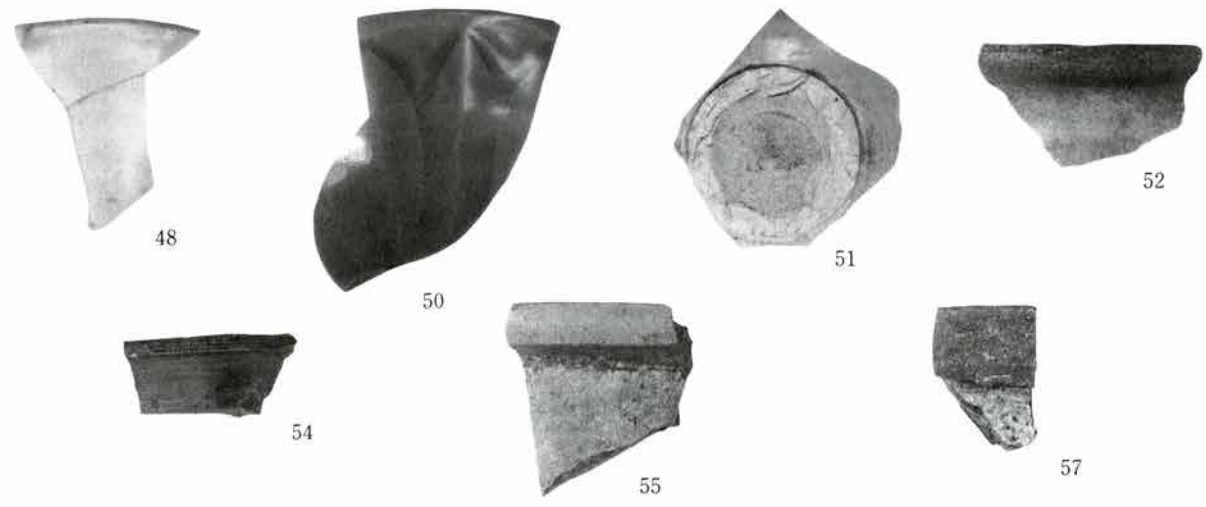


図13　第１面～第２面出土遺物

図版10　出土遺物

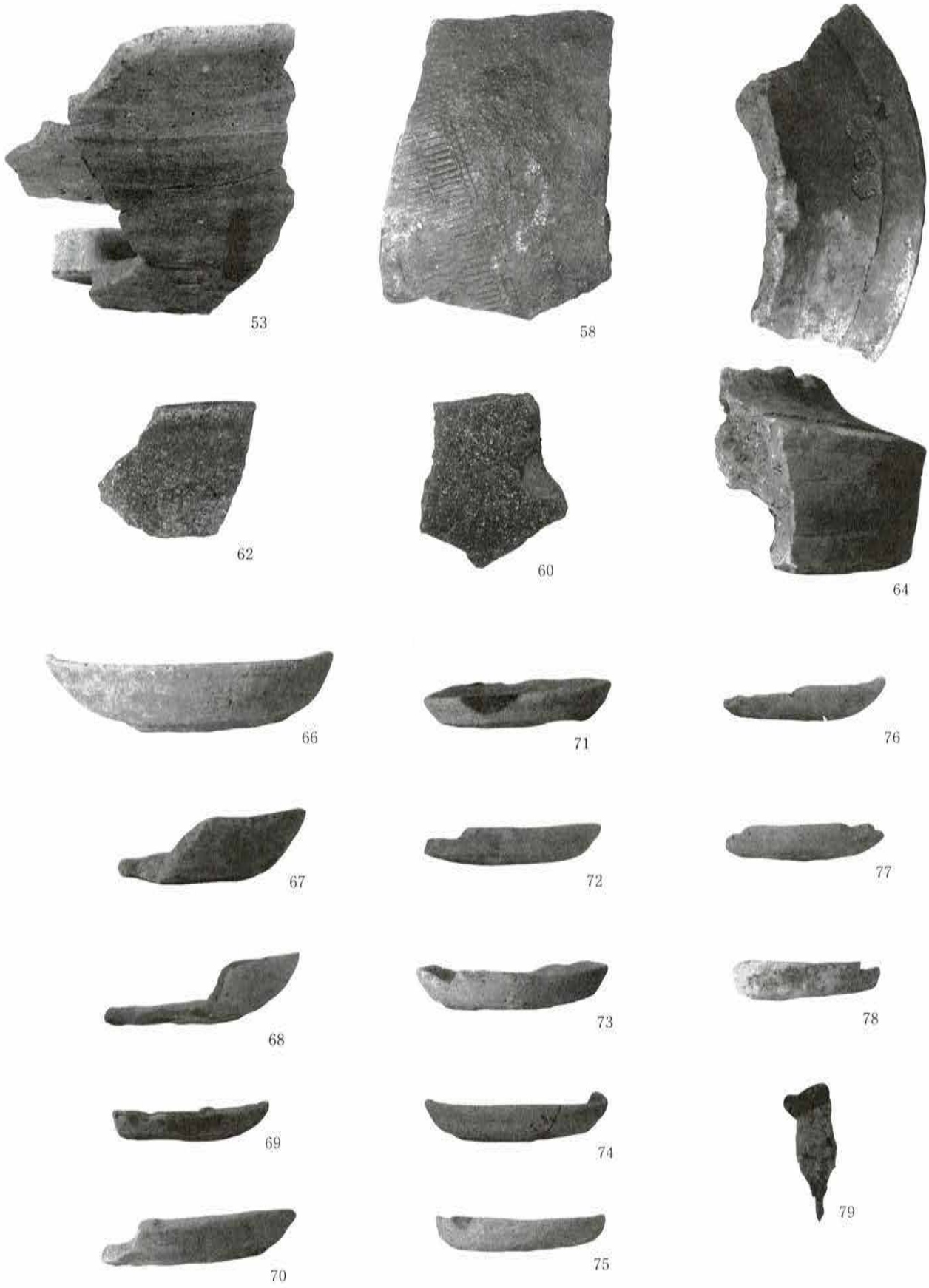


図13　第１面～第２面出土遺物

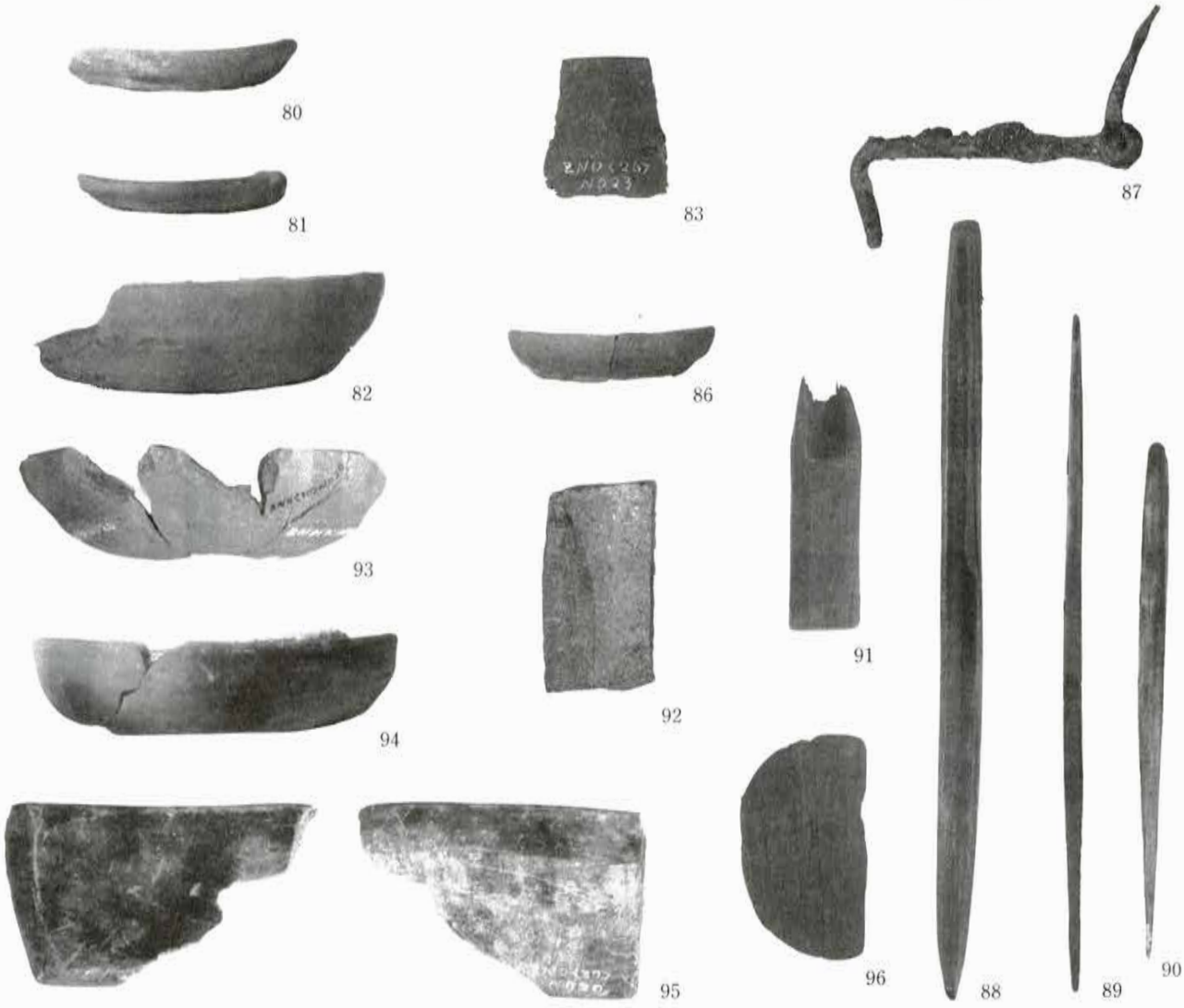


図15　第２面遺構出土遺物

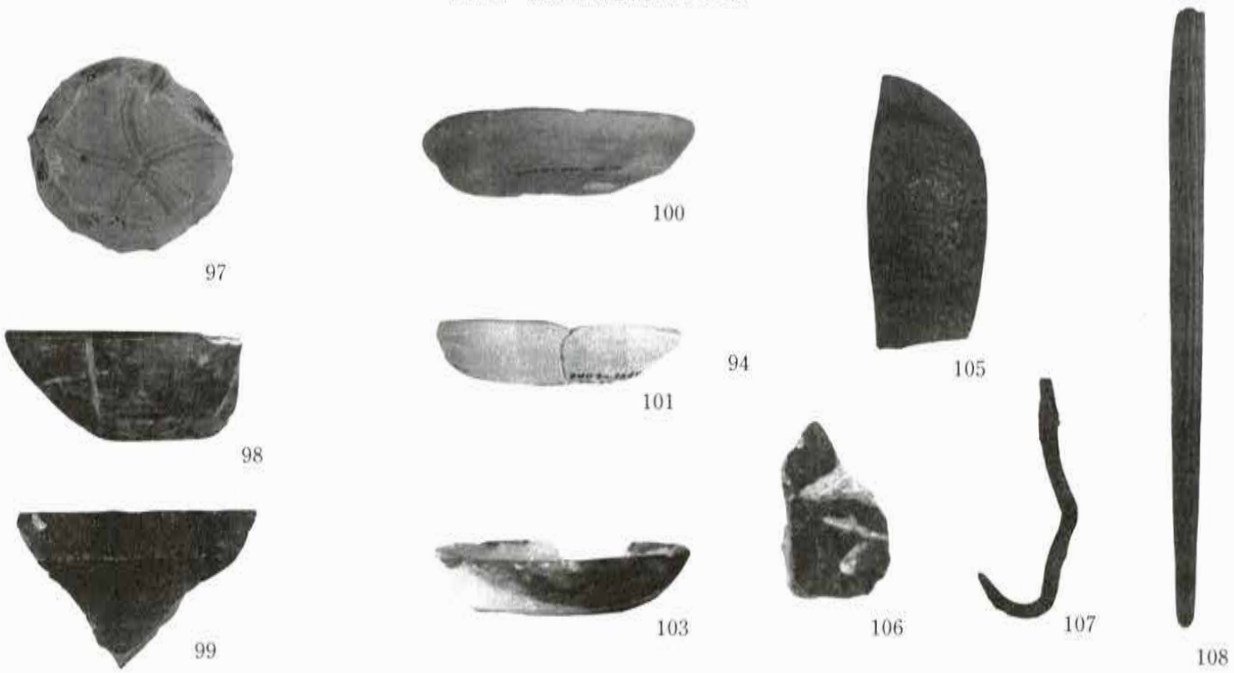


図16　第２面～第３面出土遺物

図版12　出土遺物

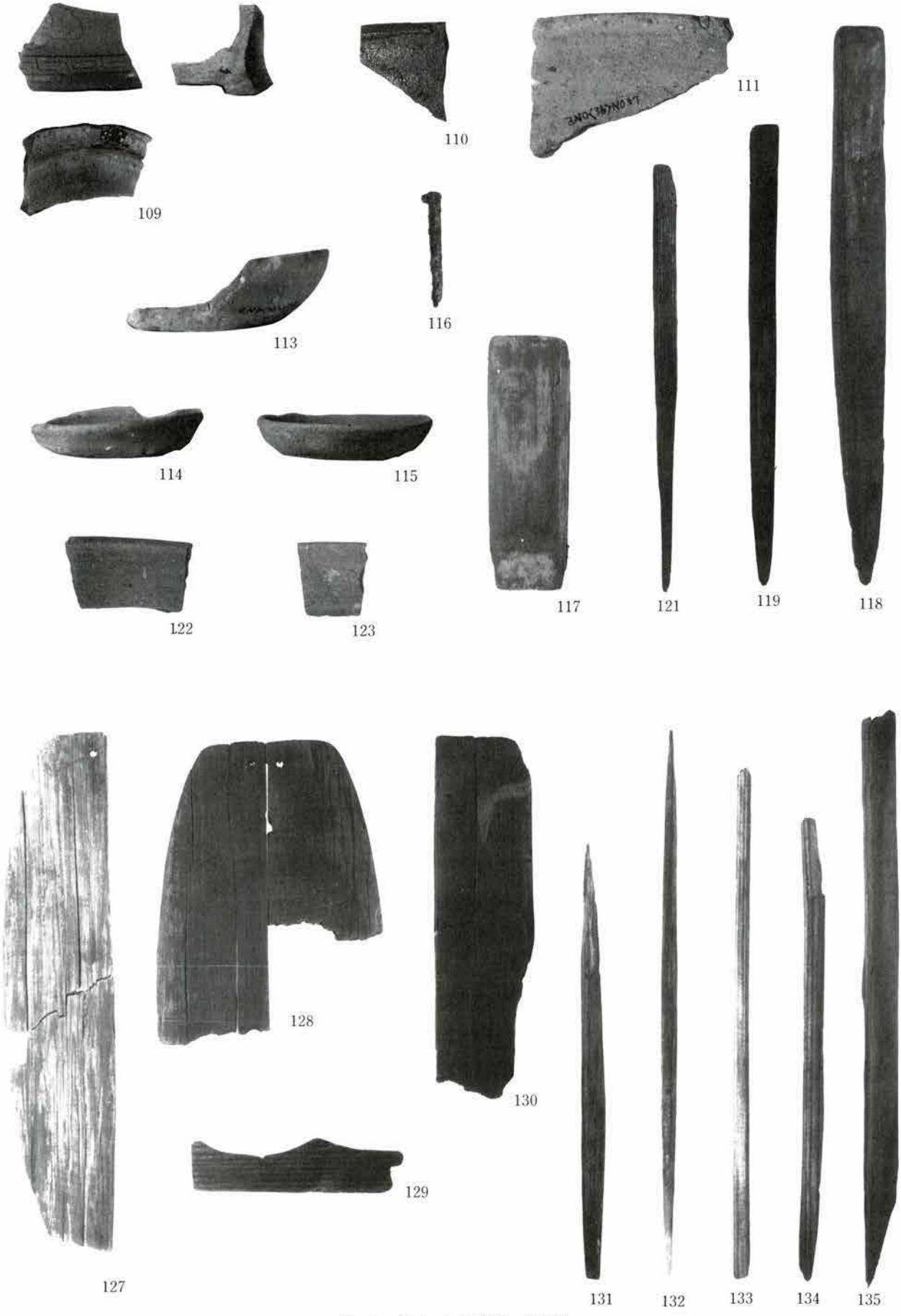


図18　第3a面遺構出土遺物

図19　第3a面遺構出土遺物

図20　第3a面面上・第3a面出土遺物

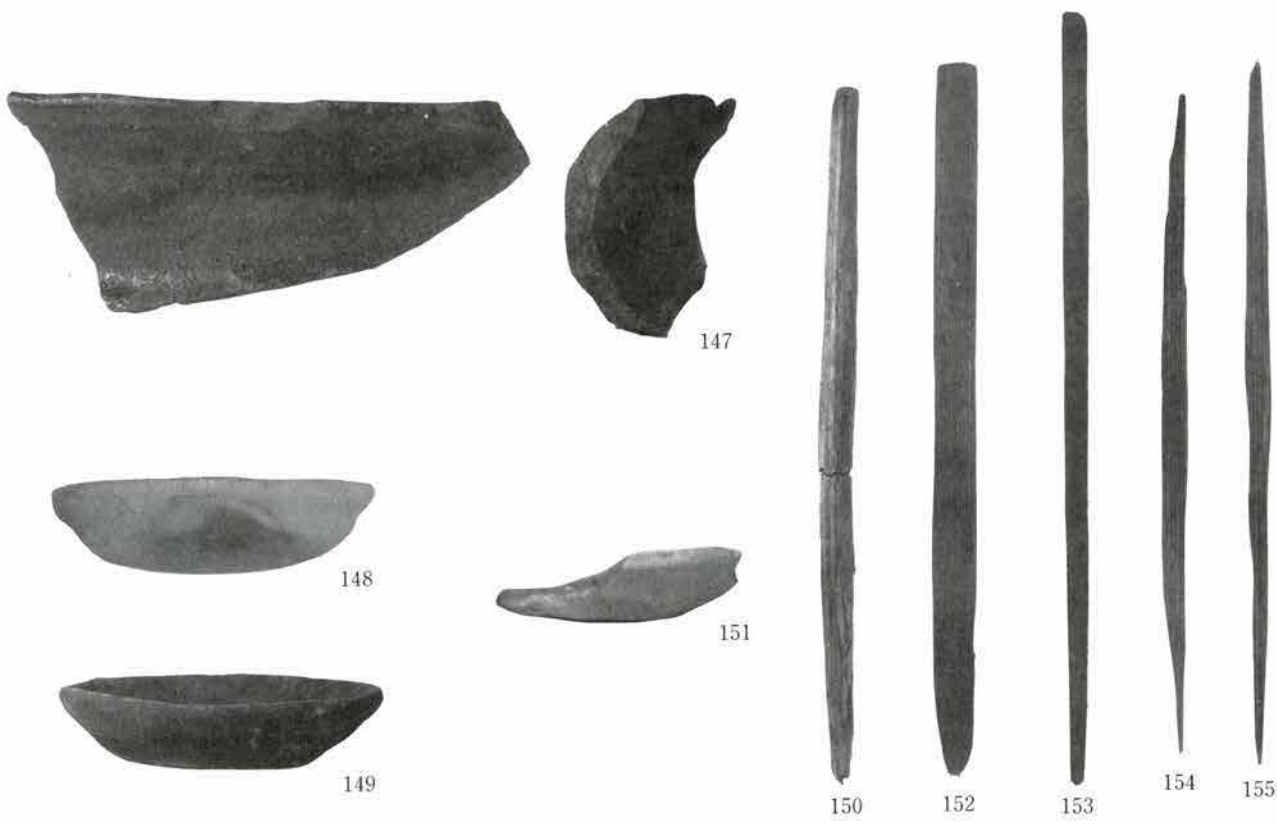


図21　第3b面遺構・第3b面面上・第3b面～第3c面出土遺物

図版14　出土遺物

図23　第３c 面遺構・第３c 面～第３d 面出土遺物

図25　第３b、面遺構・第３b 面～第４面出土遺物

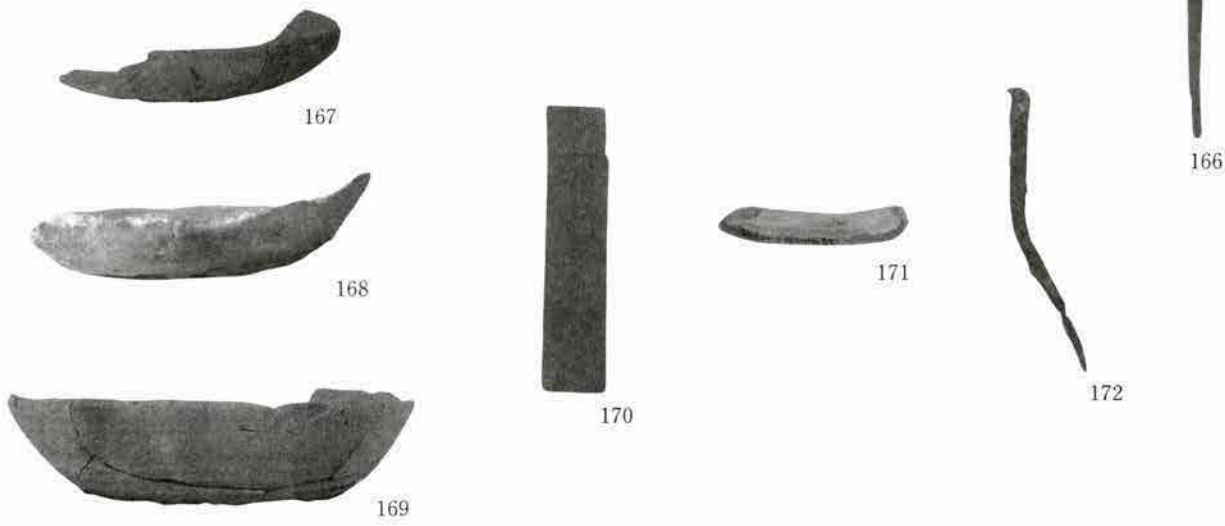


図27　第４面遺構・面上・第４面～第５面出土遺物

鋳造遺物

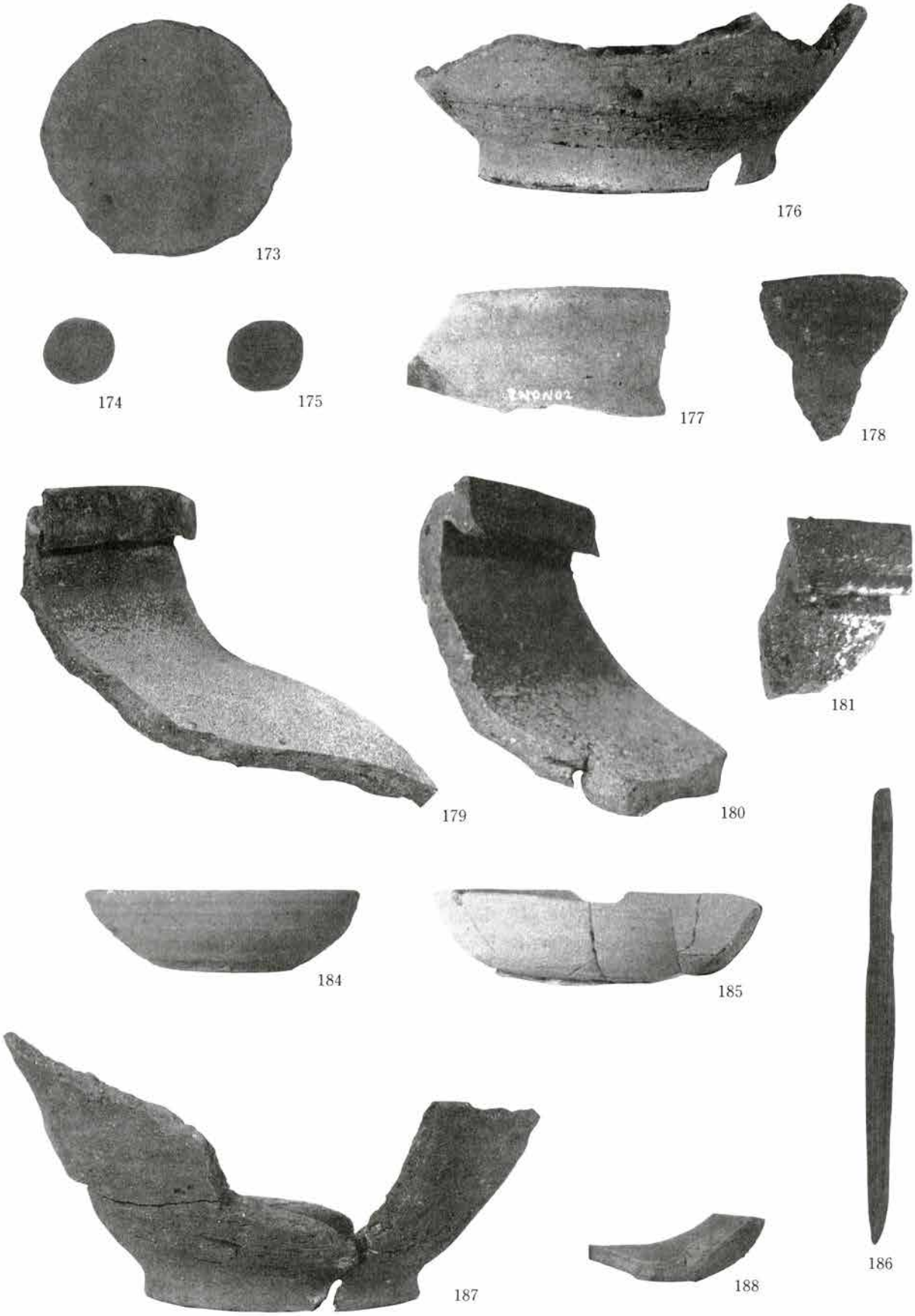


図29　攪乱・側溝・表土掘削時出土遺物

ほうじょうこまちていあと

北条小町邸跡（No.282）

雪ノ下一丁目401番５ほか地点

例　言

1．本報は「北条小町邸跡（鎌倉市No.282）」内、雪ノ下一丁目401番５ほか地点における個人住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．調査期間　平成13年１月24日～同年３月30日
　調査面積　80㎡

3．調査体制
　担　当　者　馬淵和雄
　調　査　員　鍛治屋勝二・伊丹まどか（資料整理）
　調査補助員　松原康子・土居裕治・沖元道・石元道子（資料整理）
　作　業　員　杉浦永章・田口康雄・山崎一男・吉本脩三（以上（社）鎌倉市シルバー人材センター）

4．本報作成分担
　遺構図整理　馬淵・鍛治屋
　遺物実測　松原・伊丹・石元
　同墨入れ　伊丹・石元・松原
　同観察表　伊丹・石元・松原
　同集計表　沖元
　同写真撮影　鍛治屋
　原稿執筆　馬淵・鍛治屋
　編　　集　馬淵
　総　　括　馬淵

謝　辞
次の方々に感謝の意を表する。
伊藤裕偉・小野田勝一・後藤健一・千葉孝弥・原廣志

目　次

第１章　調査地点概観…… 74
　１．位置と地勢…… 74
　２．歴史的環境…… 74
第２章　調査の概略…… 81
　１．調査にいたる経緯…… 81
　２．調査方法…… 81
　３．調査経過…… 82
第３章　調査結果…… 83
　第１節　概要…… 83
　１．層序と面のあり方…… 83
　第２節　各説…… 83
　１．上層１群…… 83
　２．上層２群…… 86
　３．上層３群…… 87
　４．下層…… 102
　５．一括採集遺物 …… 111
第４章　まとめと考察…… 124
　１．遺跡年代と性格…… 124
　２．東西溝とその意義…… 126

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺の遺跡・旧跡……75
図２　調査区設定図……82
図３　調査区壁土層図……84
図４　調査区西壁　東西溝部分土層図……85
図５　上層１群　小溝群・土坑１……86
図６　上層２群　赤褐色土地行……87
図７　上層３群遺構全図，同面上出土遺物 ……88
図８　東西溝１，同出土遺物……89
図９　東西溝２，同出土遺物(1)―部材 ……90
図10　東西溝２出土遺物(2) …… 91
図11　東西溝３，同出土遺物 …… 92
図12　建物１ …… 93
図13　建物２，同出土遺物 …… 94
図14　建物３，同出土遺物 …… 95
図15　建物４ …… 96
図16　建物５ …… 97
図17　Ｌ字状柱穴列 …… 98
図18　柱穴列１・２，同出土遺物 …… 99
図19　柱穴列３，同出土遺物 …… 100

図20　柱穴列４，同出土遺物 ……101
図21　土坑２ ……101
図22　上層３群柱穴出土遺物 ……102
図23　下層遺構全図，同面土出土遺物 ……103
図24　東西溝４，同出土遺物（１） ……104
図25　東西溝４出土遺物（２） ……105
図26　東西溝４出土遺物（３） ……106
図27　東西溝４出土遺物（４） ……107
図28　東西溝５，同出土遺物 ……108
図29　柱穴列５・６ ……109
図30　柱穴列７ ……110
図31　溝９・井戸1・土坑17 ……111
図32　東西溝出土遺物（１） ……112
図33　東西溝出土遺物（２） ……113
図34　遺構外採集遺物 ……114
図35　「北条小町邸跡」北半部における区画概念図 ……125
図36　東西溝変遷概念図 ……126
図37　松尾1993による宇津宮辻子幕府推定位置図 ……127
図38　秋山1997による遺跡付近変遷概念図 ……128

表　目　次

表１　上層泥岩地行土出土遺物観察表 …… 115
表２　東西溝１出土遺物観察表 …… 115
表３　東西溝２出土部材観察表 …… 115
表４　東西溝２出土遺物観察表 …… 115
表５　東西溝３出土遺物観察表 …… 116
表６　建物２出土遺物観察表 …… 116
表７　建物３出土遺物観察表 …… 117
表８　柱穴列１出土遺物観察表 …… 117
表９　柱穴列３出土遺物観察表 …… 117
表10　柱穴列４出土遺物観察表 …… 117
表11　上層３群柱穴出土遺物観察表（１） …… 117
表12　上層３群柱穴出土遺物観察表（２） …… 118
表13　下層面土出土遺物観察表 …… 118
表14　東西溝４出土部材観察表 …… 118
表15　東西溝４出土遺物観察表（１） …… 118
表16　東西溝４出土遺物観察表（２） …… 119
表17　東西溝４出土遺物観察表（３） …… 120
表18　東西溝５出土遺物観察表 …… 120
表19　溝９出土遺物観察表 …… 120
表20　土坑17出土遺物観察表 …… 120
表21　東西溝出土遺物観察表（１） …… 121
表22　東西溝出土遺物観察表（２） …… 122
表23　東西溝出土遺物観察表（３） …… 123
表24　遺構外採集遺物観察表 …… 123
表25　遺物計量表（１）—上位分類 …… 130
表26　遺物計量表（２）—中位分類 …… 130
表27　遺物計量表（３）—層位別土師器皿構成比 …… 131

写　真　目　次

図版１-１　調査地点付近鳥瞰（上が東） …… 133
１-２　調査地点と小町大路（北東から）
１-３　調査地点近景（南半部調査時，北から）
図版２-１　調査区南壁土層断面 …… 134
２-２　調査区東壁土層断面
２-３　調査区西壁土層断面

図版３-1　調査区北半部上層面全景（東から）……135
3-2　同上（西から）
図版４-1　建物１（北から）……136
4-2　同内　P. 1（北から）
4-3　同内　P. 3（北から）
図版５-1　建物２（西から）……137
5-2　同内　P. 4（南から）
5-3　同内　P. 5（東から）
5-4　同内　P. 8（南から）
図版６-1　柱穴列１（北から）……138
6-2　L字状柱穴列内 P. 2・P. 7（東から）
6-3　同上　P. 3（東から）
6-4　土坑２（東から）
6-5　上層３群　P.127（西から）
図版７-1　柱穴列３　北半部（北東から）……139
7-2　同上　完掘後（東から）
7-3　同内　P. 6（北から）
図版８-1　調査区北半部下層面全景（東から）……140
8-2　同上（西から）
図版９-1　柱穴列６（東から）……141
9-2　同内　P. 1（北東から）
9-3　同内　P. 2（東から）
9-4　同前　完掘後（東から）
図版10-1　柱穴列７（東から）……142
10-2　溝９（東から）
10-3　井戸１（東から）
10-4　同前　土層断面（東から）
図版11-1　調査区南半部全景（西から）……143
11-2　東西溝部分全景（東から）
図版11-3　同上　西壁土層断面
図版12-1　東西溝２・４（左側東西溝２は未完掘，東から）……144
12-2　東西溝２（北側根太取上げ後，東から）
12-3　同前　北側根太と束材（北東から）
12-4　土坑17（木材は東西溝２のもの，東から）
図版13-1　東西溝４（西から）……145
13-2　同前　側板と根太（南西から）
13-3　同前　側板（南から）
13-4　同前　部材（側板・根太取上げ後，東から）
13-5　同前　北側掘方土層断面（東から）
図版14-1　東西溝４（完掘後，東から）……146
14-2　同上　（西から）
14-3　同上　土層断面（左端は東西溝５，西から）
図版15-1　東壁際深掘り部（南から）……147
15-2　同上（北から）
15-3　北壁深掘り部土層断面（南西から）
15-4　中世以前層断面（左壁は任意，北から）
図版16　上層３群面上／東西溝１～３／建物２・３／柱穴列１・３出土遺物……148
図版17　上層３群柱穴／下層面上／東西溝４出土遺物……149
図版18　東西溝５／同一括／土坑17出土遺物，遺構外採集品……150

第１章　調査地点概観

１．位置と地勢

位置

鎌倉中心部は、鶴岡八幡宮から海に向かって真っ直ぐ伸びる若宮大路を基軸として、それにほぼ平行した東西２本の南北大路、および直交する何本かの東西大路と小路(「辻子」か)により区画される。市街地のほとんどの地下には中世都市遺跡が存在し、このうち若宮大路東側の鶴岡八幡宮前面(南)にある一辺約200ｍの方形区画が、神奈川県遺跡台帳に「北条小町邸跡(泰時・時頼邸)」(鎌倉市№282)として登録されている。この区画は西辺を若宮大路、北辺を横大路、東辺を小町大路に囲まれ、鎌倉時代中～後期には幕府のあった場所とも、執権北条泰時や経時・重時らの正亭のあった場所ともいわれている(高柳1959・秋山1996・同1997)。

調査地点はこの方形区画の東辺に近い、小町大路からは約30ｍ西に入った場所に位置する。南北方向でみると、方形区画のほぼ中央にあたる。2000年10～11月におこなわれた雪ノ下一丁目400番１地点(地点１－馬淵ほか2002)北側の路地を20ｍほど西に入った場所で、ほとんど隣地といってよいほどに近い。小町大路の東約250ｍの山裾には、鎌倉幕府終焉の地として知られる東勝寺跡があるが、そこから下ってきた道が小町大路に突き当たる対面位置が地点１であり、調査地点はその西側の並びに相当する。現在の地番は、鎌倉市雪ノ下一丁目401番５ほか、となっている。

地勢

調査地点を地勢上からみれば、およそ次のようになる。鎌倉東辺の山中に源を発した滑川は、現在の浄明寺から二階堂付近にかけて狭隘な谷間を開析したあと、大倉の辺から南に向きを変えて市内中心部の沖積平野を形成しつつ、相模湾に流れ込む。この間中流域から下流では東側の山裾を削り、右岸に河岸段丘を形成する。調査地点は沖積平野のほぼ入口付近東寄りの滑川右岸に位置する。滑川までは約170ｍ、現在の標高は9.4ｍ前後、中世期には、削平されて詳しいことは不明ながら、ほぼ8.2～8.5ｍ程度であったと推測される。現況で西の若宮大路よりほぼ80㎝高い。

２．歴史的環境

縄文～古墳時代

縄文海進期、鎌倉市街地は水面下であったと考えられ、遺跡は二階堂や大倉の山裾に限られる。海退期以降では、本調査地点東側のほぼ隣地といっていい地点１の調査で、深さ２ｍ以上、幅が検出範囲だけで８ｍはある縄文晩期の大きな落込みの南岸が検出されている(馬淵ほか2002)。逆台形の断面をしており、おそらく滑川の古流路か河跡湖と考えられる。しかし、後述するように本地点でその対(北)岸は検出されなかったので、南側の調査区外で立ち上がるはずである。

調査地点一帯で人の生活痕跡がみられるようになるのは弥生時代中期後半からである。大倉から二階堂にかけて大規模な集落が形成されており(地点57－馬淵1998・1999)、当地点付近でも、中世層の中からしばしば中期後半～後期の土器が出土する。古墳時代の集落は、周辺山稜部・海岸部・二階堂付近の平坦な微高地で発見されているが、当地点付近ではまだ例がない。地点24での花粉分析で稲科のプラントオパールが析出されていることから、この一帯で水田耕作がおこなわれていた可能性がある。

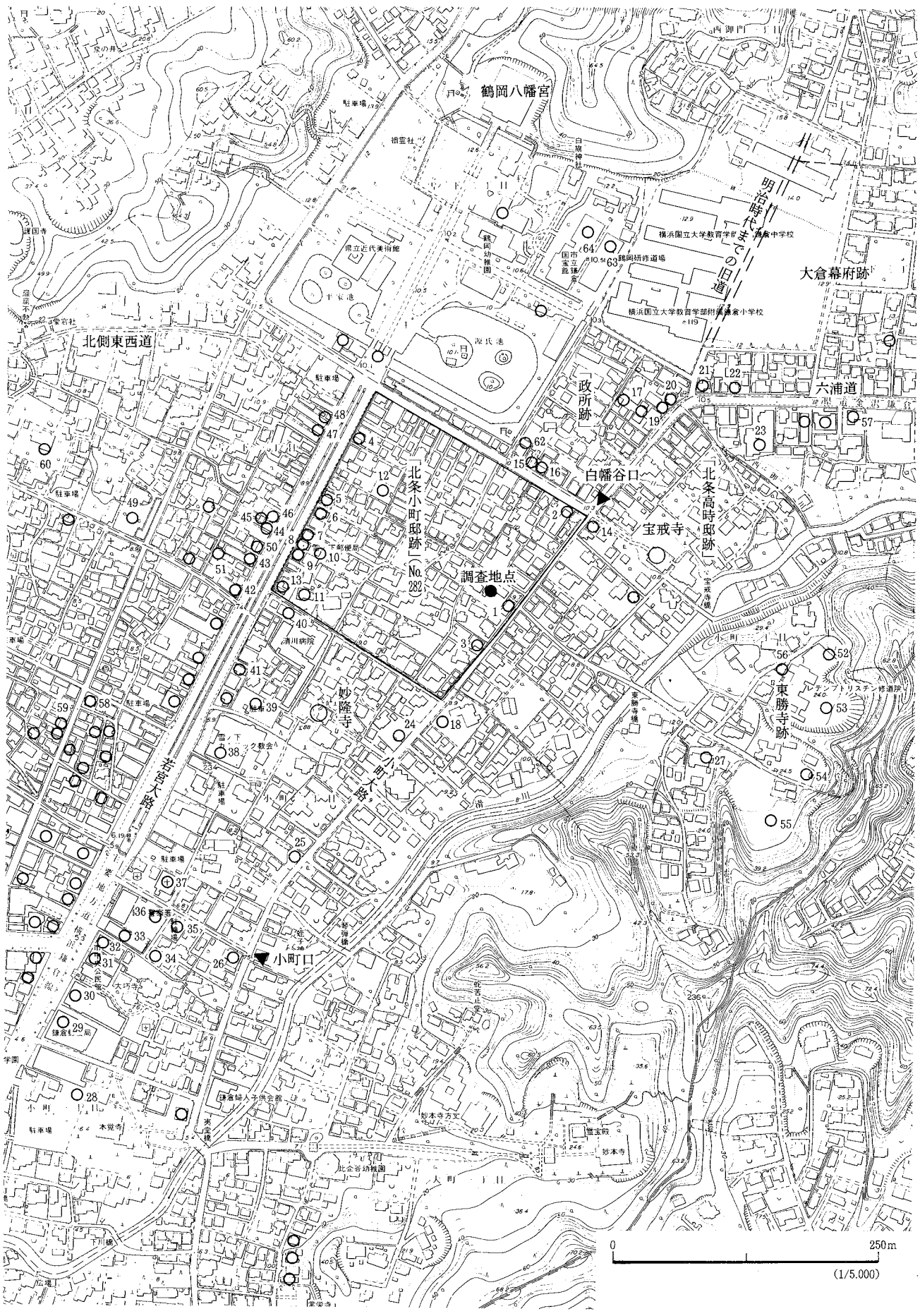


図1　調査地点と周辺の遺跡・旧跡

図１調査地点名

※遺跡名称の「遺跡」「地点」「用地」は省略。略字は以下の通り
北＝北条小町邸跡、雪＝雪ノ下、政＝政所跡、若＝若宮大路周辺遺跡群、北時＝北条時房・顕時邸跡、鶴＝鶴岡八幡宮旧境内

１．北(雪一丁目400番1)　２．北(雪一丁目395番他)　３．北(雪一丁目432番2)　４．北(雪一丁目377番7)　５．北(雪一丁目372番7)　６．北(雪一丁目371番1)　７．北(雪一丁目370番1)　８．北(雪一丁目369番1)　９．北(雪一丁目369番1)　10．北(雪一丁目370番他)　11．北(雪一丁目419番3)　12．北(雪一丁目374番2)　13．北(雪一丁目367番1，368番1)　14．北条高時邸跡(小町三丁目426番3)　15．政(雪三丁目988番)　16．政(雪三丁目987番1・2)　17．政(雪三丁目970番外)　18．若(小町二丁目402番5)　19．政(雪三丁目966番1)　20．政(雪三丁目965番)　21．大倉幕府周辺(雪三丁目606番1)　22．大倉幕府周辺(雪三丁目607番外)　23．大倉南御門Ｂ　24．宇津宮辻子幕府跡(小町二丁目374番1)　25．若(小町二丁目389番1)　26．若(小町一丁目325番イ外)　27．東勝寺跡(小町三丁目468番2外)　28．本覚寺旧境内　29．(推定)藤内定員邸跡(鎌倉中央郵便局)　30．(推定)藤内定員邸跡(中央公民館)　31．(推定)藤内定員邸跡(島森書店)　32．若(小町一丁目309番5)　33．若(スイミングクラブ)　34．若(小町一丁目322番)　35．若(駐輪場)　36．若(小町一丁目321番1)　37．若(小町二丁目345番2)　38．若(雪ノ下カトリック教会)　39．若(小町二丁目354番12)　40．若(小町二丁目366番他)　41．若(小町二丁目361番1)　42．北時(雪一丁目274番2)　43．北時(雪一丁目273番ロ)　44．北時(雪一丁目271番4)　45．北時(雪一丁目271番3)　46．北時(雪一丁目271番1)　47．北時(雪一丁目265番3)　48．北時(雪一丁目293番1)　49．若(雪一丁目198番6)　50．北時(雪一丁目272番)　51．北時(雪一丁目273番イ)　52～55．東勝寺跡(小町三丁目)　56.東勝寺跡(小町三丁目523番14)　57．大倉幕府周辺(雪四丁目620番5)　58.若(小町二丁目５番8)　59．若(小町二丁目12番18)　60．若(雪一丁目210番)　61．若(小町二丁目39番6ほか)　62．政(雪三丁目989番4)　63．鶴(研修道場用地)　64.鶴(国宝館収蔵庫用地)

律令期～平安時代後期

律令時代の鎌倉は、『相摸国封戸租交易帳』に相摸(模)国八郡のひとつとして現れる(『正倉院文書』正集十八―『神奈川県史　資料編』１－58による)。現在の鎌倉市内中心部はおそらく当時の鎌倉郷にあたり、調査地点もこのうちに含まれていたとみられる。広範囲に集落が存在していたようで、市街地からの竪穴住居や掘立柱建物の検出例も漸増している。地点38では石帯部材の駝尾が出土しており(未報告，該品は筆者実見)、律令の官吏が一帯を往来していたことがわかる。地点４でも盤状坏が発見されている(馬淵1996)。

王朝国家期の鎌倉には二十近い寺社があり、12世紀初頭までに荏柄天神社・祇園天王社(大町八雲神社)・御霊神社(坂ノ下)等、都市神の勧請もおこなわれているので、このころすでにかなりの都市的な集住形態が形成されていたことが確実視されている(野口1993・馬淵1994)。市内のいくつかの地点から若宮大路と異なる軸線を持つ平安後期の溝の検出が相次いでおり(地点43－原ほか1988・地点44－馬淵ほか2000・地点50－宗臺ほか1997)、また定窯白磁(地点43－原ほか1988)や渥美刻画文壺(馬淵ほか1985ａ・地点34－宮田ほか1997)など、鎌倉時代以前に属する遺物の出土も珍しいことではない。鶴岡八幡宮境内で創建期以前の層から発見された、板製五輪塔をともなう男女２体の合葬墓(地点64－松尾ほか1985)も、おそらくこの頃、12世紀前半期のものである可能性が高い。

鎌倉時代

鎌倉時代、当地点一帯は政治的中心であった。北側には横大路をはさんで鶴岡八幡宮と政所跡比定地、東側には東勝寺、南側には宇津宮辻子幕府跡比定地(嘉禄元年＝1225以降)がある(文中「比定地」としたのは鎌倉市教育委員会による遺跡名称)。東北にある宝戒寺はもと執権邸といわれる場所である。そして当遺跡付近は北条小町邸跡とも「若宮大路幕府」跡ともいわれる場所である(高柳1959)。以下、この一帯の変遷をみてみよう。

『吾妻鏡』によれば、嘉禄元年(1225) 7月11日に北条政子が死ぬと、前年第三代執権に就任したばかりの泰時はただちに大倉からの「御所」移転を計画する。10月3日に計画が群議され、翌4日、連署北条時房・執権泰時らにより候補地が巡検される。そして、12月にはやくも宇津宮辻子に新御所が完成し、

20日には将軍藤原頼経移徙の儀がおこなわれた。慌ただしい移転に違いないが、これによって政治の中心が大倉の地から若宮大路一帯に移行した。

このときの御所移転について、はやくに須藤博史・貫達人らは『鎌倉市史　総説編』（高柳1959）の史料解釈の誤りを指摘している（須藤／貫1963・貫1989）。すなわち、『吾妻鏡』嘉禄元年十一月廿日条にみえる「東西二百五十六丈五尺。南北六十一丈」という長さが、高柳のいう新御所の大きさではなく、当時仮御所としていた伊賀朝行亭（勝長寿院前）の御寝所からの距離であることを明らかにした。また松尾剛次はそれを図化した（松尾1992・1993）。史料の読みは彼らのとおりに違いない。しかし、なお未解決の問題が残っている。この点については後述する。

この移転にともない、泰時は鎌倉にはじめて丈尺制を導入した。これは平城京や平安京で施行されていた都市の地割制度で、街区を方眼区画に再編しようと意図したことを意味する。また屋敷単位として戸主制を採用した。

11年後の嘉禎二年（1236）、幕府と持仏堂などを「若宮大路東頬」に新造する（三月廿日条）。その場所については、高柳光寿は幕府郭内での北方への移動といい（高柳1959）、松尾剛次は（宇津宮辻子幕府郭外の）「北西寄り」といっている（松尾1992・1993）。しかし、いずれの主張もそれぞれの比定する宇津宮辻子幕府の位置から推測しているので、先にその点を解決しない限り、若宮大路幕府の位置もまた確定することはない。これについても後述したい。

調査地点南方約200ｍの地点24では小町大路側溝とみられる大溝が発見され、「三丈　せきのやまの□□　　宗近」と書かれた木簡も出土した（原1998）。これは幕府が公共事業を御家人に課役として割り当てた工事区間の表示札であり、従来若宮大路側溝からのみ出土していたものである。なお小町大路に関しては、近年、東側側溝が地点14（原1996）・18（野本2001）で、西側側溝が上記地点24のほか地点１（馬淵ほか2002）や地点３（菊川1989ａ）などで検出されており、大路幅の復元がようやく可能になりつつある。それによれば、およそ16mとなる（馬淵ほか2002，「第四章　まとめと考察」）。図上復元ゆえの誤差を考慮に入れれば、これはあるいは、約33m強と判明している若宮大路幅（馬淵1987・同ほか1996）の半分かもしれない。

南北朝時代

鎌倉幕府が滅ぶと、関東十ヶ国を統治する鎌倉府が浄妙寺の南東にでき、政治の中心は再び鎌倉時代以前のように、東西山際道路沿いに移行する。南北朝時代以後、当地付近がどうなっていたかは、あまりよくわかっていない。しかし、調査地点の約100ｍ南にある叡昌山妙隆寺は日蓮宗中山門流の鎌倉における拠点であり、重要な施設であると考えられるので、概略をみておきたい。

妙隆寺は小町大路西側にある日蓮宗寺院で、「日蓮辻説法跡」とされる場所の北（八幡宮方向）100ｍほどにある。一帯は鎌倉幕府の有力御家人であった千葉常胤の子孫胤貞（1288～1336）の故地（別邸か）と伝え、一般に「千葉屋敷」とも呼ばれている。胤貞は下総に広く保有する領地を積極的に経営し、自家とその氏寺である下総中山法華経寺の勢力を不動のものとしていった。妙隆寺は、胤貞が祖先追福のため至徳二年（1385）七堂伽藍をととのえ、中山法華経寺の日英を開山に迎えて開いたという。しかし、胤貞はすでに建武三年（1336）に没しているので、これはのちの付会ということになる。

日英は、日蓮宗諸門流の激しい争いの中で身延山久遠寺の日叡との論争に勝利し、彼以後中山門流は大いに勢力をのばした。妙隆寺は鎌倉における中山門流の拠点となった。激しい修行で知られる第二代の日親は、室町幕府六代将軍足利義教に、宗祖日蓮に倣い『立正治国論』を建白しようとしたが容れられず、捕らえられて拷問を受けた。そのとき灼熱した鍋を被せられても主張を曲げなかったという。

室町時代以後

調査地点南約400ｍの小町大路東側には商業の神である蛭子神社があり、さらに南の「大町四ツ角」近くには町衆の信仰を集めた八雲神社（祇園山王社）がある。室町時代から戦国時代にかけて、一帯は町衆の往来する賑やかな場所であったようである（藤木1993）。上述妙隆寺のほか、このころから本覚寺（永享八年＝1436開創）など調査区南方の市内中心部への日蓮宗寺院の進出が顕著になる。

遺跡地および近辺の調査例

これまで「北条小町邸跡」比定地では、縁辺部を中心に10数箇所で発掘調査がおこなわれている。近隣の調査も併せ、簡単に成果をみておこう。

若宮大路沿いでは７例があり、いずれにおいても大路の東側側溝が検出された。側溝は何度も改修されているが、鎌倉時代中期以降断面箱型の木枠をもち、幅はだいたい３ｍであることが明らかにされている。木枠は、束柱で連結された上下２段の角材によって、側板を固定する構造になっている。

東の小町大路側でも、先述のように側溝が発見されており、若宮大路のそれと同様、箱型の構造をもつ（地点１・３・24）。しかし、両岸が明瞭になった例は少なく、幅など規模は確定的でない。

若宮大路側では溝作事を御家人に課役として割り当てた、当該地点の表示札らしい人名木簡が何例か出土している。地点６では「一丈　伊北太郎跡」・「一丈南　くにの井の四郎入道跡」と書かれた２枚が（馬淵1985）、地点４では「二けん　おぬきの二郎」・「二けん　まきのむくのすけ」・「二けん　かわしりの五郎」と書かれた３枚が出土した（馬淵ほか1996）。この種の木簡は、若宮大路西側の地点47からも「口二丈　あかき［　］入道」の文字の読めるものが出土している（田代ほか1990・宗臺ほか1999）。また、小町大路側溝でも「三丈　せきのやまの□□　　宗近」と書かれた木簡が出土しているのも、先述のとおりである（地点24－原1998）。つまり、若宮大路に限らず大路の側溝等の作事が、公共事業として御家人役でまかなわれていたことがわかる。

このほか、遺跡地北東角近くで横大路南側側溝が検出されている（地点２－菊川1989ｂ）。ここでは側溝幅は約1.9ｍ～２ｍで（報告書掲載図から筆者概測）、本地点で検出されたのと同様の側板構造をもつ。鎌倉時代前期に相当する溝は素掘りで、逆台形の断面形状をもつ。溝の内側には大型の柱穴列が見つかっており、調査者はこれを柵列としている。道路側溝と内側の大型柵列という構成は、やはり鎌倉時代前期を中心に若宮大路の両側で確認されているので、当該期のこの付近における特徴的なあり方なのだろう。このあり方は、鎌倉時代中期以降、変質する。すなわち、柵列が姿を消し、それまで断面Ｖ字形あるいは逆台形で素掘りであった溝が、箱形の木枠を持つようになる。

嘉禄元年と嘉禎二年の御所移転について

二度の御所移転はおそらく地割の変更を余儀なくさせるものであり、調査地点にも多大な影響をおよぼさずにはいなかったはずである。あらためて近年の研究成果を整理しておこう。

嘉禄元年（1225）、北条政子の死の直後、泰時は『御所』移転を計画し、たった二ヶ月で完成させた。この移転について、よく知られているように、かつて高柳光寿は『鎌倉市史　総説編』中で、『吾妻鏡』嘉禄元年十一月廿日条にみえる「東西二百五十六丈五尺。南北六十一丈」という数値を宇津宮辻子幕府の大きさと読み誤り、「東西二百五十六丈五尺」が地形に比べて大きすぎることから、『吾妻鏡』筆記者が「五十六丈五尺」に「二百」を書き加えたとした。

高柳のこの意見については、先述のとおりはやくに須藤博史・貫達人らが史料解釈の誤りを指摘している（須藤／貫1963・貫1989）。すなわち、この数値が、高柳のいう新御所の大きさではなく、方違えにともなって当時仮御所としていた伊賀朝行亭（「大御堂（勝長寿院）前」）の御寝所からの距離であるこ

とを明らかにした。これによれば、朝行亭内御寝所から西に256丈5尺行き、そこから南に61丈下ったところが新御所の乾(北西)の角となる。松尾剛次はこの比定地を図示しており、それにしたがうならば、宇津宮辻子幕府は現若宮大路二ノ鳥居交差点から東の小町大路にいたる道(「宇津宮辻子」か)の北側東半部ということになる(松尾1992・1993)。

須藤・貫・松尾の『吾妻鏡』文言の解釈自体はそのとおりであろう。しかし、松尾の比定した位置は実際の子午線によって東西南北が設定されているため、留保の必要がある。というのは、川副武胤が指摘したように、中世鎌倉にあっては、若宮大路が子午線とみなされていた可能性が高いからである(川副1980)。

どちらが子午線と認識されていたか。御所の位置比定の場合は、松尾の想定する伊賀朝行亭の位置にしたがって後者を使うと、鶴岡八幡宮の社頭付近に宇津宮辻子御所の北西角がきてしまい、『吾妻鏡』の関連諸記事と整合しない。実際の子午線を使ったほうが、松尾の図のとおり、都合よくおさまるようにみえるのは確かである。

しかしその一方で、若宮大路を子午線と想定しなければ説明できない場合がある。それは松尾も触れているように(松尾1992)、小山下野入道生西の「若宮大路家」に対する宇津宮辻子御所と若宮大路御所の位置関係である。

生西の「若宮大路家」は「車大路」にも面していた(『吾妻鏡』安貞二年＝1228　十月十五日条)。つまりその位置は、若宮大路の東側で車大路の北側、すなわち両大路の交差点の北東角になる。そして、生西家からみて、若宮大路御所は「正北方」、宇津宮御所は癸の方向にあたるという(注1)。若宮大路は真北から26度40分東に振れているので、もし実際の子午線が用いられていたとすると、若宮大路の「東頬」(嘉禎二年三月廿日条)にあったはずの若宮大路御所は、大路の西側にきてしまうことになる。この位置関係は、若宮大路が子午線に見立てられていなければ成立しないのである。

このように、須藤・貫・松尾らによっていったん決着がついたかにみえた御所移転問題は、肝心の点にいまだ未解決の部分を残している。小山生西の「若宮大路家」と宇津宮辻子・若宮大路両御所の位置関係は、若宮大路を子午線としなければならないことを示唆している。そして、小山生西家の位置は、「大御堂前」というだけの情報しかない伊賀朝行亭に比べ、より確定的である。とすると、当時の測量技術に誤りがなければ、問題の根幹は「大御堂(勝長寿院)前」にあったという伊賀朝行亭の位置にあることがわかる。松尾剛次が勝長寿院のある谷(大御堂ヶ谷)の入り口に比定しているのは、おそらく間違いである。「大御堂前」とはどこか。それは、勝長寿院の伽藍形式に深くかかわる。しかし、もはやそれは本稿の課題を超えているので、別稿に譲る。

幕府の移転にともなっては、当然近在の諸屋敷も影響を免れ得なかったであろう。この点については最近秋山哲雄が整理している(秋山1996・1997)。

秋山によれば、建保元年(1213)頃当遺跡地方形区画の北半部に泰時亭、宝戒寺の場所に義時亭があり、嘉禄元年に幕府が宇津宮辻子に移転した後は、嘉禎二年の幕府再移転まで当遺跡全体を泰時亭が占めるようになる。この年、「若宮大路の東頬」へ再移転した後、遺跡地は三つに分割される。すなわち南側に幕府、北側に経時亭、その間に泰時亭がある。秋山は、宝治元年(1247)以後経時亭および泰時亭は合わせて重時に相伝され、一方宝戒寺の地が得宗亭となるという。秋山は時宗以後の当遺跡地については、南半部に幕府を想定し、北域は不明としている。

この説の前半部には汲むべきところがあるが、嘉禎二年の幕府再移転については、基本的に北方向への移動であることを前提としているため、検討の必要があろう。両幕府の位置関係から、若宮大路幕府

は宇津宮辻子幕府の北西に位置していなければならないからである。

『吾妻鏡』同年六月二十六日条に、将軍藤原頼経は、宇津宮辻子御所からみて若宮大路御所が、方角のよくない乾方向(北西)に当るのではないかとの疑いを持った、という記事がある。これは結局そうではないことが判明するが、大きくみて北西方面という認識がなければこの疑念は発生しないはずである。とすれば、松尾剛次のいうように、もし宇津宮辻子幕府が若宮大路から小町大路の間の東半分(小町大路側)の区画を占めていたとすると、若宮大路幕府は西半分の北寄りに移転したと考えれば、『吾妻鏡』と矛盾は生じないことを指摘しておきたい。いずれにせよ方形区画内で地割改編があったことは確かであろうから、秋山の意見を参考として挙げておいた。

注1　『吾妻鏡』嘉禎二年(1236)四月四日条に、「(小山下野入道生西の若宮大路家は)為丁方之由」とあり、逆に生西の若宮大路家から宇津宮御所を見れば、癸(丁の反対方向)に相当することになる。

(引用・参考文献は第四章末に一括した)
(馬淵)

第２章　調査の概略

１．調査にいたる経緯

平成12年11月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎工事にともなって地盤の柱状改良を実施する計画であったため、工事の実施により埋蔵文化財に影響を及ぼすおそれのあることが予想された。このため確認調査を実施したところ地表下60cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者と協議を行ったところ、当初の計画どおりに工事を実施したいという意向が示された。このため工事の実施による遺構の損傷は避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく届出手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成13年１月24日から３月30日までの予定で発掘調査を開始した。

２．調査方法

掘削方法

調査地点は狭い路地の奥にあるため、残土の場外搬出は不可能であった。そのため、調査区を南北２区に分割して残土置き場を確保した。すなわち、まず北半部（Ⅰ区）を調査し、その際の残土を南半部に置く。次に、調査の終了した北半部に残土を移し、南半部（Ⅱ区）の調査に入る。残土は北半部に排出することになる。

掘削は重機で表土を除去したのち、人力により掘り下げた。

測量基準設定

方眼設定方法は次のとおり。

まず、便宜上小町大路を子午線に見立てた上で、鶴岡八幡宮方向を「北」と認識した。その上で、方眼軸線を小町大路の軸線とはほぼ平行・直交するかたちで、５ｍおきに配した。これは測量の際の利便性を優先させたためであり、国土座標系には一致しない。また、2000年10・11月におこなわれた隣接の雪ノ下一丁目400番地点のそれと、方位は一致するが軸線は共有しない。設定にあたっては、近在の小町大路路上にある鎌倉市４級基準点Ｔ041・Ｔ042、および調査区北側路地上のＴ078を使用した。

設定にあたっては、まず調査区外北西に任意点１－Ａを設け、そこから東と南に５ｍ間隔で軸線を配し、東西軸線には算用数字を、南北軸線にはアルファベットの名称を付した。各方眼区画は北西角の軸線交点により呼称される。

交点３－Ｂにおける座標成果は次のとおり。

〔AREA ９〕

Ｘ－75549.514

Ｙ－24901.948

北緯35-19’ 07″　　東経139-33'33″

方眼南北軸とＹ系との偏差は次のとおり。

Ｎ－34° 14'40" －Ｅ

水準原点は、宝戒寺門前にある鎌倉市№53210（海抜9.925ｍ）を使用した。

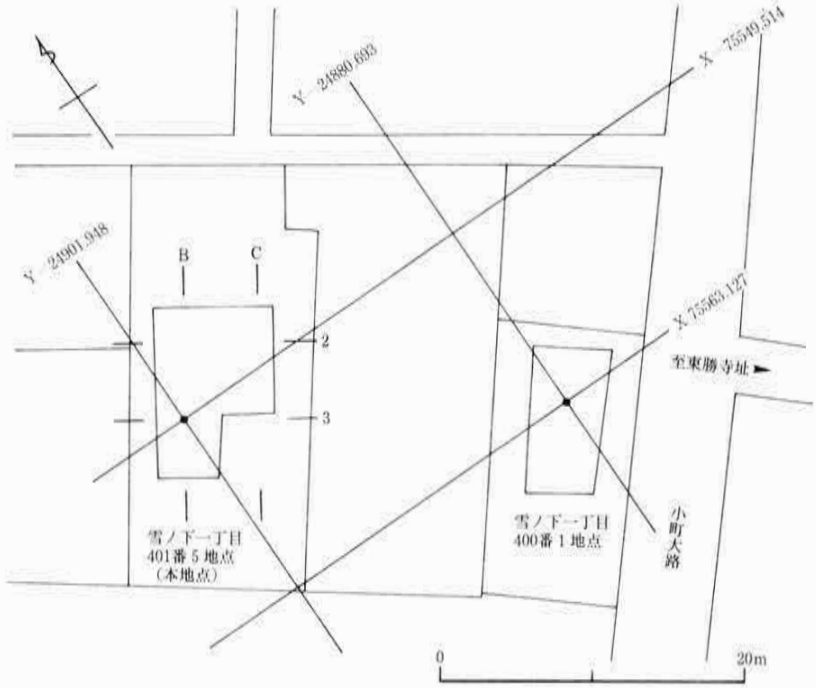


図２　調査区設定図

３．調査経過

調査は平成13年１月23日から同年３月30日までを要した。その間のおもな作業内容は次のとおり。

１月23日（火）　機材搬入とテント設営、および重機によるⅠ区の表土掘削
29日（月）　測量基準点設置
２月８日（木）　上層遺構面１全景写真撮影
９日（金）　平面実測
14日（水）　上層遺構面２全景写真撮影
15日（木）　平面実測
19日（月）　下層遺構面全景写真撮影
20日（火）　平面実測と中世以前の落込みを深掘り
22日（木）　調査区壁土層断面実測
23日（金）　深掘り部分写真撮影・平面実測
２月26日（月）　Ⅰ区埋め戻し
27日（火）　Ⅱ区表土掘削
３月６日（火）　Ⅱ区北半部平面実測
12日（月）　溝１写真撮影、北半部平面実測
13日（火）　溝１根太取り上げ後写真撮影
16日（金）　溝２平面実測
21日（水）　北半部上層面・溝２全景写真撮影
27日（火）　溝土層断面写真撮影
28日（水）　溝土層断面実測
30日（木）　機材撤収

（２・３馬淵）

第３章　調査結果

第1節　概要

１．層序と面のあり方

地表下には40 ～ 60cmの厚みで近代以降の客土層がある。これを排除すると、直下に遺構を多く含んだ中世層が現われる。はやくも基盤層に近い黒褐色粘質土である。これを上層遺構群とした(図３土層番号２・11上面)。標高は９ｍ前後で、上面は削り取られているらしく、面上遺物はほとんど採集されなかった。遺構そのものは多く検出されたが、本来の切り込み面が失われ、すべて同一の面から検出されるために、年代区分は困難であった。しかしそれでも、切り合い関係や土層の検討から大きく３群に分けることができたので、それぞれの遺構群を「上層１群」・「上層２群」・「上層３群」と名付けた(図３土層番号４・５・６上面)。

調査区南半部には、しっかりとした木枠をもつ大型の溝が東西方向に走行し、ここに何らかの区画があったことを推察させた。溝部分の土層断面については別に示した(図４)。

上層遺構群の載る黒褐色粘質土は、20 ～ 30cmの厚みがある。これを除くと、中世基盤層となる。鎌倉市内に通有の黒褐色強粘質土で、形成時期は明確でない。おそらく一帯が乾陸化していく過程で、古滑川の川底に形成された堆積土と考えられる。層の上面は生活面として使用されており、面上から柵列、もしくは掘立柱建物とおぼしい柱穴列、そして上層と同じ位置に大型の東西溝が検出された。面の標高は8.7 ～ 8.85ｍである。これを「下層遺構群」とした(図23)。

基盤層の黒褐色粘質土は厚さ15 ～ 20cmで、その下は茶色味を帯びた明灰色砂質土層となる。

Ｉ区においては、中世層の精査中、中世基盤層に切り込まれたような土色の異なる部分があったので、確認のため深掘りをおこなった。最終的に中世基盤層からの深さ約80cm、標高7.85ｍまで掘ったが、人為的な落込みとの確証を得ることはできなかった(図版15)。

(馬淵)

第２節　各説

１．上層１群

灰色っぽい黄褐色砂質土が埋土として含まれていることをこの群の特徴とする。これらの遺構の土は水分をあまり含まず、ざらざらとしたもので、他の遺構の埋土とは明らかに性質が異なっている。

検出遺構として、小溝群１群・土坑１基がある。

小溝群(図５)

位　　置　：　１・２－Ａ～Ｃ

断 面 形　：　逆台形またはＵ字形

規　　模　：　幅11 ～ 104cm×深さ10 ～ 24cm

流下方向　：　一定せず

主軸方位　：　Ｎ－60°　－Ｗ(平均)

特記事項　：　形状が一定せず、深さも不安定で、性格を把握しにくい。残存状態も良好ではなく、かなり上層の遺構であったと推測する。

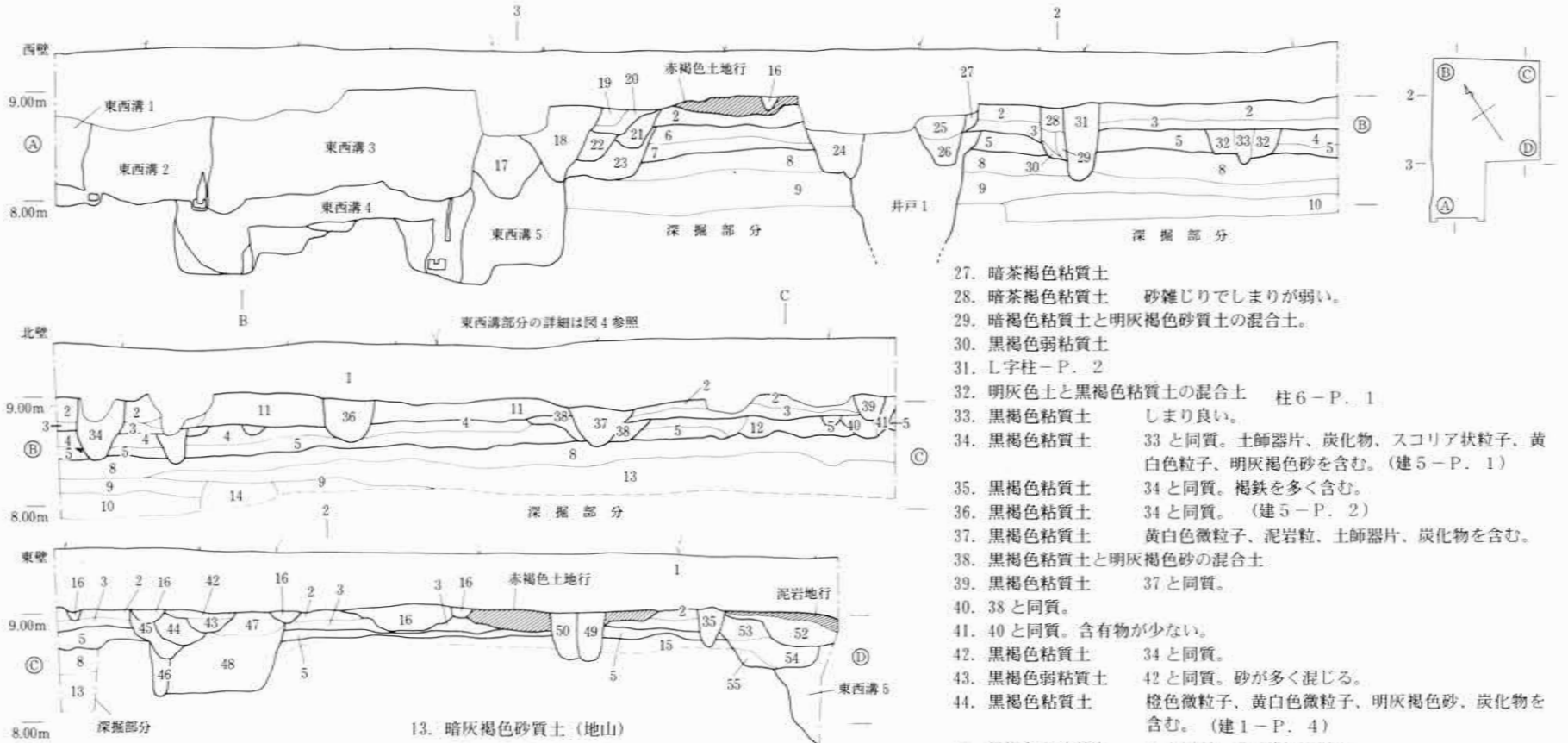
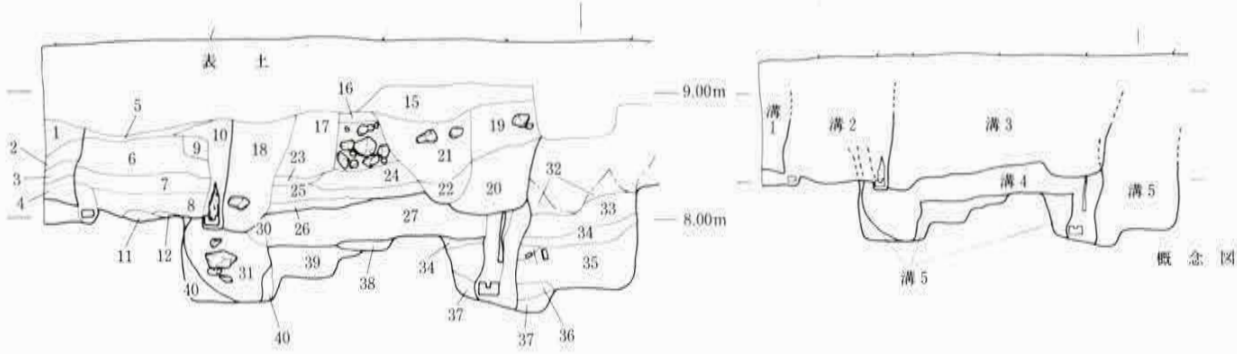


図 3　調査区壁土層図

1．表土
2．黒褐色粘質土
3．黒褐色粘質土
4．黒褐色粘質土と明灰褐色砂質土の混合土
5．黒褐色粘質土と明茶灰色土の混合土
6．黒褐色粘質土　　3と同質。褐鉄を含む。
7．明茶灰色砂質土　　褐鉄を多く含む。
8．明灰茶色砂質土（地山）
9．明灰褐色砂質土（地山）
10．暗灰褐色土（地山）
11．黒褐色粘質土
12．黒褐色粘質土と明灰褐色砂の混合土
13．暗灰褐色砂質土（地山）
14．暗青灰色砂質土（地山）
15．明茶灰色砂質土（地山）　　7と同質。
16．黄褐色砂質土　　上層（1）面小溝群覆土
17．暗茶褐色粘質土
18．暗茶褐色粘質土　　多量の泥岩粒を含む。
19．灰茶褐色砂質土　　16と同質。（柱4－P．1）
20．暗茶褐色粘質土
21．暗茶褐色粘質土
22．暗茶褐色粘質土
23．暗茶褐色粘質土　　（柱7－P．1）
24．L字柱－P．1
25．明黄灰色砂質土　　硬くしまる。
26．明黄灰色砂質土　　硬くしまる。
27．暗茶褐色粘質土
28．暗茶褐色粘質土　　砂雑じりでしまりが弱い。
29．暗褐色粘質土と明灰褐色砂質土の混合土。
30．黒褐色弱粘質土
31．L字柱－P．2
32．明灰色土と黒褐色粘質土の混合土　　柱6－P．1
33．黒褐色粘質土　　しまり良い。
34．黒褐色粘質土　　33と同質。土師器片、炭化物、スコリア状粒子、黄白色粒子、明灰褐色砂を含む。（建5－P．1）
35．黒褐色粘質土　　34と同質。褐鉄を多く含む。
36．黒褐色粘質土　　34と同質。（建5－P．2）
37．黒褐色粘質土　　黄白色微粒子、泥岩粒、土師器片、炭化物を含む。
38．黒褐色粘質土と明灰褐色砂の混合土
39．黒褐色粘質土　　37と同質。
40．38と同質。
41．40と同質。含有物が少ない。
42．黒褐色粘質土　　34と同質。
43．黒褐色弱粘質土　　42と同質。砂が多く混じる。
44．黒褐色粘質土　　橙色微粒子、黄白色微粒子、明灰褐色砂、炭化物を含む。（建1－P．4）
45．黒褐色弱砂質土　　44と同質。砂が多く混じる。
46．明灰色砂質土と黒褐色粘質土の混合土
47．黒褐色粘質土　　明灰茶褐色砂、黄白色微粒子、褐鉄を含む。
48．黒褐色弱粘質土　　47より多く砂を含む。微粒子はなし。　（土坑18）
49．茶褐色粘質土　　橙色・黄白色・黄褐色微粒子と明灰褐色砂を含む。
50．茶褐色粘質土　　黄白色微粒子だけを多く含む。
51．暗褐色粘質土
52．暗褐色粘質土　　黄灰色砂、泥岩粒を多く含む。（柱4－P．13）
53．暗褐色弱粘質土
54．暗褐色弱粘質土　　53と同質。黄灰色砂を寄り多く含む。
55．黄灰色砂質土　　暗褐色粘土を少し含む。　（柱7－P．7）

0　2m



1．暗褐色砂質土　　泥岩粒，土師器片，炭化物を含む。
2．明黄褐色砂質土　　貝砂粒を含む。
3．明黄褐色砂質土　　微量の木片，泥岩粒を含む。
4．明黄褐色砂質土　　土師器片，泥岩粒を含んだ砂利層。
} 東西溝1

5．灰茶褐色砂質土
6．灰茶褐色砂質土　　土師器片，泥岩片，炭化物を含む。
7．灰褐色砂層　　底層部に，砂利と土師器片が多量に堆積する。
8．黄灰褐色砂が混入する弱粘質土
9．暗褐色粘質土と黄灰褐色砂質土の混合土
10．暗褐色粘質土　　炭化物，土師器粒，泥岩粒，スコリア状粒子を含む。
11．暗褐色砂質土
12．暗褐色砂質土
13．暗褐色砂質土
14．暗褐色砂質土　　泥岩片，土師器片，炭化物を含む。粘性強。
15．灰茶褐色砂質土
} 東西溝2

16．暗褐色粘質土内に，厚さ1cmほどの泥岩が層状，成す。硬くしまる。
17．灰茶褐色砂質土　　泥岩片，土師器片，炭化物，スコリア状粒子を多量に含む。
18．灰茶褐色砂質土　　17と同質。含有物は少ない。
19．暗茶褐色粘質土　　多くの土師器片，炭化物を含む。
20．暗茶褐色粘質土　　19と同質。
21．黄灰褐色砂質土　　泥岩片，土師器片，砂利が混入する。
22．暗褐色弱粘質土　　しまり弱い。
23．黄灰褐色砂を含む粘質土
24．暗褐色粘質土　　土師器片，炭化物を多量に含む。
25．暗褐色粘質土　　底層部に土師器片が堆積する。
26．黄灰色砂質土　　しまり弱い。土師器片を多く含む。
} 東西溝3

27．灰黄褐色砂質土　　上層に泥岩，下層に玉砂利が占める。全体に土師器が多く混入。
28．明青灰色砂質土　　上層に多くの土師器片，泥岩が混入する。
29．明青灰色弱粘質土
30．黄灰色砂と貝砂粒を含む弱粘質土
31．明青灰色砂と貝殻片，土師器片が混入する弱粘質土
} 東西溝4

32．暗茶褐色粘質土
33．暗茶褐色粘質土と黄灰褐色砂質土の混合土　　木片を含む。
34．灰茶褐色砂質土
35．明青灰色粘質土　　砂混じりの土。含有物が殆どない。
36．黒褐色砂質土　　貝殻砂粒を多量に含む。
37．明青灰色砂を含む粘質土
38．灰褐色砂を含む粘質土（ピット覆土）
39．青灰褐色砂を含む粘質土（ピット覆土）
40．明青灰色砂を含む粘質土
} 東西溝5

0　2m

図4　調査区西壁　東西溝部分土層図

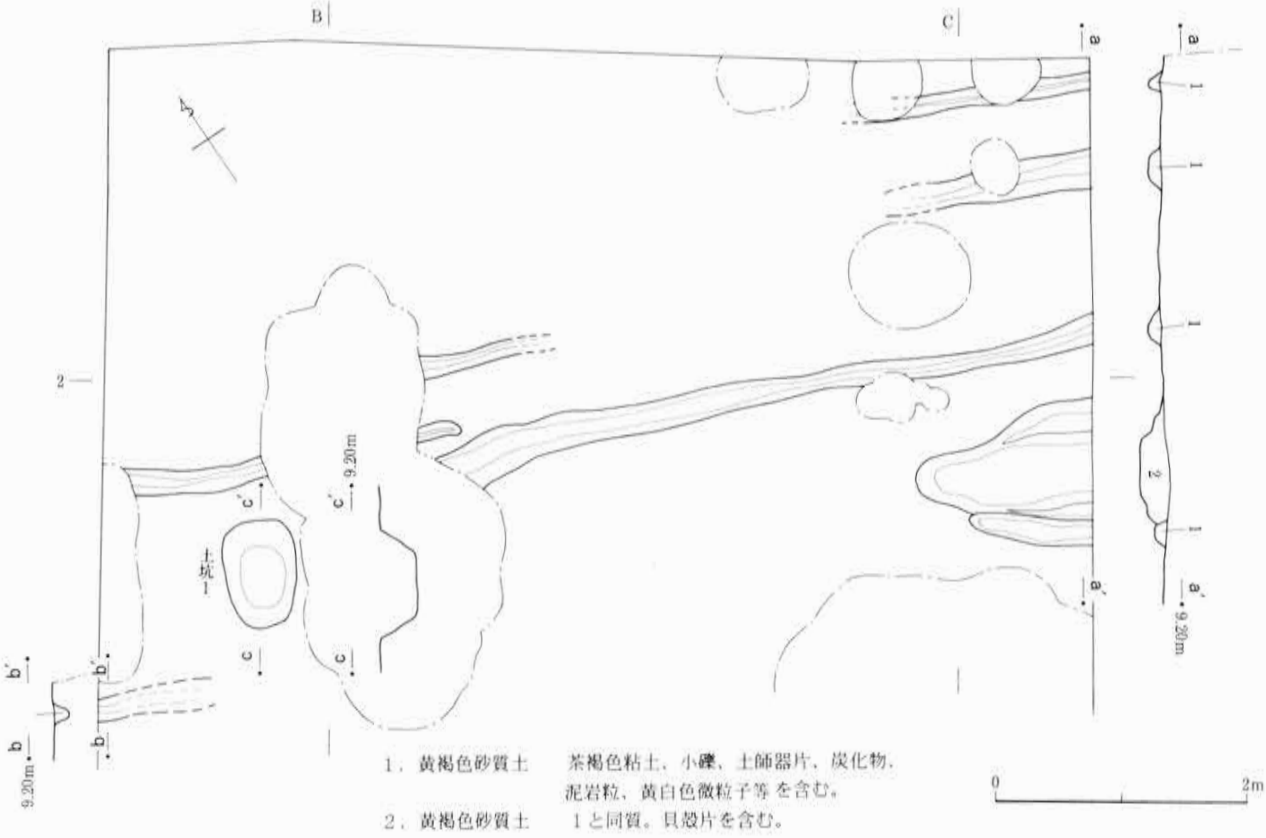


図５　上層１群　小溝群・土坑１

土坑１（図５）

位　　置　：　２－Ａ
平 面 形　：　長円形
断 面 形　：　逆台形
規　　模　：　長径86cm×短径56cm×深さ29cm
主軸方位　：　Ｎ－34°　－Ｅ
特記事項　：　埋土から同時期のものと判断した。

２．上層２群

本群として挙げる遺構は、赤褐色のざらついた土による地行面と、そのなかに掘り込まれた小溝のみである。層序的に上記１群と次の３群との間に位置する。

赤褐色土地行（図６）

位　　置　：　２－Ａ～Ｃ
規　　模　：　幅182cm（最大）×深さ約1 ～ 20cm
主軸方位　：　Ｎ－59°　30′　－Ｗ
特記事項　：　浅い落ち込みの中に赤褐色土が東西方向に帯状に堆積する。南側にかけて残りがわるいが、おそらくは溝沿いに敷設された版築遺構の一部と考える。通路のようなものか、あるいは掘り込み地行の下部構造だろうか。次項小溝はその付帯施設か。

小溝（図６）

位　　置　：　２－Ｂ・Ｃ

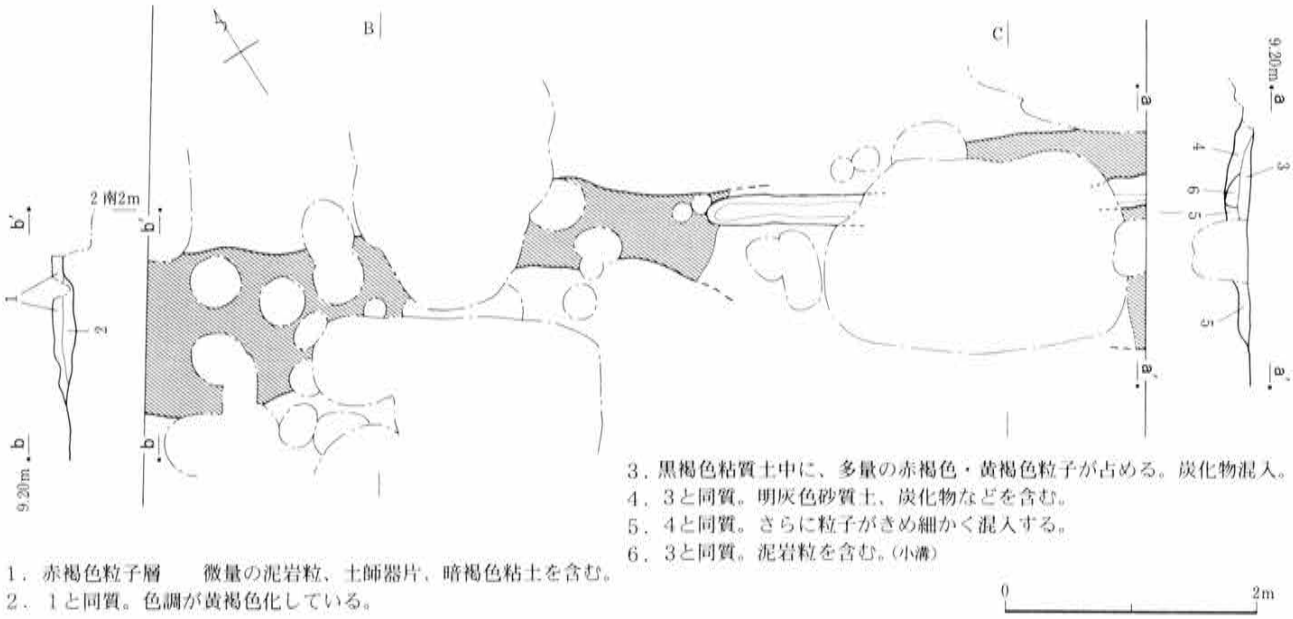


図６　上層２群　赤褐色土地行

規　　模　：　幅24cm(最大)×深さ約10cm
主軸方位　：　N－61°　－W
特記事項　：　上記赤褐色土地行の上面から掘り込まれ、主軸方位を同じくする。何らかの付帯施設であろう。

３．上層３群

上層１・２群と検出高は同じ。多数の中世遺構が掘り込まれているが、生活面らしき痕跡は窺えない。上述のように、上層面を検出した段階で、はやくも基盤層の黒褐色粘質土漸移層が現われる。上層にあったと推測される生活面は削られ、遺構個別の切込み面は不明である。そのため、切り合い関係を持たない遺構は新旧の判断がつきかねた。より後代の掘り込みが混在している可能性は低くない。

調査区南半部には大型の溝が東西に走行している。この溝は何度か改修されており、そのうち４条が当該層に属する。このほかこの群に帰属する遺構として、掘立柱建物５棟・Ｌ字形柱穴列１列・柱穴列３列・土坑５基がある。

東西溝１(図８)

位　　置　：　３－Ａ・Ｂ
規　　模　：　幅43cm以上(南側未検出)×深さ(最大)　80cm
断 面 形　：　箱型？
流下方向　：　東→西(高低差10cm)
主軸方位　：　N－57°　－W
出土遺物　：　土師器皿Ｒ種(１～５)
特記事項　：　北側の落ち込み肩が検出されただけで、大半は南側の調査区外にある。土層観察から東西溝の一部であると認識した。埋土は全体に砂っぽく、溝底には砂利が堆積している。

土師器はすべてＲ種で共伴遺物に乏しいが、３の中型器種があるところから、13世紀後半を中心に14世紀前半までを含む、鎌倉時代後期とみたい。

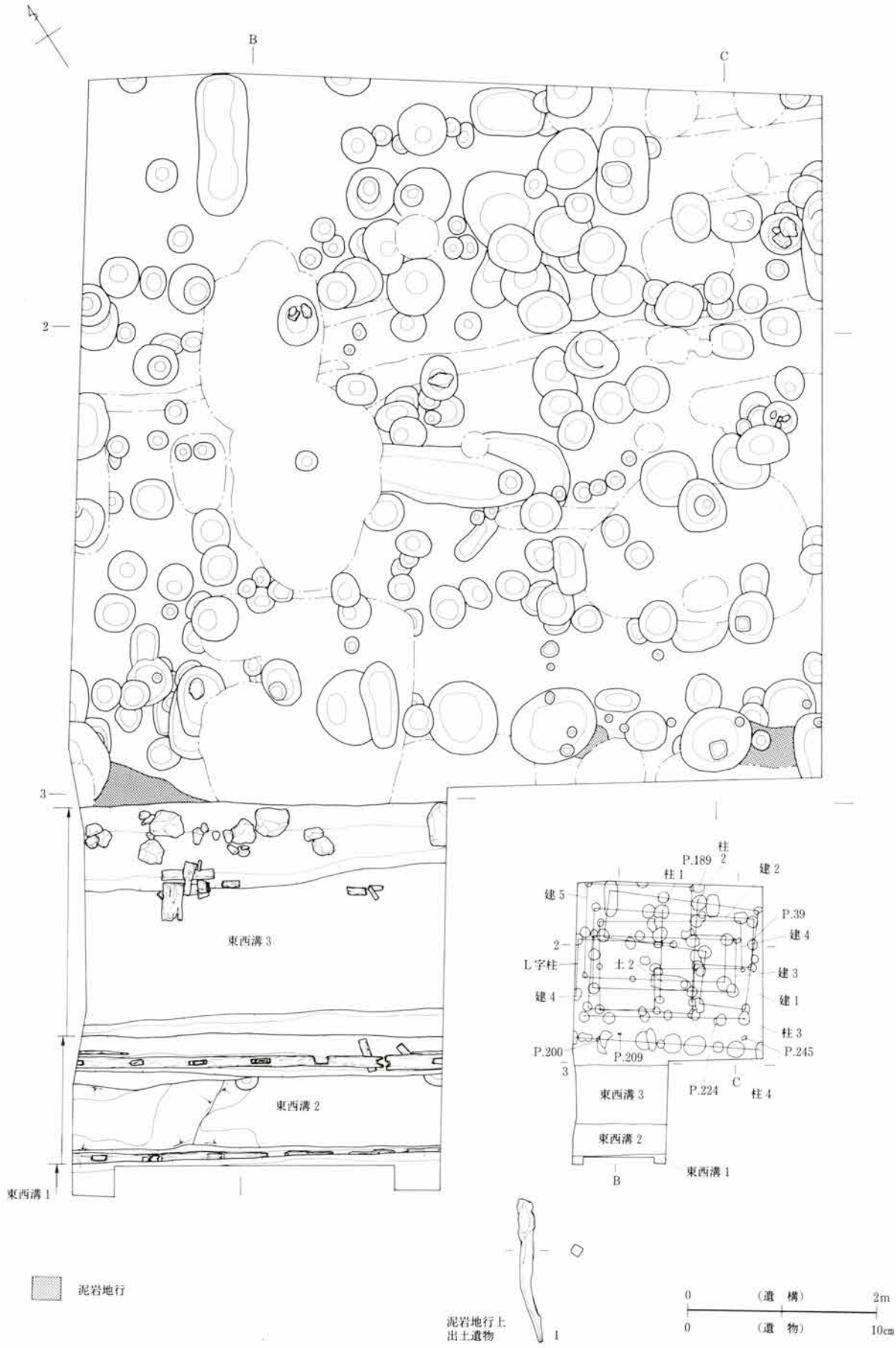


図7　上層3群遺構全図，同面上出土遺物

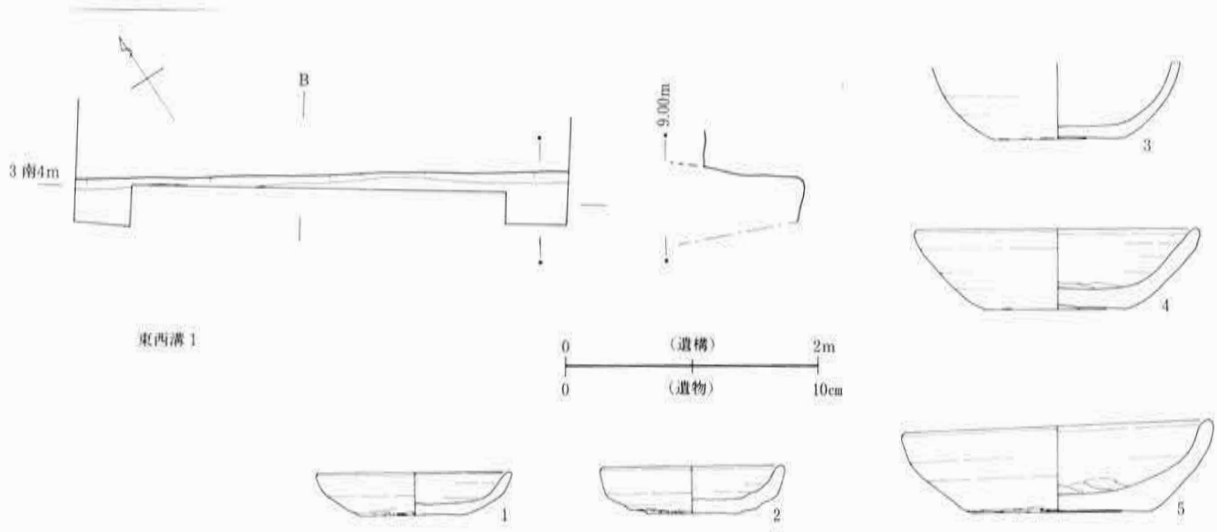


図８　東西溝１，同出土遺物

東西溝２(図９・10)

位　　置　：　３－Ａ・Ｂ

規　　模　：　掘方幅164cm以上(南側掘方未検出)×深さ(最大) 72cm
木枠芯々距離100cm

断 面 形　：　箱型

流下方向　：　東→西(高低差10cm)

主軸方位　：　Ｎ－5.9°　－Ｗ

出土遺物　：　部材(１～10)・土師器皿Ｒ種(10～15)

特記事項　：　埋土は東西溝1と類似する砂質土である。北側の壁際は小溝状に深く掘り込まれ、その中に木枠下段の根太が据えられている。根太にあけられたホゾ穴のうち、３穴に束柱が残る。また調査区南縁でも、同様の木枠下段が見つかった。検出高も同じで、部材の材質や構造も共通しているので、この二つは対をなして同一の溝の両側に設置されていた可能性が高い。木枠間の芯々距離はおよそ１ｍであるが、南側の掘方は発見されていないので、溝幅はもっと南へひろがる可能性も考慮しておかなければならない。

調査区西壁近くの北壁際に、木枠らしい板材が残存している。溝底面はおおむね平坦といえるが、西側が浅く落ち窪んでいる。

部材には根太(１～３)と束材(４・５)がある。根太には65cm間隔でホゾ穴があけられている。束材は根元部分のみで、片側が抉られている。土師器皿は大半が器高の高い薄手のもので、13世紀後半～14世紀初頭、すなわち鎌倉時代後期に位置づけられる。

東西溝３(図11)

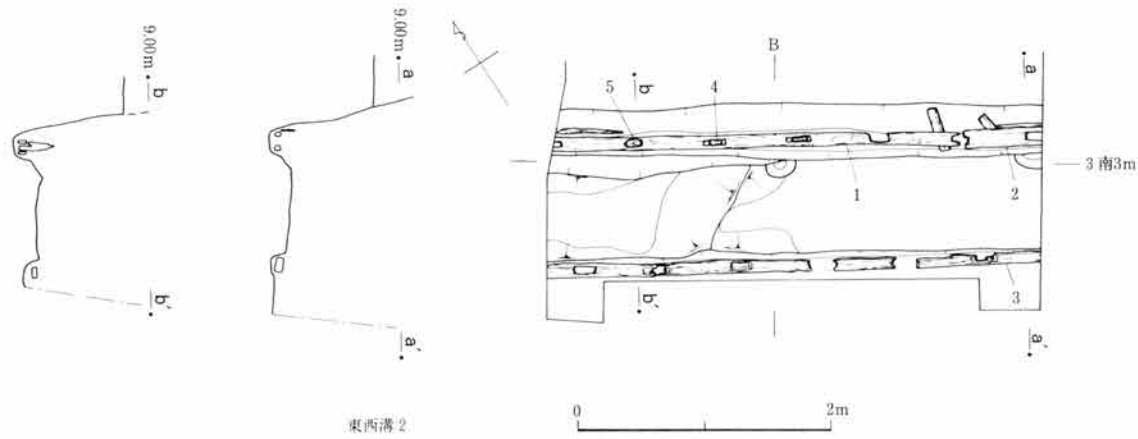
位　　置　：　３－Ａ・Ｂ

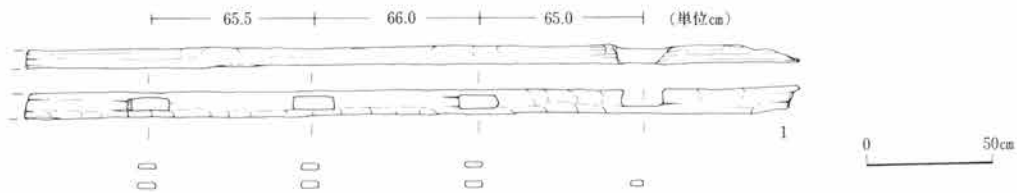
規　　模　：　幅約310cm(推定)×深さ(最大)約90cm

流下方向　：　高低差なし

主軸方位　：　Ｎ－60°　－Ｗ

出土遺物　：　土師器Ｒ種(１～17)・土師器転用円盤(18)・土器碗(19)・常滑こね鉢Ⅰ類(20)・常





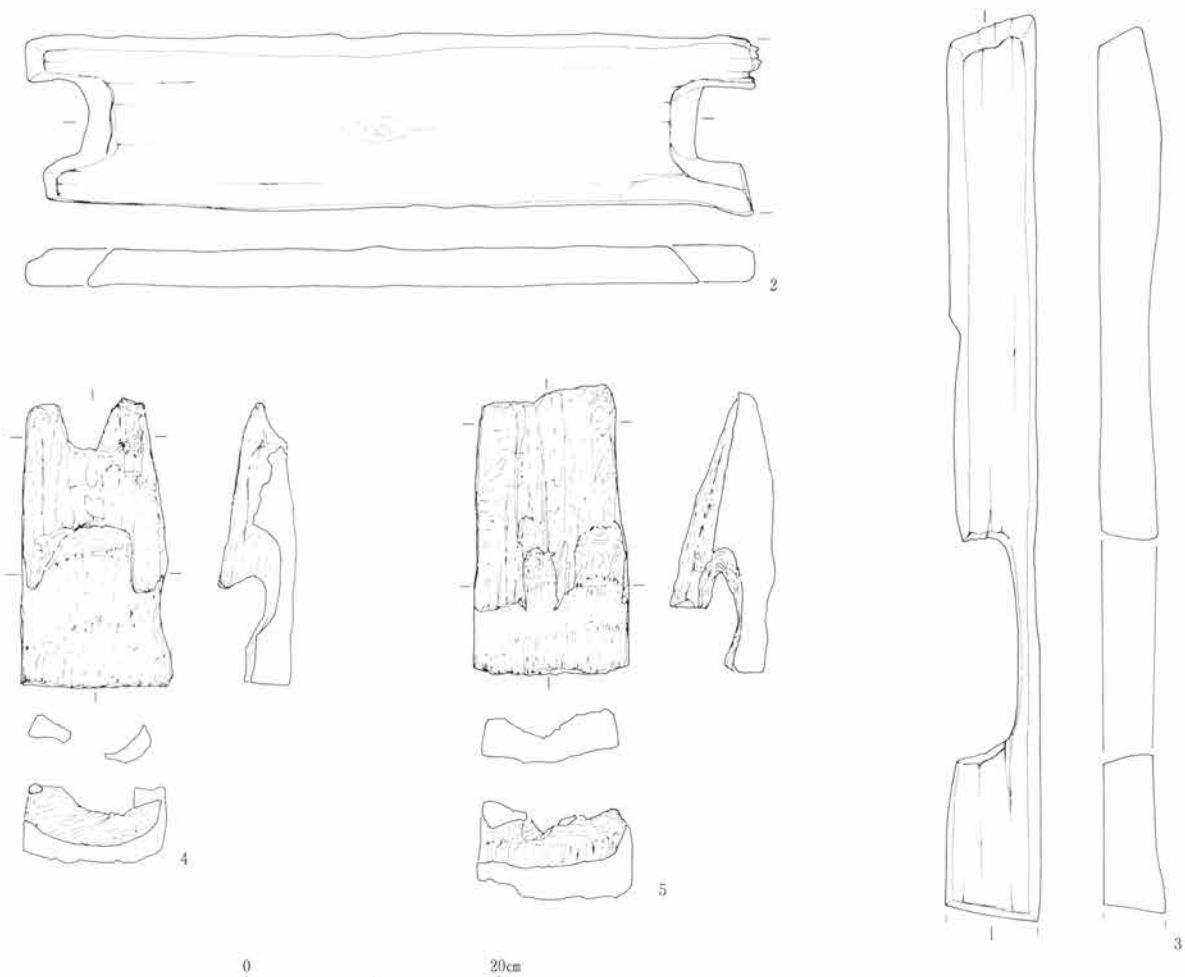


図９　東西溝２，同出土遺物(1)－部材

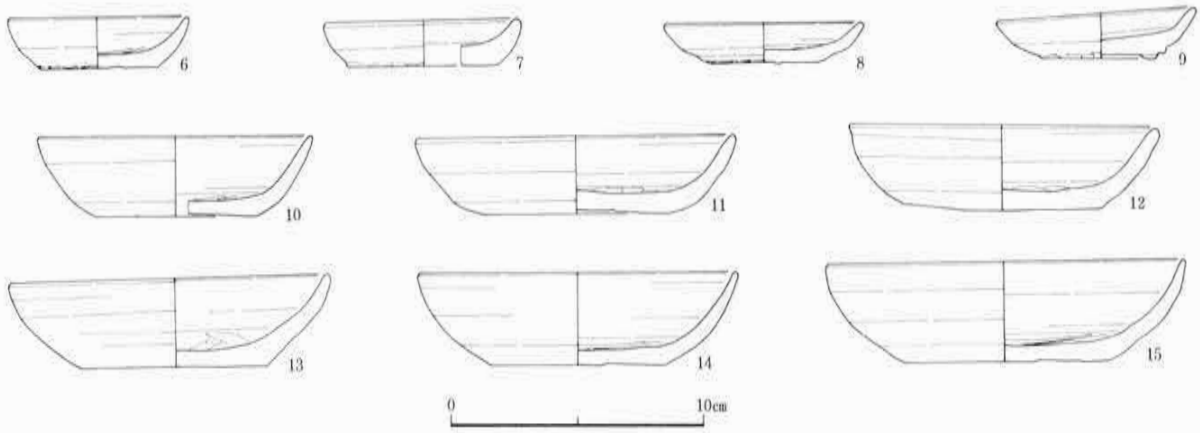


図10　東西溝２出土遺物(2)

滑甕(21)

特記事項　：　北側溝縁沿いの埋土上層には、木枠の裏込めとみられる人頭大の泥岩が多数並べられていた。下層の土は水分を含んで軟らかく、溝底近くでは土師器を中心とした多数の遺物が堆積している。中間層の一部では炭化物の堆積が検出された。南側の壁は東西溝２によって失われているが、溝幅は推定で３ｍ前後になろう。上部が削り取られていることを考慮すれば、深さも１ｍほどにはなると推測できる。これは若宮大路側溝に匹敵する規模である。

部材の一部とみられる木製品は、腐食がはげしく詳細は不明である。しかし、掘方形状は、若宮大路のそれと同じく、上下２段の角材を束で連結し、側板を押し当てて外側から裏込め土の圧力で固定する、という構造であることを示している。

北岸寄りに大型の礎板が５枚重なり合ったところがある。その東約２ｍの溝壁に平行した位置にも、数枚の礎板がある。前者の支える上部構造を想定するとすれば、それは相当の重量物であり、溝施設のうちでは橋脚がもっとも妥当であろう。後者には前者ほどの重なりはみられない。しかしこれも、流出の可能性を考慮に入れた上で、ほぼ２ｍという、鎌倉後期建築物の柱間に一般的な数値に当てはまる点に留意すれば、前者と対になって橋脚の基礎をなしていた可能性があろう。

出土土師器はＲ種に限られる。大型品は内湾する器壁をもつ深めのもので、小型品は全体に浅いものが多く、口径と底径の比率が小さめといっていい。搬入品が少なく年代比定の材料に乏しいが、13世紀中葉前後から同第３四半期とみたい。

建物１(図12)

位　　置　：　１・２－Ａ～Ｃ

規　　模　：　東西３間(平均柱間距離2.09ｍ)×南北２間(平均柱間距離2.02ｍ)

面　　積　：　16.9㎡

南北軸方位：　Ｎ－40°－Ｅ

特記事項　：　カギ型に折れた建物。東西・南北とも１間のみで、建物としての根拠にやや欠けるきらいはあるが、深くてしっかりした柱穴の並びではあるので、掘立柱建物として抽出しておいた。10穴のうち７穴が深さ60㎝を超える。

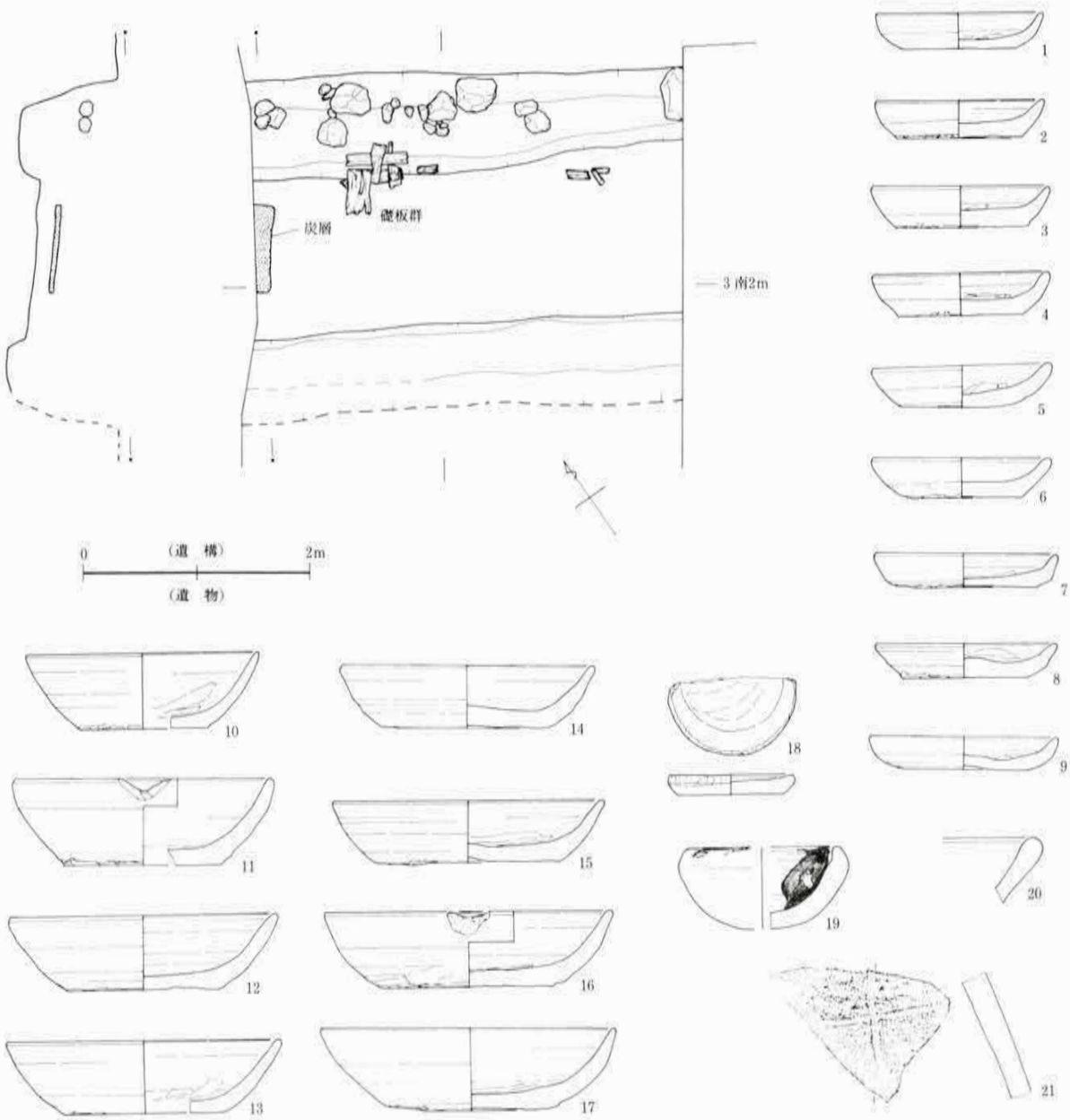


図11　東西溝３，同出土遺物

建物２（図13）

位　　置　：　１・２－Ａ～Ｃ

規　　模　：　東西３間（平均柱間距離2.22ｍ）×南北２間（平均柱間距離2.08ｍ）

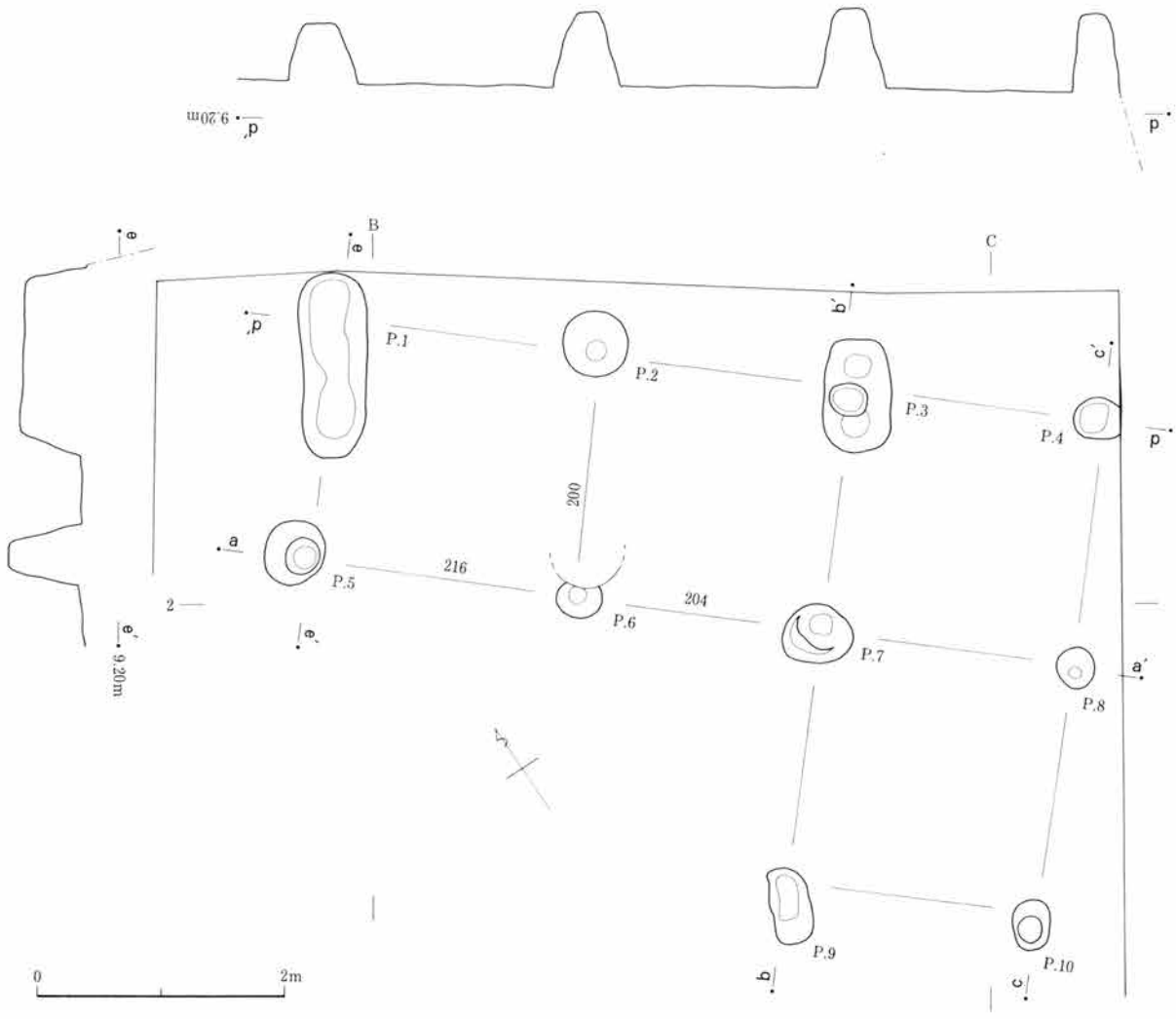
面　　積　：　23.1㎡

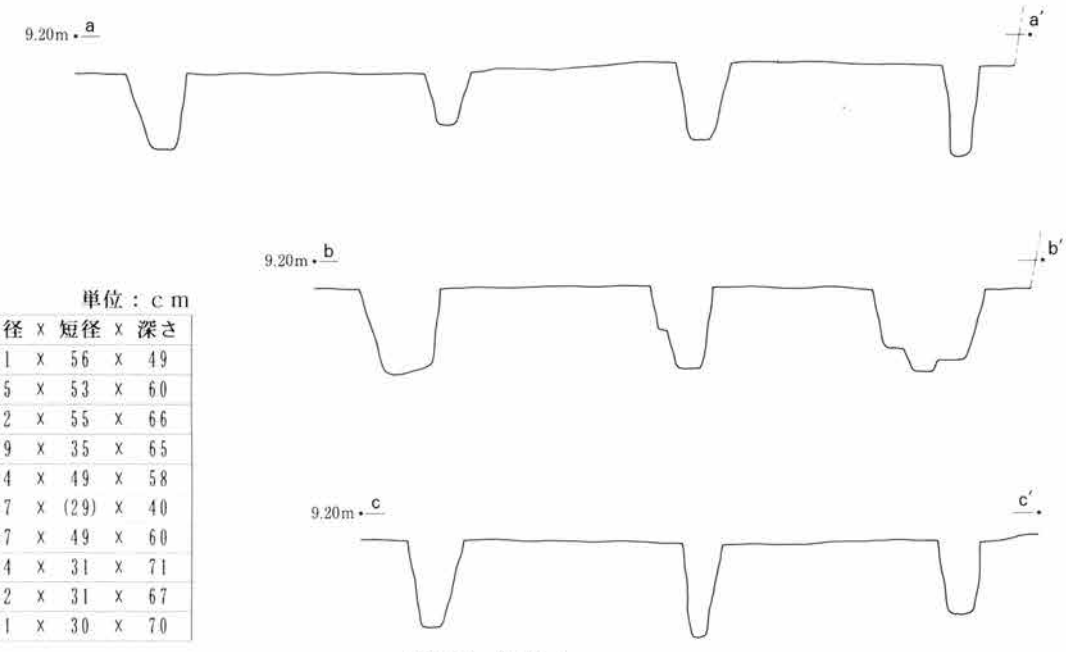
南北軸方位：　Ｎ－40°　－Ｅ

出土遺物　：　土師器Ｔ種（１）・常滑甕（２）

特記事項　：　北と東西の調査区外に伸びる可能性がある。

Ｐ．９から出土した常滑甕（２）は、中野晴久らの生産地編年によれば第３形式、すなわち12世紀第４四半期に位置づけられるが（赤羽一郎／中野1994）、掘立柱建物の柱穴出土遺物の年代を建物存続期に結び付けられるかどうかは検討の要があろう。

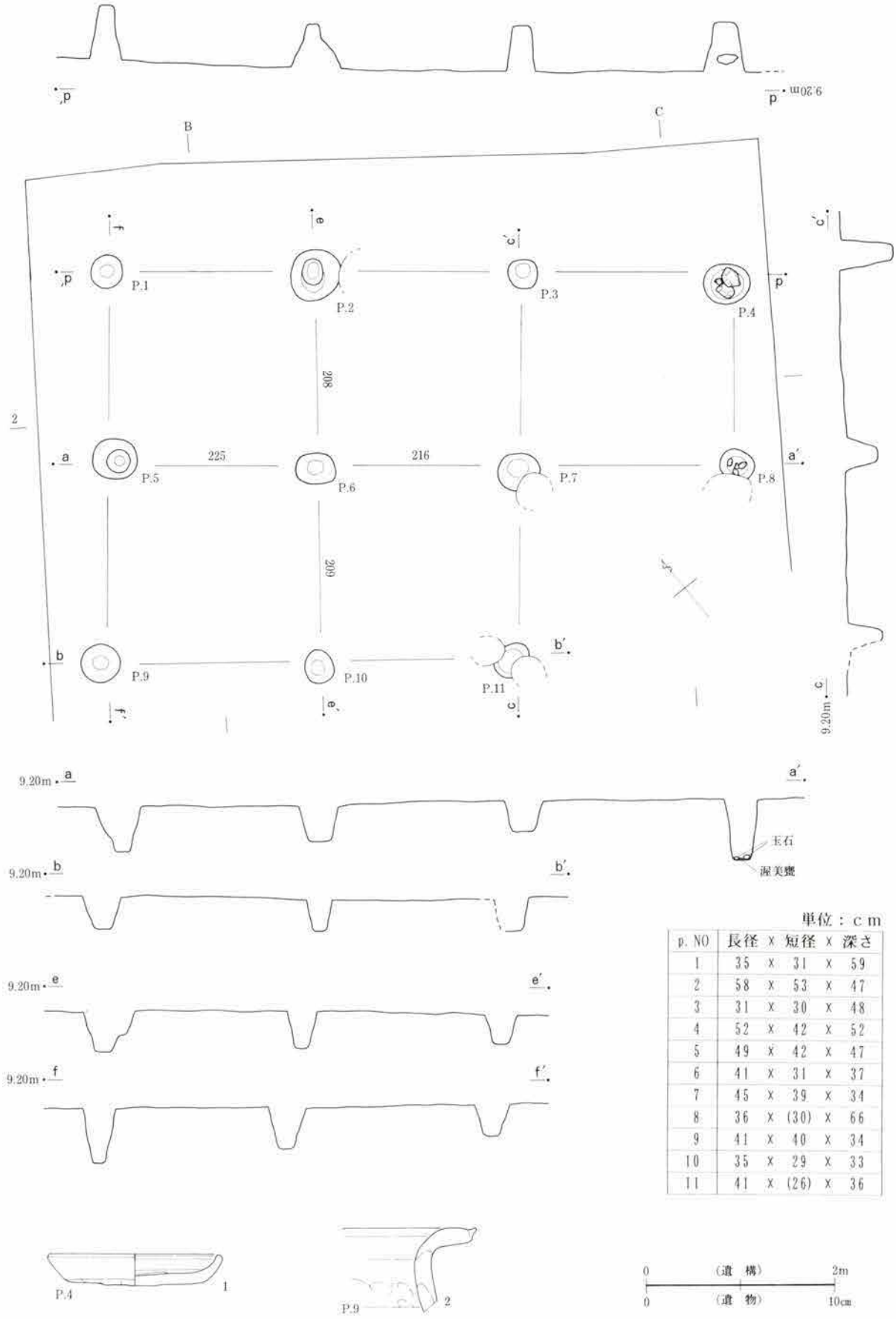




単位：ｃｍ

p. NO	長径	x	短径	x	深さ
1	151	x	56	x	49
2	55	x	53	x	60
3	92	x	55	x	66
4	39	x	35	x	65
5	54	x	49	x	58
6	37	x	(29)	x	40
7	57	x	49	x	60
8	34	x	31	x	71
9	62	x	31	x	67
10	41	x	30	x	70

図12　建物１



単位：cm

p. NO	長径	x	短径	x	深さ
1	35	x	31	x	59
2	58	x	53	x	47
3	31	x	30	x	48
4	52	x	42	x	52
5	49	x	42	x	47
6	41	x	31	x	37
7	45	x	39	x	34
8	36	x	(30)	x	66
9	41	x	40	x	34
10	35	x	29	x	33
11	41	x	(26)	x	36

図13　建物２，同出土遺物

建物３（図14）

位　　置　：　１・２－Ａ・Ｂ

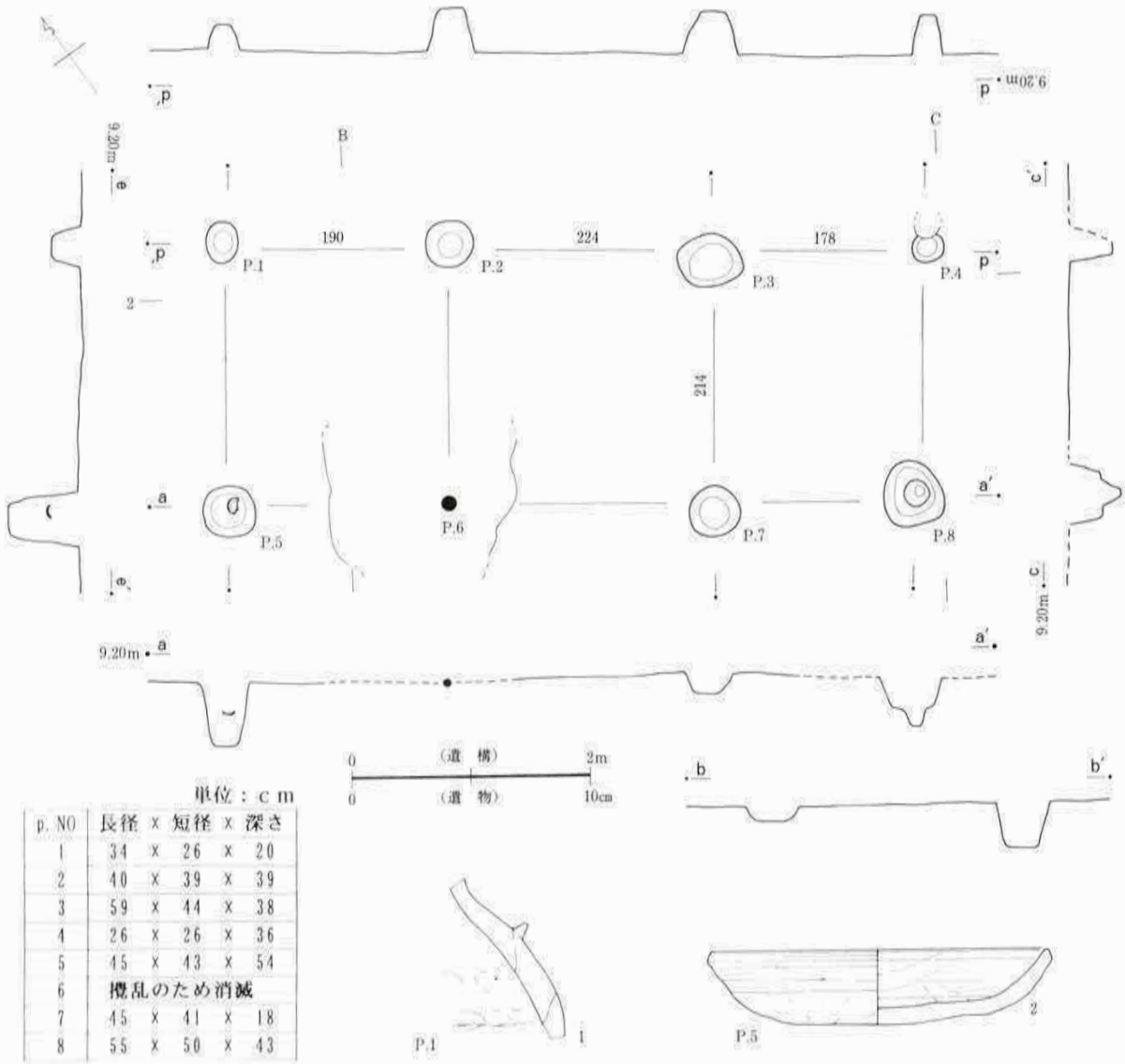
規　　模　：　東西３間（平均柱間距離1.97ｍ）×南北１間（平均柱間距離2.15ｍ）

面　　積　：　12.7㎡

南北軸方位：　Ｎ－36°　－Ｅ

出土遺物　：　渥美壺（１）・土師器Ｔ種（２）

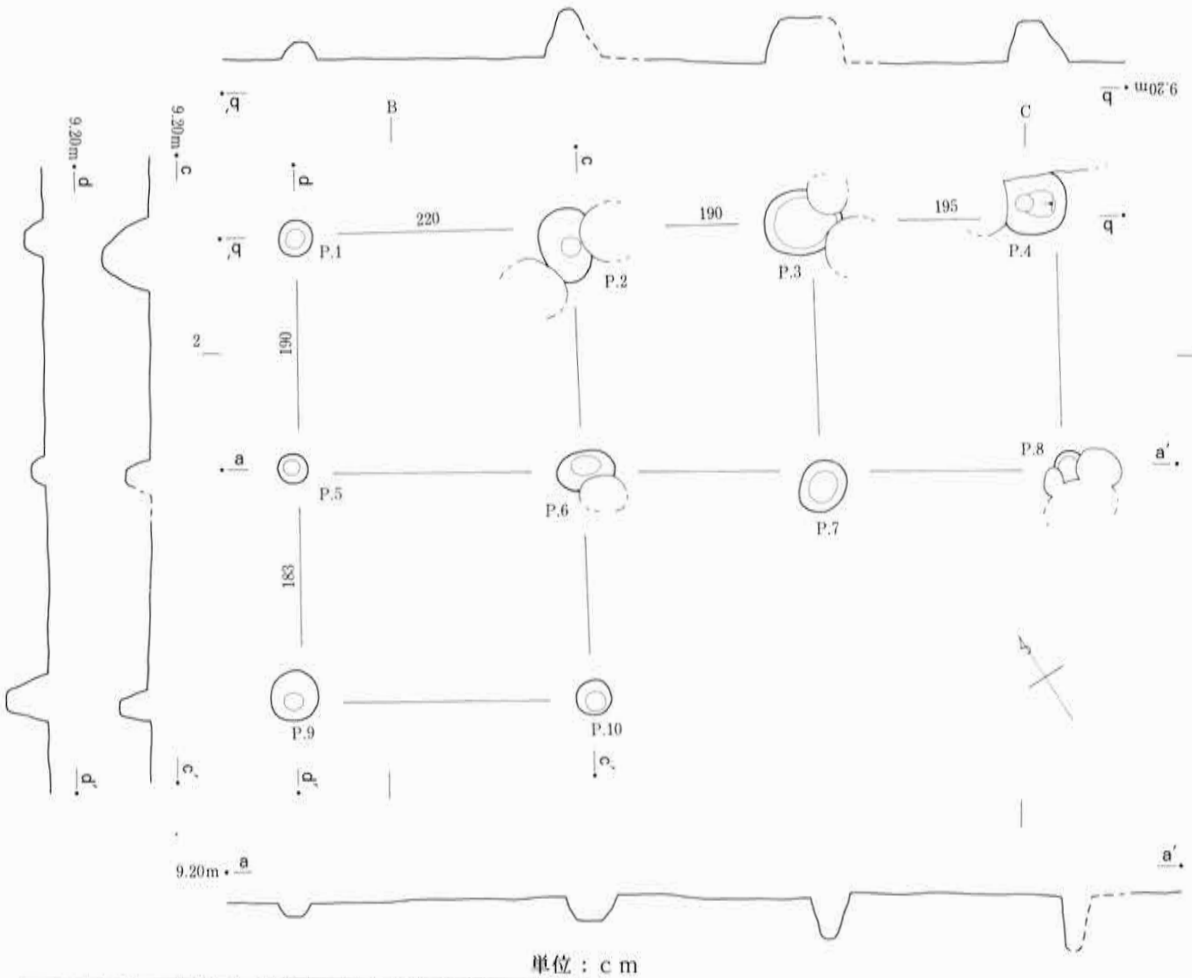
特記事項　：　南北は１間しかないが、これも調査区外に伸びる可能性はある。P.１出土の渥美甕（１）は、凸帯のつく珍しいもの。頸部がかなり直立気味で、胎土はやや軟質。２の土師器Ｔ種は薄手で、口径が大きい。両者とも12世紀後半期の様相を備えているが、先に書いたとおり、掘立柱建物柱穴の出土遺物が建物自体の年代を示しているかどうかについては、慎重でありたい。



単位：ｃｍ

p. NO	長径 × 短径 × 深さ
1	34 × 26 × 20
2	40 × 39 × 39
3	59 × 44 × 38
4	26 × 26 × 36
5	45 × 43 × 54
6	攪乱のため消滅
7	45 × 41 × 18
8	55 × 50 × 43

図14　建物３，同出土遺物



単位：ｃｍ

p. NO	長径 x 短径 x 深さ	p. NO	長径 x 短径 x 深さ
1	28 x 25 x 12	6	43 x 30 x 20
2	59 x (40) x 40	7	42 x 35 x 36
3	62 x 51 x 36	8	(24) x (18) x 42
4	55 x (54) x 33	9	40 x 38 x 33
5	23 x 23 x 11	10	28 x 27 x 23

図15　建物４

建物４（図15）

位　　置　：　１・２－Ａ～Ｃ

規　　模　：　東西３間（平均柱間距離2.05ｍ）×南北２間（平均柱間距離1.92ｍ）

面　　積　：　15.7㎡

南北軸方位：　Ｎ－33°　－Ｅ

特記事項　：　南辺東側の２穴を欠く。しかし、この建物も調査区外に拡がる可能性はある。

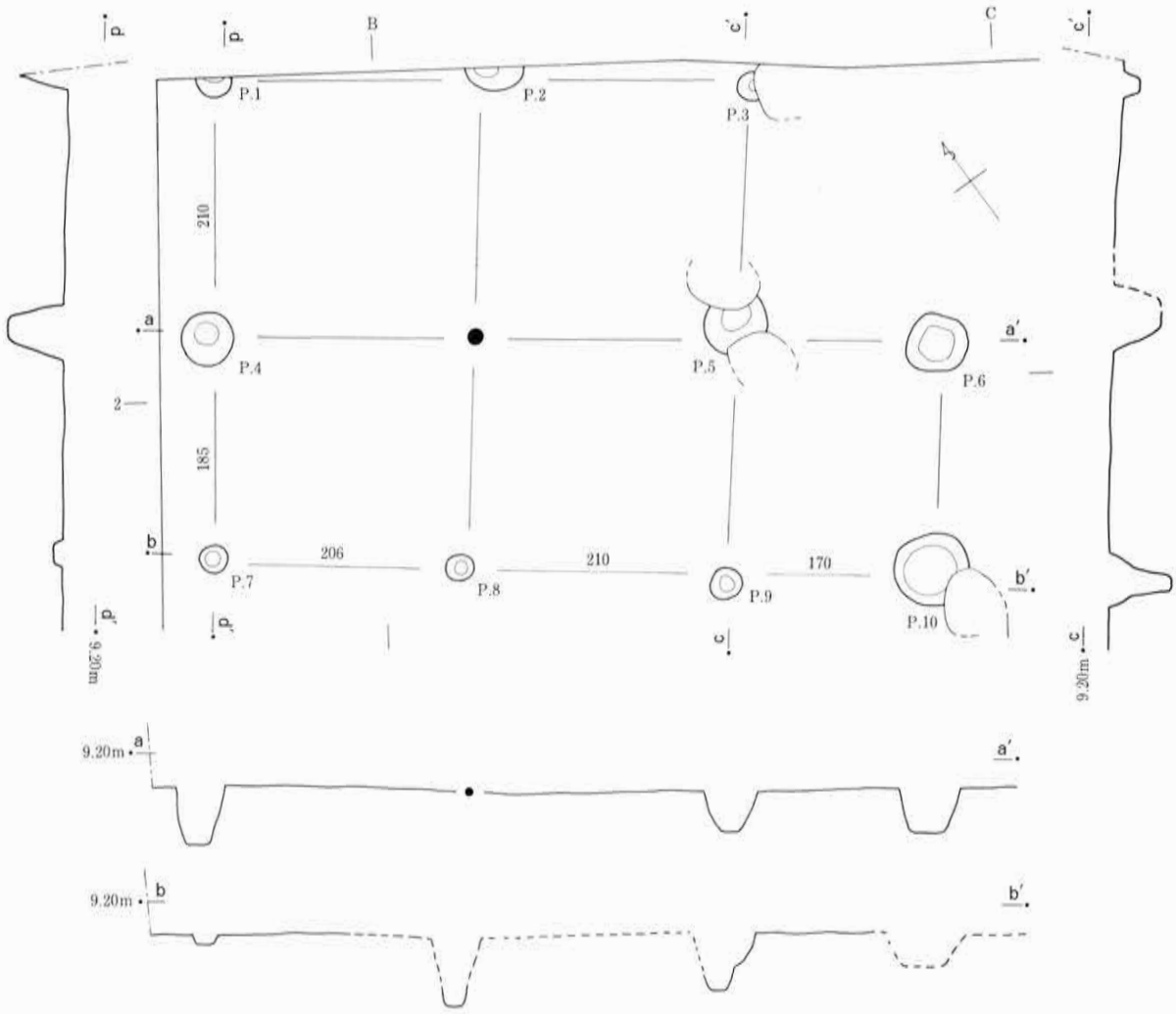
建物５（図16）

位　　置　：　１・２－Ａ・Ｂ

規　　模　：　東西３間（平均柱間距離2.01ｍ）×南北２間（平均柱間距離1.99ｍ）

面　　積　：　20.0㎡

南北軸方位：　Ｎ－36°　30′　－Ｅ



単位：ｃｍ

p. NO	長径 x 短径 x 深さ	p. NO	長径 x 短径 x 深さ
1	29 x (16) x (36)	6	50 x 45 x 36
2	49 x (16) x (13)	7	22 x 20 x 9
3	24 x (15) x 14	8	20 x 19 x (55)
4	43 x 40 x 49	9	24 x 22 x (46)
5	52 x 50 x 35	10	62 x (55) x (25)

0　2m

図16　建物５

特記事項　：　柱穴規模や柱間の不均等性から、一連の建物とすることに検討の余地は残るが、同一線上に載っていることから、掘立柱建物とした。これもまだ拡がる可能性はある。

Ｌ字状柱穴列(図17)

位　　置　：　２－Ａ・Ｂ

規　　模　：　東西２間(平均柱間距離2.00ｍ)×南北1間(平均柱間距離2.35ｍ)

東西軸方位：　Ｎ－53°　30′　－Ｗ

特記事項　：　Ｐ.１・２・３はいずれも深くて大きく、直角をなして並んでいるところから、建物の可能性を指摘しておく。またＰ.４も軸線上に載るので加えておいた。調査区外に伸びる可能性は大きい。Ｐ.２には柱の抜き痕が明瞭に観察され、Ｐ.３には根固めのためらしい数個の石が残る。

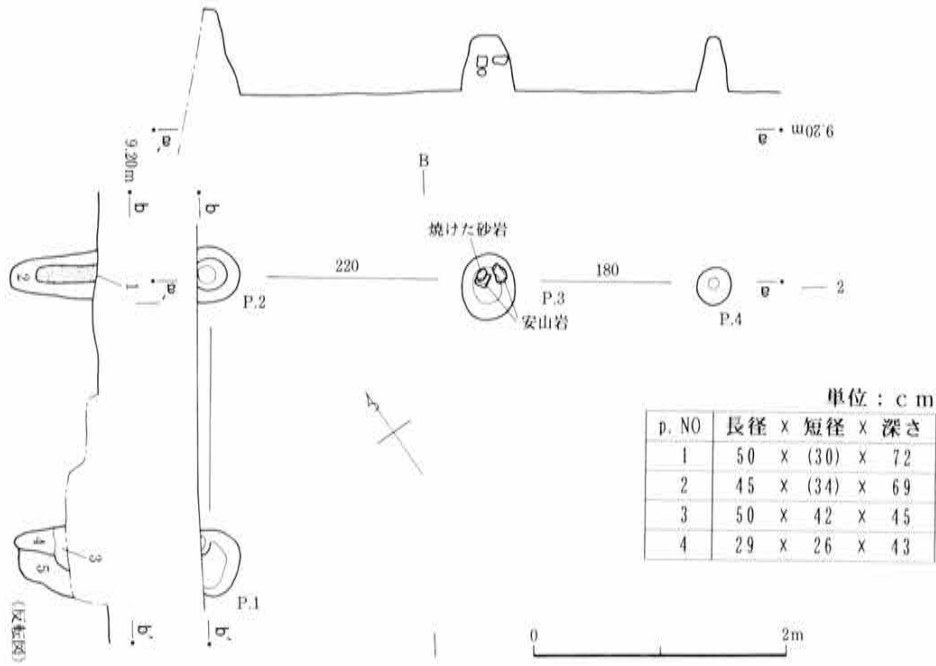


図17　L字状柱穴列

柱穴列1（図18）

位　　置　：　1・2－B

規　　模　：　南北3間（平均柱間距離1.24m）

主軸方位　：　N－35°　－E

出土遺物　：　青磁同安窯系碗（1）

特記事項　：　直線的に並んでいるので、列として取り上げておく。P.2出土の同安窯系青磁碗（1）は、12世紀後半代の所産であろう。

柱穴列2（図18）

位　　置　：　1・2－B

規　　模　：　南北2間（平均柱間距離2.07m）

主軸方位　：　N－36°　30′　－E

特記事項　：　掘立柱建物の一部の可能性がある。

柱穴列3（図19）

位　　置　：　2－A～C

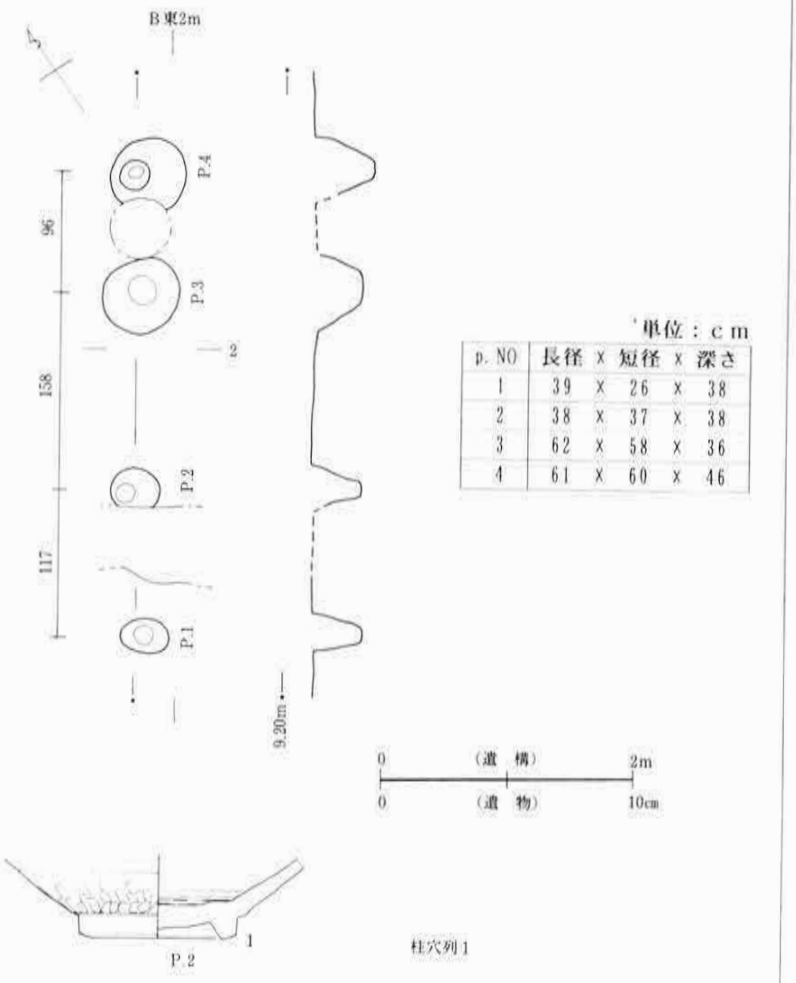
規　　模　：　東西6間（平均柱間距離1.12m）

主軸方位　：　N－56°　－W

出土遺物　：　土師器T種（1～6）・土師器R種（7、8）

特記事項　：　東西溝の北岸に沿って並ぶ。柱間は平均で1.1m強で、これは鎌倉時代前期の一般的な掘立柱建物のそれが約2.15m～2.3m程度であるのに比べ、およそ半分であることがわかる。おそらく、溝沿いに設けられた柵列のようなものであろう。

P.6に土師器の集中出土がある。状況からいって投棄ではなく、いわゆる埋納とみたい。建物建立時のものか、廃棄時のものかは決めにくいが、位置的にみて後者の可能性



単位：cm

p. NO	長径	x	短径	x	深さ
1	39	x	26	x	38
2	38	x	37	x	38
3	62	x	58	x	36
4	61	x	60	x	46

単位：cm

p. NO	長径	x	短径	x	深さ
1	35	x	31	x	38
2	60	x	41	x	46
3	71	x	57	x	47

図18　柱穴列1・2，同出土遺物

が高い。大型はR種、小型はT種に分化しており、何かしらの意図がある可能性もあろう。T種（1～6）は薄手で器高が低く、鎌倉時代初期に属するもの。R種は口径が大きく、質量感に富み、口縁端部を丸く納めたもの。このR種は大倉幕府跡近辺など、これも鎌倉時代前期までの遺構から多く出土する。以上のことから推測すれば、この建物は鎌倉時代前期に存続していた可能性が高い。

柱穴列4（図20）

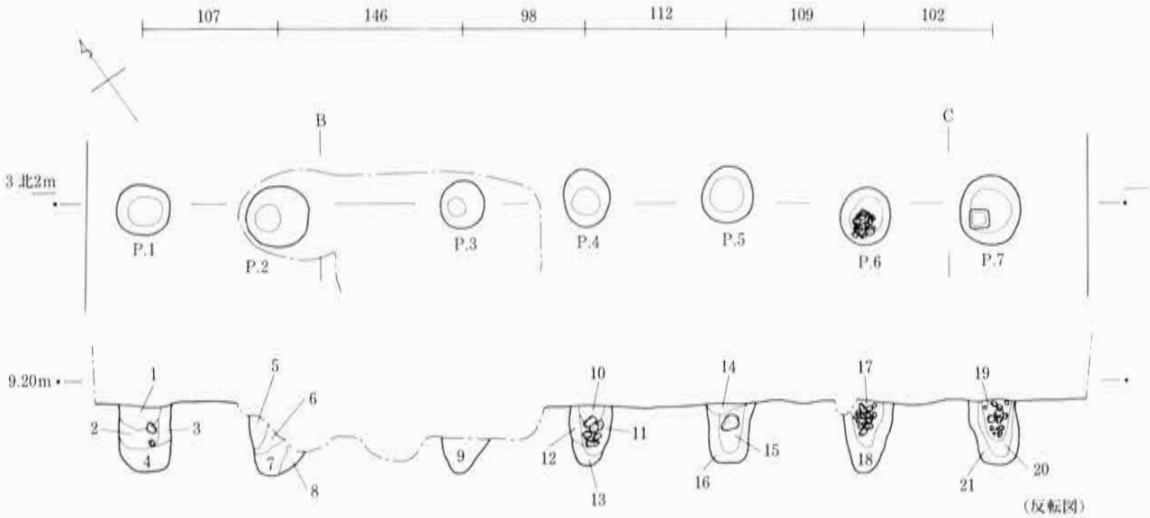
位　　置　：　2－A・B

規　　模　：　東西7間

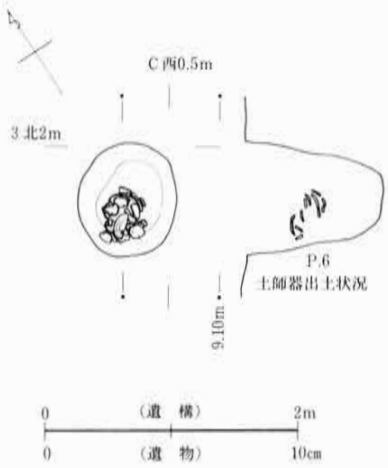
主軸方位　：　N－53°　－W

出土遺物　：　土師器皿T種内折型白色系（1）

特記事項　：　東西溝の北岸に、13の柱穴が直線的に並ぶ。柱穴列3と同様、柵列と考えられる。柱穴は大小二群あり、大型のなかには直径90cmを超えるものもある（P. 7・10）。溝脇に大型の柱穴の並ぶ柵列が建つ状況は、北条政子の居所ともいわれる大倉幕府周辺遺跡群二階堂字荏柄38番1地点（馬淵1993）や同雪ノ下四丁目620番5地点（馬淵1998・1999）を初め、すでにいくつかの類例があるが、おおむね鎌倉時代前期までの遺構にともなっており、層位からいって本例もそのころとみて大過ない。



0 1m

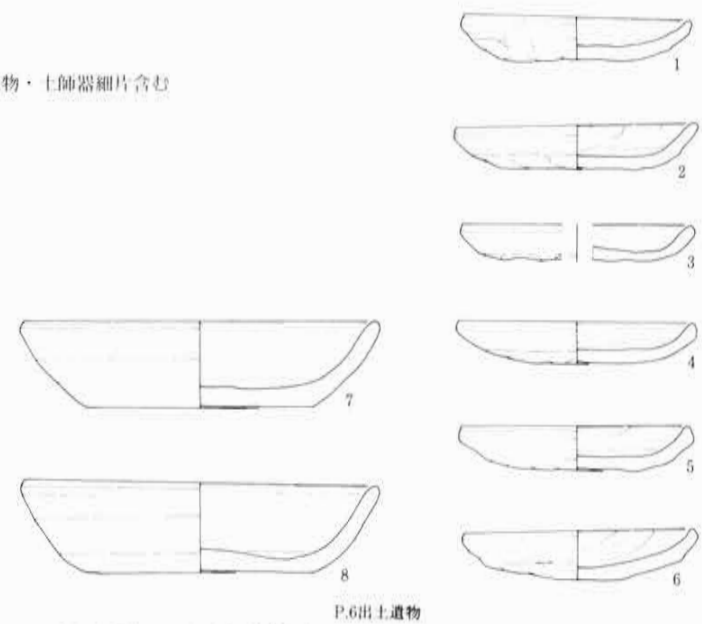


1 黄橙色粒子を多く含む暗茶褐色粘質土 土丹片・炭化物ブロック含む
2 黄橙色粒子を多く含む暗茶褐色粘質土 含有物は1より少ない
3 1に黒褐色子粘質土ブロック含む
4 3にやや砂が混じる 土師器片・玉砂利含む
5 茶褐色粘質土 黄褐色・橙褐色のスコリア状粒子多く含む
6 茶褐色粘質土 黄褐色・橙褐色のスコリア状粒子少量含む やや砂質
7 4に同じ
8 砂含む明灰茶褐色土に黒褐色粘質土ブロック混じる 褐鉄分少量含む
9 茶褐色粘質土 黒褐色粘質土ブロック・明茶灰色砂質土ブロック・土師器片含む
10 黄茶褐色砂質土に茶褐色粘質土ブロック混入 黄褐色粒子・炭化物・土丹片含む
11 黒褐色粘質土に明茶灰色砂質土ブロック含む 土丹片・褐鉄分含む
12 5に同じ
13 砂含む明灰茶褐色土に黒褐色粘質土ブロック混じる 黄褐色粒子少量含む
14 10に同じ
15 11に同じ
16 11に近いが砂質土ブロックの量は少ない
17 11に同じ
18 16に同じ
19 11に同じ
20 黒褐色粘質土に明茶灰色砂質土ブロック含む 炭化物・土師器細片含む
21 20より砂質土ブロックは少ない

単位：cm

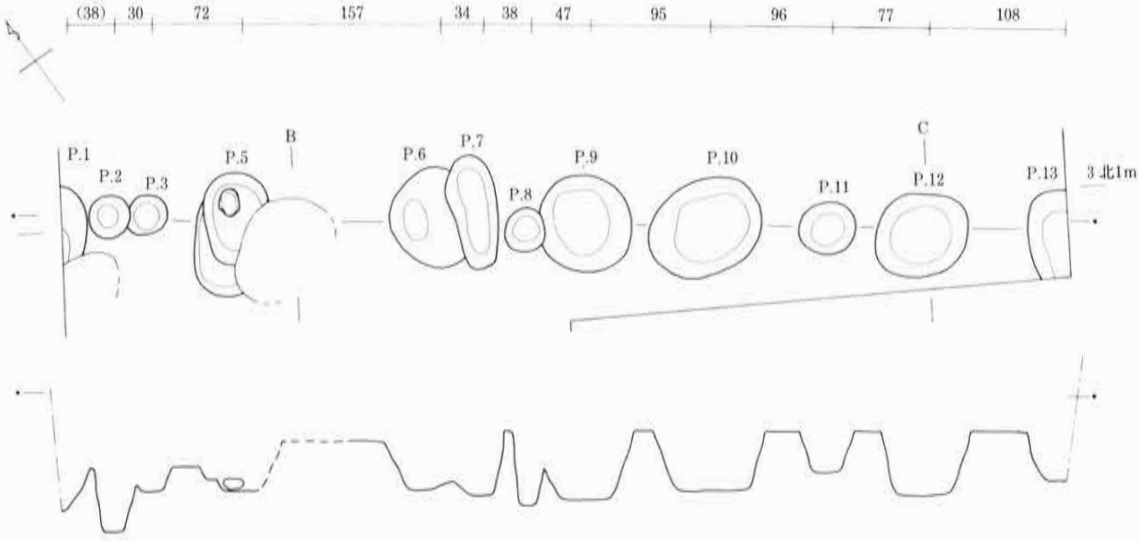
p. NO	長径	x	短径	x	深さ
1	41	x	40	x	53
2	50	x	48	x	60
3	38	x	35	x	61
4	46	x	37	x	48
5	45	x	41	x	48
6	46	x	39	x	57
7	49	x	43	x	53

柱穴列3



P.6出土遺物

図19 柱穴列3，同出土遺物



単位：cm

p. NO	長径	短径	深さ	p. NO	長径	短径	深さ
1	(63)	(19)	56	7	91	40	50
2	34	31	72	8	35	32	59
3	34	32	40	9	77	71	55
4	(73)	(38)	30	10	93	74	47
5	61	51	40	11	45	41	32
6	80	(60)	43	12	71	66	51
				13	(70)	(32)	38

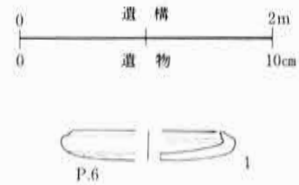


図20　柱穴列４，同出土遺物

土坑２（図21）

位　　置　：　２－Ｂ
平 面 形　：　長円形
断 面 形　：　逆台形
規　　模　：　長径(167)cm×短径62cm×深さ41cm
主軸方位　：　Ｎ－50°　－Ｗ
特記事項　：　東西溝と平行方向にある。

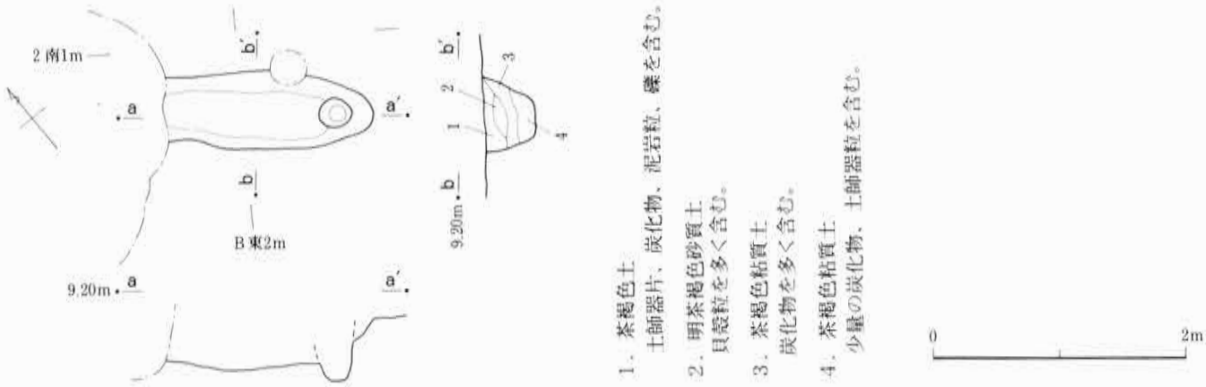


図21　土坑２

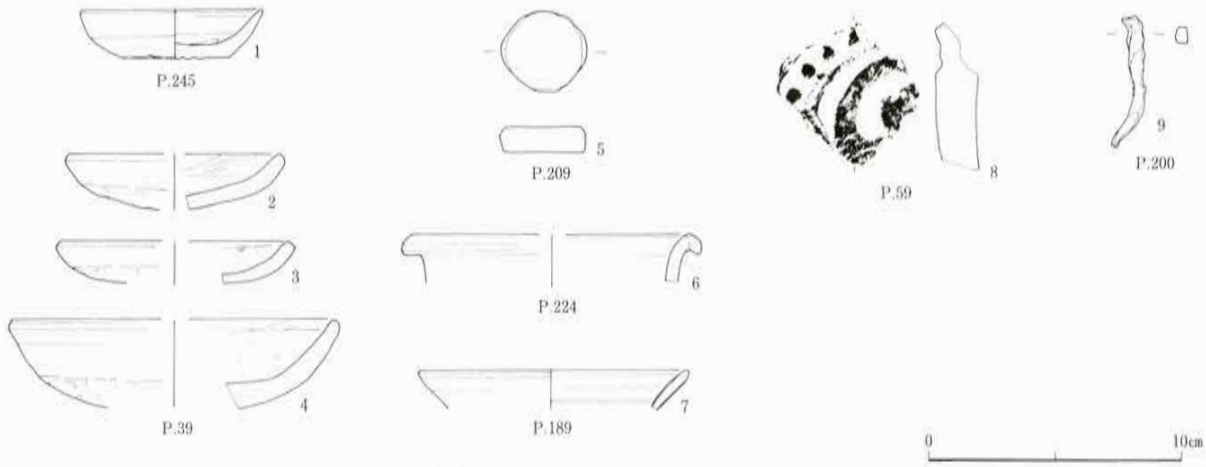


図22　上層３群柱穴出土遺物

上層３群柱穴出土遺物(図22)

建物や柱穴列として抽出した以外の柱穴からの遺物を図示する。

出土遺物　：　土師器Ｒ種(１)・同Ｔ種(２～４)・土師器転用円盤(５)・白磁四耳壺(６)・青磁同安窯系皿(７)・軒丸瓦(８)・鉄釘(９)

特記事項　：　１は13世紀後半～14世紀前半、２～４・７は13世紀前半までに属し、上層遺構群の年代幅の広さがうかがえる。

４．下層

上層ですでに鎌倉時代前期まで達しているが、ここにいたって完全な中世基盤層が出る。この面で検出された遺構には、東西溝２条・柱穴列３列・溝１条・井戸１基・土坑１基などがある(図23)。

東西溝４(図24～27)

位　　置　：　３－Ａ・Ｂ

規　　模　：　幅約300cm×深さ(最大)約88cm

流下方向　：　東→西(高低差10cm内)

主軸方位　：　Ｎ－58°－Ｗ

出土遺物　：　土師器Ｔ種(１)・土師器Ｒ種(２～24)・山皿(25)・火鉢(26)・伊勢火鉢(27)・常滑こね鉢Ⅰ類(28)・常滑こね鉢Ⅱ類(29)・常滑甕(30・33)・渥美甕(31・32)・亀山甕(34)・白磁口はげ皿(35､36)・竜泉窯青磁折腰鉢(37)・同青磁折縁鉢(38)・瓦(40～42)・鉄製品(43)・砥石(44)・木製品(45)・骨製品(46・47)

特記事項　：　後述の東西溝５に重なる位置に構築されており、連続性がうかがえる。５の改修というべきだろう。溝両壁直下を掘りくぼめて根太を据え、上部の角材(逸失)と束材で連結して側面に板を押し当てて固定し溝枠とする。根太にあけられたホゾ穴は50cm前後の間隔で、これは鎌倉市内でほかにあまり例をみない。側板は厚く、きわめて頑丈なもの。根太の間隔は推定約２ｍ、深さ約90cmで、若宮大路の側溝に次ぐ規模をもつ。

出土遺物のうち、貿易陶磁は13世紀後半を中心とするが、国産陶器は同世紀前半にさかのぼるものが大半(28～32)で、土師器も13世紀後半に下るものを含みながらも(２・20～22)、一般的にその多くが28～32と共伴する。全体としては13世紀第２四半期～中葉とするべきだろう。27の産地同定は伊藤裕偉氏による。

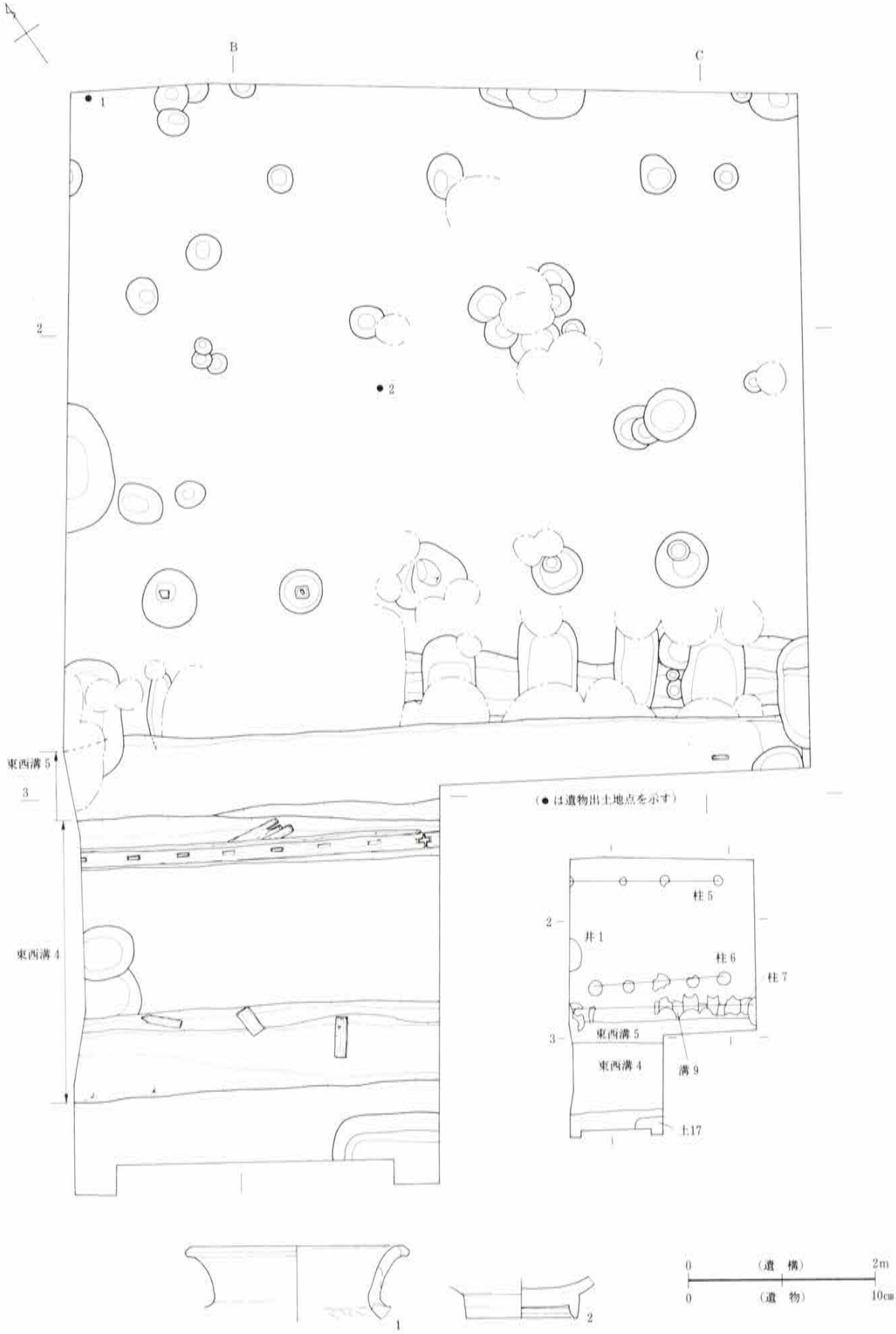


図23　下層遺構全図，同面上出土遺物

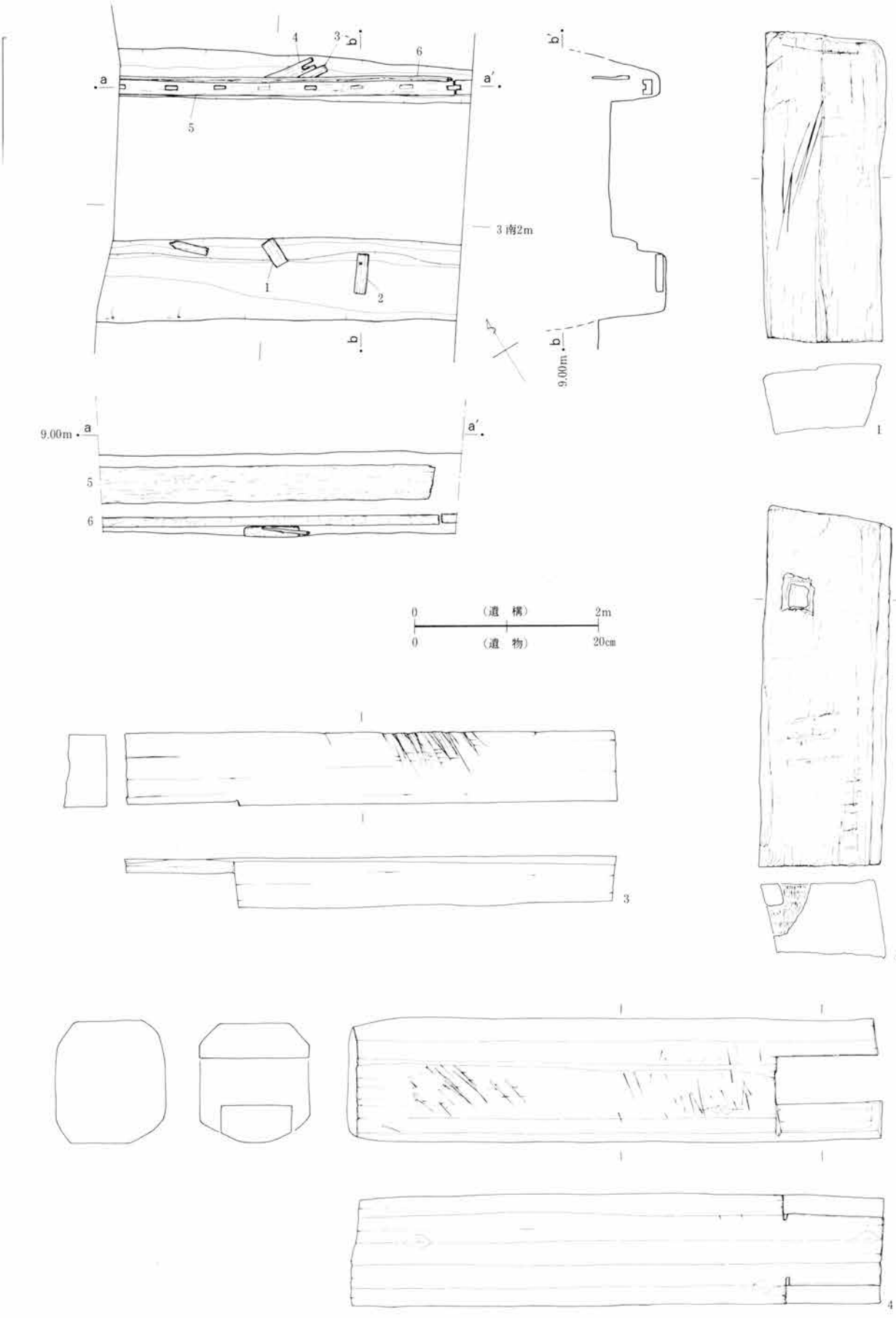


図24　東西溝４，同出土遺物（１）

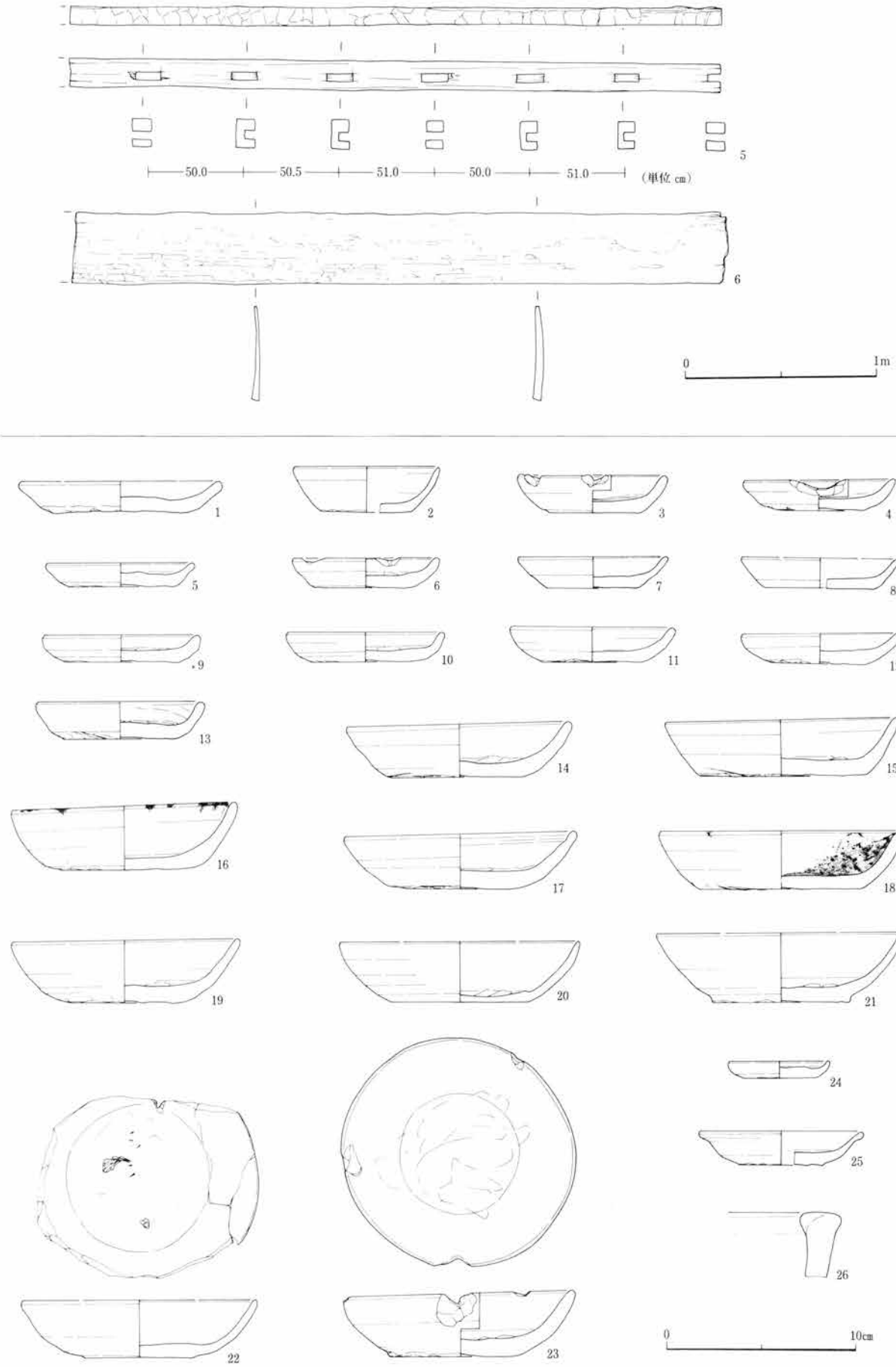


図25　東西溝４出土遺物（２）

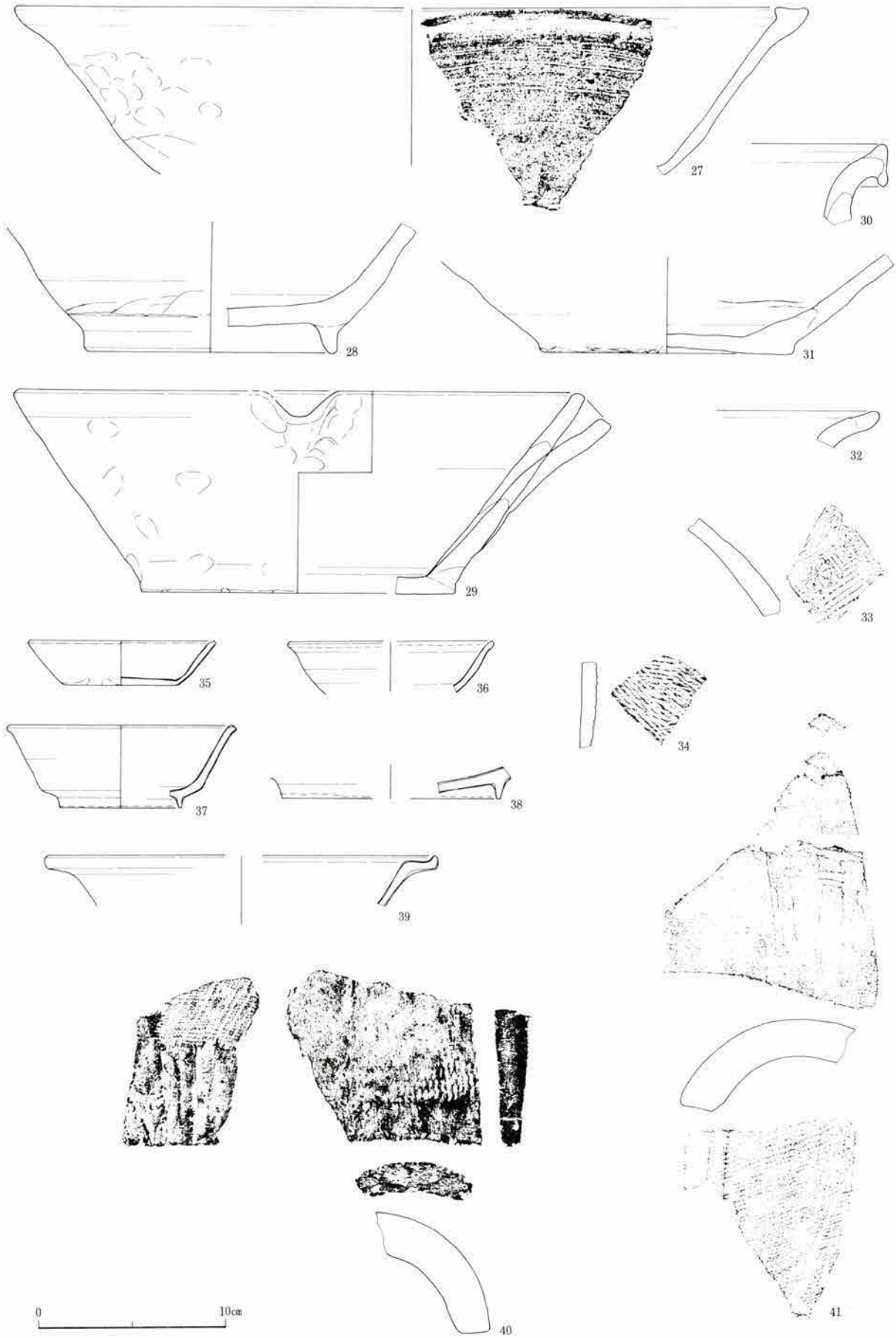


図26　東西溝４出土遺物（３）

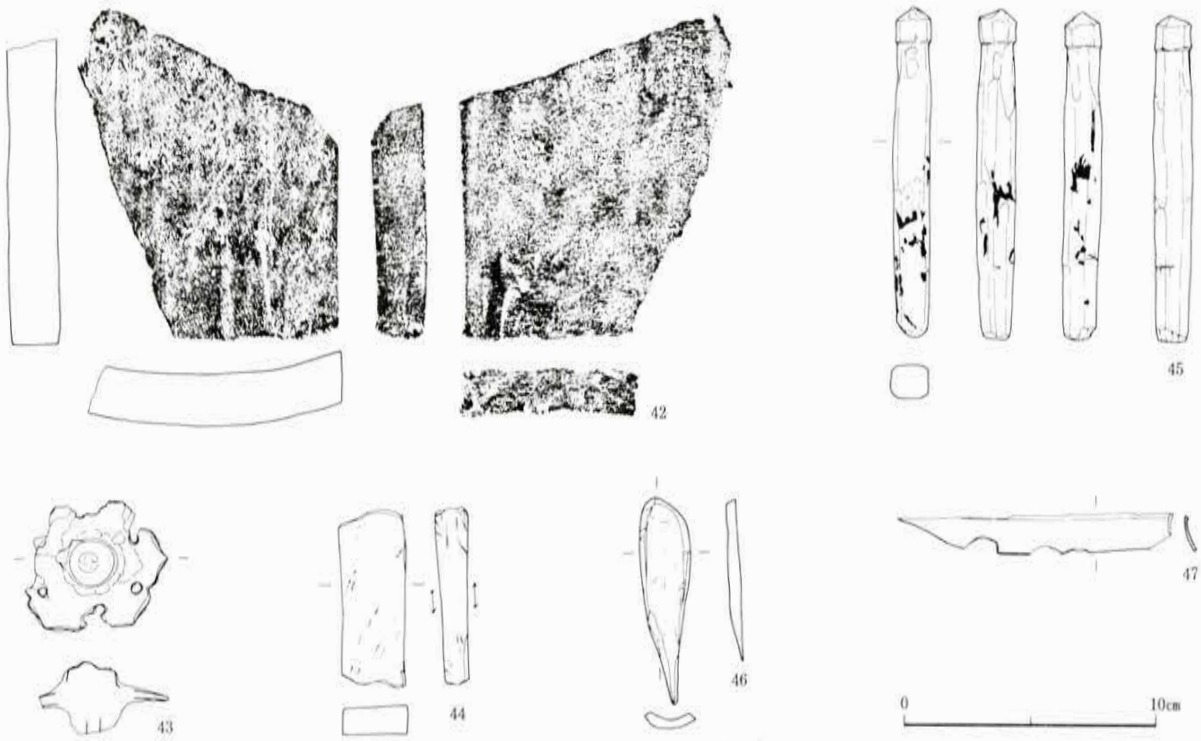


図27　東西溝４出土遺物（４）

東西溝５（図28）

位　　置　：　２・３－Ａ～Ｃ

規　　模　：　幅約382cm×深さ（最大）約127cm

流下方向　：　東→西（高低差10cm内）

主軸方位　：　Ｎ－57°　30′　－Ｗ

出土遺物　：　土師器Ｔ種（１）・土師器Ｒ種（２・３）

特記事項　：　逆凹字形の掘方が残る。根太はあったであろうが、失われている。北側は二段の深い掘方を持っているが、壁際の浅い方は調査区東壁際で収束するようなので、二段構造となっているのはこの部分だけの可能性がある。その点を考慮に入れると、幅は掘方部分でちょうど３ｍ、根太の間隔は推定で２ｍ前後になろう。東西溝４と同様、これも鎌倉市内遺跡では若宮大路側溝に次ぐ規模を有する。なお先述のとおり、東西溝４は本址と重なる位置にあり、形状も共通するところから、本址の改修と推測できる。

出土遺物は搬入系を欠き、年代比定の材料に乏しいが、土師器Ｔ種（１）とＲ種（２・３）の共存からみて、大きく13世紀前半頃ととらえておきたい。

柱穴列５（図29）

位　　置　：　１－Ａ・Ｂ

規　　模　：　東西３間（平均柱間距離2.12ｍ）

主軸方位　：　Ｎ－55°　－Ｗ

特記事項　：　柱間距離がやや不均等だが、直線上に並んでいるので、列として抽出しておいた。あるいは北側の調査区外に拡がって掘立柱建物となる可能性がある。

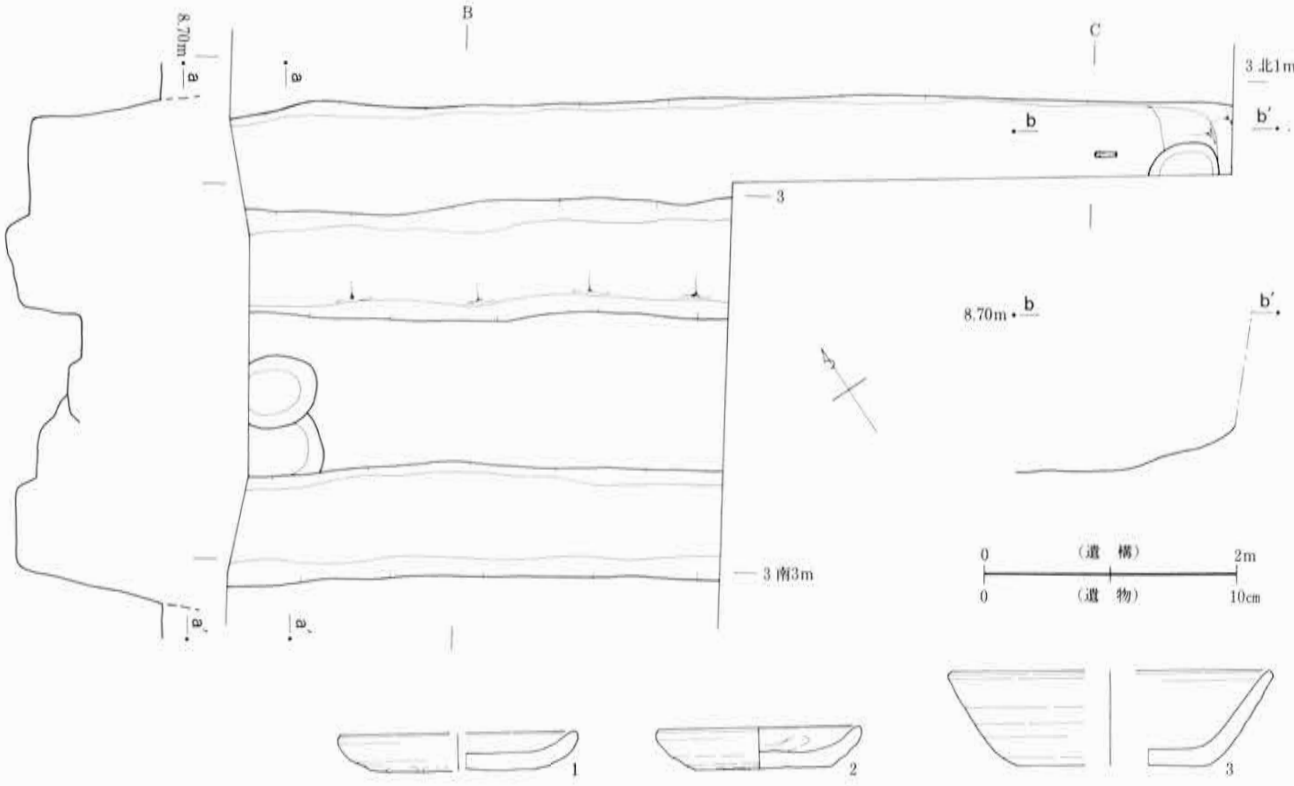


図28　東西溝５，同出土遺物

柱穴列６（図29）

位　　置　：　２－Ａ・Ｂ

規　　模　：　東西４間（平均柱間距離1.38ｍ）

主軸方位　：　Ｎ－61°　－Ｗ

特記事項　：　東西溝に沿うように、北岸に並ぶ。東側４穴に柱根部の落ち窪みが残る。位置と柱間距離の短さから判断して、溝脇に設けられた柵列と推測する。

柱穴列７（図30）

位　　置　：　２－Ａ・Ｂ

規　　模　：　東西５間以上（平均柱間距離0.93ｍ）※Ｐ．２～３間は攪乱により消滅する

主軸方位　：　Ｎ－57°　－Ｗ

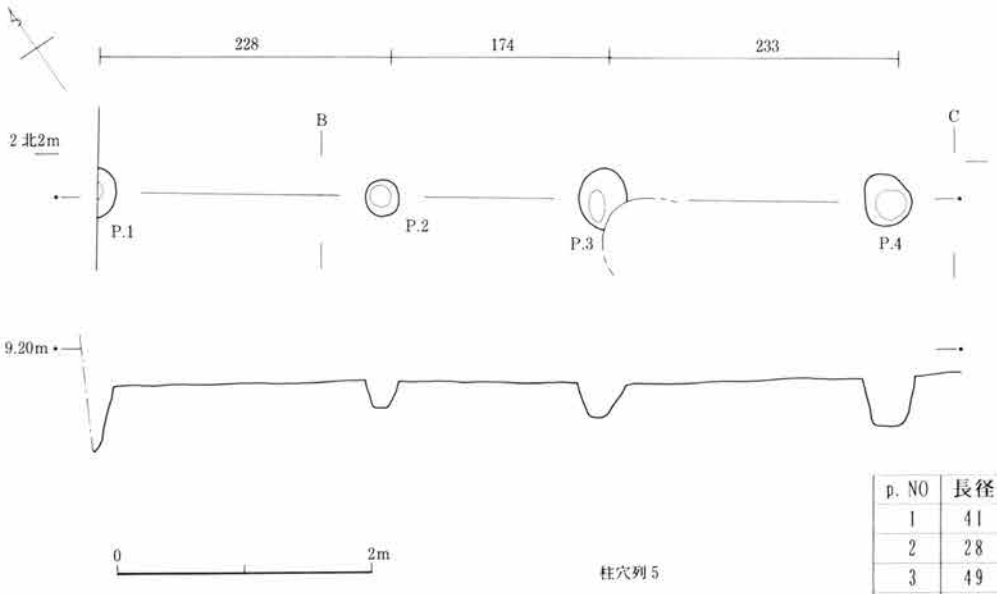
特記事項　：　隅丸長方形の穴が、これも前者同様、東西溝に沿うように北岸に並ぶ。同様の施設は大倉幕府周辺遺跡群二階堂字荏柄38番１地点（馬淵1993）や、同じく大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下4丁目620番地点（馬淵1999）など、鎌倉時代前期の溝沿いにしばしば検出されている。溝脇に設けられた、たとえば築地の基礎のような施設を想定してもよいのではないだろうか。

溝９（図31）

位　　置　：　２－Ｂ・Ｃ

規　　模　：　幅73㎝（最大）×深さ21㎝（最大）

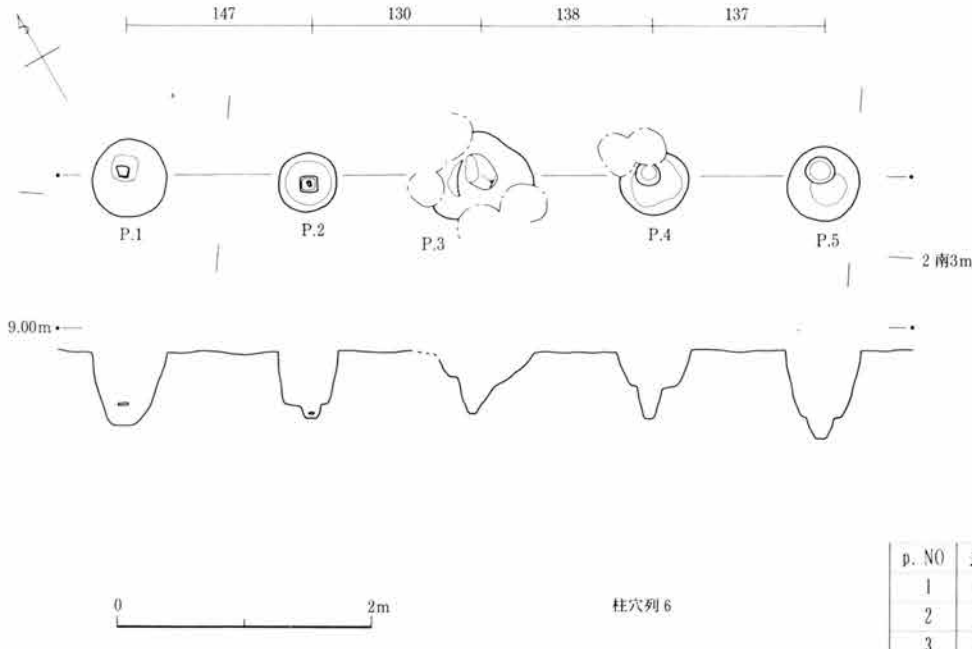
流下方向　：　高低差なし



柱穴列 5

単位：ｃｍ

p. NO	長径	x	短径	x	深さ
1	41	x	(17)	x	49
2	28	x	25	x	20
3	49	x	38	x	24
4	41	x	39	x	39

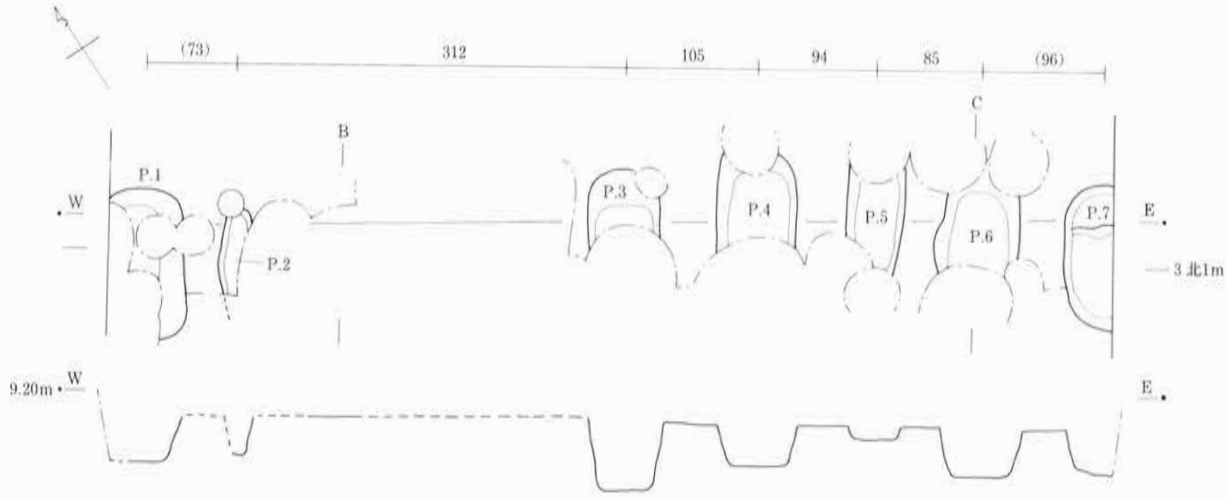


柱穴列 6

単位：ｃｍ

p. NO	長径	x	短径	x	深さ
1	62	x	60	x	58
2	47	x	46	x	54
3	(76)	x	70	x	50
4	55	x	52	x	53
5	60	x	57	x	69

図29　柱穴列５・６



単位：cm

p. NO	長径	短径	深さ	p. NO	長径	短径	深さ
1	120	(61)	37	5	(85)	45	9
2	(69)	(20)	29	6	(65)	68	37
3	(66)	56	56	7	116	(36)	36
4	(82)	64	32				

0 2m

柱穴列7

図30　柱穴列7

主軸方位　：　N－54°　－W

出土遺物　：　土師器T種(1)

特記事項　：　上述柱穴列7と重なる位置にある。新旧は確認できなかったが、東壁の土層断面からみて、本址が新しいということはない。あるいは同時期の可能性もあろう。主軸方位は東西溝と微妙にずれる。

出土の土師器T種(1)はやや薄手で、13世紀第1四半期頃までのもの。

井戸1（図31）

位　　置　：　2－A

平面形　：　楕円形(推定)

断面形　：　筒形(未完掘)

規　　模　：　径約138cm×深さ108cm以上

軸方位　：　N－32°　30′　－E

特記事項　：　西壁際に位置しており、壁崩落の危険性があるところから完掘は断念した。木枠を持たず、上から徐々に窄まる形状をしている。井戸とはしたものの、他の性格も考慮に入れておかなければならない。堆積土中には、炭化物の層が2層含まれている。

土坑17（図31）

位　　置　：　3－B

平面形　：　方形(推定)

断面形　：　筒形(未完掘)

規　　模　：　径114cm以上×深さ105cm以上

東西軸方位：　N－59°　－W

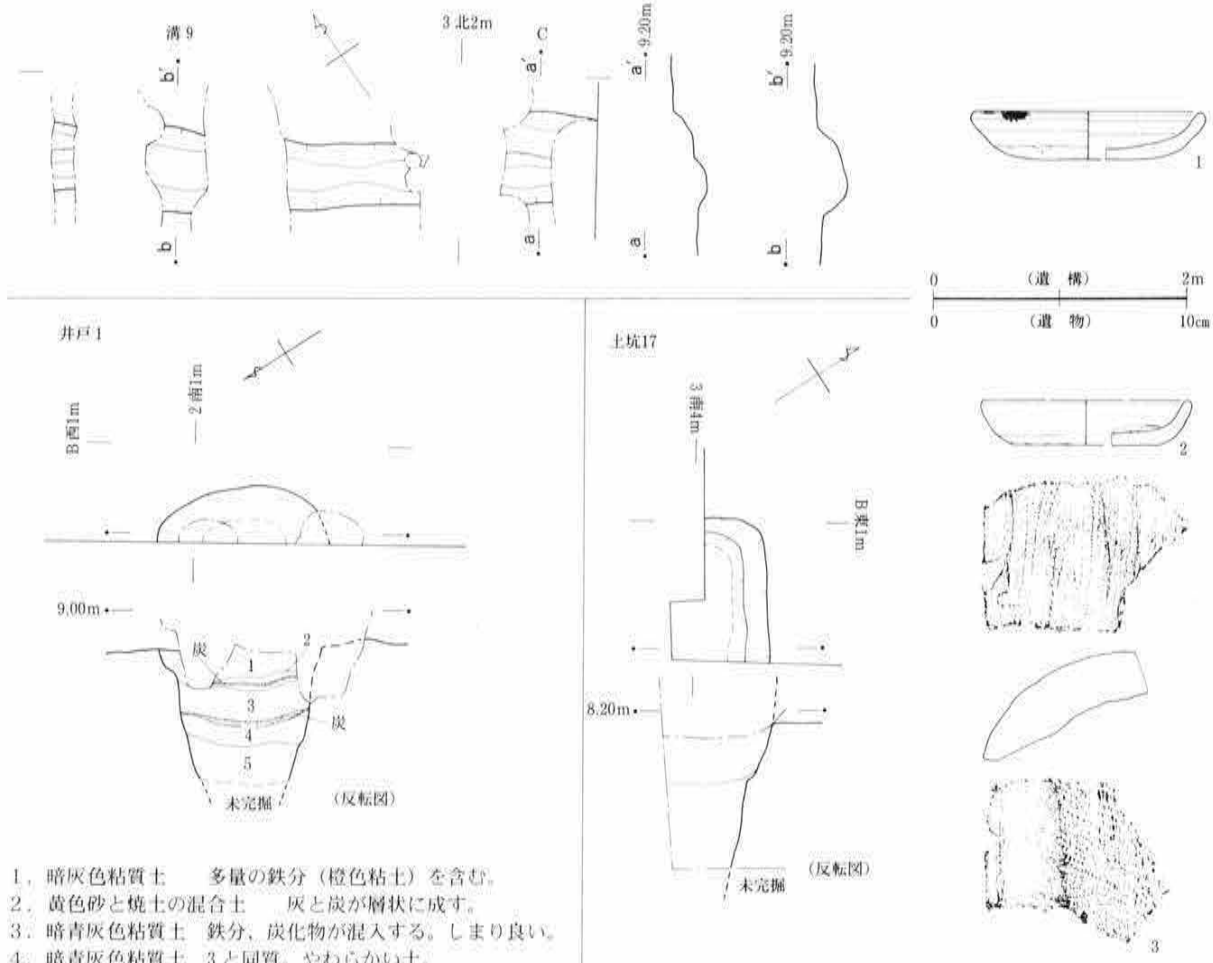


図31　溝９・井戸1・土坑17

出土遺物　：　土師器Ｒ種（１）・丸瓦（２）

特記事項　：　調査区東南角にあり、南と東側は調査区外に出ている。これも壁崩落の危険性があるので、１ｍ強掘ったところで、完掘をあきらめた。素掘り井戸の可能性があろう。

出土の土師器Ｒ種（２）は13世紀第２四半期頃か。

５．一括採集遺物

東西溝２・３出土遺物（図32）

当初の東西溝検出段階では切合いについての認識が不十分だったので、出土遺物のうちには、切り合った溝のいずれに帰属するか、判断のつきかねるものもあった。そのため、それらに関しては複数の溝を出土遺構の候補として挙げざるを得なかった。この事情は、次項・次々項にも共通する。

出土遺物　：　土師器Ｒ種（１・２）

特記事項　：　共伴する搬入系遺物がないが、13世紀中葉～同第３四半期頃だろう。

東西溝２・３・４出土遺物（図32）

出土遺物　：　土師器Ｒ種（３～９）・白磁口はげ皿（10）・常滑こね鉢Ⅱ類（11）・火鉢（12）

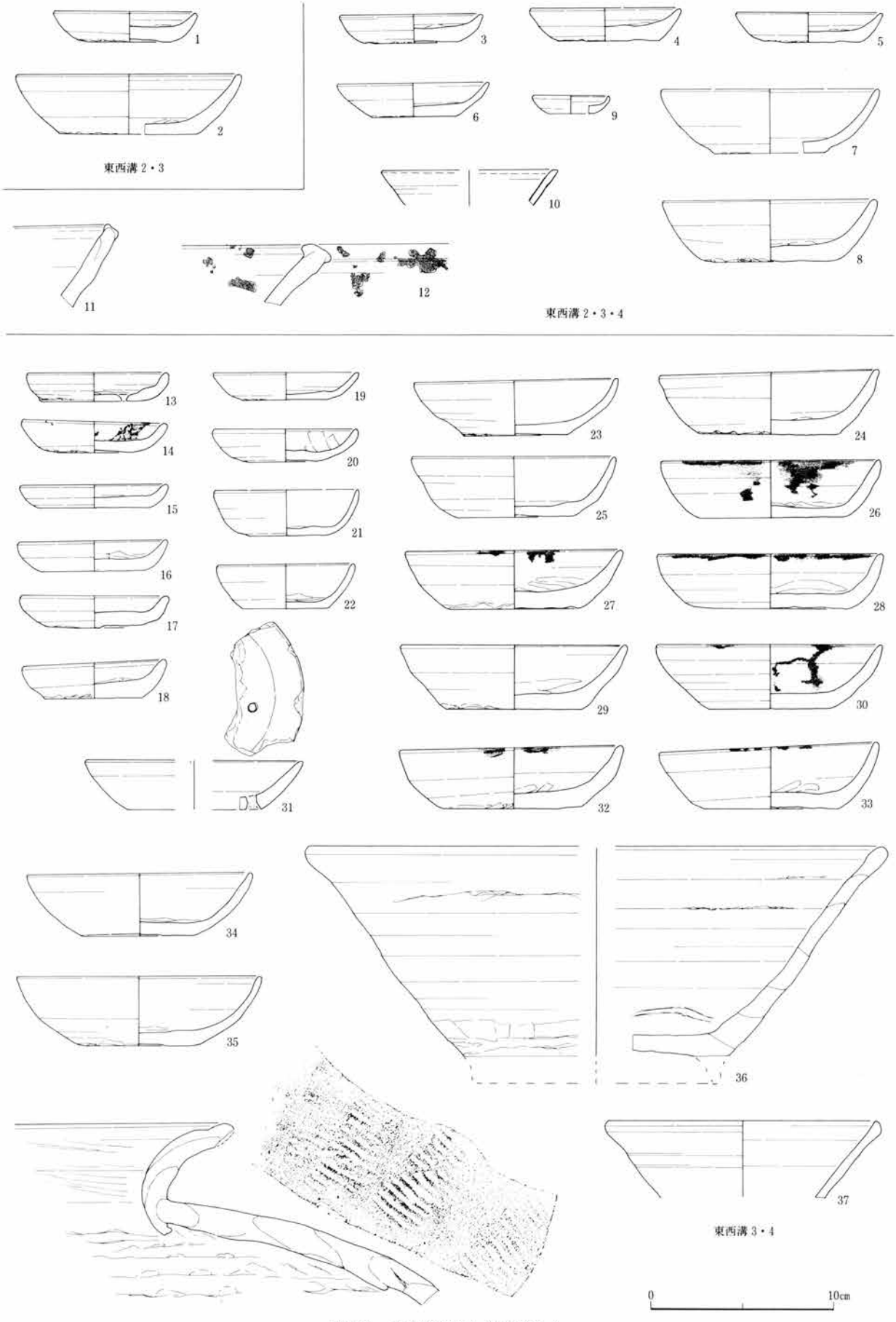


図32　東西溝出土遺物（1）

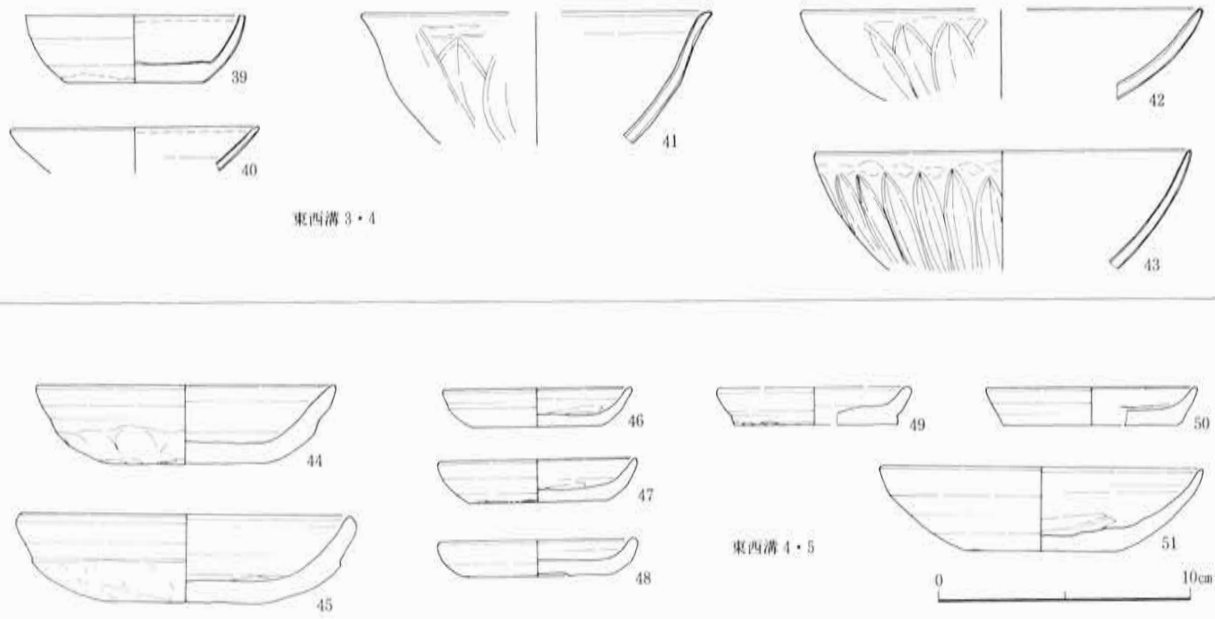


図33　東西溝出土遺物（2）

特記事項　：　やはり土師器はR種ばかりであり、共伴の10・11からみて、13世紀中葉～同後半頃と考えられる。

東西溝3・4出土遺物（図32・33）

出土遺物　：　土師器R種（13～35）・常滑こね鉢I類（36）・南部系山茶碗（37）・渥美甕（38）・白磁合子（39）・白磁口はげ皿（40）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗（41～43）

特記事項　：　土師器皿にはいくつかの類型があるが、厚手で質量が大きく、堅牢なものが多い（小型では13～18，大型では24・27～30・32・33）。これらは大きくみて13世紀中葉以前に属する。他の土師器は13世紀後半であろう。共伴遺物のうち常滑こね鉢I類（36）と南部系山茶碗（37）が13世紀第2四半期～同第3四半期、貿易陶磁器（39～43）が13世紀中葉～後半に属する。以上の様相は、東西溝3・4が13世紀第2四半期～同後半の遺構であることを示している。

38は胎土が赤褐色に焼けており、渥美としてはやや特異な様相をもつ。小野田勝一氏のご教示によって渥美と認定した。当該遺物に関しては、東北の渥美系諸窯について千葉孝弥氏に、また静岡県湖西市近辺の諸窯について後藤健一氏に類品の存在をうかがったが、ともに否定的であった。

東西溝4・5出土遺物（図33）

出土遺物　：　土師器T種（44・45）・土師器R種（46～51）

特記事項　：　R種の51に13世紀後半の様相を残すが、他のR種（46～50）とT種（44・45）は13世紀前半、特に第2四半期の形態を持つ。

以上の点からみて、東西溝4・5は13世紀第2四半期から後半にかけて存続していたと考えられる。

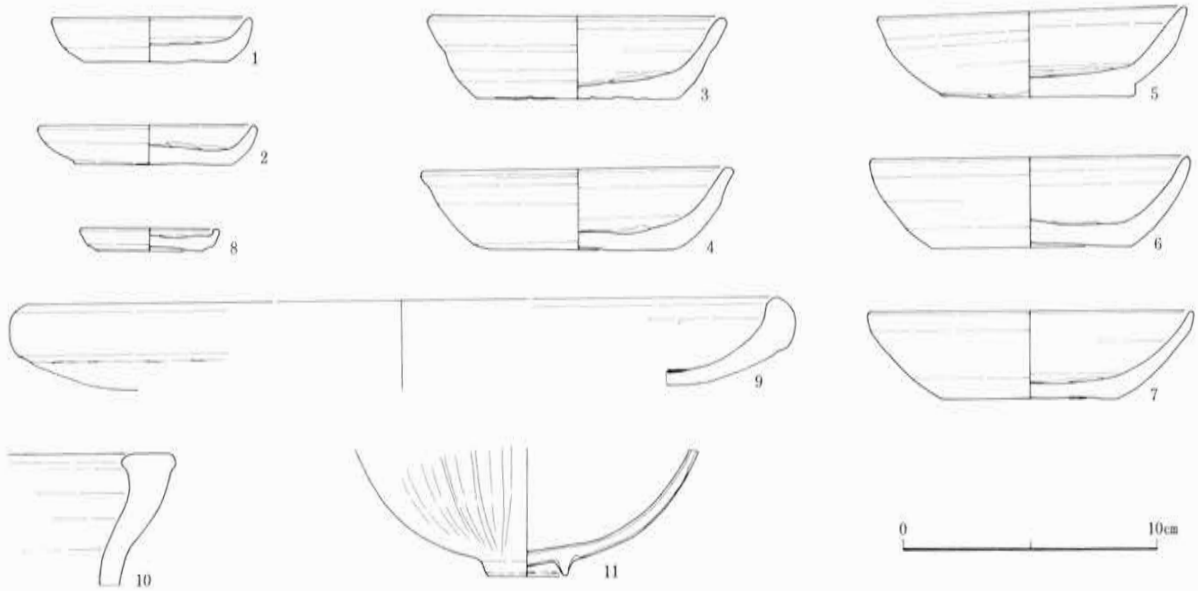


図34　遺構外採集遺物

遺構外採集遺物(図34)

出土遺物　：　土師器R種(1～8)・土焙烙(9)・火鉢(10)・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗(11)

特記事項　：　9は近世のもので、最近市内で次第に出土例が増えてきている。当遺跡内でも若宮大路側の雪ノ下一丁目377番7地点(馬淵ほか1996)に、また近在では大倉幕府周辺遺跡群雪ノ下4丁目620番地点(馬淵1999)に例がある。

なお採集品でも、中世遺物に関しては、全体に13世紀第2四半期から後半にかけてのものばかりであり、当地点の遺跡存続年代と齟齬はない。

(鍛治屋・馬淵—特記事項と補綴)

番号	種別	大きさ	せいけい	素地・粘土	その他特徴など
図71	鉄釘	長さ7.7cm　幅0.4cm　厚さ0.5cm　重量11.3g			

表1　上層泥岩地行上出土遺物観察表

番号	種別	大きさ	せいけい	素地・粘土	その他特徴など
図81	土師器 R種 小型	口径(7.8cm)　底径(4.6cm)　器高1.7cm	底部右回転糸切り	内低部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　雲母含む　焼成良好
2	土師器 R種 小型	口径(7.1cm)　底径(5.0cm)　器高1.9cm	底部右回転糸切り	内低部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　雲母含む　焼成良好
3	土師器 R種 中型	底径5.0cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質　雲母含む　焼成良好
4	土師器 R種 大型	口径(10.1cm)　底径5.6cm　器高3.2cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質　雲母含む　礫含む　焼成良好
5	土師器 R種 大型	口径12.2cm　底径7.7cm　器高3.4cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　焼成良好

表2　東西溝1出土遺物観察表

番号	種別	寸法	その他特徴など
図91	根太	残存長(309cm)　幅10.0cm　厚さ7.0cm	ホゾ穴4カ所全て打抜　穴の中心間の距離は平均65.5cm
2	根太	残存長(58.0cm)　幅13.8cm　厚さ2.8cm	ホゾ穴2カ所全て打抜
3	根太	残存長(72.6cm)　幅6.8cm　厚さ4.2cm	ホゾ穴1カ所貫通
4	束材	残存長(23.2cm)　幅12.1cm　厚さ5.5cm	根太1のホゾ穴に填る
5	束材	残存長(23.0cm)　幅12.4cm　厚さ6.0cm	根太1のホゾ穴に填る

表3　東西溝2出土部材観察表

番号	種別	大きさ	せいけい	素地・粘土	その他特徴など
図106	土師器 R種 小型	口径7.1cm　底径4.6cm　器高2.1cm	底部右回転糸切り	内低部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質　雲母含む　焼成良好
7	土師器 R種 小型	口径7.5cm　底径6.0cm　器高1.9cm	底部右回転糸切り		外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙褐色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　焼成良好
8	土師器 R種 小型	口径(7.8cm)　底径(4.2cm)　器高(1.6cm)	回転糸切り	内底部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質　雲母含む　焼成良好
9	土師器 R種 小型	口径7.8cm　底径4.7cm　器高1.8cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　雲母含む　焼成良好
10	土師器 R種 中型	口径(10.8cm)　底径(6.4cm)　器高3.25cm	底部回転糸切り	内底部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質　雲母含む　焼成良好
11	土師器 R種 大型	口径(12.6cm)　底径(7.2cm)　器高3.13cm	底部右回転糸切り	内低部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙褐色　白色針状物質　雲母含む　焼成良好
12	土師器 R種 大型	底径12.2cm　底径7.8cm　器高3.13cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙褐色　白色針状物質　雲母含む　焼成良好
13	土師器 R種 大型	口径12.6cm　底径7.4cm　器高3.6cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙褐色　白色針状物質　白色粒子　雲母砂粒含む　焼成良好　内外底部に墨書(判読不可)あり
14	土師器 R種 大型	口径(12.6cm)　底径(7.0cm)　器高3.7cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色粒子　雲母含む　焼成良好
15	土師器 R種 大型	口径(14.2cm)　底径8.0cm　器高4.0cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質含む　焼成良好

表4　東西溝2出土遺物観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・粘土　　その他特徴など
図11 1	土　師　器 R種　小型	口径(7.4cm)　底径(5.0cm)　器高1.6cm　　底部右回転糸切り　内低部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　雲母含む　焼成良好
2	土　師　器 R種　小型	口径7.5cm　底径5.6cm　器高2.7cm　　底部右回転糸切り　内低部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　赤橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　焼成良好
3	土　師　器 R種　小型	口径(7.8cm)　底径5.9cm　器高1.9cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　赤橙色　白色針状物質含む　焼成良好
4	土　師　器 R種　小型	口径7.6cm　底径5.6cm　器高1.9cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙褐色　白色針状物質　砂粒　雲母含む　焼成良好
5	土　師　器 R種　小型	口径7.7cm　底径5.3cm　器高1.8cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　砂粒　黒雲母含む　焼成良好
6	土　師　器 R種　小型	口径7.7cm　底径5.4cm　器高1.8cm　　底部右回転糸切り　内低部ナデ 胎土　淡橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　焼成良好
7	土　師　器 R種　小型	底径8.0cm　底径6.2cm　器高1.6cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　赤橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　焼成良好
8	土　師　器 R種　小型	底径8.0cm　底径5.6cm　器高1.8cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　赤橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　焼成良好
9	土　師　器 R種　小型	口径(8.2cm)　底径(6.0cm)　器高1.4cm　底部回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質含む　焼成良好
10	土　師　器 R種　中型	口径(10.4cm)　底径(5.8cm)　器高3.2cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ 胎土　精良　橙色　雲母含む　焼成良好
11	土　師　器 R種　小型	口径(11.4cm)　底径(7.0cm)　器高2.8cm　　底部回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質　黒雲母含む　焼成良好　口縁部に打ち欠き一カ所あり
12	土　師　器 R種　小型	口径(11.8cm)　底径(6.8cm)　器高3.3cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡赤橙色　白色針状物質　黒雲母含む　焼成良好　口縁部に煤少量付着
13	土　師　器 R種　小型	口径(12.2cm)　底径(7.0cm)　器高3.2cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　白色粒子　雲母含む　焼成良好
14	土　師　器 R種　中型	口径(11.0cm)　底径7.0cm　器高3.8cm　底部回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　雲母含む　焼成良好
15	土　師　器 R種　大型	口径(12.0cm)　底径(8.2cm)　器高2.7cm　　底部右回転糸切り　内低部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙褐色　白色針状物質含む　焼成良好
16	土　師　器 R種　大型	口径(12.6cm)　底径(6.4cm)　器高3.4cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡赤橙色　白色針状物質　黒雲母含む　焼成良好　口縁部に打ち欠き１カ所あり
17	土　師　器 R種　大型	口径13.0cm　底径7.7cm　器高3.7cm　底部回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質　雲母　砂粒含む　焼成良好
18	土師器転用 円　盤	直系(5.7cm)　厚さ5.5cm　R種小型土師器の底部周辺を円盤状に削り加工　外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色粒子　雲母含む　焼成良好
19	土　器　碗	口径(6.6cm)　器高残存部で(3.6cm)　口縁部及び内面ナデ　外面に指頭痕あり 胎土　淡灰橙色　雲母含む　焼成良好　内側に油煤付着
20	常　滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　成形　輪積み後ロクロ 胎土　灰色　長石含む　焼成良好
21	常　滑 甕	胴部片　内側に十字の線刻あり 胎土　灰色～灰黒色　長石含む

表５　東西溝３出土遺物観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・粘土　　その他特徴など
図13 1	土　師　器 T種　小型	口径(9.0cm)　底径(2.7cm)　器高1.7cm　　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　淡橙色　白色針状物質　雲母含む　精良土　焼成良好
2	常　滑 甕	口縁部片　成形　輪積み後フクロ　頸部内側に指頭痕あり 胎土は灰橙色で長石・礫を含み表面は灰褐色を呈す　　焼成良好

表６　建物２出土遺物観察表

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・粘土　その他特徴など
図14 1	渥美 広口壺	肩部片　輪積み　外・内面横ナデ　内側に指頭痕　肩部分に貼り付け凸帯を巡らす 胎土　灰色　白色・黒色微粒子含み　肌理細かい　焼成良好
 2	土師器 T種　大型	口径14.2cm　底径5.0cm　器高3.1cm　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　淡橙灰色　白色針状物質　雲母含む　精良土　焼成良好

表7　建物3出土遺物観察表

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・粘土　その他特徴など
図18 1	同安窯系 青磁碗	底部片　底径6.3cm　ロクロ成形　削り出し高台　内底面は蛇の目状に釉を削る　外面下部横方向の削り 素地　明灰色　黒色粒子含む　釉薬　灰緑色不透明　外面下部及び高台部分露胎

表8　柱穴列1出土遺物観察表

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・粘土　その他特徴など
図19 1	土師器 T種　小型	口径9.0cm　底径4.4cm　器高1.7cm　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　淡橙灰色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　焼成良好
 2	土師器 T種　小型	口径9.6cm　底径5.0cm　器高1.8cm　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　橙色　黒雲母　砂粒含む　焼成良好
 3	土師器 T種　小型	口径(9.0cm)　底径(5.4cm)　器高(1.5cm)　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　淡橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　焼成良好
 4	土師器 T種　小型	口径9.2cm　底径3.0cm　器高1.7cm　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　淡黄褐色　黒雲母　砂粒含む　焼成良好
 5	土師器 T種　小型	口径8.9cm　底径3.7cm　器高1.8cm　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　淡橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　焼成良好
 6	土師器 T種　小型	口径8.9cm　底径2.3cm　器高1.9cm　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　焼成良好
 7	土師器 T種　大型	口径(14.0cm)　底径(9.0cm)　器高3.5cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒　白色粒子含む　焼成良好
 8	土師器 T種　大型	口径14.1cm　底径9.3cm　器高3.6cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒　白色粒子含む　焼成良好

表9　柱穴列3出土遺物観察表

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・粘土　その他特徴など
図20 1	白色系土師器 T種　極小型	口径(5.8cm)　底径(3.0cm)　器高(1.2cm)　内底部口縁部ナデ　内折れ型　外底面に板圧痕あり 胎土　乳白色　精良　胎芯は灰色　焼成良好

表10　柱穴列4出土遺物観察表

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・粘土　その他特徴など
図22 1	土師器 R種　小型	口径7.1cm　底径4.2cm　器高2.0cm　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質　雲母　黒雲母　白色微粒子含む　焼成良好
 2	土師器 T種　小型	口径(8.4cm)　底径(2.8cm)　器高(2.2cm)　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　淡灰橙色　白色針状物質　黒雲母　雲母　砂粒含む　焼成良好
 3	土師器 T種　小型	口径(9.0cm)　底径(4.0cm)　器高(1.7cm)　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　灰色～淡灰橙色　白色針状物質　雲母　微砂粒含む　焼成良好
 4	土師器 T種　大型	口径(12.8cm)　底径(6.0cm)　器高3.5cm　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　淡灰橙色　白色針状物質　黒雲母　雲母　微砂粒含む　焼成良好
 5	土師器転用 円盤	口径3.4cm　厚さ1.0cm　土式底部の転用品　用途不明 胎土　橙色　白色針状物質　白色粒子含む　焼成良好

表11　上層3群柱穴出土遺物観察表(1)

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・粘土　　その他特徴など
図22 6	緑　釉 壺	口縁部～底片及び体部片　口径(11.0cm)　輪積み後ロクロ成形 胎土　灰褐色　白色粒子　砂粒含む　口縁部・体部外面に緑色釉が掛かり一部銀化している　焼成良好
7	白　磁 碗	口縁部片　(口径10.6cm)　ロクロ成形 素地　灰色　黒色微粒子含む　　釉薬　灰青色半透明　外面に貫入が少し入る
8	軒　丸　瓦	瓦頭部片　最大厚1.7cm　　右回り巴文を主文とし回りに小連珠文を巡らす 胎土　灰桃色　白色粒子　砂粒含む　　表・裏面ともハナレ砂
9	鉄　釘	長さ5.5cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　重量4.0ｇ

表12　上層３群柱穴出土遺物観察表(２)

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・粘土　　その他特徴など
図23 1	緑　釉 壺	口縁部　口径(11.2cm)　輪積み後ロクロ成形 胎土　灰褐色　白色小粒子含む　表面は暗褐色を呈し、降灰あり
2	白　磁 端反り碗	底部片　底径(6.0cm)　ロクロ成形　削り出し高台　高台部露胎 素地　灰色　黒色粒子含む　　釉薬　淡灰緑色　半透明

表13　下層面上出土遺物観察表(２)

番　号	種　別	寸　法	その他特徴など
図９　1	部　材	長さ33.5cm　幅13.0cm　厚さ6.8cm	刃物痕あり
2	部　材	長さ39.6cm　幅12.0cm　厚さ8.4cm	斜めに貫通孔あり
3	部　材	長さ53.6cm　幅39.0cm　厚さ23.0cm	目違いホゾを刻む
4	部　材	長さ57.8cm　幅13.2cm　厚さ12.0cm	
図25　5	根　太	残存長(346.5cm)　幅15.0cm　厚さ10.0cm	７カ所のホゾ穴の配列は打抜１、包込２が交互に並ぶ 穴の中心間の距離は平均50.5cm
6	部　材	残存長(349.0cm)　幅38.0cm　厚さ3.0cm	

表14　東西溝４出土部材観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・粘土　　その他特徴など
図25 1	土　師　器 T種　小型	口径(10.4cm)　底径(7.0cm)　器高1.7cm　　手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土　橙色　白色針状物質　雲母　白色粒子含む　　焼成良好
2	土　師　器 R種　小型	口径(7.6cm)　底径(4.8cm)　器高2.9cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色粒子　砂粒含む　　焼成良好
3	土　師　器 R種　小型	口径7.7cm　底径5.2cm　器高2.0cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　雲母　白色粒子　黒雲母含む　焼成良好　口縁部に打ち欠き二カ所あり
4	土　師　器 R種　小型	口径8.0cm　底径4.7cm　器高1.6cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質含む　　焼成良好　口縁部に打ち欠き一カ所あり
5	土　師　器 R種　小型	口径7.7cm　底径5.6cm　器高1.8cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質　雲母含む　　焼成良好
6	土　師　器 R種　小型	口径7.6cm　底径5.4cm　器高1.5cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡黄褐色　白色針状物質　白色粒子含む　　焼成良好　口縁部に打ち欠き二カ所あり
7	土　師　器 R種　小型	口径(8.0cm)　底径4.8cm　器高1.7cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡黄褐色　白色針状物質含む　　焼成良好
8	土　師　器 R種　小型	口径(8.2cm)　底径(5.8cm)　器高1.6cm　　底部回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　金雲母含む　肌理細かい　　焼成良好
9	土　師　器 R種　小型	口径8.2cm　底径6.0cm　器高1.4cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　　焼成良好

表15　東西溝４出土遺物観察表(１)

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・粘土　その他特徴など
図25 10	土師器 R種 小型	口径8.2cm 底径6.2cm 器高1.6cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 黒雲母 礫含む 焼成良好
11	土師器 R種 小型	口径8.6cm 底径5.3cm 器高1.9cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡赤橙色 白色針状物質含む 焼成良好
12	土師器 R種 小型	口径8.3cm 底径4.8cm 器高1.6cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 砂粒含む 焼成良好
13	土師器 R種 小型	口径(8.6cm) 底径6.0cm 器高2.0cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡灰橙色 白色針状物質 雲母 黒雲母含む 焼成良好
14	土師器 R種 大型	口径11.8cm 底径7.0cm 器高2.8cm 底部回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 橙色 白色針状物質 雲母 砂粒含む 焼成良好
15	土師器 R種 大型	口径12.2cm 底径8.7cm 器高3.0cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 橙色 白色針状物質 雲母 白色粒子含む 焼成良好
16	土師器 R種 大型	口径11.8cm 底径7.7cm 器高3.4cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡灰褐色 白色針状物質 雲母 砂粒含む 焼成良好 口縁部油煤付着
17	土師器 R種 大型	口径12.2cm 底径7.3cm 器高2.9cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 黒雲母 礫 砂粒含む 焼成良好
18	土師器 R種 大型	口径12.8cm 底径8.6cm 器高3.1cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 橙色 白色針状物質 黒雲母含む 焼成良好 内底部に油煤付着
19	土師器 R種 大型	口径11.9cm 底径6.6cm 器高3.3cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 赤橙色 白色針状物質 礫含む 焼成良好
20	土師器 R種 大型	口径(12.6cm) 底径(7.2)cm 器高3.2cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 雲母 白色粒子含む 焼成良好
21	土師器 R種 大型	口径(13.0cm) 底径7.2cm 器高3.7cm 底部回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 黒雲母 礫 砂粒含む 焼成良好
22	土師器 R種 大型	口径(12.8cm) 底径5.8cm 器高3.1cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 黒雲母含む 焼成良好 内底部に穿孔途中の痕あり
23	土師器 R種 大型	口径12.1cm 底径7.0cm 器高3.4cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 白色粒子 雲母含む 焼成良好 口縁部に打ち欠き三カ所あり
24	土師器 R種極小型	口径5.3cm 底径3.9cm 器高0.9cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色粒子 雲母含む 焼成良好
25	山皿	口径(8.5cm) 底径(4.4cm) 器高1.8cm ロクロ成形 底部右回転糸切り 胎土 明灰色 きめ細かい 焼成良好
26	土器質 火鉢	口縁部片 外面は上位横ナデ、中位指頭痕、下位ヘラ削り 内面は横ナデ後横方向に不規則な状線あり 胎土は淡橙色、胎芯部は灰色 白色粒子 砂粒 雲母含む
図26 27	鉢	口縁部～体部片 口径(42.4cm) 胎土は表面肌色、胎芯部は灰色 長石 石英 金雲母 砂粒含む
28	常滑 こね鉢Ⅰ類	底部片 底径13.3cm 高台貼り付け 輪積み後外面下部にヘラ削り 胎土 灰色 長石 石英含む
29	常滑 こね鉢Ⅱ類	口径(30.0cm) 底径(16.8cm) 器高10.8cm 輪積み後ロクロ成形 外面体部に指頭痕 胎土 暗灰色 長石 石英 砂礫含む 内面に降灰
30	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土 灰橙色 長石含む 粘性強
31	渥美 甕	底部片 底径(13.3cm) 輪積み成形 底部に近い内側面に3～8mm横方向に削りあり 胎土 明灰色 長石含む 粘性強
32	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土 灰色 長石含む 粘性強 外面ハケ塗り
33	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 外面に叩き目 胎土 灰白色 長石 黒色粒子含む 表面は茶色
34	亀山 甕	胴部片 輪積み成形 胎土 灰色 黒色粒子 白色粒子含む

表16　東西溝４出土遺物観察表（２）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・粘土　　その他特徴など
図26 35	白　磁 口はげ皿	口径(10.0cm)　底径6.0cm　器高2.9cm　　ロクロ成形　口唇部の釉薬を拭う 素地は灰白色で黒色粒子含む　釉薬は淡青灰色半透明　外底面は薄くハケ塗り　焼成良好
36	白　磁 口はげ皿	口縁部片　口径(10.9cm)　ロクロ成形　口唇部を釉薬を拭う 素地は灰白色で黒色粒子含む　釉薬は淡灰緑色透明
37	竜泉窯系青磁 折腰鉢	口径(12.0cm)　底径(6.6cm)　器高4.4cm　ロクロ成形　口縁端部が外に張り出す　畳付きは露胎 素地は灰白色で黒色粒子含む　釉薬は灰緑色で不透明　焼成良好　　内面に使用痕あり
38	竜泉窯系青磁 折腰鉢	底部片　底径(11.8cm)　ロクロ成形　畳付きのみ露胎 素地は灰色～橙褐色で黒色粒子含む　釉薬は淡青色半透明　細かい貫入および気泡が入る　焼成良好
39	竜泉窯系青磁 折腰鉢	口縁部　口径(20.7cm)　ロクロ成形 素地は灰白色で黒色粒子含む　釉薬は青緑色半透明　大きめの貫入が入る　焼成良好
40	丸　瓦	最大厚2.2cm　胎土は淡灰色　礫　石英　黒色粒子含む 凸面は縄目で一部ナデで消されている　凹面は布目　側面はヘラ削りを施す　　焼成良好
41	丸　瓦	最大厚2.2cm　胎土は灰褐色　砂粒　白色粒子多く含む 凸面は叩き痕　凹面は布目　側面はヘラ削りを施す　　焼成良好
図27 42	平　瓦	最大厚2.0cm　　胎土は灰色　礫　砂粒　長石含む 凸面は離れ砂　凹面は布目　側面はヘラ削りを施す　　焼成良好
43	不明鉄製品	最大径6.1cm　最大厚3.1cm 輪郭は八弁の花弁状を成すと思われる　　釘隠しか
44	砥　石	残長(7.0cm)　幅2.6cm　厚み1.3cm　　砥面は二面 中砥　乳白色　　産地伊予
45	木　製　品 陽　物	長さ8.1cm　最大径1.5cm　　整形は丁寧 墨書と思われる痕跡あり
46	不明骨製品	長さ8.2cm　幅2.0cm　厚み0.4cm　　未製品 外面に被熱痕あり
47	不明骨製品	長さ(10.8cm)　幅1.5cm　厚み0.15cm　　未製品

表17　東西溝４出土遺物観察表(３)

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・粘土　　その他特徴など
図28 1	土　師　器 T種　小型	口径(9.4cm)　底径(6.0cm)　器高1.5cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土　灰褐色　白色針状物質　砂粒含む　　焼成良好
2	土　師　器 R種　小型	口径8.0cm　底径5.4cm　器高1.9cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色～赤橙色　白色針状物質　黒雲母　砂粒含む　　焼成良好
3	土　師　器 R種　大型	口径(12.6cm)　底径(7.4cm)　器高3.8cm　底部回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙褐色　白色粒子　黒雲母　砂粒含む　　焼成良好

表18　東西溝５出土遺物観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・粘土　　その他特徴など
図31 1	土　師　器 T種　小型	口径(9.0cm)　底径(4.6cm)　器高1.9cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土　淡橙色　黒色砂粒　黒雲母　白色粒子含む　　口縁部に油煤付着し、全体に黒っぽく炭化している

表19　溝９出土遺物観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・粘土　　その他特徴など
図31 2	土　師　器 R種　小型	口径(8.2cm)　底径(6.2cm)　器高1.8cm　　底部回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　黒色砂粒　白色粒子含む　　焼成良好
3	平　瓦	最大厚2.0cm　　胎土は灰白色　砂粒　礫含む 凸面は粗い削り　凹面は布目　側面はヘラ削りを施し面取り幅は広い　焼成良好

表20　土壙17出土遺物観察表

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・粘土　その他特徴など
図32 1	土師器 R種 小型	口径7.7cm 底径4.8cm 器高1.7cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質含む 焼成良好
2	土師器 R種 小型	口径(12.2cm) 底径(7.6cm) 器高3.3cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 板圧痕は不明 胎土 橙色 白色針状物質含む 焼成良好
3	土師器 R種 小型	口径7.7cm 底径5.2cm 器高1.6cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙褐色 白色針状物質 黒雲母 黒色砂含む 焼成良好
4	土師器 R種 小型	口径8.1cm 底径5.6cm 器高1.8cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙褐色 白色針状物質 黒雲母含む 焼成良好
5	土師器 R種 小型	口径7.9cm 底径5.2cm 器高1.7cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 黒色砂粒 黒雲母含む 焼成良好
6	土師器 R種 小型	口径(8.3cm) 底径4.6cm 器高1.85cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質含む 焼成良好
7	土師器 R種 大型	口径(11.8cm) 底径(6.0cm) 器高3.5cm 回転糸切り 内底部ナデ 板圧痕は不明 胎土 赤橙色 白色針状物質 黒雲母 黒色砂粒含む 焼成良好
8	土師器 R種 大型	口径(11.6cm) 底径(7.2cm) 器高3.4cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質含む 焼成良好
9	土師器 R種極小型	口径(4.1cm) 底径(2.4cm) 器高1.0cm 回転糸切り 内底部ナデ 胎土 淡橙色 焼成良好
10	白磁 口はげ皿	口縁部片 口径(9.6cm) ロクロ成形 口唇部の釉薬を拭う 素地は灰白色で黒色微粒子を含む 釉薬は青灰色半透明 焼成良好
11	常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み後ロクロ成形 口縁部ナデ 外面体部に指頭痕 胎土 赤茶褐色 長石 石英含む
12	瓦質 火鉢	口縁部片 口縁部ナデ 外面指頭痕 内・外面とも少量の漆が付着する 胎土は灰茶褐色、表面は灰色 白色粒子 砂粒 雲母含む 口縁部に煤少量付着
13	土師器 R種 小型	口径7.6cm 底径6.0cm 器高1.6cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 黒色砂粒含む 焼成良好 内底面に穿孔一カ所あり
14	土師器 R種 小型	口径7.8cm 底径4.0cm 器高2.5cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 黒色砂粒含む 焼成良好
15	土師器 R種 小型	口径8.0cm 底径6.0cm 器高1.25cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 黒色砂粒 黒雲母 雲母含む 焼成良好
16	土師器 R種 小型	口径8.1cm 底径5.6cm 器高1.6cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡赤橙色 白色針状物質 砂粒 礫 雲母含む 焼成良好
17	土師器 R種 小型	口径7.9cm 底径5.4cm 器高1.9cm 底部回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 黒雲母含む 焼成良好
18	土師器 R種 小型	口径8.1cm 底径5.6cm 器高1.6cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡赤橙色 白色針状物質 砂粒 礫 雲母含む 焼成良好
19	土師器 R種 小型	口径7.9cm 底径4.6cm 器高1.5cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 雲母 黒色砂粒含む 焼成良好
20	土師器 R種 小型	口径7.8cm 底径4.6cm 器高1.8cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 白色砂子含む 焼成良好
21	土師器 R種 大型	口径7.8cm 底径4.0cm 器高2.5cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 雲母 黒色砂粒含む 焼成良好
22	土師器 R種 大型	口径7.4cm 底径4.7cm 器高1.8cm 底部回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 橙色 白色針状物質 黒雲母含む 焼成良好
23	土師器 R種 大型	口径11.5cm 底径5.6cm 器高3.0cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 橙色 白色針状物質含む 精良 焼成良好
24	土師器 R種 大型	口径11.8cm 底径7.8cm 器高3.4cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 橙色 白色針状物質 砂粒含む 焼成良好
25	土師器 R種 大型	口径11.0cm 底径6.8cm 器高3.0cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 雲母含む 焼成良好

表21　東西溝出土遺物観察表(1)

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・粘土　その他特徴など
図32 26	土師器 R種 大型	口径(11.8cm) 底径7.8cm 器高3.6cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙褐色 白色針状物質 黒雲母含む 焼成良好 口縁部に油煤付着
27	土師器 R種 大型	口径(11.8cm) 底径7.0cm 器高3.2cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙褐色 白色針状物質 砂粒含む 焼成良好 口縁部に油煤少量付着
28	土師器 R種 大型	口径12.2cm 底径8.4cm 器高2.9cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 砂粒含む 焼成良好 口縁部に油煤付着
29	土師器 R種 大型	口径(12.2cm) 底径7.4cm 器高3.5cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 雲母含む 焼成良好
30	土師器 R種 大型	口径12.3cm 底径6.6cm 器高3.5cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 雲母含む 焼成良好 口縁部に油煤少量付着
31	土師器 R種 大型	口径(11.8cm) 底径(7.2cm) 器高2.7cm 底部回転糸切り 胎土 淡橙色 白色針状物質含む 焼成良好 内底部端に穿孔一カ所あり
32	土師器 R種 大型	口径12.0cm 底径7.6cm 器高3.3cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 橙色 白色針状物質 黒雲母 黒色砂粒 礫含む 焼成良好
33	土師器 R種 大型	口径11.8cm 底径7.4cm 器高3.4cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 橙色 白色針状物質 黒雲母 砂粒含む 焼成良好 口縁部に油煤少量付着
34	土師器 R種 大型	口径(12.2cm) 底径(6.0cm) 器高3.4cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 黒雲母 黒色砂粒含む 焼成良好
35	土師器 R種 大型	口径(13.2cm) 底径6.4cm 器高4.8cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 黒雲母 雲母含む 焼成良好
36	常滑 こね鉢Ⅰ類	口径(31.2cm) 輪積み後ロクロ成形 口縁部ナデ 外面下位へら削り 高台部分剥離 胎土 灰色 長石 石英 黒色粒子含む 内面灰緑色自然釉
37	山茶碗	口縁部 口径(14.6cm) ロクロ成形 胎土 橙色 精良 白色粒子多く含む 焼成は生焼け気味
38	渥美 甕	口縁部～肩部片 輪積み 肩部に叩き目あり 内縁部～肩部にかけて灰釉をハケ塗り 胎土 暗紫褐色 白色粒子 気泡含む 粘性強
図33 39	白磁 口はげ皿	口径8.6cm 底径5.3cm 器高2.7cm ロクロ成形 口唇部内側の釉薬を拭う 外底部露胎 素地は灰白色で黒色微粒子を含む 釉薬は灰色半透明 外面に貫入あり 焼成良好
40	白磁 口はげ皿	口縁部片 口径(9.7cm) ロクロ成形 口唇部の釉薬を拭う 素地は灰白色で黒色微粒子を含む 釉薬は青灰色半透明
41	竜泉窯系 青磁鉢	口縁部片 口径(14.0cm) ロクロ成形 口縁端部が外反する 外面に複弁の蓮弁文を配す 素地は灰白色で黒色微粒子を含む 釉薬は水青色半透明で気泡多く含む
42	竜泉窯系青磁 蓮弁文碗	口縁部片 口径(15.8cm) 複弁 ロクロ成形 素地は灰白色で黒色微粒子を含む 釉薬は青緑色半透明で気泡多く含む
43	竜泉窯系青磁 蓮弁文碗	口縁部片 口径(15.0cm) 単弁 ロクロ成形 素地は灰白色で黒色微粒子を含む 釉薬は水青色半透明 気泡含む
44	土師器 T種 大型	口径(11.8cm) 底径(6.0cm) 器高3.2cm 手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土 淡橙色 白色針状物質 雲母 砂粒含む
45	土師器 T種 大型	口径(13.0cm) 底径(6.2cm) 器高3.5cm 手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土 淡橙褐色 白色針状物質 黒雲母 砂粒含む
46	土師器 R種 小型	口径(7.4cm) 底径(5.2cm) 器高1.5cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 雲母含む 焼成良好
47	土師器 R種 小型	口径(7.8cm) 底径5.4cm 器高1.7cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 雲母含む 焼成良好
48	土師器 R種 小型	口径(7.8cm) 底径(6.0cm) 器高1.4cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物質 黒雲母含む 焼成良好
49	土師器 R種 小型	口径(7.8cm) 底径(6.4cm) 器高1.5cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡褐色 白色針状物質含む 焼成良好
50	土師器 R種 小型	口径(8.4cm) 底径(7.0cm) 器高1.5cm 底部右回転糸切り 内底部ナデ 外底面に板圧痕あり 胎土 淡橙色 白色針状物 砂粒含む 焼成良好

表22　東西溝出土遺物観察表(2)

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・粘土　　その他特徴など
図33 51	土　師　器 R種　大型	口径(12.8cm)　底径(6.0cm)　器高3.3cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　黒雲母含む　精良　　焼成良好

表23　東西溝出土遺物観察表(3)

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・粘土　　その他特徴など
図34 1	土　師　器 R種　小型	口径(7.8cm)　底径5.8cm　器高1.8cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　白色粒子　砂粒　黒雲母含む　　焼成良好
2	土　師　器 R種　小型	口径8.5cm　底径6.3cm　器高1.6cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質含む　　焼成良好
3	土　師　器 R種　大型	口径(11.6cm)　底径(8.0cm)　器高3.3cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質含む　　焼成良好
4	土　師　器 R種　大型	口径12.1cm　底径7.3cm　器高3.2cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　雲母　砂粒含む　　焼成良好
5	土　師　器 R種　大型	口径12.2cm　底径7.7cm　器高3.5cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質含む　　焼成良好
6	土　師　器 R種　大型	口径(12.6cm)　底径8.0cm　器高3.6cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　淡橙色　白色針状物質　雲母　砂粒含む　　焼成良好
7	土　師　器 R種　大型	口径(12.8cm)　底径(7.0cm)　器高3.5cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　外底面に板圧痕あり 胎土　橙色　白色針状物質含む　　精良　　焼成良好
8	土　師　器 R種極小型	口径5.4cm　底径4.2cm　器高0.9cm　　底部右回転糸切り　内底部ナデ　内折れ型 胎土　淡橙色　黒雲母　黒色砂粒含む　　焼成良好
9	土　焙　烙	口縁部片　口径(29.8cm)　　ロクロ成形　　近世 胎土　淡橙色～赤橙色　黒雲母　黒色砂粒含む　　内底面に火熱を受けた痕跡あり
10	土　師　器 火　鉢	口縁部片　　輪積み後口縁部と内面ナデ　外面に指頭成型 胎土　淡橙褐色　黒雲母　　白色粒子　砂粒含む　　焼成良好　　表面は火熱により灰褐色を呈す
11	青　磁 蓮弁文碗	底部片　底径3.2cm　　ロクロ成形　　削り出し高台　畳付のみ露胎 素地は灰白色で黒色微粒子含む　釉薬は水青色透明　気泡多く含む

表24　遺構外採集遺物観察表

第４章　まとめと考察

本地点の位置する場所は、鎌倉時代を通じて政治的に重要な場所であった。80㎡と狭い範囲ながらも、調査成果からその一端がうかがえる。簡単にまとめておきたい。

１．遺跡年代と性格

年代

全体に基盤層近くまで上部層が削り取られており、鎌倉時代後半以降の生活面そのものがない。そのために、北半部の平坦面は出土遺物に恵まれず、年代比定の根拠に乏しい。ひとまず出土遺物から12世紀末～13世紀初頭以降としておくが、場の性格からみて遅くとも鎌倉開府頃には営為が始まっていたことは確実である。終末については、推定根拠を得られなかった。

南半部の東西溝は豊富な出土遺物に恵まれたので、年代比定は可能であった。ここではひとまず、東西溝の年代観を、第三章で提示したそれに即してあらためて整理してみる（古→新）。

東西溝５—13世紀前半
東西溝４—13世紀第２四半期～同中葉
東西溝３—13世紀中葉～同第３四半期
東西溝２—13世紀後半～14世紀初頭
東西溝１—13世紀後半～14世紀前半

東西溝は13世紀前半に始まり、ほぼ鎌倉時代いっぱい存続していたということになる。敷設時期は、出土遺物でみるかぎり、面の使用開始より遅れている。ただ、やはり削平によって東西溝本来の切り込み肩が失われており、北側の平坦面との連続性を把握することは容易でない。

以上を要するに、当遺跡地は鎌倉時代の初めから、少なくとも鎌倉時代いっぱい営まれ、その間の13世紀前半に東西の溝が作られた、ということになる。

性格

ここには、板囲いの小建物や囲炉裏といった、たとえば若宮大路西側一帯でしばしば発見される遺構や遺物はない。平坦面の遺構は掘立柱建物が大半であり、おそらく大きな屋敷地の一角を発掘したことは間違いない。南半部に検出された東西溝は、次項で述べるように、その規模と構造からきわめて高級なものであるといえる。しかも、この一帯は鎌倉時代中期以降幕府の再度の移転によりたびたび地割変更を余儀なくされた場所であるにもかかわらず、東西溝は13世紀前半に設置されて以来、位置の変動もなく存続している。すなわち、東西溝以北に地割の変更はおよんでいない。明らかにこの区画が、非常に枢要な場所であることを示している。このことは、次に示す土師器の出土状況からもうかがえる（表27）。

調査区全体で、その出土量は遺物全体の97.1％という高い数値を示す。東西溝のみでは98％におよぶ。この数値は筆者の知るかぎり、鎌倉市内遺跡でもっとも高い部類に入る。過去の例では、同一遺跡である北条小町邸内の雪ノ下一丁目377番7地点（地点４）の92.5％が最高である（馬淵1997）。この地域は鎌倉時代中期以後、疑いもなく幕府の中でも最重要の位置を占めていた。この数値は、「身分階層的に上位に行くほど土師器消費量は多い」という、小野正敏や宇野隆夫の指摘が妥当であることを示している（小野1991・宇野ほか1992）。そうだとすれば、このように最高値を示すのはやはり、この位置に北条家得宗、あるいは執権の邸宅があったことの傍証ともなりうるのではないか。

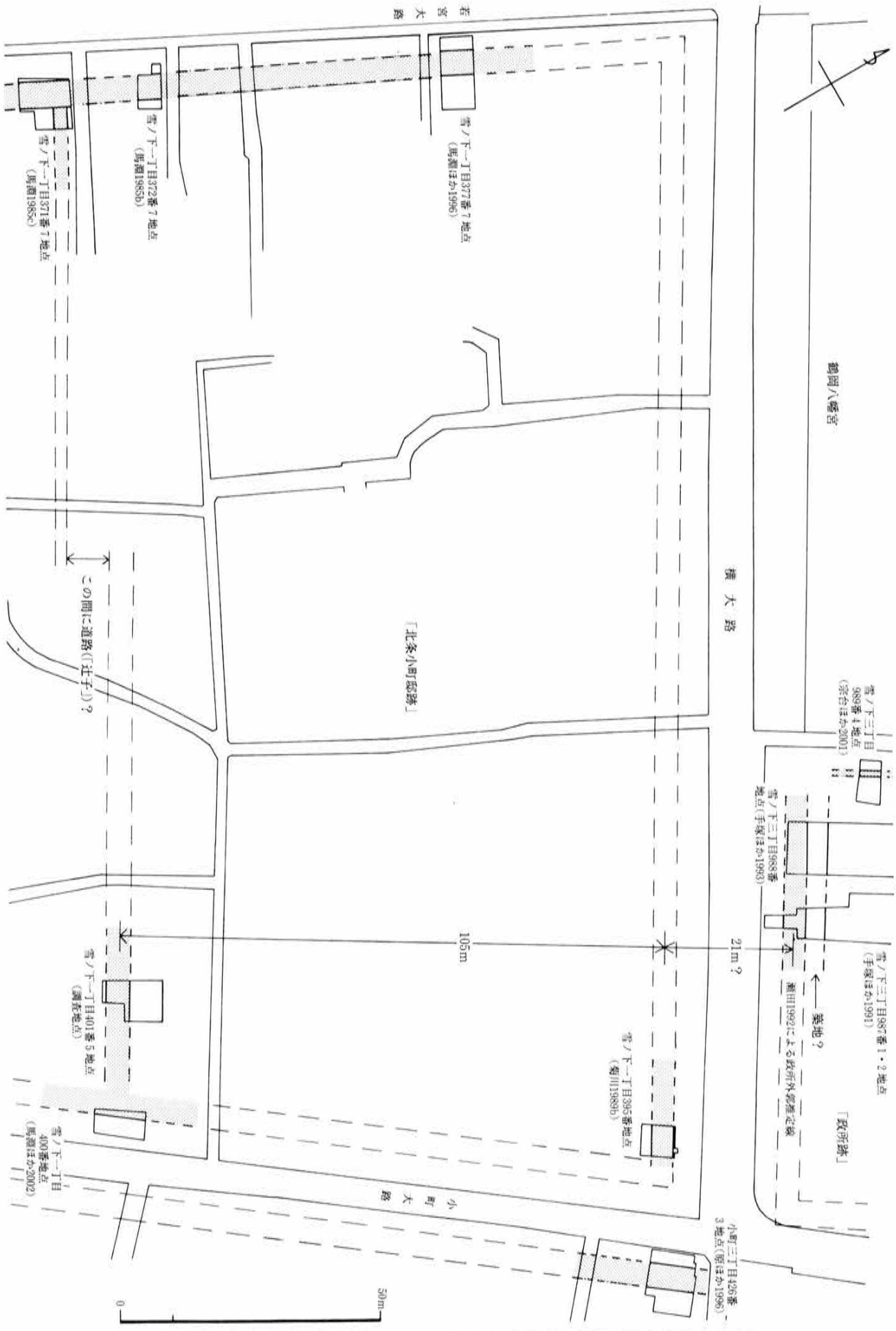


図35 「北条小町邸跡」北半部における区画概念図(側溝幅は掘方全体を示す)

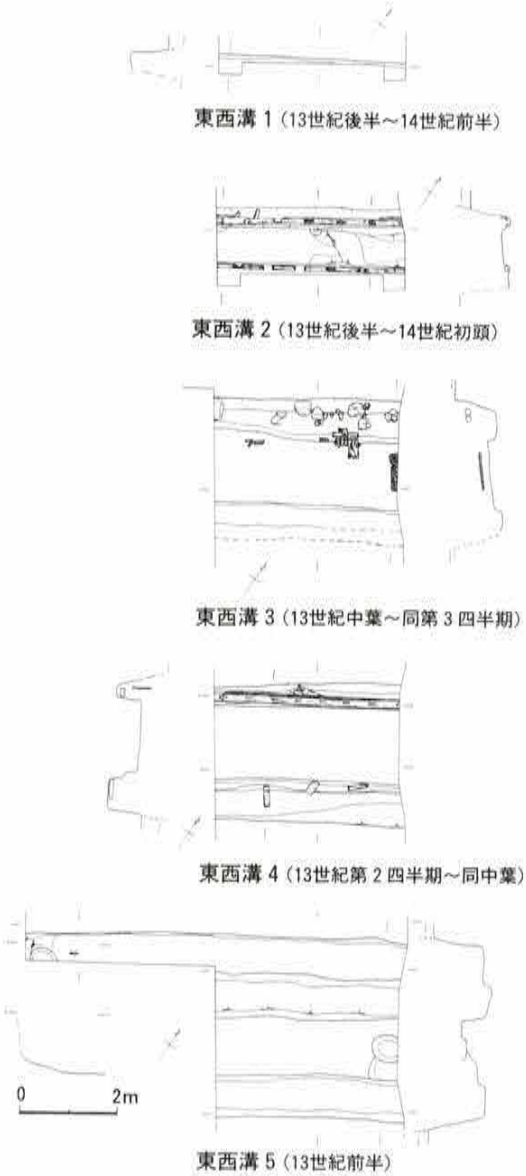


図36　東西溝変遷概念図

２．東西溝とその意義

本地点では大型の東西溝が検出された。道路の側溝だとすれば、調査地点のすぐ南を走行していることになる。このことの意義は、中世都市鎌倉の地割についてのみならず、幕府移転問題についての示唆ともなりうるほどに大きい。若干の考察を加えたい。

位置

「北条小町邸」という呼称の与えられた一辺約200ｍの方形区画北半部に、本地点検出の東西溝を組み込み、周辺の道路側溝との位置関係をみてみた（図35）。地図上の作図なので誤差の発生をまぬがれてはいまい。またここに示した側溝にはいずれも数度の改修が認められるが、溝個別に同時期性を抽出するのは不可能なため、幅は掘方全体で提示した。したがって、方向や位置も厳密性を欠くことは否めない。概則図として理解してほしい。今後調査事例が増加することにより、修正されていくはずである。

さて、本地点の東西溝は、「北条小町邸」とされる方形区画北辺の横大路南側溝から、およそ105ｍ南にある。方形区画南北距離は約220ｍ弱なので、そのほぼ中央にあたることになる。また、東の山裾の東勝寺から下ってきた道が小町大路に突き当たる地点の延長線上にも位置する。

若宮大路側でみると、東西溝の延長線上の大路に面した場所には調査事例がなく、存否はわからない。しかし、その少し南側でおこなわれた調査（雪ノ下一丁目371番7地点＝地点６，馬淵1985ｃ）では、掘方幅2.4ｍ・深さ約１ｍの鎌倉時代初期頃（12世紀第４四半期頃）の東西溝が見つかっている。13世紀以降に存在した形跡はないが、鎌倉時代初めのある時期、ここが何らかの境界と認識されていたのは確かであろう。

規模と構造について

構造からみれば、上下２段の角材を束で連結し、外側に側板を当てるという鎌倉市内に通有の手法がとられている。しかし、使用されている部材は若宮大路側溝のそれにまさるとも劣らないほど、分厚く頑丈である。では、規模においては、鎌倉市内で検出された溝の中でどのような位置にあるのだろうか。本来の肩口が失われているので、深さについては措き、とりあえずは前章の記述に沿って幅をみてみよう。

東西溝５―掘方３ｍ（推定，最大幅3.82ｍ），木枠２ｍ前後（推定）

東西溝４—掘方約３ｍ，木枠２ｍ前後(推定)

東西溝３—掘方3.1ｍ(推定)，木枠２ｍ前後(推定)

東西溝２—掘方1.64ｍ以上，木枠１ｍ

東西溝１—大半が調査区外にあり，不明

５から３までの間は、掘方幅約３ｍ・木枠間隔２ｍという大きさが維持されている。溝本体の幅は約２ｍとみてよかろう。この数値は、過去鎌倉市内で検出された溝の中では、若宮大路側溝に次ぐ。これに匹敵するものとしては、これまでのところ本遺跡地北西角近くの横大路南側溝(地点２＝雪ノ下一丁目39番地点，菊川1989)と、政所跡とされる区画の南辺で検出された同じく横大路北側溝(地点16＝雪ノ下三丁目987番1・２地点，手塚ほか1991)の二例しかない。いずれも幅約２ｍの木枠を持つ(地点２の例は2.1ｍ)。つまり、この溝は東西幹線道路である横大路の側溝と同格ということになる。

敷設時期

全体的な年代観は前項に示したとおりだが、敷設された時期については、土師器皿Ｔ種の出土状況からさらに絞り込むことができる。

東西溝出土土師器のうち、Ｔ種の比率をみてみよう(表27)。

溝全体で0.7％と、１％に満たない。上層の東西溝１～３にはなく、わずかに下層の４・５から出土しているにすぎない。先に述べたとおり、共伴遺物からみた後者の年代は13世紀前半～中葉だが、Ｔ種の比率の低さは13世紀前半でもさほど遡行しないことを示している。おそらく主体は第２四半期にある。というのも、土師器皿Ｔ種は13世紀中葉に相次いで創建された建長寺(河野ほか1991)・名越山王堂(斎木1990)・極楽寺(玉林ほか1980・斎木ほか1998など)・称名寺(山本ほか1988)からまったく出土しておらず、それ以前に生産が途絶していたことが確実であるからだ。すなわちＴ種の終末は、筆者がかねて主張しているように、13世紀第２四半期後半(1240年代)に求められる(馬淵1998・同2002)。

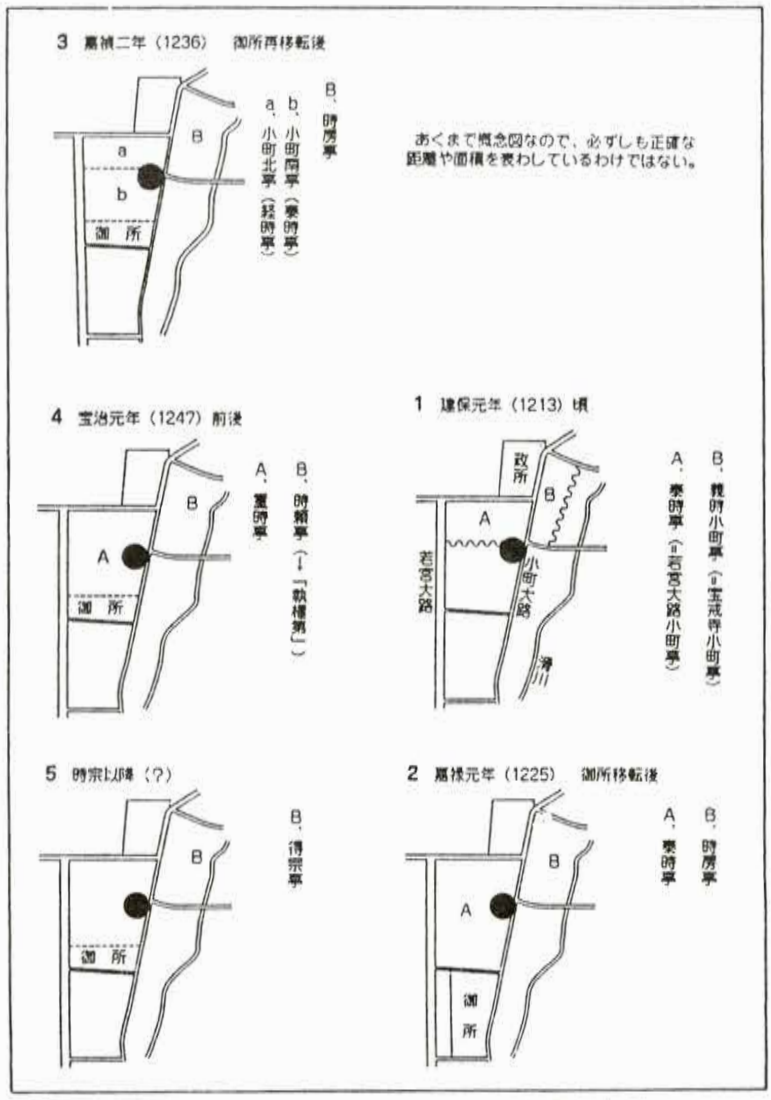


図37　秋山1997による遺跡付近変遷概念図
(黒丸印が調査地点)

性格

本地点の東西溝は、13世紀第２四半期にこの場所に出現し、鎌倉時代中～

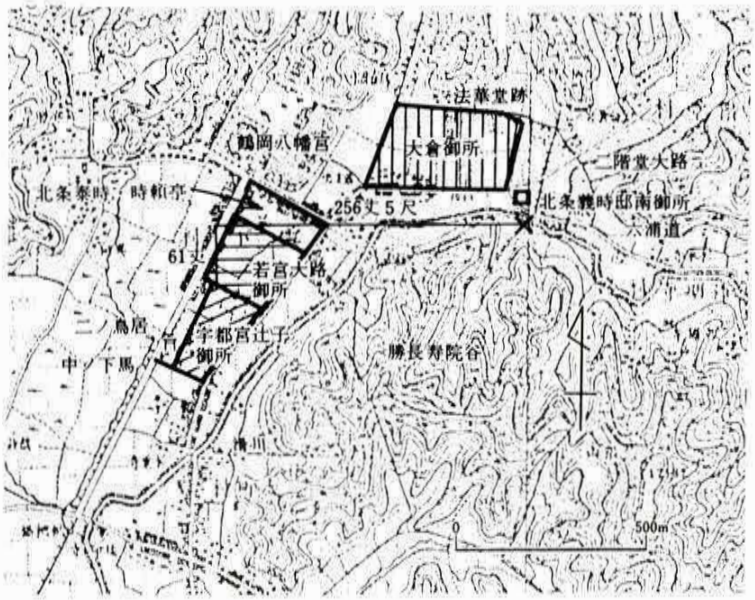


図16　鎌倉幕府将軍御所関係図

注1）×印は伊賀朝行勝長寿院前邸の想定地を示す．勝長寿院前というので勝長寿院谷の奥ではなく入口あたりを想定した．
注2）本図は明治15年測量の2万分の1の地形図（国立国会図書館蔵）をもとに，私見を加えたものである．

図38　秋山1993による宇津宮辻子幕府推定位置図

後期を通じて何度かの改修を経ながらも、ここにずっとあり続けたことになる。この存続年代は注意を要する。ほぼ嘉禎二年(1236)以降の幕府(「若宮大路御所」)存続期間に時期を同じくしているからである。もしこの年の幕府移転を機にここに境界が敷かれたとすると、何人かの論者のいうところと一致することになる。

秋山哲雄によれば、この年にあった再度の幕府移転にともなって方形区画は南北に分割され、北半部が経時邸(「小町北亭」)に、南半部が泰時邸(「小町南亭」)になる(秋山1997)。秋山の作図にしたがえば、本地点検出の東西溝こそその境界に相当しよう(図37)。

第一章で書いたように、大倉から宇津宮辻子への幕府移転に関連して、はやくに貫達人らは『鎌倉市史　総説編』の史料解釈の誤りを指摘している。すなわち、『吾妻鏡』嘉禄元年(1225)十一月二十日条にみえる「東西二百五十六丈五尺、南北六十一丈」という数値が、『鎌倉市史　総説編』のいうような新御所の大きさを示すものではなく、当時仮御所としていた伊賀朝行亭の御寝所から新御所の西北角までの距離を示すことを明らかにした(須藤／貫1963)。松尾剛次は、「大御堂(勝長寿院)前」とある伊賀朝行亭の位置を大御堂ケ谷の入り口に比定した上で、宇津宮辻子幕府の位置を推定した(松尾1992・同1993，図38)。

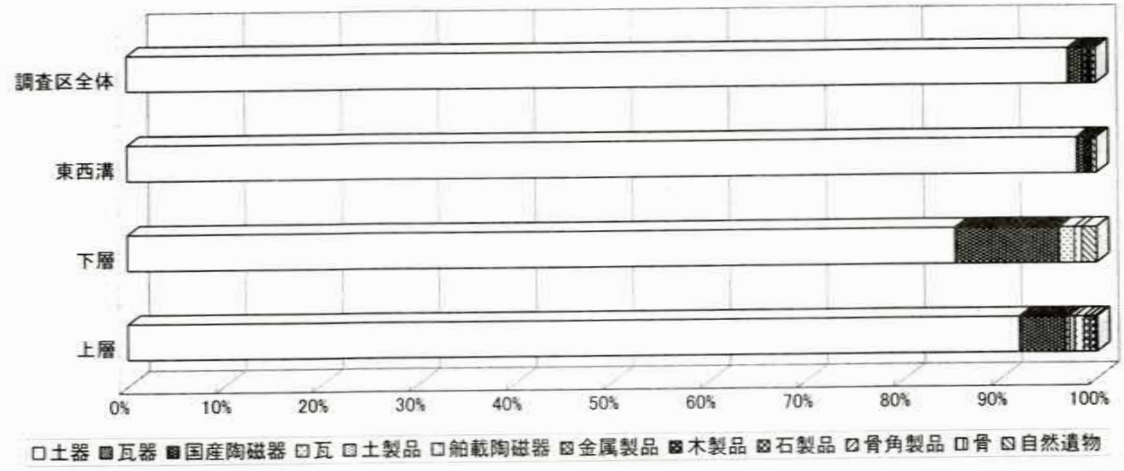
『吾妻鏡』文言の解釈自体はそのとおりではあろう。だがその際、松尾は東西南北に実際の子午線を用いている。第一章で触れたとおり、中世鎌倉で採用されていた子午線は、若宮大路だったと考えなければ説明不可能な事例がいくつもある(川副1980)。となると、松尾の想定した伊賀朝行亭の位置も再検討を要する。結局、宇津宮辻子幕府の位置については、あらためて論じられなければならないのである。ここでその点を詳述するゆとりはないが、結果的に松尾もまた、調査地点の東西溝の付近に境界線を設定し、「若宮大路御所」北辺に比定している(松尾1993)。いずれにせよ東西溝が重要な境界を示していることは明らかだが、その点については幕府の移転問題とあわせ、別稿を期したい。

なお、この溝が道路側溝であるかどうかについては不明だが、先述のようにその少し南を通過する溝が雪ノ下一丁目371番7地点(地点6)で見つかっていることから、その間に道路の存在した可能性は高いと思う。大三輪龍彦は、宇津宮辻子から横大路にいたる間、「大学辻子」と「呪師勾当辻子」という2本の東西小路があったとし、前者を北側に想定している(大三輪1986)。その根拠は必ずしも明確にされていないが、東西溝が道路側溝だとすれば、そのいずれかに相当するのであろう。

(馬淵)

引用・参考文献（本報全体に共通，発行者が鎌倉市教育委員会単独の場合はこれを略す）

赤羽一郎／中野晴久1994 『中世常滑焼をおって　資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
秋山哲雄1996 「御所と北条氏亭」（「北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）」特論）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
秋山哲雄1997 「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史学雑誌』第106編第9号　東京大学史学会
宇野隆夫／宮田進一ほか1992 「越中の中世前期様相」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
大三輪龍彦1986 「中世都市鎌倉の地割制試論」『仏教芸術』164号　毎日新聞社
小野正敏1991 「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社
川副武胤1980 「鎌倉時代鎌倉の方位の観測」『日本歴史』第382号　日本歴史学会
河野眞知郎ほか1991 『巨福山建長寺境内遺跡』同調査団
菊川英政1989 a 「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目432番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5
菊川英政1989 b 「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目395番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5
斎木秀雄ほか1998 『極楽寺旧境内遺跡』極楽寺中心伽藍発掘調査団
宗臺秀明ほか1997 『北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目272番地点』同調査団
宗臺秀明ほか1999 『北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目265番3地点』同調査団・東国歴史考古学研究所
宗臺秀明ほか2001 「政所跡　雪ノ下三丁目989番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17
須藤博史／貫達人1963 「宇津宮辻子幕府の位置について」『鎌倉』11　鎌倉文化研究会
高柳光寿1959 『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館
田代郁夫ほか1990 「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目265番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6
玉林美男ほか1980 『極楽寺旧境内遺跡』同調査団
手塚直樹ほか1991 『政所跡』同調査団
手塚直樹ほか1993 「政所跡　雪ノ下三丁目988番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9
貫達人1989 「第二章　古代・中世の鎌倉」『鎌倉市史　近世通史編』吉川弘文館
野口実1993 「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45　(財)古代学協会
野本賢二2001 「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目402番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17
原廣志ほか1988 「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目273番ロ地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4
原廣志1996 「北条高時邸跡　小町三丁目426番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
原廣志1998 「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」『第22回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』神奈川県考古学会・市教委
藤木久志1993 「中世鎌倉の祇園会と民衆」『神奈川地域史研究』11号　神奈川地域史研究会
馬淵和雄ほか1985 a 『向荏柄遺跡発掘調査報告書』同調査団・鎌倉市教育委員会
馬淵和雄1985 b 「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目372番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1
馬淵和雄1985 c 『北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目371番－1地点発掘調査報告書』同調査団
馬淵和雄1987 「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目233番9地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3
馬淵和雄1993 「大倉幕府周辺遺跡群　二階堂字荏柄38番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9
馬淵和雄1994 「武士の都　鎌倉―その成立と構想をめぐって―」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（『中世の風景を読む』2）新人物往来社
馬淵和雄ほか1996 「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）　雪ノ下一丁目377番７地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
馬淵和雄1997 「食器からみた中世鎌倉の都市空間」『国立歴史民俗博物館研究報告』71集
馬淵和雄1998 「大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14
馬淵和雄1999 『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番5地点』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬淵和雄ほか2000 「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目271番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16
馬淵和雄2002 「貿易陶磁器と国産陶器」『かながわの中世～鎌倉から小田原へ～　―土器様相を中心として―』神奈川県考古学会
馬淵和雄ほか2002 「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目400番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18
松尾剛次1992 「宇津宮辻子御所考―都市鎌倉論補考―」『山形大学史学論集』第12集
松尾剛次1993 『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館
松尾宣方ほか1985 『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書（鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査）』同調査団・鎌倉市教育委員会
宮田真ほか1997 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　小町１丁目322番地点鎌倉スポーツクラブ用地』同調査団
山本暉久ほか1997 『金沢文庫跡　県立金沢文庫新築予定地内遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター

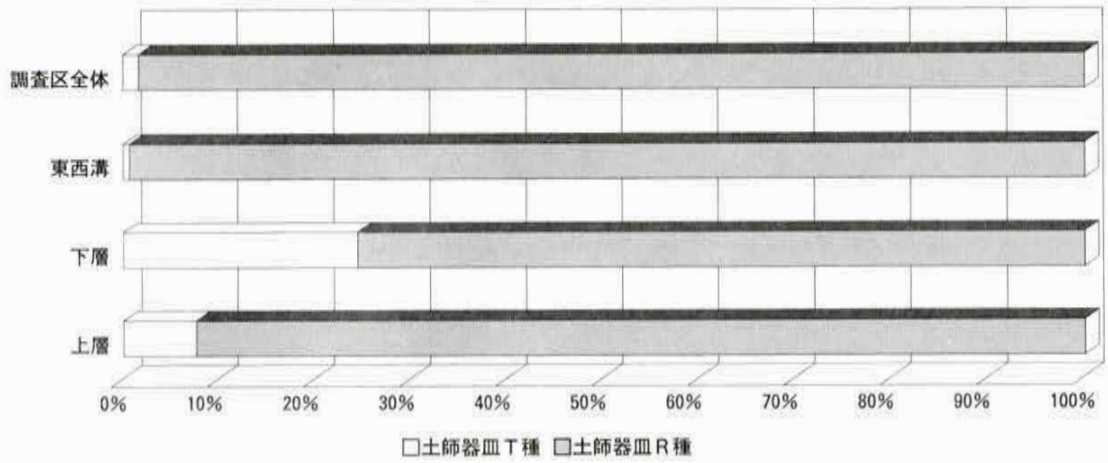


上位分類

	上層		下層		東西溝		調査区全体	
土器	1234	91.95%	111	85.38%	14138	97.98%	16731	97.14%
瓦器	1	0.07%	0	0.00%	3	0.02%	7	0.04 5
国産陶磁器	63	4.69%	14	10.77%	125	0.87%	243	1.14%
瓦	5	0.37%	2	1.54%	10	0.07%	28	0.16%
土製品	8	0.60%	0	0.00%	2	0.01%	11	0.06%
舶載陶磁器	12	0.89%	1	0.77%	28	0.19%	47	0.27%
金属製品	8	0.60%	0	0.00%	7	0.05%	21	0.12%
木製品	0	0.00%	0	0.00%	33	0.23%	34	0.20%
石製品	8	0.60%	0	0.00%	4	0.03%	13	0.08%
骨角製品	1	0.07%	0	0.00%	2	0.01%	3	0.02%
骨	2	0.15%	0	0.00%	21	0.15%	24	0.14%
自然遺物	0	0.00%	2	1.54%	56	0.39%	62	0.36%
総集計	1342	100%	130	100%	14429	100%	17224	100%

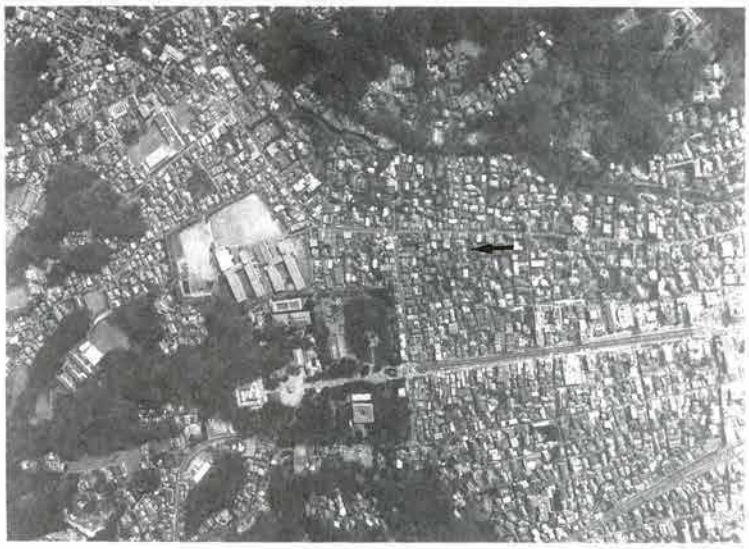
中位分類

	上層		下層		東西溝		調査区全体	
土師器皿	1231	91.73%	111	85.38%	14124	97.89%	16712	97.03%
土師器皿白色系	1	0.07%	0	0.00%	9	0.06%	11	0.06%
土器	2	0.15%	0	0.00%	5	0.03%	8	0.05%
瓦器	1	0.07%	0	0.00%	3	0.02%	7	0.04%
南部系山茶碗	1	0.07%	0	0.00%	1	0.01%	3	0.02%
北部系山茶碗	0	0.00%	0	0.00%	1	0.01%	1	0.01%
常滑	55	4.10%	14	10.77%	117	0.81%	225	1.31%
渥美・湖西	7	0.52%	0	0.00%	5	0.03%	13	0.08%
亀山	0	0.00%	0	0.00%	1	0.01%	1	0.01%
瓦	5	0.37%	2	1.54%	10	0.07%	28	0.16%
土製品	8	0.60%	0	0.00%	2	0.01%	11	0.06%
青磁同安窯系	1	0.07%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.01%
青磁竜泉窯系	1	0.07%	0	0.00%	16	0.11%	20	0.12%
青白磁	4	0.30%	0	0.00%	1	0.01%	5	0.03%
白磁	4	0.30%	1	0.77%	10	0.07%	18	0.10%
泉州窯	2	0.15%	0	0.00%	1	0.01%	3	0.02%
鉄	8	0.60%	0	0.00%	7	0.05%	20	0.12%
銭	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00 5	1	0.01%
漆器以外木製食膳具	0	0.00%	0	0.00%	21	0.15%	22	0.13%
漆器以外木製品	0	0.00%	0	0.00%	12	0.08%	12	0.07%
滑石	1	0.07%	0	0.00%	2	0.01%	3	0.02%
砥石	1	0.07%	0	0.00%	2	0.01%	3	0.02%
石製品	6	0.45%	0	0.00%	0	0.00%	7	0.04%
骨角製品	1	0.07%	0	0.00%	2	0.01%	3	0.02%
骨	2	0.15%	0	0.00%	21	0.15%	24	0.14%
貝類	0	0.00%	2	1.54%	56	0.39%	62	0.36%



層位別土師器皿構成

	土師器皿Ｔ種		土師器皿Ｒ種		総計
調査区全体	249	1.49%	16463	98.51%	1672
東西溝	103	0.73%	14021	99.27%	14124
下層	27	24.32%	84	75.68%	111
上層	94	7.64%	1137	92.36%	1231



1. 調査地点付近鳥瞰（中央矢印左、上が東）

2. 調査地点（右手路地奥矢印下）と小町大路（北東から）

3. 調査地点近景（南半部調査時、北から）

1．調査区南壁土層断面

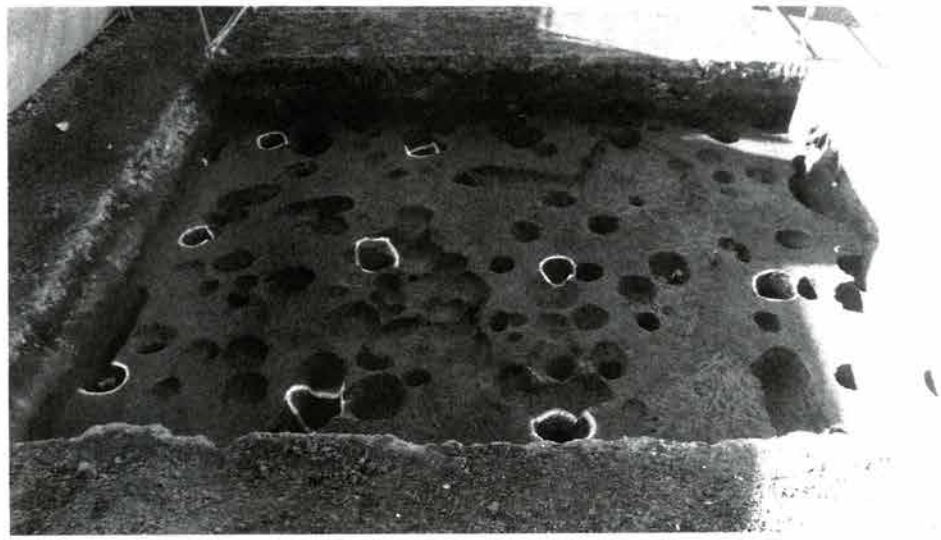
2．調査区東壁土層断面

3．調査区西壁土層断面（2軸以北）

1．調査区　北半部上層面全景(東から)

2．同上(西から)

図版4



1．建物1（北から）

2．同内P.1（北から）

3．同内P.3（北から）

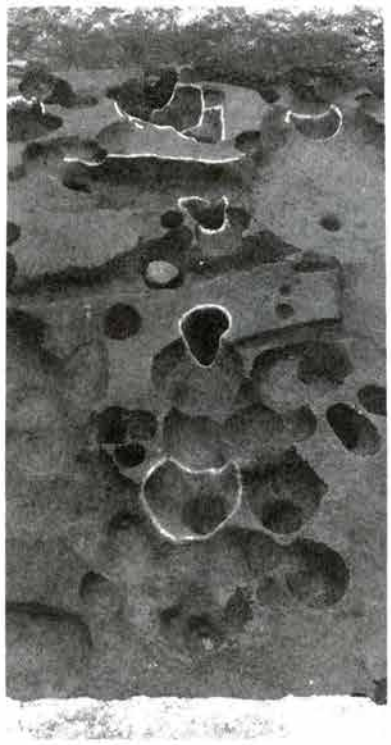
1．建物２（西から）

2．同内 P.4（南から）

3．同内 P.5（東から）

4．同内 P.8（南から）

図版6



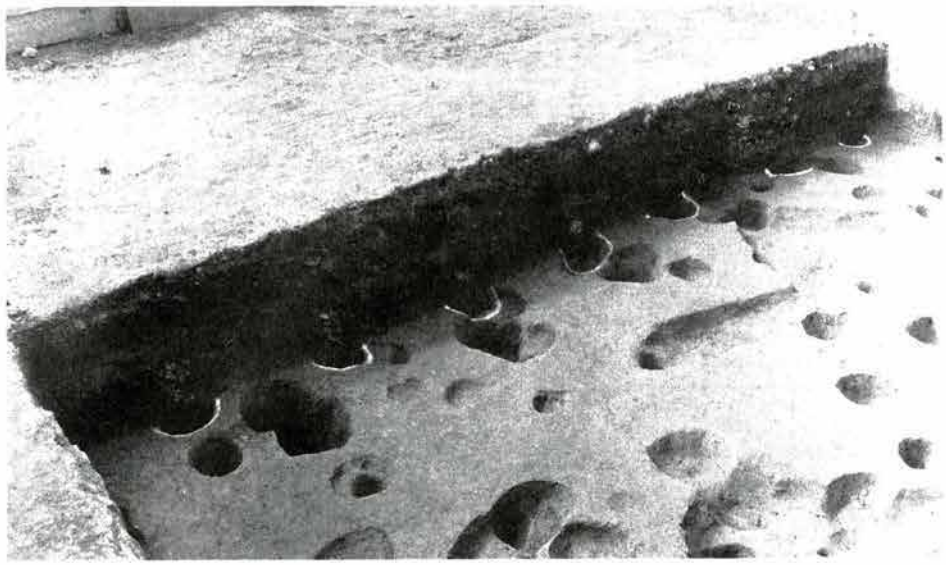
1．柱穴列1（北から）

2．L字状柱穴列内 P.2・P.7（東から）

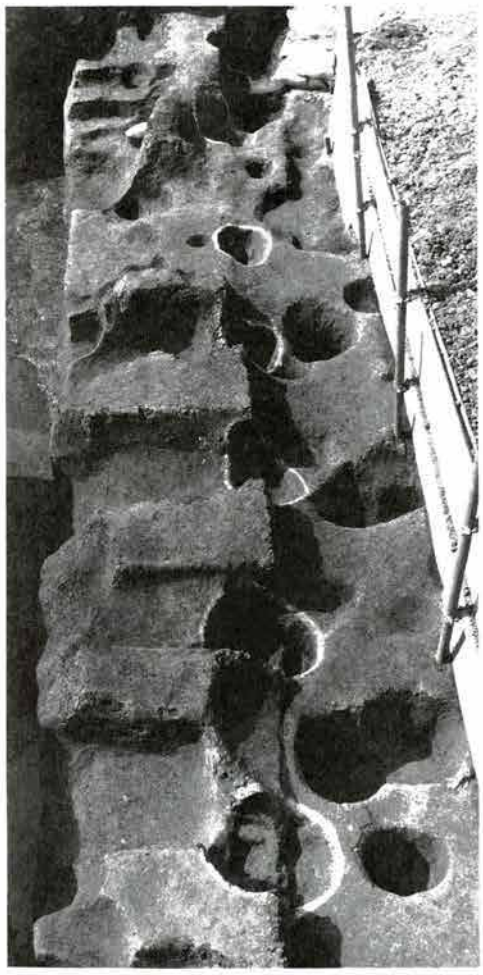
3．同上 P.3（東から）

1．調査区　北半部上層面全景（東から）

5．上層3群 P.127（西から）



1．柱穴列3　北半部(北東から)



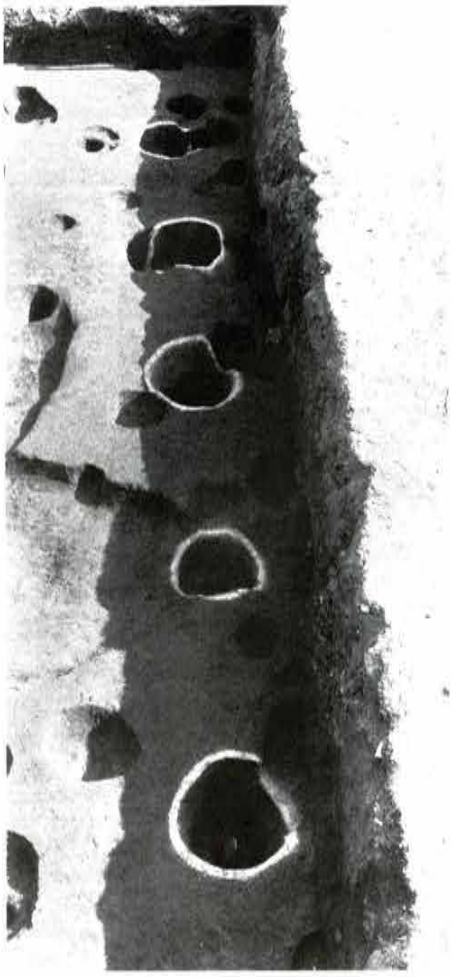
2．同上　完掘後(東から)

3．同内 P.6（北から）

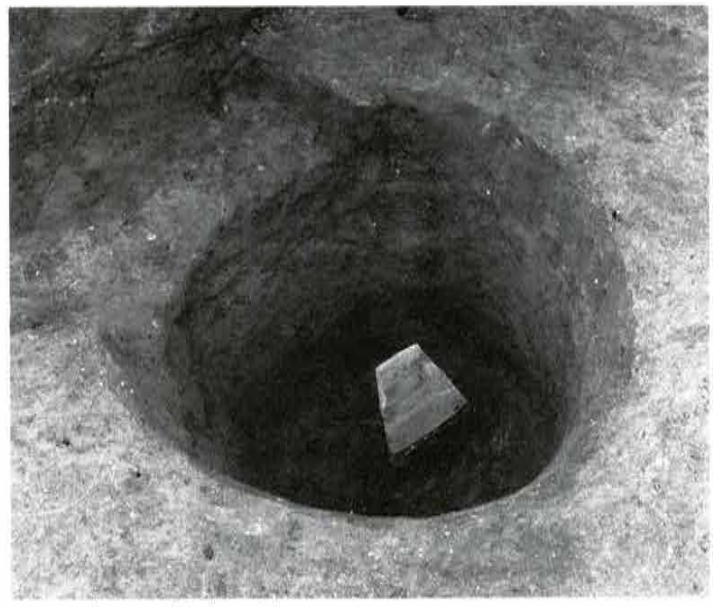
図版8

1．調査区北半部下層面全景（東から）

2．同上（西から）



1．柱穴列６（東から）



2．同内 P.1（北東から）

3．同内 P.2（東から）

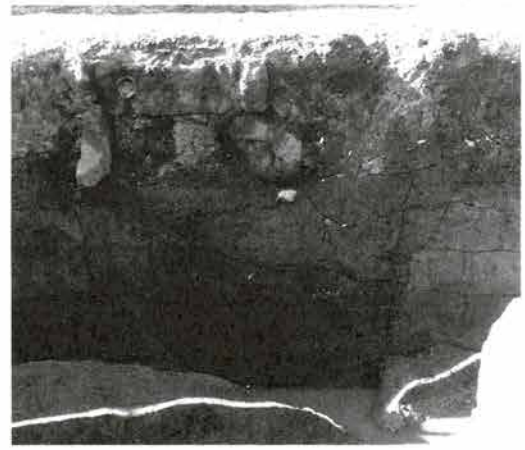
4．同前　完掘後（東から）

図版10

1．柱穴列7（東から）

2．溝9（東から）

3．井戸1（東から）



4．井戸1　土層断面（東から）

1．調査区南半部全景（西から）

2．東西溝部分全景（東から）

3．同上　西壁土層断面

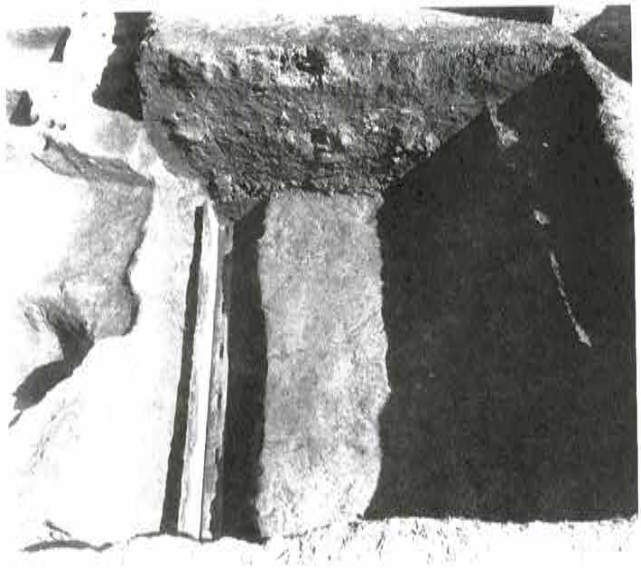
図版12

1．東西溝２・４
（左側東西溝２は未完掘、東から）

3．同前　北側根太と束材（北東から）

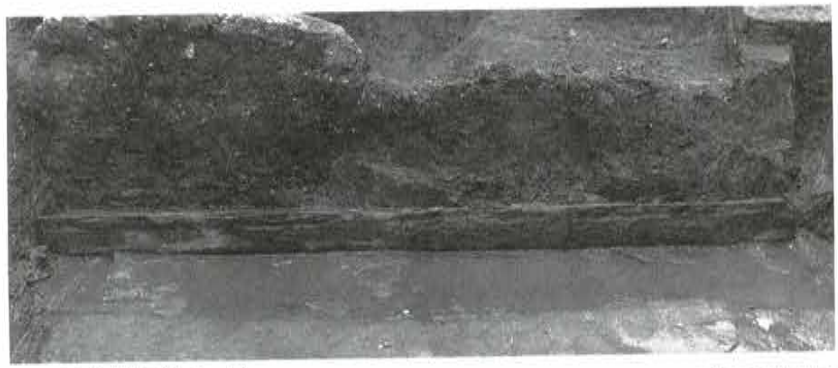
2．東西溝２（北側根太取上げ後、東から）

4．土坑17
（木材は東西溝２のもの、東から）

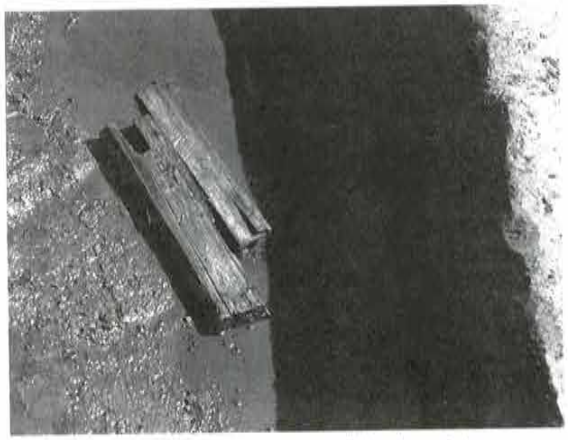


1．東西溝４（西から）

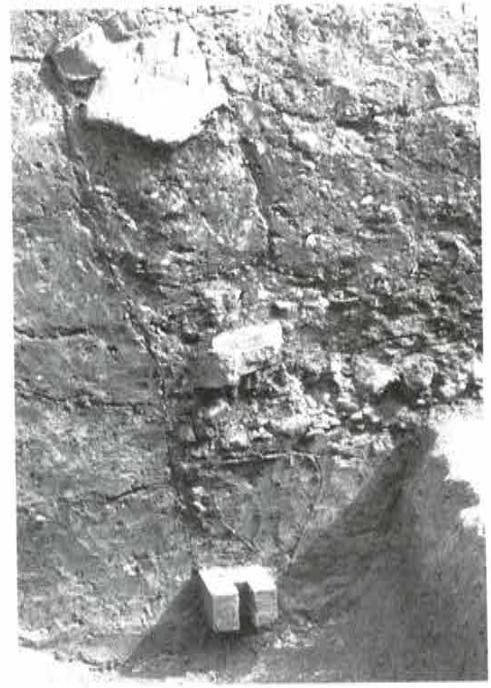
2．同前側板と根太（南西から）



3．同前側板（南から）



4．同前部材（側板・根太取上げ後、東から）



5．同前北側掘方土層断面図（東から）

多宝寺跡（No.187）

たほうじあと

扇ガ谷二丁目238番７地点

例　言

1．本報文は、多宝寺跡(神奈川県遺跡台帳№187)内、鎌倉市扇ガ谷二丁目238番７地点の個人専用住宅建設に係わる車庫建設及び擁壁工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2．調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成13年１月25日から同年２月５日まで実施した。調査対象面積は約15㎡。
3．調査及び整理作業の体制は以下の通り。
　調査担当　田代 郁夫
　調　査　員　汐見 一夫　渡邊 美佐子
　調査補助員　田畑 衣理
　作　業　員　安斉 三男　北島 清一　山崎 一男
4．本報文に関わる整理作業は汐見・鍛治屋勝二・松原康子が、執筆・編集を汐見が行った。又、使用した写真は遺構を汐見・田畑が、遺物を石元道子が撮影した。
5．現地調査から本報作成に至るまで、次の機関･各氏から御指導・御教示・御協力を賜った。
　(社)鎌倉市シルバー人材センター　東国歴史考古学研究所　鎌倉考古学研究所
7．本調査に係わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目次

本文目次

第１章　環境と立地…… 153
第２章　調査の概要…… 155
第３章　遺構と遺物…… 156
第４章　調査成果…… 157

挿図・表目次

図１　調査地点と周辺の遺跡…… 153
図２　調査軸と国土座標…… 155
図３　国土座標値と堆積土層…… 155
図４　遺構全図と堆積土層…… 156
図５　出土遺物(１)　…… 157
図６　出土遺物(２)　…… 158
表　　出土遺物計測表…… 158

写真図版目次

図版１　１．調査地点近景(北西から)　…… 159
　　２．擁壁部分堆積土層
　　３．Ⅰ区１面(西から)
　　４．Ⅰ区２面(西から)
　　５．Ⅱ区１面(西から)
　　６．Ⅱ区土層堆積(北面・東面)
図版２　　出土遺物…… 160

第１章　環境と立地

多宝寺跡（神奈川県遺跡台帳№187）は、鶴岡八幡宮の西方で巨福呂坂を境とし、西に開口する泉ヶ谷の東奥一帯が呼称されている。標高60～70ｍの丘陵が三方を囲い、北側の丘陵は南に開口する３つの支谷に分れる。現況では山裾まで宅地化が進んでいるものの、山腹には多宝寺跡やぐら群（神奈川県遺跡台帳№107）・清水谷やぐら群（同№109）がある。

泉ヶ谷は谷戸のほぼ中心に現存する「泉の井」がその名の由来とも考えられているが、『吾妻鏡』にも「泉谷」とその名が見え鎌倉期から呼ばれていたらしい。泉ヶ谷には多宝寺の他、建長三年（1252）創建の古義真言宗浄光明寺、その向いの小支谷に律宗東林寺（廃寺・詳細不明）が在ったと言われ、「泉の井」が多宝寺の南限で浄光明寺との寺域境と推定されている。多宝寺は弘長２年（1262）創建、開山忍性、開基北条業時、鎌倉期にかなり栄えた律宗系寺院と推定されるが、遺された記録では不明な点が多い。

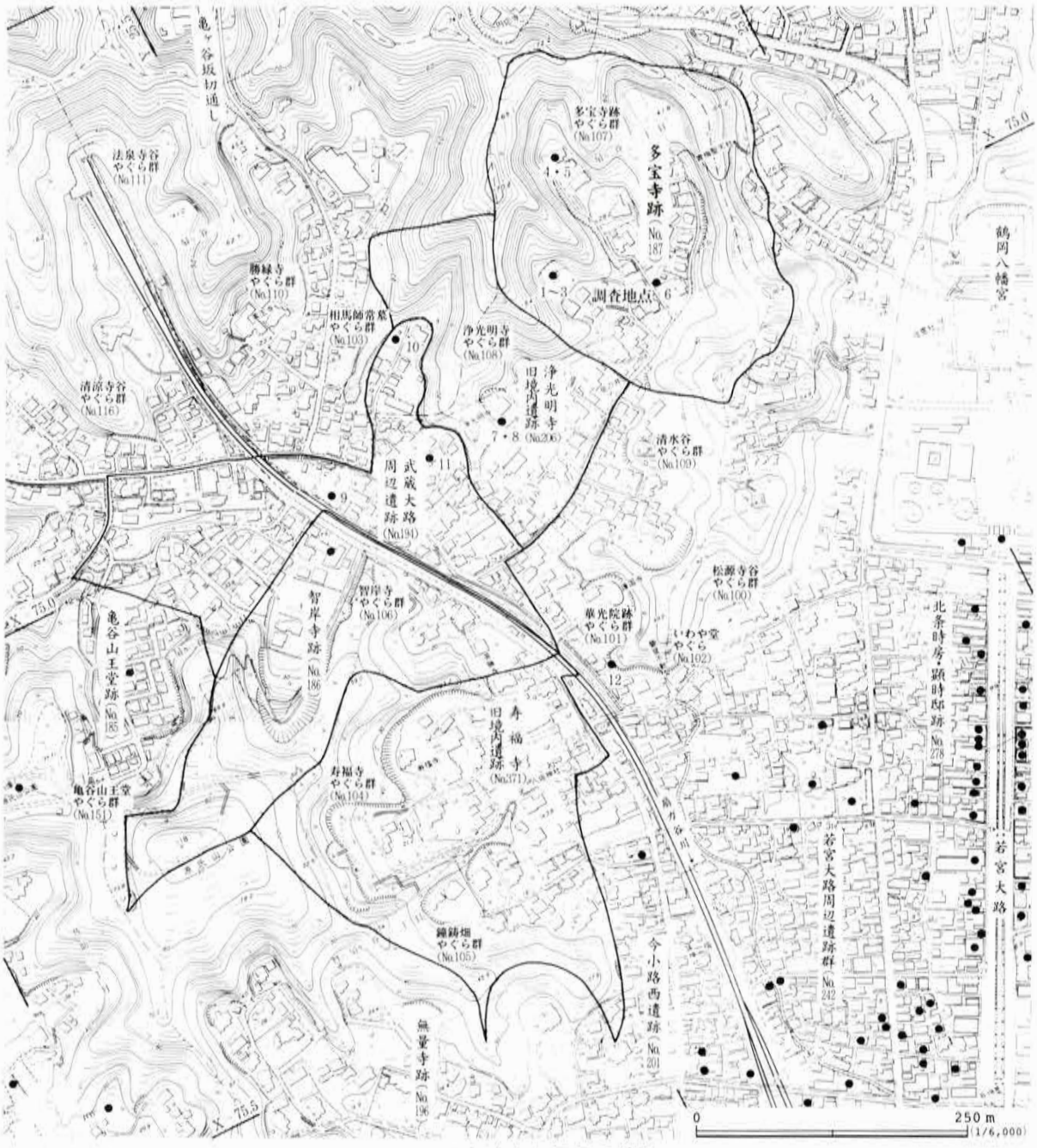


図１　調査地点と周辺の遺跡

これまでの多宝寺跡内における発掘調査は、支谷内で２箇所が行われているに過ぎない。南側支谷の地点１～３で行われた調査では、多宝寺の長老覚賢の墓塔である五輪塔が建つ下位で、岩盤を削平した平場に礎石建物・授戒壇と推定される石造遺構と、その背面に並ぶやぐら群を発見している。その北側の支谷、地点４・５で行われた調査では、生活面３面と道路・石垣で区画された平場・地鎮遺構を伴う礎石建物が発見され、各遺構は磁北を意識していることが指摘されている。第２面発見の地鎮遺構は、ピット内にかわらけを正位で５枚埋納し草木灰が充填されていた。このかわらけの胎土・器形から遺構面の年代を14世紀代とし、第３面の火災面を文献に観る多宝寺火災の記録に比定している。本報の調査地点はこの支谷の開口部で、現況海抜23ｍ前後、磁北とほぼ一致する現況道路に面している。

引用・参考文献

高柳光寿　『鎌倉市史　総説編』　1959年　吉川弘文館
赤星直忠　『鎌倉市史　考古編』　1959年　吉川弘文館
高柳光寿・貫達人他　『鎌倉市史　社寺編』　1959年　吉川弘文館
貫達人・川副武胤　『鎌倉廃寺事典』　1980年　有燐堂
白井永二　『鎌倉事典』　1976年　東京堂出版
大三輪龍彦　「廃多宝律寺について」『鎌倉』第17巻　1968年　鎌倉文化協会

調査地点・報告書

多宝寺跡（神奈川県遺跡台帳№187）

1．扇ガ谷二丁目268番３地点　1969年調査。『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』　1976年３月　多宝律寺遺跡発掘調査団／鎌倉市教育委員会
2．扇ガ谷二丁目268番３地点　1974年調査。『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ　多宝律寺跡』　1983年３月　鎌倉市教育委員会
3．扇ガ谷二丁目268番３地点（第7次調査）　1977年調査。『多宝律寺遺跡第７次発掘調査報告書』　1977年３月　多宝律寺遺跡発掘調査団／鎌倉市教育委員会
4．扇ガ谷二丁目250番１・４地点　1989年調査。『多宝寺跡 －扇ヶ谷２丁目250番１・４地点－』　1998年３月　多宝寺跡発掘調査団
5．扇ガ谷二丁目250番６地点　1991年調査。「多宝寺跡（№187）（扇ヶ谷二丁目250番６外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９　平成４年度発掘調査報告（第３分冊）』　1993年３月　鎌倉市教育委員会
6．扇ガ谷二丁目238番２地点　本調査地点。

浄光明寺旧境内遺跡（神奈川県遺跡台帳№206）

7．扇ガ谷二丁目12番１地点　1987年調査。未報告。
8．扇ガ谷二丁目12番１地点　2001年調査。未報告。

武蔵大路周辺遺跡（神奈川県遺跡台帳№194）

9．扇ガ谷二丁目382番１地点　1989年調査。『武蔵大路周辺遺跡発掘調査報告書　－扇ヶ谷二丁目382番１地点－』　2000年10月　武蔵大路周辺遺跡発掘調査団
10．扇ガ谷三丁目397番６地点　2000年３月調査。「武蔵大路周辺遺跡（№194）　扇ガ谷三丁目397地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第２分冊）』　2001年３月　鎌倉市教育委員会
11．扇ガ谷二丁目298番１イ地点　2000年７月調査。「武蔵大路周辺遺跡（№194）　扇ガ谷二丁目298番イ」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第１分冊）』　2002年３月　鎌倉市教育委員会

華光院下やぐら群（神奈川県遺跡台帳№101）

12．扇ガ谷二丁目191番地点　200年調査。本誌所収。

註　・調査地点及び刊行報告書は2002年３月末日現在。
・調査地点№は、上記６遺跡の全調査地点を各遺跡毎の調査年順に付した。
・何れも渡邊美佐子協力に依り筆者調べに拠る。

第２章　調査の概要

・調査に至る経緯と経過

本調査は、個人専用住宅の建設にあたり道路に面した擁壁部分と現地表を切り下げる範囲を対象に、確認調査と諸協議を経て実施された。調査区は敷地内に離れて２箇所設定され、北側をⅠ区、南側をⅡ区とした。調査では擁壁建設に伴う道路の切り下げに際して調査員が立ち会って遺物を採集し、続いて確認調査の成果から両調査区の現地表下60cmまでの表土を重機で、以下を規定深度まで人力に依り掘り下げた。調査期間中は天候に恵まれず降雪にも見舞われたが、両調査区で規定深度までに中世期の遺構面２面を調査し、擁壁部分の堆積土層図を含めて全ての記録保存終了後に関係各方面に連絡の上、出土遺物と諸器材を撤収し調査終了とした。

・調査軸と国土座標

調査に際しては、４級基準点Ｓ015（Ｘ－75041.913 Ｙ 252460.21）・Ｓ017（Ｘ－75026.322 Ｙ25203.663）から任意の点Ｐを経由して調査軸ＡＣを、Ⅰ区・Ⅱ区にはそれぞれ直交する点Ｂ・Ｄを設定し、図２・３に示した。調査軸ＡＣは磁北に対してＮ－８°51′－Ｅであり、点Ａ・Ｃの国土座標値は整理作業時に机上で求めたものである。又、調査に先立ち切り下げられた擁壁部分の堆積土層図を図３に示した。土層番号と土層注記は図４と共通する。

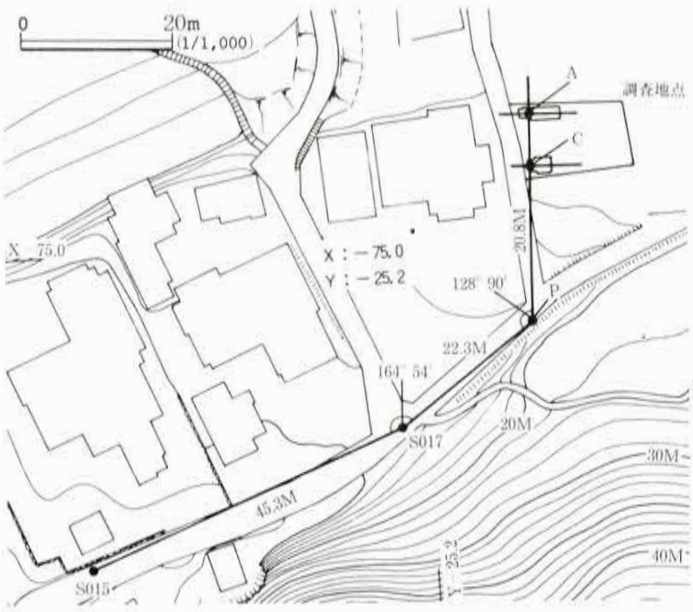


図２　調査軸と国土座標

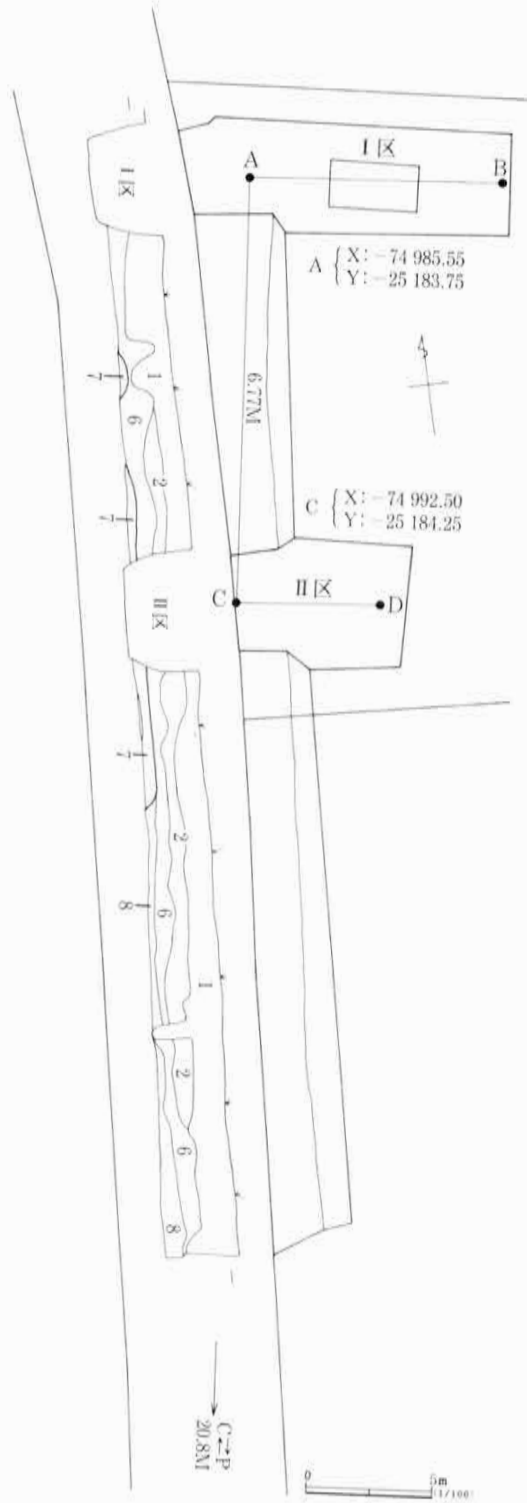


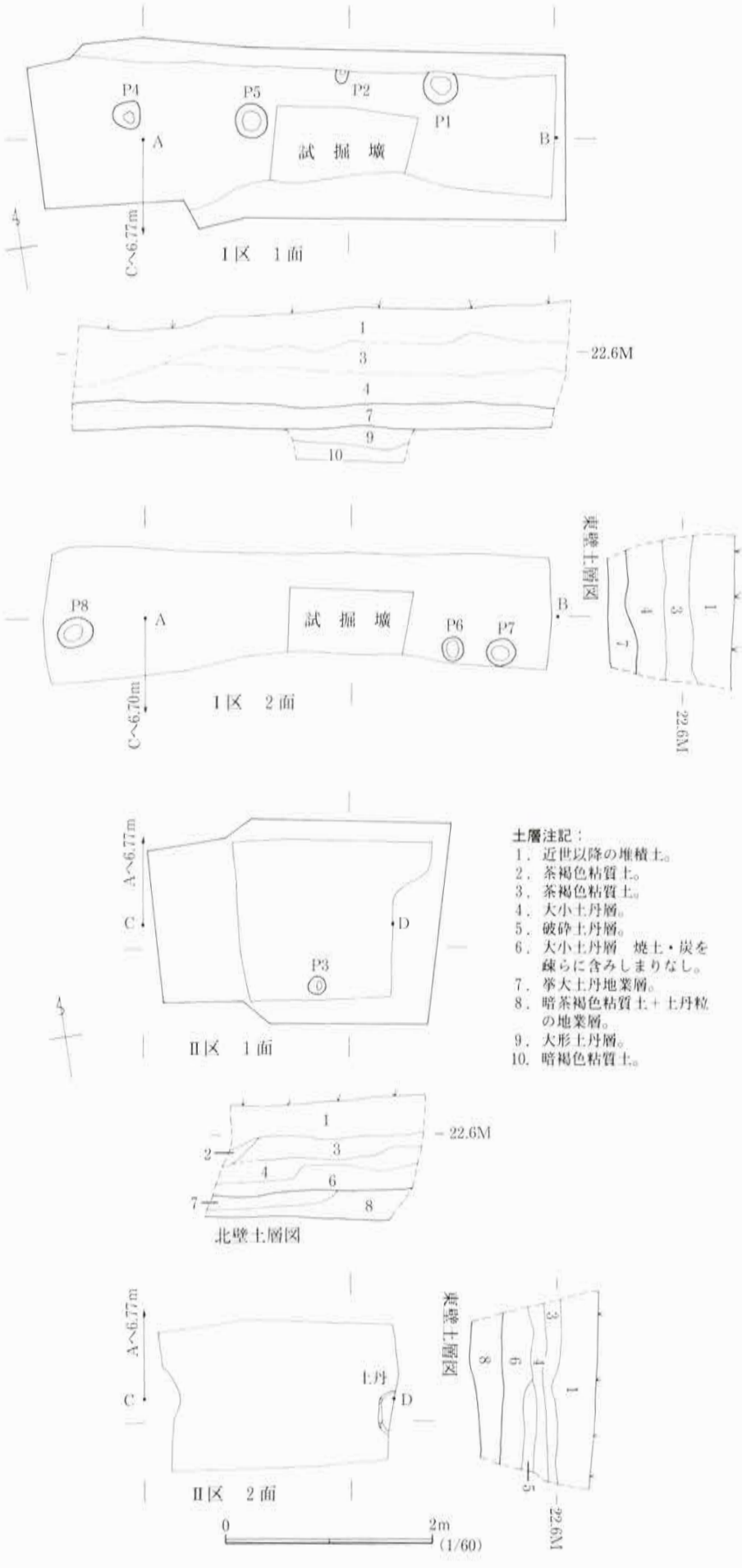
図３　国土座標値と堆積土層

第３章
遺構と遺物

図４はⅠ・Ⅱ区の遺構全測図と堆積土層図。東西方向は実際の位置関係そのままに、土層番号は図３を含めて共通とした。２層以下が中世期の堆積土であり、３層上面が１面、７・８層上面が２面である。各土層は東から西へと微かに傾斜する。

１面は近世以降の削平等に因り上面が平坦には検出されなかったが、Ⅰ区でピット４口、Ⅱ区でピット１口が発見された。何れも径10～30cm内外の円形で、深さは約20cm前後。ピット内からは、かわらけ小破片・常滑窯甕の胴部細片が出土しているが実測はし得ず、年代を確定するには不安がある。

２面は粘質土と破砕土丹を混交した良好な地業面で、Ⅰ区でピット４口、Ⅱ区東壁際で上面が平らな土丹が地業面上に発見された。ピットは径20cm内外で深さは15cm前後と浅い。土丹は最大長約40cmで上面レベル約22.1ｍを測る。２面で発見されたピットからは殆ど遺物は出土していないものの、遺構面精査の際の出土遺物は、かわらけの器形・胎土で観れば１面時のものとそう差は感じられない。



土層注記：
1．近世以降の堆積土。
2．茶褐色粘質土。
3．茶褐色粘質土。
4．大小土丹層。
5．破砕土丹層。
6．大小土丹層　焼土・炭を疎らに含みしまりなし。
7．挙大土丹地業層。
8．暗茶褐色粘質土＋土丹粒の地業層。
9．大形土丹層。
10．暗褐色粘質土。

図４　遺構全図と堆積土層

図５はⅠ・Ⅱ区の出土遺物。１～４は糸切り底かわらけ。１～３は器表橙色で胎土は粉質、４は器表は肌色で胎土は弱粉質。何れも図４の４層中の出土。同層及び下層７層から出土した他のかわらけを観ても、胎土・器形共に大差はない。10層から小片ではあるが、胎土が弱粉質で器壁が薄く丸味のあるものが出土している。５は瀬戸窯折縁鉢。胎土は灰白色で施釉は灰緑色、内面口縁下位に波線の線刻。６は瓦質の火鉢Ⅴ類。胎土は夾雑物を多く含み粗く、外面横方向磨き後の沈線間に直線的な６弁小菊花を陰刻。７は瓦質火鉢Ⅳ類胴部中位片。胎土はやや砂っぽく軽い焼き、外面連珠貼付け後に横方向の磨き、丸味のある菊花陽刻の周囲に直線的な16弁小菊花を陰刻。８は平瓦。凹面はナデ消され、凸面の叩きは縄目。５～８は図４の４層出土。９は瓦器質の香炉胴部片。外面雑な横方向の磨き後に雷文を連続して陰刻し、その上から連珠貼付け。図４の７層出土。図６には確認調査時の遺物と、擁壁工事に伴う切り下げ時に出土したものを含めた。10～15は糸切り底かわらけ。何れも器表橙色で胎土は粉質。16は瀬戸窯仏花瓶。胎土は灰白色で、施釉はややくすんだ灰緑色で極薄い。17～21は瓦。全て確認調査時に出土している。17は丸瓦。凹面には布目痕が遺り、凸面の叩きは縄目。18～20の平瓦は凹面はナデ消し、凸面は太い斜格子の叩き。21の平瓦は凹面に布目痕が遺り、凸面の叩きは縄目。

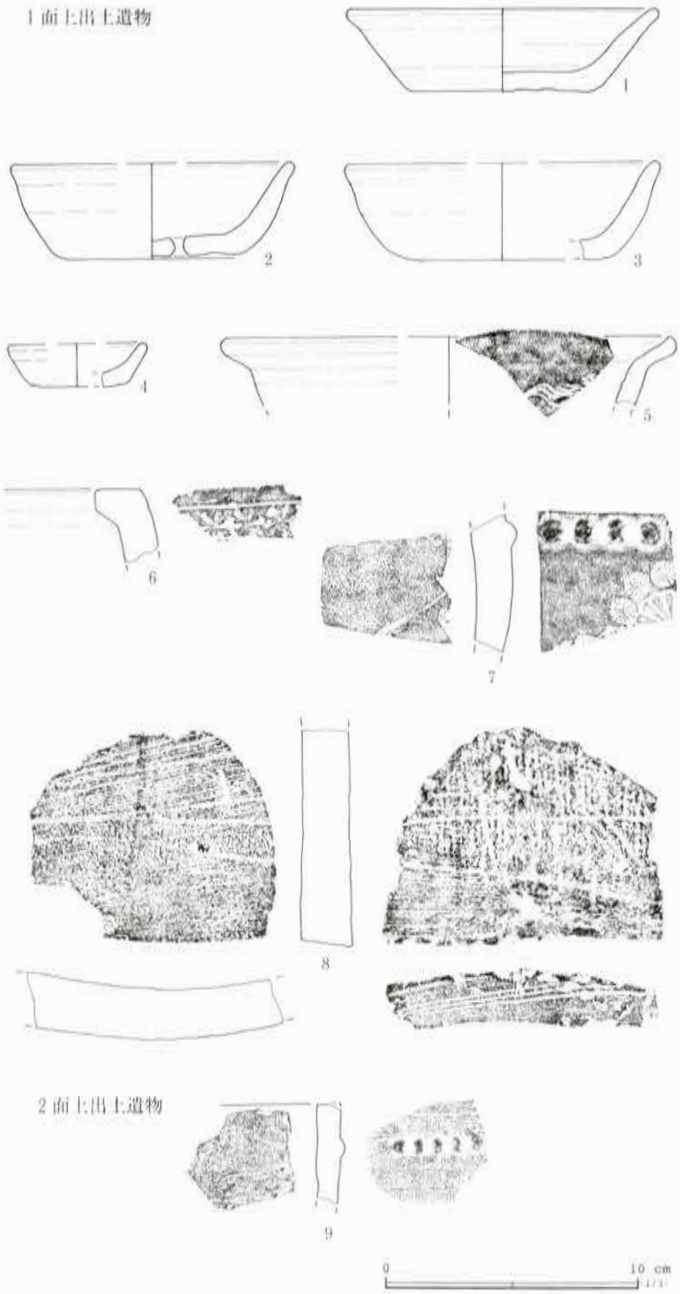


図５　出土遺物（１）

第４章　調査成果

本調査は、元々範囲が限られている上に新築工事が既に始められており、新造の基礎から安全な後退距離を採り且つ住宅建設の妨げにならぬよう進める必要があった。為に調査区は極めて狭小にならざるを得ず、擁壁工事に関わる範囲も平面的な調査は行い得なかった。遺構面は２面確認したものの、多宝寺に関わる顕著な遺構配置や火災面は観察されず、出土遺物から観た年代は15世紀代と考えられようか。地点１～３に観る覚賢塔建立の時期や、地点４・５の報文で指摘されている文献に観る多宝寺罹災の時期まで調査深度が達しなかったと思われる。支谷の開口部で行われた本調査の成果として、磁北とほぼ方向を同じくする現況道路面より高いレベルで中世遺構面が遺存していることと、確認調査時の遺物故に出土層位不明ながら永福寺Ⅰ期の瓦が出土していることを挙げてまとめに代える。

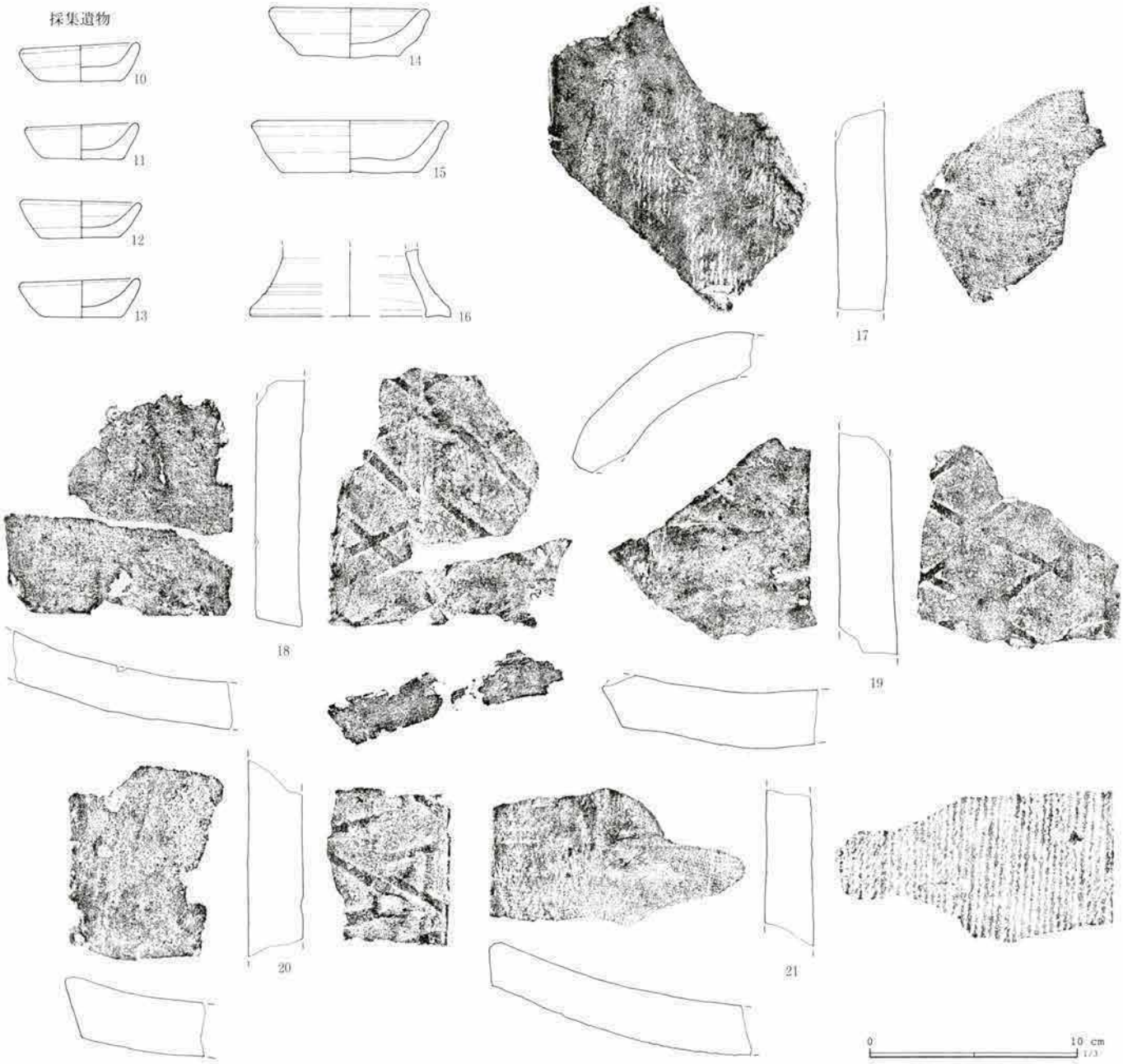


図6　出土遺物（2）

表　出土遺物計測表

部No	遺物No	遺物名	計測値	単位 cm	[ ]=復元値 ( )=残存値	遺物写真
5	1	土師器 かわらけ	口径 12.1	底径 7.2	器高 3.3	○
	2	土師器 かわらけ	口径 (11.0)	底径 (7.5)	器高 3.8	○
	3	土師器 かわらけ	口径 (12.2)	底径 (7.9)	器高 3.9	○
	4	土師器 かわらけ	口径 (5.3)	底径 (3.9)	器高 1.7	○
	5	土師器 かわらけ	口径 (17.6)			○
	6	火鉢 瓦質 Ⅳ類				○
	7	火鉢 瓦質 Ⅳ類				○
	8	瓦 平瓦	長さ [8.5]	幅 [11.0]	厚さ 2.0	
	9	香炉 瓦器質 Ⅳ類				○
6	10	土師器 かわらけ	口径 5.5	底径 4.0	器高 1.7	○
6	11	土師器 かわらけ	口径 5.8	底径 3.9	器高 1.7	○
	12	土師器 かわらけ	口径 5.5	底径 3.9	器高 1.8	○
	13	土師器 かわらけ	口径 5.6	底径 4.0	器高 1.8	○
	14	土師器 かわらけ	口径 7.5	底径 4.9	器高 2.5	○
	15	土師器 かわらけ	口径 9.0	底径 6.8	器高 2.6	○
	16	瀬戸窯 仏花瓶		底径 (9.7)	器高 [3.3]	○
	17	瓦 平瓦	長さ [14.5]	幅 [11.0]	厚さ 2.4	
	18	瓦 平瓦	長さ [12.8]	幅 [11.0]	厚さ 2.2	○
	19	瓦 平瓦	長さ [10.5]	幅 [10.0]	厚さ 2.7	○
	20	瓦 平瓦	長さ [9.5]	幅 [7.8]	厚さ 2.7	○
	21	瓦 平瓦	長さ [7.5]	幅 [13.6]	厚さ 2.4	○

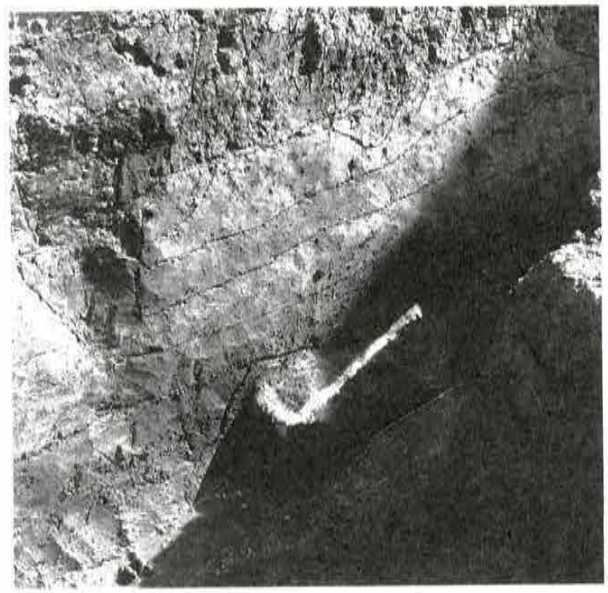
図版14

2．東西溝４（完掘後、東から）

2．同上（西から）

3．同上　土層断面（左端は東西溝５、西から）

1．東壁際深掘り部(南から)



3．北壁深掘り部土層断面(南西から)

2．同上(北から)

4．中世以前層断面(左壁は任意、北から)

図版16

7−1

東西溝１

8−1

8−2

8−3

8−1

東西溝２

10−6

10−7

10−8

10−9

10−10

10−11

10−12

10−13

10−15

東西溝３

11−1

11−2

11−3

11−4

11−5

11−6

11−7

11−8

11−9

11−10

11−11

11−13

11−14

11−15

11−17

11−19

建物２

13−1

13−2

14−1

建物３

14−2

柱穴列１

18−1

柱穴列３

19−1

19−2

19−3

19−4

19−5

19−6

19−7

19−8

上層３群　柱穴

22－1

22－2

22－3

22－4

22－5

22－8

22－9

下層面上

23－1

23－2

東西溝４

25－1

25－2

25－3

25－4

25－5

25－6

25－7

25－8

25－9

25－10

25－11

25－12

25－14

25－15

25－16

25－17

25－18

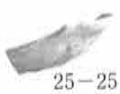
25－19

25－21

25－22

25－23

25－24


25－25

25－26

26－28

26－29

26－30

26－31

26－41

27－43

26－32

26－35

26－40

27－44

27－45

27－46

27－47

26－33

図版18

東西溝5

28－1

28－2

28－3

溝9

31－1

土坑17

31－3

東西溝一括

32－1

32－2

32－3

32－4

32－5

32－6

32－12

32－14

32－15

32－16

32－17

32－13

32－18

32－19

32－20

32－21

32－22

32－23

32－24

32－25

32－26

32－28

32－30

32－33

32－35

32－36

32－38

33－39

33－42

33－43

33－44

33－45

33－48

33－49

33－50

遺構外採集遺物

34－1

34－2

34－3

34－5

34－6

34－7

34－8

34－10

34－11

1．調査地点近景(北西から)

2．擁壁部分堆積土層

3．Ⅰ区1面(西から)

4．Ⅰ区2面(西から)

5．Ⅱ区1面(西から)

6．Ⅱ区土層堆積(北面・東面)

図版2

5−1

5−5

5−2

5−7

6−16

5−3

6−18

5−9

5−4

6−10

6−11

6−19

6−20

6−12

6−13

6−14

6−15

出土遺物

6−21

なごえがやつ

名越ヶ谷遺跡(No.231)

大町三丁目2356番11地点

例　言

1．本報は名超ヶ谷遺跡(遺跡番号231)鎌倉市大町三丁目2356番11地点における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告である。
2．調査は国庫補助事業として平成13年1月30日～2月23日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3．調査体制は以下の通りである。
　担当者　　宮田眞
　調査員　　諸星真澄、堀川浩通
　補助員　　吉原真知子
　作業員　　渡辺輝彦、大戸迫猛、奥山利平、松崎靖弘
4．本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
　遺構図　1/80・1/40（水糸高は海抜高を示す）
　遺物実測図　1/3
5．本書の執筆は宮田眞が行った。
6．本書の図版作成及び写真撮影は次の者が分担した。
　遺構図版　宮田眞・宇賀神雅子
　遺物図版　宇賀神雅子
　遺構写真　諸星真澄
　遺物写真　滝澤晶子

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点（図1－1）はJR横須賀線鎌倉駅の南東約800m、鎌倉市大町3丁目2356番11に所在する。調査地は、地勢的に見ると名超ヶ谷の開口部に位置しており、調査地の南方およそ50mには大町大路（県道鎌倉葉山線・図1－D）が東西に走っている。

名超ヶ谷は、鎌倉の市街地域では最高峰の「衣張山」の南側に展開しており、奥行き1000m以上、谷幅500m以上を測る広大な谷戸である。谷戸奥には浄明寺方面に抜ける「釈迦堂切通し」がある。名超ヶ谷は「山王ヶ谷」（図1－A）・「花ヶ谷」（図1－B）など多くの小谷に分割されており複雑な地形を有する。また衣張山麓に水源をもつ「逆川」が谷戸筋に沿って流下しており、材木座上河原付近で滑川に注ぐ、調査地はちょうど逆川中流の西岸に臨む。

名超ヶ谷内には現在、安国論寺・妙法寺・大宝寺の日蓮宗の三寺院がある。

調査地から逆川を挟んだ南東250mに位置する安国論寺（図1－①）は、妙法山安国論寺と号し、寺伝では建長5年に日蓮が安房国から鎌倉に来て始めて小庵を営んだところという。開山、日蓮と称する。

調査地から逆川を挟んだ東方150mに位置する妙法寺（図1－②）は、楞厳山妙法寺と号する。安国論寺と同様に日蓮の松葉ヶ谷御小庵跡と称し、日蓮を開山と称し（近隣に位置する長勝寺（図1－④）にも同様の寺伝が残る）、中興開山（延文二年）を五世日叡とする。日叡は大塔宮護良親王の遺子で幼名を楞厳丸といい、妙法房と称したのでこれを山号・寺号としたと伝える。

調査地の北方150mに位置する大宝寺（図1－③）は、多福山一乗院大宝寺と号する。もと上記の妙法寺末。開山、日出（長禄三年寂す）。大宝寺の境内地は俗に佐竹屋敷と称される所で、新羅三郎義光が後三年の役後ここに館を構え、後に佐竹秀義などもここに居住したと伝える。

その他に名超ヶ谷内には慈恩寺・木東寺・田代観音堂・山王堂などがあったと伝える。

慈恩寺は禅宗寺院で、調査地の北東方に位置する花ヶ谷（図1－B）にあったとされ、山号白華。足利直冬の菩提寺。慈恩寺は直冬の法号である。慈恩寺の名はすでに元亨三年（1323）の「北条貞時十三回忌供養記」にみえ、成立は鎌倉時代にさかのぼる。

木東寺は禅宗寺院で目足寺・無垢息寺とも書く。「古教妙訓証文」黄梅院文書には、木東寺はもと名越花ヶ谷（図1－B）にあり、文安三年（1446）に円覚寺正続院領内瓜ヶ谷口山上の昭西堂の跡地に移したとある。

田代観音堂は宗旨未詳で安養院の末寺であったという。『北条九代記』に延慶三年（1310）安養院からの失火で延焼したとある。

山王堂は宗旨未詳。『吾妻鏡』には建長四年（1252）二月八日、建長六年（1254）正月十日、弘長三年（1263）三月十八日の項に名越山王堂の記載がある。また蓮華寺（京都市外修学院大字一乗寺村）所蔵の『山王霊験記』二巻（国重文）があり、名越山王堂の絵が少し出ている。山王堂の比定地は現在企業の研修場となっており、施設新築の際に実施された過去の発掘調査（図1－4）からは、宗教的な修行場施設の可能性をもつ岩盤開削遺構をはじめ、宗教色を有する多くの遺物が出土している。

また名超ヶ谷奥には鎌倉幕府第1代執権北条時政の屋敷があったとされ、その比定地背後の山上稜線には、屋敷地内から浄明寺側に通じる切通しが今も残る。また稜線の山頂付近には、「唐糸やぐら」と呼称されるやぐらを有する「衣張山やぐら群」がある。

本調査地の南に接する舗装道路部分（図1－2）は、宅地造成開発（本敷地も含む）に伴う事前調査として平成12年8月17日～同年9月28日にかけて発掘調査が実施され、良好な玉砂利面を含む数時期（13～14世紀）に亘る文化面が検出された。また本調査地の北方約20m（図1－3）では上記調査と時期を重複し

図1　本調査地点と周辺遺跡

て、個人専用住宅建設に伴った発掘調査が実施され、逆さ川の旧河道と考えられる落ち込みと、木材に

よる護岸施設が検出された。更に下層から古代遺物のまとまった出土を見ている。

《参考文献》 鎌倉市史　社寺編・考古編　鎌倉市教育委員会　吉川弘文館
鎌倉廃寺事典　貫達人・川副武胤著　有隣堂
名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書　同遺跡発掘調査団・宮田事務所　2001年12月
名越・山王堂跡発掘調査報告書　同遺跡発掘調査団　1990年3月

第２章　調査経過とグリッド配置、基本土層

本調査は個人専用住宅建設の事前調査として平成13年1月30日～同年2月23日にかけて実施された。

(1)　調査経過

1月30日(火)　調査区中・北部重機による表土掘削(GL マイナス70 ～ 80cm)。ベンチマークの移動。休憩用テントの設営。
31日(水)　中・北部1面(以後1面)掘り出し。撹乱等の掘り上げ。1面＝土丹地業面。
2月02日(金)　１面精査。1面写真撮影、測量。2面に掘り下げ開始。
05日(月)　２面かわらけ溜り確認。
06日(火)　２面写真撮影、測量(かわらけ溜り以外は終了)。
08日(木)　２面かわらけ溜り実測完了。3面に掘り下げ開始。
09日(金)　調査区南部1面まで掘り下げ開始(以後南部1面)。
13日(火)　３面遺構の掘り上げ。南部1面測量終了。
14日(水)　南部1面写真撮影終了。南部2面へ掘り下げ精査。ピット数口確認。
15日(木)　南部2面写真撮影、図面実測終了。南部3面(中世地山)へ掘り下げ。
16日(金)　北部3面東側トレンチ部分から木柵状遺構検出。調査区全体が3面まで掘り下げ完了。
17日(土)　3面遺構個別実測。
19日(月)　2面井戸1完掘(3面調査時点で検出)。
21日(水)　3面全景写真撮影。
22日(木)　3面測量及び調査区西壁セクション実測。
23日(金)　午前　図面実測完了。午後　機材等の撤収をもって現地調査終了。

(2)グリッド配置(図２)

測量基準となるグリッド配置は平成12年調査と共通とする。各グリッドは2ｍ方眼。グリッド名称は数字軸線とアルファベット軸線の交差する北西角で読む。グリッドの数字軸線はN－48°－12Eを示す。

(3)基本土層(図3)

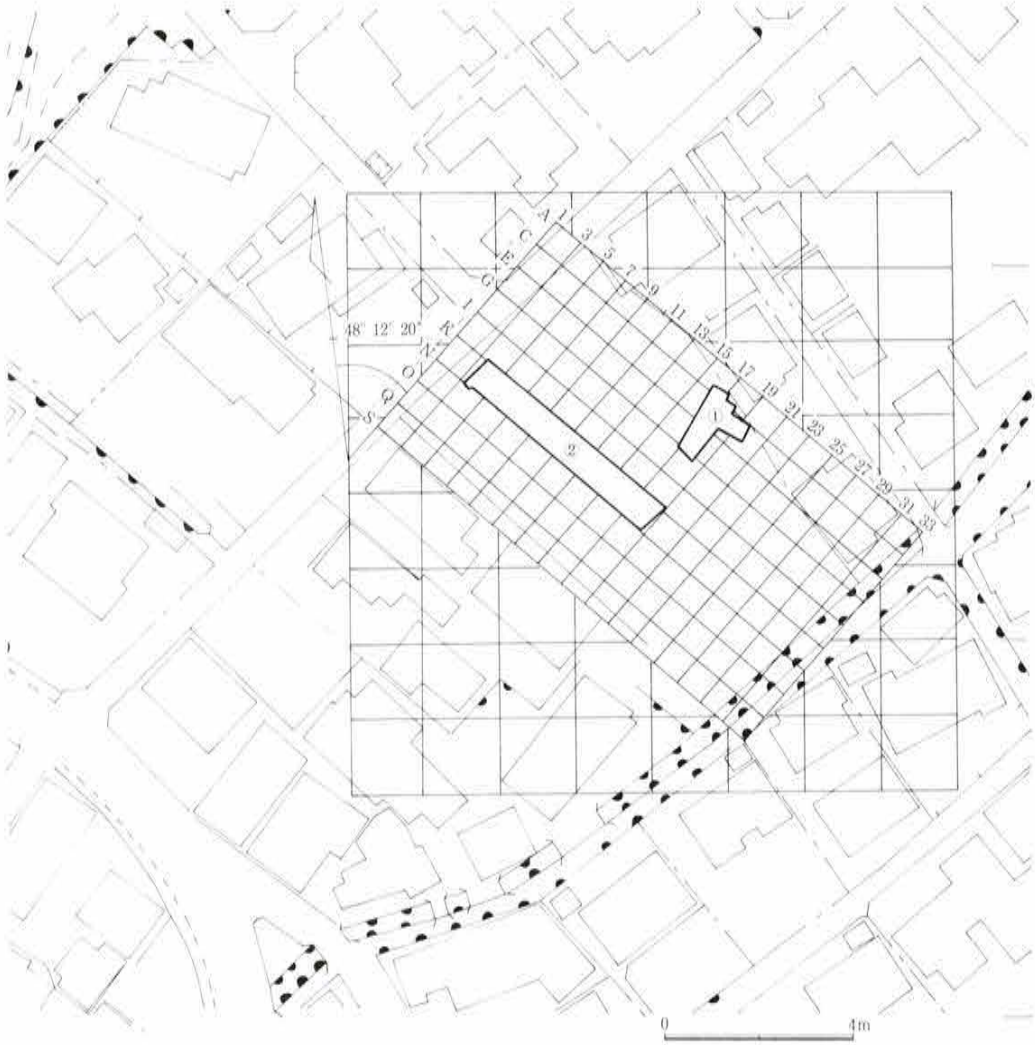


図2　グリッド配置図

本調査地の現地表面は海抜8.8m 前後を測る。表土層は今造成時の盛土(20cm 厚)を含む50 ～ 80cm 厚を測る。また調査地の東半部は撹乱が海抜6.8m 前後の深さに及ぶ。

1面は暗褐色粘質土による地業で、海抜8 ～ 8.3m を測り北から南に傾斜する。

2面は黒褐色砂質土による地業で、海抜7.7 ～ 7.9m を測り北から南に緩傾斜する。

3面は中世地山の黄灰色砂土付近に位置し、海抜7.5 ～ 7.7m を測る。

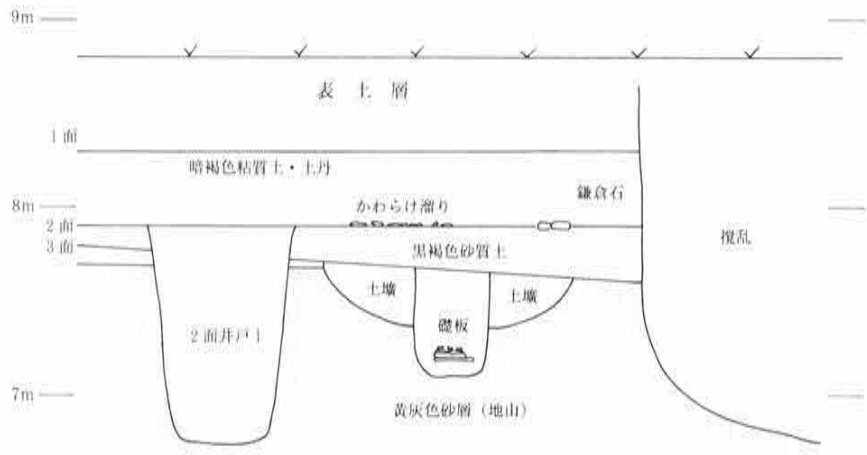


図3　基本土層図

第３章　検出遺構と出土遺物

本調査地からは13世紀～15世紀にかけて、計3面の生活面を検出した。以下に1面から順次各面の検出遺構、出土遺物を報告する。

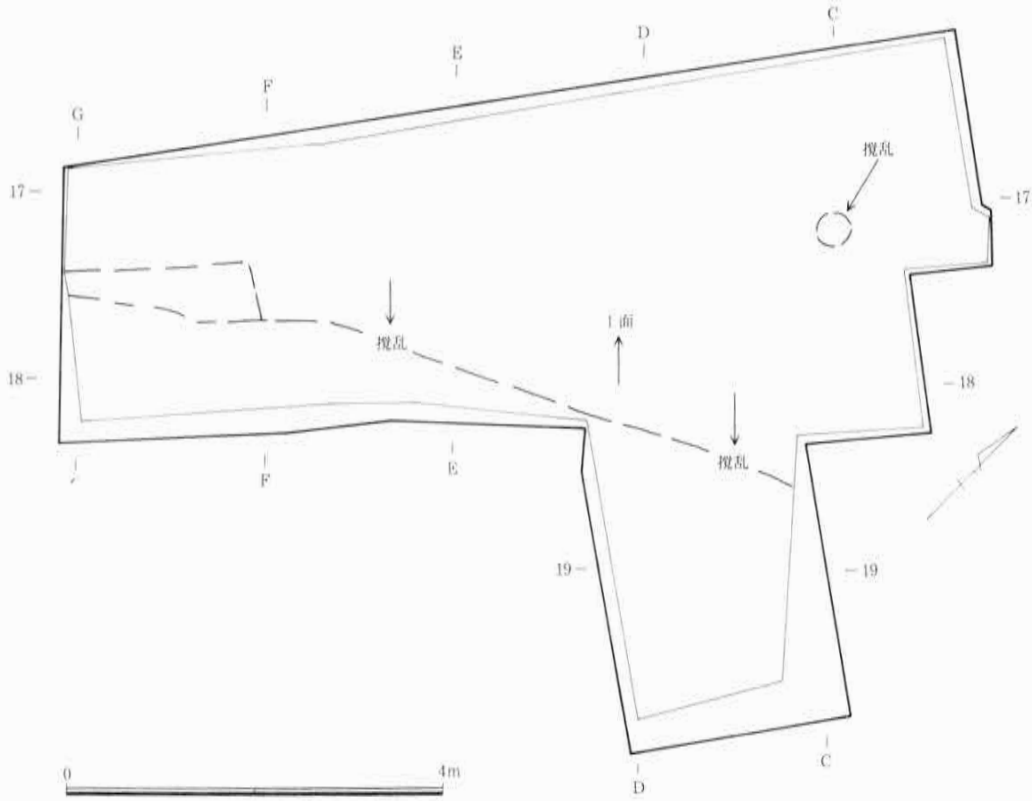


図４　１面全図

（１）１面

１面検出遺構（図4）

1面は土丹と暗褐色粘質土による地業面で、海抜8.0～8.3mを測り北から南へ傾斜する。また調査区の東半部は撹乱され遺存しない。今回1面からは遺構の検出は皆無であった。

１面出土遺物（図5）

１面からの報告しえる出土遺物は、青磁蓮弁文碗口縁部小片1点のみである。素地は灰褐色をして緻密、焼成良好、0.1㎜大のガス孔が若干見られる。釉は淡い灰緑色をして艶・透明感に富む。

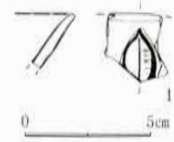


図５　１面出土遺物

（２）２面

２面検出遺構（図６）

２面は黒褐色砂質土による地業で、海抜7.7～7.9mを測り北から南に緩く傾斜する。２面からはかわらけ溜り、窪地２ヶ所、井戸１基、pit12口、礎石様の鎌倉石切石１個が検出された。以下に個々を報告する。

かわらけ溜り（図７）

C-18杭下付近を中心に検出された南北約5m東西約3mの広がりをもつかわらけ溜りで、かわらけの密集度はあまり高くない。

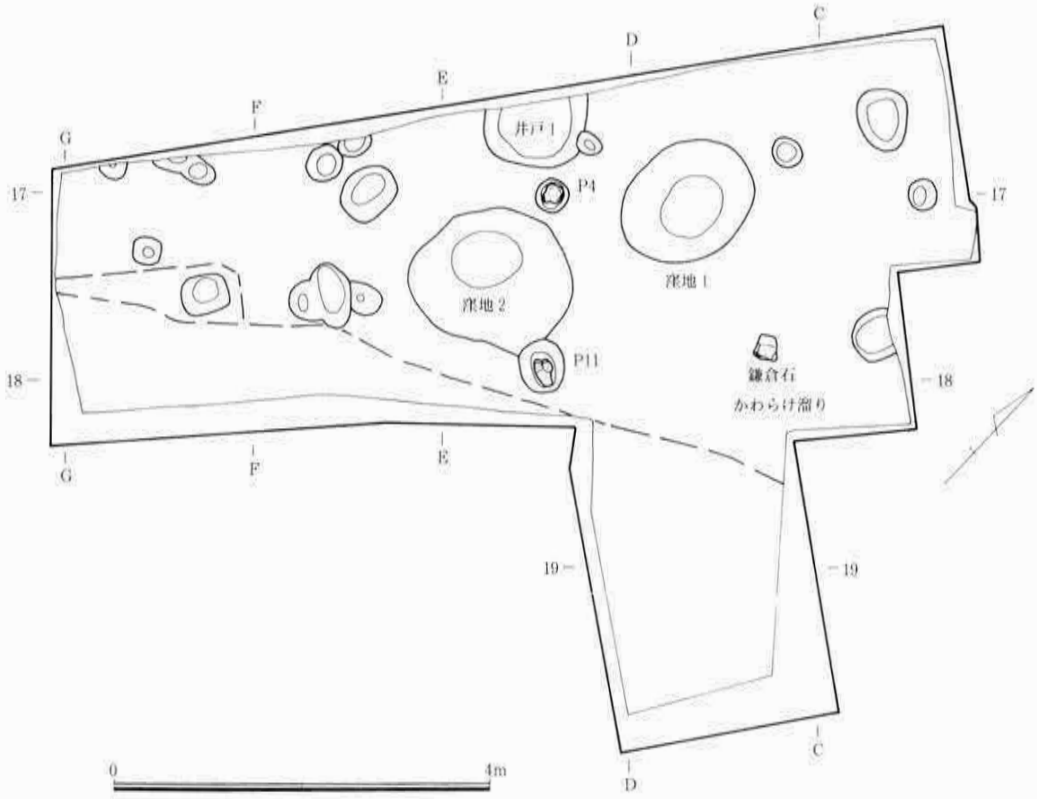


図4　2面全図

かわらけ溜り出土遺物(図8)

かわらけ溜りからはかわらけの他に中国陶磁器、常滑製品、土鍋、銭、鉄釘などの出土を見た。かわらけは合計で34点(図8－1～34)が図示しえた。1～9は糸切底の大皿。胎土は何れも粉質で砂を含む。色調は橙色あるいは淡褐色を呈する。4・5は体部が直線的で外反して立ち上がる。1～3・6～9の体部は内湾気味に立ち上がる。7は灯明皿。10～33は小皿で胎土は大皿と変化は無い。10は手づくね製品、他はすべて糸切底。34は糸切底の内折れかわらけ。35・36は青磁蓮弁文碗の口縁部小片で法量は不明。35の素地はやや青色味のある灰褐色をして焼成良好、細かいガス孔が見られる。釉は淡い灰緑色で艶・透明感に富む。36の素地は灰褐色をして焼成良好、細かいガス孔が見られる。釉はうすい灰緑色をしてやや艶・透明感に欠ける。37・38は伊勢系土鍋の口縁部小片で法量は不明。胎土は何れも砂粒を多く含み、ごく僅かに金雲母が見られる。焼成は良好で、器表は肌色あるいは暗灰褐色、胎芯は器表と同様か灰黒色を呈する。39は淳化元宝。初鋳は990年(北宋)。40は鉄釘。

図8　2面かわらけ溜り　かわらけ法量表()値は復元　　単位＝cm

番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高
1	12.8	8.5	3.2	18	8.2	5.7	1.7
2	12.7	7.9	3.4	19	7.9	5.1	1.6
3	12.5	6.9	3.8	20	7.9	5.3	1.7
4	12.5	8.1	3.9	21	(8.0)	(4.5)	1.8
5	12.5	9.0	3.3	22	8.0	5.3	1.9
6	12.4	7.1	3.1	23	8.4	5.6	1.8
7	12.5	7.3	3.2	24	(7.8)	5.0	1.7
8	(12.2)	(7.4)	2.8	25	(8.0)	(5.3)	1.5
9	(13.0)	(7.4)	3.0	26	(7.6)	(4.8)	1.3
10	(8.5)	-	2.0	27	(7.8)	(5.5)	2.0
11	8.6	6.0	1.7	28	(8.0)	(6.4)	1.6
12	(8.3)	(5.8)	1.7	29	7.8	6.3	1.6
13	8.3	5.7	1.7	30	7.5	5.2	1.6
14	8.1	5.6	1.7	31	7.7	6.1	1.3
15	8.1	4.4	1.5	32	7.9	5.8	1.3
16	7.7	5.5	1.7	33	8.1	6.0	1.8
17	7.8	5.2	1.8	34	(6.0)	(4.7)	1.0

窪地1(図6・7)

C－16・17グリッドで検出された短径120・長径150cmを測る楕円形をした緩やかな凹みで、深さは検出面から22.5cmとごく浅い。窪地1からは遺物の出土は無い。

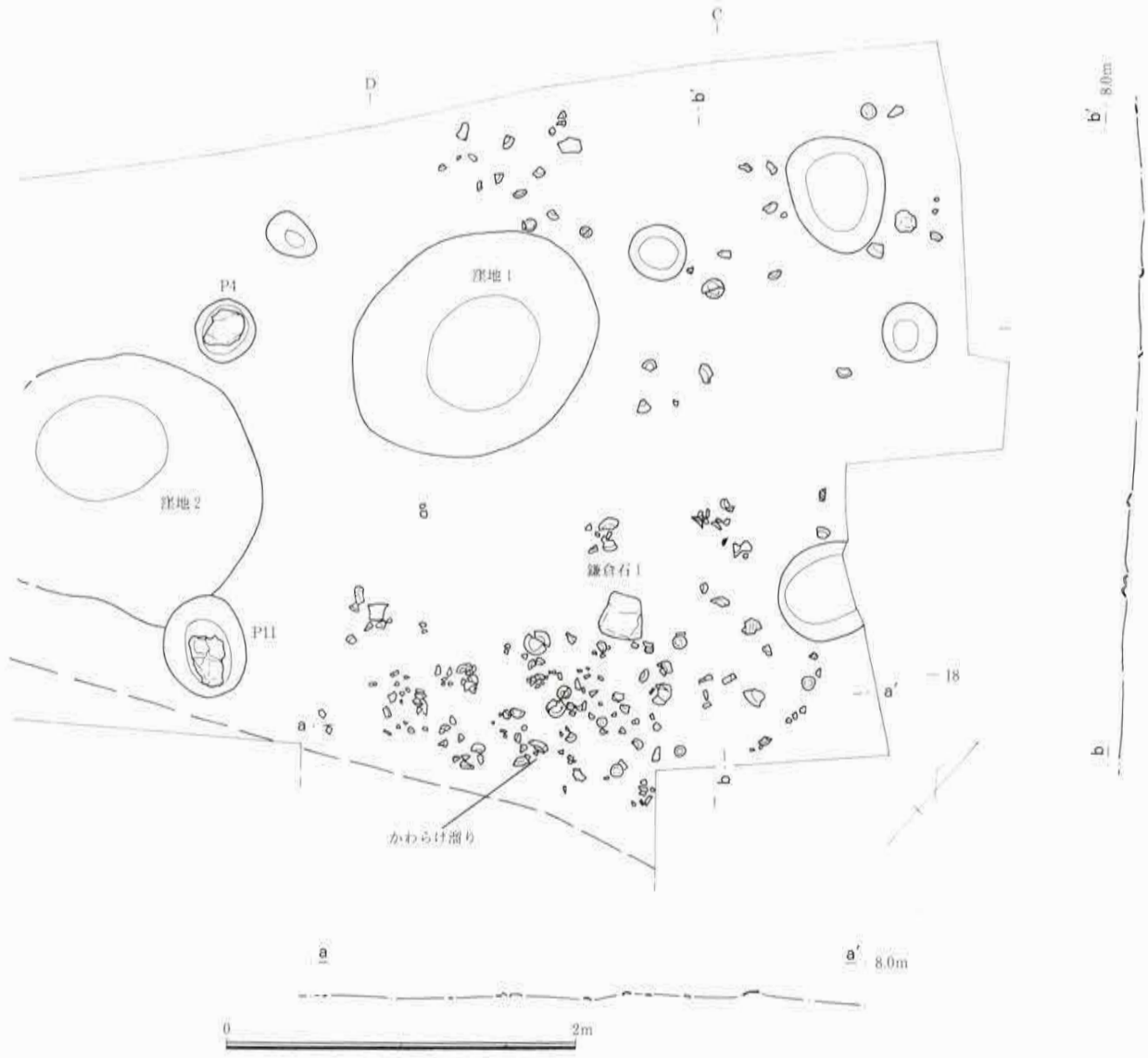


図7　かわらけ溜り・窪地１・２・Pit １・２・鎌倉石１

窪地2（図６）

D17グリッドで検出された径140 ～ 175㎝を測る不整円形をした緩やかな凹みで、深さは検出面から26cmと浅い。窪地2からは1と同様に遺物の出土は無い。

井戸1（図6・9）

井戸1は、3面調査時点に調査区西壁際のD-16グリッドで検出された井戸で、掘り方の一部は調査区西外へ及ぶ。掘り方南北の上端幅は110cm、深さは土層セクションから105cmを測る。井戸枠は検出されなかった。覆土中からはかわらけ・山茶碗窯系捏鉢が出土しているが、何れも微細片であるため図示し得なかった。

Pit4（図6・7）

Dグリッドの17ライン下に位置するピットで、並びは不明。径35cmの楕円形をしており、深さは検出面から13.6cmを測る。また底部には柱の沈降を防ぐためと考えられる鎌倉石が設置されている。検出面から石上面までの深さは9.2cmを測る。

Pit11（図6・7）

Dグリッドの18ライン下に位置するピットで、平面は短径45cm・長径55cmの長円形をしている。深さは検出面から48.2cmを測り、ピット4と同様に底部に鎌倉石が埋置されている。検出面から石上面までの深さは45cm。並びは不明。

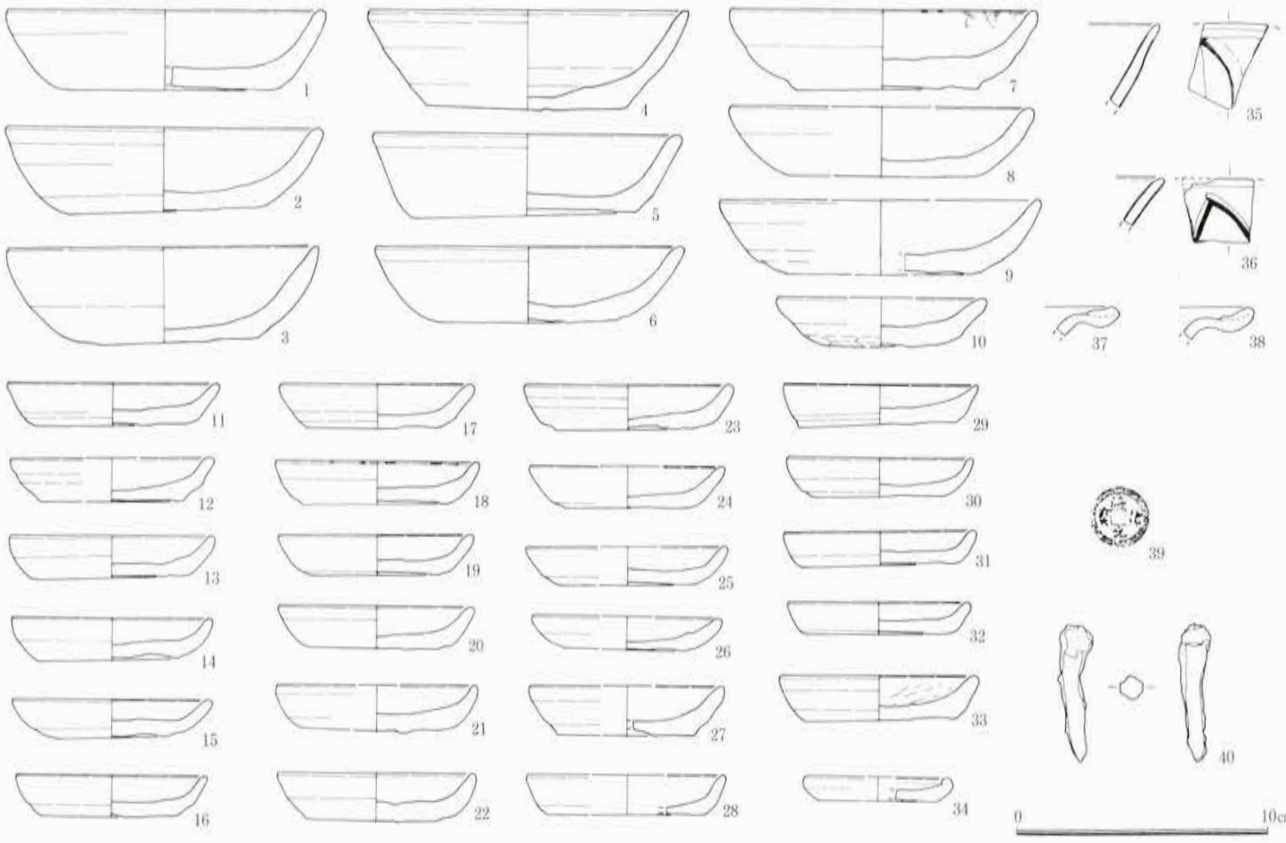


図８　かわらけ溜り出土遺物

鎌倉石（礎石か？）

Ｃ－17グリッドで検出された鎌倉石切石で、一辺25～26cmの方形をしており厚さは6cmを測る。形状はかなりいい加減で、石材は2次的な利用と考えられる。並びは無い。

２面覆土出土遺物（図10）

図10－1～16はかわらけである。1～3は手づくね製品で、胎土は粉質、砂を含み焼成良好、淡橙褐色を呈する。何れも内底面は横撫で先行、口縁端部は丸味をもち、体部外面中位に稜をもつ。4～16は糸切底の小皿である。17は青磁蓮弁文碗の口縁部小片で法量は不明。素地は若干緑色味をもつ灰白色。釉は灰緑色をして艶・透明感にやや劣る。18は白磁口禿碗の口縁部小片で法量は不明。素地は灰白色。釉はやや緑色味のある灰白色をして艶はあるが透明感にやや欠ける。19は山茶碗窯系捏鉢の底部小片で法量は不明。胎土は暗灰色をして焼成良好、砂・長石粒を多く含みざらつきをもつ。内面若干磨耗。20・21は常滑甕の口縁部小片で法量不明。胎土は共に暗灰色あるいは灰黒色をして、細かな砂・長石粒を多く含みよく焼き締まる。縁帯の幅は狭い。22は至和元宝（1056年初鋳）でピット11からの出土である。23～18は2面出土の銭である。23は至道元宝（995年初鋳）。24は治平元宝（1064年初鋳）。25～28は元豊通宝（1078年初鋳）。29・30は鉄釘。共に先端部を欠く。31は円盤状の滑石製品。やや桃色味のある黒灰褐色を呈する。滑石鍋底部の転用と考えられる。

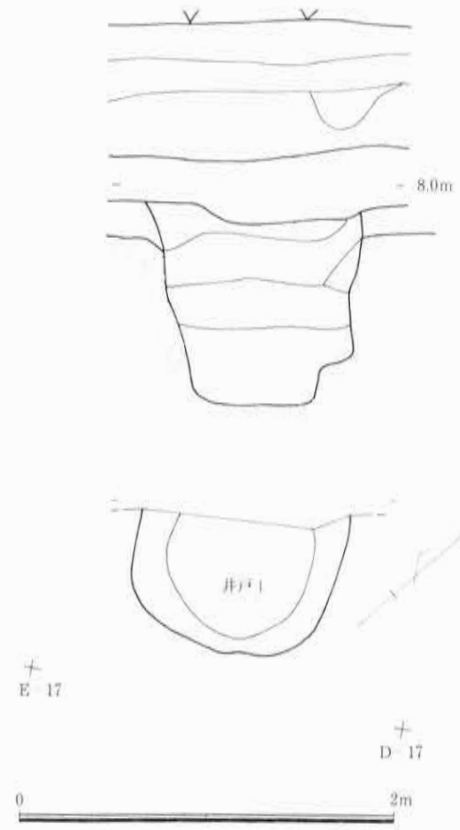


図９　井戸１

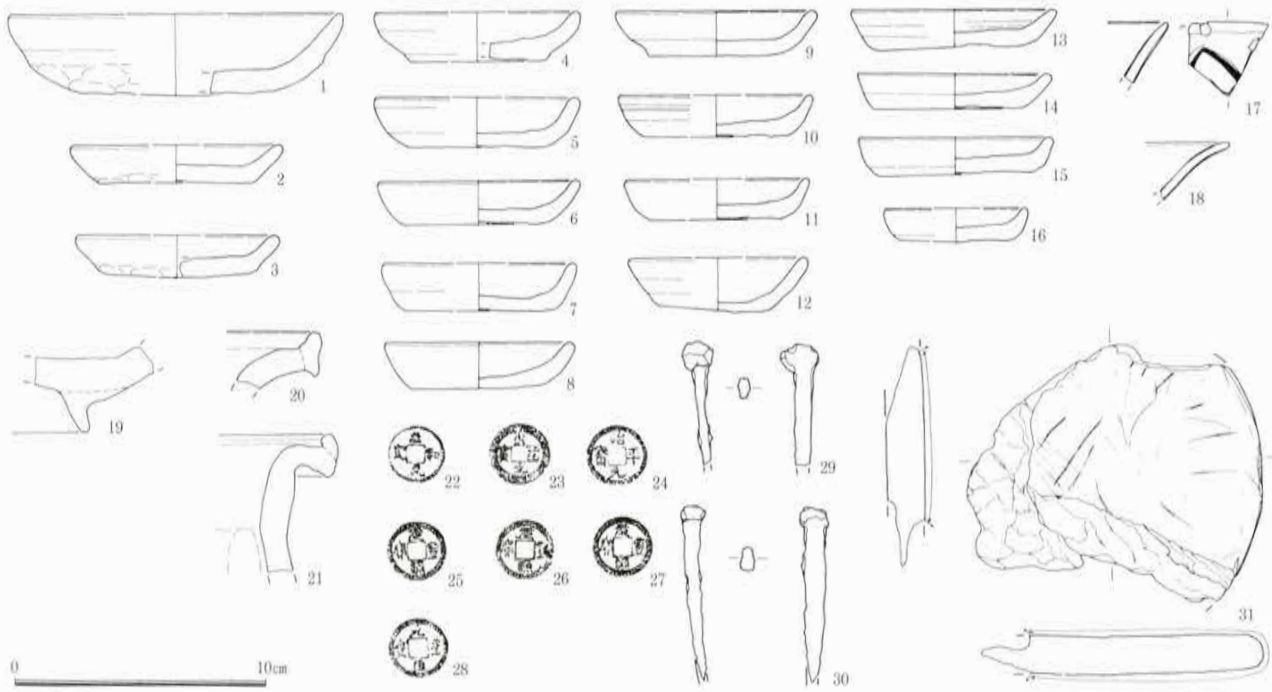


図10　2面出土遺物

図10　2面覆土　かわらけ法量表()値は復元　単位＝cm

番号	口径	底径	器高
1	1	(13.5)	-
2	2	(8.6)	-
3	3	(8.2)	-
4	4	(8.2)	(5.3)
5	5	(8.3)	5.2
6	6	8.2	5.4
7	7	(7.9)	(6.0)
8	8	7.6	5.3
9	9	8.1	5.4
10	10	(7.8)	(5.9)
11	11	(7.4)	(5.3)
12	12	(7.2)	4.5
13	13	8.3	5.8
14	14	7.8	6.0
15	15	7.8	6.3
16	16	(5.8)	(4.5)

(3) 3面

3面(最終面)は、検出された遺構の密度・遺物の出土状況から見て、今回の検出面中人々の活動が最も繁華な時期と言えよう。

3面検出遺構(図11)

3面は海抜7.5 ～ 7.7m を測り、ほぼ地山の黄灰色砂上面付近に位置する。3面からは掘立柱建物建物一棟を初め土擴５基、溝遺構3条、木柵状遺構２ヶ、ピット151(掘立柱建物の41を含む)が検出された。

掘立柱建物1 (図11・12)

掘立柱建物建物1 (以後建物1)は、pit23・26・28から成る柱穴群で調査区外に更に広がりを見せる。柱間は東西方向(pit23・26間)が2.25m 、南北方向(pit26・28間)が4.5m を測る。柱並びの南北軸線方向はＮ－44°－Ｅを示す。

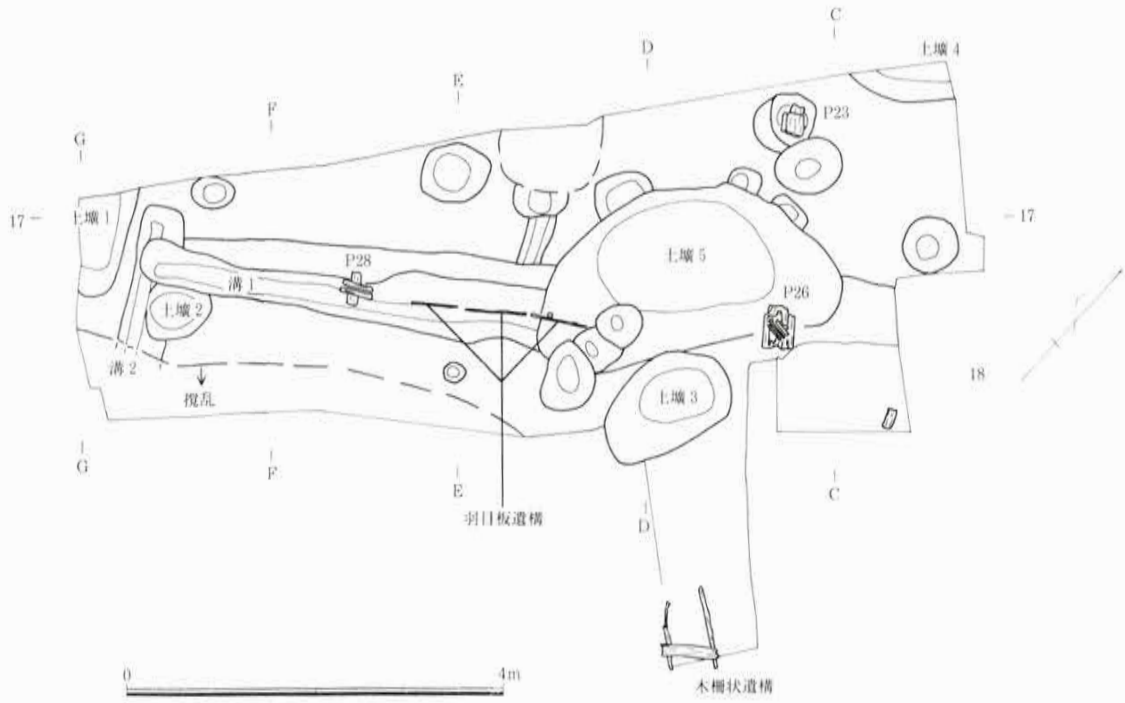


図11　3面全図

掘立柱建物1(pit23)出土遺物(図13)

pit23からは聖宋元宝(1101年初鋳)が出土している。

土壙1（図11・14)

土壙1は調査区南西角のG－11杭下に位置し調査区の南・西外に広がりをもつ。検出規模は南北60cm・東西105cm、深さは検出面から72cmを測る。

土壙2（図11・15)

土壙2はF－17グリッドに位置し、溝1・2と重複関係にあり溝1に切られる。平面形は径55cmの不整円形をしており、深さは検出面から最大24.7を測る。

土壙3（図11・14)

土壙3はD－18グリッド杭下で検出された土壙で、一部が土壙5と接する。平面形は短径95cmの長円形をしており、深さは検出面から29.5cmを測る。

土壙3出土遺物(図15)

土壙3から報告しえる遺物は、図15－1に示した手づくねかわらけの大皿の完形品1点がある。本品は重量感があり、胎土は粉質で砂を含み淡褐色をして焼成良好。口径14.5cm、器高3.2cmを測る。内底部の横撫で先行。

土壙4（図11・14)

土壙4は調査区北西角のB－16グリッドで全体のごく一部が検出された土壙で、全体規模・形・深さ等は不明。

土壙5（図11・14)

土壙5はC・D－16・17グリッドに位置する土壙で、南北3.3m・東西1.7mの不整円形をしており、深さは検出面から最大79cmを測る。

土壙5出土遺物(図15)

図15－2～5はかわらけの大皿で2～4は手づくね製品、5は糸切り底である。胎土はおおむね砂を多く含み粉質焼成良好で淡褐色をして器表は煤ける。手づくね製品は何れも内底部横撫でが先行する。

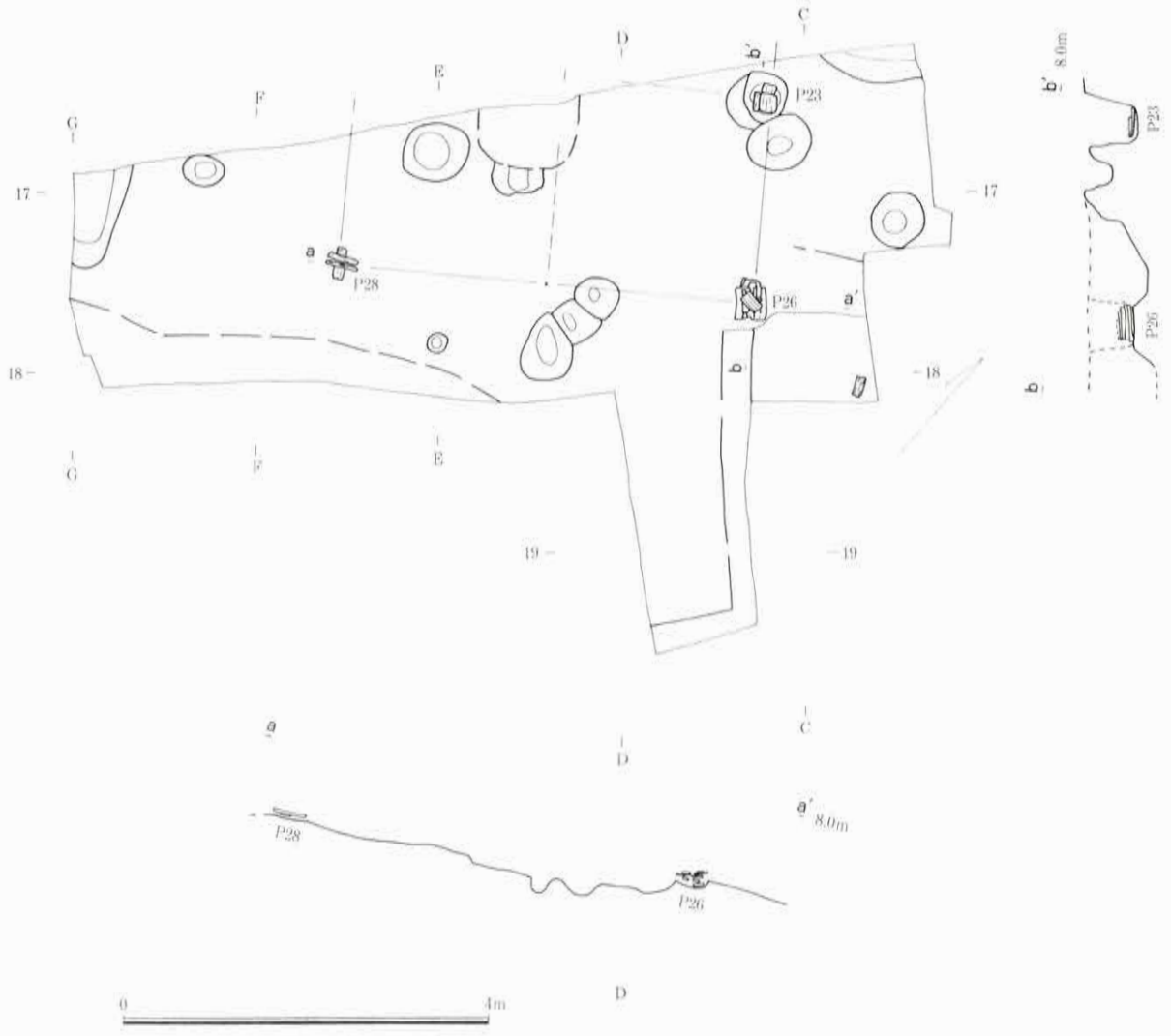


図12　堀立柱建物１

２は完形品で口径15.2～16cm、器高3.9cm。３は完形品で口径13.7～14.5cm、器高3.4cm。4は復元して口径13.9cm、器高3.1cmを測る。５は８割がたの遺存品で、口径14cm。底径7.8cm。器高3.9cm。底部は回転糸切り、体部は轆轤痕が顕著で、内底部の撫ではごく弱い。図15－6は山茶碗窯系捏鉢の口縁部小片で法量は不明。胎土は灰色をして砂・長石粒を多く含み焼成良好。内面に使用痕を確認。

溝1（図11・16）

溝1はD～F－17グリッドに位置する南北方向の溝で、検出延長4.3m、幅55～90cm、最大深度は検出面から63cmを測る。軸線方位はN－54°－Eを示す。溝底レベルは北端部が海抜6.9m、南端部が6.89mと殆んど差異は無い。また溝覆土上層部からは、溝1と軸線方向を共にする羽目板状の板材が検出されており、溝1の東側に位置する大規模な落ち込み（旧逆川か？）の護岸施設の可能性が持たれる。溝1は羽目板（護岸施設）を設置する掘り方であったという考えもできる。

溝1出土遺物（図17）

図17－1は手づくねかわらけ大皿の破片で、復元した口径は13.5cmを測る。胎土は砂を含み粉質、焼成良好。淡褐色を呈する。２は糸切り底かわらけの小皿で、復元した口径は9.5cm、器高は2cmを測る。胎土は砂を含み粉質、焼成良好。淡褐色を呈する。

溝2（図11）

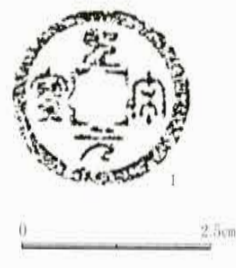
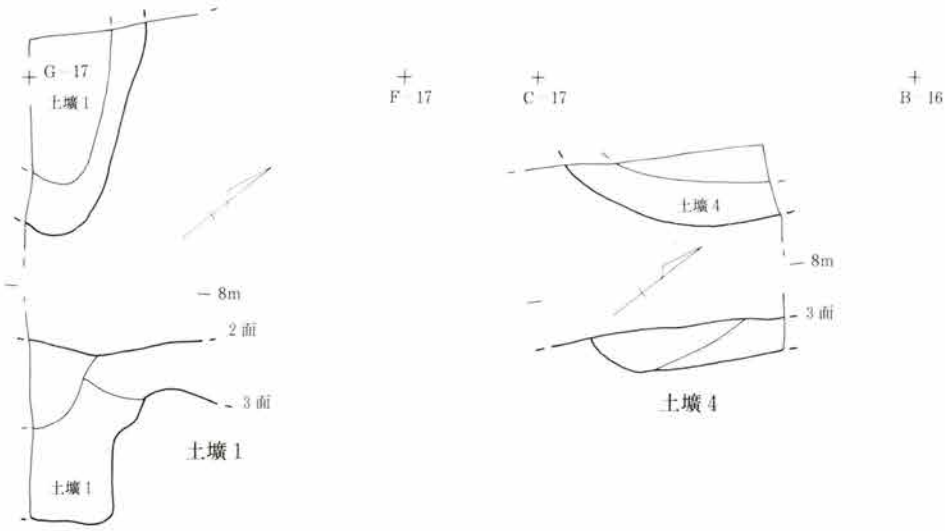


図13　Pit23 出土遺物



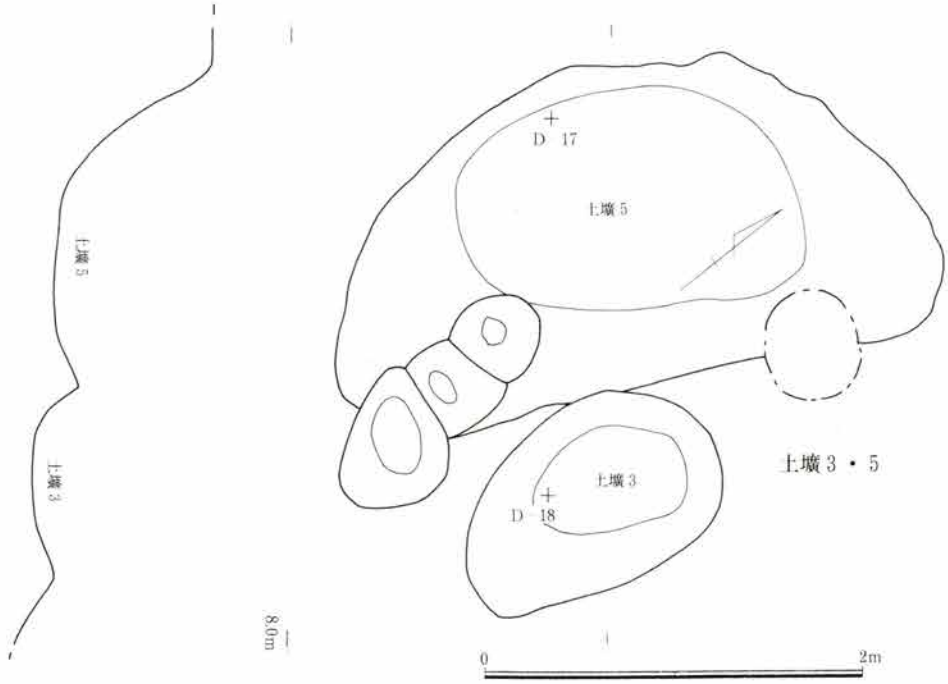


図14　土壙１・３・４・５

溝２はＦ－17グリッドで検出された東西方向の溝で、土擴2・溝1と重複し切られる。軸線方向はＮ―30°―Ｗを示す。検出延長は1.55mで東側は撹乱によって切られる。幅は50cm、深さは最大で検出面から27cmと浅い。

溝3（図11）

Ｄ－17グリッドで検出された東西方向の溝で両端を他の遺構に切られる。

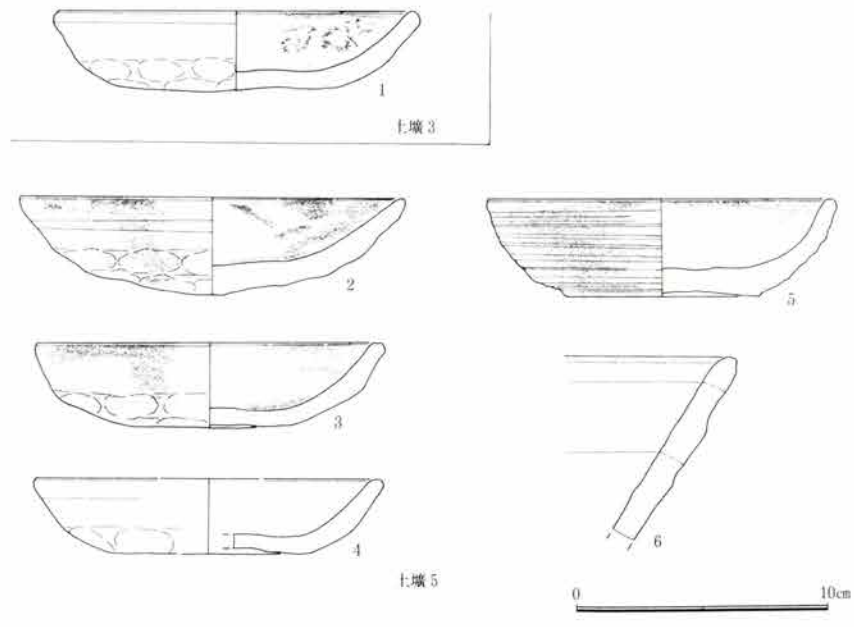


図15　土壙３・５出土遺物

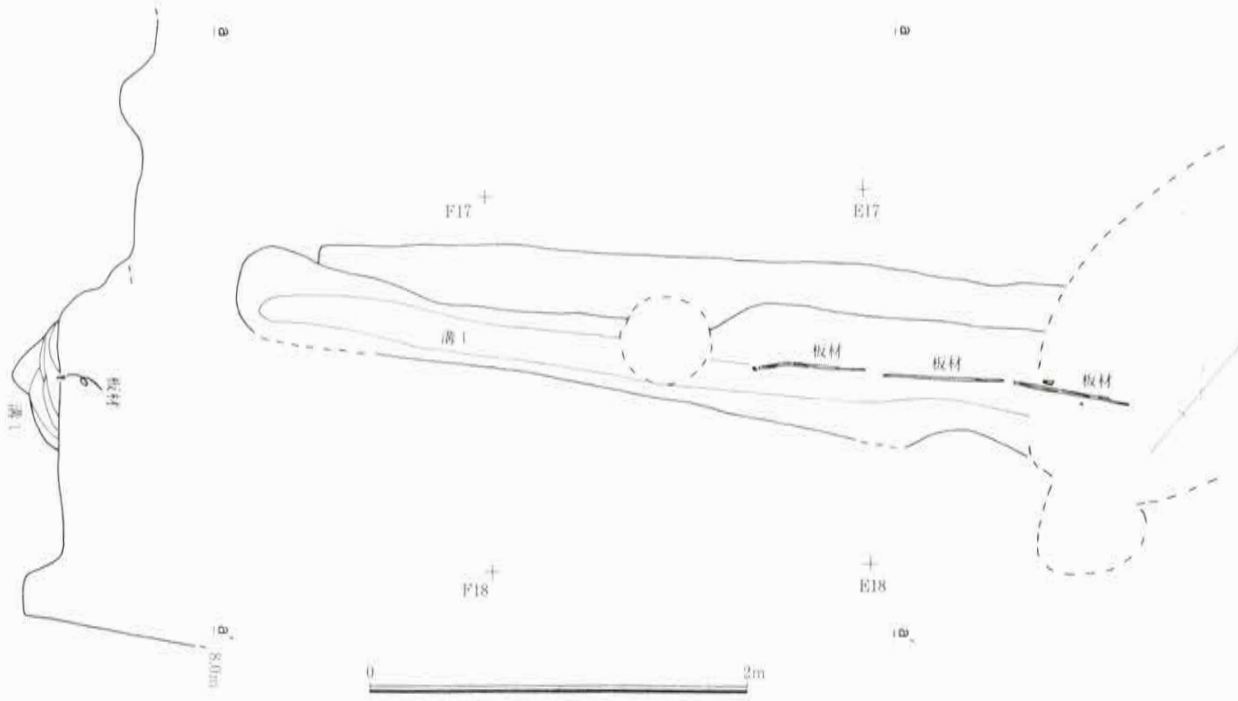


図16　溝1

検出規模は長さ55cm、幅25cm、深さ20cmと小規模。軸線方向はN－25°－Wを示す。

木柵状遺構（図11・18）

木柵状遺構は東側落ち込み中の、C－19グリッド（海抜6.45m付近から）検出された南北方向の柵で、長さ90cmの角材（杭）2本と、幅10cm前後・遺存長61cmの板材1枚からなる。杭の間隔は45～50cmを測る。遺構は東方（落ち込みの方向）に倒れる形で検出された。

3面出土遺物（図19～21）

図19は3面出土（覆土も含む）かわらけである。1～17は手づくね製品。18～79は糸切り底である。胎土はおおむね粉質で砂を含み、焼成は良好。橙褐色あるいは淡褐色の色調を呈する。35は底部が高台土に切り残され、内底部の撫でが弱いタイプ。21～29は薄手タイプ。30～33は外反するタイプ。79は内折れかわらけ。

図20－1～14は中国陶磁器である。1は青磁劃花文碗の口縁部小片で法量は不明。素地は暗灰色をして焼成良好。釉は淡い灰緑色、透明感はあるが若干銀化している。2は青磁水注の胴部と注口部の破片で復元した胴径は11cmを測る。素地は暗灰色をして焼成良好。釉は灰緑色で若干失透。外表面に6mm間隔の鎬文が施される。3は白磁口禿碗

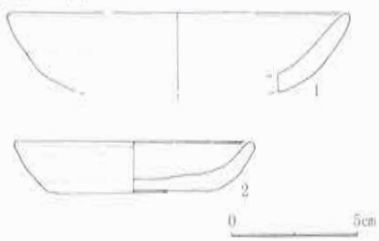


図17　溝1出土遺物

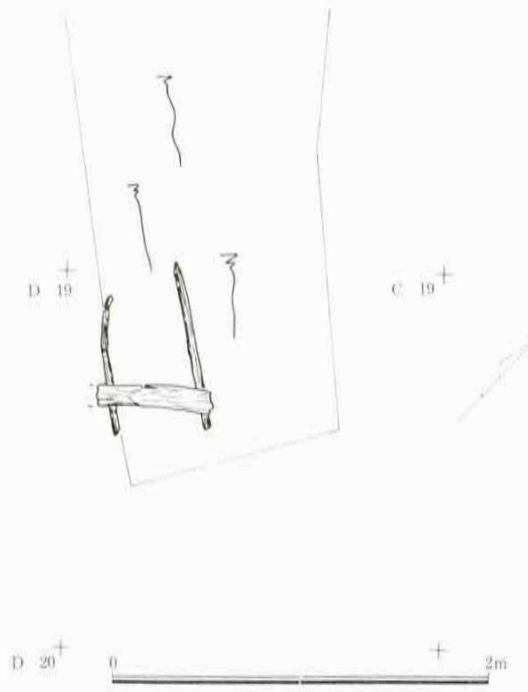


図18　木柵状遺構

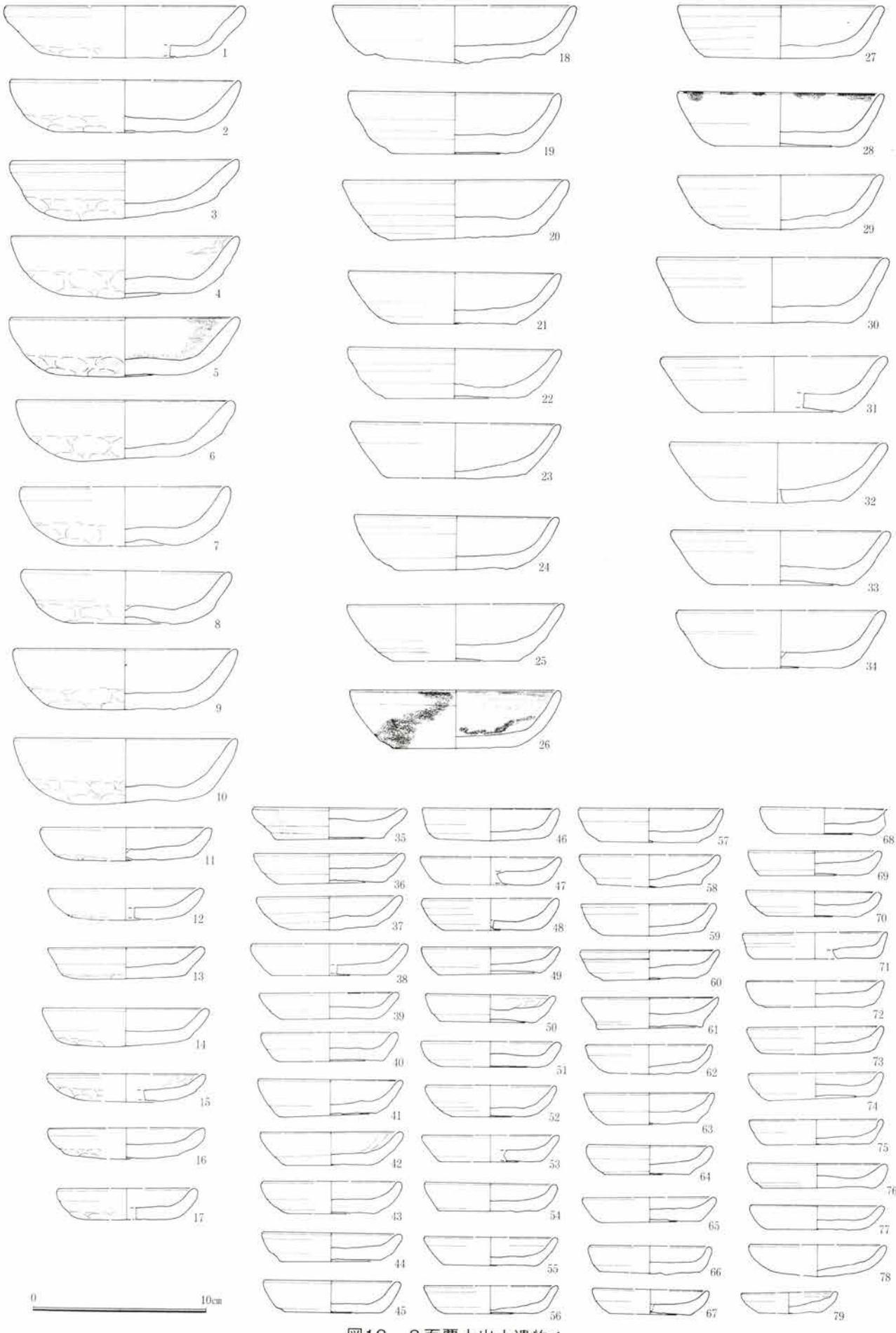


図19　3面覆土出土遺物1

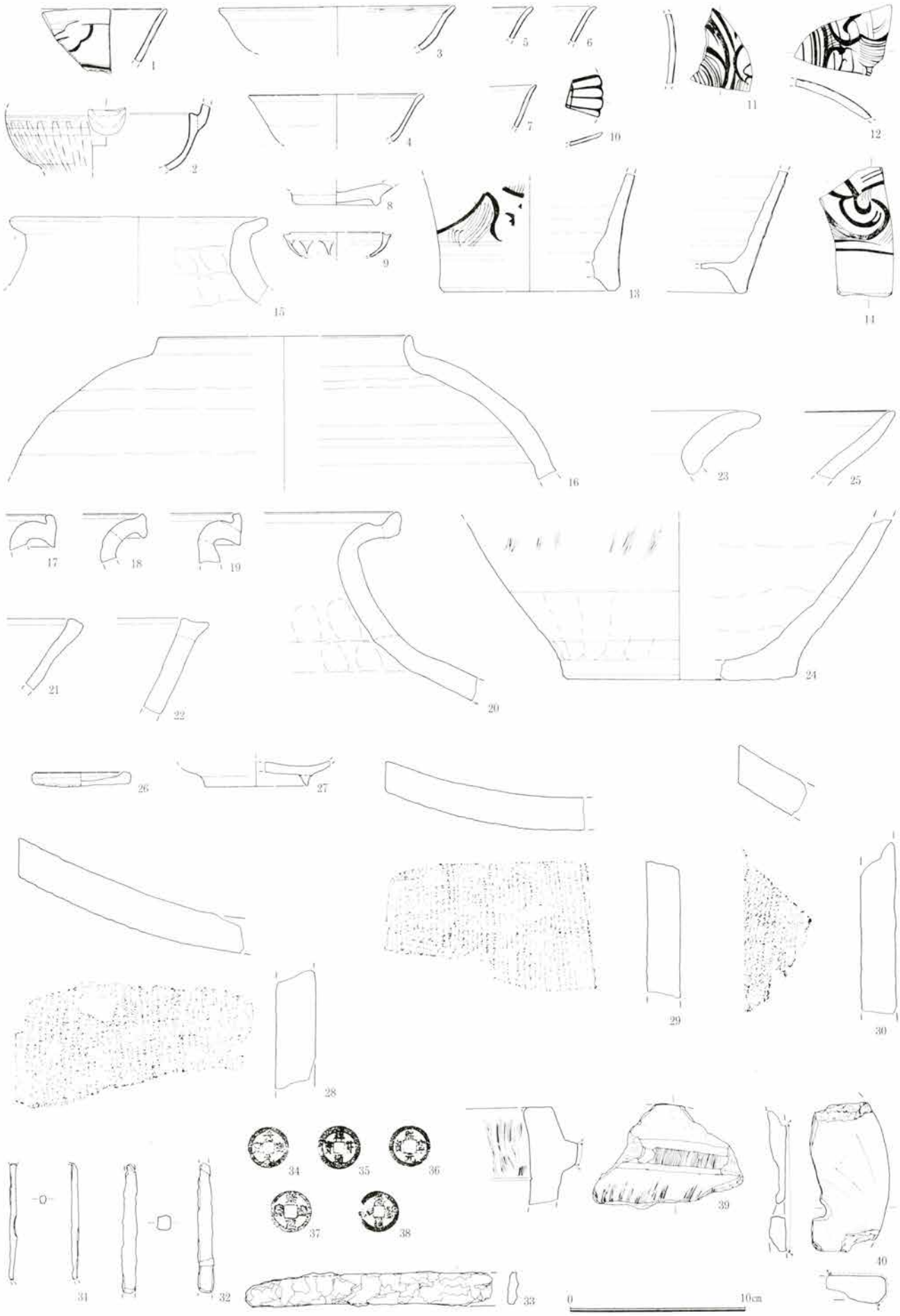


図20　3面覆土出土遺物2

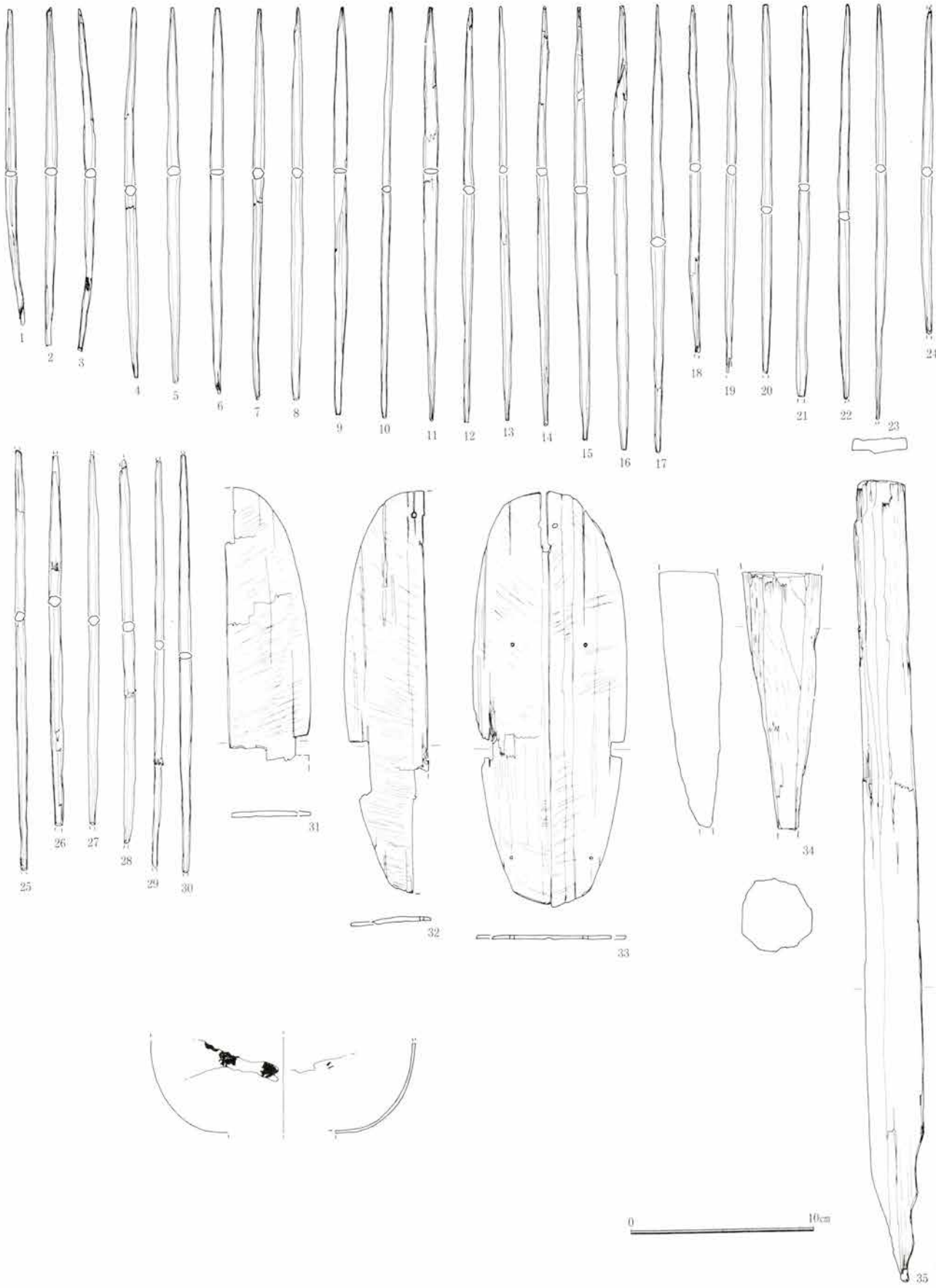


図21　３面覆土出土遺物３

の口縁部片で、復元した口径は13.5cmを測る。素地は灰色をして焼成良好。釉は緑色味のある灰白色をして、艶が残る。内面の口縁部付近に重ね焼きの痕跡が見られる。4は白磁口禿の小碗の破片で、復元した口径は10.1cmを測る。素地は灰白色をして、焼成良好。釉は若干青色味のある乳白色をして艶に富む。5～7は白磁口禿碗の口縁部小片で法量は不明。素地は乳白色、釉は若干緑色味のある灰白色をして焼成良好。8は白磁碗の底部片で高台径は5.2cmを測る。素地は灰白色をして焼成良好。釉は若干緑色味のある灰白色をしている。高台部と底部は露胎。9は白磁瓜型合子の身の破片で、復元した口径は6.2cmを測る。素地・釉共に乳白色をして焼成良好。10は青白磁輪花小皿の破片で法量は不明。素地は乳白色をして焼成良好。釉は明るい青白色で艶に富む。11は青白磁梅瓶の胴部上位付近の小片で法量は不明。素地は乳白色をして焼成良好。釉は艶に富む淡青色をしている。12は青白磁梅瓶の胴部上位から肩にかけての小片で法量は不明。素地は灰白色をして焼成良好。釉は艶に富む淡青色をしている。13は青白磁梅瓶の底部付近の破片で、復元した底径は10.5cmを測る。素地は灰白色をして焼成良好。釉は艶に富む淡青色をしている。高台は削りだしで露胎。14は白磁(青白磁？)梅瓶の底部付近の破片で法量は不明。素地は暗灰色をして焼成良好。釉はくすんだ灰褐色をしている。底部高台は削り出しで露胎。図20－15～22は常滑製品である。15は短頸壺の口縁部付近の破片で復元した口径は14.8cmを測る。胎土は砂・小砂利・長長石粒を多く含み焼成は良好。16は無頸壺の胴部上位の破片で、復元した口径は14cmを測る。胎土は砂・長石粒を多く含みよく焼き締まる。海面器表は灰褐色、内面は灰黒色の自然釉がかかる。山茶碗窯系の窯で生産されたものか。17～20は甕の口縁部片で何

図19　3面覆土　かわらけ法量表()値は復元　単位＝cm

番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高
1	(14.0)	-	3.0	41	8.5	5.5	2.1
2	(13.5)	-	3.0	42	8.4	5.0	1.9
3	13.4	-	3.4	43	(8.2)	(5.0)	1.9
4	13.3	-	3.6	44	8.2	5.8	1.6
5	13.5	-	3.4	45	8.0	5.7	1.8
6	12.7	-	3.4	46	8.0	6.0	1.9
7	(12.2)	-	3.4	47	(8.2)	(5.8)	1.6
8	(12.3)	-	3.0	48	(8.0)	(5.5)	1.8
9	13.1	-	3.5	49	8.1	5.9	1.6
10	13.0	-	3.7	50	7.6	5.4	1.6
11	(10.0)	-	1.9	51	(8.2)	(5.6)	1.5
12	(9.0)	-	1.8	52	(7.7)	4.3	1.8
13	9.2	-	1.8	53	(8.0)	(6.0)	1.5
14	9.7	-	2.2	54	7.8	5.8	1.6
15	(9.3)	-	1.6	55	(7.8)	5.3	1.6
16	(9.2)	-	1.8	56	(7.8)	(5.2)	1.6
17	(8.8)	-	1.8	57	8.4	5.7	2.0
18	(14.3)	(10.5)	3.3	58	(8.2)	(6.0)	1.9
19	(13.6)	(9.0)	3.8	59	7.9	5.7	1.8
20	13.2	8.6	3.4	60	8.1	5.4	1.7
21	(13.3)	(8.2)	3.2	61	8.0	6.0	1.8
22	(12.8)	(7.6)	3.1	62	(7.4)	(4.5)	1.7
23	(12.6)	(7.2)	3.5	63	7.6	5.3	1.8
24	12.4	7.3	3.5	64	7.4	5.0	1.7
25	(12.6)	(7.3)	3.3	65	(7.8)	5.8	1.4
26	12.3	7.0	3.3	66	(7.2)	(5.8)	1.6
27	(12.3)	(8.0)	3.2	67	(6.8)	(4.8)	1.4
28	(12.2)	(7.0)	3.3	68	(7.6)	(5.7)	1.5
29	12.1	7.8	3.1	69	7.8	6.4	1.4
30	12.5	8.0	2.9	70	7.9	5.2	1.5
31	12.4	7.0	3.0	71	(8.4)	(7.1)	1.5
32	12.0	6.8	3.1	72	(8.1)	(5.6)	1.5
33	12.1	8.5	3.1	73	(8.0)	(6.4)	1.6
34	12.0	7.0	3.2	74	(7.8)	5.3	1.5
35	(9.2)	(6.6)	1.8	75	(7.8)	(6.0)	1.5
36	8.9	6.1	1.7	76	8.2	6.4	1.4
37	8.5	5.0	1.9	77	7.9	5.4	1.4
38	9.0	6.1	1.8	78	(8.0)	(5.7)	1.8
39	(8.1)	(5.5)	1.5	79	(5.6)	(3.5)	1.2
40	(8.0)	(6.0)	1.6				

れも法量は不明。胎土は砂・長石粒を多く含みよく焼き締まる。21・22は捏ね鉢の口縁部小片で法量は不明。21は細かな長石粒を多く含みよく焼き締まる。22は再火を受けたのか表面がざらつく。図20－23～25は渥美製品である。23は甕の口縁端部小片で法量は不明。胎土は砂・長石粒を多く含み焼成は良好。内外面に灰黒色の釉が施される。24は甕の底部片で復元した底径は13.3cmを測る。胎土は細かな長石粒を含みよく焼き締まる。25は捏ね鉢の口縁部片で法量は不明。胎土はきめ細かく灰褐色をして良く焼き締まる。図20－26・27は瓦器質製品である。26はコースター状の形状をした製品で口径5.7cm・器高9㎜を測る。胎土は瓦質で灰褐色をして、器表面は灰黒色を呈する。底部は手づくね。27は碗の底部片で復元した高台径は5.9cmを測る。胎土は緻密で胎芯は灰黒色、器表面は肌色に近い淡褐色あるいは灰黒色をしている。付け高台。図20－28～30は平瓦の破片で何れも凸面に縄目が顕著に見られる。胎土は砂・小砂利を多く含み重量感がある。31～33は鉄製品である。31・32は釘。33は用途不明。34は景徳元宝(北宋1004年初鋳)。35は祥符通宝(北宋1009年初鋳)。36・37は熙寧元宝(北宋1068年初鋳)。38は元豊通宝(北宋1078年初鋳)図20－38・39は滑石鍋の破片で共に法量は不明。

図21は木製品及び漆器である。図21－1～30は箸である。完形品で長さ17.5cm～24.4cmを測る。図21－31～33は板草履の芯である。33は幅8.5cm、長さ22.5cmを測る。図21－34は杭状をした木材の断片である。35は一方の先端を尖らせた板材で、幅3cm前後、長さ44cm、厚さ8㎜を測る。図21－36は漆器椀の破片で、復元した最大径は14.4cmを測る。木地は薄く黒漆地に朱漆で文様が描かれる。

中世層出土の古代遺物(図22)

1～3は土師器である。1は甕の口縁部小片で法量は不明。1は胎土に微砂を含み焼成良好。内外面に磨きの後赤色彩色が施されている。2は胎土に砂・白色粒を含み焼成良好。外面篦撫でが施される。くすんだ橙褐色を呈する。3は甕等の底部片で法量は不明。胎土は砂・白色粒を多く含み断面にざらつきあり。内外面共に撫でが施される。4は須恵器の小片で法量は不明。胎土は砂・細かな白色粒を含みよく焼き締まる。暗灰色を呈する。

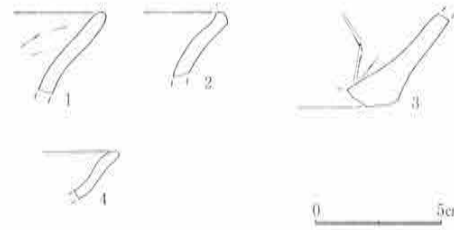


図22　中世層出土の古代遺物

第４章　まとめ

第3章で調査の成果を報告したが、ここで若干の整理を加えまとめの代りとしたい。なお本項では3章とは逆に（３面～１面に）古い時期から述べていきたいと思う。

３面（13世紀中葉～後半）

３面は中世地山上に形成されており、遺構の検出は地山上面で一括してなされた。３面は遺構の重複が激しく、３面期の中においてその様相にかなりの変化がもたれる。地山面は、調査区中央部から東側がかなりの傾斜をもって落ち込んでいる。これは今回の調査区が、調査地の東方20m を流れる「逆川」の旧河道に面していると考えられ、ちょうど旧逆川の西岸部分当っているようだ。したがって３面検出の木柵あるいは羽目板の残痕は旧河川の護岸に関する遺構と推測される。また羽目板遺構を壊す形で掘立柱建物が建てられていることから、３面期の中で屋敷あるいは境内地が河川方向に向かって拡張し、河川の埋め立てが行われたことを示している。逆川の旧河道に関するデータは、本調査地の北方30m の地点（大町３丁目1826番９地点）で、2000年に実施された発掘調査（註１）において、護岸施設等の良好な遺構検出を上げている。

２面（13世紀末～ 14世紀前半）

２面レベルでは調査区の東半部は、現地表面近くからの大規模な掘り込みによって削り取られ遺存しない。この撹乱は３面時期の旧河道とまったく位置を同じにすることから、近代以降の同河川の流路であったとも言うことができる。またこの撹乱の落ち込みラインは、2000年に実施された同地道路部分の発掘調査（註２）においても検出されている。

２面からは、井戸跡、かわらけ溜りを中心とした遺構群が検出されたが、建築遺構は見つかっておらず、屋敷地あるいは境内地の中でも裏向の様相を顕著に物語っている。

1面（14世紀後半～ 15世紀前半）

1面は2面同様に調査区の東半部を大撹乱によって欠く。また遺存部分からの遺構検出も無かった。出土かわらけから15世紀前半ごろまで人の活動痕跡を見る。

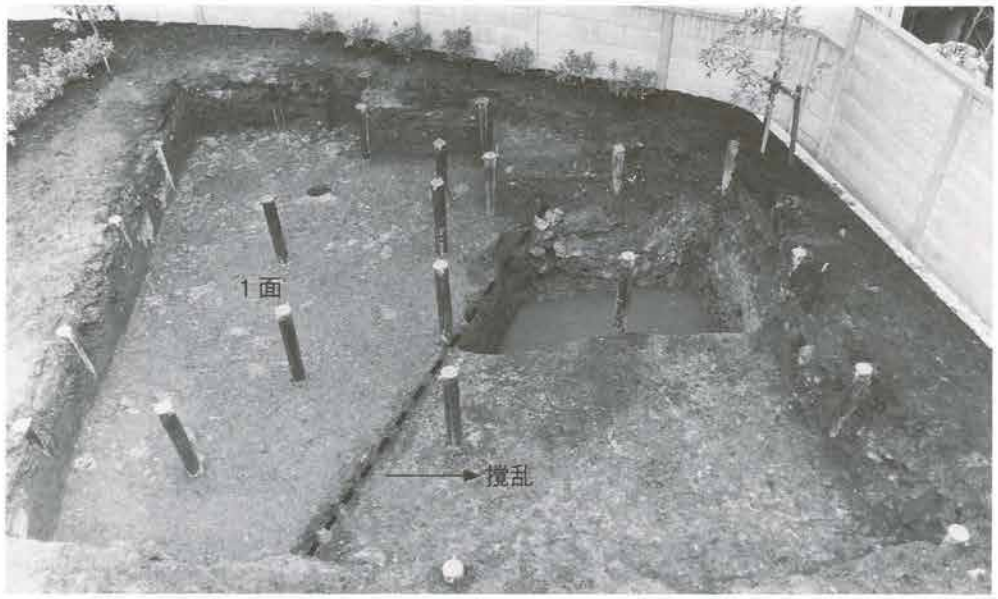
註１　　鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書（第２分冊・１～５２頁）　2000年３月　鎌倉市教育委員会
註２　　名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書　2001年12月　同調査団・有限会社博通（旧宮田事務所）

◀A　調査前状況（南から）

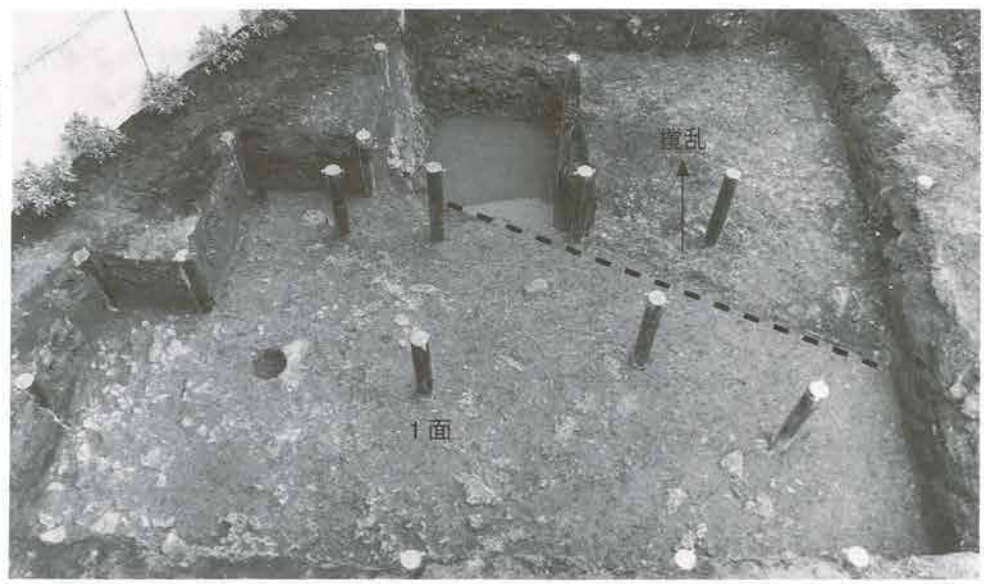
▶B　重機による表土掘削（北から）

◀C　同（南から）

PL.2



◀A 調査区中北部1面（南から）

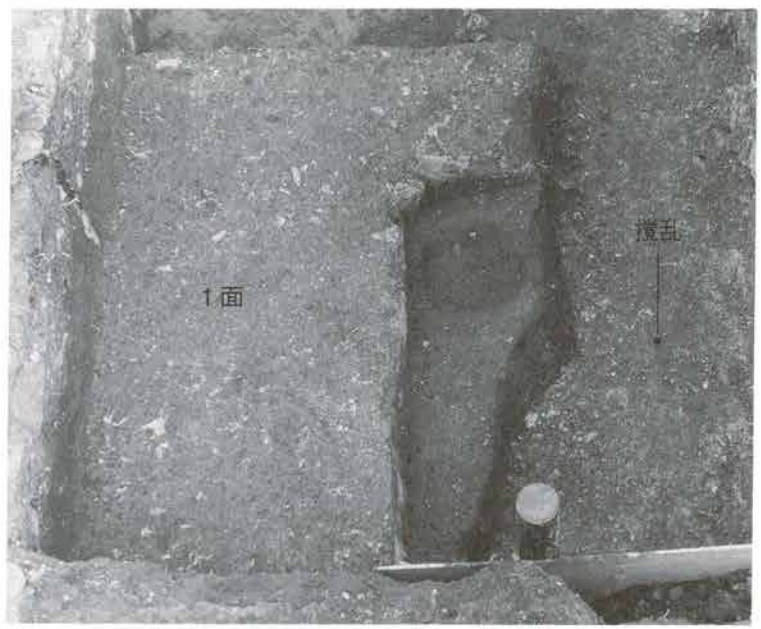


▶B 同（西から）

◀C 同北西部近景（南から）

▲A　南部１面（中北部は３面に掘り下げ時点）（西から）

▶B　同近景（東から）



◀C　同近景（南から）

PL.4

▶A 調査区中北部2面(南から)

◀B 同西側近景(南から)

▶C 同(西から)

◀A　かわらけ溜1（南から）

▶B　同近景（東から）

◀C　同（西から）

PL.6

◀A　窪地1（西から）

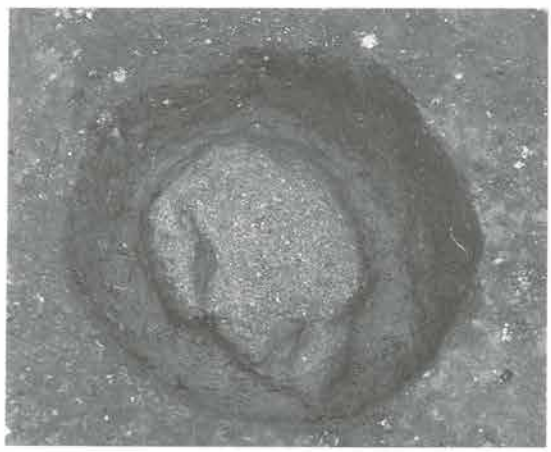
▶B　窪地2（西から）

◀C　2面上鎌倉石（礎石から）（西から）

◀A　2面井戸1（西から）

▶B　同（東から）

▼D　2面 Pit11（南から）



▲C　2面 Pit4（南から）

PL.8

◀A 調査区南部2面(西から)

▶B 同近景(東から)

◀C 同(南から)

▲A　3面全景(西から)

▲B　同(南から)

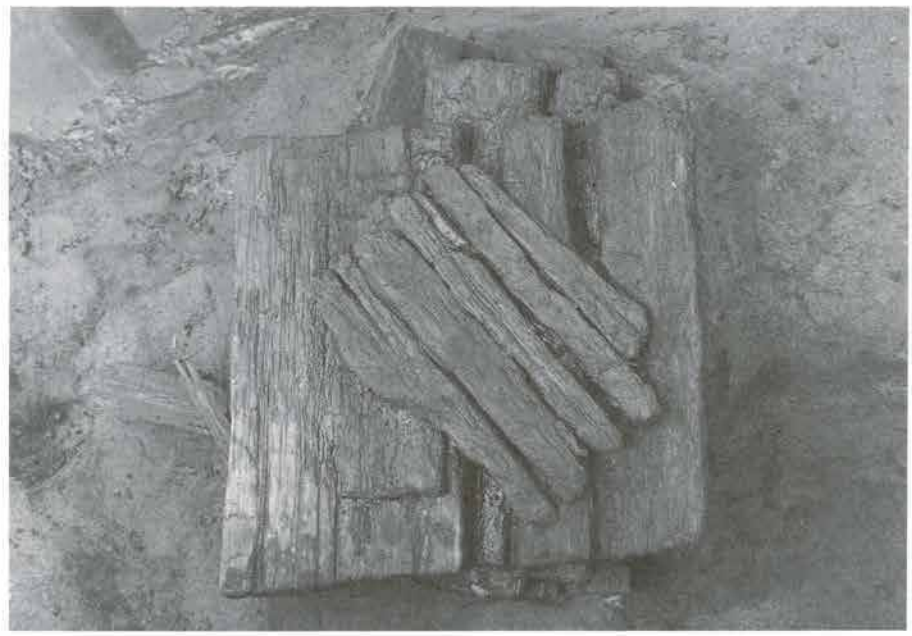
PL.10

▲A　堀立柱建物１（柱穴＝白線）（西から）

◀B　同（南から）

▲C　同近景（南から）

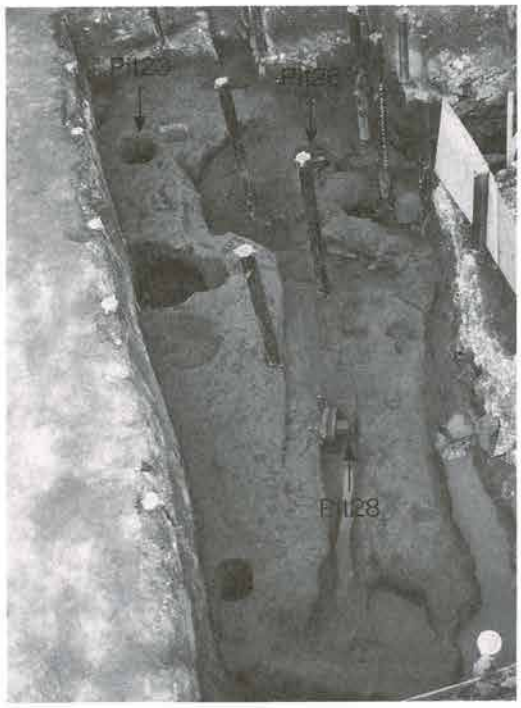
▲A　3面堀立柱建物 Pit26　ベルトセクション(南から)



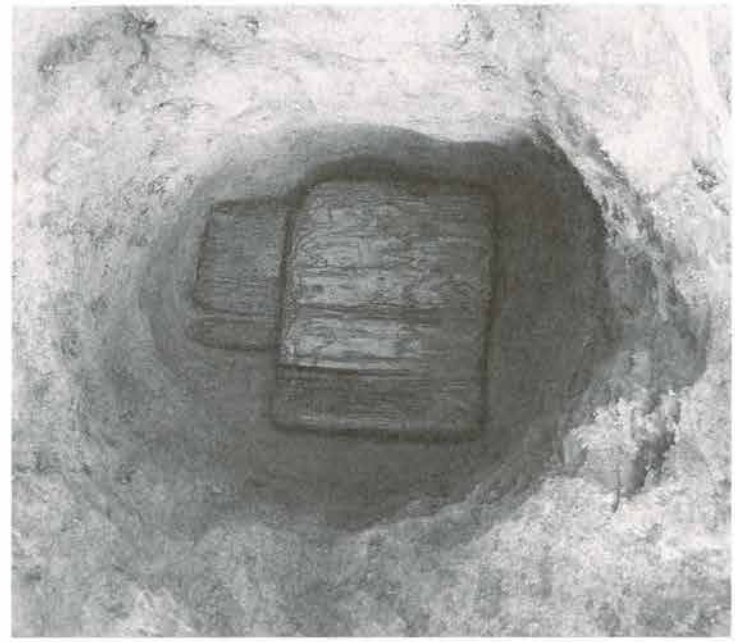
▲B　Pit26　礎板出土状況近景(真上から)

◀C　同(西から)

PL.12



◀A　3面堀立柱建物 Pit 位置関係（南から）



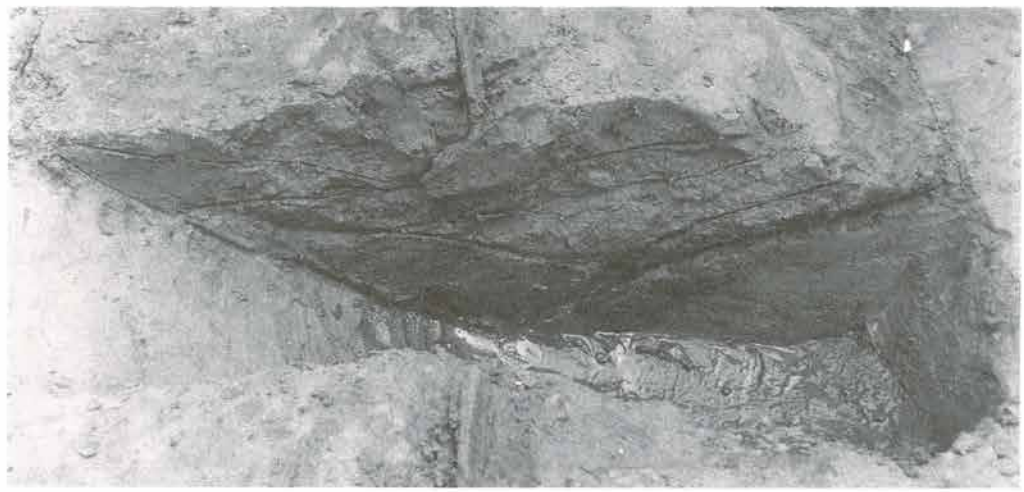
▲B　3面堀立柱建物１　Pit23近景（南から）

▲C　3面堀立柱建物１　Pit26（南から）

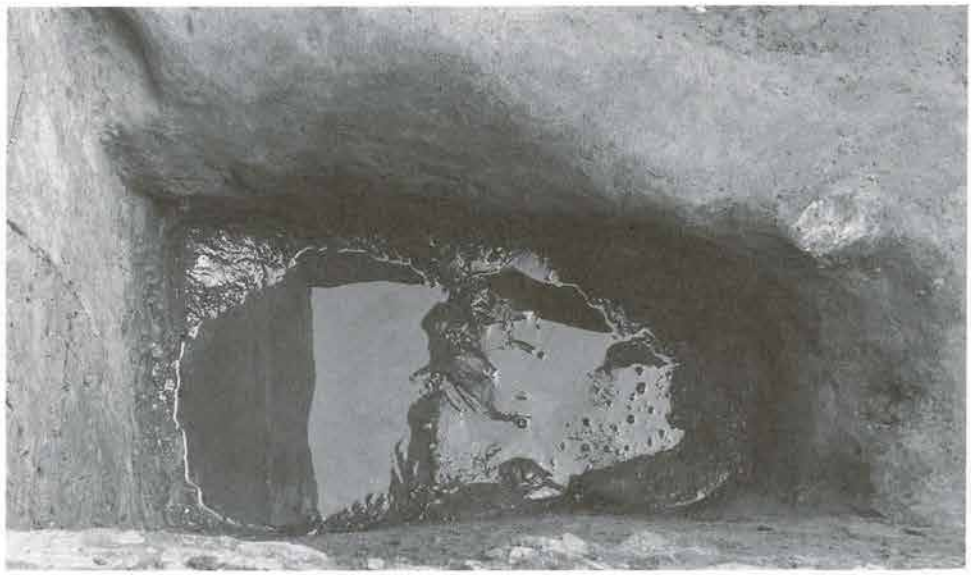
▲A　溝１覆土板材出土状況（東から）

◀B　同（南から）

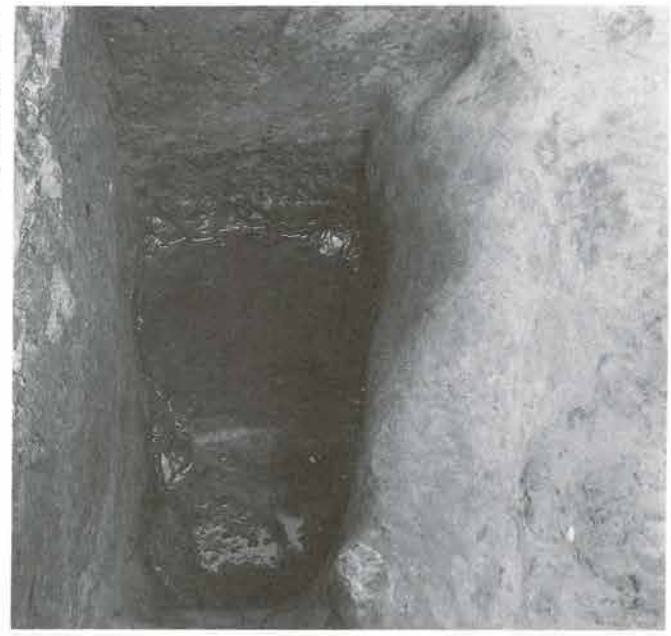
▼C　溝１覆土堆積状況（西から）



PL.14



◀A　3面土壙1（南から）



▶B　同（東から）

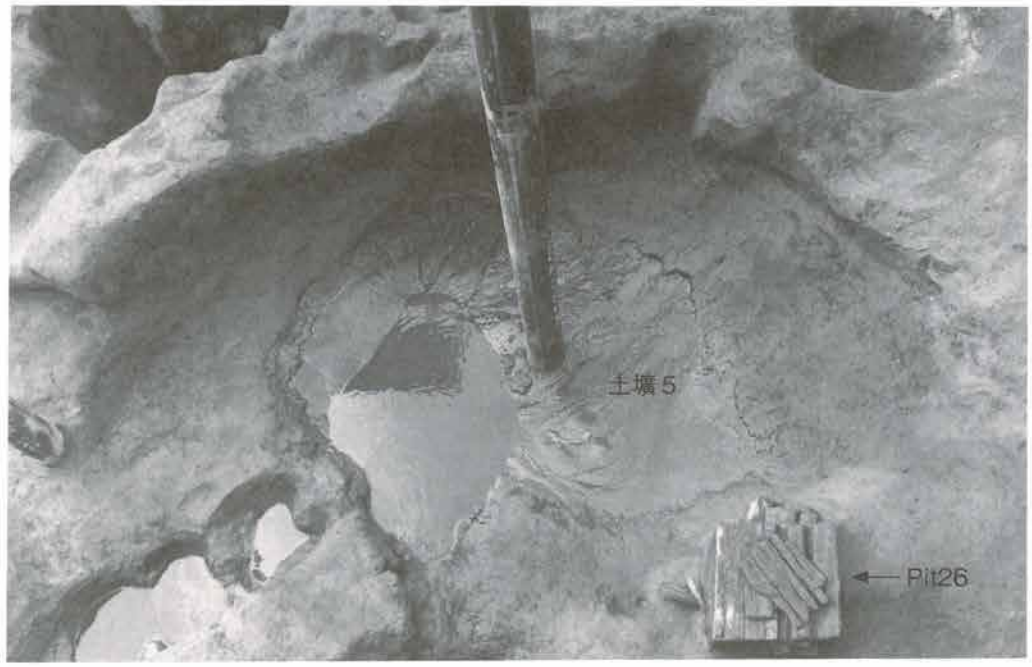
◀C　溝1・2・土壙2（東から）

◀A　3面土壙3（東から）

▶B　3面土壙4（西から）

◀C　同（東から）

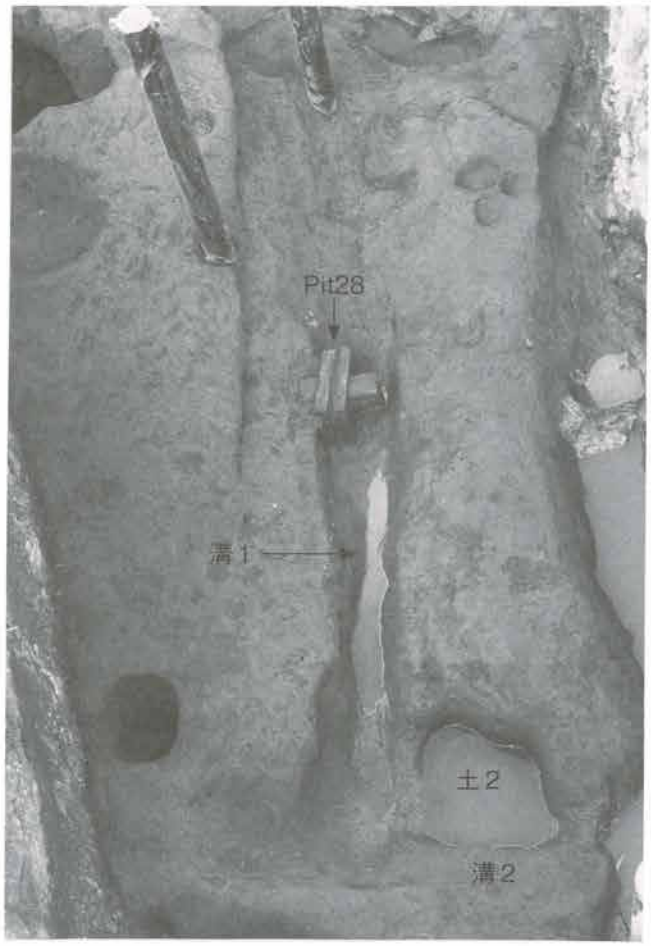
PL.16



▲A　3面土壙5（東から）

◀B　土壙5出土かわらけ（南から）

▶C　同（東から）



▲A　3面溝1・2　土壙2(南から)

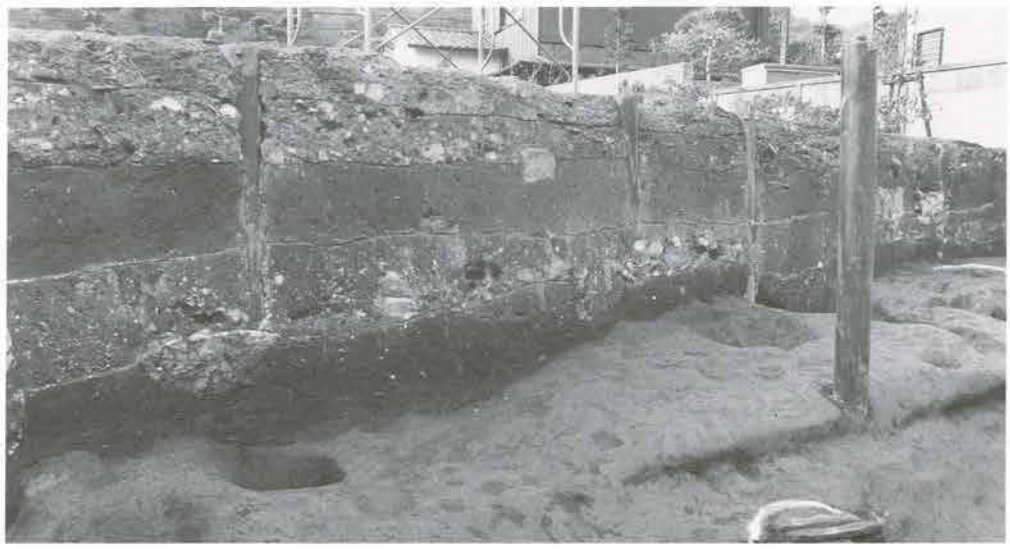
▲B　溝1断面形(南から)

▲C　溝2　土壙2　ベストセクション

PL.18

◀A　木柵状遺構（西から）

▶B　同（北から）



◀C　調査区西壁土層堆積状況（南東から）

8－4

8－7

8－14

8－16

8－17

8－30

8－31

8－33

2面かわらけ溜り

10－6

10－9

10－15

2面覆土

15－1

土壙5

15－2

15－5

2面覆土

19－5

19－6

19－7

19－10

19－13

19－14

19－19

19－20

19－21

3面覆土

出土遺物（1）

PL.20

19－24

19－35

19－41

19－42

19－54

19－57

19－59

20－1

20－2

20－10

20－13

20－14

20－11

20－16

20－12

20－27

20－20

20－39

3面覆土

出土遺物（2）

わかみやおおじしゅうへん

若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

雪ノ下一丁目200番３地点

例　言

1．本編は、若宮大路周辺遺跡群内の神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目200番3ほか地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2．発掘調査は、平成13年2月19日より同年4月27日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3．調査に当たっては以下のごとく体制を編成した。
　担　当　者　宗臺秀明(立教大学講師)
　調　査　員　汐見一夫(鎌倉考古学研究所)、土屋浩美・松山敬一朗(東国歴史考古学研究所)
　調査協力者　牛嶋道夫、宮崎　明、照井三喜、町田義一(以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター)
4．本書作成に当たっては、遺構図の合成・トレースを宗臺秀明が、出土遺物の実測・トレースを宗臺富貴子(東国歴史考古学研究所)、田畑衣理(鎌倉考古学研究所)、鈴木弘太と鈴木絵美(鶴見大学学生)が行ったうえ、遺構関係を宗臺秀明が、出土遺物関係を宗臺富貴子が執筆し、それぞれを宗臺秀明が編集した。なお、砥石と硯については汐見一夫の下原稿を基に報告している。
5．出土遺物の詳細については、本文とともに本編後段の遺物観察表を参照されたい。
6．本編に使用した写真うち、遺構関係を汐見と土屋が、遺物を宗臺秀明が撮影した。
7．本編の遺構と遺物の挿図の縮尺は、次の通りである。
　遺構全測図：1/120および1/60、個別遺構図：1/60、遺物実測図：1/3
　なお、各挿図には縮尺を表示している。
8．発掘調査に際しては、建築主と調査地点近隣の方々の御協力を得た。あらためて御礼申し上げます。

目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境…… 207
第２章　調査の経緯と成果と概要…… 209
　第1節　調査の経緯 …… 209
　第2節　成果の概要 …… 211
第３章　発見された遺構と遺物…… 213
　第1節　調査地内基本土層層序 …… 213
　第2節　第6面 …… 213
　第3節　第5面 …… 214
　第4節　第4面 …… 219
　第5節　第3面 …… 223
　第6節　第2面 …… 246
　第7節　第1面 …… 249
第４章　まとめ…… 254

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺地図…… 208
図２　調査区と測量方眼設定図…… 210
図３　第6･5面全測図と土層図 …… 212
図４　第５面道路下出土遺物…… 214
図５　第５面溝16b 出土遺物 …… 214
図６　第５面溝16a 出土遺物 …… 214
図７　第５面板壁建物出土遺物…… 215
図８　第5面方形土壙 …… 216
図９　第５面方形土壙出土遺物(1) …… 217
図10　第５面方形土壙出土遺物(2) …… 218
図11　第５面その他の遺構出土遺物…… 219
図12　第4面全測図と土層図 …… 219
図13　第４面道路下出土遺物…… 220
図14　第４面溝18出土遺物 …… 220
図15　第４面溝９b 出土遺物 …… 221
図16　第４面溝９a・b 出土遺物 …… 221
図17　第４面溝６出土遺物…… 222
図18　第４面下出土遺物…… 223
図19　第3A ～ C 面全測図 …… 224
図20　第3A 面全測図と土層図 …… 225
図21　第３A 面道路下出土遺物…… 226
図22　第３A 面溝７b 出土遺物(1) …… 227
図23　第３A 面溝７b 出土遺物(2) …… 228
図24　第３A 面溝７a 出土遺物(1) …… 229
図25　第３A 面溝７a 出土遺物(2) …… 230
図26　第3B 面全測図と土層図 …… 231
図27　第３B 面溝４b 出土遺物 …… 233
図28　第３B 面溝４a 出土遺物(1) …… 234
図29　第３B 面溝４a 出土遺物(2) …… 235
図30　第３B 面溝４出土遺物…… 236
図31　第３B 面溝５出土遺物…… 236
図32　第3C 面全測図と土層図 …… 237
図33　第3C 面道路下出土遺物 …… 238
図34　第３C 面溝11a 出土遺物 …… 239
図35　第３C 面溝12出土遺物 …… 239
図36　第３C 面溝３出土遺物…… 240
図37　第３C 面溝２出土遺物(1) …… 241
図38　第３C 面溝２出土遺物(2) …… 242
図39　第３C 面溝２出土遺物(3) …… 243
図40　第３C 面下出土遺物…… 245
図41　第２面全測図…… 246
図42　第２面遺構出土遺物…… 247
図43　第２面下出土遺物…… 248
図44　第１面全測図…… 249
図45　第１面遺構出土遺物…… 250
図46　第１面下出土遺物…… 250

図47　第１面上出土遺物…… 251
図48　表採遺物(1) …… 251
図49　表採遺物(2) …… 252

表　目　次

表１　遺物観察表……256 ～ 266

図　版　目　次

図版１　図版1　a. Ｉ区第１・２面全景(西から)　b. 第２面下出土琵琶形とかわらけ
c. 第３面全景(南から)　d.. 溝２(西から)　e. 溝2近景(南西から) …… 267
f. 溝２近景(南から)
図版２　a. 溝２近景(南から)　b. 溝３(北から)　c. 溝４a（西から)　d. 溝４a内出土かわらけ
e. 溝７b（西から)　f. 溝７b内出土かわらけ　g. 溝11（北から) …… 268
図版３　a. 第４面道路(南から)　b. 溝15･16（北から)　c. 溝９b（西から)
d. 溝９b（南から)　e. 方形土壙内出土烏帽子　f. 第６面道路(西から)
g. 湧水と雨水で水没した第Ｉ区 …… 269
図版４　出土遺物：かわらけ、土製品、火鉢、土鍋…… 270
図版５　出土遺物：舶載磁器、国産陶器、石製品、金属製品、漆器…… 271
図版６　出土遺物：木製品…… 272
図版７　出土遺物：木製品…… 273
図版８　出土遺物：木製品…… 274

第１章　遺跡の位置と歴史的環境（図１・２）

沖積低地の北端に位置する鶴岡八幡宮から南方の由比ガ浜に至る県道が、若宮大路と呼ばれる。現在、鶴岡八幡宮社頭の若宮大路の東に「北条小町邸跡」と「宇津宮幕府跡」が、若宮大路の西に「北条時房・顕時邸跡」が遺跡地として指定され、これらを除く若宮大路の東西に広がる一帯が「若宮大路周辺遺跡群」とされている。「若宮大路周辺遺跡群」は、若宮大路東方の滑川まで、若宮大路西方の今小路までを東西の限界とし、南方は下の下馬がある県道134号までを指している。この地域の地勢は、北から南方に向けて傾斜する大勢の中で、若宮大路の西方に北西から南東へと流れ下る扇ヶ谷川の流域低地が、さらに南西から下の下馬の南方へ向けた地帯に砂丘微高地が形成されている。そのため、若宮大路周辺遺跡群の南方部が微凹地として低湿地化していたと考えられている。今回の調査地点は、こうした若宮大路周辺遺跡群の北西部に位置し、若宮大路と扇ヶ谷川の中間地にある。

これまでに、若宮大路周辺遺跡群内の調査は20地点以上を数え、報告書も20地点に及んでいる。各調査地点では、中世鎌倉、少なくとも13世紀前半以降の鎌倉枢軸地域の中心軸であった若宮大路の側溝とその東西に広がる生活空間が少しづつ確認されている。こうした調査成果をもとに、中世鎌倉の街割や若宮大路の規模についての復元が大きく進んだ（馬渕1987、大三輪1989）。その結果、若宮大路の幅員は33.6ｍの11丈で、その東西に広がる屋敷地も11丈を単位とするものであったろうとする見解が導き出され、それらの多くは若宮大路を中心軸にした方形区画と想定されている。

発見されている若宮大路、横大路、小町大路や今大路の側溝は、現在の鎌倉の町並みを支える基本道路に沿って発見されている。それぞれの側溝は現在の道路に面した敷地内に位置し、側溝を含めたかつての諸大路は現在の道路より広かったことがうなづける。こうした大路の施設方位やその規模を現在の鎌倉市街図や地形図に重ね合わせることで、上記のような中世鎌倉の街割の解釈が生まれている。また、その底流には京都などの律令制都市における碁盤の目状方形区画町並みが下敷きにある。

しかし、これまでに発見されている若宮大路と交わる東西道路や他の小路側溝を考慮に入れるならば、街割の区画はかなり歪んだものである。若宮大路に接した東西の地域において、若宮大路の東に面する地域が、若宮大路に直交する地割を持つ一方、若宮大路の西に面する地域の東西道路は若宮大路に直交せず、若宮大路と86°の角度で交わる横大路に平行な地割を示すように、若宮大路の東西で地割に相違があったと考えられている（宗臺・宗臺1997）。

すなわち、13世紀前半までのの若宮大路周辺における地割は、治承四年に、古代以来の義朝の館前から荏柄天神へ至る東西の道を踏襲しながら、その全面に広がる低湿地帯に横大路に直行・平行した地割を行うが、養和二年の若宮大路最初期の道が横大路を基本とする地割りと4°ずれて通される。さらにその後、嘉禄元年の御所移転に伴う「丈尺を打つ」ことによって、若宮大路東側の地割は若宮大路に直行することになった。しかし、嘉禄元年以降も幕府の移転がみられなかった若宮大路の西側は依然として横大路を屋敷地分割の軸線としていた註）。

このような若宮大路周辺一帯の街路の中で、調査地点の北方100ｍほどに若宮大路社頭の横大路の延長上に位置する窟堂を経て義朝の館に至る東西道が位置し、調査地点の南方60ｍの若宮大路周辺遺跡群・小町一丁目198番６地点では若宮大路より東へ若干傾いた13世紀後半の箱形の木組み溝と土塁が発見されている。この木組み溝と土塁の西方に掘立柱建物建物が発見されていることから、溝と土塁は一定の地割を示していることはたしかであろうと思われる。今回の調査地点は、これらの窟堂前の道路と小町一丁目198番6地点発見の遺構に示された街の地割方位と何らかの関係をもった遺構群の発見が

想定された。

註

中世都市鎌倉における地割は、鶴岡八幡宮、御所、武家屋敷などが集中する中心域にあって、嘉禄元年以降、溝や道路の地割遺構は大路に対して直交する指向性を持つが、いかんせん、狭い鎌倉の沖積地では、それを貫徹することは困難、もしくは不可能であり、丘陵に沿って走る小町大路や今小路、大町大路と若宮大路は平行直交関係を保てない。各大路に面する地域では、大路になるべく直交する方位の地割を行うものの、大路と大路の間では、両大路から派生した地割軸線のつじつま

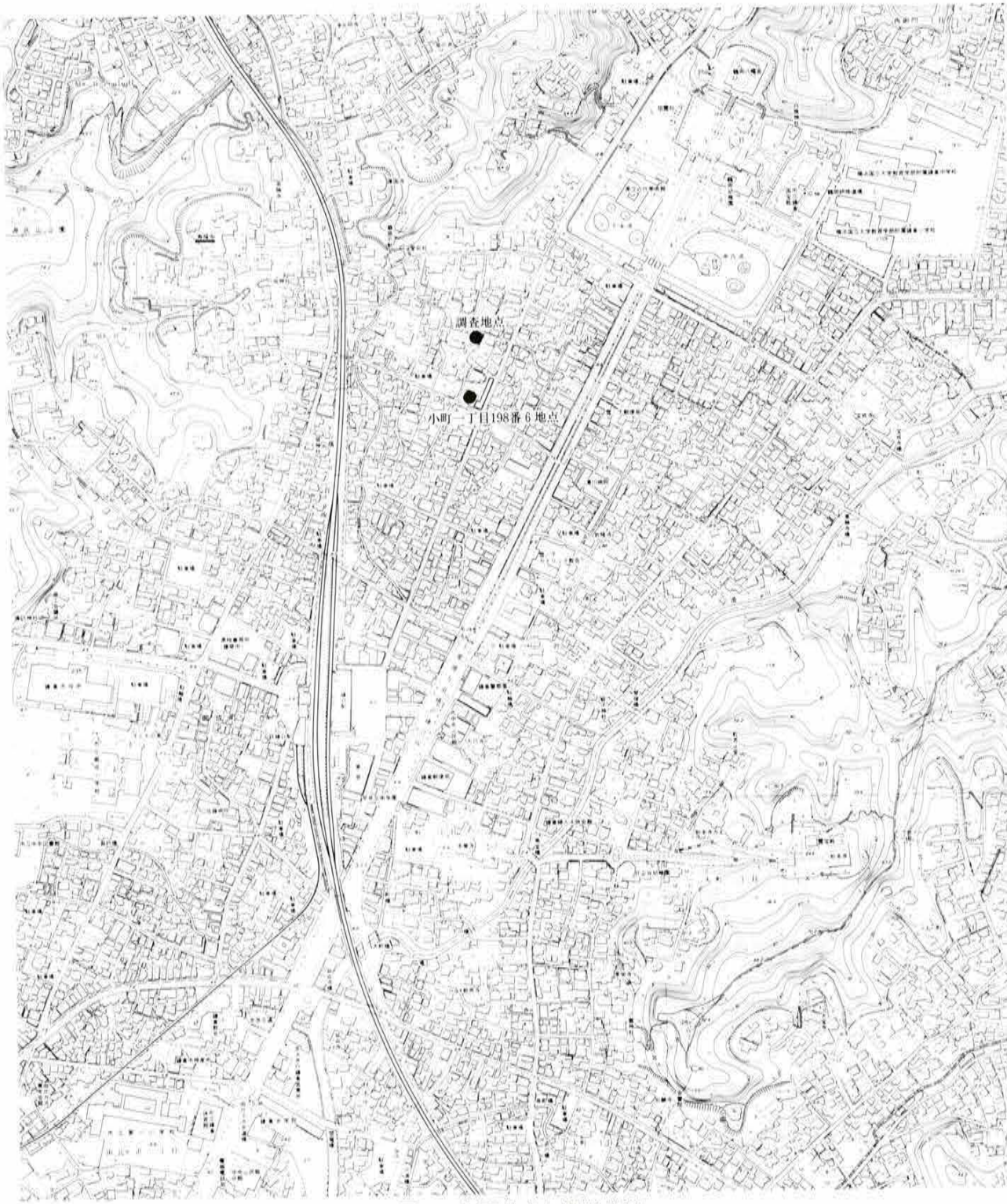


図1　調査地点と周辺地図

合わせがなされたと考えられる。こうした大路と大路との軸線方位の違いから、中世鎌倉では、東西に抜ける道が「辻子」と呼ばれる「通り抜け道」であり、「街通り道」でなかったと指摘されている(山村1997)。

参考文献

赤星直忠　1959「縄文時代の鎌倉・資料篇」『鎌倉市史・考古編』吉川弘文館，33～50頁。本項で取り挙げた内容の初出は以下の通り。「鎌倉の考古学的研究(一)」『鎌倉』第１巻第２号，1936「荏柄天神社前出土土器」『鎌倉』第２巻第５号，

秋山哲雄　1996「御所と北条氏邸」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12』（第２分冊），282～286頁，

岡陽一郎　1996「北条小町邸跡(泰時・時頼邸)（No.282）　雪ノ下一丁目377番7地点，第三章第3節　人名木簡について」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12』（第２分冊），254～260頁，

河野眞知郎他　1990『今小路西遺跡　御成小学校内』今小路西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会，

菊川英政　1997「古代鎌倉の様相—奈良・平安期における鎌倉郷中心域の変化—」『考古論叢　神奈河』第6集，35～52頁，

菊川英政他　2000「若宮大路周辺遺跡群(No. 242)小町一丁目198番６」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16』第１分冊、81～208頁，

宗臺秀明　1996「中世都市と排水施設」『日本考古学』第3号、101～110頁，

宗臺・宗臺　1997『北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目272番地点』北条時房・顕時邸跡発掘調査団，

貫　達人　1971「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第８号、１～24頁，

馬渕和雄　1985『北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目371番－１地点発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会，

田代郁夫　1990「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目265番３」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』91～128頁，

第２章　調査の経緯と成果の概要

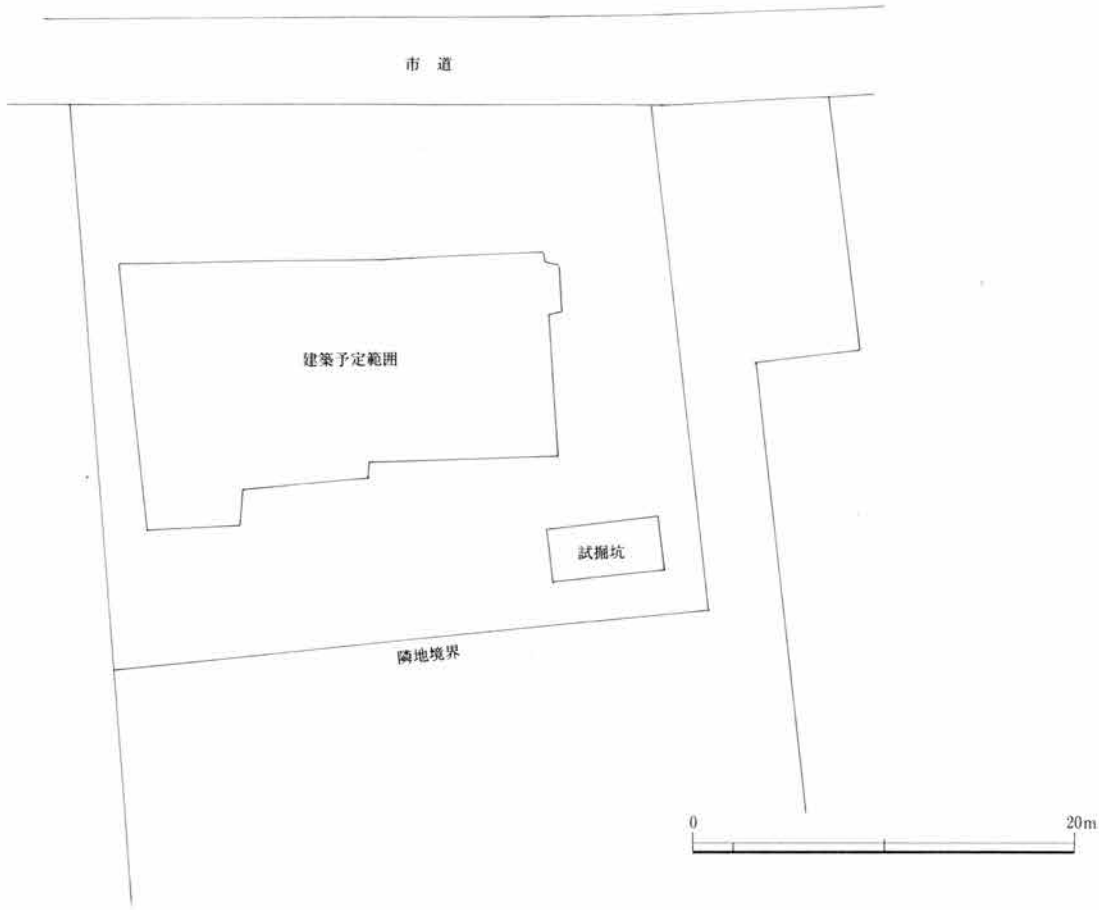
第１節　調査の経緯(図３、図版１)

調査は、鎌倉市雪ノ下一丁目200番３ほか地点における鋼管杭基礎による個人住宅新築の申請があり、深さ5.5ｍ杭の打ち込み前に建築申請範囲の発掘調査が必要となり、国庫補助事業として、平成13年２月19日より、同年４月27日まで行った。調査に当たっては、調査時に発生する残土を場内にて処理する方法が用いられたため、調査範囲を二分割して、敷地の西半分を第Ⅰ区、東半分を第Ⅱ区として行なった。

調査地は扇ヶ谷川の流域低地に当たるために、調査作業を妨げる地下水の湧水が危惧された。平成13年10月に行われた試掘作業においても現地表面下60cmから湧水が見られ、とうてい中世地山層まで達することができず、180cm下方までの作業しか行えていなかった。本調査においても多量の湧水を想定でき、調査進行に伴って、調査区内四周に排水溝と組み上げポンプ施設の設定が必要と考えられ、おのずと調査面積を狭くせざるを得ない状況であった。

なお、発掘調査実施に当たって、遺構測量のため、調査区内に２ｍ単位の方眼を組んだ。方眼の各軸線には、調査地の北東隅を起点とし、南北軸線にアラビア数字を、東西軸線にアルファベットを付した。また、測量方眼の南北軸線は、磁北に対して30°東に傾き、そのＢ－３交点は国土座標値：X＝－75.407.000、Y＝－25.224.000である。

調査は、第Ⅰ区を３月27日に終え、４月２日より第Ⅱ区の調査を開始した。いずれの調査区においても、現地表土を重機にて掘り上げた後、以下を手掘りにて行った。調査進行に伴って、やはり湧水が激しくみられ、生活面の下方掘り下げとともに、随時調査区内四周に排水溝を設置して、調査区内での



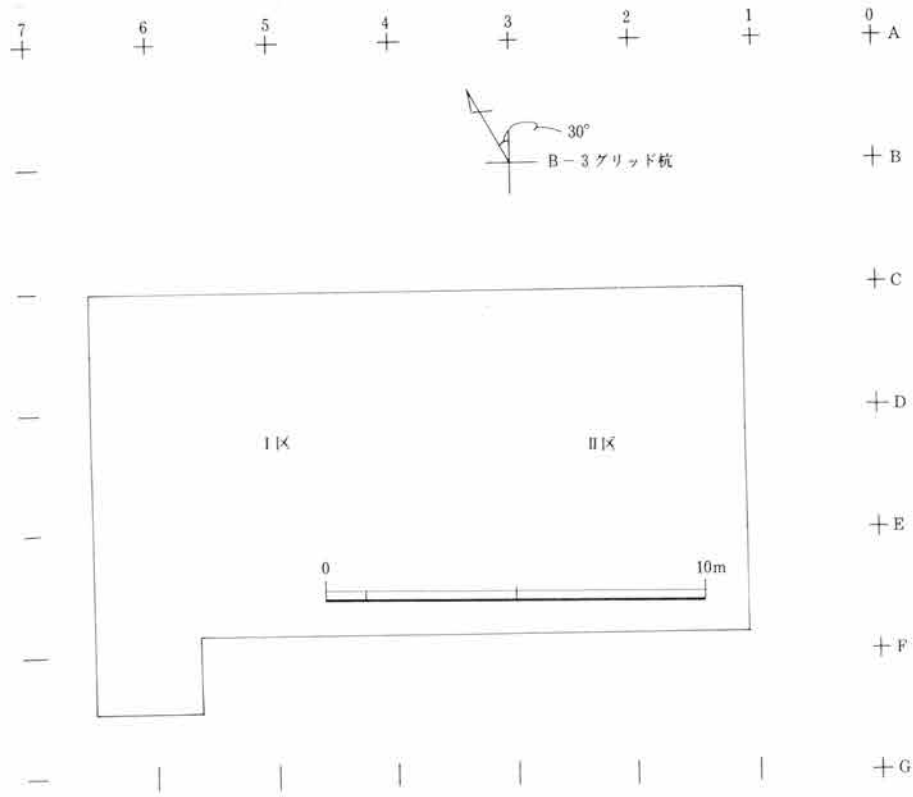


図２　調査区と測量方眼設定図

作業の便を図ったが、やはり地山層までの調査を実行することはかなわず、現地表下２ｍ40㎝までの調査で５枚の生活面を確認したにとどまる。本文中に掲げた調査区の土層堆積図は、排水溝外側にて、測図したため、平面図とは若干の位置的ずれを示していることを御断りしておく。

第２節　成果の概要

ほぼ２ヶ月をかけて行った現地発掘調査によって、次のような成果が得られた。発掘調査に先立って行われた試掘調査では、泥岩による整地層(地業層)で版築された面が４枚発見され、それらが生活面であろうとされた。平成13年２月に始まった発掘調査においても、当初はそうした生活面から掘り込まれた住居跡などが発見されるものと想定していたが、第Ⅰ区調査では上層の第１面から第２面にかけては地業層上面から掘り込まれた柱穴を発見したが、第3面以下では、それらと全く異なる様相を示した。第３面以下では、泥岩版築層が次第に薄くなる地点に頻繁に作り替えられた溝が縦横に掘り込まれており、調査区内のほとんどが溝で占められる錯綜した状況を呈した。第Ⅱ区の調査が始まった４月になると、第Ⅰ区内の錯綜した遺構配置をようやく理解することが出来た。第Ⅱ区からは、泥岩版築による路面とその両脇に溝を確認し、これによって第Ⅰ区に縦横に掘り込まれた溝は第Ⅱ区内の道路の西側側溝と、それに交わる溝であったことが理解できた。これにもとづいて、調査区全域から発見された遺構を総括すると以下のようになる。

調査できた最下層は、第Ⅱ区の第５面以下に３枚の版築層からなる道路面を確認している。路面の更新である３枚の版築層に対応する生活面として第Ⅰ区で第６面を確認しているが、３枚の道路面が全て第６面に帰属するものか分明でない。また、第Ⅰ区においても第６面の堆積層は一部でのみ確認されただけで、その広がりは不明である。

第５面以降については、第Ⅰ・第Ⅱ区の双方において調査できた。その結果、第５面から第３面までは、東西に側溝を備えた南北道路に交わる東西方向の路地とその側溝が調査区内に展開し、南北道路と東西路地に囲まれた空間に建物などの遺構が配置されていた。しかしながら、道路が頻繁に嵩上げさる都度、側溝も掘り直されて、調査区内は掘り直された側溝の痕跡によって、本来の生活面を作っていた土層のほとんどが残されていない状況であった。第５面において、かろうじて南北道路の西側に板壁建物１棟と方形土壙１基を認めることができた。第４面と第３面では、南北道路とその側溝、東西路地とその側溝を認めたのみであった。

第２面と最上層文化層である第１面になると、調査区全域が破砕泥岩粒を交えた粘質土によって更新され、道路や路地、それに伴っていた側溝も失われて、柱穴が散在する状況を示す。柱穴には礎石を用いた例も見られたが、明瞭な柱穴配置からの建物を復元できなかった。

出土遺物では、豊富な湧水に守られて有機質の木製品が多量に出土した。なかには、内側に花押らしき墨書を認めることが出来た烏帽子も出土したが、水洗い作業中の不注意から粉々に崩壊してしまった。

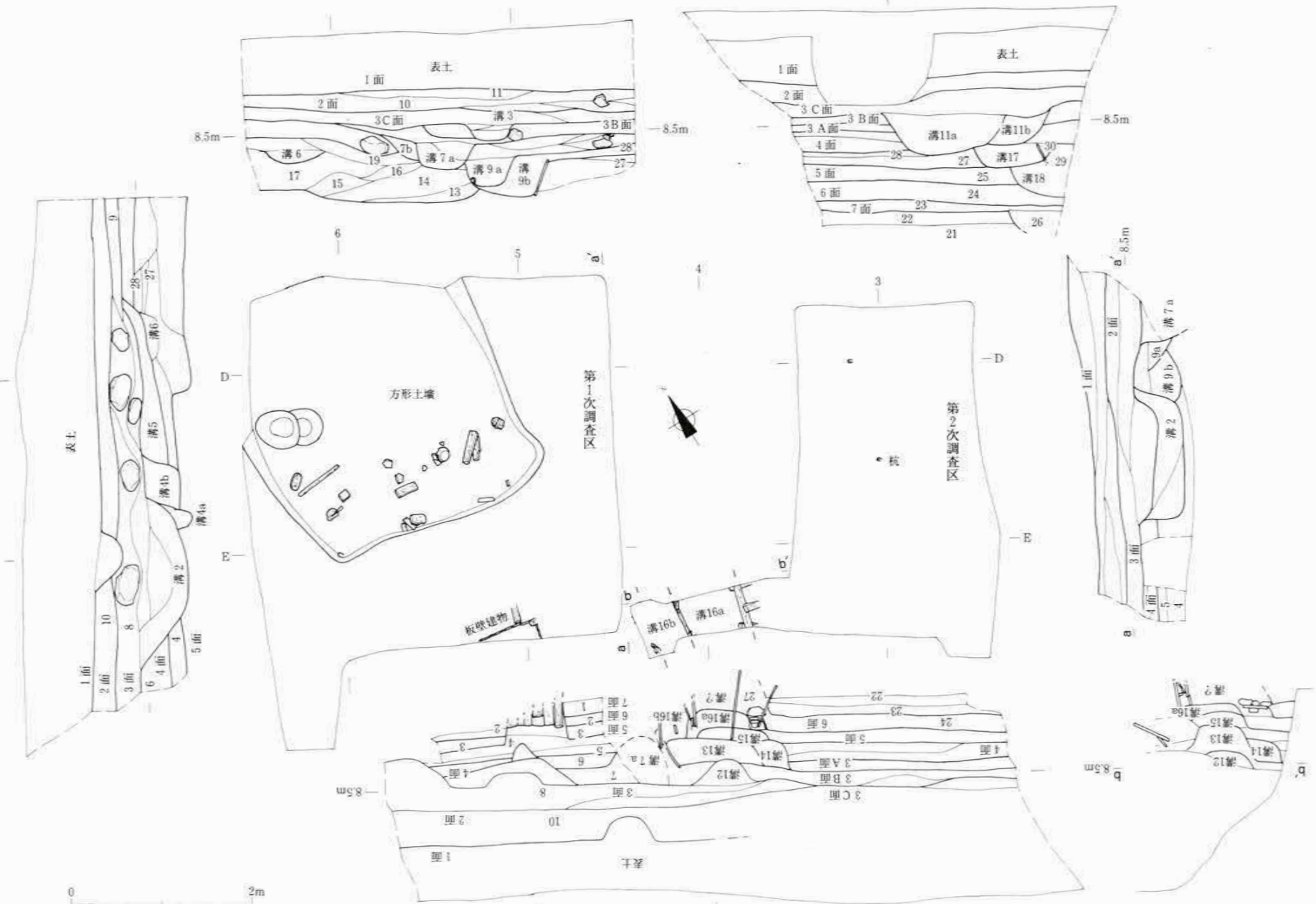


図3　第6・5面全測図と土層図

第３章　発見された遺構と遺物

以下に、今回の調査によって発見された遺構と遺物を説明してゆく。記述に当たっては、現地での発掘手順とは逆に、下層より上層に向かって順次時間を下りながら行うこととする。

第１節　調査地内基本土層層序(図３)

遺構と遺物の説明に先立って、調査地における基本的土層堆積層序を記す。調査では、地山層までの発掘を行えなかったために、ここでの土層説明は、おのずと生活面構成土層の説明となる。大型の泥岩塊を下層に敷き、その上を破砕泥岩で版築する第Ⅱ区のほとんどを占める南北道路を除いた生活面の堆積は、第Ⅰ区にのみ認められる。他方、第Ⅰ区でも生活面を作りだした土層は、調査区の南西隅にのみ本来の姿をとどめ、他は遺構覆土が残されている状況を呈している。また、生活面から掘り込まれた遺構や道路面は第５面までを確認でき、より下層については、第６面を認めつつも遺構との関連は不明であった。

土層説明

第１層．第６面の下方に堆積する有機質腐食土。暗橙色を呈する水分豊富な土層。
第２層．灰青色砂質凝灰岩破砕地業層。第６面を構成する。
第３層．灰黒色粘質土。第５面を構成する。
第４層．黒色強粘質土。絞まりが強い。
第５層．砂質凝灰岩破砕地業層。第４面を構成する。
第６層．大型泥岩塊(20cm前後)版築層。第３面前期を構成する。
第７層．黒色砂質土。木器を多く混入する。第３面後期を構成する。
第８層．暗黄色砂質土。30cm前後の泥岩塊を交える。第２面を構成する。
第９層．破砕泥岩版築層。第２面を構成する。
第10層．暗黄褐色土。第１面を構成する。
第11層．破砕泥岩版築層。調査区の北西部で第10層上面に堆積し、やはり第１面を構成する。

第２節　第６面(図３)

面としての広がりは、第５面までを確認できたが、第Ⅰ・Ⅱ区において、部分的により下方の面構成土と道路面が確認されている。しかし、第５面南北方向道路面より下方に認められた３枚の路面のうち、最上層の道路面が第６面に帰属するのは確実であると思われるが、より下層の路面と第６面との帰属関係が不明である。

第６面の生活面は調査区の土層観察にて確認できたのみであるため、面からの遺構の掘り込みを認めていない。他方、道路面からは路面の西側に側溝の落ち込みを確認できている。また、より下方の路面からは、東側の側溝の落ち込みを調査区の北壁での土層観察で確認しているものの、生活面への帰属は不明である。いずれにしても、これらの側溝の存在から、第６面の道路と、より下方の道路が南北方向にあることを確認でき、おそらくは両路面ともに路面の東西に側溝を有していたと考えられる。

以下に、第６面以下の路面の構成土と側溝の覆土の説明を記す。

第21層．泥岩塊地層業。第６面下路面構成土。
第22層．暗赤褐色土。路面上堆積土。
第23層．泥岩礫地業層。第６面路面構成土。
第26層．砂粒を交える黒色土。水分豊富。
第22層．上面から掘り込まれた南北道路東側側溝覆土。
第27層．20cm大泥岩塊を混入させる黒色砂質土。水分豊富。第６面南北道路西側側溝覆土。

第３節　第５面（図３）

調査区の東方に南北道路、調査区の西方に方形土壙と板壁建物が発見された。

南北道路

第Ⅱ区いっぱいに道路面が発見された。路面の西側に南北方向の側溝が発見されたことから、道路も南北に延伸すると考えられる。路面は、破砕された泥岩の版築で作られる。この路面からは、２本の杭が発見された。杭は、その頭を路面からほんのわずかに出すのみであった。２本のみであるために、列をなしていたのか不明であるが、道路の延伸する方位をなぞるように位置している。本来は路盤中に埋もれていたもので、版築地業を行う際に作業の区切りの土留めを一時的に担っていたものと思われる。

側溝は、西側にのみ確認でき、東側には発見されていないため、幅員は不明である。

図４　第５面道路下出土遺物

図４は第５面道路下出土遺物。図４－１は常滑片口鉢Ⅰ類。口縁部は丸く収まり、口縁部下は大きくへこむ。遺存部には使用による摩滅痕は見られない。

南北道路側溝

溝16

南北道路の西側側溝である。第Ⅰ区と第Ⅱ区をつなぐトレンチ内に発見されているため、非常に小範囲の確認であるが、一度作り直されている。溝の東肩は泥岩礫を敷いた上に、前後から杭で挟む込むようにして固定された角材で護岸される。他方、溝の西肩は、板材の内倒れを杭で防ぐ単純な構造のものが、新旧２列発見された。溝開鑿当時のものがより西方に位置し、改修後のものが内側に溝の幅を狭めて作られている。開鑿当初の溝16ｂが幅106cm、改修後の溝16aが幅60cmを測る。深さは、いずれも25cmを測る。溝の覆土は、貝殻を交えた黒色弱粘

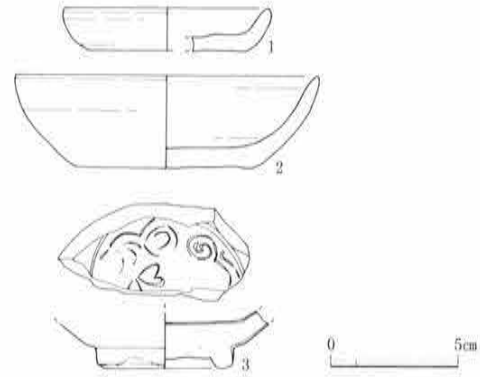


図５　第５面溝16b出土遺物

図６　第５面溝16a出土遺物

質土で、水分の豊富な軟弱土である。

図５は溝16ｂ出土遺物。図５－１～２はかわらけ。１は背低気味で、内底面が広く、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がるが、口縁部付近より外反する。２は背高で、器壁は薄く、内弯しながら立ち上がるが、体部外面上位付近より口唇部を尖らせながら外反する。側面観碗型を呈する。

３は青磁碗。内底面にはスタンプによる文様が施文される。畳付端部から底裏にかけては露胎で、工具による削り出し痕が明瞭に残る。遺存部には使用によるキズは見られない。

図６－１は溝16a 出土のかわらけ。口径はやや小さめで、器壁は大きく開きながら立ち上がる。

板壁建物

第Ⅱ区の南壁際に発見された遺構。全形のうち、その北東部分のみが調査区内に発見されたものである。第５面からほぼ垂直に掘り込まれた遺構内の縁に、幅８cmから12cmの板材が縦に並び立てられ、北西隅の内側に一辺５cmの角材が差し入れられている。一見して、方形の井戸枠の一部が発見されたのではないかと想定したが、ボーリング棒による探査によれば、遺構内の外縁に配されている板材が南西へと１m以上継続して延長し、また掘り込み面から80cm程で底面に至る感触を得た。こうした探査結果から、井戸ではないとの確信を得た。かといって、ここで表題とした「板壁建物」とも断言しがたい。

確認できた遺構内覆土は、水分を豊富に含んだ灰色の粘土である。

図７は板壁建物出土遺物。７－１は13世紀中頃の常滑山茶碗。高台はだいぶ退化し、雑に貼り付けられる。遺存部に使用による摩滅痕は見られない。

２は青磁鎬蓮弁文碗。施文は雑で、鎬も不明瞭である。体部内面に使用によるキズが残る。

３は木製織具。手押木と思われる。上側面には使用の際の指頭押圧痕が残る。４～11は箸。最長は23.7cm、最小は20.8cmを測り、おおむね21～22cmを測る製品が多く見られる。

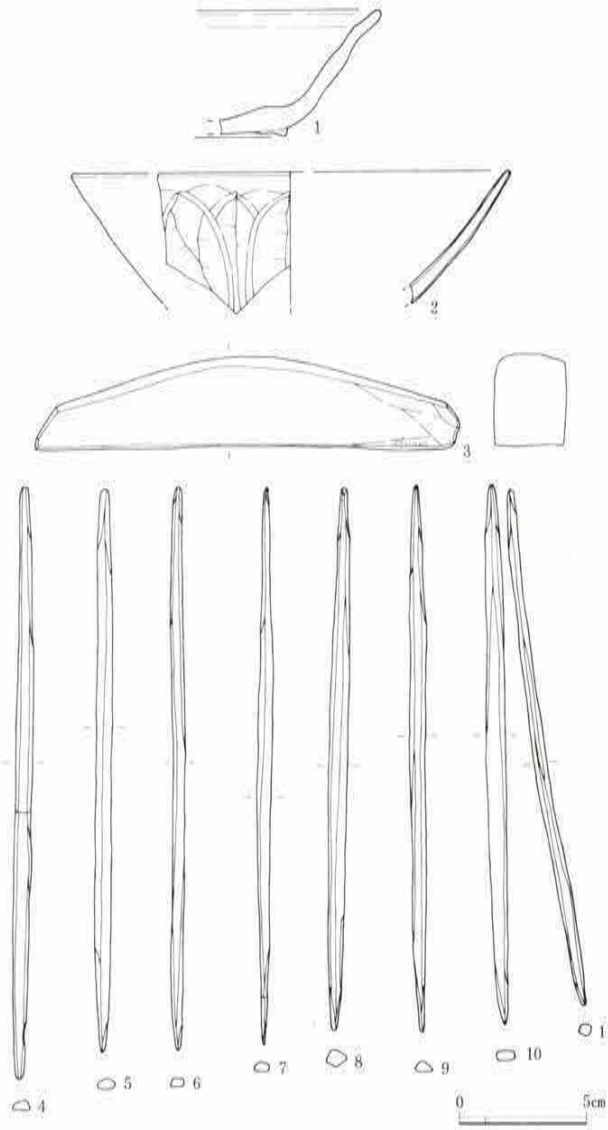


図７　第５面板壁建物出土遺物

方形土壙

第Ⅰ区の北西に位置する。掘り込み肩と調査区壁面での土層観察より、東西3.0m、南北3.14m以上を測る矩形の落ち込みである。南北の軸線は、道路側溝と同様な方位を示している。道路遺構に規制された地割配置を想定される遺構である。

調査区西壁の土層からは、深さ11cmを測る浅い落ち込みである。掘り込み肩下の南辺に杭例が発見された。こうした状況から、中世鎌倉の市街地でたびたび発見されているいわゆる「板壁建物」に類する建物の可能性があるが、判然としない。底面の南方には常滑甕破片の他にかわらけ、片口鉢、下駄破

片の他に、厚さ６㎝前後の板材が散在していた。こらの板材が屋内の壁面を支えた礎板であったかもしれない。掘り込み底面の西辺に共に深さ8㎝のピットが複数残されている。

土壙内覆土は、以下の通りである。

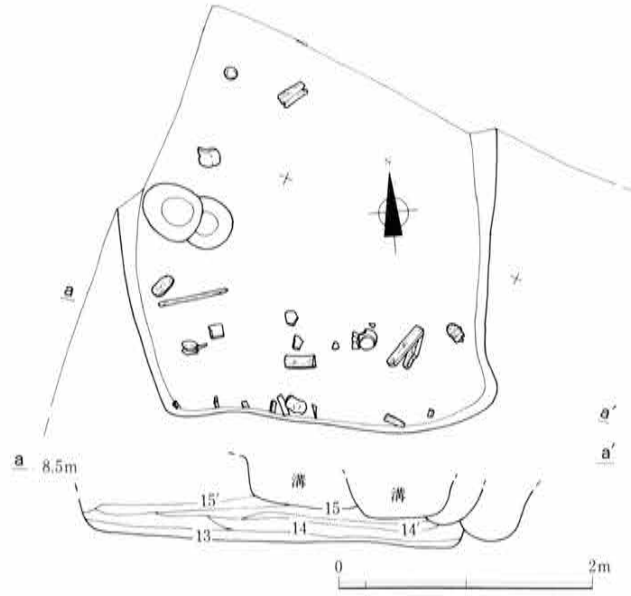
第13層．黒褐色砂質土。

第14層．10㎝大泥岩塊を交えた黒褐色木質腐食土。

第15層．黄灰色粘質土。上面にキサゴ貝殻層堆積。

第16層．暗橙色木質腐食土。

第17層．黒茶色砂質土。



土層注記
13. 黒褐色砂質土
14. 黒茶色木器層。10㎝大泥岩含む。
15. 黄灰色粘質土。上面にキサゴ層。

図８　第５面方形土壙

図９～10は方形土壙出土遺物。図９－１～４はかわらけ。１～２は背低で、内底面が広く、器壁は直立気味に立ち上がる。２は煤が付着する。３は器壁が厚めで、内弯気味に立ち上がり、体部上位付近より口唇部を尖らせながらわずかに外反する。４は背高気味で、器壁が内弯気味に立ち上がり、体部上位付近よりわずかに外反する。煤が付着する。５は浅鉢型火鉢の口縁部片である。体部外面中位より下方は火を受け、器表がはぜる。６は平瓦。凹面は砂目痕とナデ、凸面は砂目痕と木口状工具によるナデで調整される。また、凸凹面、および側面には薄く煤が付着する。

７は白磁口兀皿。施釉はごく薄くなされ、外底面は拭い取られる。体部内面下位から内底面にかけては煤が付着することから灯明皿に使用されたものと思われる。８は瀬戸入子。碗型を呈するものと思われる。遺存部に使用による摩滅痕は見られない。９は13世紀後半頃の常滑山茶碗。高台はかなり退化するが、丁寧に貼り付けられる。使用による摩滅痕は確認できないが、体部外面から底裏にかけての一部は著しく煤が付着することから灯明皿として使用されたものと思われる。10～11は常滑片口鉢Ⅰ類。10の口縁端部には浅い沈線が巡る。ともに体部内面中位から内底面にかけて、使用による摩滅痕が残り、とくに11は体部内面中位より下方から内底面の広い範囲にかけて使用による摩滅痕が残る。12は常滑の甕か壺の肩部付近に残る押印の拓影である。

13は刀子。柄の木部が遺存した状態で出土した。鋒をわずかに欠く。14は環状鉄製品。飾り金具に使用されたものと思われる。断面は長方形を呈する。15～16は銭。15は1068年初鋳の「熙寧元寶」、16は1094年初鋳の「紹聖元寶」である。いずれも背面に文字などは見られない。

17は西彼杵産の滑石鍋加工途上品。体部外面にはノミ状工具による細かい調整痕が明瞭に残る。破損断面に鋸・鑿状工具痕が多く残ることから、鍋破損後の転用途上品と思われる。

18～19は栓状木製品。両者ともに側面は面取り風に調整される。20は円盤状木製品。中心には木釘が遺存する。21～23は杓子状木製品。21は小型で、板目取りにより成形されるが、表面に比べ、裏面は無調整に近く粗い成形。

なお、本遺構からは烏帽子が出土したが、洗浄中の不注意により破断してしまった。後段の写真図版に検出時の写真を掲載した。

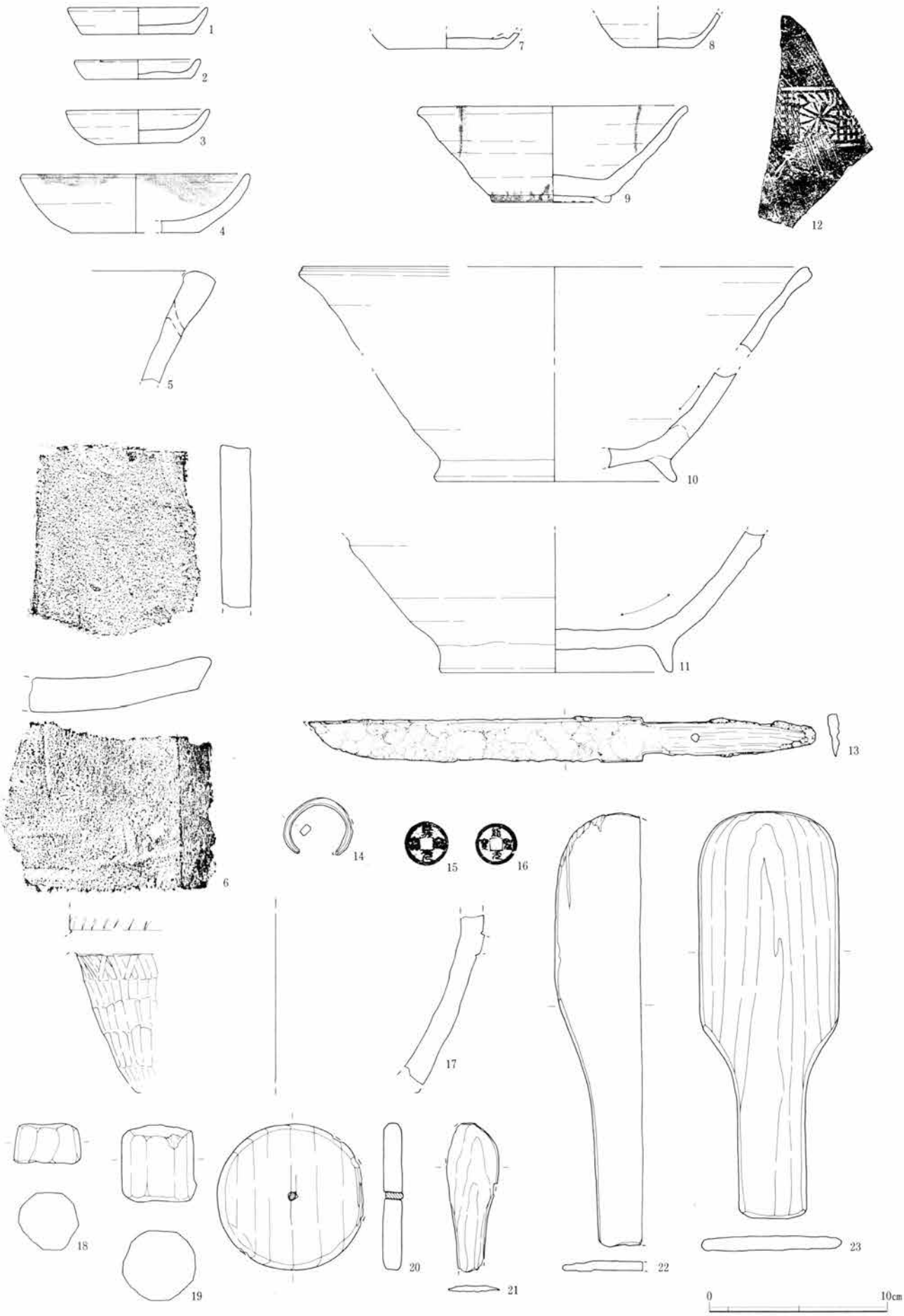


図９　第５面方形土壙出土遺物（１）

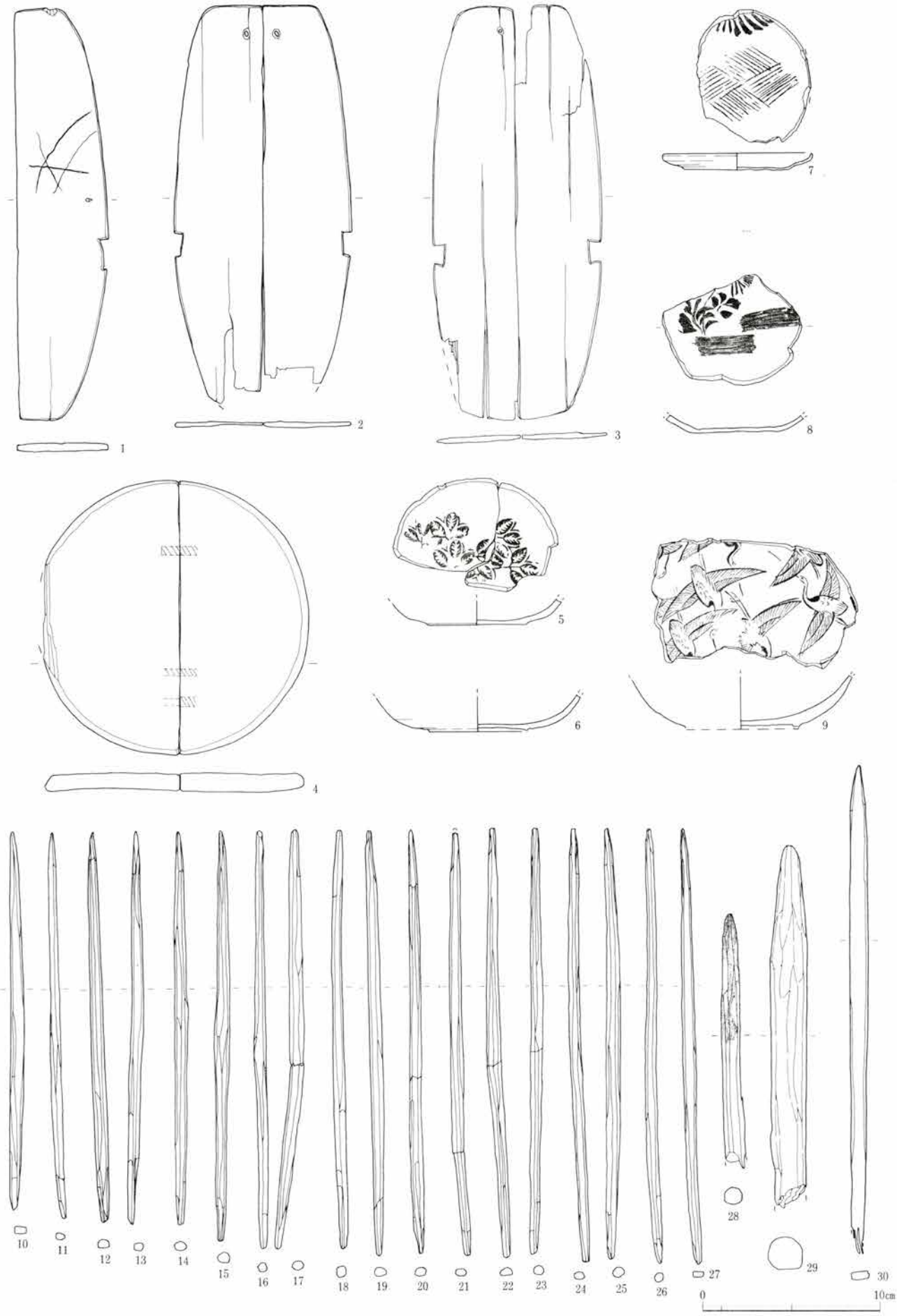


図10　第５面方形土壙出土遺物（２）

第５面その他の遺構出土遺物(図11)

図11－１は木杭。南北道路の西側側溝に敷設された板材を支えるための杭と思われる。

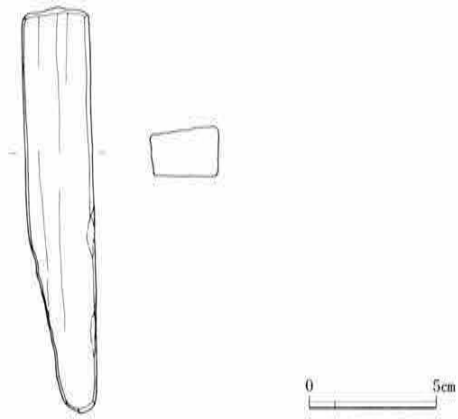
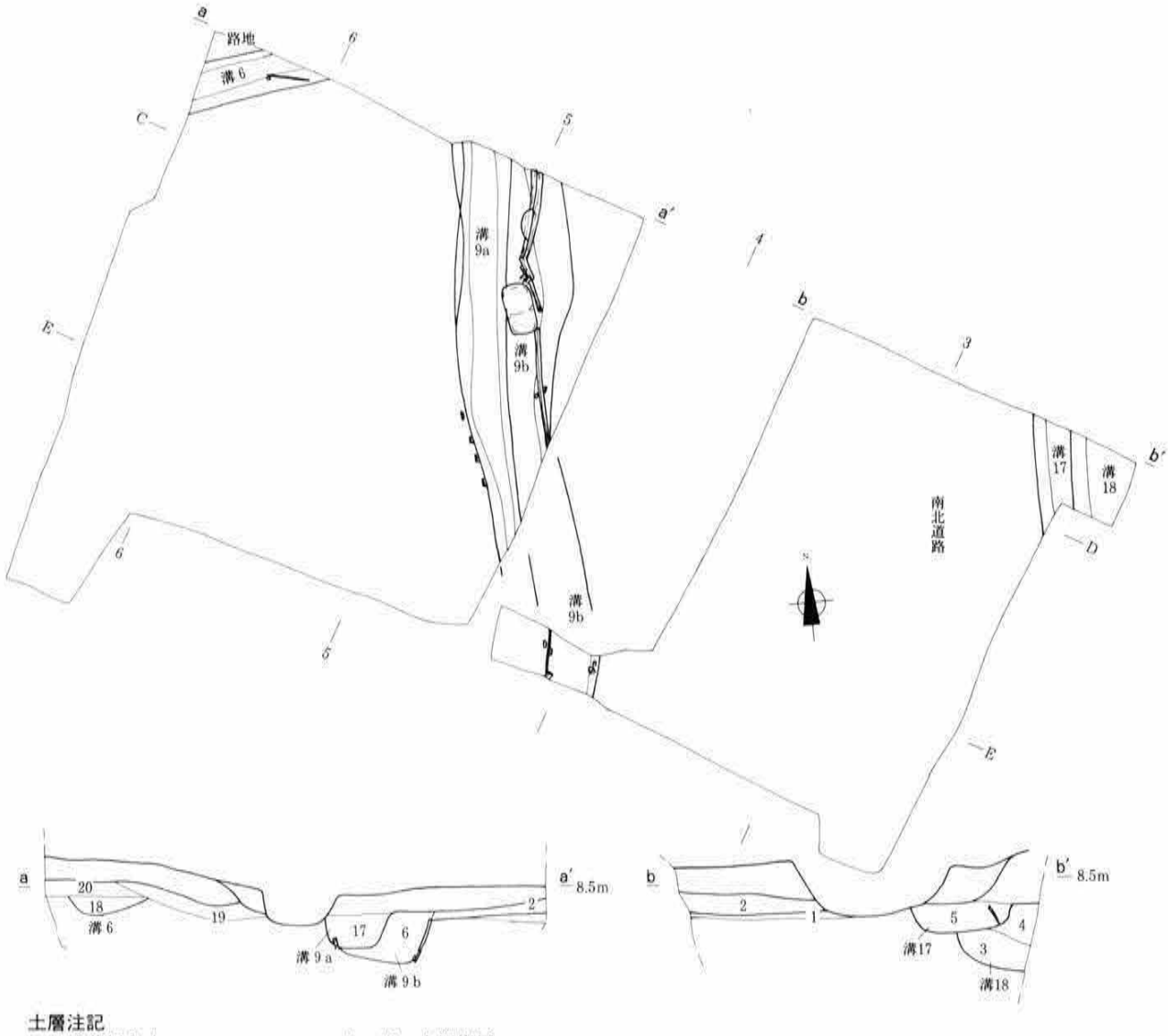


図11　第５面その他の遺構出土遺物

第４節　第４面(図12)

第４面では、第５面と同様の位置に南北道路とその側溝の他に、東西方向の路地とその側溝が発見されている。南北道路では、その側溝が東西の両側に発見され、幅員が明瞭となる。東西路地は、調査区の北西隅にわずかに発見され、その側溝も南側のみ



土層注記
1．暗茶褐色土。
2．泥岩と砂礫の版築地業層。
3．黒褐色土、20cm大泥岩多し。
5．泥岩粒を含む暗茶褐色土。
6．10cm大泥岩層。
7．灰茶色砂質土、木器多し。
18．木器層。
19．20cm大泥岩含む黄褐色粘質土。
20．暗黄灰色砂質土。

0　2m

図12　第４面全測図と土層図

がわずかに確認できたのみであった。この他には、後世の第３面での遺構掘り込みによって文化層が失われてしまい、何ら遺構は遺存していなかった。

南北道路

暗茶褐色土による路面と、破砕泥岩と砂礫を版築した路面が作られる２時期がある。新旧の路面ともに、側溝へ向けて路肩の下がる作りとなっている。東西に発見された側溝のそれぞれに新旧二時期の開鑿がなされる。二時期の側溝は、西側側溝が路面の嵩上げ改修と対応関係を持つが、東側側溝では、溝の改修と路面改修との対応関係は不明である。東西の両側溝は新しい時期に共に西方へ移動し、道路全体が時間経過の中で移動する姿を見せている。他方、新旧の側溝は切り合い部分を持っているために古い時期の道路幅員は、不明であるが、第４面終了時の幅員は、３ｍ80cm弱を測る。

図13は道路下出土遺物。13－１～４はかわらけ。１～２は背低気味で、内底面が広く、器壁は大きく開きながら立ち上がり、口縁部付近よりわずかに外反する。３～４は背高で、器壁は薄く、内弯しながら立ち上がり、口縁部下付近より口唇部を尖らせながら外反し、側面観碗型を呈する。なお、３は中型に分類できよう。

５は青磁鎬蓮弁文碗。鉢の可能性もある。畳付は露胎で底裏も施釉される。見込には使用によるキズが著しく残る。

６は扇骨。厚さ0.5cmほどの４枚の扇骨がしっかりとした要で押さえられている。７は箸、８は箸状木製品である。

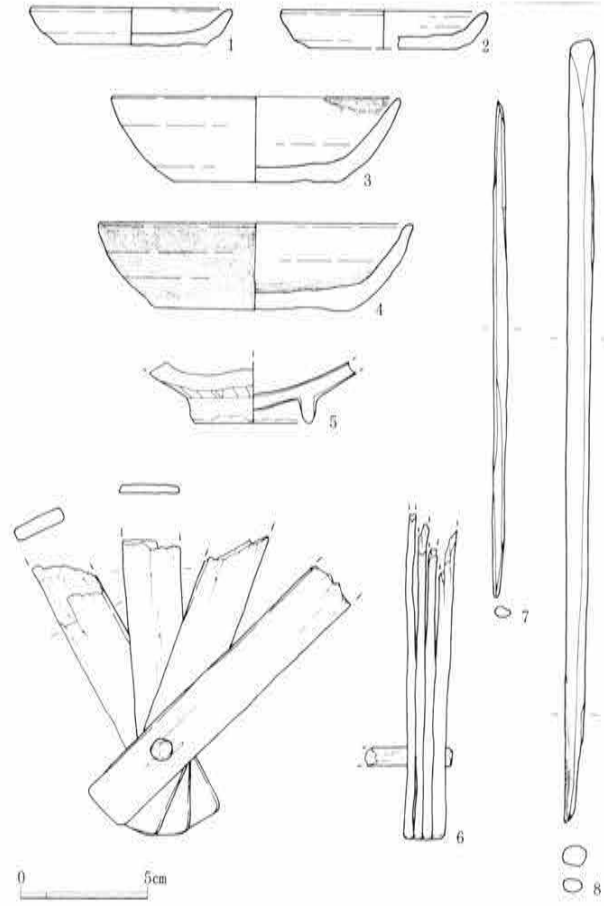


図13　第４面道路下出土遺物

道路側溝

溝18・17

南北道路の東側に設置された側溝である。溝18が古い路面に、溝17が新しく更新された路面にそれぞれ対応しているものと思われるが、確認できない。溝18は深さ45cm前後で、幅員は不明。覆土の下層に砂礫を交えており、水の流下のあったことが解る。調査できた範囲は狭く、流下方向を確認できないが、遺跡を取り巻く地形より南方に向けて水は流れていたものと考えられる。木枠などの痕跡を認めることは出来なかった。

図14－１は溝18出土かわらけ。背高気味で、器壁は薄めで、内弯気味に立ち上がり、体部上位付近よりわずかに外反する。

溝18を埋め立てて、開鑿された溝17は、上幅93cm前後に、深さ23cmを測る。東側下場近くに、壁

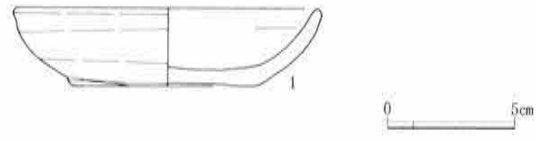


図14　第４面溝18出土遺物

を支える横板の存在が調査区の壁面にわずかに認められた。西側にも同様の横板が存在していたものとすると、溝掘り方内に、62cmの下幅に沿って溝枠が設置されていたことになる。覆土はやはり砂粒を多く交え、水の流下のあったことを想定できる。溝17の東方には溝18を埋め立てた際に、東方に広がる生活面が泥岩塊を用いて作りだされている。

溝９

南北道路の西側に設置された側溝である。新旧二時期にわたって開鑿され、古い時期の溝９ｂと新しい９ａが発見された。溝９ｂは第Ⅰ区から第Ⅱ区のわたって発見された。掘り方の西方を溝９ａに壊されて、明確な溝幅を確認できないが、上幅で90cm前後、下幅が60cm、深さ36cmを測る。下幅東側に幅３cmの杭で内倒れをしないように支えられた最大幅30cmの横板が発見された。杭の間隔は不統一で、Ｄ－５グリッド付近では、横板が大きく内側に倒れ込んでいる。横板には、時に曲物などの底板も転用されており、一時的な補修が試みられていた様子を見ることができる。また、溝の底面には泥岩の切石が敷かれている個所もあり、本来は周到な道路側溝として目論まれたにも係わらず、維持･管理はなおざりであったように考えられる。溝底面の海抜高は、北端で7.8ｍ、南端で7.9ｍと南が高く、周辺の地形とは逆方向の傾斜を示している。

溝内は10cm大の泥岩礫で充填されて、溝９ａへの改作に伴って、道路面が西方へと拡張されている様子が解る。

図15は第４面溝９ｂ出土遺物。15－１～３はかわらけ。１は器壁が厚く、大きく開きながら立ち上がる。２～３は背低気味で、内底面が広く、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がり、３は体部外面上位付近より口縁部を尖らせながら外反する。

４～６は銭。4は1023年初鋳の「天聖元寶」、５は1068年初鋳の「熙寧元寶」、６は1078年初鋳の「元豊通寶」である。いずれも背面に文字などは見られない。

溝９ａは上幅60cm、下幅35cm、深さ27cmを測る。

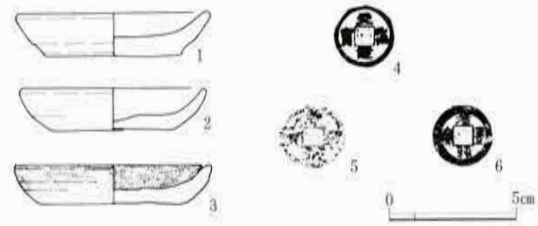


図15　第４面溝９ｂ出土遺物

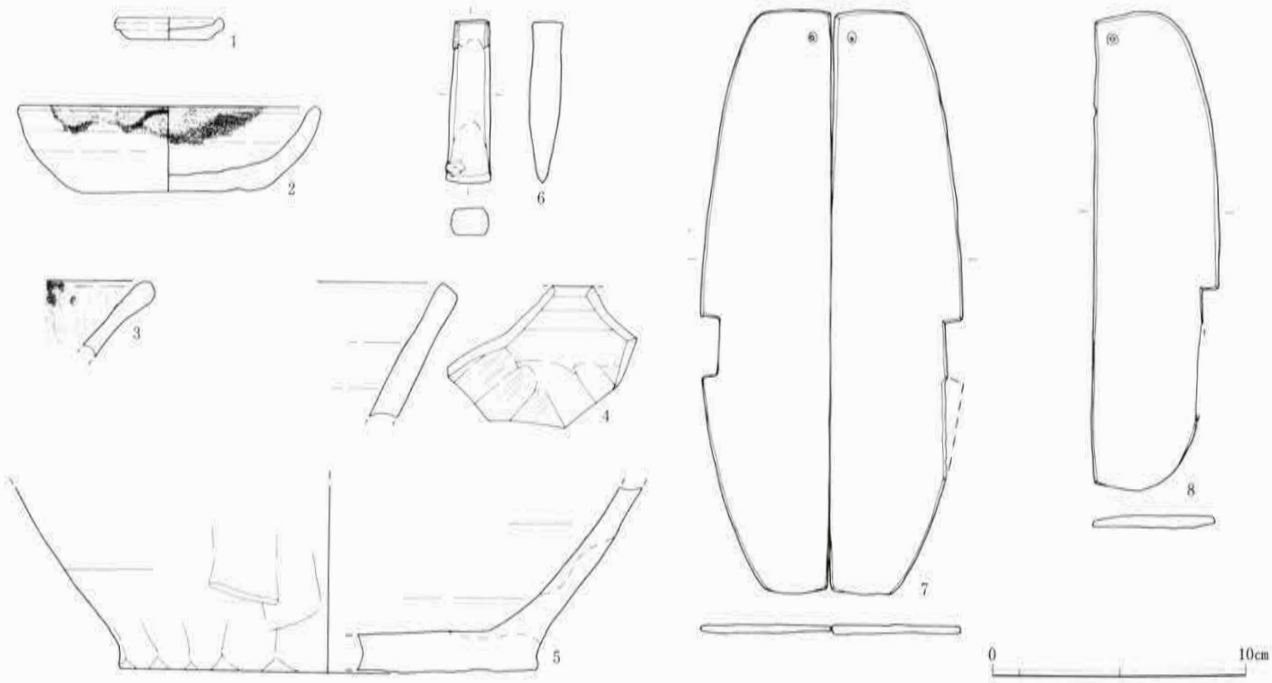


図16　第４面溝９ａ・ｂ出土遺物

下幅西側に幅3cmの杭を一部に残しているが、発見された全長のうち、南半分は後世の溝13に壊されて、不明となっている。最も数多く杭が発見された第Ⅰ区の東端で18cm間隔に杭が配置されて、横板の内倒れが周到に防がれていたようであるが、調査では横板をいっさい発見できなかった。

溝覆土は木器を多く交えた砂質土で覆われ、水流のあったことが想定できる。溝の南方が不明であるために、溝底面の傾斜が不明である。

調査中に溝9bと溝9aの切り合いを確認できなかったため、出土した遺物は溝19a・bとして遺物上げを行った。

図16－1～2はかわらけ。1は極小かわらけである。口縁部は断面三角形を呈するが、内折れを意識しているものと思われる。2は背高で、器壁は厚めに内弯しながら立ち上がり、口縁部付近よりわずかに外反する。内外面ともに煤が付着する。

3は常滑片口鉢Ⅰ類。細破片のため、使用による摩滅痕は確認できなかったが、体部内面に煤が付着する。4は常滑片口鉢Ⅱ類。口縁部端部は外方へ伸びず、断面三角形を呈する。口縁部下の指頭による横方向のナデ調整は2段である。細破片のため、使用による摩滅痕などを確認できなかった。5は常滑甕。体部外面下位は木口状工具による調整痕が明瞭に残る。

6は鍔と思われる。上側面には打痕などは見られない。

7～8は草履芯。7の全長は23.4cmなのに対して、8の全長は19.1cmであることから8は子供用の草履芯と思われる。

東西路地

第Ⅰ次調査区の北西隅にわずかに残されていた。図12の第20層である暗黄灰色砂質土が路盤をなすが、この土層は路面の作り直しのために、本来の路面を掘り込んで土を入れ直したものである。路地に付設された溝6の上面が壊されていることがそれを示している。

溝6

東西方向の路地の南側側溝として掘り込まれている。第Ⅰ区の西壁と北壁にその土層を確認できる。この溝の方位から路地が東西方向であると確認できる。溝内には木質腐食土が充満している。溝はその上面を壊されているために上幅と深さが不明であるが底面幅は40cmを測る。

図17は溝6出土遺物。17－1はかわらけ。背高で、内底面が広いが、器壁は薄く、内弯しながら立ち上がり、体部中位付近より大きく外反する。内外面に煤が付着する。2～4は土器質胎土の浅鉢型火鉢。2の体部内面上位は木口状工具による横方向のナデ調整の際に粘土がよれてしまったものと思われ

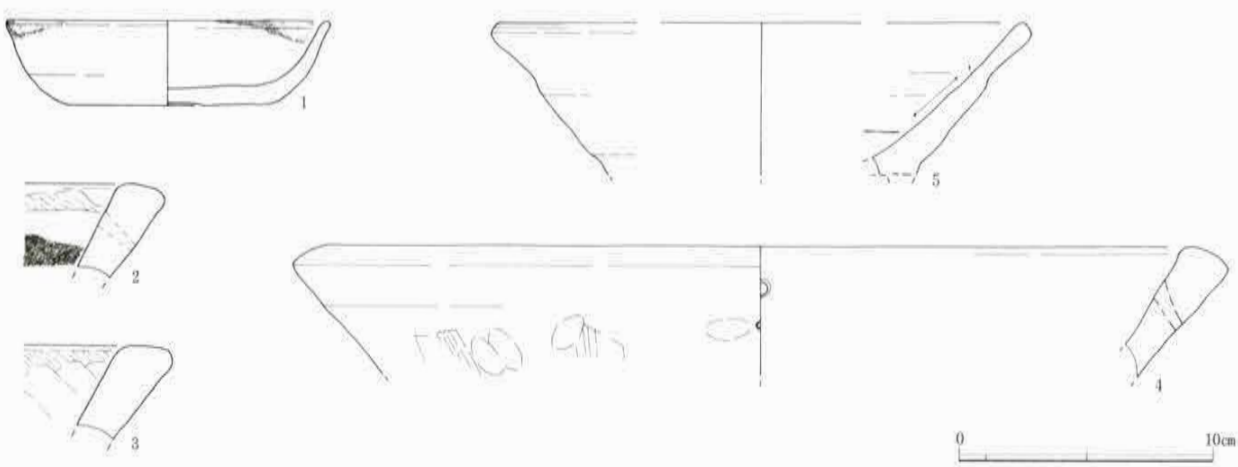


図17　第4面溝6出土遺物

る。また、体部内面上位より下方には煤が付着する。

５は常滑片口鉢Ⅰ類。口径は20.8cmを測るやや小振りの製品である。口縁端部にわずかに沈線が巡る。体部内面中位より下方には使用による摩滅痕が残る。

第４面下出土遺物(図18)

第４面造成時の年代を示すと思われる遺物群であるが、良好な年代指標を示すものはなかった。図18－１～２はかわらけ。内底面が広めで、器壁は厚く、大きく開きながら立ち上がり、体部中位付近より口縁部を尖らせながら外反する。２は背低で、内底面が広く、器壁は内湾しながら立ち上がる。

３～５は箸。いずれも22cm代の製品である。６は曲物の底板。左側面には木釘が１箇所にわずかに遺存する。

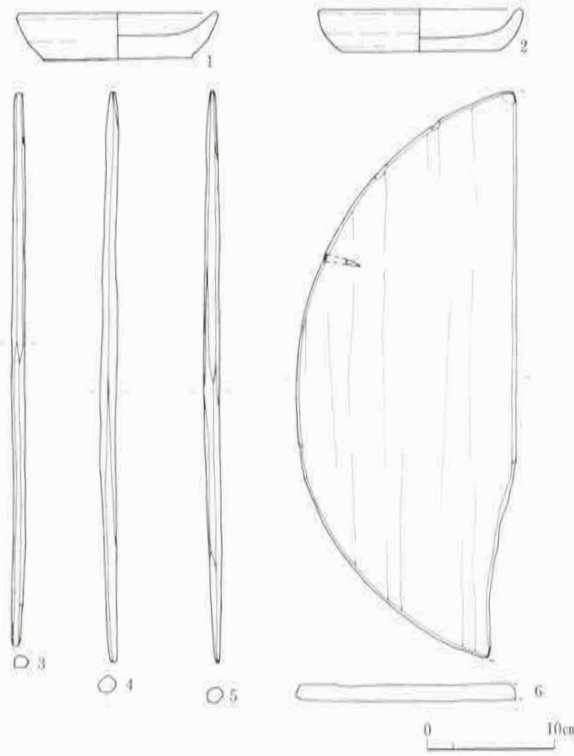


図18　第４面下出土遺物

第５節　第３面(図19)

第４面上に嵩上げされて更新された面であるが、遺構の配置は基本的に第4面での構成と大きな変化はない。南北道路とその側溝に、東西路地とその側溝の組み合わせである。若干異なる点は、東西路地が南方に１ｍ60cm移動するとともに、路地に付設されていた側溝の規模が大きくなることである。また、後世の第２面からの掘り込みが少ないために、側溝を伴う道路遺構や路地遺構と生活面との関係が明瞭となっている。それら遺構ごとの構成土は互いに異なり、一般生活面は南北道路の西側で20cm大の大型泥岩礫版築層からなる１枚、東側でやはり泥岩版築による２枚が、路地遺構は暗黄黒色の破砕砂質凝灰岩版築層の１枚であるのに対して、南北道路は異なる土質の版築層路盤が３枚作られている。そして、路地の南側に伴う側溝が３時期、南北道路の西側に４時期、東側に２時期の側溝が設置されている。

このように、各遺構の性格によって造作に当たっての用土が異なることが明瞭に見てとれる一方で、造作枚数と掘り込み回数が異なる複雑な展開もみられる。調査では、この第3面の展開時期を把握するために、Ａ～Ｃの３時期に各遺構を振り分けて捉えた。

３Ａ面(図20)

南北道路と西側側溝(溝７・14)の他、に西方に広がる生活面と路地があったものと思われる。ただし、路地と生活面の境が３Ｂ・Ｃ面時の溝で失われているために、不明である。

南北道路

ほぼ第Ⅱ区内いっぱいに、破砕泥岩を交えた暗黄灰色砂質土によって作られている。道路は確認した東西両端にて、若干下がる傾斜を見せている。道路側溝が発見された西側では、その傾斜した道端から側溝へと続く。側溝は西側にのみ確認でき道路幅員は不明である。

図21は道路下出土遺物。21－1は鉄鍋と思われる。口縁端部は内外に伸びる。

２は漆皿。器壁は薄く、大きく開きながら立ち上がる。黒色漆を塗った後に赤色漆で文様を手描きす

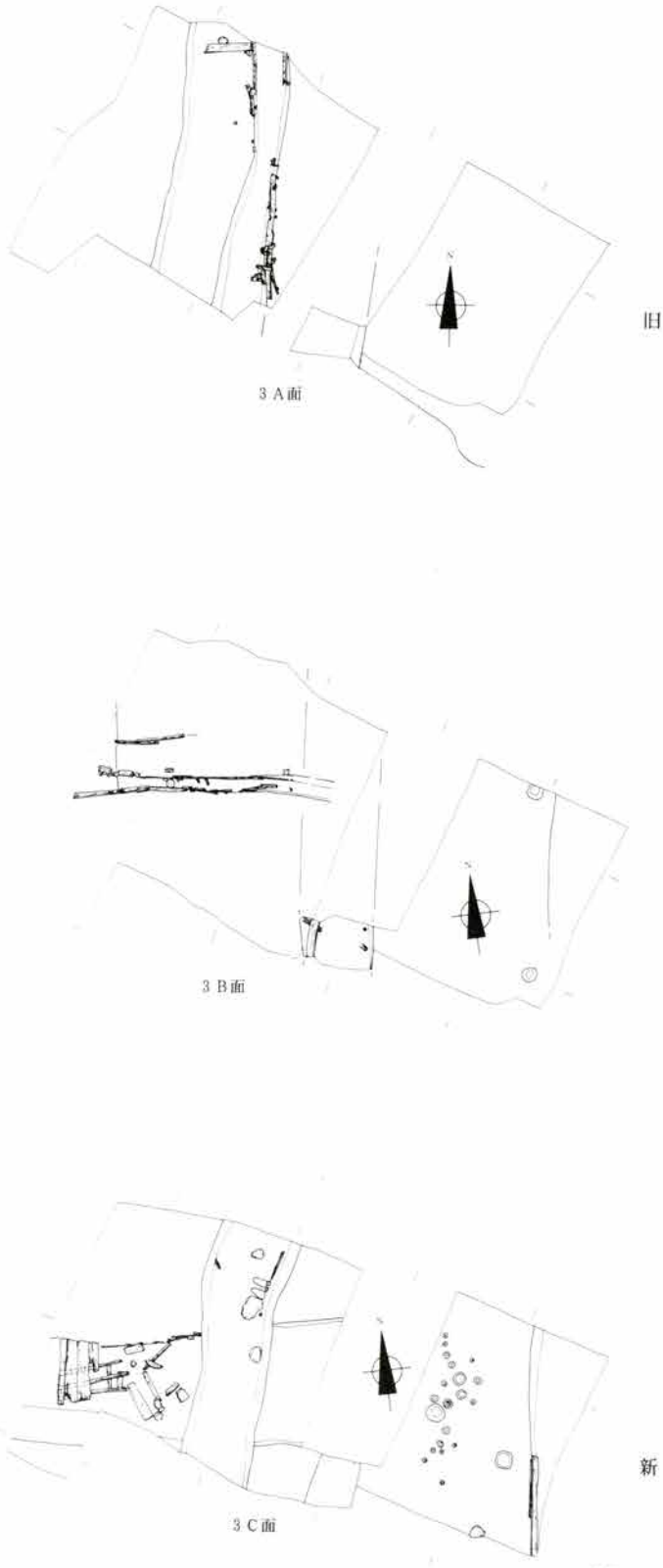


図19　第３A～C面全測図

る。３は用途不明木製品。表面から裏面に向けて木釘が遺存する。４は扇骨、５は草履芯である。5の表面には植物圧痕がわずかに遺存する。

南北道路側溝

溝14

西側側溝のうち最古のものである。溝を確認した範囲が狭く、明瞭ではないが、深さ35cmを測る。溝幅は不明である。溝内には板材などの遺存がなく、側溝内の木組みの有無は不明である。

溝7

改修と思われる新旧二時期があり、古い７ｂと新しい７ａ溝がある。本溝は新旧が共に第Ⅰ区にて発見され、溝７ａの南方への延長が、わずかに第Ⅱ区壁面に土層として確認されている。古い溝７ｂは溝の東方を壊されているために、全体像を知ることは出来ない。路地遺構の道端が緩やかに傾斜するまま

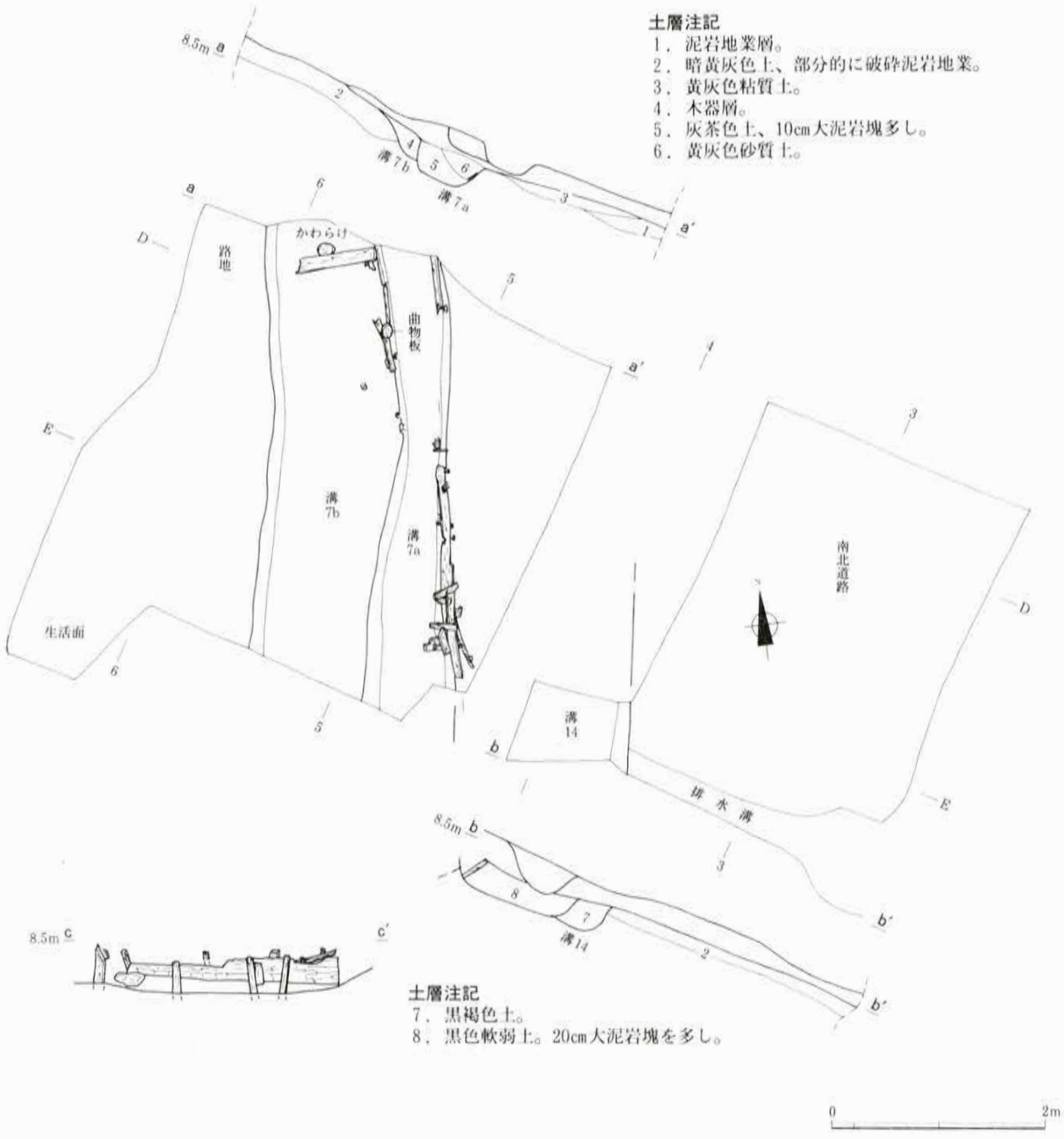


図20　第３Ａ全測図と土層図

にゆっくりと落ち込む深さ25cmを測る。底面は広く、最大で110cmを測る。その底面には幅13cmの板材が溝を横断するように遺存していた。後述の溝2に確認できる溝底面に並べられた底板の一部であった可能性がある。溝底面の海抜高は、調査区北端で8.22m、調査区南端で8.05mを測り、南方へ向けて傾斜している。

図22～23は溝7b出土遺物。図22－1は溝7b下層より出土した小型の曲物である。3枚の側板を合わせた後、上方から下方に向けて桜皮により留める。また、留めの先端部は黒色漆を内側に塗り込めて固定するなど丁寧な作業が見て取れる。底板と側板とを接合するために打たれたと考えられる木釘が2箇所に遺存していた。体部内面全体に黒色漆が厚く塗られている。

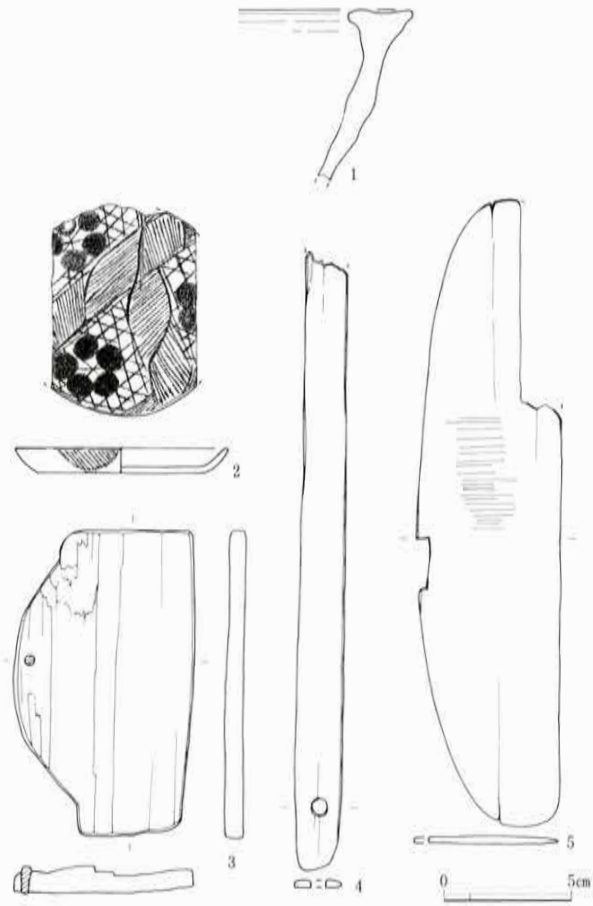


図21　第3A面道路下出土遺物

2はかわらけ。背高気味で、底部厚が厚く、器壁は内弯しながら立ち上がる。3～4は丸瓦。3の凸面は指頭によるナデ、凹面は布目痕と指頭によるナデで調整される。4は玉縁部がわずかに遺存している。凸面は横方向の指頭ナデ、凹面は布目痕が明瞭に残る。5～38は箬。最小は18.0cm、最長は24.6cmを測り、おおむね21～22cmを測る製品が多く出土している。図23－1は漆椀。器壁は厚めで、高台が付くものと思われる。体部内外面ともに黒色漆を塗った後に、赤色漆によりスタンプによる鹿の子文が押印される。2は円盤状木製品。中央に径1.5cmほどの穿孔がある。また、その穿孔の上下には何かしらで擦れたようなごく浅い溝が観察できる。3～5は草履芯。3はやや小さめで、尻緒をかける切れ込み部は鋭角に切り取られる。4は鼻緒孔の下方に菱形を呈する小穿孔が穿たれる。6は篦状木製品。先端部は煤ける。7は棒状木製品。表面は丁寧に削り調整され、滑らかである。8～9は杓子状木製品。8は小型で、上方の幅広部分が細長く成形される。9は表面にノミ状工具による削り調整痕が明瞭に残る。

溝7aは溝7bを埋め立てながら重複してその東側に掘り直される。上幅60cm、下幅43cm前後をなすが、発見状況では所により幅が大きく変化する。深さは31cmで、海抜高は、調査区北端で8.19m、南端で7.93mを測り、南方へと傾斜する。東西の溝壁には最大で幅27cm、長さ200cmの他にまちまちなサイズの横板材が大小の杭で支えられている。杭は内側のみでなく、外側にも残るため、挟み込むようにして横板が支えられていた。また、横板には時に桶の底板も転用されている。幅27cm、長さ200cmの横板は上方が失われている部分があるが、これは後世の溝2や溝4の掘り込みによって削り取られてしまったもので、本来は幅27cmを全長にわたって保っていたと思われる。板材には槍鉋痕も明瞭に残されており、新品のいわゆる七尺板が用いられた可能性がある。

図24～25は溝7a出土遺物。図24－1～2はかわらけ。1は背低気味で、内底面が広く、器壁は開きながら立ち上がる。2は背高で、内底面は広めだが、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部上位付近よりわずかに外反する。3は火鉢。器壁は厚く、口縁部は外方へ大きく引き伸ばされる。また、口縁部

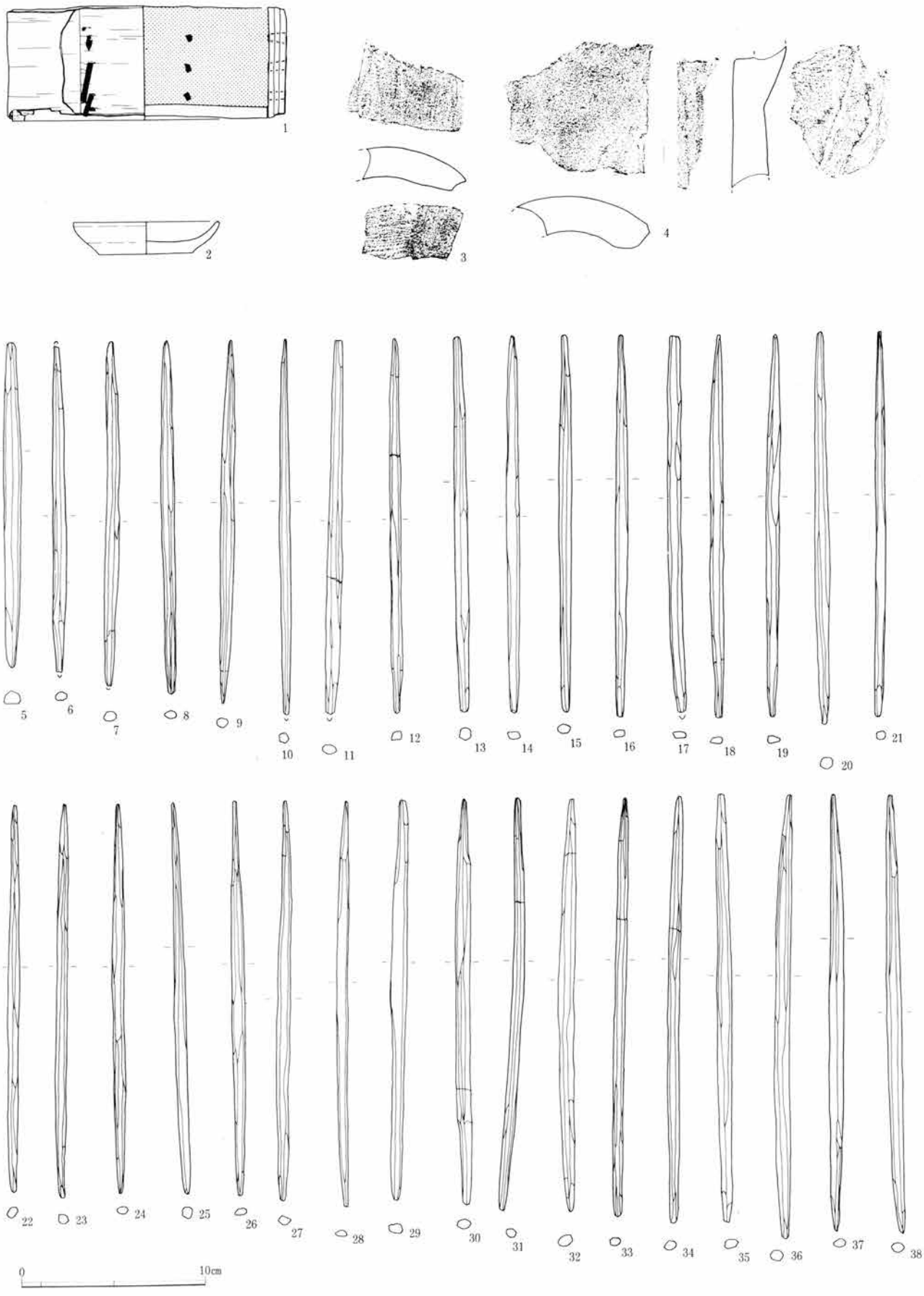


図22　第３Ａ面溝７ｂ出土遺物（１）

下には浅鉢型火鉢に見られるような穿孔が穿たれる。体部内外面ともに指頭による回転ナデで調整される。口縁端部から体部内面上位にかけては火を受けるが、口縁端部付近は粘土が硬化するほど強く被火したものと思われる。

4は常滑片口鉢Ⅰ類。細破片のため、使用痕などを観察できなかった。5は13世紀後半頃の常滑甕、6は常滑甕の肩部付近に押印された文様の拓影である。

7は青磁碗。鎬蓮弁文碗と思われる。畳付端部から底裏にかけては露胎。内底面には使用によるキズが多く残る。8は青磁鎬蓮弁文碗。蓮弁文は退化して不明瞭である。見込みにはスタンプによる蓮華文が押印される。畳付端部から底裏にかけては露胎。見込みには使用によるキズがわずかに残る。9は青白磁梅瓶の蓋。体部外面下位から体部内面にかけては露胎。体部内面上位付近に煤が付着する。また、破損断面には黒色漆による漆継が見られる。

10は丹波産の黒色を呈する頁岩製硯。外形矩形、内形の彫りは雑で硯頭と前縁を四葉に彫るタイプであろう。

11～13は草履芯。11と12の尻緒をかける切れ込み部は鋭角に切り取られる。いずれも植物圧痕が遺存する。14は篦状木製品。表裏面ともにノミ状工具により削り調整される。15～41は箸。最小は19.7cm、最長は24.4cmを測り、22～23cm代のものが多い。なお、29は上先端部を３回ほど尖らせただけの簡易

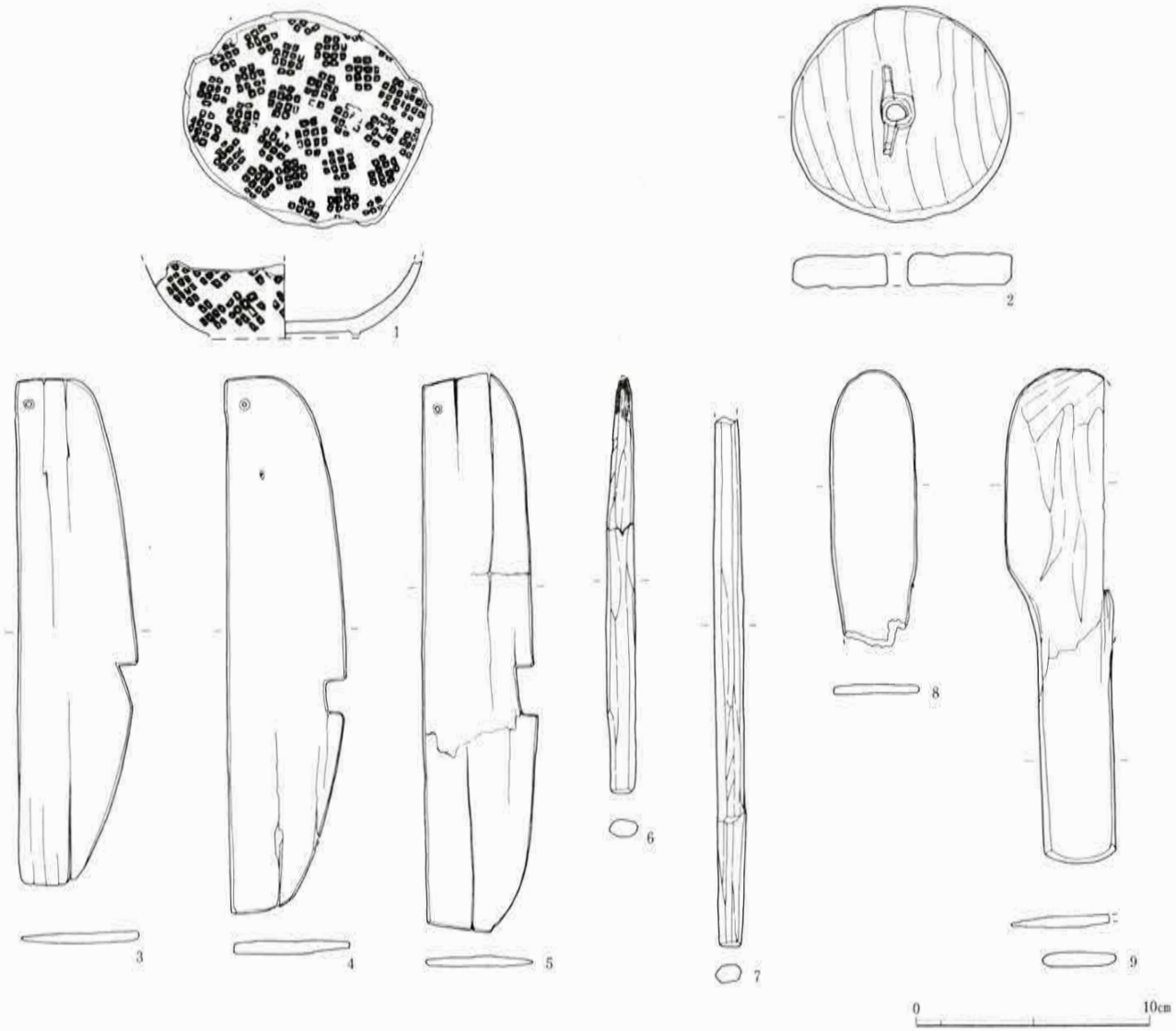


図23　第３A面溝７b出土遺物（２）

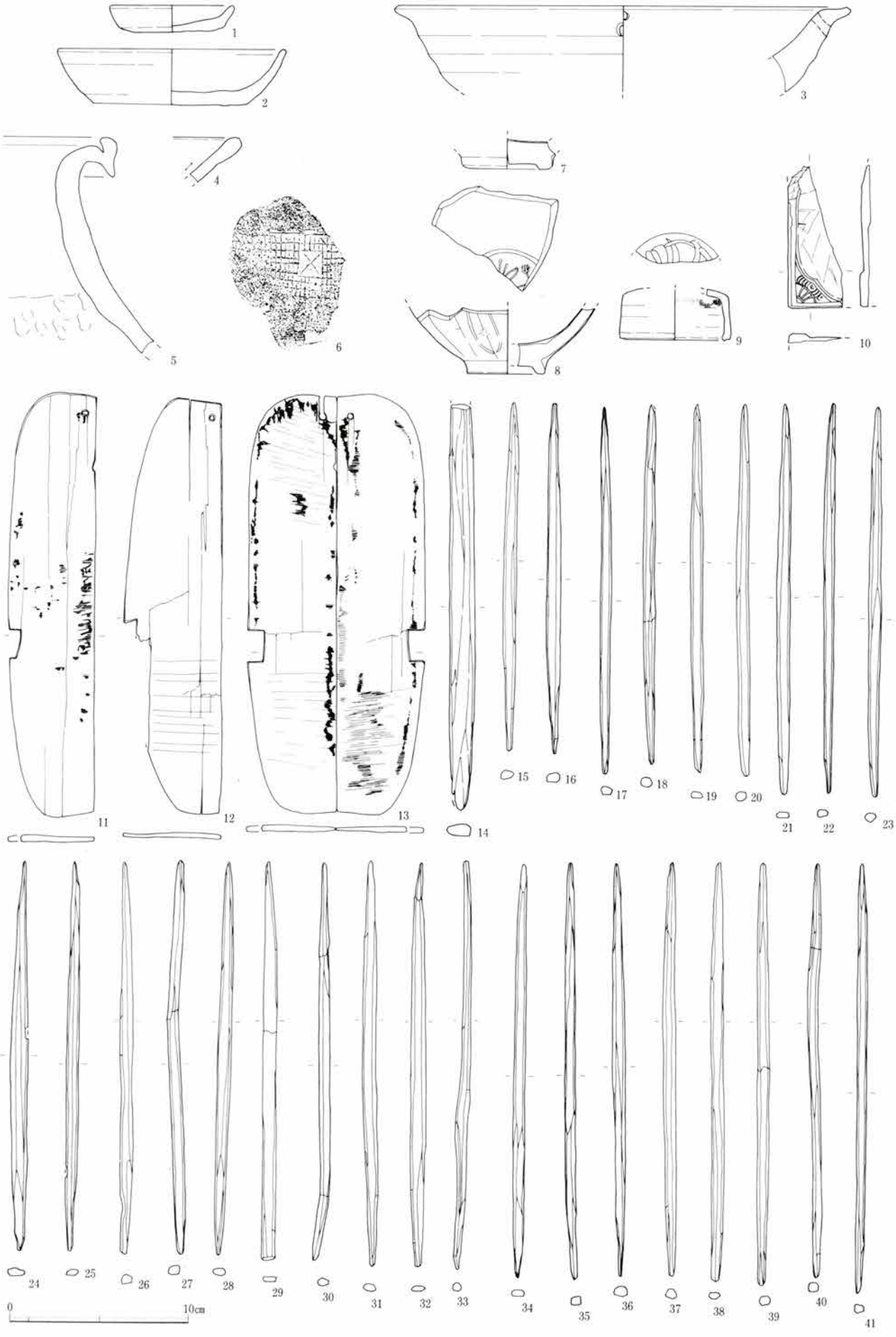


図24　第３A 面溝７a 出土遺物（１）

な成形である。また、33は節にあたるところさえも利用している。図25－１～２は曲物の底板。表裏面のみに黒色漆が塗られる。２は側面に５箇所の木釘孔が遺存すが、木釘は３箇所のみに遺存していた。3は小型の杓子状木製品である。上方はやや内側に反っている。４は毬杖の鞠。ノミ状工具による削りは細いが粗い作りである。５は木鍬。柄を差し込む方形を呈する表面の孔の周辺は浅い溝状を呈する。

路地

東西方向の路地が溝７の西方北側に残る。同じく溝７の西方南側に生活面が泥岩版築面として残されているが、両者の境が後世の溝によって壊されているために、路地の幅が判然としない。路地は上述のように破砕砂質凝灰岩で版築され、Ｅラインより北30cmから調査区北外へと広がっている。

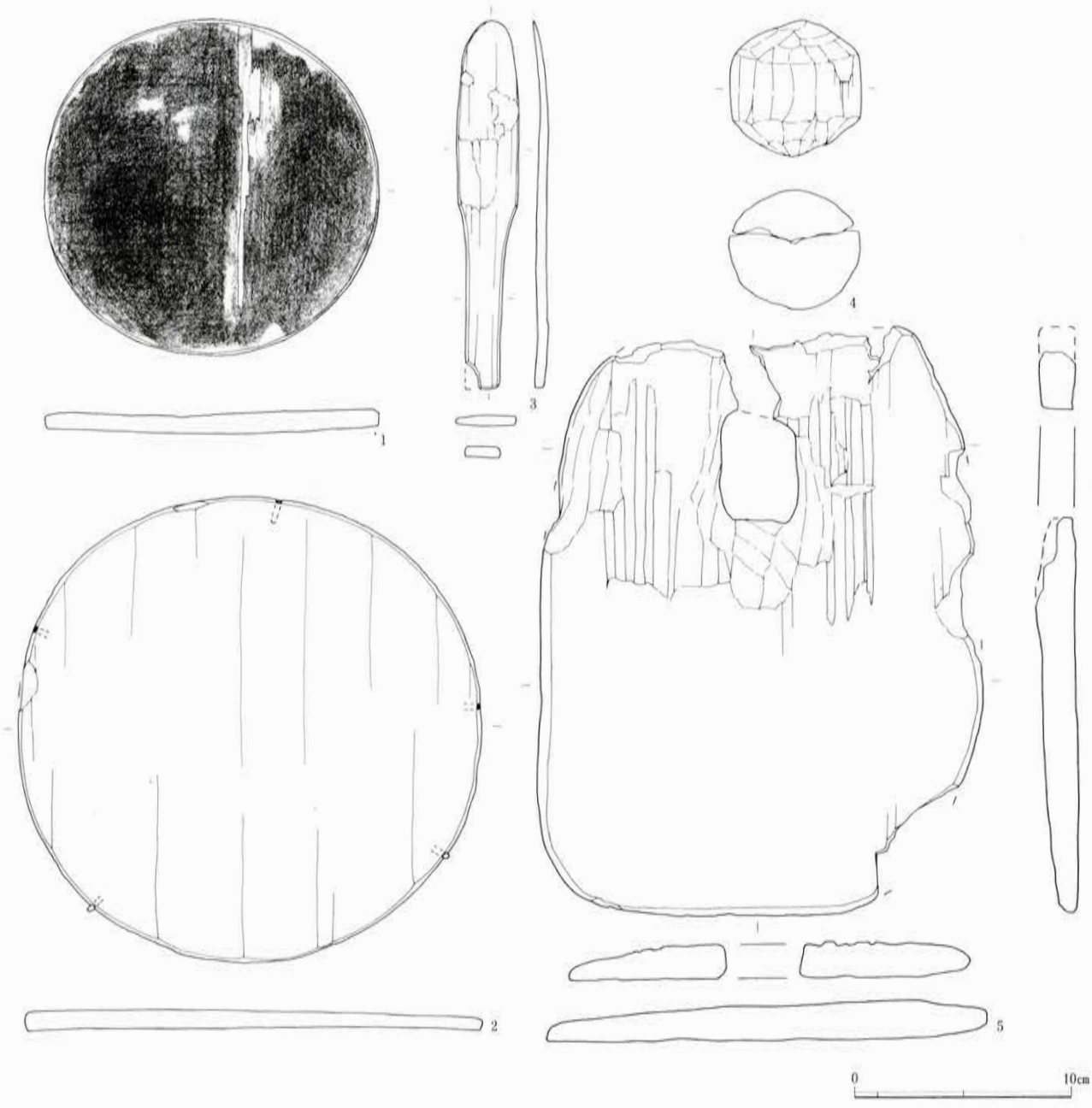


図25　第３Ａ面溝７ａ出土遺物（２）

3B面(図26)

路面の更新された南北道路と西側側溝(溝14の継続・13)の西方に東西溝(溝4)と、南北溝(溝5)が発見された。南北道路の東側路肩に側溝(溝11b)の存在が想定された。第Ⅰ区の西端に一部が発見された南北溝(溝5)が、この時期の遺溝理解の要点である。

南北道路

5～10cm大の泥岩を版築した路面に更新される。版築層は、厚さ8cmである。路面は平坦で中央部での盛り上がりはない。後述の側溝の位置から、道路幅員は2.8m前後と考えられる。

東路肩に2口のピットが発見されている。隅丸矩形の平面形に20cmに満たない、共に18cmの深さを持つ。ピットの間隔は、ちょうど3mを測る。用途は不明である。

南北道路側溝

溝11b

南北道路の東側路肩に設置された側溝と思われる。道路の東方に拡がる生活面が2枚であるため、嵩上げ道路面との対応は、溝の西側掘り込み位置から復元されるものであるが、第3C面から掘り込まれた溝11aに壊されており、本来の道路面との対応関係は不明である。しかし、溝11aより古いため、第3B面に措定した。

溝幅は不明。溝の深さは、溝東方の上層生活面から測って、37cmを測る。溝掘り方内に木組みなどの施設は遺存していなかった。傾斜方向も不明である。

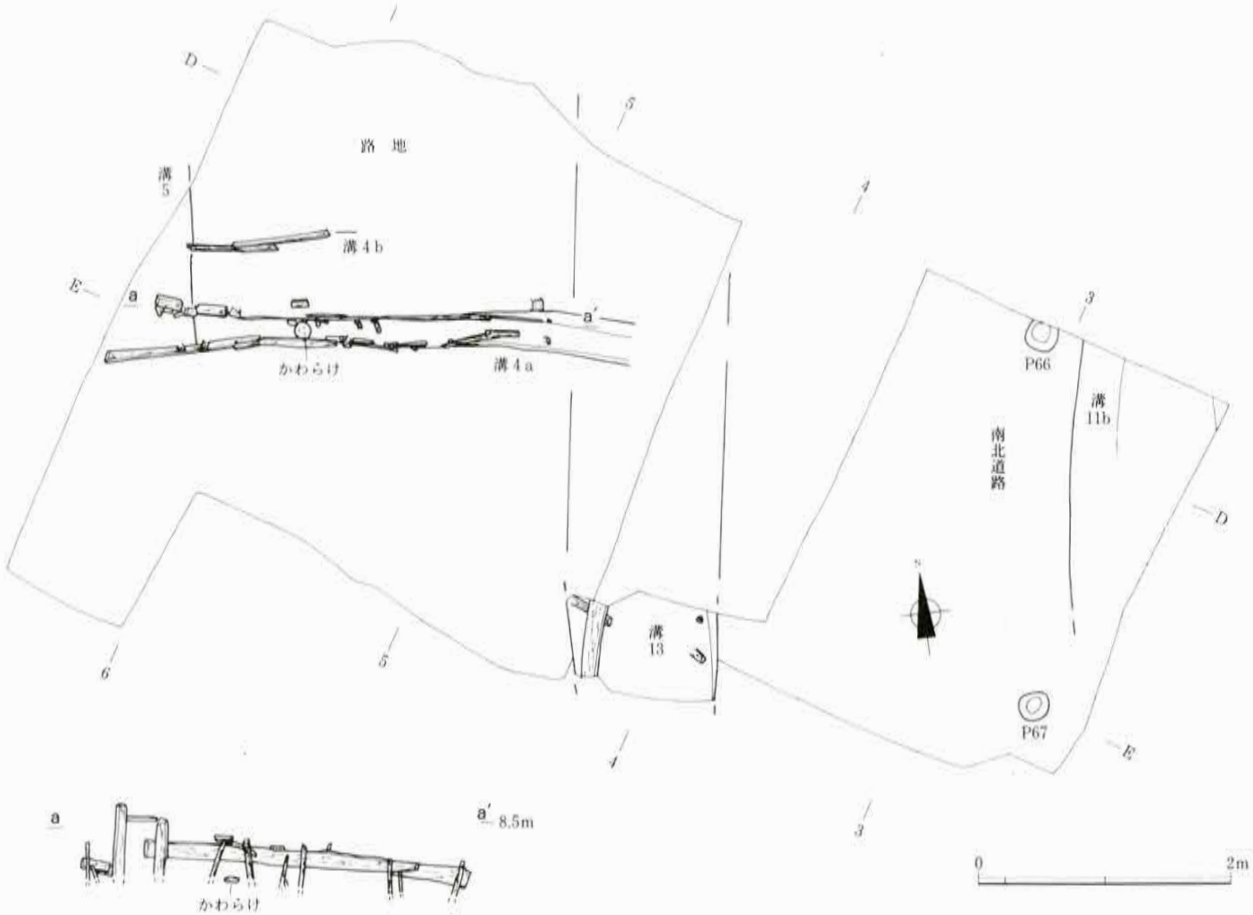


図26　第3B面全測図と土層図

溝13

南北道路の西路肩に設置された側溝。確認は、第Ⅱ区拡張部での小範囲である。上幅1.18cm、下幅96cm、深さ36cmを測る。下場に杭と横板が遺存していた。杭は、最大幅７cmから５cmを用い、幅24cm、厚さ1.5cmの横板が調査区外へと伸びている。溝の延長方向の第Ⅰ区内では、上層面の遺構の掘り込みで壊されて、失われている。覆土には上層路面を造作した泥岩を交えた黒色軟弱土で、水分を豊富に含んでいた。傾斜方向は不明である。

第Ⅰ区内溝

溝4

南北道路にほぼ直交する方向に、掘り直しを含めて古期の溝４b、新期の溝４aの東西溝がある。両溝ともに、上層面での東西溝にその南側を壊されている。古期の溝４bは、掘り方の南側を上層面の溝と溝４bにも壊され、一部のみが確認されている。第Ⅰ区の西端に木組みを残して北側の落ち込みを発見した。発見された木組みは２枚の横板である。板は、幅20cmで、長さ78cmと73cmを測る。掘り込み面からの深さ40cmを測り、木組みは下場に位置していた。覆土には、木製品を多く含んだ水分豊富な黒色の砂質土である。

図27は第３B面溝４b出土遺物。図27－１～６はかわらけ。１は背低で、内底面が広く、器壁は開きながら立ち上がる。２～４は１と同型と思われるが、内底面は１より狭く、器壁は内弯気味に立ち上がる。５は背高で、器壁は内弯しながら立ち上がり、側面観碗型を呈する。６は口径が14cmを越える超大型かわらけである。混入物の少ない粉質精良胎土。背高で、器壁は薄く、内弯しながら立ち上がるが、口縁部付近より口唇部を尖らせながらわずかに外反する。いわゆる「薄手丸深」型の初現期に見られるものである。

７は13世紀中頃の常滑甕。８～９は常滑片口鉢Ⅰ類である。８は小片のため、使用痕などを確認できなかった。９は体部内面中位より下方は使用による摩滅痕が残る。

10は木製雲形調度飾り。11は用途不明木製品。上方の長方形を呈する部分の左側は切り込みを入れた後、丁寧に面取りされている。また、下方の棒状を呈する部分には木釘が遺存する。12は棒状木製品。先端はノミ状工具により荒く削られる。13～18は箸。最小は21.1cm、最長は25.9cmを測る。19は篦状木製品。裏面中位付近には黒色漆が付着する。20は杓子状木製品。表面上方はラフなノミ状工具痕が残る。

21は大釘。22～26は銭。22は1064年初鋳の「治平元寶」、23は1068年初鋳の「熙寧元寶」、24～25は1078年初鋳の「元豊通寶」、1086年初鋳の「元祐通寶」である。いずれも背面に文字はない。

27は長崎県の西彼杵(にしそのぎ)産の滑石製温石。破損断面を除く全面に煤が付着する。28は鳴滝産(向田)仕上砥である。砥面は表裏面に残る。29は産地不明の中砥。表裏面、左右側面ともに砥面として使用する。

新期の溝４aは、溝４bから南方40cmに掘り込まれる。第Ⅰ区内に長さ4.2mにわたって発見された。本溝は他の溝に比べて幅が狭く、掘り方内に設置された木組みの幅は、18cmから20cmである。木組みは溝の側面に設置された横板が杭で支えられる構造である。掘り込み面からの掘り方深さは52cmを測り、底面の木組みはない。しかし、木組みの横板は掘り方底面までなく、掘り込み面から下方36cm前後までにしか遺存していない。溝の下方に横板が用いられていなかったのか、または用いられていたが、腐食してしまったのか不明である。用いられた横板の幅は13cm、最大長２m27cmを測る。杭は、幅3cmから９cmと大小様々である。また、杭の中には枘の切られたものもあり、転用品と思われる。溝内にかわらけが１点、完形品で発見されている(写真図版参照)。

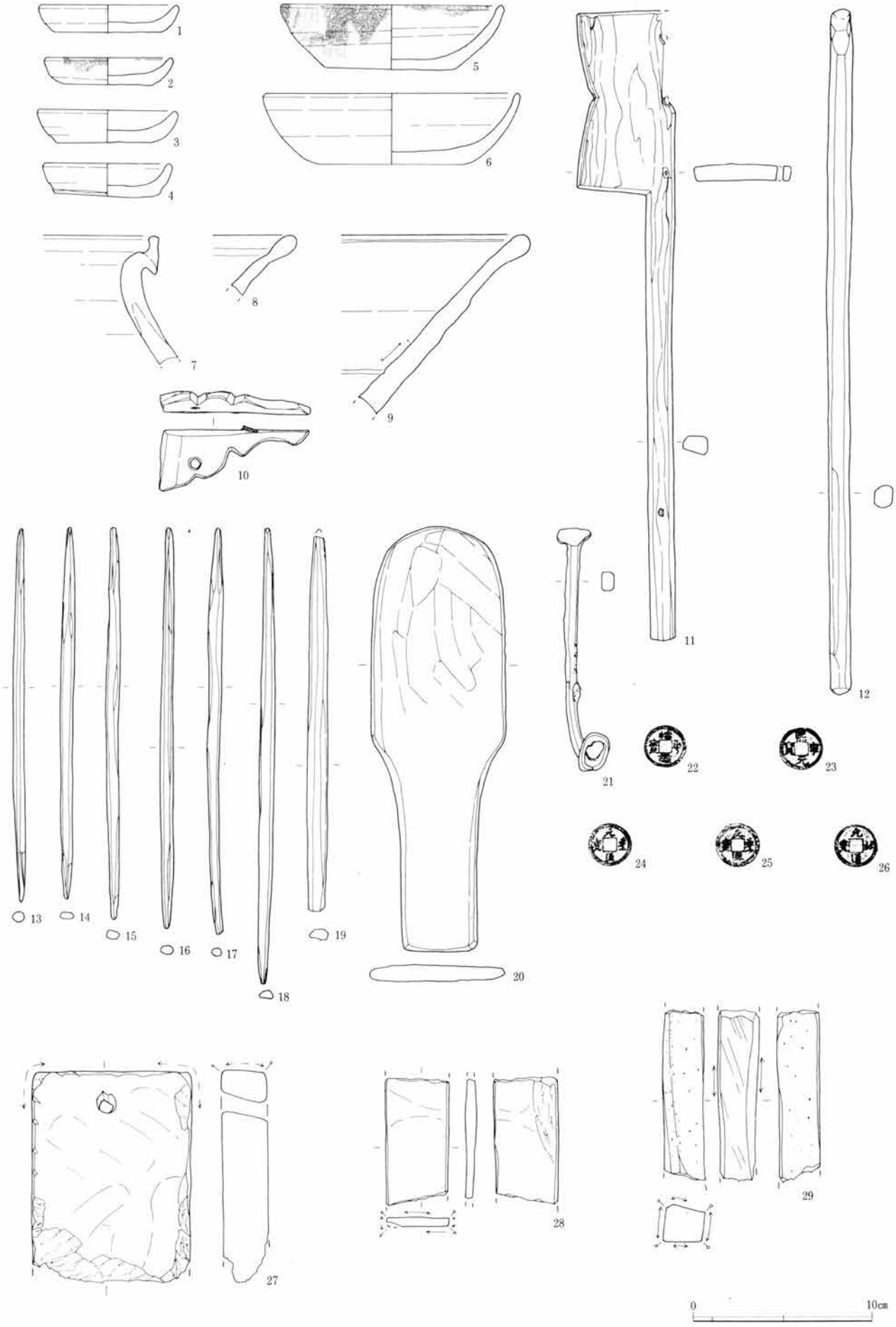


図27　第３Ｂ面溝４ｂ出土遺物

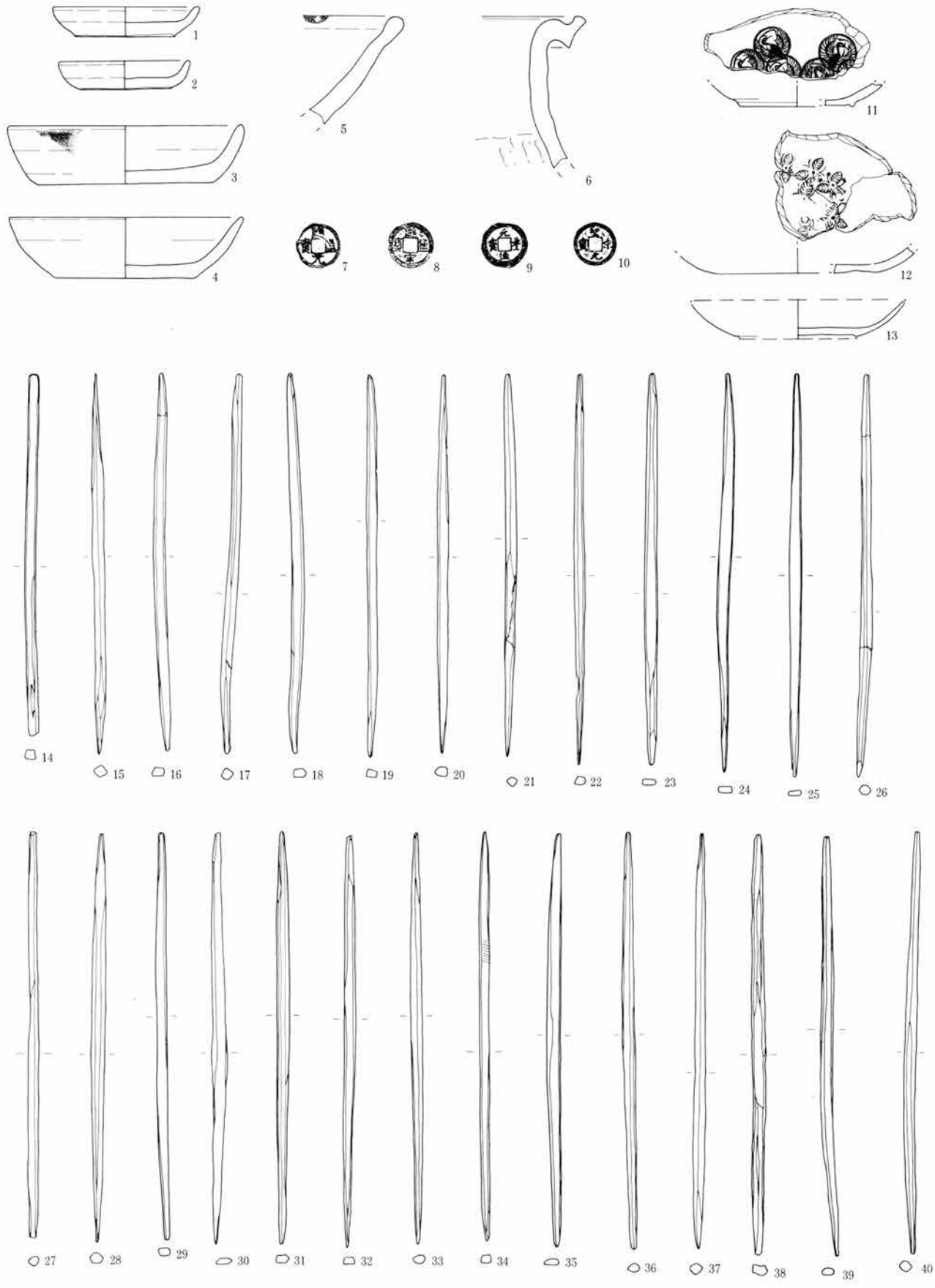


図28　第３B 面溝４a 出土遺物（１）

底面の海抜高は、調査区西端で8.5ｍ、溝の遺存する東端で7.9ｍを測り、東方へ向けて流下する。

図28～29は第３Ｂ面溝４ａ出土遺物。図28－１～４はかわらけ。１は底部厚が厚く、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がる。２は内底面が広く、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がるが、体部中位付近より口唇部を尖らせながら外反する。３は内底面が広く、器壁は開きながら立ち上がる。体部外面には煤が付着する。４は背高で、器壁は薄めで、内弯気味に立ち上がり、体部中付近よりわずかに外反し、側面観碗型を呈する。

５は常滑片口鉢Ⅰ類。小片のため、使用による摩滅痕を確認できなかったが、体部内面上位に煤が付着する。６は13世紀後半頃の常滑甕である。

７～10は銭。７は621年初鋳の「開元通寶」、８は1038年初鋳の「皇宋通寶」、９は1078年初鋳の「元豊

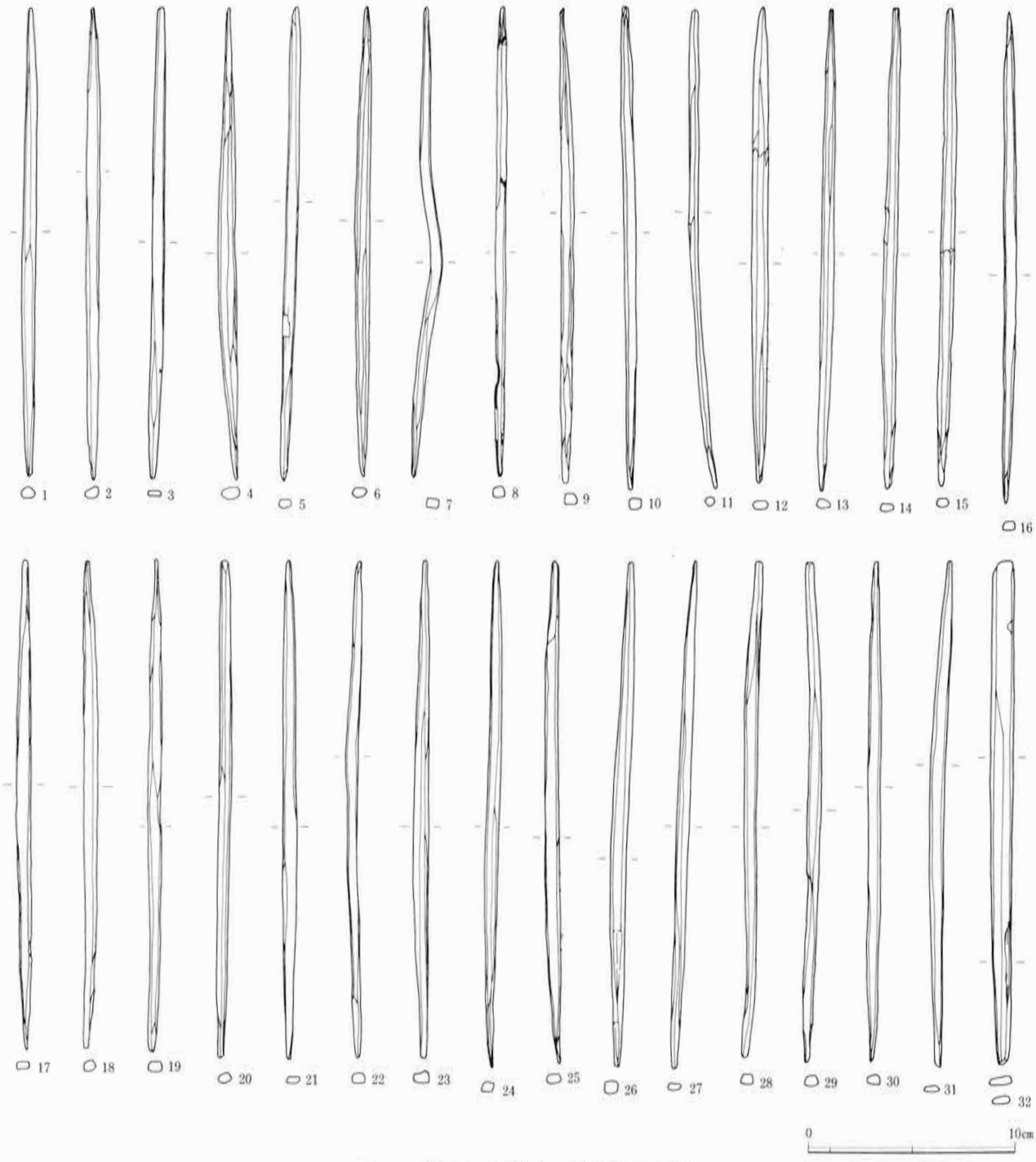


図29　第３Ｂ面溝４ａ出土遺物（２）

通寶」、10は1101年初鋳の「聖宋元寶」である。いずれも背面に文字などは見られない。

11～12は漆椀、13は漆皿である。11は黒色漆を塗った後、赤色漆によるスタンプの飛鶴文、12は花文が押印される。また、13は黒色漆が塗られるだけで、施文はなされない。14～40、および図29－1～31は箸。最小は19.7cm、最長は24.8cmを測り、22～24cm代のものが多い。削りの少ないものが多く、先端を尖らせるだけのものが目立つ。32は箸状木製品。下端にわずかに削られ尖るが、上端は無調整である。

溝4a・bの初動調査中に取り上げられた遺物であるため、帰属を決定できなかったものを図30に図示した。

図30－1は漆皿。口径はおよそ9.7cmを測るおおぶりな皿である。黒色漆を塗った後、赤色漆で不明文が手描きされる。

溝5

第Ⅰ区の西端にEラインからDラインの間に南北方向に掘り込まれている。溝の発見されたこの位置は、調査途上に掘り込んだ湧水排出のための側溝内であったために、平面的調査は出来ず、調査区の壁面にて土層として確認したに留まる。また、本溝は同時期の溝4のほかに上層面から掘り込まれた溝にも壊されているために、ほんの一部が調査区内に遺存しており、本溝と他の遺構との関係の把握に不明な点が多く残る。底面の傾斜方向も不明である。

溝の深さは26cmを測るが、溝幅などは不明である。また、溝内に木組みも発見されなかったが、本来の木組みの有無は不明である。

本溝の南北延伸方向は、南北溝や道路と一致する。こうした状況で、溝5の東方地域であり、溝5の掘り込み面となっている一帯は、暗黄黒色砂質凝灰岩の地業面であるため、このあたりは路地ないし道路と考えられる。さらに、溝4aより南方の大方

図30　第3B面溝4出土遺物

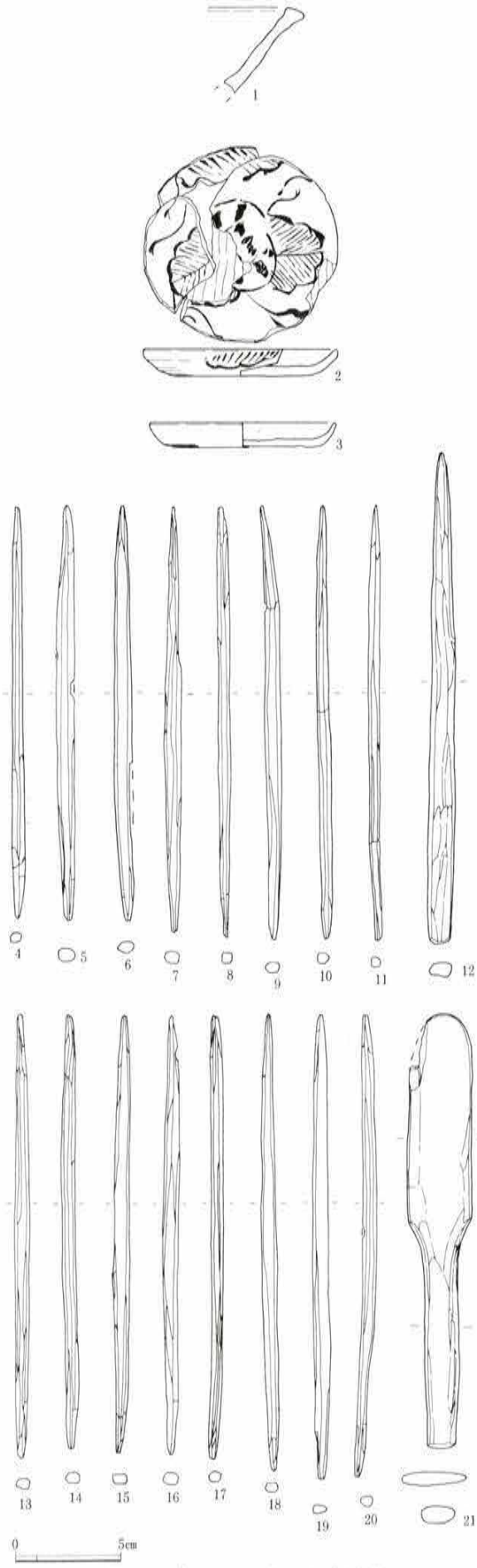


図31　第3B面溝5出土遺物

が上層遺構の掘り込みで失われ、おそらくは本来の溝５よりさらに西方に位置するであろう第Ⅰ区の南西端に、20cm大の泥岩版築層が一部残っているが、この地域は路面のような頻繁な嵩上げがないために一般の生活面であろうと考えられる。であるならば、溝５の東方が、路地ではなく、より東方の南北道路と一体の道路面であった可能性も想定できる。その際、南北道路の幅員は７ｍ８cmと非常に広いものとなり、さらに『一遍聖絵』の巨福呂坂の場面に描かれている中央に溝の開鑿された道路とも似た造作が想定されるが、あまりにも幅広のものとなってしまう。

３Ｂ面でも溝4が掘り込まれた時期を含めて、３Ｂ面を挟むようにある３Ａ面と３Ｃ面では、第Ⅰ区内には南北道路に直交する方向に東西溝が掘り込まれていたように、南北道路は東西両路肩のみに側溝を持ち、幅員も４ｍ前後である状況から、溝５の掘り込まれた時期のみで南北道路の幅員が拡大し、中央の溝を持つものになったとは考えにくい。そのため、溝５の東方には南北道路との間に３ｍほどの空閑地があったのであろう。

図31は第３Ｂ面溝５出土遺物。図31－１は常滑片口鉢Ⅰ類。口縁端部は内外方へわずかに伸びたよ

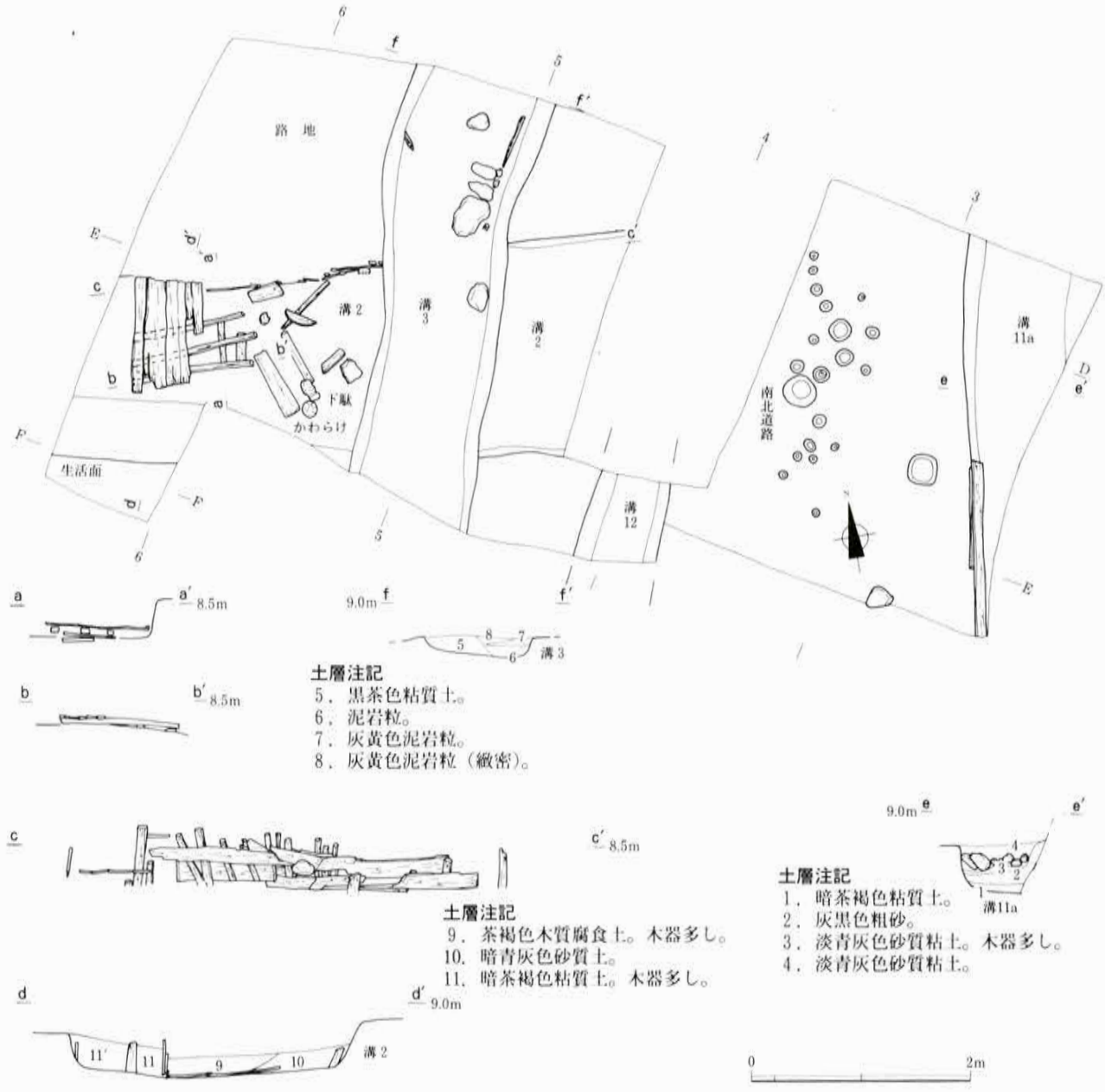


図32　第３Ｃ面全測図と土層図

うな断面形を呈する。小片のため、使用痕などは確認できなかった。

２～３は漆皿。２は黒色漆を塗った後、赤色漆による芭蕉文と思われる文様が手描きされる。3は黒色漆を塗っただけの無文皿である。4～19は箸。最小は19.8cm、最長は22.3cmを測り、20cm代の短かくて、削りの細い製品が多い。20は篦状木製品。細い削り調整が多く残る。21は小型の杓子状木製品。表裏面ともに削り調整が観察できるが、とくに表面は調整痕が顕著に見られる。

３Ｃ面(図32)

南北道路とその両側側溝(溝11a、溝12・３)に、東西方向の路地に伴う側溝(溝２)が発見された。南北道路の側溝は、東と西とで様相が異なり、南北道路を挟んで、東方と西方の生活空間の維持・管理行為に質的差異を見ることが出きる。

南北道路

３～５cm大の泥岩塊を交えた暗黄褐色の弱粘質土を版築して嵩上げされた路面を持つ。路面は平坦で、中央が膨らまない。また、路面上には、大小の浅いピットが数多く発見された。直径10cm以下の小さなピットでは、深さ３cm程しかなく、直径30cm内外のピットでも10cmに満たない。建物などに関連するピットではなく、路面の版築に伴って一時的な土留めのために立てられた杭痕ではないだろうか。

なお、後述の側溝の配置によって、道路の幅員は2.71ｍと4.68ｍの二通りが考えられる。

図33－１は第３Ｃ面道路下出土の鳴滝(向田)産の仕上砥。砥面は表裏面に残る。熱を受け変色する。

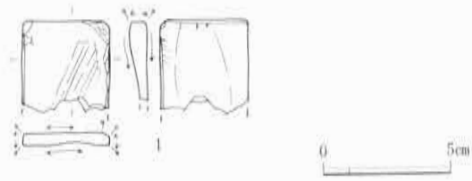


図33　第３Ｃ面道路下出土遺物

南北道路側溝

溝11a

道路の東路肩に設置された溝である。調査区北端にて、上幅156cm、下幅83cm、深さ44cmを測る。底面の海抜高は、北端で8.21ｍ、南端で8.22ｍを測り、南方の方が高いが、ほぼ平坦である。調査地周囲の地形を考えれば、南方へ向けて下がることを予想できる。

溝の掘り方内の西側壁面に横板が発見された。発見された横板の遺存状況は良好で、腐食による欠損は見られなかった。厚さ3.2cm、幅34cmの堅固な板である。板は２枚に重ねられて溝肩の崩落を慎重に押さえようとしている。その内の１枚は、調査区の南外にまで延伸し、長さは160cm以上を測る。これの外側に副えられた板は短く、長さ97cmである。これら横板を押さえる杭は発見されておらず、溝壁面の養生方法に不明な点を残す。

東側の溝壁面には、狭小な調査範囲にも起因するが、板材などの木組みを発見していない。

覆土には、最下層に粘質土を堆積させ、より上方には粗砂と砂質土が堆積した後に、最上層に泥岩塊で埋め戻されている。

図34は第3C面溝11a出土遺物。図34－１～２は覆土最下層、３～16は下層より出土した。

１～10はかわらけ。１は極小かわらけである。口縁部はわずかに内側に折れる。２は内底面が広めで、器壁は内弯気味に立ち上がり、体部上位付近は外反する。３～６は背高で、薄めの器壁は内弯しながら立ち上がり、口唇部を尖らせながら外反して、側面観碗型を呈する。７～８は中型かわらけ。７は背高で、

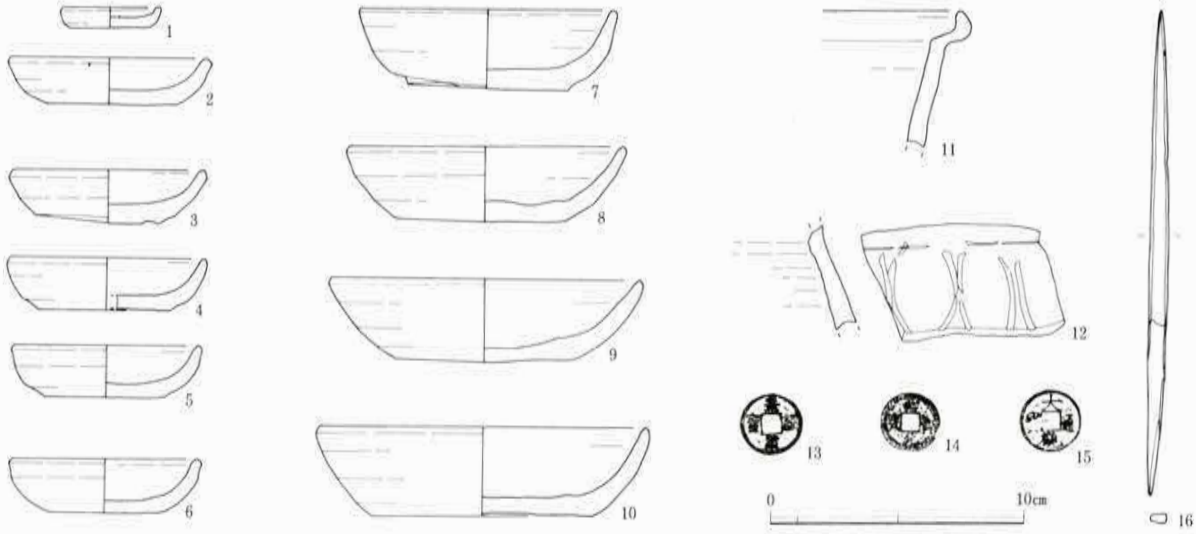


図34　第３C 面溝11a 出土遺物

側面観碗型を呈する。８は器壁が薄く、大きく開きながら立ち上がり、口縁部付近より外反する。９は８の大型製品と考えられる。10は内底面が広く、器壁は内湾しながら立ち上がる。

11は14世紀前半頃の瀬戸灰釉柄付片口である。

12は舶載褐釉壺。遺存する体部内面にも施釉が及ぶ。外面はヘラ状工具によるラフな蓮弁文が描かれる。

13～15は銭。13は1024年初鋳の「景祐元寶」、14は1094年初鋳の「紹聖元寶」、15は1107年初鋳の「大観通寶」である。いずれも背面に文字などは見られない。

16は箸。全長19.4cmを測る短い製品で、両先端を尖らせるだけのわずかな削り痕が残る。

溝12

道路の西路肩に設置された溝と思われる。確認された範囲が狭く、不明な点を多く残している。上幅67～77cm、下幅40～47cm、深さ30cmを測る。底面の傾斜方向は、これだけの調査範囲では不明である。溝の断面形が「U」字形を呈し、従前の道路側溝の断面形とは異なる。また、溝の延伸方向が、溝11a の他、従前の道路側溝より東に傾いている。溝11a の造作と時期や行為者の異なることが想定できる。

図35－１は第３C 面溝12出土の998年初鋳の「咸平元寶」である。背面に文字などは見られない。

図35　第３C 面溝12出土遺物

溝３

第Ⅰ区のほぼ中央を南北に延伸する。これまで記してきた溝と比べて浅く、また後述の東西溝を壊していることから、第３面における最新の溝である。次期の第２面には道路遺構が失われてしまうことも含めて、本溝は、道路の維持･管理の規制が薄れる段階に開鑿された簡易な道路側溝と考えられる。溝の延伸方向も、道路側溝である溝11a よりだいぶ東に傾いている。

上幅132～120cm、下幅103～93cm、深さ17cmを測る。底面は平坦で、海抜高は調査区北端で8.32ｍ、南端で8.3ｍとほぼ水平ながら、若干南方へ傾斜する。また、本溝は、浅く、水平であるため、すぐに埋没したらしく、浚渫された後には溝幅が上幅で50cmに縮小されている。

図36は第３C 面溝３出土遺物。図３－１はかわらけ。背高気味で、内底面が広く、器壁は内湾しながら立ち上がり、体部上位付近より大きく外反する。２は浅鉢型火鉢。

３は常滑片口鉢Ⅰ類。口縁上端部は沈線が巡る。小片のため、使用痕などは確認できなかった。

4は銭。1086年初鋳の「元祐通寶」である。背面に文字などは見られない。

5～8は箸。最小は18.6cm、最長は20.8cmを測り、いずれも21cm以下の短い製品である。9～10は篦状木製品。10は細い削りで調整される。11～12は棒状木製品。13～16は用途不明木製品。13は鳥形とも考えられるが、形代にしては厚味がありすぎるため、用途不明木製品とした。16は部材の可能性がある。

東西溝

溝2

第Ⅰ区の南西から北西へと延伸する。道路側溝である溝12との合流の有無や時期的前後関係は不明であるが、溝3より古い。底面海抜高は、調査区西端で8.01m、調査区東端で8.31mを測り、西方へ大きく傾斜している。南西方向にあると思われる旧扇ヶ谷川に向けて流下しているのであろうか。

溝は土層壁で確認するかぎり、上幅190cm、下幅118cm、深さ54cmを測る。発見された溝の中では最大規模を持つ本溝の北壁と底面には木組みが発見され、溝の造作にあたって河川へ向けて調査地一帯の湧水と生活排水を考慮したものであることが察せられる。

溝側面を養生する北壁の木組みは、下層面の溝にも発見されていた横板を杭で支えるものである。横板は全長を残すものはなく、いずれも端部が腐食しているが、最長のもので191cmを測る。横板の幅も削り込まれているものや切り込みがあり、本来の形状を知りえない。こうしたことから廃材を転用したことも考えられる。確認できた限りでの横板は長手で2枚がつなげられ、最大で3段積み上げられている。いずれの場合も、溝壁面の土砂が溝内へ流れ込まないように互いに重ね合わせられている。

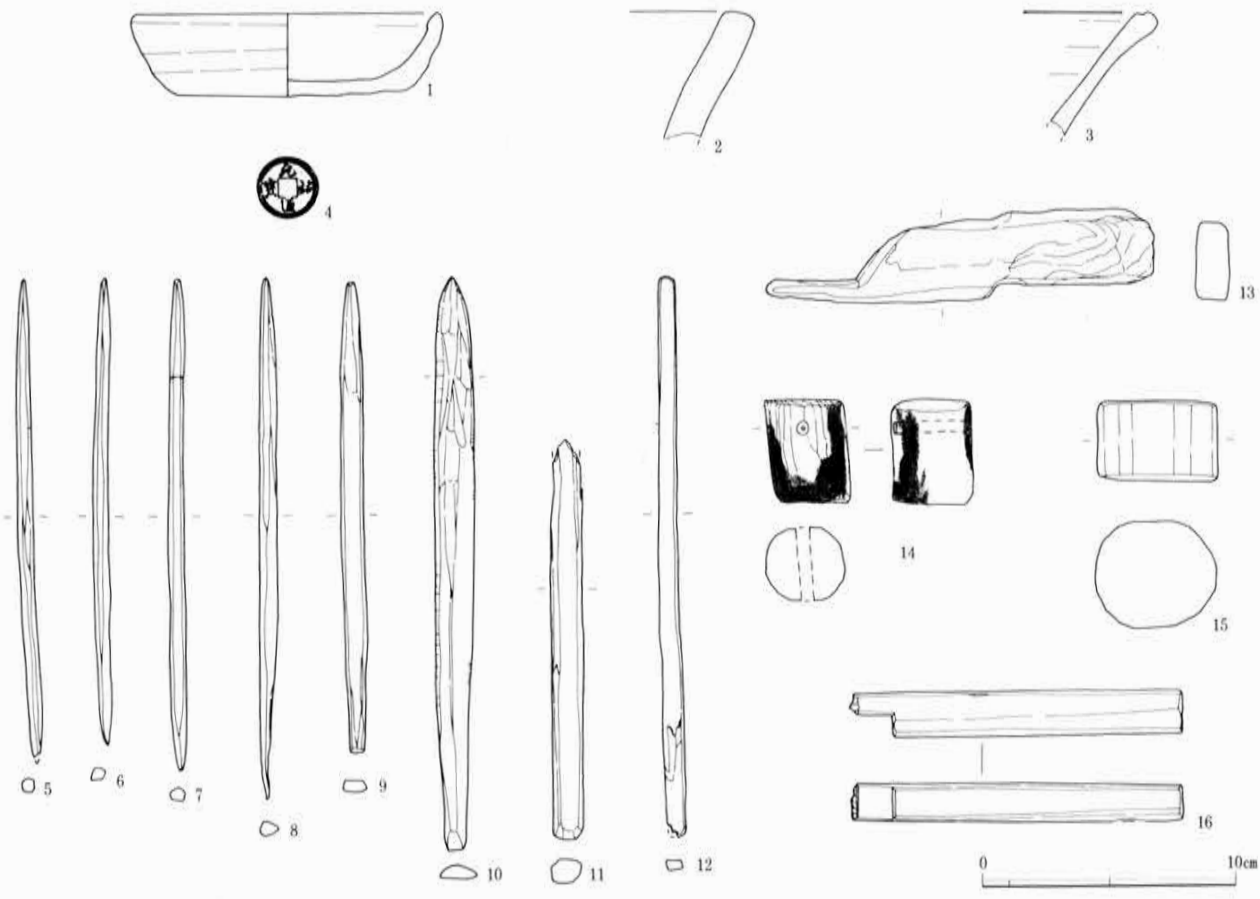


図36　第3C面溝3出土遺物

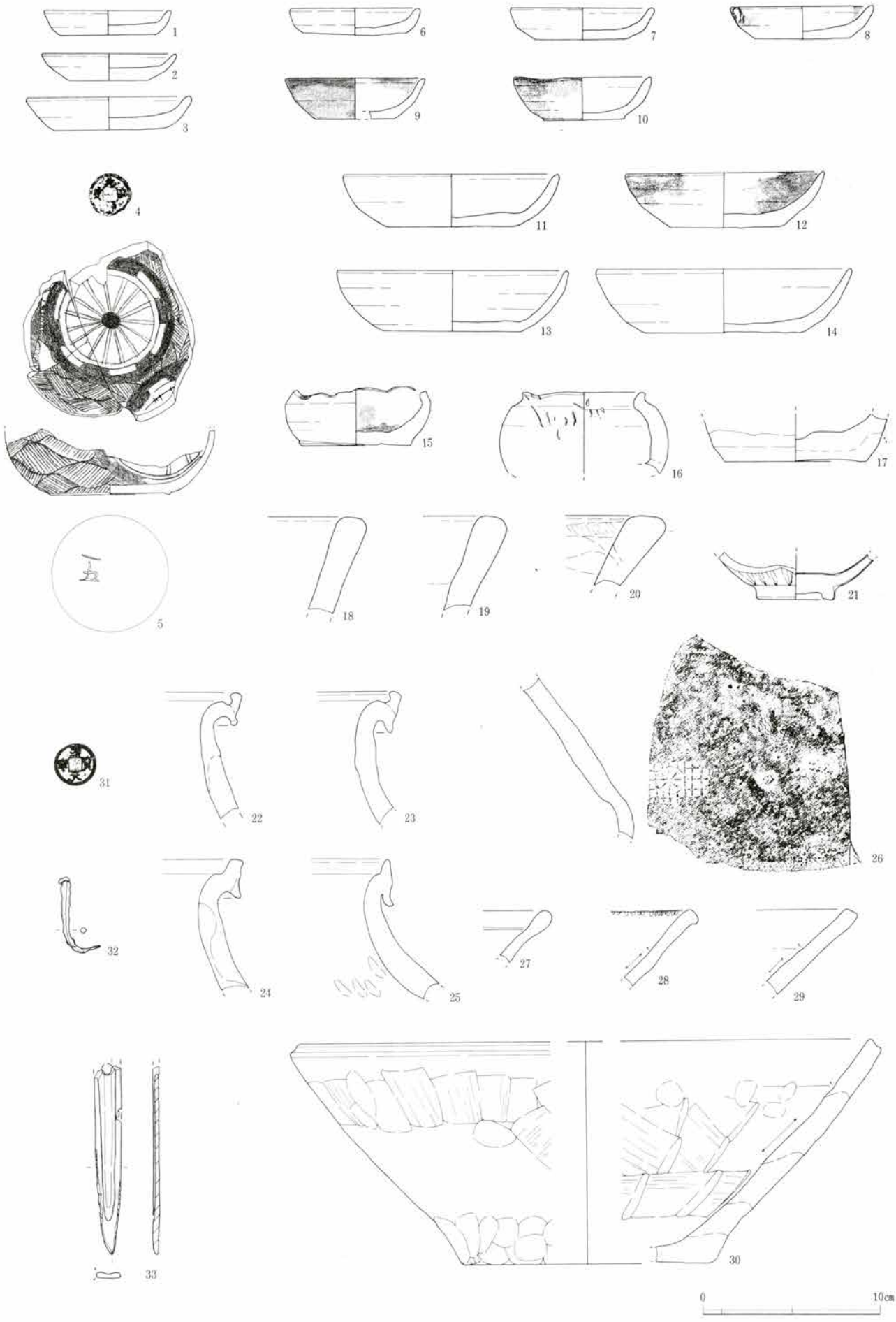


図37　第３C 面溝２出土遺物（１）

溝底面の木組みは、掘り方底面に溝に直角に厚さ４cmの板材を置き、その上に幅７cm、厚さ5.5cm、長さ109cmの角材を22cm間隔で溝に平行に乗せ、さらに角材に直交して、すなわち溝の直交方向に幅９～19cm、厚さ1.5cm、長さ107cmの板を隙間なく敷き詰める。溝底面の傾斜を保つために、周到な作業の行われたことが解る。

こうした、周到な溝の木組みと、西方に想定される旧扇ヶ谷川へ向けた湧水の流下は、東西溝の北方に広がる地業面を本報告では路地と表現しているが、果たして明瞭な路盤構成の見られる南北道路と変わらぬ生活空間規制をこの路地が有していたとも予想される。

図37～39は第３C面溝２出土遺物。図37－１～５は覆土下層より出土した。

図37－１～３はかわらけ。いずれも背低気味で、内底面が広く、器壁は開きながら直線的に立ち上がり、口縁部付近より外反する。同時期の遺構より出土したかわらけよりも古い様相を呈している。

４は銭。1086年初鋳の「元祐通寶」である。背面に文字などは見られない。

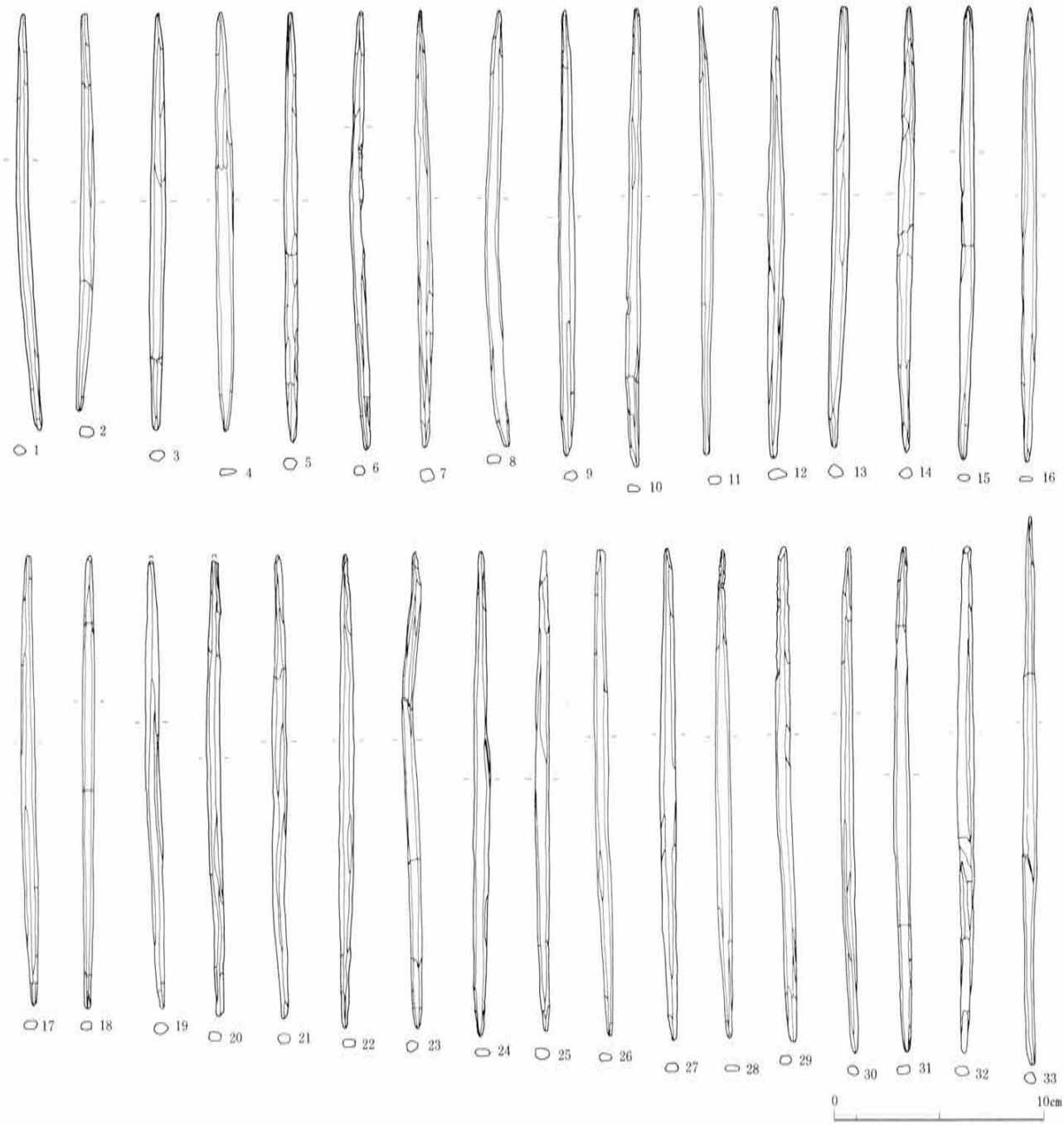


図38　第３C面溝２出土遺物（２）

5は漆椀。内外面ともに黒色漆を塗った後、赤色漆により源氏車が手描きされる。また、底裏は錐のような先端の尖った工具により「五」と刻まれる。

6～14はかわらけ。6は背低で、内底面が広く、器壁は開きながら直線的に立ち上がる。7～8は内底面は広めだが、器壁は内弯しながら立ち上がり、側面観碗型に近い器形を呈する。9～10は背高で、器壁は薄く、内弯気味に立ち上がり、口縁部付近より外反する。両者ともに内外面に煤が付着し、10は口縁部付近に強い火熱を受けて歪んでいることから、とりべとして使用された可能性がある。11～12は中型かわらけ。いずれも背高気味で、内底面が広く、器壁は内弯しながら立ち上がる。12の方が側面観碗型に近い器型である。13～14は背高で、器壁は薄く、内弯しながら立ち上がり、体部上位付近よりわずかに外反する。15は転用灯明皿と思われる。外底部は糸切り後、指頭による雑なナデ消しで糸切り痕を消している。土製の小壺破損後、破損断面を打ち欠き、あるいは研磨して平滑に調整し灯明皿に転用したものと思われる。体部内面中位より内底面にかけては煤が付着するが、破損断面には煤は付着していない。16は土製広口小壺。底部と体部は貼り合わせにより成形される。体部内外面に焼成前に錐のような先端の尖った工具により引掻いてできた条線文が見られるが、製作時に動物の爪などが当たって付いたキズの可能性もある。17は土製用途不明品。外底部は粘土の継ぎ足した痕跡が見られる。また、外底面には間隔が狭く明瞭な糸切り痕が残る。18～20は浅鉢型火鉢。20は体部内面上位付近に調整痕が明瞭に残る。いずれも小片のため、使用痕などは確認できなかった。

21は青磁鎬蓮弁文碗。蓮弁文は明瞭に残る。高台端部から底裏にかけては露胎。内底面には使用に

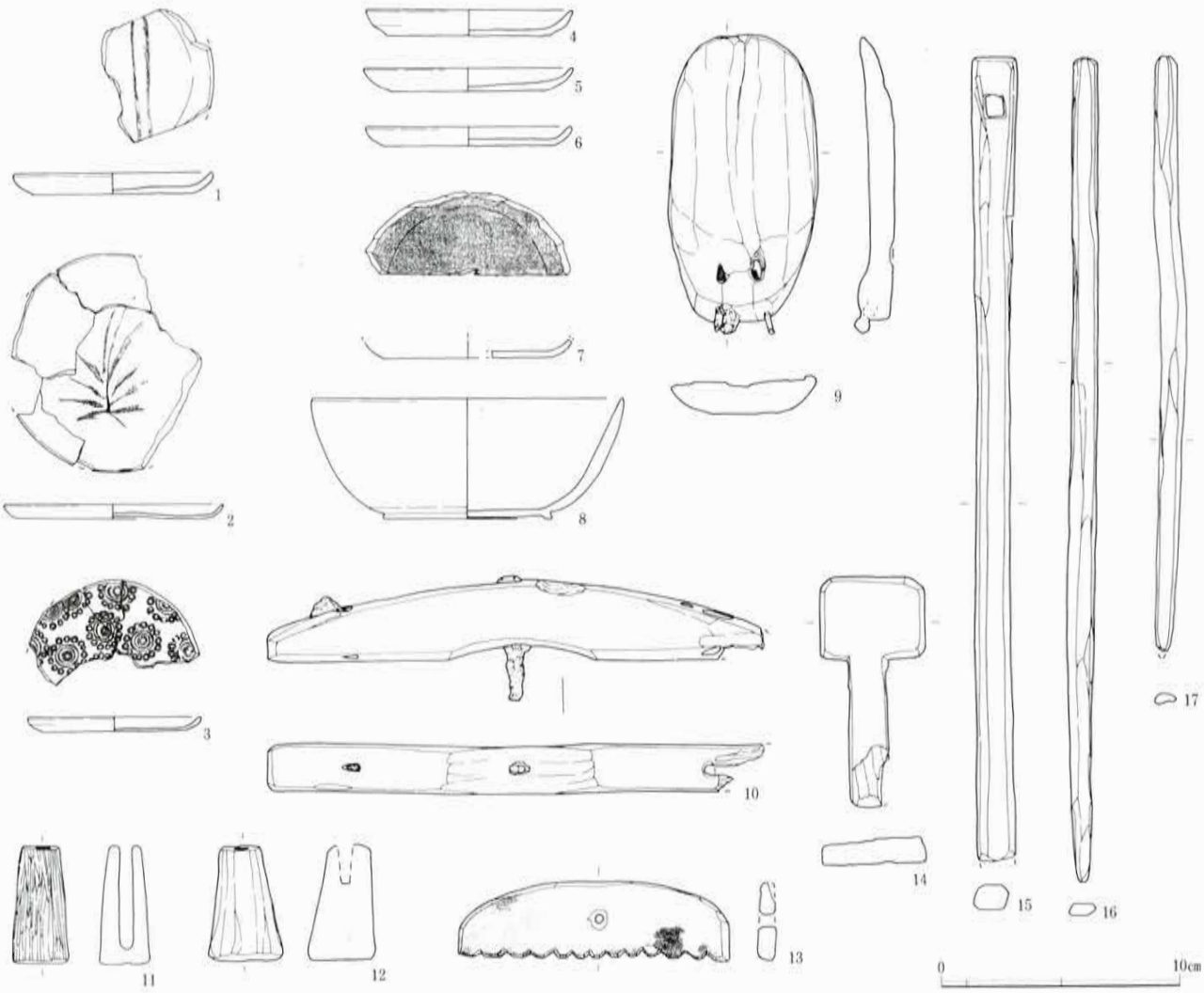


図39　第3C面溝2出土遺物（3）

よるキズが多く残る、また、破損断面には漆継痕が見られる。

22～25は13世紀後半の常滑甕、26は常滑甕の肩部に残る押印の拓影である。27～28は常滑片口鉢Ⅰ類。27は小片のため、使用痕を確認できなかった。28の口縁部は外方へ伸び、傘状を呈する。また、口縁端部は打ち欠き痕が残る。29は14世紀前半頃の、30は13世紀後半の常滑片口鉢Ⅱ類である。29は口縁部下は指頭による横ナデ、体部外面上位より下方は木口状工具による掻き上げの後、指頭押さえで調整される。30は口縁端部に浅い沈線が巡る。使用による摩滅痕は体部内面上位に観察できる。

31は1068年初鋳の「熙寧元寶」である。背面に文字などは見られない。32は釘。

33は網針。表面に彫られた溝の位置から破損後に再加工したものと思われる。図38は箸。最小は19.1cm、最長は26.5cmを測り、21～23cm代の製品が多い。図39－1～7は漆皿。器高がとても低く、また器壁はとても薄い。いずれも黒色漆を塗った後、1と2は赤色漆により手描きの、3はスタンプによる施文がなされる。4～7は無文である。8は漆椀。内外面に黒色漆を塗っただけの無文椀である。9は木匙。柄の部分とは3本の鉄釘で接合されていたものと思われる。ただし、当該期の木匙は匙と柄を一体で作ることが多いことから破損後に補修して最使用したものとも考えられる。10は容器の把手と思われる。3箇所に接合のための鉄釘孔が遺存し、うち2箇所に鉄釘が遺存していた。11～12は用途不明木製品。11の表面は細い削りで丁寧に調整されている。両者ともに中空となっていることから調度類の脚の可能性がある。13は灰ならし。表裏面ともに被火による炭化が見られるが、下端の波状部が著しく炭化している。14は用途不明木製品。15は木製の柄。上端には方形を呈する穿孔が穿たれる。16～17は篦状木製品である。

第3C面下出土遺物(図40)

第3C面構築時の年代を示すと思われる遺物をここで取り上げる。図40－1～7はかわらけ。1～2は背低気味で、器壁は開きながら立ち上がる。3～4は背低で、内底面が広く、器壁は内弯しながら直線的に立ち上がる。5～6は中型かわらけである。5は粉質精良胎土。背低で、器壁は薄く、内弯しながら立ち上がる、いわゆる「薄手丸深」型である。6は背高で、器壁は内弯しながら立ち上がり、側面観碗型を呈する。7は大型かわらけ。背低で、内底面が広く、器壁は内弯気味に立ち上がり、口縁部付近よりわずかに外反する。

8～9は常滑片口鉢Ⅰ類、10は13世紀後半頃の常滑片口鉢Ⅱ類である。いずれも小片のため、使用痕などは確認できなかった。

11～12は草履芯。11は全長が17.7cmを測る子供用の草履芯と思われる。尻緒をかける切れ込み部は鋭角に切り取られる。いずれも植物圧痕などは見られない。13～14は下駄の鼻緒留め。15の連歯下駄の付属品と思われる。15は連歯下駄。横緒孔に対して前緒孔の方が小さい。上方には押圧痕がわずかに残る。16～38は箸。最小は16.9cm、最長は24.3cmを測り、19～20cm代の短い製品が多い。39～40は漆皿。両者ともに背低で、器壁はとても薄く成形されている。黒色漆を塗った後、赤色漆により花文が手描きされる。

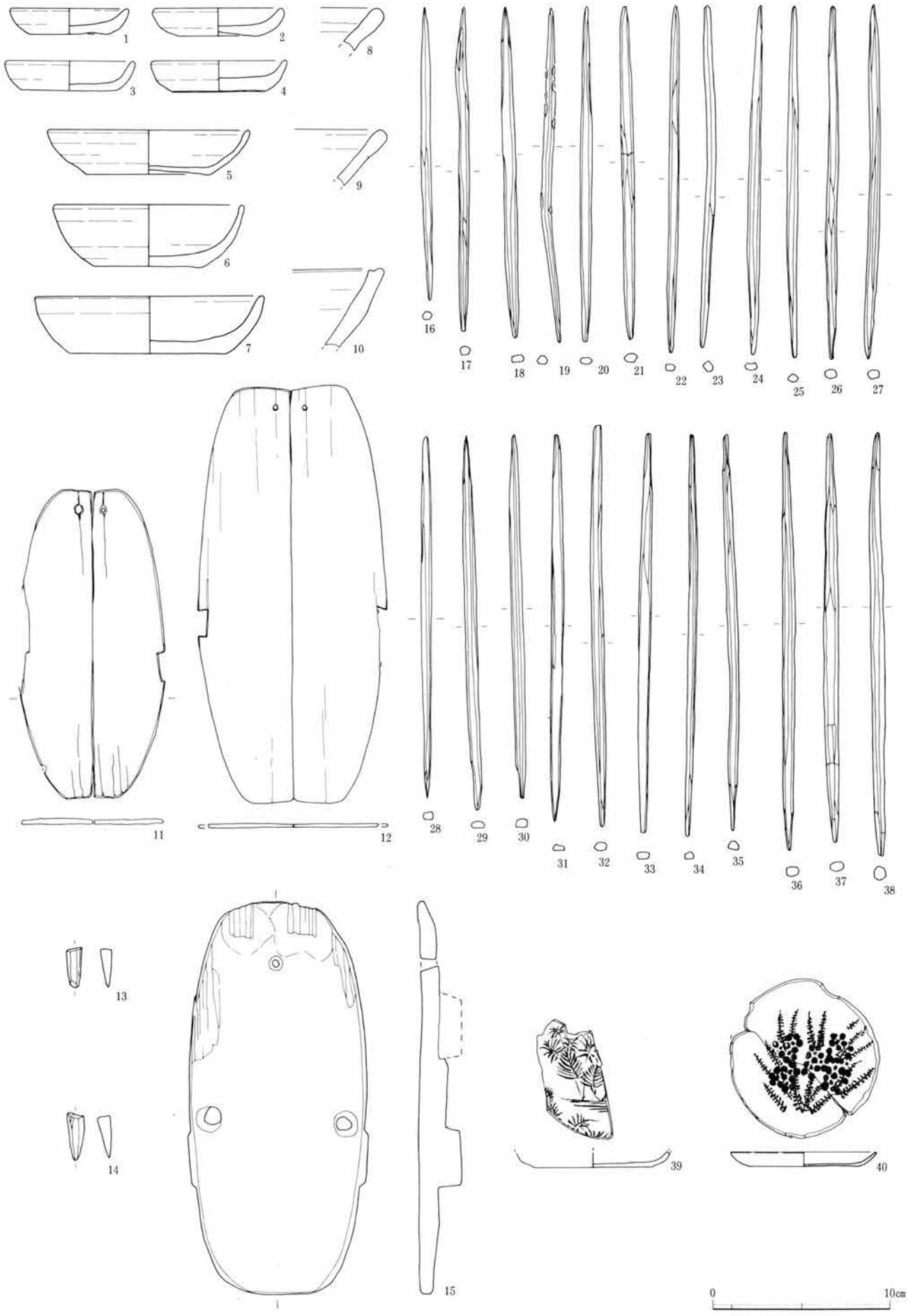


図40　第３C 面下出土遺物

第６節　第２面(図71)

この時期になると、下層面にみられた南北道路とその側溝、さらに東西溝による生活面の地割が消失する。発見される遺構は破砕砂質凝灰岩と泥岩を版築した生活面と、そこに掘り込まれたピットのみとなる。

生活面

第３Ｃ面直上に砂質凝灰岩と泥岩を破砕しながら版築された生活面は、調査区の中に版築の粗密を示しながらも、海抜8.75～8.65ｍの平坦面をなす。ピットはこうした生活面のうち、比較的版築された泥岩の疎らな調査区の南方域に発見された。

ピット

都合９口のピットが発見された。第Ⅱ区に発見された５口の平面円形掘り方のピットはいずれも浅く、10～15cmの深さを測る。他方、第Ⅰ区に発見された４口のうち、ピット39は深さ20cm、ピット41は深さ18cmと比較的深く、さらにピット40は深さ12cmながら底面に礎板を遺存していた。

これらの９口のピットの間に何らかの建物や構造物を復元させる規則性を見てとることは出来なかった。また、下層面での道路遺構路盤の版築に際してみられた土留めのための杭痕とも、配置や方向性が異なる。これらのピットの性格は不明とせざるを得ない。

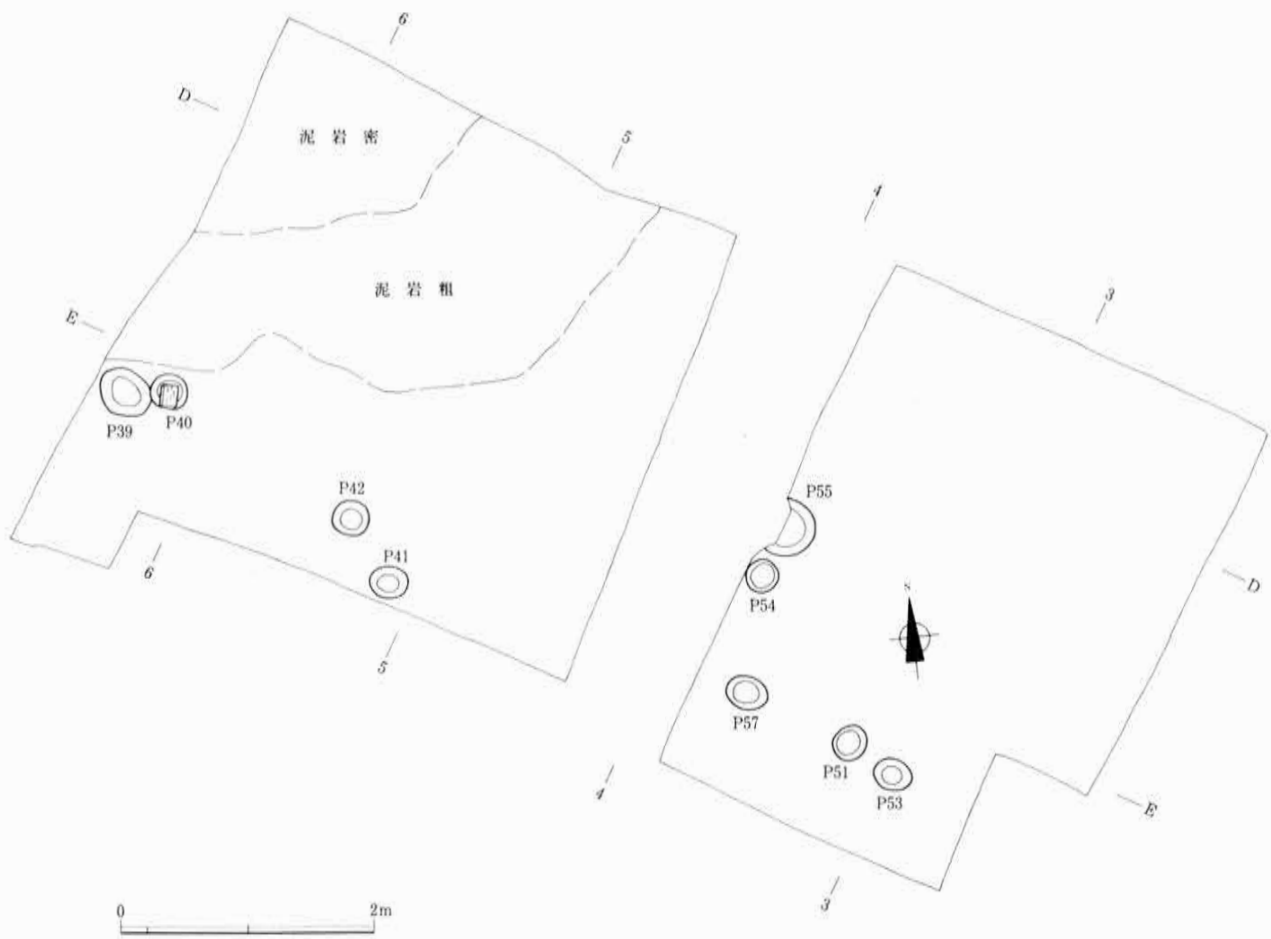


図41　第２面全測図

図42－１はピット39より出土した13世紀中頃の常滑山茶碗。付け高台はだいぶ退化している。体部内面には使用による摩滅痕が残る。

図42　第２面遺構出土遺物

第２面下出土遺物(図43)

第２面の構築年代を示すと思われる出土遺物をここで取り上げる。図43－１～６はかわらけ。いずれも背高で、器壁は薄く、内弯、あるいは内弯気味に立ち上がる側面観碗型を呈する。ただし、２～４のかわらけの胎土は混入物の少ない粉質胎土であることから、「薄手丸深」型に近い時期の製品と考えられる。７は土鍋の鍔部。遺存部には使用による煤などは見られない。８～９は輪花型火鉢。８は内外面ともにヘラ状工具による縦方向のミガキの後、体部外面上位には丸文のスタンプが押印される。９の器壁は薄い。遺存部は体部内外面ともに指頭ナデによる調整がなされる。10は瓦質火鉢。遺存部は体部内外面ともに指頭横ナデによる調整がなされる。11は軒平瓦。凹面は布目痕と指頭ナデ、凸面は指頭によるナデで調整される。瓦当部との接合方法は確認できなかった。また、瓦当部上方から凹面端部にかけては煤が付着している。

12は14世紀前半の瀬戸鉄釉瓶子。ヘラ状工具による蓮弁文が施文されるが、蓮弁文の上方にわずかに唐草状の文様が観察できることから文様構成は組み合わせであったことが窺える。13は青白磁椀か。施釉は厚めになされるが、体部外面下位から外底面にかけては露胎。内外面ともに使用によるキズがわずかに残る。また、破片の状態で火を受け、外面は釉がわずかに白濁する。

14は釘。15～16は銭。15は1038年初鋳の「皇宋通寶」、16は1098年初鋳の「元符通寶」である。いずれも背面に文字などは見られない。

17は産地不明の砥石。石目は微かに鉄分の貫入が観られるが、おおむね均一で安定している。仕上砥として産地を想定した場合、鳴滝では白色系の石材は産出しないし、側面切出し痕から沼田産の仕上げ砥とも思えない。また、石材は非常に軟質なことから仕上砥として絶え得るものか疑問である。左右側面と小口に手引鋸状の工具痕が残る。砥面は剥離している。

18は織具と思われる。中央右寄りに径1.1cmほどの孔が穿たれる。19は用途不明木製品。漆工具の可能性がある。20～21は調度類の脚。上面のほぞ部分を除いて全面に黒色漆が塗られている。22～23は箸。23の上端は無調整であることから箸ではない可能性もある。24～25は棒状木製品。24は上下端部ともに削り調整痕が明瞭に残る。26～28は曲物の底板。26は左側面に一箇所木釘孔が遺存する。27は側面には木釘孔は見られないが、上面に２箇所の穿孔が見られる。また、上方は強く炭化していることから転用品と考えられる。28は側面に木釘孔は見られない。周縁を波形に切り落として転用したものと思われる。29は調度飾り。上側面以外は黒色漆が厚く塗られる。30～31は建具と思われる。表面には低い出っ張りが観察できることから格子などの桟と考えられる。32～36は用途不明木製品。32は上側面に釘孔が穿たれる。また、裏、および下面に黒色漆が塗られる。33は形状から琵琶形の可能性がある。鹿首は欠損する。34は杓子状木製品の可能性がある。36は連歯下駄の歯の転用品か。上方に穿孔が見られる。

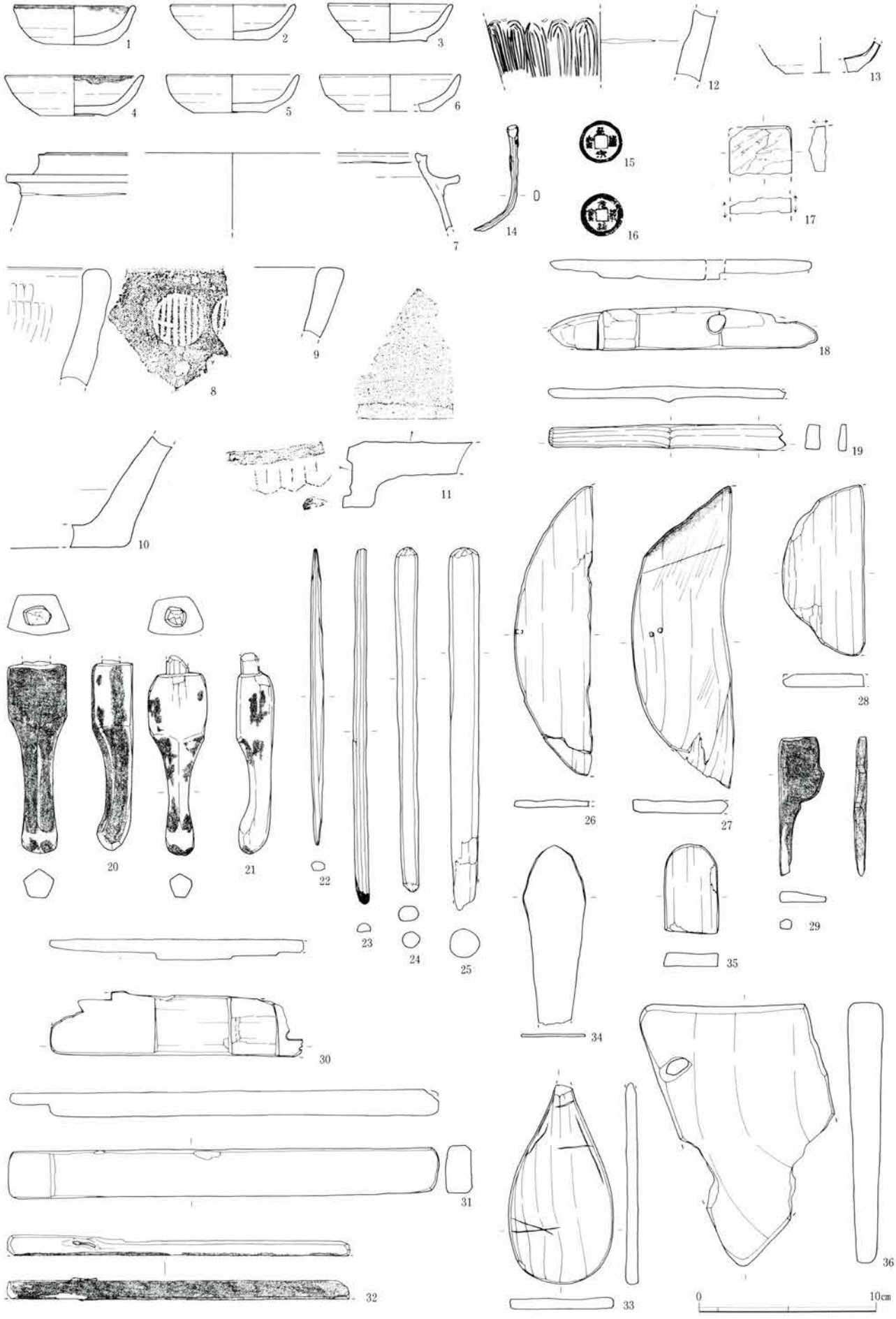


図43　第２面下出土遺物

第７節　第１面(図44)

第２面直上に堆積したに暗黄褐色土、もしくは黄褐色の粘質土によって構成される生活面である。

生活面

現地表土と第１面を構成する土層の間には、下層の第2面にて泥岩の版築が密であった第Ｉ区の北西部に、今回も破砕泥岩による版築層が薄く認められた。また、第１面を構成する土層からは後述のように中世前期に帰属する遺物が出土する一方、現地表土中からは中世後期や近世に帰属する遺物が出土していない。このことは、調査において第１面を構成するとした土層が、すでに現地表土が堆積する以前に削平されていたことを示している。今回、第１面構成土とした中で、第Ｉ区に認められた薄い泥岩版築層が本来はより厚く、その版築層の上面が当初の第１生活面であったと考えられる。

この生活面からは、ピットが16口発見されたが、いずれのピットもより上方から掘り込まれていたと思われ、調査で確認した深さより、本来はより深かったものと考えられる。

ピット

全てが第Ｉ区にて発見された。調査区の北方に発見されている直径30cm以上の平面円形から楕円形のものは、一部残されていた泥岩版築面の中で泥岩の見られぬ部分を掘り上げてしまったもので、ピットではない可能性が高い。他方、調査区の南部から東部に発見されたピットは明らかに第1面から掘り込まれたもので、比較的深く、20cmを超えるものが多い。しかしながら、第2面のピットと同様にそれ

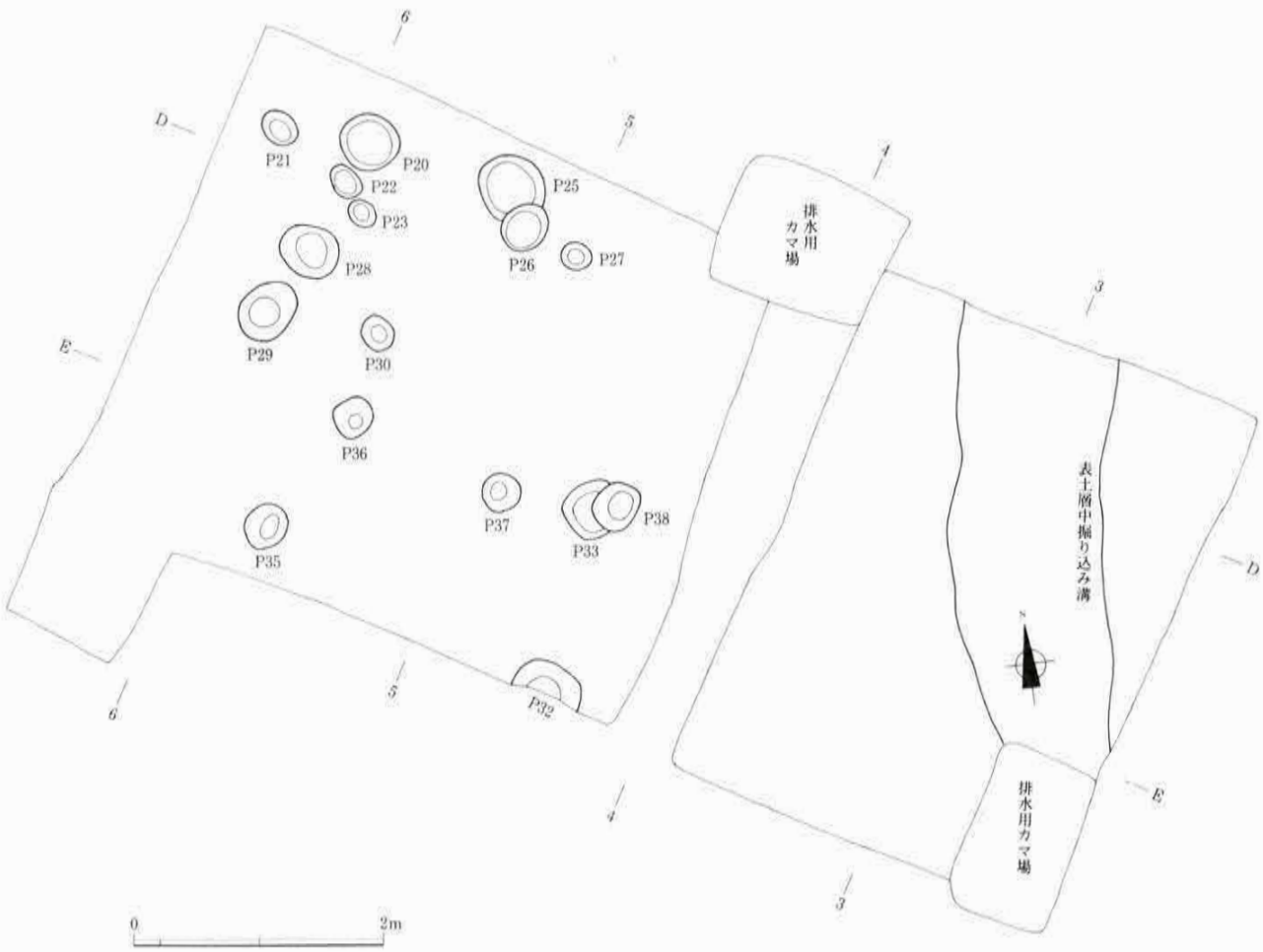


図44　第１面全測図

ぞれに間に何らかの有機的関連を見いだせなかった。

図45－１はピット38より出土したかわらけ。胎土は混入物の少なめ粉質胎土である。背高で、器壁は薄く、内弯気味に立ち上がる側面観碗型を呈する。口縁部付近には煤が付着する。

図45　第１面遺構出土遺物

第１面下出土遺物(図46)

第１面構築時の年代を示すと思われる出土遺物である。図46－１はかわらけ。底部が厚く、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部中位付近より口唇部を尖らせながら外反する。２は土錘。小片のため、煤などの痕跡を確認できなかった。３は輪花型火鉢。体部外面上位から内面にかけてはミガキ、体部外面上位より下方は指頭によるナデで調整される。

４は14世紀中頃の瀬戸灰釉卸皿である。５は13世紀後半から14世紀前半にかけての魚住の片口鉢。小片のため、使用による摩滅痕は確認できなかった。６は常滑片口鉢Ⅰ類。口縁端部は浅い沈線が巡る。７は14世紀後半頃の常滑片口鉢Ⅱ類。口縁部下の指頭ナデは強くて明瞭に残る。いずれも小片のため、使用痕などを確認できなかった。

８は箕。

９は曲物の底板。上面は炭化している。10は枌子状木製品である。

第１面上出土遺物(図47)

発見された最新の生活面よりさらに上層から発見された遺物群である。第１面の継続時期および遺跡地における中世に帰属する生活活動の下限を示す遺物でもある。

図47－１～６はかわらけ。１～２は背低で、内底面が広く、器壁は開きながら直線的に立ち上がる。3～4は背低気味で、底部が厚く、器壁は大きく開きながら立ち上がる。５～６は背高で、器壁は内弯か、内弯気味に立ち上がり、口唇を尖らせながら大きく外反する。７はかわらけ転用品である。８は平瓦。凹面は砂目痕と指頭によるナデ、凸面には砂目痕が残る。

９は白磁口兀皿。底部は厚く、器壁は大きく外反する。外底部は施釉後に拭い取られる。遺存部に使用によるキズは見られない。10は青磁器種不明品である。型打ちによる成形と思われる。体部外面中位のわずかな張り出しより上方には、使用による横方向のキズが著しく残る。また、破損断面には漆継が残る。11は青磁鉢。畳付は露胎である。内底面は使用によるキズが多く残る。

12～13は常滑片口鉢Ⅰ類。12は口縁端部に沈線

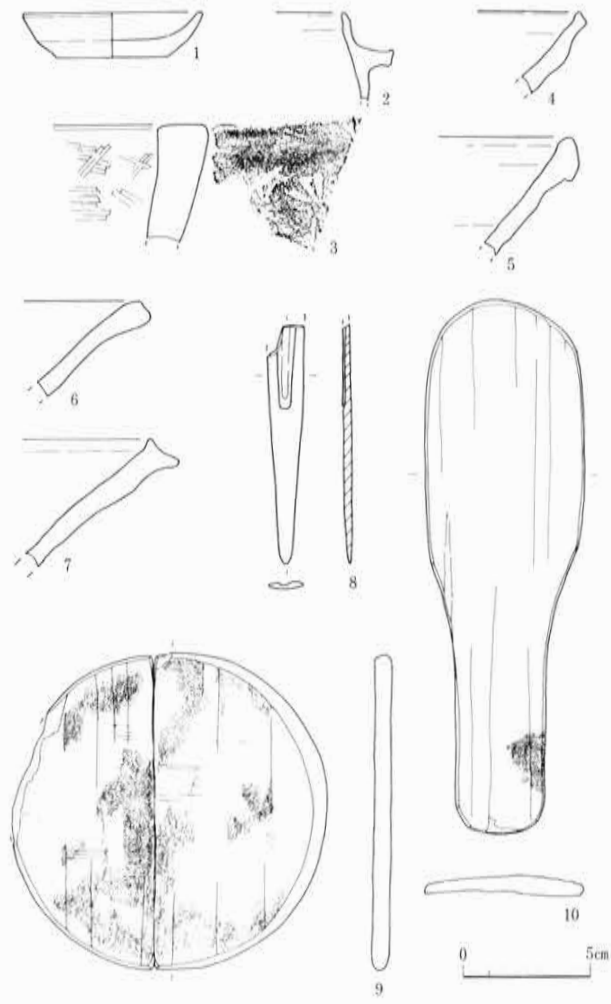


図46　第１面下出土遺物

が巡る。小片のため、使用痕などは確認できなかった。13は小片のため、傾きに不安がある。貼付け高台はだいぶ退化している。体部内面下位より下方には使用による摩滅痕が残る。14は14世紀前半の瀬戸灰釉折縁深皿。器壁の厚さから中皿の可能性もある。15は備前擂鉢。遺存部には使用による摩滅痕は見られない。

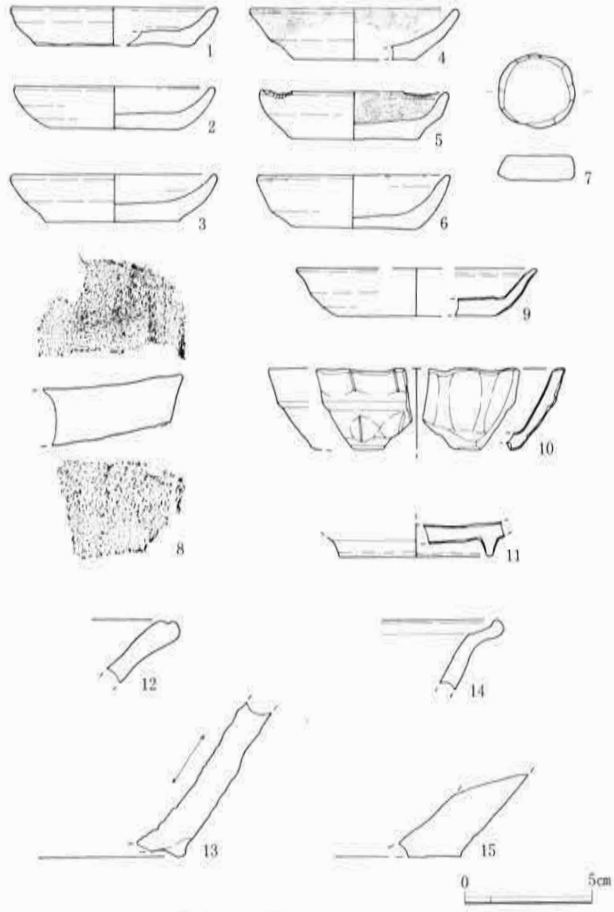


図47　第1面上出土遺物

表採遺物(図48～49)

図48－1～7はかわらけ。1は極小かわらけである。口縁部は直立していることから内折れを意識しているものと思われる。2～5は背低気味で、内底面が広く、底部が厚い。器壁は、2と3が開きながら直線的に立ち上がり、4と5が内弯気味に立ち上がる。6は背高で、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がる側面観碗型を呈する。7は4や5と同型に分類される大型かわらけである。8は丸瓦の玉縁部付近である。凸面は縄目痕と指頭ナデによる調整痕、凹面は布目痕と、指頭ナデによる調整痕が残る。

9は青磁花瓶脚台。脚部は型作りによる成形と思われる。また、破損断面の観察から脚部と体部とは粘土を用いて接合していることが窺える。体部外面下位から内底面にかけては露胎だが、釉は強い二次焼成を受け、白濁している。

10は14世紀前半頃の瀬戸灰釉折縁深皿。11～12は13世紀後半～14世紀前半にかけての瀬戸灰釉卸皿

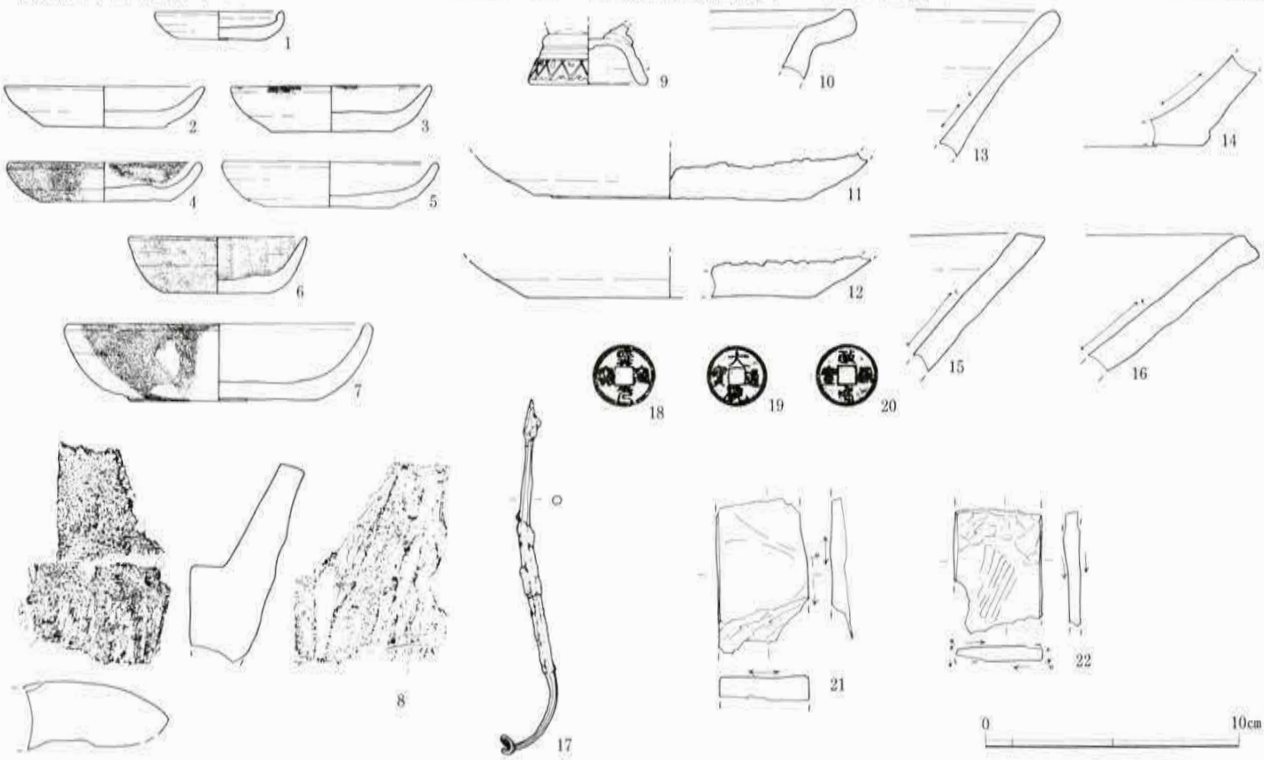


図48　表採遺物(1)

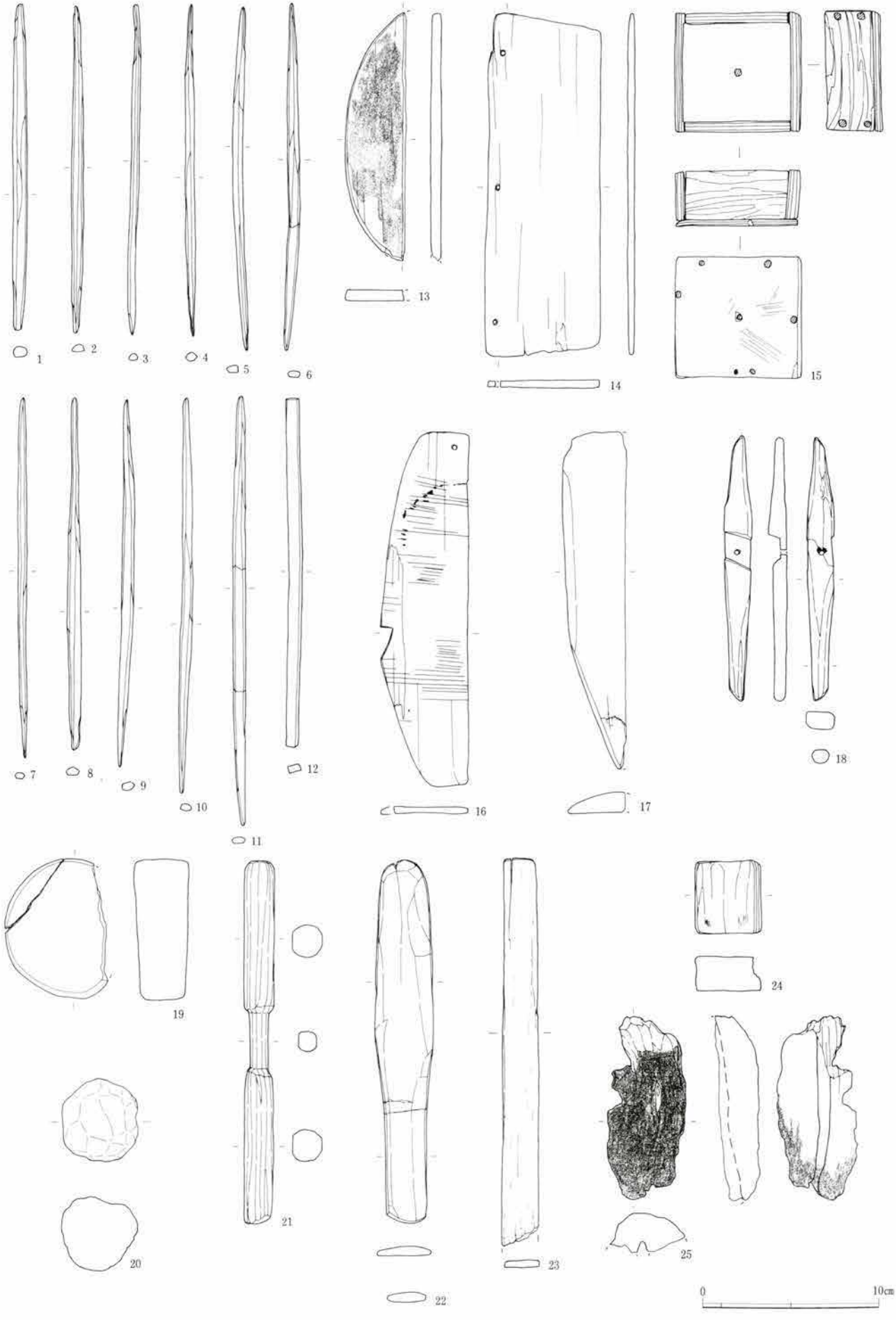


図49　表採遺物（2）

である。13は常滑片口鉢Ⅰ類。体部内面中位より下方に使用による摩滅痕が残る。14～17は常滑片口鉢Ⅱ類である。15と16は13世紀後半から14世紀前半の製品である。いずれも体部内面には使用による摩滅痕が残る。

17は鉄釘。18～20は銭である。18は1068年初鋳の「熙寧元寶」、19は1107年初鋳の「大観通寶」、20は1111年初鋳の「政和通寶」である。いずれも背面に文字などは見られない。

21～22は砥石。21は沼田産の仕上砥である。石目は硬質で緻密である。22は鳴滝(向田)産仕上砥。左右側面には鉉鋸痕が残る。砥面は表裏2面に残るが、剥離破損が著しい。

図49－1～11は箸。最小は18.8cm、最長は24.6cmを測り、19～20cm代の製品が多い。また、12は両先端ともに削りが入っていないことから、箸の加工途上品の可能性がある。13は曲物の底板。表面は強く炭化している。14は折敷の転用品と思われる。左側に小穴が3箇所穿たれる。15は枡と思われる。底板の上に4枚の側板を組み合わせ木釘で接合している。また、底板の中央にも木釘が遺存している。16は草履芯。全長20.4cmを測るやや小振りな製品である。尻緒をかける切れ込み部は鋭角に切り取られる。17は用途不明木製品。木製工具類の可能性がある。18は糸巻きの横木。全体に丁寧な削りで調整される。19は円板状木製品。20は毬杖の鞠。第3A面溝7bより出土した鞠よりも調整は粗い。21は竪杵の模造品。使用痕などは見られないことから形代の可能性がある。全体にとても細く丁寧に削り調整される。22は小型の杓子状木製品。表面はノミ状工具により荒い削り調整がなされる。23～25は用途不明木製品。25は中空になると思われる。また、表面と裏面の下側は強く炭化する。

第４章　まとめ

調査は、湧水の影響により、中世地山層まで達することが出来ず、平面的には現地表から2.4m 下方の第５面までしか把握できなかった。調査地内には、いまだ下方へ１ｍ前後の厚さの中世文化堆積層が存在するであろうことを感触として得ている。こうした調査で確認できた生活面の年代を出土遺物から探ると以下のように考えられる。

手づくねかわらけは面として捉えることのできた最古面である第５面からも全く出土していない。他方、第５面から第１面までの調査で出土した糸切りかわらけには次の４器型におおむね分類できる。１.背低で、内底面の広い、器壁が開きながら直線的に開く器型、２.器壁に対して底部が厚く、器壁は大きく開きながら立ち上がる器型、３.背高で、器壁は内弯しながら立ち上がる側面観碗型を呈する器型、４.「薄手丸深」型の製品である。以下にこれらの4器型と他の陶磁器を加えた出土層位を見ることにする。

第５面では内底面の広いタイプのかわらけが多く出土している一方、「薄手丸深」型は大型、小型ともに見られない。常滑山茶碗は13世紀後半の製品が出土しているが、片口鉢Ⅱ類は見られない。

第４面になると大型かわらけの部類に前代の内底面の広いタイプの様相を残した側面観碗型を呈する器型が出現し、かわらけでは新に中型かわらけが加わる。また、当該期より常滑片口鉢Ⅱ類、青磁蓮弁文鉢が出土している。

第３面では遺構の変遷にしたがって３時期に細分されているが、かわらけには明瞭な違いを見ることはできなかった。大型かわらけでは側面観碗型を呈するものが主流となり、第３Ｂ面において「薄手丸深」型が出現する。他方、小型かわらけでは背低で内底面の広い器型が主流だが、第３Ｃ面において大型かわらけを追うように側面観碗型を呈する器型が出現する。ただし、溝２より出土したかわらけの様相は前代の器型を呈するものの方が多く見られることは興味深い。また、小型かわらけに「薄手丸深」型は未だ見ることはできないが、第３Ｃ面下より中型かわらけの「薄手丸深」型が出土している。

以上の第５面から第３面にかけて出土した遺物群に13世紀代３四半期から14世紀代１四半期に掛けてのおおまかな変遷を見てとることが出来るものの、第５面から第３面にかけての相次ぐ溝の作り替えにより、遺構内覆土にあった遺物が掘り上げによって大きく移動していることが予想される。このため、以上の生活面の年代は、かわらけの器型変化と陶磁器類の出土様相から13世紀後半から14世紀前葉に収まると措定しておく。

第２面ではかわらけの多くが細破片で出土したため、器型を観察しうる製品がなかったが、第１面のピット中より側面観碗型を呈する小型かわらけが出土している。これを考慮すれば、第２面時も中世前半期のかわらけを用いていたことを想定できる。おおまかな把握でしかあり得ないが、第２面から第１面は14世紀中葉以降から14世紀一杯までに収まるものと考えられる。

以上のような年代幅の遺構を確認した今回の調査では、調査地内に残されているであろう13世紀前半の生活面の調査が行えず、また調査面積の狭小さもあって、中世前半期都市鎌倉の生活空間の展開を的確に把握出来なかった側面が残る。しかしながら、都市鎌倉にあって要路であったと考えられる寿福寺前から鶴岡八幡宮前へと抜ける東西路から南方100m 程に位置する当該地点にて、南北と東西方向の道路または路地が確認され、さらに路盤の造作がしっかりしていた南北道路ではなく、より簡便な東西路地の側溝であった東西方向の溝が、おそらくは旧扇ヶ谷川に向けて流下していたことが判明した。若宮大路に面した調査諸地点に発見された東西方向溝が、若宮大路側溝に流れ込んでいたことが判明しているが、今回の調査によって、都市鎌倉内の排水が自然流路と人工的造作による若宮大路側溝の二つの

排水システムであったことが明確に示された。もちろん、若宮大路側溝を流れた流水も旧扇ヶ谷川などの自然流路の中流域に注いでいたものと想定されるが、そうであれば、なおさら若宮大路とその側溝の特殊性が浮き上がってくる。

引用・参考文献

大三輪龍彦　他　1983『研修道場用地発掘調査報告書』鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書所収、鎌倉市鶴岡八幡宮・研修道場用地発掘調査団.

河野眞知郎　1993「中世鎌倉火鉢考－東国との関連においてー」『考古学論叢　神奈川』第2集、54～79頁、神奈川考古学会.

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会

瀬戸市史編纂委員会　1998『瀬戸市史　陶磁史篇　六』.

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター　1997「古瀬戸編年表」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第5輯』.

中野晴久　1994「赤羽、中野　生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所学会.

表1　遺物観察表（1）

挿図番号		出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土色調・成形・整形・備考
1	1	第5面道路下	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は小石と石英を含み、器表とともに橙茶色　胎芯は暗灰色を呈す
5	1	第5面溝16b	かわらけ	8.20	6.30	1.70	胎土は土丹粒・黒色微砂・雲母・白針を含む淡茶色弱粉質土
5	2	第5面溝16b	かわらけ	12.10	6.90	3.70	胎土は土丹粒・黒色微砂・雲母・白針を含む橙色弱粉質土
5	3	第5面溝16b	青磁碗	／	5.10	／	素地は灰色弱粘質緻密土　釉は暗青緑色　内底面にスタンプ文
6	1	第5面溝16a	かわらけ	7.60	1.60	1.60	胎土は土丹粒・黒色微砂・雲母・白針を含む淡茶色弱粉質土
7	1	第5面板壁建物	常滑山茶碗	／	／	／	胎土は1cm大の小石と5mm大の石英を含む明灰色土　器表は明灰色～暗灰色を呈す
7	2	第5面板壁建物	青磁鎬連弁文碗	17.60	／	／	素地は粗い白灰色土　釉は透明感のある青緑色を呈す
7	3	第5面板壁建物	手押木（テシロ）	長17.1×幅2.9×厚3.6			蒲鉾型の形状を呈す
7	1	第5面板壁建物	箸	長23.7×幅0.7×厚0.1			
7	5	第5面板壁建物	箸	長22.5×幅0.7×厚0.1			
7	6	第5面板壁建物	箸	長22.5×幅0.5×厚0.3			
7	7	第5面板壁建物	箸	長22.3×幅0.6×厚0.35			
7	8	第5面板壁建物	箸	長21.6×幅0.8×厚0.6			
7	9	第5面板壁建物	箸	長21.8×幅0.7×厚0.1			
7	10	第5面板壁建物	箸	長21.5×幅0.7×厚0.1			
7	11	第5面板壁建物	箸	長20.8×幅0.5×厚0.5			
9	1	第5面方形土壙	かわらけ	7.90	6.10	1.50	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・土丹粒を含む橙色弱粉質土
9	2	第5面方形土壙	かわらけ	7.00	6.20	1.10	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・雲母を含む淡茶色弱粉質土　口縁部に煤付着
9	3	第5面方形土壙	かわらけ	8.10	1.60	1.90	胎土は白針・黒色微砂・雲母を含む淡赤褐色弱粉質土
9	1	第5面方形土壙	かわらけ	12.70	7.10	3.10	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・土丹粒を含む淡橙色弱粉質土　一部に煤付着
9	5	第5面方形土壙	浅鉢型火鉢	／	／	／	胎土は橙茶色土器質土　器表は炭素吸着により黒褐色を呈す
9	6	第5面方形土壙	平瓦	／	／	／	胎土は黒色微砂・雲母・白針・石英を含む暗灰色瓦質土　器表は暗灰色～茶灰色を呈す
9	7	第5面方形土壙	白磁口兀皿	／	6.50	／	素地は黒色微砂を含む明灰色弱粘質緻密土　釉は乳白色を呈す
9	8	第5面方形土壙	瀬戸入子	／	1.00	／	胎土は明灰色緻密土　碗型か？
9	9	第5面方形土壙	常滑山茶碗	15.20	6.10	5.60	胎土は石英を含むザラザラとした灰色土　器表も灰色を呈す　尾張型
9	10	第5面方形土壙	常滑片口鉢Ⅰ類	22.80	13.60	／	胎土は不純物の少ないザックリとした灰色土　器表は灰色～暗灰色を呈す
9	11	第5面方形土壙	常滑片口鉢Ⅰ類	／	13.20	／	胎土はザックリとした明灰色土　器表は明灰色を呈す　内面は使用によって黄味がかる
9	12	第5面方形土壙	常滑甕				胎土は小石を含むがネットリとした灰色土　器表は茶褐色を呈す
9	13	第5面方形土壙	刀子	遺存長28.9×最大幅2.1×厚0.5			柄の木部が遺存
9	11	第5面方形土壙	飾り具？	径1.95×幅0.1×厚0.6			
9	15	第5面方形土壙	銭				「熙寧元寶」
9	16	第5面方形土壙	銭				「紹聖元寶」
9	17	第5面方形土壙	滑石鍋加工途中品	口縁下径23.65			鍋破損後に鍔を「ノミ」で削り落とされる　外器表全面に煤付着
9	18	第5面方形土壙	栓状木製品	高さ2.3×幅3.7×厚3.3			八角形の粗い面取りがなされるが図9－19とは木取りが異なる
9	19	第5面方形土壙	栓状木製品	高さ1.1×幅1.3×厚1.0			八角形の粗い面取りがなされる
9	20	第5面方形土壙	円盤状木製品	径8.3×厚1.1			円盤のほぼ中心に直径約5mmの木釘が遺存する　柾目取り
9	21	第5面方形土壙	小型杓子状木製品	遺存長8.5×幅2.9遺存×厚0.3			表面は摩耗により工具痕がみられない裏面は剥離の可能性がある　板目取り
9	22	第5面方形土壙	杓子状木製品	長21.7遺存×幅1.9×厚0.5			表面は摩滅によって工具痕を確認できない　裏面には工具による調整がない
9	23	第5面方形土壙	杓子状木製品	長23.2×幅8.0×厚0.8			表裏面ともに摩耗によって工具痕を確認できない　板目取り
10	1	第5面方形土壙	草履芯	遺存長23.5×幅5.2×厚0.1			
10	2	第5面方形土壙	草履芯	遺存長22.7×幅10.2×厚0.3			表面に植物圧痕をわずかに遺す
10	3	第5面方形土壙	草履芯	遺存長23.6×幅9.7×厚0.3			裏表面ともに植物圧痕を遺す
10	1	第5面方形土壙	曲物底板	直径15.7×厚0.9			柾目取り
10	5	第5面方形土壙	漆皿	／	／	／	黒色漆地に赤色漆による藤？のスタンプ文
10	6	第5面方形土壙	漆椀	／	5.65	／	器壁が非常に薄い　遺存部に施文はみられない
10	7	第5面方形土壙	漆皿	(8.50)	(6.00)	(1.00)	黒色漆地に赤色漆による手描きの雑な格子花文
10	8	第5面方形土壙	漆皿	／	／	／	黒色漆地に赤色漆による手描きの雑な花文と土坡
10	9	第5面方形土壙	漆椀	／	(6.5)	／	黒色漆地に赤色漆による手描きの飛鶴文
10	10	第5面方形土壙	箸	長21.6×幅0.7×厚0.1			
10	11	第5面方形土壙	箸	長22.1×幅0.5×厚0.1			削り調整が少ない
10	12	第5面方形土壙	箸	長22.3×幅0.7×厚0.1			
10	13	第5面方形土壙	箸	長22.1×幅0.7×厚0.1			
10	14	第5面方形土壙	箸	長22.5×幅0.7×厚0.5			
10	15	第5面方形土壙	箸	長23.6×幅0.8×厚0.6			多くの削り調整が施される
10	16	第5面方形土壙	箸	長21.0×幅0.7×厚0.5			
10	17	第5面方形土壙	箸	長21.0×幅0.8×厚0.5			
10	18	第5面方形土壙	箸	長21.0×幅0.7×厚0.6			
10	19	第5面方形土壙	箸	長21.3×幅0.7×厚0.5			

表1　遺物観察表（2）

挿図番号		出土地	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	胎土色調・成形・整形・備考
10	20	第5面方形土壙	箸	長21.3×幅0.7×厚0.1			
10	21	第5面方形土壙	箸	遺存長21.2×幅0.7×厚0.1			
10	22	第5面方形土壙	箸	長21.5×幅0.7×厚0.1			
10	23	第5面方形土壙	箸	長21.3×幅0.7×厚0.5			
10	24	第5面方形土壙	箸	長21.8×幅0.6×厚0.1			削り調整が少ない
10	25	第5面方形土壙	箸	長21.7×幅0.8×厚0.6			
10	27	第5面方形土壙	箸	長21.9×幅0.7×厚0.3			削り調整が少ない
10	26	第5面方形土壙	箸	長21.9×幅0.6×厚0.1			
10	28	第5面方形土壙	棒状木製品	長28.0×幅1.1×厚0.1			両先端は雑な削りで尖るが、左右側面は割り取りのまま未調整加工途上品か？
10	29	第5面方形土壙	杭状木製品	遺存長20.7×幅2.0×厚1.8			先端は非常に丁寧な削りが施される
10	30	第5面方形土壙	棒状木製品	遺存長14.7×幅1.0×厚1.0			先端は削りが施されて尖る　図上中位より上方は被火により炭化
11	1	不明南北道路側溝	杭	長16.2×幅2.7×厚2.0			
13	1	第1面道路下	かわらけ	8.00	6.00	1.50	胎土は土丹粒・黒色微砂・雲母・白針を含む淡茶色弱粘質土
13	2	第1面道路下	かわらけ	8.20	5.90	1.50	胎土は土丹粒・黒色微砂・雲母・白針を含む暗淡茶色弱粘質土
13	3	第1面道路下	かわらけ	11.50	6.60	3.10	胎土は多くの貝殻粒・土丹粒・黒色微砂・雲母・白針を含む暗肌色弱粘質土　口縁内面に薄く煤付着
13	4	第1面道路下	かわらけ	12.50	7.80	3.10	胎土は土丹粒・黒色微砂・雲母・白針を含む肌色弱粉質土　被火により全体に黒ずむ
13	5	第1面道路下	青磁鎬連弁文鉢	／	4.70	／	素地は灰白色粘質緻密土　釉は青緑色を呈す　釉が厚くかかり鎬も不明瞭
13	6	第1面道路下	扇骨	左端は0.5内側3枚は0.3×幅2.1～2.2内			木釘で組み上がったものが1枚　遊離した5枚の骨は幅が半分に欠損している　やや角を削る
13	7	第1面道路下	箸	長19.8×幅0.6×厚0.1			
13	8	第1面道路下	菜箸	長32.0×幅1.0×厚0.8			
14	1	第1面溝18	かわらけ	12.10	7.50	3.10	胎土は土丹粒・白色微砂・白針・雲母を含む赤褐色砂質土
15	1	第1面溝9b	かわらけ	7.15	5.10	1.80	胎土は土丹粒・白針・白色微砂・黒色微砂・雲母を含む暗肌色弱粉質土
15	2	第1面溝9b	かわらけ	7.15	4.65	1.70	胎土は白色微砂・雲母・土丹粒・黒色微砂・白針を含む淡茶色弱粉質土
15	3	第1面溝9b	かわらけ	7.90	5.60	1.60	胎土は土丹粒・黒色微砂・雲母・白針を含む淡茶色弱粉質土　被火により全体に黒ずむ
15	1	第1面溝9b	銭				「天聖元寶」
15	5	第1面溝9b	銭				「□□元□」　熙寧元寶か？
15	6	第1面溝9b	銭				「元豊通寶」
16	1	第1面溝9a・b	極小かわらけ	4.05	3.15	0.85	胎土は土丹粒・白針・白色微砂・黒色微砂・雲母を含む淡茶色弱粉質土
16	2	第1面溝9a・b	かわらけ	11.80	7.15	3.10	胎土は白色微砂・白針・土丹粒・黒色微砂・雲母を含む暗肌色弱砂質土
16	3	第1面溝9a・b	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は石英微粒を含むザックリとした灰褐色土　器表も灰色を呈す　内側面に煤付着
16	5	第1面溝9a・b	常滑甕	／	／	／	胎土は石英微粒と小石を含む暗灰～灰色土　器表は茶褐色を呈す
16	1	第1面溝9a・b	常滑片口鉢Ⅱ類	／	／	／	胎土は石英粒を多く含む黒褐色土　器表は茶褐色を呈す
16	6	第1面溝9a・b	鏨？	長6.5×幅1.2×厚1.1			重量感あり
16	7	第1面溝9a・b	草履芯	長23.1×幅10.5×厚0.35			裏表面とも植物圧痕を遺す　後端が擦り減る
16	8	第1面溝9a・b	草履芯	長19.1×幅1.9×厚0.5			裏表面とも植物圧痕を遺す　後端が擦り減る
17	1	第1面溝6	かわらけ	12.80	7.80	3.10	胎土は土丹粒・黒色微砂・雲母・白針を含む暗淡茶色弱粉質土
17	2	第1面溝6	浅鉢型火鉢	／	／	／	胎土は白針を多く含む土器質土　胎芯が暗灰色を、器表は茶灰色を呈す
17	3	第1面溝6	浅鉢型火鉢	／	／	／	胎土は白針を多く含む土器質土　胎芯が灰色を、器表は茶灰色を呈す
17	4	第1面溝6	浅鉢型火鉢	31.80	／	／	胎土は白針を多く含み器表付近から胎芯に向かって黄灰色・茶灰色・灰色を呈す土器質土　器表は茶灰色を呈す
17	5	第1面溝6	常滑片口鉢Ⅰ類	20.80	／	／	胎土は石英を多く含む明灰色土　器表は暗灰色から灰色を呈す
18	1	第1面下	かわらけ	7.90	6.00	1.90	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・土丹粒・雲母を含む淡茶色弱粉質土
18	2	第1面下	かわらけ	8.00	6.30	1.60	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・雲母を含む淡橙色弱粉質土
18	3	第1面下	箸	長22.1×幅0.6×厚0.5			
18	4	第1面下	箸	長22.8×幅0.7×厚0.6			
18	5	第1面下	箸	長22.9×幅0.6×厚0.6			
18	6	第1面下	曲物底板	遺存長22.5×遺存幅8.7×厚0.7			周縁部に1箇所あったと考えられる木釘穴の1箇所が遺存する　木釘は最長1.5cmと推測でき、表面に突出してしまったようである　柾目材使用
21	1	第3A面道路下	鉄鍋？	／	／	／	
21	2	第3A面道路下	漆皿	8.50	6.60	1.00	黒色漆地に赤色漆の手描き施文　梅花と龍目を組み合わせた構成文様で外面にも文様あり　無高台
21	3	第3A面道路下	用途不明木製品	長12.1×幅7.2×厚1.1			木口・側面が丁寧に面取されている　板目材使用
21	4	第3A面道路下	扇骨	遺存長21.6×幅1.8×厚0.3			下端部の角を丸く削り調整される　板目材使用
21	5	第3A面道路下	草履芯	長25.0×幅5.7×厚0.3			板目材使用

表1　遺物観察表（3）

挿図番号		出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土色調・成形・整形・備考
22	1	第3A 面溝7b下層	曲物	直径11.0×高さ6.30			3枚の側板を重ね合わせ、桜の樹皮紐で編み込んで止めている　桜樹皮の止めは黒色漆で内面に塗り固めている　底板を止める木釘は2箇所が遺存する
22	2	第3A面溝7b	かわらけ	8.00	5.20	1.80	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・雲母を含む淡茶色弱粉質土
22	3	第3A面溝7b	丸瓦	／	／	／	白色砂粒を含むザラザラした暗灰色瓦質土
22	4	第3A面溝7b	丸瓦	／	／	／	胎土は白色粒・黒色微砂を含む明橙色瓦質土
22	5	第3A面溝7b	箸	長18.0×幅0.95×厚0.7			
22	6	第3A面溝7b	箸	遺存長17.9×幅0.7×厚0.5			
22	7	第3A面溝7b	箸	長19.2×幅0.7×厚0.6			
22	8	第3A面溝7b	箸	長19.6×幅0.7×厚0.5			
22	9	第3A面溝7b	箸	長20.1×幅0.7×厚0.5			多くの削り調整が施される
22	10	第3A面溝7b	箸	長20.7×幅0.7×厚0.6			
22	11	第3A面溝7b	箸	遺存長20.7×幅0.8×厚0.5			
22	12	第3A面溝7b	箸	長20.7×幅0.6×厚0.5			
22	13	第3A面溝7b	箸	長20.7×幅0.7×厚0.7			
22	14	第3A面溝7b	箸	長20.9×幅0.7×厚0.4			
22	15	第3A面溝7b	箸	長20.8×幅0.7×厚0.5			
22	16	第3A面溝7b	箸	長21.1×幅0.7×厚0.4			
22	17	第3A面溝7b	箸	長20.9×幅0.7×厚0.4			
22	18	第3A面溝7b	箸	長21.2×幅0.7×厚0.4			
22	19	第3A面溝7b	箸	長21.2×幅0.7×厚0.5			
22	20	第3A面溝7b	箸	長21.7×幅0.9×厚0.6			
22	21	第3A面溝7b	箸	長21.3×幅0.5×厚0.5			
22	22	第3A面溝7b	箸	長21.5×幅0.6×厚0.6			
22	23	第3A面溝7b	箸	長21.8×幅0.6×厚0.5			
22	24	第3A面溝7b	箸	長21.6×幅0.6×厚0.4			
22	25	第3A面溝7b	箸	長21.6×幅0.6×厚0.7			
22	26	第3A面溝7b	箸	長21.8×幅0.7×厚0.4			多くの削り調整が施される
22	27	第3A面溝7b	箸	長22.2×幅0.7×厚0.5			
22	28	第3A面溝7b	箸	長22.1×幅0.6×厚0.3			
22	29	第3A面溝7b	箸	長22.2×幅0.9×厚0.5			
22	30	第3A面溝7b	箸	長22.1×幅0.8×厚0.5			
22	31	第3A面溝7b	箸	長22.3×幅0.7×厚0.5			
22	32	第3A面溝7b	箸	長22.8×幅0.9×厚0.6			
22	33	第3A面溝7b	箸	長23.2×幅0.65×厚0.4			
22	34	第3A面溝7b	箸	長23.7×幅0.7×厚0.5			
22	35	第3A面溝7b	箸	長23.7×幅0.7×厚0.5			
22	36	第3A面溝7b	箸	長21.6×幅0.9×厚0.6			
22	37	第3A面溝7b	箸	長21.2×幅0.8×厚0.5			
22	38	第3A面溝7b	箸	長21.2×幅0.8×厚0.5			
23	1	第3A面溝7b	漆椀	／	(6.10)	／	黒色漆地に赤色漆の鹿の子スタンプ文
23	2	第3A面溝7b	円盤状木製品	径9.5×厚1.1			
23	3	第3A面溝7b	草履芯	長22.0×幅5.2×厚0.56			後部が擦り減る？
23	4	第3A面溝7b	草履芯	長23.3×幅5.2×厚0.5			鼻緒穴の下方にひし形の小孔が穿けられる
23	5	第3A面溝7b	草履芯	長21.2×幅4.8×厚0.4			
23	6	第3A面溝7b	箆状木製品	遺存長18.0×幅1.2×厚0.8			上端部に火を受けた痕跡
23	7	第3A面溝7b	棒状木製品	遺存長22.9×幅1.3×厚0.7			
23	8	第3A面溝7b	杓子状木製品	遺存長17.0×幅3.75×厚0.4			工具痕みられない　柾目材使用
23	9	第3A面溝7b	杓子状木製品	長21.4×遺存幅4.3×厚0.5			
24	1	第3A面溝7a	かわらけ	6.90	4.55	1.50	胎土は土丹粒・白針・白色微砂・黒色微砂・雲母を含む橙色弱砂質土
24	2	第3A面溝7a	かわらけ	12.65	8.70	3.15	胎土は土丹粒・白針・黒色微砂・白色微砂・雲母を含む淡橙色弱粉質土
24	3	第3A面溝7a	火鉢	25.10	／	／	胎土は土丹粒と小石が若干混入する橙茶色かわらけ質土　胎芯は暗褐色を、器表は赤褐色を呈す
24	4	第3A面溝7a	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は石英と小石を多く含むザックリとした赤茶褐色土　器表は黒茶褐色を呈す
24	5	第3A面溝7a	常滑甕	／	／	／	胎土は明灰色土　器表外面は茶褐色、内面は茶色を呈す
24	6	第3A面溝7a	常滑甕拓影	／	／	／	胎土は灰色　器表外面は緑灰色、内面は赤茶色を呈す
24	7	第3A面溝7a	青磁碗	／	5.10	／	素地は灰色粘質緻密土　釉は灰緑色を呈す　鎬蓮弁文か？
24	8	第3A面溝7a	青磁鎬連弁文碗	／	4.10	／	素地は黒色粒を含む暗灰色弱粘質緻密土　釉は淡灰緑色を呈す
24	9	第3A面溝7a	青白磁梅瓶の蓋	5.60	／	／	素地は白色弱粘質緻密土　釉は淡青色を呈し、薄く施釉される　破損断面に漆継痕
24	10	第3A面溝7a	硯	／	／	／	黒色頁岩　「陸」の左下部のみが残る　毛彫文様あり
24	11	第3A面溝7a	草履芯	長24.1×幅4.8×厚0.4			植物繊維痕が表面の中程に付着し、若干の植物圧痕残る
24	12	第3A面溝7a	草履芯	長23.1×幅5.5×厚0.3			植物圧痕残る　板目材使用
24	13	第3A面溝7a	草履芯	長23.8×幅10.1×厚0.4			中心部に植物繊維痕　端周縁には植物圧痕が残る
24	14	第3A面溝7a	箆状木製品	長23.0×幅1.10×厚0.7			
24	15	第3A面溝7a	箸	長19.7×幅0.7×厚0.5			

表1　遺物観察表（4）

挿図番号		出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土色調・成形・整形・備考
21	16	第3A面溝7a	箸	長19.9×幅0.8×厚0.5			
21	17	第3A面溝7a	箸	長20.8×幅0.65×厚0.5			
21	18	第3A面溝7a	箸	長20.1×幅0.7×厚0.5			
21	19	第3A面溝7a	箸	長20.9×幅0.7×厚0.3			
21	20	第3A面溝7a	箸	長21.1×幅0.7×厚0.5			
21	21	第3A面溝7a	箸	長22.2×幅0.75×厚0.3			
21	22	第3A面溝7a	箸	長22.1×幅0.55×厚0.1			
21	23	第3A面溝7a	箸	長22.1×幅0.7×厚0.55			
21	24	第3A面溝7a	箸	長22.1×幅0.95×厚0.5			
21	25	第3A面溝7a	箸	長22.1×幅0.65×厚0.3			
21	26	第3A面溝7a	箸	長22.2×幅0.7×厚0.5			
21	27	第3A面溝7a	箸	長22.3×幅0.65×厚0.5			
21	28	第3A面溝7a	箸	長22.2×幅0.8×厚0.1			
21	29	第3A面溝7a	箸	長22.6×幅0.3×厚0.3			両側面を割り取っただけの無調整
21	30	第3A面溝7a	箸	長22.5×幅0.65×厚0.15			
21	31	第3A面溝7a	箸	長23.0×幅0.8×厚0.1			
21	32	第3A面溝7a	箸	長22.9×幅0.7×厚0.3			
21	33	第3A面溝7a	箸	長23.2×幅0.9×厚0.5			節の周辺の材を使用しているため歪んでいる
21	34	第3A面溝7a	箸	長23.4×幅0.65×厚0.35			
21	35	第3A面溝7a	箸	長23.6×幅0.55×厚0.5			
21	36	第3A面溝7a	箸	長23.1×幅0.7×厚0.55			
21	37	第3A面溝7a	箸	長23.1×幅0.7×厚0.6			
21	38	第3A面溝7a	箸	長23.7×幅0.7×厚0.1			
21	39	第3A面溝7a	箸	長23.9×幅0.9×厚0.5			
21	40	第3A面溝7a	箸	長23.5×幅0.6×厚0.5			
21	41	第3A面溝7a	箸	長24.1×幅0.55×厚0.5			
25	1	第3A面溝7a	曲物底板	直径15.6×厚1.0			表裏面とも全体に黒色漆を施漆する　平面・側面ともに無孔　柾目材使用
25	2	第3A面溝7a	曲物底板	直径21.8×最大厚0.9			確認できる5箇所の釘穴のうちの3箇所に木釘が残る　遺存状態は良好　柾目材使用
25	3	第3A面溝7a	杓子状木製品	長17.25×幅2.85×厚5.5			板目材使用
25	1	第3A面溝7a	毬杖の鞠	最大直径6.1			材を輪切りにして、両木口を斜めに切り落とし削る　削りは非常に粗い
25	5	第3A面溝7a	木鍬	長27.1×幅20.6×厚1.8			方形孔近くに縦方向の条線痕が残る　腐食による損耗が著しい
27	2	第3B面溝1b	かわらけ	7.05	1.95	1.55	胎土は土丹粒・黒色微砂・白色微砂・雲母・白針を含む明肌色弱砂質土　口縁部外側に煤付着
27	1	第3B面溝1b	かわらけ	7.65	6.00	1.60	胎土は土丹粒・雲母・黒色微砂・白色微砂・白針を含む淡茶色弱粉質土
27	3	第3B面溝1b	かわらけ	7.20	5.10	1.85	胎土は土丹粒・黒色微砂・白色微砂・白針・雲母を含む淡茶色弱粉質土　糸切りのズレあり
27	4	第3B面溝1b	かわらけ	7.95	5.90	1.85	胎土は土丹粒・白針・黒色微砂・白色微砂・雲母を含む淡茶色弱粉質土　糸切りのズレあり
27	5	第3B面溝1b	かわらけ	12.10	7.30	3.65	胎土は土丹粒・白色微砂・白針を含む暗肌色弱粉質土　外側面と口縁部内側に煤付着
27	6	第3B面溝1b	かわらけ	11.50	8.25	1.00	胎土は白色微砂・黒色微砂・土丹細粒・雲母・白針を含むが、混入物の少ない橙色弱粉質土　薄手丸深型
27	7	第3B面溝1b	常滑甕	／	／	／	胎土は石英粒を含むネットリとした暗灰色土　胎芯は黒褐色を、器表は茶褐色を呈す
27	8	第3B面溝1b	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は石英を多く含むザックリとした明灰色土　器表外面は暗灰色を、内面は灰色を呈す
27	9	第3B面溝1b	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は小石を多く含むザックリとした明灰色土　器表は灰色を呈す
27	10	第3B面溝1b	調度飾り	長8.2×幅3.5×厚1.2			雲形　左・上側面を除き黒色漆が雑に塗られている
27	11	第3B面溝1b	用途不明木製品	長35.7×遺存幅5.6×厚1.0			握り部？に木釘遺存　板目取り
27	12	第3B面溝1b	棒状木製品	長39.1×幅1.1×厚1.6			先端が大きな削りで調整される
27	13	第3B面溝1b	箸	長21.1×幅0.6×厚0.6			
27	14	第3B面溝1b	箸	長21.1×幅0.7×厚0.1			
27	15	第3B面溝1b	箸	長22.2×幅0.8×厚0.1			
27	16	第3B面溝1b	箸	長22.8×幅0.8×厚0.5			
27	17	第3B面溝1b	箸	長23.0×幅0.8×厚0.1			
27	18	第3B面溝1b	箸	長25.9×幅0.8×厚0.1			
27	19	第3B面溝1b	巾状木製品	遺存長21.3×幅1.1×厚0.6			裏面中位に黒色漆がわずかに付着する
27	20	第3B面溝1b	杓子状木製品	長21.0×幅7.6×厚0.9			全体的に丁寧な削り調整　表裏面とも中位より上方にノミ状工具痕がわずかに遺る
27	21	第3B面溝1b	釘	長19.5×幅0.7×厚1.0			
27	22	第3B面溝1b	銭				「治平元寶」
27	23	第3B面溝1b	銭				「熙寧元寶」
27	24	第3B面溝1b	銭				「元豊通寶」
27	25	第3B面溝1b	銭				「元豊通寶」
27	26	第3B面溝1b	銭				「元祐通寶」
27	27	第3B面溝1b	温石	遺存長11.95×幅9.0×厚2.6			滑石製　表裏面からの穿孔あり　全面に煤付着

表1　遺物観察表(5)

挿図番号		出土地	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土色調・成形・整形・備考
27	28	第3B面溝1b	砥石	遺存長7.1×幅3.6×厚0.65			黄橙色仕上げ砥　石目は硬質で緻密　左側面鉄鋸痕
27	29	第3B面溝1b	砥石	遺存長9.65×幅2.3×最大厚2.1			暗灰色凝灰岩中砥　石目は硬質だがやや砂っぽく粗い
27	30	第3B面溝1b	箸	長18.9×幅0.8×厚0.7			
28	1	第3B面溝1a	かわらけ	7.90	5.60	1.60	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・土丹粒・雲母を含む淡茶色弱粉質土
28	2	第3B面溝1a	かわらけ	7.00	5.00	1.50	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂を含む淡茶色弱粉質土
28	3	第3B面溝1a	かわらけ	12.10	9.40	3.20	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・土丹粒・雲母を含む暗橙色弱粉質土
28	1	第3B面溝1a	かわらけ	12.60	7.6	3.30	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・土丹粒を含むが、混入物少ない暗淡橙色弱粉質土
28	5	第3B面溝1a	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は小石と石英を含む明灰色土　器表は明灰色～黄灰色を呈す
28	6	第3B面溝1a	常滑甕	／	／	／	胎土は明灰色　胎芯は暗灰色を、器表は赤茶色を呈す
28	7	第3B面溝1a	銭				「開元通寶」
28	8	第3B面溝1a	銭				「皇宋通寶」
28	9	第3B面溝1a	銭				「元豊通寶」
28	10	第3B面溝1a	銭				「聖宋元寶」
28	11	第3B面溝1a	漆椀か？	／	6.20	／	黒色漆地に赤色漆で施文
28	12	第3B面溝1a	漆椀	／	(8.60)	／	黒色漆地に赤色漆のスタンプ施文　文様不鮮明
28	13	第3B面溝1a	漆皿	／	／	／	黒色漆を施漆　遺存部に施文は無い
28	14	第3B面溝1a	箸	長19.7×幅0.6×厚0.5			
28	15	第3B面溝1a	箸	長20.9×幅0.7×厚0.6			
28	16	第3B面溝1a	箸	長20.7×幅0.55×厚0.15			
28	17	第3B面溝1a	箸	長20.7×幅0.6×厚0.6			
28	18	第3B面溝1a	箸	長20.7×幅0.7×厚0.15			
28	19	第3B面溝1a	箸	長20.9×幅0.55×厚0.1			
28	20	第3B面溝1a	箸	長20.7×幅0.65×厚0.5			
28	21	第3B面溝1a	箸	長20.9×幅0.6×厚0.5			
28	22	第3B面溝1a	箸	長21.1×幅0.55×厚0.5			
28	23	第3B面溝1a	箸	長21.3×幅0.75×厚0.35			
28	24	第3B面溝1a	箸	長21.7×幅0.7×厚0.35			
28	25	第3B面溝1a	箸	長21.9×幅0.7×厚0.3			
28	26	第3B面溝1a	箸	長22.1×幅0.6×厚0.5			
28	27	第3B面溝1a	箸	長22.0×幅0.6×厚0.5			
28	28	第3B面溝1a	箸	長22.3×幅0.7×厚0.6			
28	29	第3B面溝1a	箸	長22.1×幅0.55×厚0.1			
28	30	第3B面溝1a	箸	長22.1×幅0.8×厚0.3			
28	31	第3B面溝1a	箸	長22.1×幅6.5×厚0.15			
28	32	第3B面溝1a	箸	長22.5×幅0.65×厚0.1			
28	33	第3B面溝1a	箸	長22.1×幅0.6×厚0.5			
28	34	第3B面溝1a	箸	長22.2×幅0.55×厚0.15			
28	35	第3B面溝1a	箸	長22.5×幅0.75×厚0.35			
28	36	第3B面溝1a	箸	長22.7×幅0.6×厚0.15			
28	37	第3B面溝1a	箸	長22.7×幅0.7×厚0.6			
28	38	第3B面溝1a	箸	長22.9×幅0.8×厚0.5			
28	39	第3B面溝1a	箸	長22.9×幅0.65×厚0.1			
28	40	第3B面溝1a	箸	長23.0×幅0.7×厚0.6			
29	1	第3B面溝1a	箸	長22.9×幅0.7×厚0.5			
29	2	第3B面溝1a	箸	長23.1×幅0.7×厚0.5			
29	3	第3B面溝1a	箸	長23.0×幅0.6×厚0.3			
29	4	第3B面溝1a	箸	長23.1×幅0.9×厚0.6			
29	5	第3B面溝1a	箸	長23.1×幅0.6×厚0.15			
29	6	第3B面溝1a	箸	長23.0×幅0.7×厚0.5			
29	7	第3B面溝1a	箸	長23.0×幅0.6×厚0.15			
29	8	第3B面溝1a	箸	長23.0×幅0.65×厚0.5			
29	9	第3B面溝1a	箸	長23.2×幅0.65×厚0.5			
29	10	第3B面溝1a	箸	長23.6×幅0.6×厚0.55			
29	11	第3B面溝1a	箸	長23.1×幅0.5×厚0.15			
29	12	第3B面溝1a	箸	長23.2×幅0.8×厚0.1			
29	13	第3B面溝1a	箸	長23.7×幅0.6×厚0.15			
29	14	第3B面溝1a	箸	長23.1×幅0.6×厚0.3			
29	15	第3B面溝1a	箸	長23.3×幅0.6×厚0.1			
29	16	第3B面溝1a	箸	長21.2×幅0.6×厚0.15			
29	17	第3B面溝1a	箸	長21.1×幅0.65×厚0.1			
29	18	第3B面溝1a	箸	長23.7×幅0.65×厚0.5			
29	19	第3B面溝1a	箸	長21.0×幅0.7×厚0.5			
29	20	第3B面溝1a	箸	長21.2×幅0.6×厚0.5			
29	21	第3B面溝1a	箸	長21.3×幅0.65×厚0.3			
29	22	第3B面溝1a	箸	長21.2×幅0.6×厚0.5			
29	23	第3B面溝1a	箸	長21.3×幅0.75×厚0.6			
29	24	第3B面溝1a	箸	長21.7×幅0.55×厚0.15			

表1　遺物観察表(6)

挿図番号		出土地	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土色調・成形・整形・備考
29	25	第3B面溝1a	箸	長21.5×幅0.7×厚0.5			
29	26	第3B面溝1b	箸	長21.6×幅0.7×厚0.6			
29	27	第3B面溝1a	箸	長21.8×幅0.65×厚0.35			
29	28	第3B面溝1a	箸	長21.25×幅0.65×厚0.5			
29	29	第3B面溝1a	箸	長21.1×幅0.65×厚0.55			
29	30	第3B面溝1a	箸	長21.1×幅0.65×厚0.15			
29	31	第3B面溝1a	箸	長21.7×幅0.75×厚0.3			
29	32	第3B面溝1a	箸？	長21.6×幅1.15×厚0.1			
30	1	第3B面溝1	漆皿	(9.70)	6.10	(1.10)	黒色漆地に赤色漆の施文　文様は不明
31	1	第3B面溝5	常滑片口鉢1類	／	／	／	胎土は小石と石英を含み、器表ともに暗灰色を呈す
31	2	第3B面溝5	漆皿	9.20	6.30	1.30	黒色漆地に赤色漆の手描き芭蕉文？
31	3	第3B面溝5	漆皿	8.80	6.20	1.20	黒色漆皿　内底面にロクロ目が明瞭に残る
31	4	第3B面溝5	箸	長19.8×幅0.5×厚0.5			
31	5	第3B面溝5	箸	長20.0×幅0.9×厚0.6			
31	6	第3B面溝5	箸	長19.9×幅0.9×厚0.5			
31	7	第3B面溝5	箸	長20.5×幅0.8×厚0.6			
31	8	第3B面溝5	箸	長20.7×幅0.6×厚0.5			
31	9	第3B面溝5	箸	長20.9×幅0.7×厚0.5			
31	10	第3B面溝5	箸	長20.8×幅0.6×厚0.5			
31	11	第3B面溝5	箸	長20.9×幅0.5×厚0.5			
31	12	第3B面溝5	箸	長21.3×幅0.8×厚0.5			多くの削り調整が施される
31	13	第3B面溝5	箸	長20.8×幅0.7×厚0.5			
31	14	第3B面溝5	箸	長20.9×幅0.75×厚0.5			
31	15	第3B面溝5	箸	長21.1×幅0.7×厚0.6			細い削り調整が施される
31	16	第3B面溝5	箸	長21.3×幅0.6×厚0.5			
31	17	第3B面溝5	箸	長22.9×幅0.7×厚0.1			
31	18	第3B面溝5	箸	長22.3×幅0.8×厚0.1			
31	19	第3B面溝5	箸	長22.2×幅0.7×厚0.5			
31	20	第3B面溝5	箆状木製品	長23.6×幅1.1×厚0.7			表裏面ともに削りが細かい
31	21	第3B面溝5	杓子状木製品	長20.9×最大幅3.1×最大厚0.8			板目取り
33	1	第3C面道路下	砥石	遺存長3.6×幅3.5×最大厚0.7			淡緑灰色頁岩仕上砥　石目やや軟質だが緻密　両側面手引鋸痕
34	1	第3C面溝11a最下層	極小かわらけ	3.90	3.15	7.50	胎土は黒色微砂・白色微砂・雲母・白針を含む淡茶色弱粉質土
34	2	第3C面溝11a最下層	かわらけ	7.80	5.30	1.90	胎土は土丹粒・黒色微砂・白色微砂・雲母・白針を含む暗橙色弱粉質土
34	3	第3C面溝11a下層	かわらけ	8.60	2.20	1.95	胎土は土丹粒・白色微砂・白針・雲母を含む橙色砂質気味の土
34	4	第3C面溝11a下層	かわらけ	7.80	5.20	2.05	胎土は土丹粒・白色微砂・白針・雲母を含む淡茶色弱粉質土
34	5	第3C面溝11a下層	かわらけ	7.10	1.85	2.10	胎土は土丹粒・白色微砂・白針・雲母を含む淡茶色粉質土　白色微砂多い
34	6	第3C面溝11a下層	かわらけ	7.35	1.10	2.15	胎土は土丹粒・白色微砂・黒色微砂・白針・雲母を含む暗肌色弱粉質土
34	7	第3C面溝11a下層	かわらけ	10.05	8.15	3.10	胎土は多くの土丹粒と白針・雲母・白色微砂を含む赤褐色砂質土
34	8	第3C面溝11a下層	かわらけ	10.95	6.95	3.00	胎土は土丹粒・雲母・白色微砂・白針を含む暗肌色弱粉質土
34	10	第3C面溝11a下層	かわらけ	13.00	8.75	3.60	胎土は土丹粒・白色微砂・白針・雲母を含む暗肌色弱粉質土
34	9	第3C面溝11a下層	かわらけ	12.30	7.15	3.30	胎土は多くの土丹粒・白針・雲母・白色微砂を含む粗い暗肌色弱粉質土
34	11	第3C面溝11a下層	瀬戸灰釉柄付片口	／	／	／	胎土は明灰色緻密土　釉は濃灰緑～灰緑色を呈す
34	12	第3C面溝11a下層	舶載褐釉壺	／	／	／	胎土は灰色弱粘質緻密土　釉は暗茶～緑味暗茶色を呈す　ヘラ状工具による連弁文が施される
34	13	第3C面溝11a下層	銭				「景祐元寶」
34	14	第3C面溝11a下層	銭				「紹聖元寶」
34	15	第3C面溝11a下層	銭				「大観通寶」小平銭
34	16	第3C面溝11a下層	箸	長19.1×幅0.7×厚0.1			
35	1	第3C面溝12	銭				「咸平元寶」
36	1	第3C面溝3	かわらけ	12.00	9.10	3.30	胎土は土丹粒・白針・白色微砂・黒色微砂・雲母を含む赤褐色弱砂質土
36	2	第3C面溝3	浅鉢型火鉢	／	／	／	胎土は砂質に近い灰茶色瓦質　器表外面は黒褐色を、内面は黒茶色を呈す

表1　遺物観察表(7)

挿図番号		出土地	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土色調・成形・整形・備考
36	3	第3C面溝3	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は白色粒・小石を含むザックリとした灰色土　器表は明灰色を呈す
36	1	第3C面溝3	銭				「元祐通寶」
36	5	第3C面溝3	箸	長19.1×幅0.6×厚0.6			
36	6	第3C面溝3	箸	長18.6×幅0.7×厚0.5			
36	9	第3C面溝3	箆状木製品	長18.8×幅0.9×厚0.5			
36	7	第3C面溝3	箸	長19.6×幅0.65×厚0.5			
36	8	第3C面溝3	箸	長20.8×幅0.7×厚0.6			
36	10	第3C面溝3	箆状木製品	長22.9×幅1.6×厚0.6			細い削り調整が施される
36	11	第3C面溝3	棒状木製品	遺存長15.9×幅1.3×厚0.95			両側面は面取り風の粗い削り調整
36	12	第3C面溝3	棒状木製品	長22.3×幅0.8×厚0.1			両端は丸く面取り風調整
36	13	第3C面溝3	用途不明木製品	長15.5×幅3.2×厚1.3			形代か？
36	14	第3C面溝3	用途不明木製品	直径3.1×高さ1.15			木栓？　体部側面に直径約5mmの孔が穿く　部分的に煤付着
36	15	第3C面溝3	用途不明木製品	直径1.8×高さ3.2			全周にわたって粗い面取りが施される　板目取り
36	16	第3C面溝3	用途不明木製品	長13.3×幅1.8×厚0.95			
37	1	第3C面溝2下層	かわらけ	7.20	5.50	1.10	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・雲母・小石を含む淡茶色弱粉質土
37	2	第3C面溝2下層	かわらけ	7.50	1.60	1.50	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・雲母を含む淡茶色弱粉質土
37	3	第3C面溝2下層	かわらけ	9.30	6.10	1.90	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・雲母を含む淡茶色弱粉質土
37	4	第3C面溝2下層	銭				「元祐通寶」
37	5	第3C面溝2下層	漆椀	／	7.00	／	黒色漆地に赤色漆の手描きで御所車と波の構成文　外底面に「五」の文字が刻まれる
37	6	第3C面溝2	かわらけ	7.30	5.10	1.50	胎土は黒色微砂・雲母・白針を含む濃肌色弱粉質土
37	7	第3C面溝2	かわらけ	8.10	5.10	1.80	胎土は黒色微砂・雲母・白針を含む濃肌色弱粉質土
37	8	第3C面溝2	かわらけ	8.10	5.10	1.90	胎土は黒色微砂・雲母・白針を含む淡茶色弱粉質土　薄く煤付着
37	9	第3C面溝2	かわらけ	7.80	1.10	2.30	胎土は黒色微砂と雲母を含むが、混入物少ない淡茶色弱粉質土　全体的に煤付着
37	10	第3C面溝2	かわらけ	7.80	1.50	2.50	胎土は黒色微砂と白針を含むが混入物の少ない肌色弱粉質土　全体的に煤付着　とりべか？
37	11	第3C面溝2	かわらけ	12.30	7.20	3.00	胎土は黒色微砂・雲母・白針を含む濃肌色弱粉質土
37	12	第3C面溝2	かわらけ	11.30	6.10	3.30	胎土は雲母・白針・黒色微砂を含む赤褐色弱粉質土　全体的に煤付着
37	13	第3C面溝2	かわらけ	13.10	7.80	3.10	胎土は黒色微砂・雲母・白針を含むが、混入物少ない肌色弱粉質土
37	14	第3C面溝2	かわらけ	14.50	8.60	3.60	胎土は黒色微砂・雲母・白針を含むが、混入物少ない淡茶色弱粉質土
37	15	第3C面溝2	転用灯明皿	／	6.20	／	胎土はかわらけと同胎で、多くの黒色微砂・白色微粒・白針・雲母を含む暗橙～橙色弱粉質土
37	16	第3C面溝2	土製広口小壺？	(6.70)	／	／	胎土はかわらけと同胎で、白色微粒・黒色微砂・白針・雲母を多く含む淡茶色弱粉質土
37	17	第3C面溝2	用途不明土製品	／	8.00	／	胎土はかわらけと同胎で、白色微粒・黒色微砂・雲母・白針を含む淡茶色弱粉質土
37	18	第3C面溝2	浅鉢型火鉢	／	／	／	胎土は小石を多く含む瓦質に近い明灰色～橙灰色土器質土　器表は橙灰色を呈す
37	19	第3C面溝2	浅鉢型火鉢	／	／	／	胎土は小石を多く含む土器質土　胎芯が赤灰色を、器表は明灰色を呈す
37	20	第3C面溝2	浅鉢型火鉢	／	／	／	胎土は白針と黒色微砂を含む土器質土　胎芯が暗灰色を、器表は灰色～暗灰色を呈す
37	21	第3C面溝2	青磁鎬連弁文碗	／	1.10	／	素地は灰色弱粘質緻密土　釉は暗青緑色を呈す　破損断面に漆継補修痕
37	22	第3C面溝2	常滑甕	／	／	／	胎土は暗灰色～明灰色土　器表外面は緑茶～淡灰色を、内面は茶赤色を呈す
37	23	第3C面溝2	常滑甕	／	／	／	胎土は石英を含む暗灰色土　器表は茶褐色を呈す
37	24	第3C面溝2	常滑甕	／	／	／	胎土は暗灰色土　器表は赤茶色を呈す
37	25	第3C面溝2	常滑甕	／	／	／	胎土は明灰色土　胎芯は暗灰色を、器表は暗茶色を呈す　二次焼成により一部器表が剥離
37	26	第3C面溝2	常滑甕	／	／	／	胎土は暗茶色土　器表は黒茶色を呈す　肩部外面に自然釉がかかる
37	27	第3C面溝2	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は石英を多く含む灰色土　器表は暗灰色～灰色を呈す
37	28	第3C面溝2	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土石英を含むきめ細かい暗灰色土　器表は暗灰色を呈す　内側面は使用痕のため黒ずむ
37	29	第3C面溝2	常滑片口鉢Ⅱ類	／	／	／	石英小石を含むザックリとした胎土・器表ともに暗灰色
37	30	第3C面溝2	常滑片口Ⅱ類	32.80	11.10	12.70	胎土は小石と石英を含むネットリとした橙色土　器表は橙茶色を呈す　溝7bで同一個体の片口部が出土
37	31	第3C面溝2	銭				「熙寧元寶」
37	32	第3C面溝2	釘	長5.6×幅0.5×厚0.3			
37	33	第3C面溝2	網針	遺存長10.8×幅1.15×厚0.3			破損後に再加工されたもの　下端は尖らせるための工具痕が多く残る
38	1	第3C面溝2	箸	長20.0×幅0.55×厚0.1			
38	2	第3C面溝2	箸	長19.1×幅0.7×厚0.5			

表1　遺物観察表（8）

挿図番号		出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土色調・成形・整形・備考
38	3	第3C面溝2	箸	長20.0×幅0.7×厚0.5			
38	1	第3C面溝2	箸	長20.1×幅0.8×厚0.03			
38	5	第3C面溝2	箸	長20.6×幅0.6×厚0.5			
38	6	第3C面溝2	箸	長21.1×幅0.6×厚0.1			右側面に工具による割り取り痕が残る
38	7	第3C面溝2	箸	長20.9×幅0.7×厚0.6			
38	8	第3C面溝2	箸	長20.9×幅0.6×厚0.1			
38	9	第3C面溝2	箸	長21.5×幅0.6×厚0.5			
38	10	第3C面溝2	箸	長22.1×幅0.6×厚0.1			
38	11	第3C面溝2	箸	長21.5×幅0.6×厚0.1			
38	12	第3C面溝2	箸	長21.7×幅0.8×厚0.5			
38	13	第3C面溝2	箸	長21.1×幅0.8×厚0.6			
38	11	第3C面溝2	箸	長21.1×幅0.7×厚0.5			不揃いで雑な削り調整が施される
38	15	第3C面溝2	箸	長21.7×幅0.6×厚0.3			
38	16	第3C面溝2	箸	長21.8×幅0.7×厚0.2			
38	17	第3C面溝2	箸	長21.6×幅0.7×厚0.1			
38	18	第3C面溝2	箸	長21.7×幅0.6×厚0.1			
38	19	第3C面溝2	箸	遺存長21.9×幅0.7×厚0.5			
38	20	第3C面溝2	箸	遺存長21.9×幅0.6×厚0.5			
38	21	第3C面溝2	箸	長22.1×幅0.7×厚0.5			
38	22	第3C面溝2	箸	長22.8×幅0.7×厚0.1			
38	23	第3C面溝2	箸	長22.6×幅0.6×厚0.5			
38	24	第3C面溝2	箸	長23.1×幅0.8×厚0.1			
38	25	第3C面溝2	箸	長23.2×幅0.7×厚0.5			
38	26	第3C面溝2	箸	長23.3×幅0.7×厚0.1			
38	27	第3C面溝2	箸	長23.8×幅0.7×厚0.1			
38	28	第3C面溝2	箸	長23.1×幅0.7×厚0.3			
38	29	第3C面溝2	箸	長23.9×幅0.7×厚0.5			
38	30	第3C面溝2	箸	長21.1×幅0.6×厚0.5			
38	31	第3C面溝2	箸	長21.3×幅0.8×厚0.1			
38	32	第3C面溝2	箸	長21.1×幅0.75×厚0.1			
38	33	第3C面溝2	箸	長26.5×幅0.6×厚0.6			
39	1	第3C面溝2	漆皿	(8.30)	6.80	0.90	内底面に赤色漆で幅約1～2mmの条線が2本描かれる　無高台
39	2	第3C面溝2	漆皿	9.20	5.80	7.00	内外面ともに黒色漆地に内底面に赤色漆で手描きの笹文が描かれた無高台無文皿
39	3	第3C面溝2	漆皿	7.30	6.00	0.60	黒色漆地に赤色漆で手描きの花文様？　無高台
39	1	第3C面溝2	漆皿	8.70	7.00	1.10	内外面ともに黒色漆が施漆された無高台無文皿
39	5	第3C面溝2	漆皿	8.90	6.60	1.00	内面は赤色漆、外面は黒色漆が施漆された無高台無文皿
39	6	第3C面溝2	漆皿	8.70	7.20	0.80	内面は赤色漆、外面は黒色漆が施漆された無高台無文皿
39	7	第3C面溝2	漆皿	／	7.20	／	内面は赤色漆、外面は黒色漆を施漆された無高台無文椀
39	8	第3C面溝2	漆椀	13.30	7.20	5.15	黒色漆の輪高台無文椀
39	9	第3C面溝2	木匙	遺存長12.2×幅6.3×厚1.3			鉄釘が刺さった状態で遺存し、柄の部分と接合しているものと思われる（修理品か？）　表面が摩耗しているため刳貫きの工具痕は極めて不明瞭
39	10	第3C面溝2	用途不明木製品	遺存長21.0×幅3.0×厚2.1			容器の把手or掴み？　打ち直しと思われる釘穴が2箇所にみえる　板目取り
39	11	第3C面溝2	用途不明木製品	長5.0×幅2.35×厚0.8穿径0.5			丁寧で細い削りがなされる
39	12	第3C面溝2	用途不明木製品	長1.8×幅3.1×厚0.7、孔径0.8			表面に粗い削りがなされ、裏面は平滑である
39	13	第3C面溝2	灰ならし	長3.2×幅11.5×厚0.7			裏表面とも部分的に煤が付着するが、歯の部分が顕著である
39	11	第3C面溝2	用途不明木製品	長9.85×最大幅1.15×厚1.05			板目取り
39	15	第3C面溝2	柄？	遺存長31.2×幅1.6×厚1.1			上部中央に穿孔　上方は裏表面ともに細い工具痕　穿孔方向は不明
39	16	第3C面溝2	箆状木製品	長35.1×幅1.0×厚0.5			上下端は細い削り痕
39	17	第3C面溝2	箆状木製品	遺存長25.2×幅1.2×厚0.1			
10	1	第3C面下	かわらけ	6.85	1.35	1.15	胎土は土丹粒・白針・白色微砂・黒色微砂・雲母を含む淡茶色弱砂質土
10	2	第3C面下	かわらけ	7.20	1.70	1.55	胎土は土丹粒・白針・白色微砂・黒色微砂・雲母を含む暗肌色弱砂質土
10	3	第3C面下	かわらけ	7.15	5.50	1.65	胎土は土丹粒・白針・白色微砂・黒色微砂・雲母を含む淡橙色弱砂質
10	1	第3C面下	かわらけ	7.50	5.20	1.80	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・土丹粒・雲母を含む淡茶色弱粉質土
10	5	第3C面下	かわらけ	11.15	7.05	2.60	胎土は土丹粒・白針・白色微砂・黒色微砂・雲母をわずかに含む淡橙色弱粉質土　薄手丸深型
10	6	第3C面下	かわらけ	10.80	6.15	3.55	胎土は土丹粒・白針・白色微砂・黒色微砂・雲母を含むが、混入物の少ない淡茶色弱粉質土
10	7	第3C面下	かわらけ	12.90	8.70	3.30	胎土は土丹粒・白針・白色微砂・黒色微砂・雲母を含む暗肌色弱粉質土
10	8	第3C面下	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は石英と黒色微砂を含むザックリとした明灰色土　器表は緑灰色を呈す

表1　遺物観察表(9)

挿図番号	出土地	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土色調・成形・整形・備考
10 9	第3C面下	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は白色粒と小石を含むザックリとした灰色土　器表は灰色を呈すが、内面は使用のためか黄味がかる
10 10	第3C面下	常滑片口鉢Ⅱ類	／	／	／	胎土はネットリとしたとした暗灰色土　器表は茶褐色を呈す
10 11	第3C面下	草履芯	長17.7×幅8.2×厚0.3			子供用か？表面にわずかに植物圧痕が残る
10 12	第3C面下	草履芯	長21.0×幅10.8×厚0.2			表裏面ともに若干の繊維痕を遺す　上部中央に圧痕　板目材使用
10 13	第3C面下	連歯下駄の留め	長2.3×幅0.9			図34－15の留めか？
10 14	第3C面下	連歯下駄の留め	長2.7×幅1.0			図34－15の留めか？
10 15	第3C面下	連歯下駄	長22.4×幅10.2×厚2.3			
10 16	第3C面下	箸	長16.9×幅0.6×厚0.5			
10 17	第3C面下	箸	長18.6×幅0.6×厚0.5			
10 18	第3C面下	箸	長19.0×幅0.7×厚0.4			
10 19	第3C面下	箸	長19.2×幅0.6×厚0.5			
10 20	第3C面下	箸	長19.2×幅0.7×厚0.4			
10 21	第3C面下	箸	長19.2×幅0.7×厚0.5			
10 22	第3C面下	箸	長20.0×幅0.5×厚0.4			
10 23	第3C面下	箸	長19.7×幅0.55×厚0.5			
10 24	第3C面下	箸	長20.1×幅0.7×厚0.4			
10 25	第3C面下	箸	長20.2×幅0.6×厚0.4			
10 26	第3C面下	箸	長20.4×幅0.7×厚0.5			
10 27	第3C面下	箸	長20.4×幅0.5×厚0.5			
10 28	第3C面下	箸	長20.8×幅0.55×厚0.15			
10 29	第3C面下	箸	長21.5×幅0.7×厚0.4			
10 30	第3C面下	箸	長20.8×幅0.65×厚0.5			
10 31	第3C面下	箸	長22.3×幅0.7×厚0.35			
10 32	第3C面下	箸	長23.0×幅0.7×厚0.15			
10 33	第3C面下	箸	長23.0×幅0.7×厚0.4			
10 34	第3C面下	箸	長23.1×幅0.5×厚0.4			
10 35	第3C面下	箸	長22.8×幅0.6×厚0.5			
10 36	第3C面下	箸	長24.0×幅0.7×厚0.55			
10 37	第3C面下	箸	長23.5×幅0.8×厚0.5			
10 38	第3C面下	箸	長24.3×幅0.7×厚0.7			
10 39	第3C面下	漆皿	／	(6.60)	／	黒色漆地に赤色漆で手描き笹竹文　無高台
10 10	第3C面下	漆皿	8.10	6.20	0.80	黒色漆地に赤色漆で手描き花文　無高台
12 1	第2面ピット39	常滑山茶碗	／	6.20	／	小石と石英を含むザックリとした胎土　器表・胎土ともに暗灰色を呈す
13 1	第2面下	かわらけ	6.70	3.10	2.20	胎土は多くの黒色微砂・雲母・土丹粒を含む肌色弱粉質土だが粉質に近い
13 2	第2面下	かわらけ	7.10	1.20	2.00	胎土は黒色微砂と土丹粒を含むが混入物の少ない淡茶色弱粘質土
13 3	第2面下	かわらけ	6.90	1.20	2.20	胎土は黒色微砂・雲母・土丹粒を含むが混入物の少ない淡茶色弱粉質土
13 1	第2面下	かわらけ	7.80	3.80	2.30	胎土は黒色微砂・雲母・白針を含むが混入物の少ない淡橙色弱粉質土
13 5	第2面下	かわらけ	7.60	1.20	2.10	胎土は黒色微砂・雲母・白針を含む肌色弱粉質土　混入物少なく
13 6	第2面下	かわらけ	8.00	1.80	2.10	胎土は黒色微砂と雲母を含む肌色弱粉質土
13 7	第2面下	土鍋	(21.30)	／	／	胎土は白色細粒と雲母を多く含む淡黄灰色土　胎芯は暗灰色を呈す　伊勢系か？
13 8	第2面下	輪花型火鉢	／	／	／	胎土は砂粒を多く含む明灰色瓦器質土　器表は炭素吸着で黒褐色を呈す
13 9	第2面下	輪花型火鉢	／	／	／	胎土は白針を多く含む土器質土　胎芯は暗灰色を、器表は橙灰色を呈す　輪花型か
13 10	第2面下	火鉢	／	／	／	胎土は黒色微砂と橙色土粒を含む淡紅色瓦質土　胎芯は淡橙色を、器表は明灰色を呈す
13 11	第2面下	軒平瓦	／	／	／	胎土は白色微～小粒を多く含む灰色土　器表は暗灰色を呈す
13 12	第2面下	瀬戸鉄釉瓶子	／	／	／	胎土は淡黄～明灰色緻密土　釉は濃灰緑色
13 13	第2面下	青白磁碗？	／	1.00	／	素地は白色粘質緻密土　釉は淡青色を呈す　外面は破損の状態で二次焼成をうける
13 11	第2面下	釘	長6.2×幅0.4×厚0.5			
13 15	第2面下	銭				「皇宋通寶」
13 16	第2面下	銭				「元符通寶」
13 17	第2面下	砥石	遺存長2.75×幅3.65			白色泥岩（頁岩？）仕上砥　石目均一だが軟質でやや粗い
13 18	第2面下	織具	遺存長20.3×幅2.1×厚1.1			両端を丸く削り調整される
13 19	第2面下	用途不明木製品	遺存長13.1×幅1.5×厚0.8			漆工具か？　柾目材使用
13 20	第2面下	木製脚	遺存長11.0×幅3.1×厚2.3			全体に黒色漆が施漆される
13 21	第2面下	木製脚	長11.4×幅3.1×厚2.15			黒色漆が部分的に残る
13 22	第2面下	箸	長17.0×幅0.75×厚0.5			
13 23	第2面下	箸	長20.1×幅0.75×厚0.5			先端が火を受け炭化している
13 24	第2面下	棒状木製品	長19.7×幅1.15×厚0.9			
13 25	第2面下	棒状木製品	遺存長20.8×幅1.7×厚1.6			

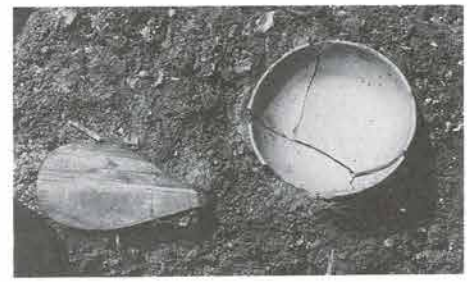
表1　遺物観察表(10)

挿図番号		出土地	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土色調・成形・整形・備考
13	26	第2面下	曲物底板	遺存長16.6×幅1.3×厚0.15			周縁に釘穴が一箇所残る　表面が凹凸に腐食する
13	27	第2面下	曲物底板転用品？	遺存長17.3×遺存幅5.1×厚0.7			表面に二孔一対かと思われる穿孔　表面を剥ぎ取る刃物痕　柾目材を使用しているが木目が歪む　一部が焼け焦げる
13	28	第2面下	曲物底板転用品？	遺存長9.9×幅1.7×厚7.2			周縁に釘穴なし　板目材使用
13	29	第2面下	調度飾り	長8.0×幅2.6×厚0.65			全体に黒色漆が施漆されるが一部剥げる　先端に焦げあり　板目材使用
13	30	第2面下	建具	遺存長11.5×幅03.1×厚1.15			格子か部の格子子　板目材使用　腐食が著しく欠損している
13	31	第2面下	建具	長21.7×幅2.7×厚1.95			格子戸等の横桟　柾目材使用
13	32	第2面下	用途不明木製品	遺存長19.6×遺存幅1.1×遺存厚1.1			黒色漆が施漆される　1箇所に釘が遺存
13	33	第2面下	用途不明木製品	遺存長11.5×幅5.9×厚0.6			琵琶形か？　弦巻の部分にあたる先端は欠損している　板目材使用
13	34	第2面下	用途不明木製品	遺存長10.3×幅3.65×厚0.1			杓子状を呈する　柾目材使用
13	35	第2面下	用途不明木製品	長5.1×幅3.1×厚0.8			板目材使用
13	36	第2面下	用途不明木製品	長14.9×幅9.7×厚2.0			連歯下駄の歯か？　板目材使用
15	1	第1面ピット38	かわらけ	7.10	1.10	2.00	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・雲母を含む橙色弱砂質土　薄手丸深型類似
16	1	第1面下	かわらけ	7.00	1.80	1.80	胎土は白針・黒色微砂・土丹粒・白色微砂・雲母を含む淡茶色弱粉質土
16	2	第1面下	土鍋	／	／	／	胎土は白色細粒と雲母を多く含む肌色土　胎芯は暗灰色を呈す　伊勢系か？
16	3	第1面下	輪花型火鉢	／	／	／	胎土は小石を含む明灰色瓦質土　器表は炭素吸着により黒褐色を呈す　輪花型か？
16	4	第1面下	瀬戸灰釉卸皿	／	／	／	胎土は明灰色緻密土　釉は淡灰緑色でごく薄くハケ塗り施釉　図18－12と同一個体の可能性あり
16	5	第1面下	魚住片口鉢	／	／	／	胎土は白色微～小粒を多く含む暗灰色土　縁帯部に薄い降灰
16	6	第1面下	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は黒色微砂を多く含むザックリとした明灰色土　器表も明灰色を呈すが、内面が若干黒ずむ
16	7	第1面下	常滑片口鉢Ⅱ類	／	／	／	胎土は多量の石英と雲母を含むザックリとした暗灰色土　器表は紫茶色を呈す
16	8	第1面下	笄	遺存長9.55×幅1.1×厚0.25			裏面に多くの加工痕が残る
16	9	第1面下	曲物底板	直径12.6×厚0.7			薄く煤が付着　木目と直行方向の条線状圧痕が遺る　柾目材使用
16	10	第1面下	杓子状木製品	長21.1×幅6.1×厚0.8			部分的に煤付着　板目材使用
17	1	第1面上	かわらけ	8.20	6.20	1.50	胎土は黒色微砂・雲母・白針を含む橙色弱粉質土
17	2	第1面上	かわらけ	7.7	5.00	1.70	胎土は黒色微砂・雲母・白針・土丹粒を含む肌色弱粉質土
17	3	第1面上	かわらけ	8.10	5.10	1.90	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・土丹粒・雲母を含む肌色弱粉質土
17	4	第1面上	かわらけ	8.20	4.80	2.00	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂を含む淡茶色弱粉質土　体部側面に煤付着
17	5	第1面上	かわらけ	7.10	5.20	1.90	胎土は黒色微砂・雲母・白針・土丹粒を含む肌色弱粉質土　一部に煤付着
17	6	第1面上	かわらけ	7.60	1.90	2.20	胎土は黒色微砂・雲母・白針・土丹粒を含む橙色弱粉質土　二次焼成により全体的に器表が剥離している　一部に煤付着
17	7	第1面上	円盤状土製品	径3.0～3.1×厚2.0			スノコ痕の遺る糸切りかわらけの底部片を転用・加工している　表面は無調整
17	8	第1面上	平瓦	／	／	／	胎土は黒色粒・白色粒・白色微砂・雲母・小石を含む赤茶色瓦質土
17	9	第1面上	白磁口兀皿	9.10	6.20	1.90	素地は白色緻密土　釉は緑味乳白色を呈す
17	10	第1面上	青磁器種不明	(11.60)	／	／	胎土は灰白色粘質緻密土　釉は青緑色を呈す　型打成形の可能性あり　破損断面に漆継痕
17	11	第1面上	青磁鉢？	／	6.20	／	素地は灰白色粘質緻密土　釉は淡青緑色呈す
17	12	第1面上	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は不純物が少なくザックリとした明灰色土　器表は灰色を呈す
17	13	第1面上	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は白色微～小粒を多く含むザックリとした明灰色土
17	14	第1面上	瀬戸灰釉折縁深皿	／	／	／	胎土は淡黄色緻密土　釉は淡黄緑色を呈す
17	15	第1面上	備前擂鉢	／	／	／	胎土は明灰色粘質緻密土　器表は明茶色を呈す
18	1	表面採集	極小かわらけ	5.00	3.20	1.10	胎土は土丹粒・黒色微砂・雲母を含む淡茶色弱粉質土
18	2	表面採集	かわらけ	7.80	1.80	1.60	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・土丹粒を含む淡茶色弱粉質土
18	3	表面採集	かわらけ	7.90	1.80	1.80	胎土は白針・黒色微砂・白色微砂・土丹粒・雲母を含む淡茶色弱粉質土　口縁部に若干の煤付着
18	4	表面採集	かわらけ	7.60	5.00	1.60	胎土は土丹粒・雲母・白色微砂・黒色微砂・白針を含む淡茶色弱粉質土　ほぼ全面に煤が付着
18	5	表面採集	かわらけ	8.35	5.10	1.80	胎土は白色微砂・黒色微砂・白針・土丹細粒・雲母を少量含む橙色弱粉質土
18	6	表面採集	かわらけ	7.00	1.20	2.20	灯明皿　胎土は白針・黒色微砂・雲母を含む淡茶色弱粉質　使用途中に燻焼される
18	7	表面採集	かわらけ	12.00	7.30	3.10	胎土は白色微砂・黒色微砂・土丹粒・雲母・白針を含む淡茶色弱粉質土　外側面に煤付着
18	8	表面採集	丸瓦	／	／	／	胎土は黒色粒・白色粒・小石を含む淡黄白色土
18	9	表面採集	青磁花瓶脚台	1.10	3.20	2.15	素地は灰色弱粘質緻密土　釉は強い二次焼成を受け白濁した淡青色を呈す

表1　遺物観察表(11)

挿図番号		出土地	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土色調・成形・整形・備考
18	10	表面採集	瀬戸灰釉折縁深皿	／	／	／	胎土は黄味明灰色緻密土　釉は淡緑色のハケ塗り
18	11	表面採集	瀬戸灰釉卸皿	／	10.80	／	胎土は灰色緻密土　釉は灰緑～濃灰緑色を呈す
18	12	表面採集	瀬戸灰釉卸皿	／	11.10	／	胎土は明灰色緻密土　釉は淡灰緑色のハケ塗りで極く薄く施釉　図16－1と同一個体の可能性あり
18	13	表面採集	常滑片口鉢Ⅰ類	／	／	／	胎土は小石を多く含むザックリとした粗い灰色土　器表は灰色を呈す
18	14	表面採集	常滑片口鉢Ⅱ類	／	／	／	胎土は小石と石英を含む暗灰色土　器表は茶褐色～黒褐色を呈す
18	15	表面採集	常滑片口鉢Ⅱ類	／	／	／	多量の石英小石を含むザックリとした暗橙色土　器表は茶～暗橙色を呈す
18	16	表面採集	常滑片口鉢Ⅱ類	／	／	／	多量の石英と雲母を含むザックリとした暗茶褐色土　器表は暗灰色を呈す
18	17	表面採集	釘	長15.6×幅0.1×厚0.3			
18	18	表面採集	銭				「熙寧元寶」
18	19	表面採集	銭				「大観通寶」　小平銭
18	20	表面採集	銭				「政和通寶」
18	21	表面採集	砥石	遺存長1.9×幅3.15×最大厚0.55			黄白色泥質頁岩仕上砥　図上右側縁上部はカワで剥離している
18	22	表面採集	砥石	遺存長6.15×最大幅3.6×厚9.95以上			緑黄色泥質頁岩仕上げ砥　石目は硬質で緻密
19	1	表面採集	箸	長18.8×幅0.8×厚0.6			
19	2	表面採集	箸	長18.8×幅0.7×厚0.15			
19	3	表面採集	箸	長19.0×幅0.5×厚0.6			
19	4	表面採集	箸	長19.2×幅0.5×厚0.5			
19	5	表面採集	箸	長19.7×幅0.6×厚0.1			
19	6	表面採集	箸	長20.0×幅0.7×厚0.35			
19	7	表面採集	箸	長20.7×幅0.5×厚0.35			
19	8	表面採集	箸	長20.3×幅0.75×厚0.15			
19	9	表面採集	箸	長21.2×幅0.7×厚0.15			
19	10	表面採集	箸	長22.7×幅0.65×厚0.1			
19	11	表面採集	箸	長21.6×幅0.75×厚0.75			
19	12	表面採集	箸？	長20.1×幅0.8×厚0.1			
19	13	表面採集	曲物底板	遺存長11.3×幅3.15×厚0.6			側面に木釘穴なし　全体に厚く煤付着　柾目材使用
19	14	表面採集	折敷転用品？	長19.7×幅6.65×厚0.1			平面は台形状を呈す　柾目材使用
19	15	表面採集	枡	縦7.2×横6.8×高さ3.2			外底周縁部に5箇所と各側板側面からの2箇所づつの木釘で組み立てる　中央に用途不明の木釘が1箇所遺存　側面は全て板目材使用
19	16	表面採集	草履芯	長20.1×幅5.0×厚0.1			裏表面ともに植物圧痕を遺す　切り込み痕と鼻緒痕が若干残存する
19	17	表面採集	用途不明木製品	長19.3×幅3.65×厚1.1			裏面は平坦に調整されている　板目材使用
19	18	表面採集	紡績具	長15.2×幅1.6×厚1.0			糸巻きの横木　両端は丸みを帯び、中心は角柱状を呈す　中央のホゾは側（耳）に対して斜めに傾く　孔は小さい
19	19	表面採集	円板状木製品	長7.5×遺存幅5.7×厚3.0			木口を平坦に加工する途上の削り残しがある
19	20	表面採集	毬杖の鞠	径1.3～1.7			
19	21	表面採集	縦杵模造品	長20.9×径1.7×幅1.1			両端木口を平面状に整え、握り部分は二方向からの削り調整
19	22	表面採集	杓子状木製品	長20.85×幅3.3×最大厚0.6			板目材使用
19	23	表面採集	用途不明木製品	遺存長22.2×幅2.0×厚0.1			板目材使用
19	24	表面採集	用途不明木製品	長3.7×幅3.8×厚2.0			板目材使用
19	25	表面採集	用途不明木製品	長10.5			内側に筒状の凹凸あり　表面全体が焼ける

a. Ⅰ区第1・2面全景(西から)



b. 第2面出土琵琶形とかわらけ

Ⅰ区

c. 第3面全景(南から)

Ⅱ区

d. 溝2近景(南西から)

e. 溝2(西から)

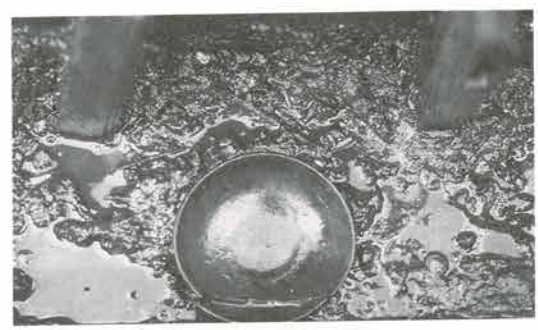
f. 溝2近景(南から)

図版２

a. 溝２近景（南から）

b. 溝３（北から）

c. 溝４a（西から）



d. 溝40a 内出土かわらけ

e. 溝７b（西から）

g. 溝11（北から）

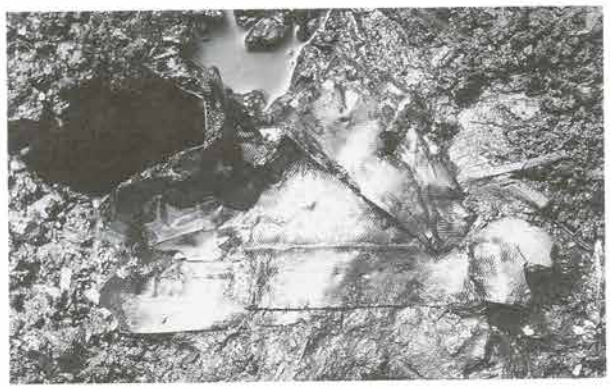
f. 溝７b内出土曲物

a. 第４面道路（南から）

b. 溝15・16（北から）

c. 溝9c（西から）

d. 溝9c（南から）



e. 方形土壙内出土鳥帽子

f. 第６面道路（西から）

g. 湧水と雨水で水没したⅠ区

図版４

かわらけ

9－3

24－1

37－10

43－4

43－5

47－3

5－2

27－5

28－4

34－8

37－12

40－6

土製品

37－15

37－16

37－17

火　鉢

17－4

43－8

土　鍋

47－3

舶載磁器

47－10

48－9

石製品

24－10

27－27

国産陶器

9－17

46－5

9－9

金属製品

9－13

9－11

漆器

10－8

40－40

28－12

10－9

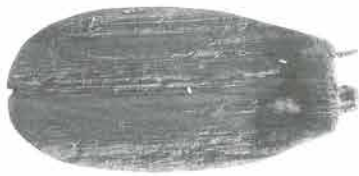
23－1

図版6

木製品

39－10

49－15



39－9

39－13

43－20

43－21

22－1

木製品

13－6

40－15

16－7

24－13

49－20

49－18

25－4

7－3

図版８

木製品

39－12

27－10

49－21

9－19

43－33

25－3

49－22

9－23

46－10

27－17

25－5

よここうじしゅうへん
横小路周辺遺跡　(No.259)

二階堂字荏柄10番１地点

例　言

1．本報は、横小路周辺遺跡(No.259)の所在する遺跡内の鎌倉市二階堂字荏柄10番１地点における個人専用住宅の新築に伴う緊急調査報告書である。

2．発掘調査は、平成13年２月22日～同年４月27日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3．調査体制は、以下の通りである。

調査担当者：原廣志

調　査　員：太田美智子、須佐直子、須佐仁和、早坂伸市、中川建二

調査補助員：梅岡渓音、久保田裕美(明治大学生)、猿田功一・鈴木弘太・宇都洋平(以上鶴見大学生)、橋本和之・原考史(以上国士館大学生)

協力機関名：鎌倉市高齢者事業団シルバーセンター、鎌倉考古学研究所、東国歴史考古学研究所

調査協力者：北島清一・沼上三代治・有田正夫(高齢者事業団シルバーセンター)、下田美希

4．本報の執筆は、第１章・第３章を原、第２章を須佐(直)、第４章については調査員協議のもと原が執筆した。遺物観察表を須佐(仁)が作成し、編集は原が行なった。

5．本報掲載の写真は、全景・個別遺構及び出土遺物を須佐(直)・原が撮影した。

6．発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7．本報の凡例は、以下の通りである。

・図版縮尺　　全測図：１／60
　　遺構図：１／20
　　遺物図：１／３、１／６(常滑甕)

・遺構図版　　遺構のレベルは海抜標高の数値を示している。

・遺物図版　　-・-・-は釉薬の範囲を示す。黒塗りは燈明皿に付着した油煙煤である。

・遺物色調　　標準土色帖（財)日本色彩研究所

8．現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表します(敬称略、五十音順)。

秋山哲雄、伊丹まどか、大三輪龍彦、岡陽一郎、小野正敏、尾畑博子、河野眞知郎、神山晶子、菊川泉、小林康幸、斎藤慎一、佐藤仁彦、宗臺秀明、玉林美男、塚本和弘、継実、手塚直樹、福田誠、松尾宣方、馬淵和雄

目　次

例　言……276

目　次……277

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……279
１．遺跡の位置……279
２．歴史的環境……279

第２章　調査の概要……282
１．調査の経過……282
２．測量軸の設定……284
３．層序と生活面……284

第３章　検出遺構と出土遺物……285
１．第１面の遺構・遺物……285
２．第２面の遺構・遺物……295
３．第３面の遺構・遺物……294
４．第４面の遺構・遺物……297
５．第５面の遺構・遺物……303

第４章　調査のまとめ……312

挿　図　目　次

図１．調査地点と周辺遺跡……280
図２．グリット設定・配置図……283
図３．第１面全測図……286
図４．土壙３常滑甕出土状況……286
図５．第１面出土遺物（１）……287
図６．第１面出土遺物（２）……288
図７．第２面全測図……289
図８．第２面出土遺物（１）……290
図９．第２面出土遺物（２）……292
図10．第２面出土遺物（３）……293

図11．第２面出土遺物（４）……294
図12．第３面全測図……295
図13．第３面出土遺物（１）……296
図14．第３面出土遺物（２）……297
図15．第３面全測図……298
図16．第４面出土遺物（１）……299
図17．第４面出土遺物（２）……300
図18．第４面出土遺物（３）……301
図19．第４面出土遺物（４）……301
図20．第４面出土遺物（５）……302
図21．第５Ａ面全測図……304
図22．第５Ａ面出土遺物（１）……306
図23．第５Ａ面出土遺物（２）……307
図24．第５Ｂ全測図……308
図25．第５Ｂ面出土遺物（１）……309
図26．第５Ｂ面出土遺物（２）……310
図27．中世地山トレンチ……310
図28．中世地山トレンチ出土遺物……311
図29．周辺調査地点の検出遺構……312

遺　物　観　察　表

表１．遺物観察表（１）……314
表２．遺物観察表（２）……315
表３．遺物観察表（３）……316
表４．遺物観察表（４）……317
表５．遺物観察表（５）……318
表６．遺物観察表（６）……319
表７．遺物観察表（７）……320

図　版　目　次

図版１．第１面Ⅰ・Ⅱ区全景、土壙６……321
図版２．第１面土壙３、遺物出土状況……322
図版３．第２面Ⅰ・Ⅱ区全景、土壙２……323
図版４．第２面礎石列、土壙５他……324
図版５．第３面Ⅰ・Ⅱ区全景、土壙５……325
図版６．第４面Ⅰ・Ⅱ区全景、柱穴列……326
図版７．第４面柱穴列、遺物出土状況……327
図版８．第５Ａ・Ｂ面Ⅰ・Ⅱ区全景他……328
図版９．地山トレンチ、各壁土層堆積……329
図版10．第１面・２面出土遺物……330
図版11．第２面出土遺物……331
図版12．第３面・４面出土遺物……332
図版13．第４面・５面他出土遺物……333
図版14．第５面、地山トレンチ出土遺物…334

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

本調査地点は、ＪＲ鎌倉駅から北東約 1.2Kmの場所で二階堂地区に位置している(図１)。この一帯は、東御門川と二階堂川に挟まれ南方を流れる滑川に合流する地域で、これらの河川開析によって平坦な土地が形成されている。北東側には、北から南に延びる標高50ｍほどの丘陵が広がっており、その先端部の中腹に荏柄天神社が鎮座している。県道金沢鎌倉線(『六浦道』以降この名称で呼称)が走っている。六浦道は鶴岡八幡宮の東にあたり、現在の横浜国大付属小学校入口に接した筋替橋交差点から東方へ向かって直線的に延びており、六浦道と永福寺へ向かう二階堂大路との交差点に関取橋に至る北側域は、「大倉御所」または「大倉幕府」と呼ばれた源氏三代の将軍御所が所在した地にあたる。本調査地点の周辺には、西隣する東御門という地名が残り御所の東側に門があったことが分かり、北側域の二階堂の地名は二階堂永福寺に由来しており、頼朝の入府以前の創建とされる荏柄天神が鎮座している。六浦道と荏柄天神社参道が交差する位置に石鳥居が建っているが、調査地点はその東隣で参道に面した場所に所在する。

ところで鳥居脇には現在でも、元文５年～明治32年(1740 ～ 1900)の銘を刻んだ６基の庚申塔が建ち、その傍らにはつい最近まで関東大震災で倒壊した明和５年(1768)記年銘をもつ石鳥居がそのまま残されていた。文政10年(1827)鶴岡八幡宮再建に際し、鎌倉を訪れた隅田大隅守の家臣海老原孫三郎によって描かれた古絵図には、山の中腹に建つ荏柄天神社と石段下に別当一乗院らしき建物以外は、大倉幕府方面も含めて一面に田畠が広がり、六浦道と参道入口に石鳥居と思しきものが見られるに過ぎない。

２．歴史的環境

荏柄天神社は、長治元年(1104)の勧請と伝えられ菅原道真を祭神として開かれているが、かつては縄文時代の遺物も採集されていることがあり(赤星　1959)、また今回の発掘調査においても中世以前に遡る遺物の奈良・平安時代の土器類が出土しており、鎌倉の中でも比較的早くから人々の生活が営まれていた地域であったことが窺える。荏柄天神社だけでなく、六浦道沿いには行基の創建したという伝説を残す鎌倉最古の寺院といわれている杉本寺があり、古くから武蔵野国久良木郡六浦(横浜市金沢区大道・六浦)への往来道として鎌倉の主要な幹線道路の一つであったことがわかる。中世においては、本調査地点の南方、六浦道と滑川を挟んで頼朝の父義朝を弔うために源氏の菩提寺として建立された勝長寿院跡の谷戸があり、奥州合戦の後に頼朝の御願寺として創建された永福寺が北東方向に位置しており、西方で現在の清泉小学校のある周辺域が大倉幕府跡の推定地にあたっている。

頼朝が鎌倉に入る以前から、この六浦道沿いの地域は三浦一族(和田氏も含む)が掌握していたとの指摘もみられる(石井　1986・石丸1993)。『吾妻鏡』には、本調査地点に関係すると思われる、「荏柄前」や「御所東隣」に屋地を構えていたという和田義盛の甥にあたる和田平太胤長の記事があり、その指摘を傍証するものであろう。また頼朝が大倉の地に邸宅を置いたと同時に、御家人たちは周辺に「宿館」を構えたようで、六浦道を挟んだ南側には畠山重忠や八田知家の邸宅、宇佐美判官や宮内権大輔時秀の屋敷も近接した場所にあったらしい(貫 1971)。後に将軍となる頼経が鎌倉に到着してすぐ、北条義時

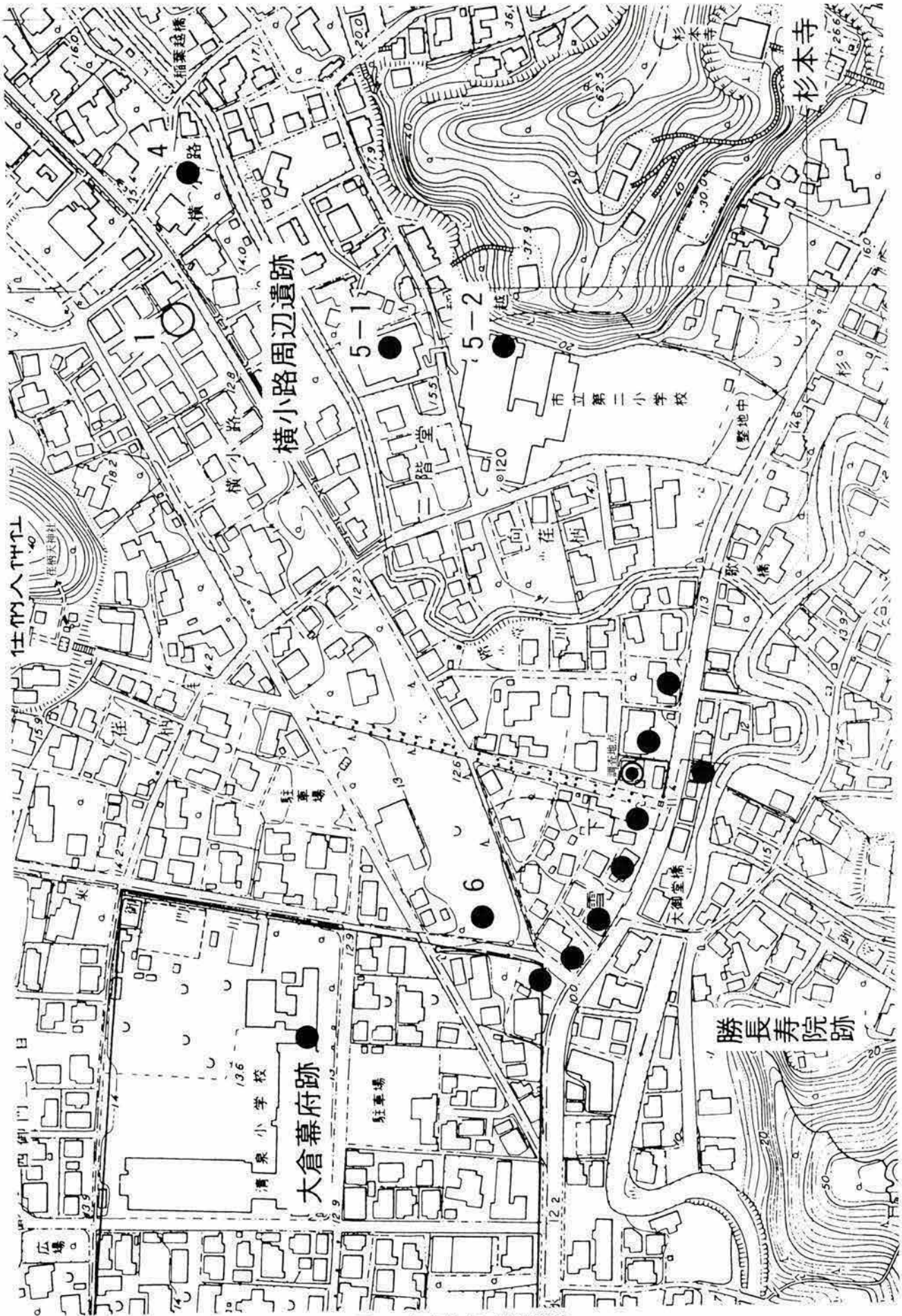


図１　調査地点と周辺遺跡

の大倉邸に入っており、義時の屋敷も御所に近い二階堂大路辺にあったことが考えられる。本調査地点を含む地域には、先ほどの和田胤長の屋敷の他、比企能員の邸宅もあり、京都から来た勅使がこの地に滞在したという。

大倉から若宮大路周辺への将軍御所の移転に伴いこの付近に関する史料も減ってしまうようである。寛喜３年(1231)の火災では、勝長寿院から永福寺まで被害にあっており、本調査地点周辺もこの時に被災している可能性が高い。関取橋の辺りは、「大倉辻」とも呼ばれ、建長３年(1251)と文永２年(1265)に出された鎌倉幕府の法令により商業地域の規制が行なわれ際、小町屋並びに売買の施設を許可する地域に指定されている。この一帯は当時、御家人の邸宅と町屋とが密集する場だったことが推測される。鎌倉幕府の滅亡以降、現在の浄妙寺周辺に鎌倉公方の邸宅があったと推定されており、そこに仕える武士達の宿館もあたりに建てられていたと想像される。時期は下って、後北条氏の小田原城主北条氏康によって天文年間には、荏柄天神社の再興造営のために六浦道を通行する商人たちから関銭を徴収したという。その場所は大倉御所の東南角、現在の関取橋の付近にその名の由来となった「関取場」が置かれていたようである。

【引用・参考文献】

赤星直忠　1959『鎌倉市史考古編』吉川弘文館

石井　進　1986「中世六浦の歴史」『三浦古文化』40

石井　進　1994「文献からみた中世都市鎌倉」『中世都市鎌倉を掘る』鎌倉考古学研究所編

石井　進　1999『[もののふの都]鎌倉と北条氏』石井　進編　新人物往来社

石丸　熙　1993『都市鎌倉の武士たち』新人物往来社

河野眞知郎　1995『中世都市鎌倉－遺跡が語る武士の都－』講談社選書メチエ49

菊川英政　1991「大倉幕府周辺遺跡(No.49)雪ノ下大倉耕地565番４地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７平成２年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

菊川英政　1991『神奈川県鎌倉市　横小路周辺遺跡発掘調査報告書　－二階堂字荏柄９番１地点－』横小路周辺遺跡発掘調査団

五味文彦　1988『大系日本の歴史５　鎌倉と京』小学館

貫　達人　1971「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第８号

福田　誠　2000「横小路周辺遺跡(No.259)二階堂字荏柄10番６外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16　平成11年度発掘調査報告(第２分冊)』鎌倉市教育委員会

馬淵和雄　1998「大倉幕府周辺遺跡(No.49)雪ノ下四丁目620番５地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14　平成９年度発掘調査報告(第２分冊)』鎌倉市教育委員会

八幡義夫　1974「鎌倉時代に於ける武家屋敷の研究の内鎌倉幕府の東西南北の四御門と畠山重忠の考察」『金沢文庫研究』213

山田邦明　1992「室町時代の鎌倉」五味文彦編『都市の中世』吉川弘文館

山村亜希　1997「中世鎌倉の都市空間構造」『史林』80-2

第２章　調査の概要

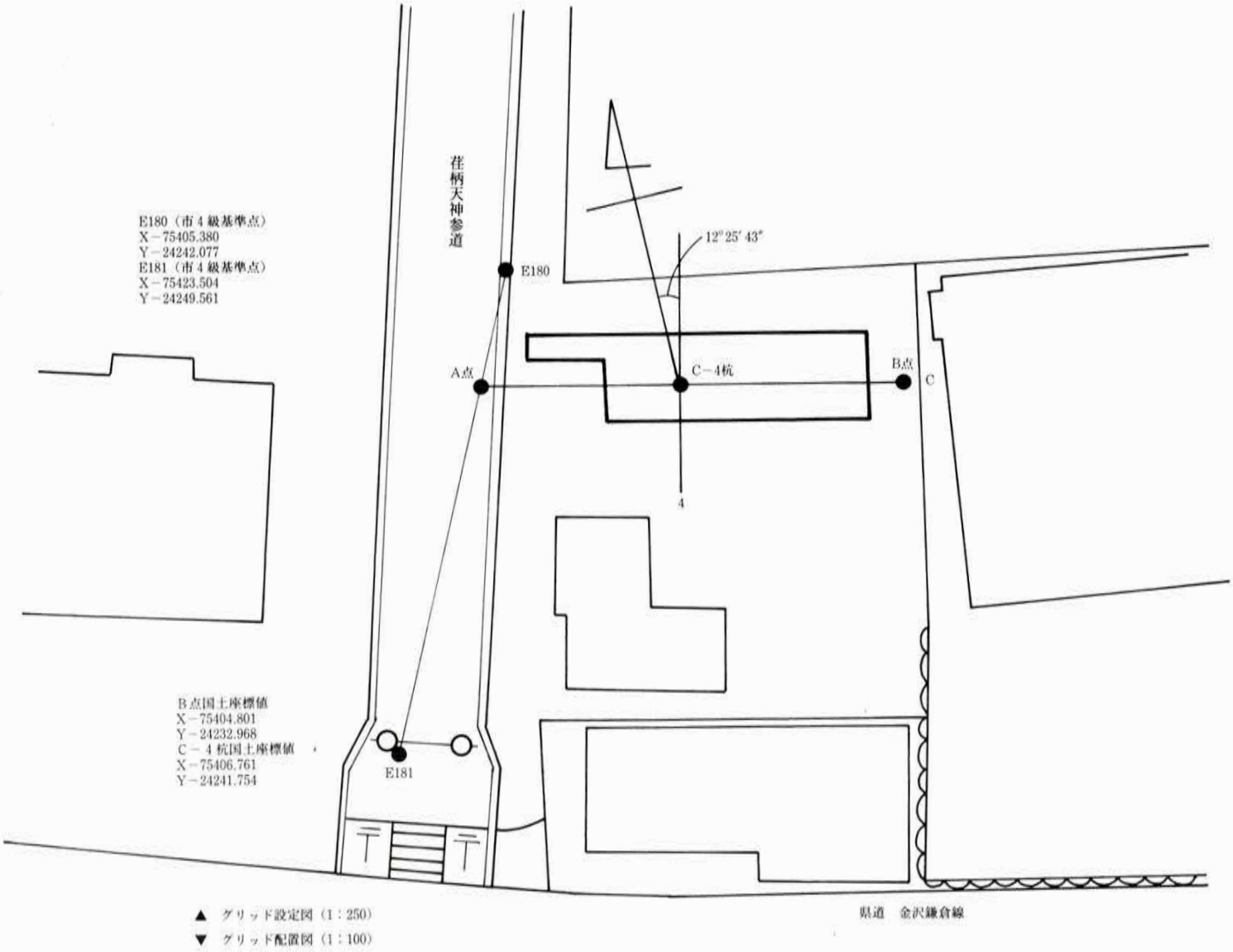
１．調査の経過

本遺跡は、鎌倉市北東部の鶴岡八幡宮東方にあたる二階堂に位置しており、本調査地点は横小路周辺遺跡（県遺跡台帳№49）の一角、鎌倉市二階堂字荏柄10番１地点に所在している。今回の現地調査に先立ち、個人専用住宅建設の事前相談があり、建物の基礎構造を鋼管杭打ち工法にするので埋蔵文化財に対する影響が予想された。東隣接地の発掘調査成果から現地表下40cm程で中世生活面が確認され、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。これにより発掘調査の実施について建築主と数度にわたる協議を重ねた結果、文化財保護法に基づく届出手続きと現地調査の実施方法などの話し合いを経て、平成13年２月から調査面積74.07㎡を対象として発掘調査を実施することとなった。

現地調査は、調査で発生する排土置場の問題から調査区を東西に２分割し、東側をⅠ区、西側をⅡ区として、それぞれ調査区範囲を設定した。平成13年２月22日よりまず　区の表土を重機によって掘削することから始められた。その結果、Ⅰ・Ⅱ区は共に鎌倉時代初期～後期にかけての５時期以上の生活面と、それに伴う遺構・遺物が発見された。同年４月27日までの間に必要な記録保存を行ない、無事に現地調査を終了することができた。調査経過については、以下のように調査日誌の抜粋を記すことにする。

日　誌　抄

２月22日　Ⅰ区調査開始。機材搬入。調査区を設定し、重機による表土掘削。
23日　第１面の検出作業を開始。鎌倉市４級都市基準点を基に測量用の方眼杭を設定、レベル原点を調査区内に移動。
28日　第１面の調査終了。全景・据甕土壙などの写真撮影、全測図作成。
３月６日　第２面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
12日　第３面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
14日　第４面柱穴列の写真撮影・図面作成
19日　第４面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
29日　第５面（中世地山面）の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
４月２日　調査区南壁際にトレンチ設定、調査区各壁の土層堆積図作成。
３日　Ⅱ区調査開始。調査区を設定し、重機による表土掘削。
６日　第１面の調査終了。全景写真撮影、全測図作成。
10日　第２面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
12日　第３面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
16日　第４面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
19日　第５Ａ面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
24日　第５Ｂ面（中世地山面）の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
27日　現地調査終了。関係各方面に発掘調査を終了したとの旨を連絡し、機材撤収。



▲ グリッド設定図（1：250）
▼ グリッド配置図（1：100）

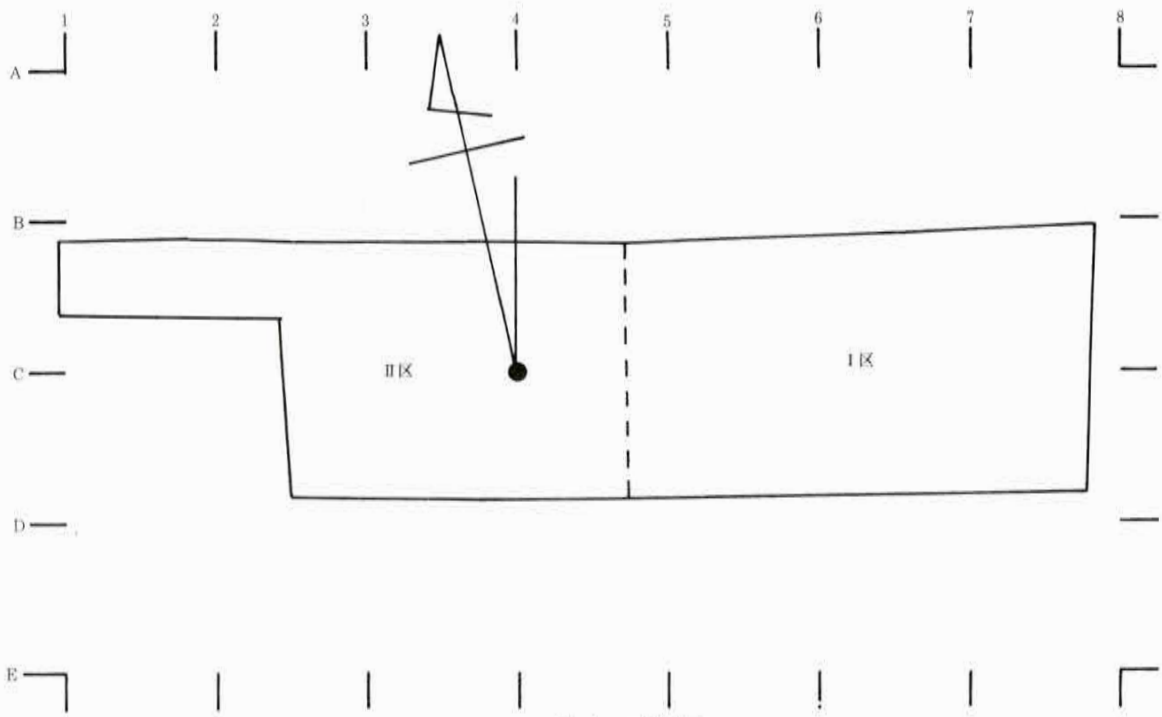


図２　グリッド設定・配置図

2．測量軸の設定

調査にあたっては、調査地西側に隣接した佐柄天神社参道の軸方位を意識して測量用の方眼を設定した。図２上段に図示したように参道沿いには、鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市４級基準点のＥ180とＥ181が確認されたので、両基準点の延長線上にあたる調査区のほぼ中心部に任意の基準点Ａ点を置き、そこから17ｍ東に任意点Ｂ点を設けることにした。この東西軸線上(Ｃライン)でＡ点から東へ８ｍの位置にＣ－４杭を基準として、図２下段のように東西軸と南北軸をそれぞれ２ｍ方眼によりグリットを行なった。市４級基準点・任意点Ｂ点杭・Ｃ－４杭の国土座標の数値は、以下の通りである。

Ｅ180〔Ｘ＝－75405.380：Ｙ＝－24242.077〕　Ｅ181〔Ｘ＝－75423.504：Ｙ＝－24249.561〕

Ｂ点杭〔Ｘ＝－75404.801：Ｙ＝－24232.968〕　Ｃ－４杭〔Ｘ＝－75406.761：Ｙ＝－24241.754〕

図中の方位はすべて真北を採用し、グリット方眼の南北軸線は真北よりやや東に振れている。さらに調査地点の経緯は以下のようになる。

南北軸線　〔Ｎ－12°25′43″－Ｅ〕

調査地点　東経〔139°34′10″〕：北緯〔35°19′00″〕

海抜標高の原点移動については、県道金沢鎌倉線から大塔宮(鎌倉宮)へ至る岐れ路の交差点付近に設けられた鎌倉市３級水準点(No.53209：Ｌ＝12.107ｍ)から調査地のＢ点杭上に仮水準点を移動した。文章中及び挿図に記載されたレベル数値は、すべてこれを基準にした海抜標高を示している。

3．層序と生活面

調査地点の堆積土層は概ね７層に区分されたが、その中で少なくとも５時期の生活面が確認された。堆積の状態は、図・に示した通りである。１層としたのは厚さ20～35cmの表土層で、小片遺物を含んだ耕作土である。これを除去すると、小土丹塊を多めに混入した暗茶褐色弱粘質土の第２層(地業層)が表出した。この層の上面が第１面であるが、海抜標高12.60～12.75ｍほどで調査区東際から西壁へ向かってやや高くなるように整地されていた。第３層は大小土丹塊による地業層で暗茶褐色弱粘質土、南側だけに遺物・炭化物を含んだ包含層(第１・２面の間層)が認められた。第４層は茶褐色粘質土で同層上部には土丹版築が認められ、海抜標高は12.4ｍ前後で第３面の生活面を構築している。第１面～第３面にかけては、厚さ10～15cmの薄い土層が互層状を呈しており、比較的短期間に幾度も地業を繰り返していたことを示している。

５層は、土丹版築の整地層とその上に厚さ15cm程の貝殻粒を多量に含む砂層とに分割されるが、同時期に行なわれた作事の地業層として捉えられる。図15の第４面全測図は砂層上面と土丹版築面との両生活面で確認された遺構を図示している。６層は暗黄褐色土の大小土丹塊による整地層、溝１・２の範囲を中心に検出されており、中世地山面(９層)に合わせて埋め戻された地業層である。この上面で検出したのが第５Ａ面の遺構である。第５Ｂ面は、これを除去して表出する暗茶灰色粘質土(９層)の上面から掘り込まれた遺構である。この層中には、藻状の植物繊維や木の葉・実などを少量混入するが、中世遺物を含んでいないことから自然堆積層による中世地山と推定された。さらに　区調査の折、調査区南壁沿いにトレンチを入れて掘り下げところ、海抜標高11.45ｍ前後でやや硬化した土層上面に薄い炭化物を部分的に確認した。遺物は伴っていないので時期は判然としないが、溝２壁面中から平安時代中期頃の土師器坏が出土した。また溝覆土や整地層中にも土師器・須恵器小片などの中世以前に遡る遺物の出土があり、当地は鎌倉の中でも早くから人々の生活が営まれていた地域であったことがわかる。

第３章　検出遺構と出土遺物

１．第１面の遺構・遺物

現地表下30㎝前後の表土を重機掘削すると、小土丹塊による地業面が薄い遺物包含層を挟んで確認することができた。この生活面を第１面とした。検出した遺構は、据甕土壙を含む土壙８基、柱穴50口などが確認されたが、掘建柱建物を構成するような柱穴の配置はみられなかった。出土遺物にはかわらけをはじめ、舶載磁器、瀬戸・常滑窯の製品、瓦質製品、鉄製品、石製品などがみられた。

土壙(図３～５、図版１・２・10)

土壙１：調査区中央東寄り、Ｃ－６杭の東隣して検出された。形状は隅丸方形を呈し、規模は南北軸・東西軸ともに約90㎝、深さは確認面から約30㎝、掘り方は断面が浅い摺鉢状である。覆土は炭化物、土丹粒を多めに含んだ締まりのない茶褐色土である。

出土遺物は(図５－１～３)、１がロクロ成形かわらけの小皿、２がコップ型を呈したかわらけ質の土製品、３が常滑捏鉢(片口鉢　類)である。

土壙３：調査区東壁際の中央やや北寄りで検出された据甕土壙と考えられる遺構である。東側は調査区外に拡がっており、確認できた規模は、南北軸約120㎝、東西軸80㎝以上、深さは確認面から約25㎝、断面が逆台形のやや浅い掘り方をもち、形状は隅丸方形に近いものと思われる。土壙内の覆土中位からは、常滑窯甕の口縁部～胴部にかけての大型破片が重なる状態で出土しているが、調査区内からは胴部下位～底部に関係した資料は認められなかった。

出土遺物は(図５－４～13)、４～10がロクロ成形かわらけである。小皿は４・５の薄手で器高がやや高く口径に比べ底径の小さいものと、６の器高が低く口径・底径比の少ないものがある。大皿は７・８が口径12㎝以下、９・10が口径13㎝以上の二種にわけられる。11は白磁口兀碗、12・13が常滑甕・壺である。

土壙５：調査区南壁際の西寄り、３ライン上で検出された。南側は調査区外に拡がっており、確認できた規模は東西軸約150㎝、南北軸57㎝以上、深さは確認面から50㎝程である。掘り方は断面が皿状で、長円形を呈しいてる。覆土は炭化物が多く、土丹粒・かわらけ粒を少量含んだ締まりのない暗茶褐色土である。

出土遺物は(図５－14・15)、14がロクロ成形かわらけで器高の低い厚手の小皿である。15は小型の白磁印花文の口兀皿、内面の口縁部に一条凸線を巡らし、その下に蓮華文風の文様が認められる。

土壙８：調査区中央、４・５ライン間で検出された南北位の溝状土壙であり、Ｐ－33に南端を壊されている。北側は調査区外に延びており、確認できた規模は南北軸195㎝以上、東西幅約50㎝、確認面からの深さ約15㎝、断面が浅い摺鉢状を呈している。覆土は土丹粒・かわらけ粒を多く含んだ締まりのない暗茶褐色土である。

出土遺物は(図５－16～20)、16・17がロクロ成形かわらけである。小皿は薄手の器高の高いもの、大皿は厚手の器壁をもち高めの器高を有するものである。18が瀬戸入子で外底に糸切痕を残す。19が常滑捏鉢、20は頂部を欠失しているが鉄釘である。

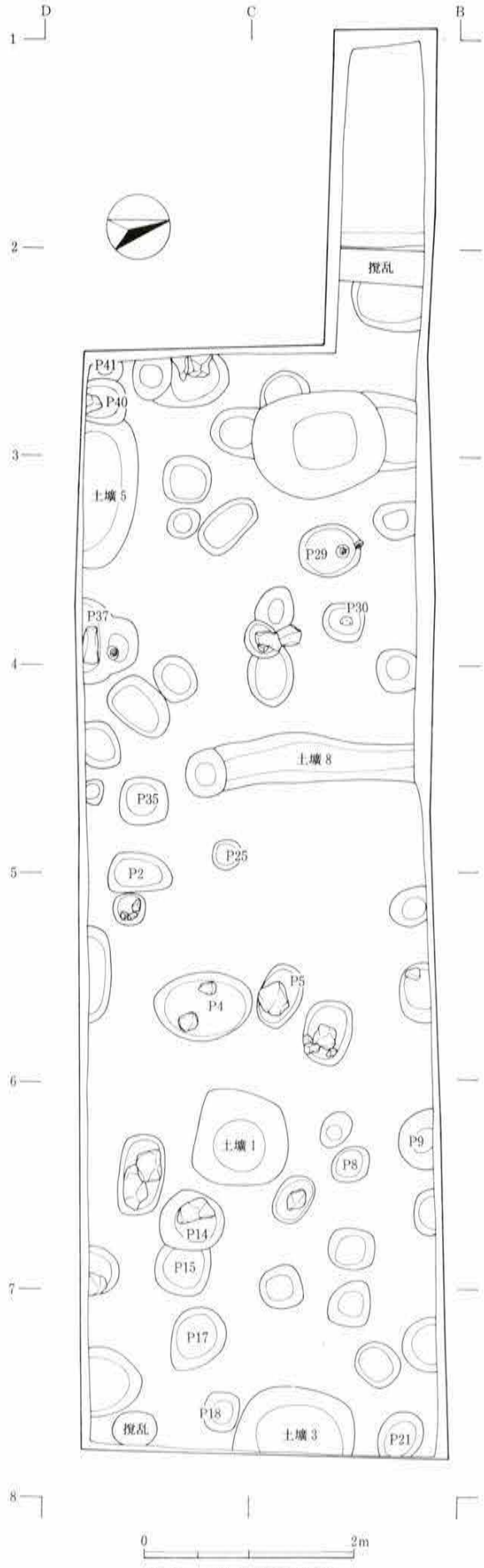


図3　第1面全測図

柱穴(図3・5、図版1・2・10)

各柱穴の掘り方は、円形又は楕円形を呈し、規模は径30～60cm、深さ20～30cmと浅い。柱穴の底面にはP－5・6・12・14・16などにみられるように偏平な土丹塊を据えているが、掘立柱建物や柱穴列(柵・塀など)を構成するような柱穴の並びを確認することはできなかった。

出土遺物は(図6－1～26)、P2－1は小皿かわらけで低めの器高をもつ。P4－2・3は器高が高めと低めの小皿。P5－4は高い器高の大皿。P8－5は大口径の薄手大皿。P11－7は厚手で器高の低い小皿。P13－8・9は中皿かわらけ・瀬戸瓶子。P14－10・11は小・大皿かわらけ。P15－12はかわらけ小皿。P17－13・14はかわらけ小皿と青磁無文碗。P18－15は青白磁梅瓶の蓋。P21－16・17はかわらけ小皿と龍泉窯系青磁折縁盤である。P25－18厚手のかわらけ小皿。P29・30・35－1920・21はかわら

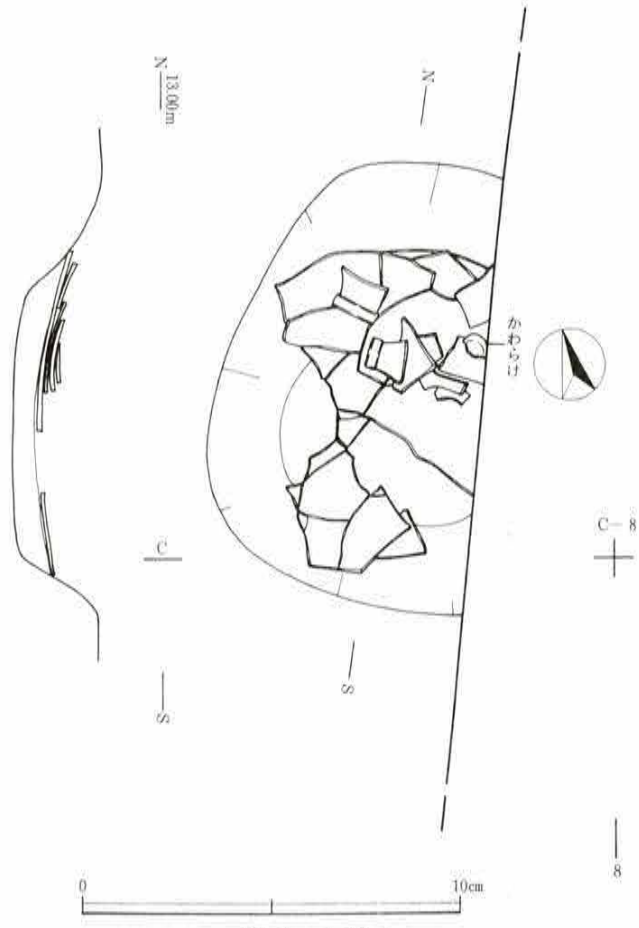


図4　土壙3

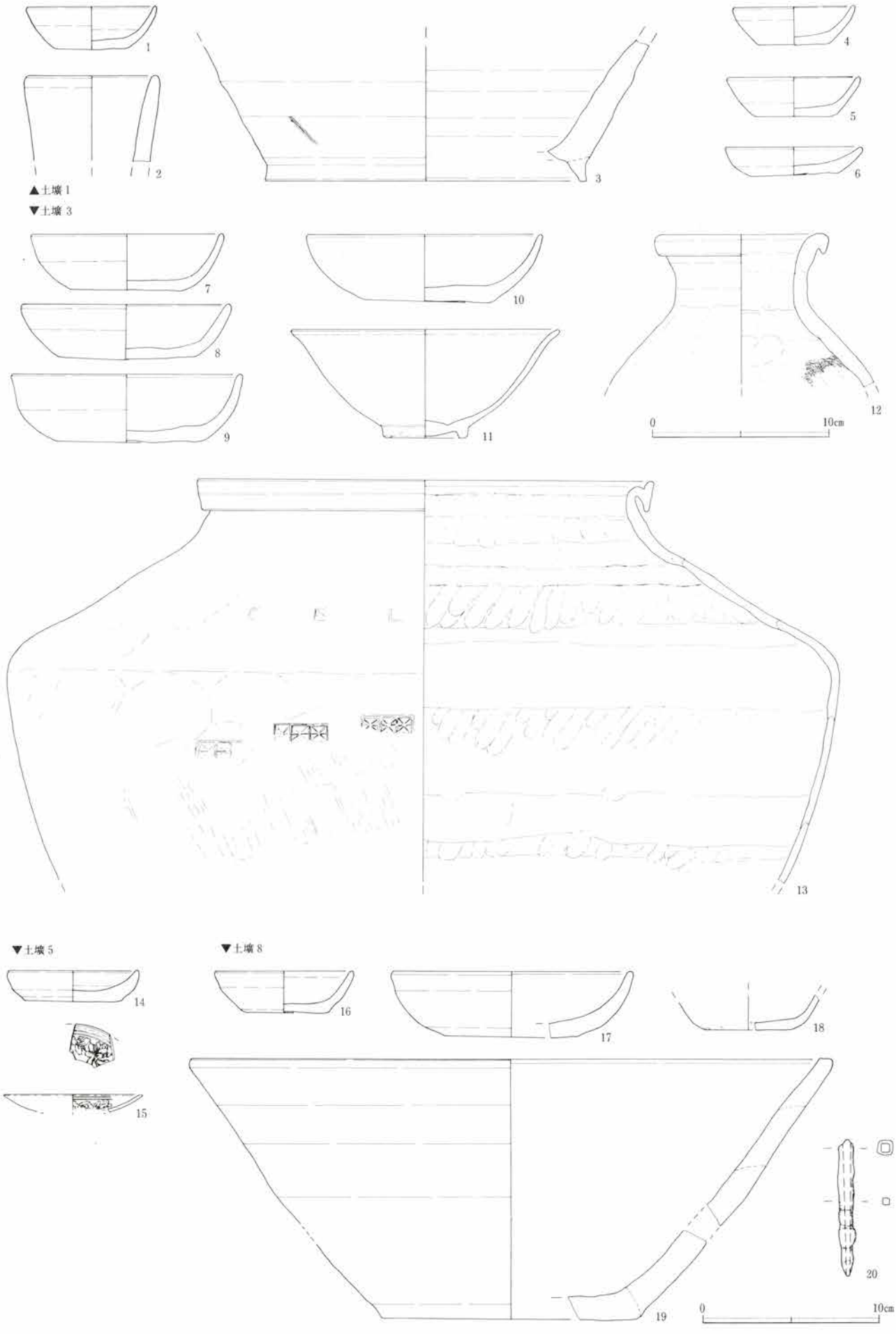


図５　第１面出土遺物（１）

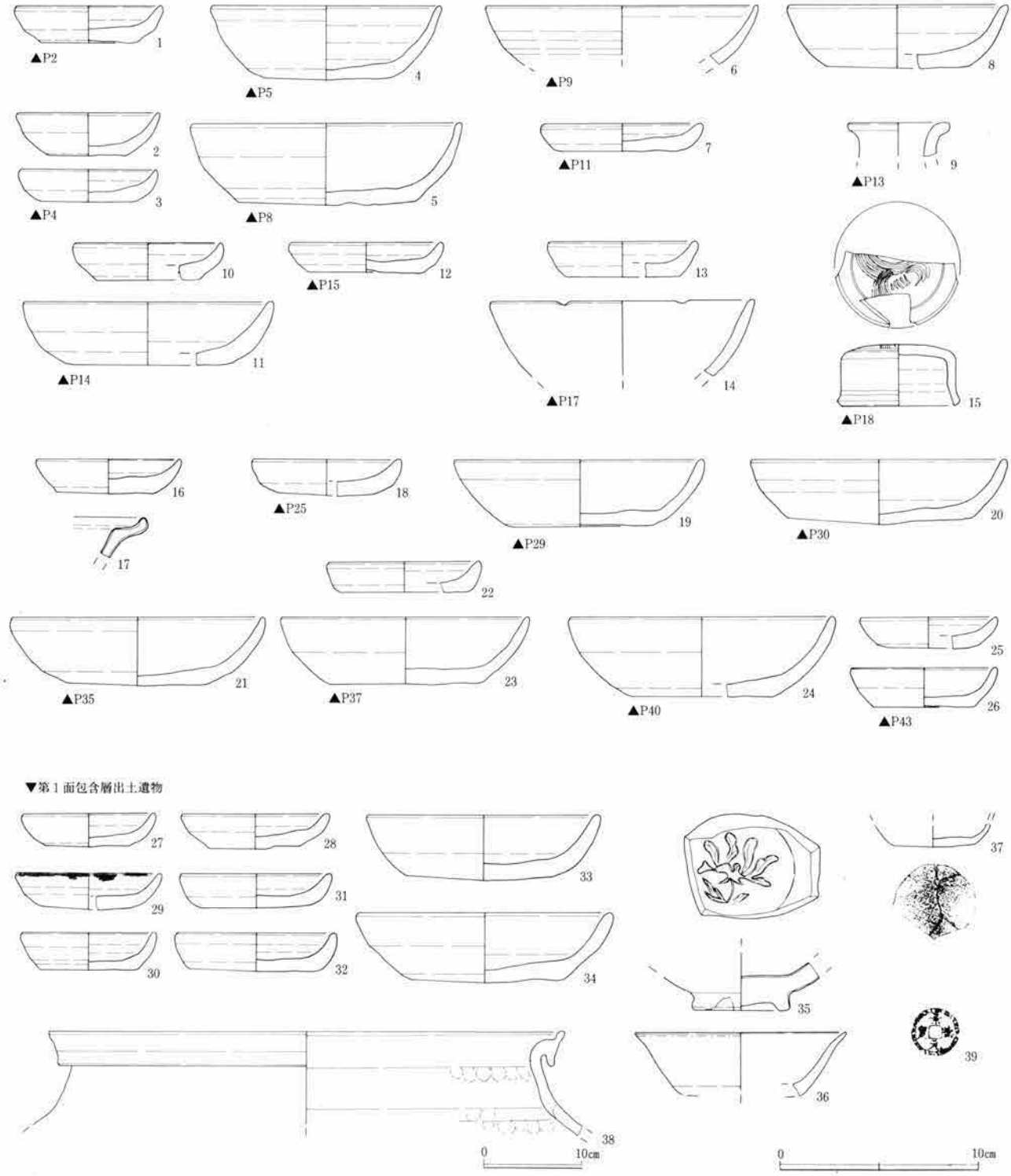


図6　第1面出土遺物(2)

け大皿。P37－22・23は小・大皿のかわらけ。P40－24は大皿のかわらけ。P41－25・26は厚手と薄手のかわらけ小皿である。

第1面上包含層出土遺物(図6－27～39、図版10)

27～34はロクロ成形のかわらけ、小皿にはやや厚手で器高の低い一群と、薄手で器高のやや高めの一群が認められた。35は龍泉窯系の青磁無文碗で見込には牡丹文の印花が認められる。36は白磁口兀皿で外反した口縁部を呈する。37は瀬戸入子で外底をヘラ削り成形する。38は常滑甕、39は北宋銭の「景徳元宝」(初鋳1004年)である。

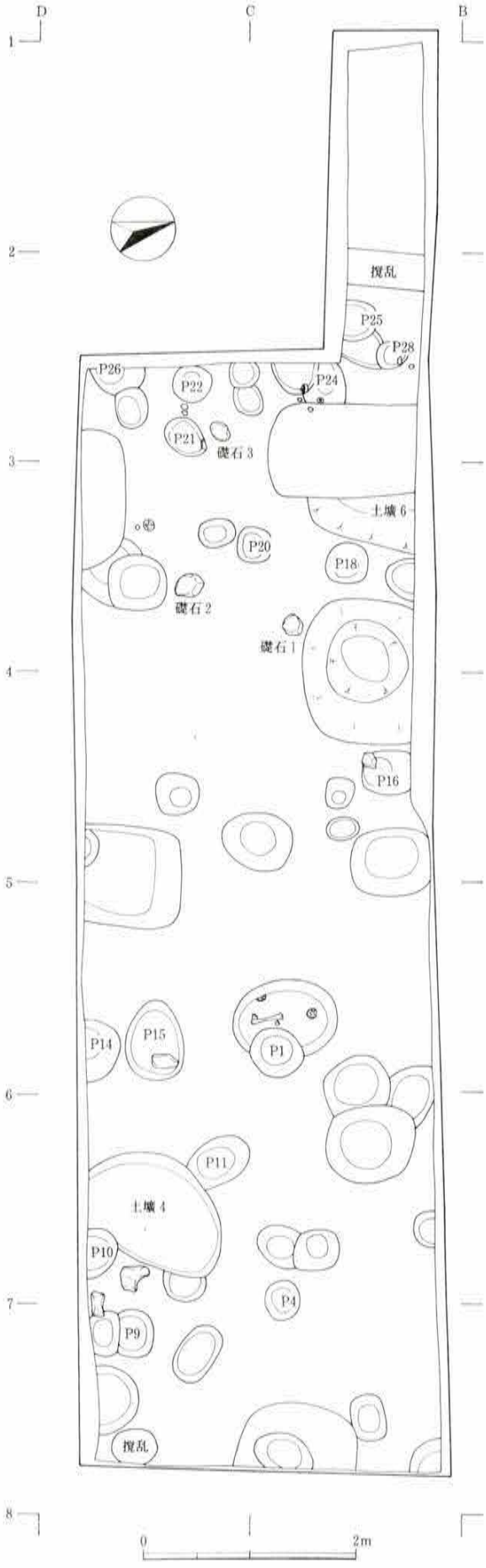


図7　第2面全測図

2．第2面の遺構・遺物

第1面から深さ20～30cm前後を掘り下げ、土丹塊による整地層が確認されたのが第2面である。海抜標高12.50m前後である。この面で検出した遺構は、礎石列、土壙6基・柱穴約40口で建物配置を示す柱穴は発見されていない。遺物はかわらけ、舶載陶磁器、瀬戸瓶子・入子、常滑甕・捏鉢、火鉢、金属・石製品などが出土している。

礎石列(図7、図版3・4)

この面からは、調査区西側のCラインを挟んだ位置に伊豆石(大磯付近から伊豆地方などの川原石・花崗岩の石材)がL字形に3個検出された。礎石は径20～30cmの不整円形で、厚さ13cm前後の偏平なものである。礎石芯々の距離は、礎石1～2が105cm、礎石2～3が152cmを測ることができる。南北軸方位はN－25-25-Eである。

土壙(図7、図版3・4・10)

土壙1：調査区中央北壁際、B－5杭南隣して検出された。北側はもう少し調査区外に拡がっており、確認できた規模は南北軸75cm以上、東西軸65cm、深さは確認面から約35cmで断面皿状の掘り方をもち、楕円形を呈する。図示できる遺物は出土していない。

土壙2：調査区中央、C－6杭東側で検出された。柱穴(P1)に一部を壊されている。規模は南北軸98cm、東西軸75cm、確認面からの深さ15cm程の浅い楕円形の土壙である。出土遺物は獣骨(牛馬)の他かわらけ・常滑甕・青白磁梅瓶の小片がある。

土壙3：調査区中央南壁際、C－5杭近接した位置で検出した。南側は調査区外に拡がっており、確認できた規模は南北軸93以上cm、東西軸95cm、深さ35cm程で、隅丸方形を呈する。図示可能な遺物は出土していない。

土壙4：調査区東側、D－6グリットで検出され、南側は調査区外に拡がる。規模は南北軸135cm以上、東西軸106cm、確認面からの深さ約10cmと浅く不整円形を呈している。

出土遺物は(図8－1～5)、1がロクロ成形の

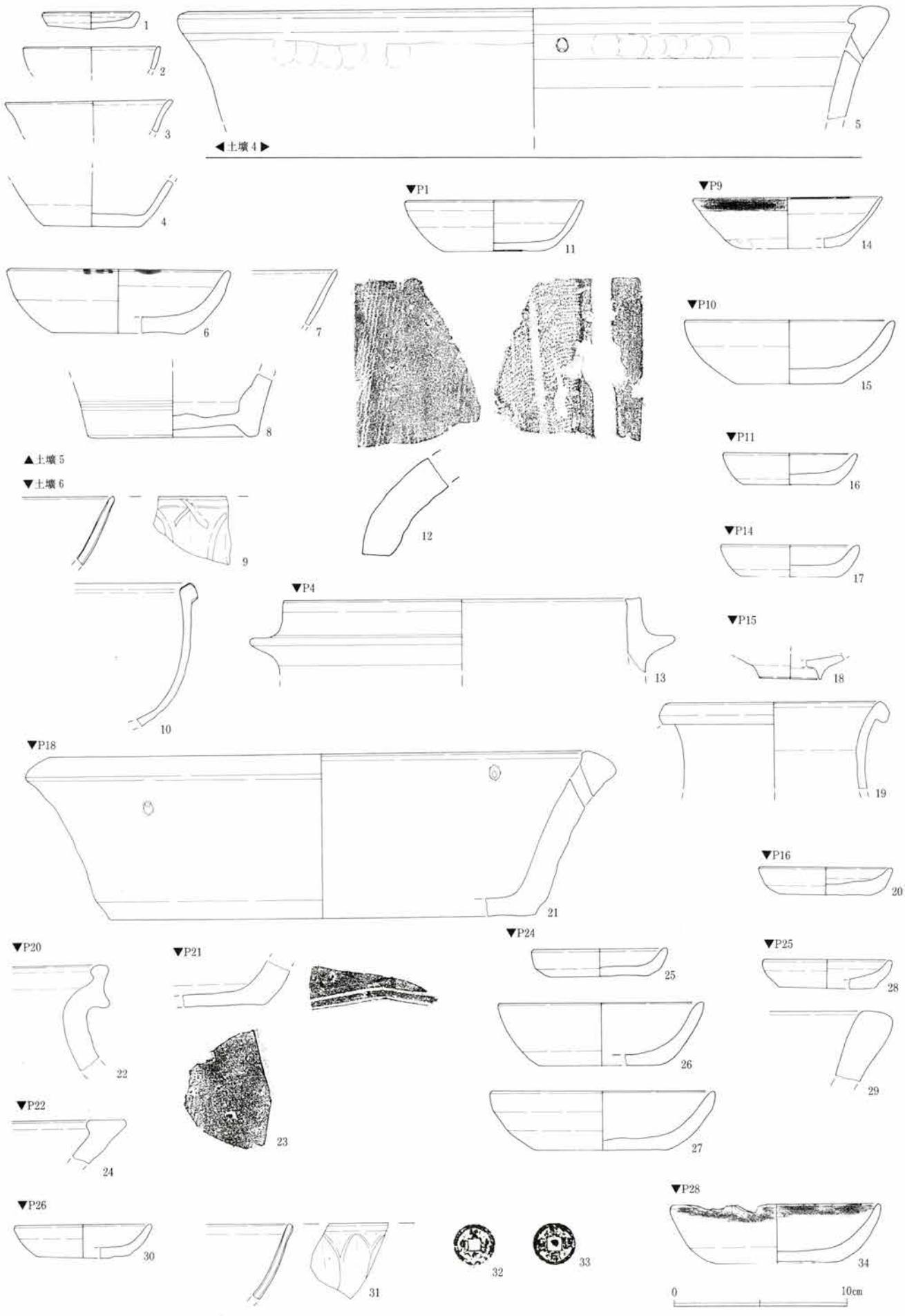

1
2
3
4
◀土壙4▶
5
▼P1
11
▼P9
14
6
7
▼P10
15
8
▲土壙5
▼土壙6
12
▼P11
16
9
▼P14
17
▼P4
13
▼P15
18
10
19
▼P18
21
▼P16
20
▼P20
▼P21
▼P24
25
▼P25
28
22
26
29
▼P22
23
27
24
▼P26
▼P28
30
34
31
32
33
0
10cm

図8　第2面出土遺物（1）

極小タイプのかわらけである。２～４が白磁口兀皿、５が土器質の火鉢で口縁端部が内・外面ともに肥厚している。

土壙５：調査区西側北壁際、Ｃ－４杭北側で検出され、調査区外に拡がっている。形状は隅丸方形を呈しており、確認された規模は南北軸105cm以上、東西軸137cmを測り、深さは確認面から50cm程である。掘り方は下位に円形を呈した稜が認められ、そこから底面に向かって緩やかに落ち込んで浅い皿状になっている。

出土遺物は(図８－６～８)、６がロクロ成形かわらけの大皿であるが、口縁部の内外に黒色の油煙煤が付着しており、燈明皿に使用されたものである。７が白磁口兀皿の口縁部片、８は青白磁梅瓶の底部片である。

土壙６：調査区西側北壁際、土壙５の西隣で検出された。北側は調査区外に拡がっており、第１面で検出した土壙に大半を壊されていた。確認できた規模は、南北軸105cm以上、東西軸60cm以上である。深さは確認面から約20cmと浅いものである。

出土遺物は(図８－９・10)、９が龍泉窯系の青磁蓮弁文碗の口縁部片であり、10が泉州窯系の三彩大盤の口縁～胴部片である。

柱穴(図７・８、図版３・11)

各柱穴の掘り方は、円形または楕円形を呈しており、規模は径30～60cm程、深さ20～50cmである。建物や塀などを示す柱穴配置を確認することができなかった。

出土遺物は(図８－11～33)、Ｐ１－11はロクロ成形かわらけの中皿で薄手の器壁をもつ、12が男瓦で永福寺創建期瓦(Ⅰ期)と同類の製品である。Ｐ４－13が羽釜形を呈した南伊勢系所産の土師器鍋である。Ｐ９－14は瓦器質の黒縁碗、Ｐ10－15がロクロかわらけの大皿、Ｐ11・14－16・17がロクロかわらけの小皿、Ｐ15－18・19が龍泉窯系の青磁碗と白磁四耳壺である。Ｐ16－20がロクロ成形のかわらけ小皿、Ｐ18－21が土器質鉢形の火鉢である。Ｐ20－22・23は常滑甕の口縁片と瓦質で六角ないし八角形を呈した火舎香炉の類と思われるものである。Ｐ22－24が土器質火鉢の口縁片、Ｐ24－25～27がロクロ成形の小皿と大皿のかわらけである。Ｐ25－28・29はロクロ成形のかわらけ小皿と土器質の火鉢、Ｐ26－30～33は30がロクロ成形のかわらけ小皿、31が龍泉窯系の青磁蓮弁文碗、32・33が北宋銭の「聖宋元宝」(初鋳1101年)・「皇宋通宝」(初鋳1039年)、Ｐ28－34がロクロ成形のかわらけで大皿で口縁の一部を打ち欠いて燈明皿にしており、油煙煤が付着している。

第１面下～２面出土遺物(図９～11、図版11)

図９－１～21はロクロ成形かわらけであるが、16は表面が二次焼成を受けて気泡状になっており、るつぼの可能性がある。小皿は口径7.4～8.0cm、底径4.6～6.2cm、２以外(器高2.2cm)の器高が1.4～1.9cmである。大皿は口径12.1～13.8cm、底径6.4～7.7cm、器高3.0～3.7cmである。

22～27は龍泉窯系の青磁蓮弁文碗、25が口縁部を輪花風に仕上げている。28は白磁合子蓋、29～33が白磁口兀皿、34が白磁四耳壺で同一個体と思われるので合成実測したものある。35は青白磁梅瓶である。

36～39は瀬戸製品である。36が洗の口縁片、37が四耳壺の底部片、38が瓶子　類の底部片、39が入子である。

40～47は常滑製品である。40・41は甕の口縁部と底部、42が短頸壺の口縁部、43～45が捏鉢(片口鉢Ⅱ類)、46・47も捏鉢(片口鉢　類)である。

48・49は土器質の火鉢である。50・51は女瓦である。52～54は滑石製の石鍋、55・56は砥石である。58は北宋銭の「熙寧元宝」(初鋳1068年)である。

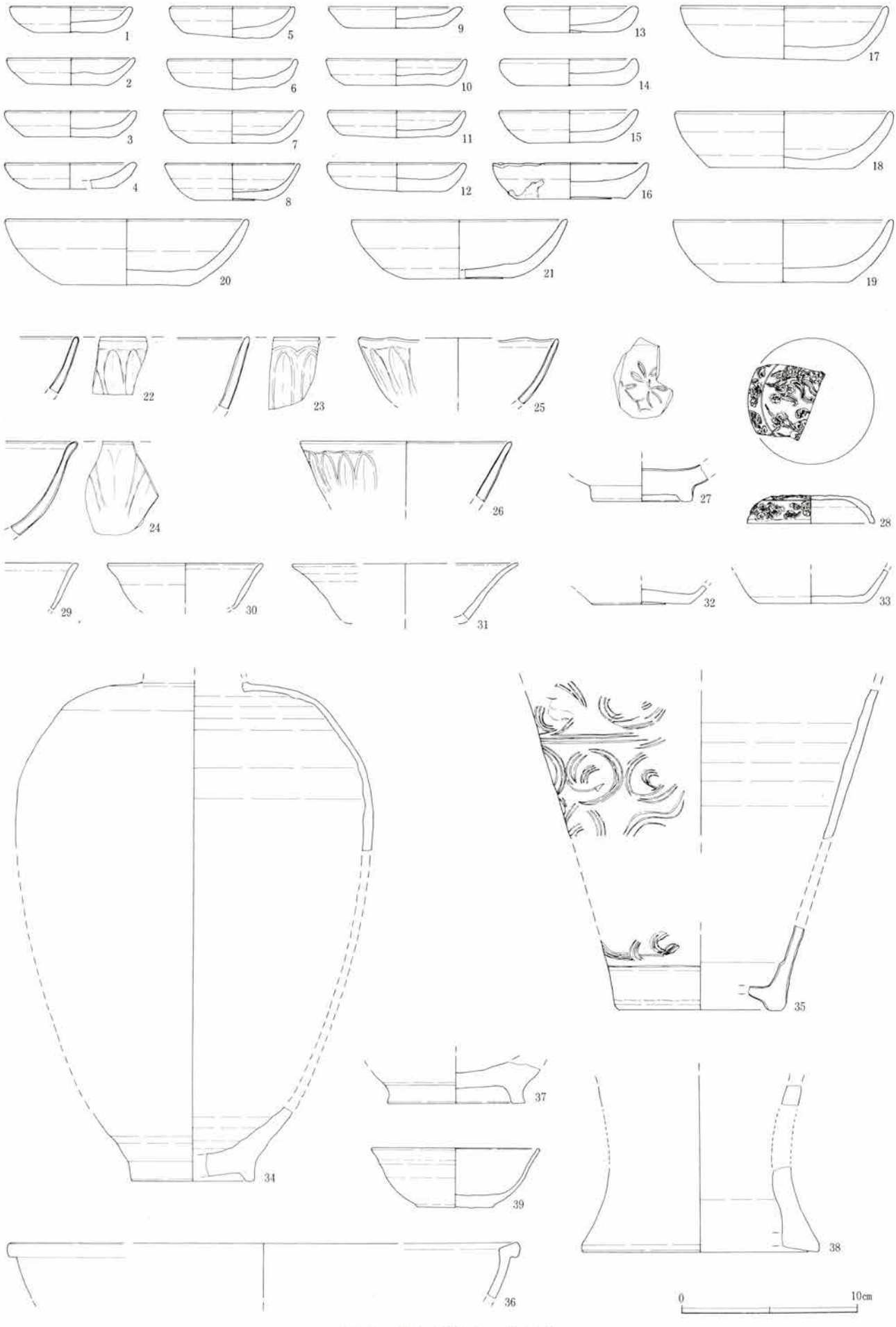

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
10cm

図９　第２面出土遺物（２）

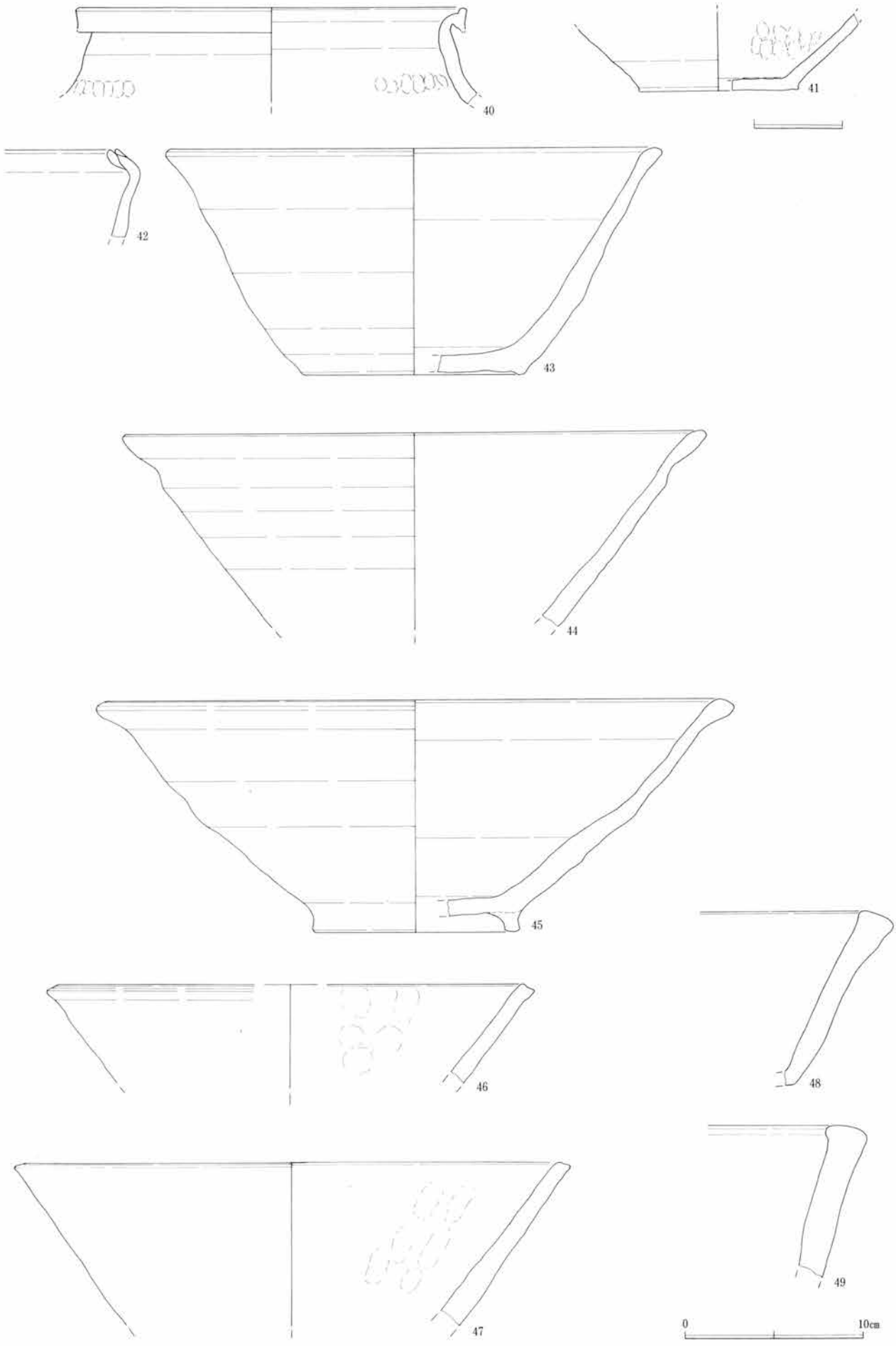


図10　第２面出土遺物（３）

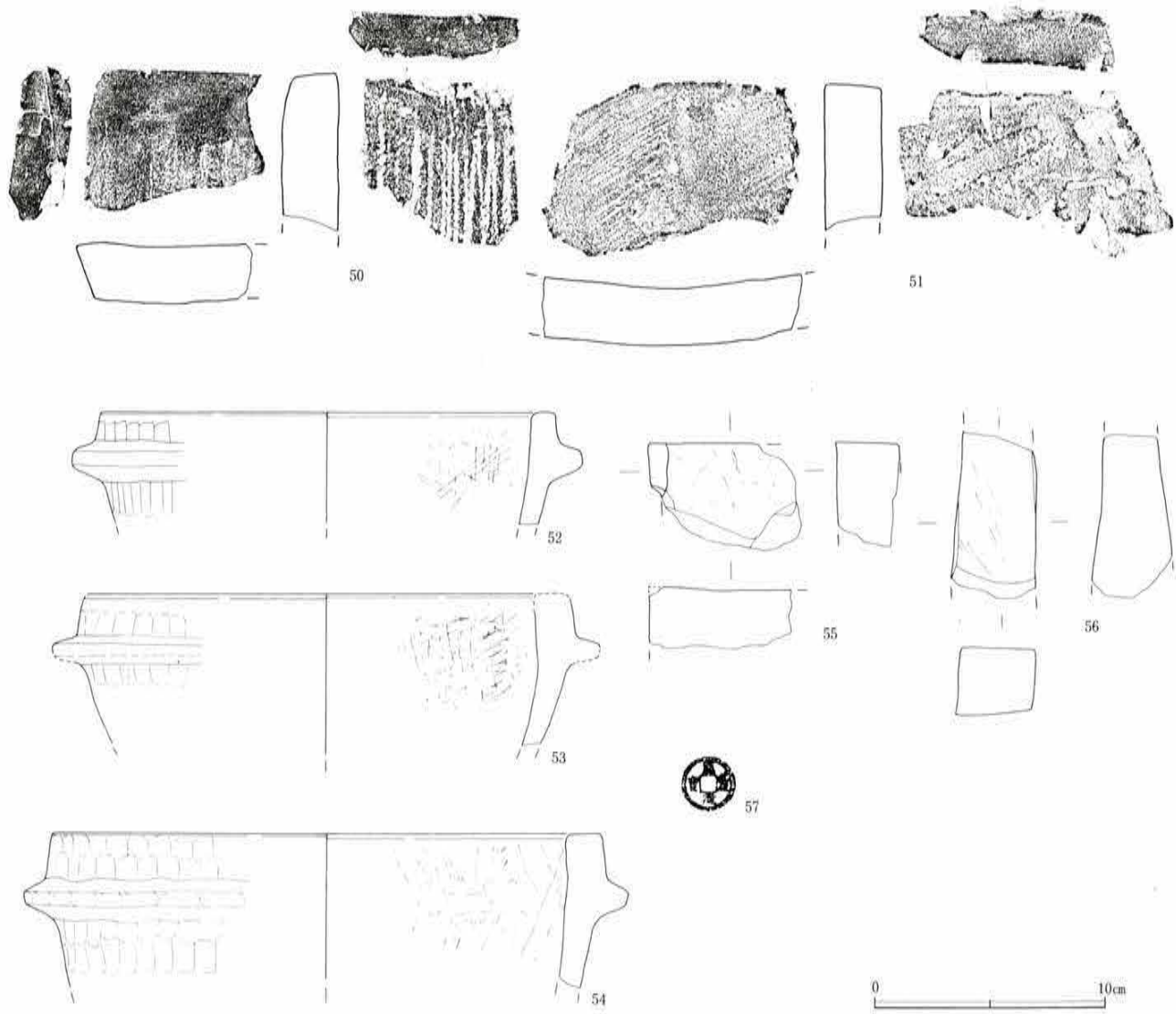


図11　第２面出土遺物（４）

３．第３面の遺構・遺物

第２面を構成する厚さ約15cmの整地層を除去すると、厚さ20cm程で上部に土丹版築を施した地業層を表出したのが、これが第３面である。この生活面は海抜標高12.30ｍ 前後である。第３面で検出した遺構には、土壙６基、柱穴57口などである。柱穴は重複しながら調査区全体に確認されたが、建物を構成するような配置を示すものはみられなかった。遺物はかわらけをはじめ、舶載陶磁器、瀬戸入子、常滑捏鉢、魚住甕、火鉢、瓦、土製品、石・金属製品などが出土している。

土壙（図12～14、図版５・12）

土壙１：調査区東側南壁際、Ｃ－６杭南隣して検出された。南側は調査区外に拡がっており、確認できた規模は南北軸143cm以上、東西軸150cm、確認面からの深さ15cmと浅い皿状の掘り方をもつ土壙である。底面には偏平な大小土丹塊が認められたが、何らかの意図をもって置かれていたものかは不明である。

出土遺物は（図13－１～３）、１がロクロ成形かわらけの大皿であり、２・３が白磁口兀皿の口縁部

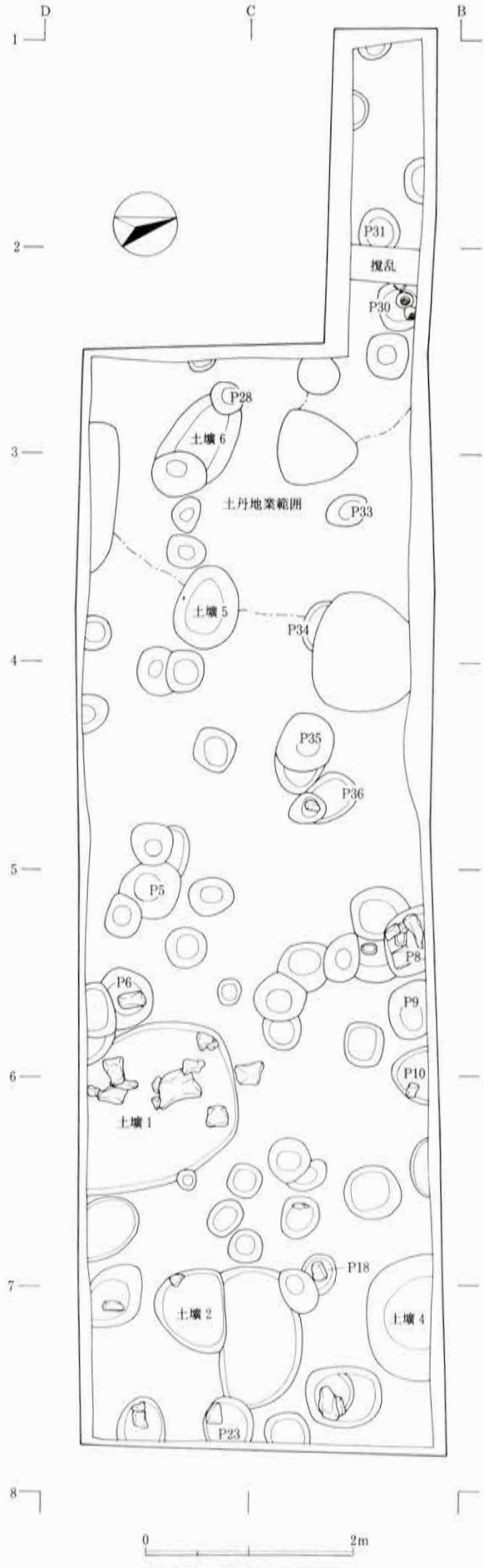


図12　第３面全測図

片である。

土壙２：調査区東壁寄り、Ｃ－７杭に南隣した位置で土壙３の一部を壊して掘られている。平面形状は不整円形を呈する。規模は南北軸78cm、東西軸82cm、確認面からの深さ約20cm、浅い掘り方の壁面が急な立ち上がりを示している。

出土遺物は(図13－４～６)、ロクロ成形かわらけの小皿、法量は口径8.3～9.0cm、底径6.1～7.1cm、器高1.5cm前後である。

土壙３：調査区東壁寄り、Ｃ－７杭に位置して検出された。平面形状は長楕円形を呈しており、規模は東西軸136cm、南北軸80cm、確認面からの深さ15cm程で浅い急な立ち上がりの壁面をもつ掘り方である。かわらけ小片が少量みられただけで図示可能な遺物は出土していない。

土壙４：調査区東端寄りの７ライン上に位置して検出された。北側は調査区外に拡がっており、確認された規模は東西軸122cm、南北軸62cm以上、確認面からの深さ約15cmの浅い皿状を呈した掘り方である。

出土遺物は(図13－７)、龍泉窯系青磁劃花文碗の口縁部小片である。

土壙５：調査区西側中央、Ｃ－４杭南西に近接した位置で検出した。平面形状は楕円形を呈する。規模は東西軸82cm、南北軸60cm、確認面からの深さ約20cmを測り、摺鉢状の掘り方を有する。

出土遺物は(図13－８)、龍泉窯系青磁蓮弁文碗の口縁部片である。

土壙６：調査区東端寄り、Ｃ－３杭南隣に位置して検出されたが、両端は柱穴により壊されている。平面形状は長楕円形を呈し、規模は東西軸110cm、南北軸62cm、確認面からの深さ約30cmである。

出土遺物は(図13－９)、ロクロ成形かわらけの小皿である。

柱穴(図12・13、図版５・12)

この面で検出された各柱穴掘り方は、平面形状が円形又は楕円形を呈しており、規模は径30～60cm程確認面からの深さ約15～35cmである。柱穴の底面は、Ｐ６・18・21・22などに偏平な土丹塊を据えているものが認められた。

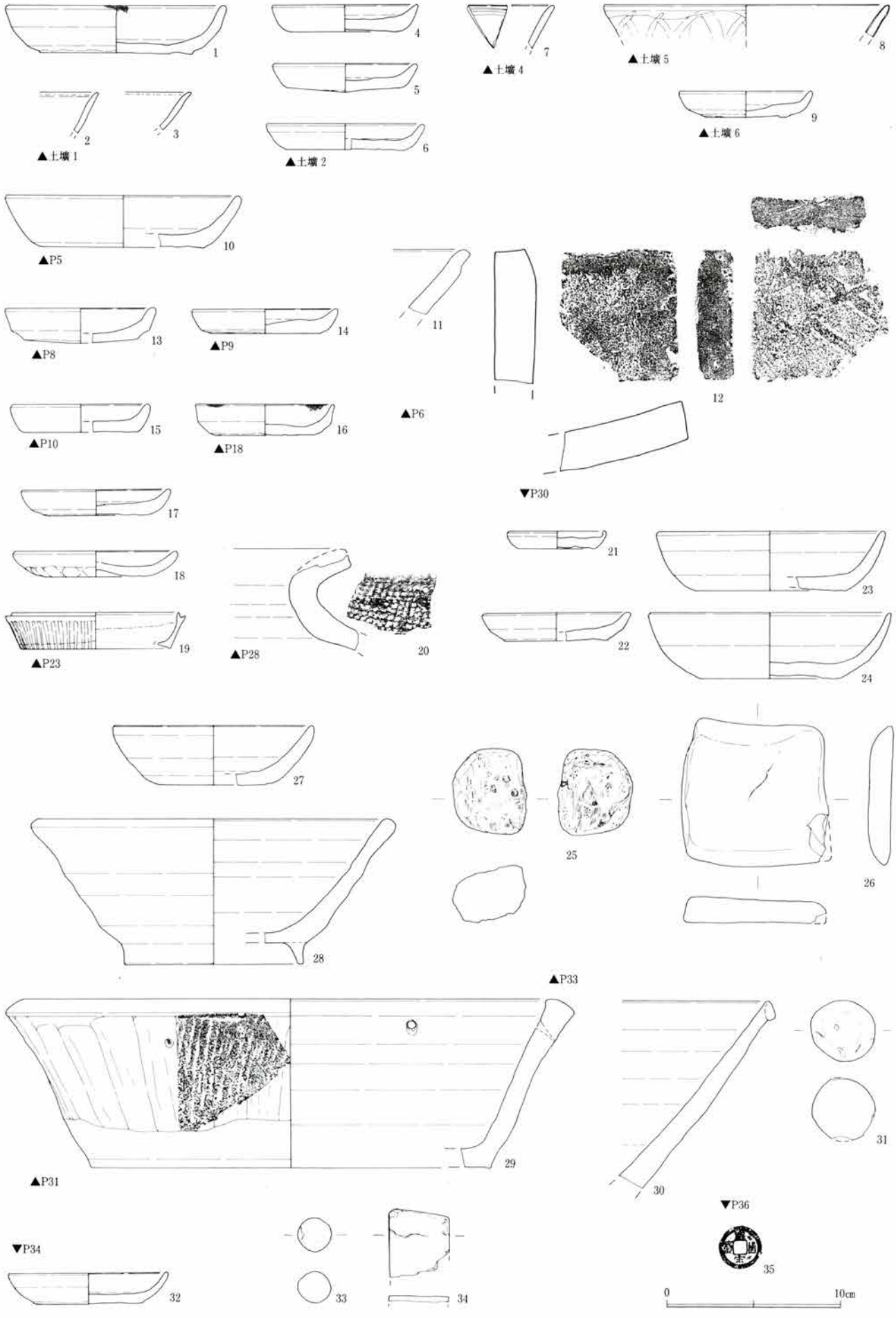


図13　第3面出土遺物（1）

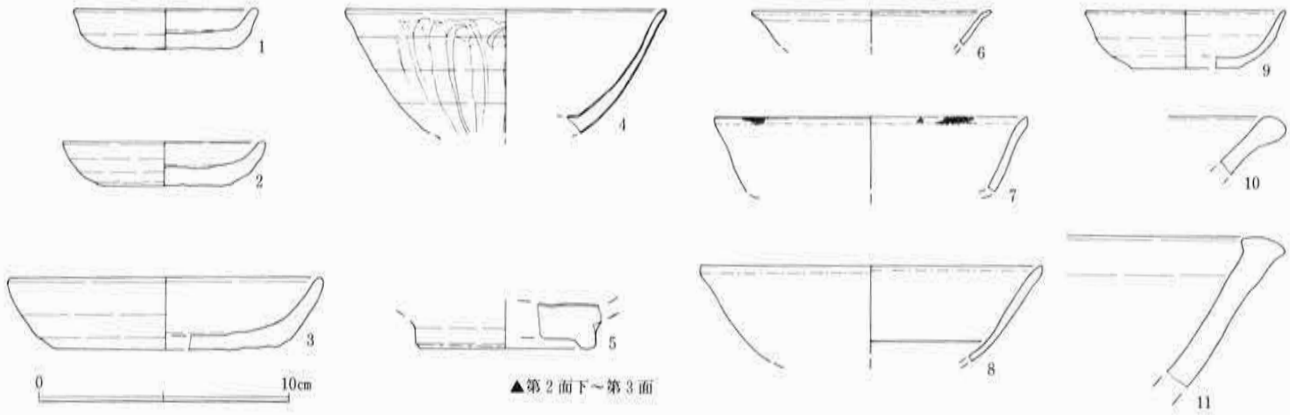


図14　第３面出土遺物（２）

Ｐ30の掘り方覆土（図版５の下段右側）からは、上向きになったかわらけ（図13－24）の上に板状の石が乗り（同図－26）、少しずれた位置で伏せたかわらけ（同図－23）が出土した。この出土状況をみると、当初はかわらけ内に石を入れて合わせ口にしたものと想像され、祭祀に係わる儀式として柱穴内に埋納された可能性も考えられよう。

出土遺物は（図13－10 ～ 35）、Ｐ５－10がロクロ成形のかわらけ大皿、Ｐ６－11・12が常滑捏鉢の口縁部片と女瓦である。Ｐ８・９・10・18－13 ～ 16はロクロ成形のかわらけ小皿、Ｐ23－17・18がかわらけ小皿のロクロ成形と手捏ね成形、19が白磁合子の身部、Ｐ28－20が魚住甕の口縁部片である。Ｐ30－21が極小品、22が小皿、23・24が大皿のロクロ成形かわらけ、25・26が軽石と方形板状石製品である。Ｐ31－27がロクロ成形のかわらけ、28が常滑捏鉢（片口鉢Ⅱ類）、29が土器質火鉢である。Ｐ33－30・31は常滑捏鉢とかわらけ質の陶丸、Ｐ34－ロクロ成形かわらけの小皿、Ｐ35－33・34がかわらけ質の陶丸と砥石、Ｐ36－35が北宋銭の「皇宋通宝」（初鋳1039年）である。

第２面下～３面出土遺物（図14・図版12）

図14－１～３はロクロ成形かわらけで小皿と大皿である。４・５は龍泉窯系の青磁蓮弁文碗、６・７が白磁口兀皿、８が白磁口兀碗である。９は瀬戸入子、10・11が常滑捏鉢（片口鉢Ⅰ・Ⅱ類）の口縁部片である。

４．第４面の遺構・遺物

第３面の構築土層を除去すると、土丹版築による整地層と、その上に敷かれていた貝殻砂層によって構成される生活面であり、全測図に示した遺構は土丹版築面と砂層上面からの掘り込みが確認されたものである。海抜標高は調査区東端で12.15ｍ、西端で11.95ｍ前後を測り、第３面が現荏柄天神の参道に向かって緩やかに傾斜していることがわかる。この生活面で検出された遺構には、柱穴列１条、土壙６基、柱穴約80口などである。出土遺物はかわらけをはじめ、舶載磁器、常滑窯の捏鉢・甕、魚住窯の甕、火鉢、瓦類、鍋・硯・砥石の石製品などである。

柱穴列（図15・16、図版６・７）

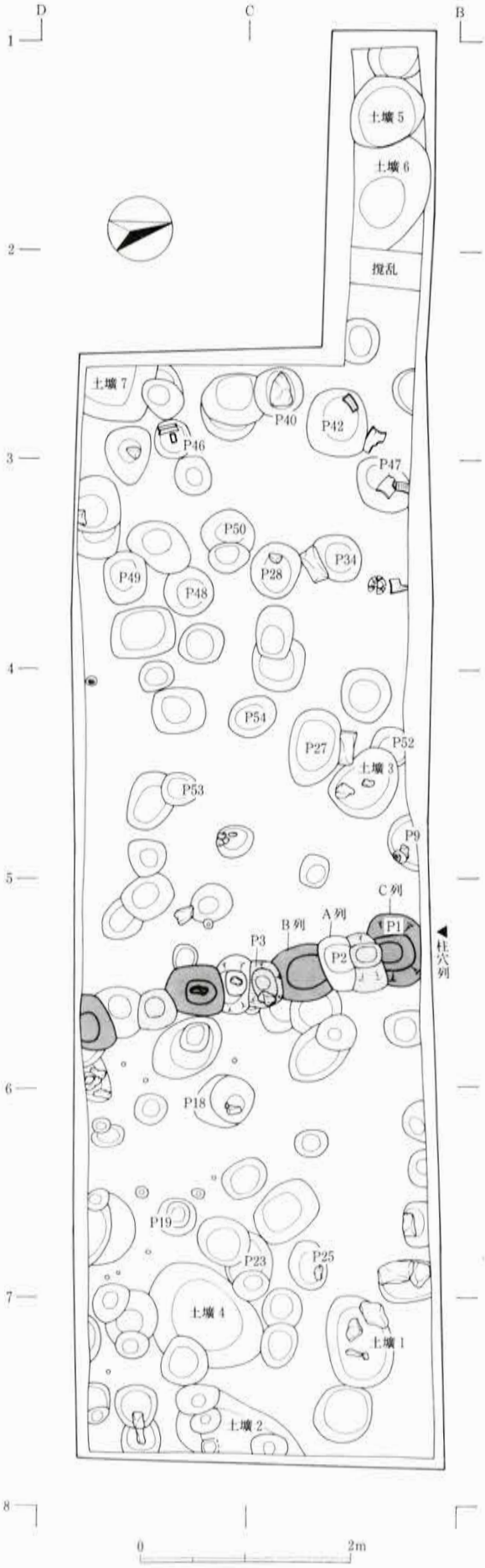


図15　第４面全測図

調査区中央やや東寄り、Ｃ・Ｄ－５・６グリット間に位置しており、南北位の方向で検出された。両側は調査区外に延びており、主軸方位はＮ－２° 30′ －Ｅで真北に近い軸方位を示している。柱穴は掘り方が重複しながら連続して検出されているが、切り合いによる新旧関係から古い順にＡ列⇒Ｂ列⇒Ｃ列の３時期の作り替えを確認することができた。柱穴は平面形状が円形または楕円形を呈し、規模は径40～55cm、確認面からの深さはＡ列柱穴約65cm・Ｂ列55cm前後・Ｃ列約45cmである。柱穴間の芯々距離は、Ａ列の各柱間が約110cm、Ｂ列の各柱間が105cm、Ｃ列の各柱間が105cm前後を測る。Ａ列柱穴の掘り方底面には、腐蝕の進んだ礎板の痕跡を認めることができた。

出土遺物は(図16－６～10)、Ｃ列柱穴のＰ１－６・７がロクロ成形かわらけの小皿と常滑甕の口縁部片である。Ｂ列柱穴のＰ２－８が男瓦、Ａ列柱穴のＰ３－９・10も男瓦である。

土壙(図15・16、図版６・12)

土壙１：調査区北東隅の位置で検出された。平面形状は楕円形を呈し、規模は東西約90cm、南北65cm、確認面からの深さ19cm程である。底面に３個の小土丹塊が認められたが、何の目的のために置かれたものか把握できていない。

出土遺物は(図16－１)、ロクロ成形のかわらけ小皿である。

土壙２：調査区東壁際の位置で検出された。東側は調査区外に拡がっており、確認規模は南北軸125cm以上、東西軸45cm以上、確認面からの深さ10cm程の浅いもので、長楕円形の平面形状と考えられる。

出土遺物は(図16－２・３)、ロクロ成形かわらけの小皿と女瓦である。

土壙３：調査区中央北壁際、Ｃ－４グリットの位置で検出した。平面形状は不整円形を呈しており、規模は南北軸70cm、東西軸70cm、深さ確認面から30cm程である。覆土は貝砂粒・炭化物を多く含む茶褐色土である。

出土遺物は(図16－４・５)、龍泉窯系青磁蓮弁文碗と常滑捏鉢(片口鉢Ⅰ類)である。

土壙４：調査区東側、Ｃ－７杭の南隣接した位置で検出された。平面形状は楕円形を呈しており、規模

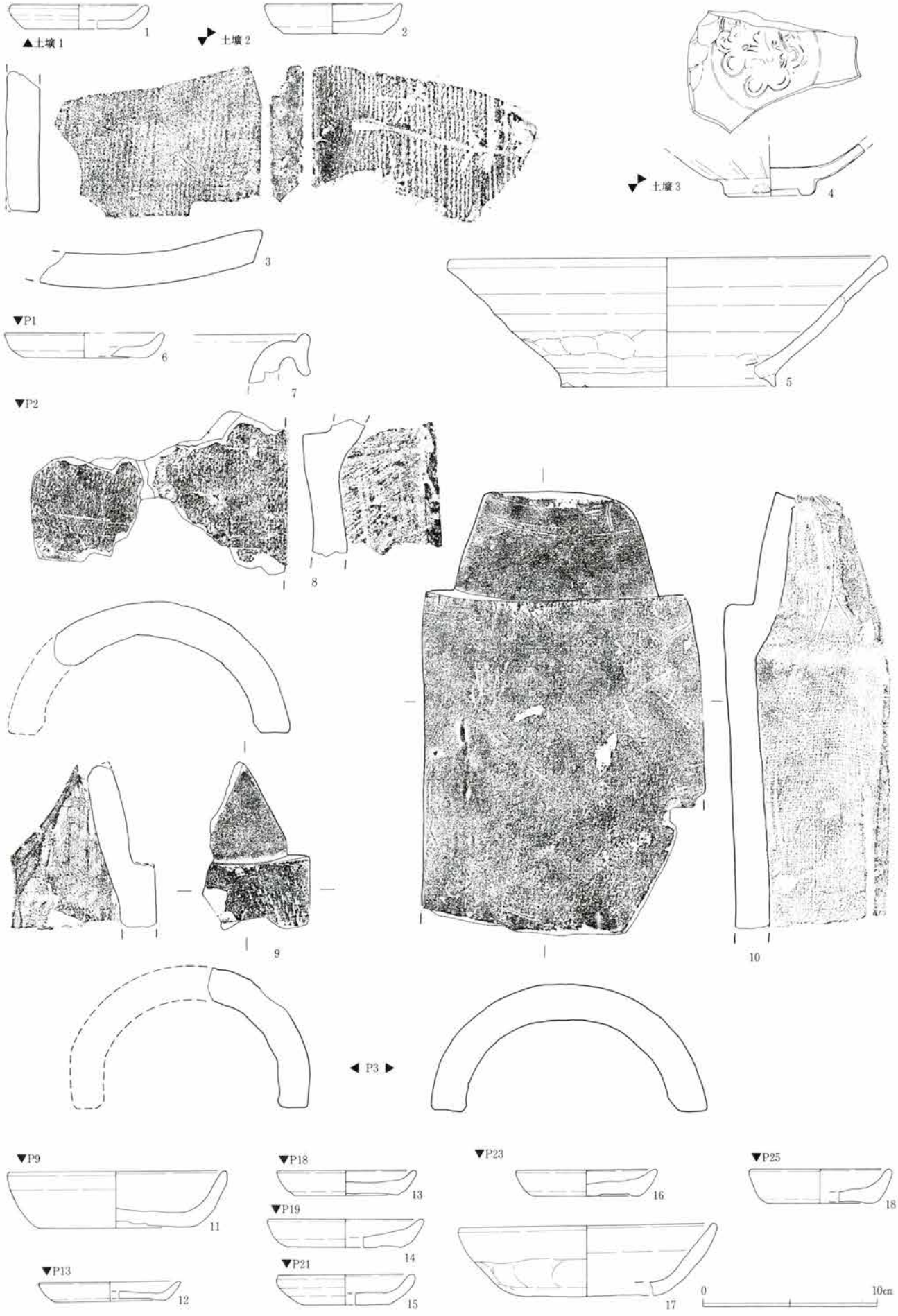


図16　第４面出土遺物（１）

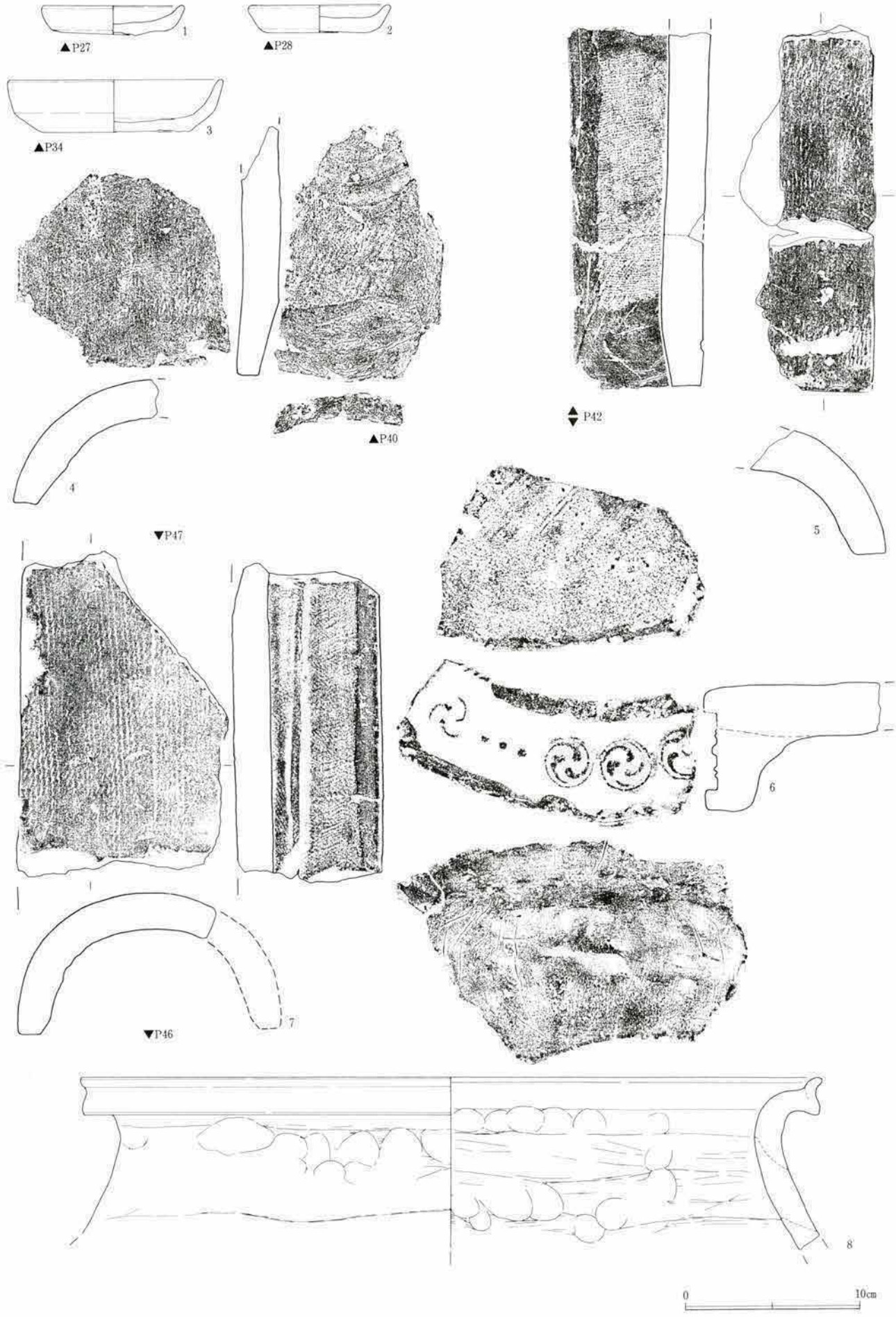


図17　第４面出土遺物（２）

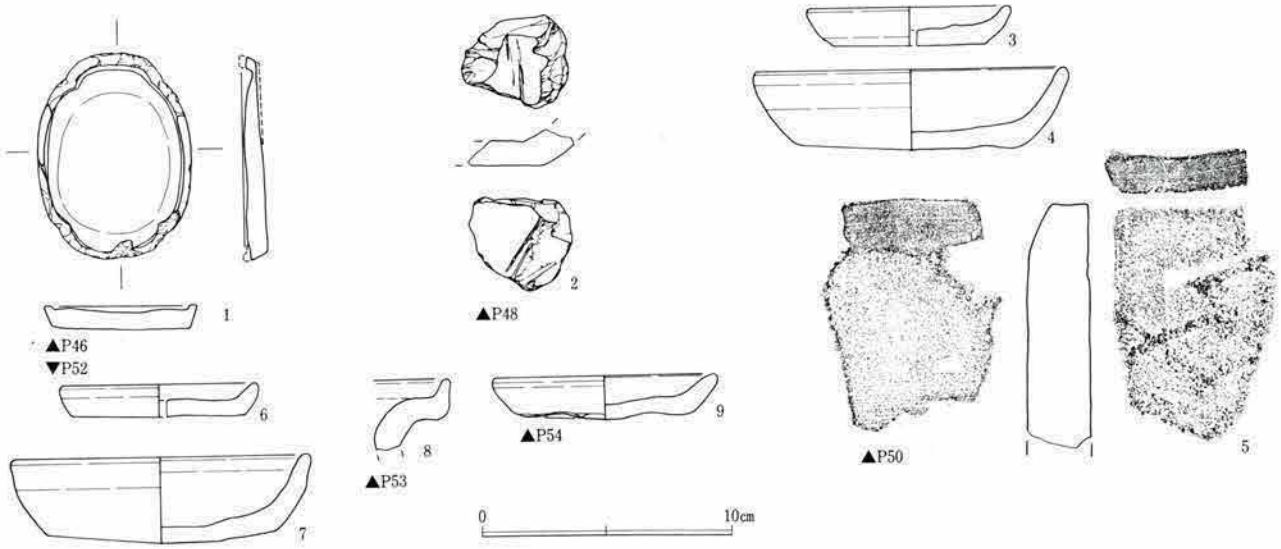


図18　第４面出土遺物（３）

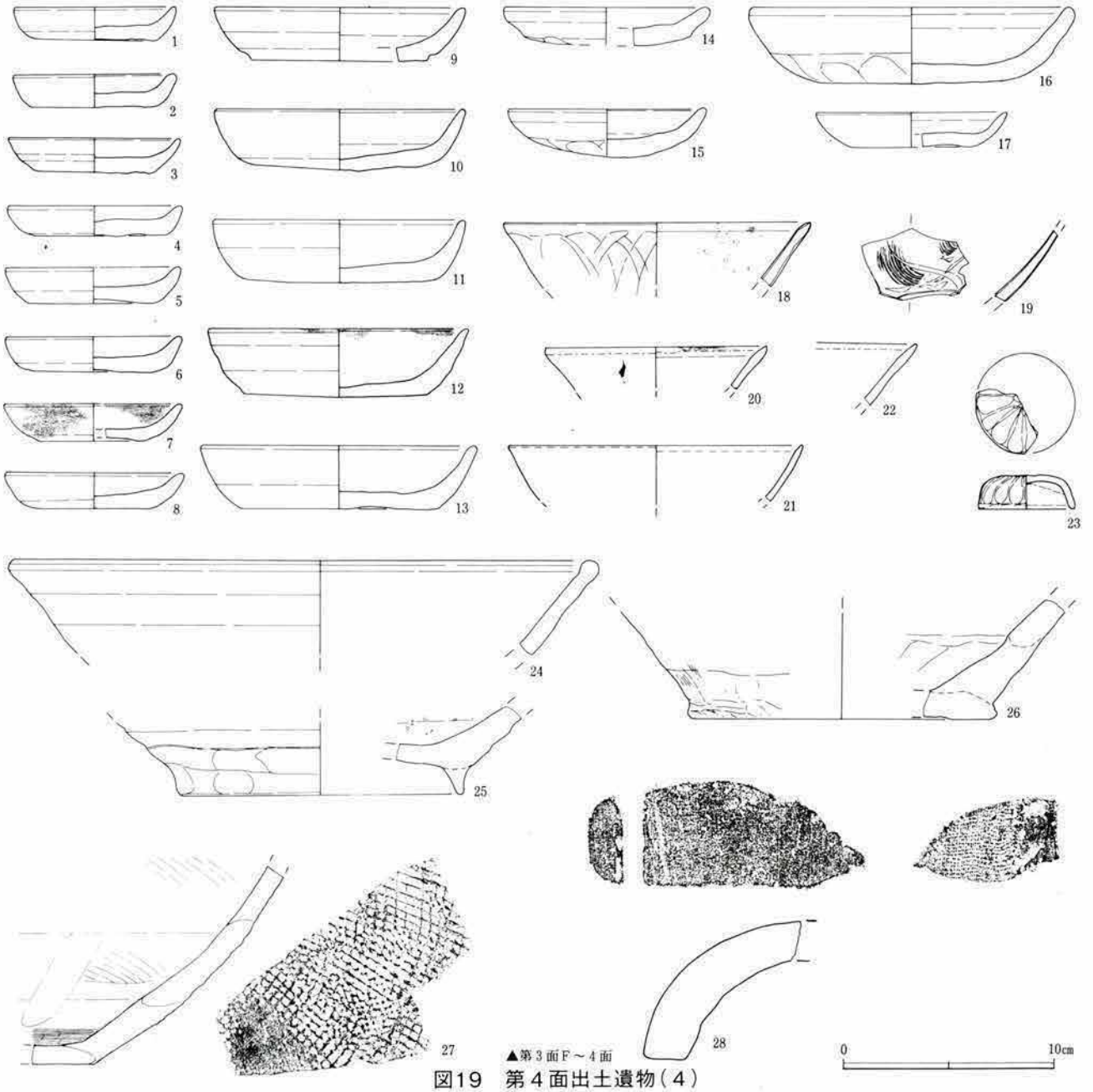


図19　第４面出土遺物（４）

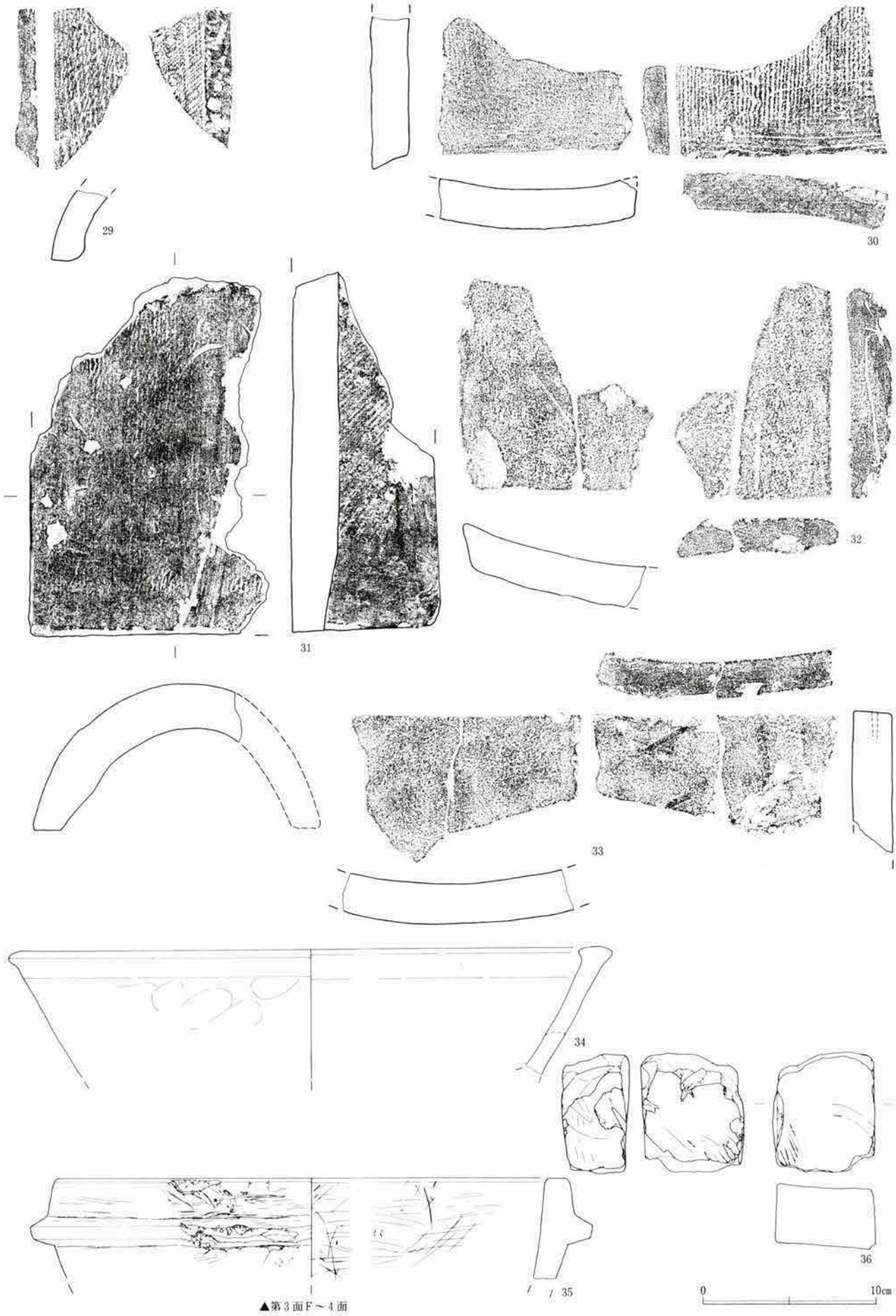


図20　第４面出土遺物（５）

は南北軸110cm、東西軸100cm 確認面から深さ約10cmと浅い土壙である。図示可能な遺物は出土していない。
土壙５：調査区西端の拡張トレンチにおいて検出され、土壙６を壊して掘られていた。平面形状は円形を呈し、径70cm、確認面からの深さ約15cmである。図示できる遺物は出土していない。
土壙６：東側は撹乱で壊されており、南側が拡張区外に拡がっており確認できた規模は東西軸110cm以上、南北軸70cm以上、確認面からの深さ25cm前後である。図示可能な遺物は出土していない。
土壙７：調査区南西隅で検出された。調査区外に拡がっており確認できた規模は、南北軸65cm以上、東西軸50cm以上、確認面からの深さ約32cmである。図示可能な遺物は出土していない。

柱穴(図16～18、図版７・12)

この面で検出された各掘り方は、平面形状が円形又は楕円形を呈したおり、規模は径30～65cm程で確認面からの深さ約20～40cmである。柱穴の底面には、Ｐ９・Ｐ25・Ｐ28・Ｐ40などに土丹塊を据えており、Ｐ49には腐蝕が進んでいるが礎板が確認された(図版７の中段左)。またＰ42の底面から鎌倉初出土例の瓦当文様をもつ、宇瓦が出土している。

出土遺物は(図16～18)、図16のＰ９－11がロクロ成形かわらけの大皿、Ｐ13・18・19・21－12～15がロクロ成形のかわらけ小皿、Ｐ23－16・17はかわらけでロクロ成形の小皿と手捏成形の大皿である。Ｐ25－18がロクロ成形かわらけの小皿である。図17のＰ27・28－１・２がロクロ成形の小皿、Ｐ34－３がロクロ成形かわらけ大皿、Ｐ40・47－４・７が男瓦、Ｐ42－５が男瓦・６が宇瓦の瓦当文様は三巴文と連珠文を組合わせた、瓦当部を顎貼付け技法により製作している。Ｐ46－８は常滑甕の口縁部で図18－１が石製硯である。Ｐ48－２が滑石鍋の底部片、Ｐ50－３・４がロクロ成形かわらけの小皿と大皿、５が女瓦である。Ｐ52－６・７がロクロ成形かわらけの小皿と大皿、Ｐ53－８が常滑甕の口縁部小片、Ｐ54が手捏ねかわらけの小皿である。

第３面下～４面出土遺物(図19・20、図版13)

図19－１～８はロクロ成形かわらけの小皿、９～13がロクロ成形かわらけの大皿、７・12が燈明皿ある。14～16は手捏ねかわらけの小皿と大皿、17が白かわらけの小皿である。18～23は舶載陶磁器で、18が龍泉窯系青磁の蓮弁文碗、19が同安窯系青磁の櫛描文碗、20～22が白磁口兀皿、23が青白磁の合子蓋である。24～26は常滑捏鉢(片口鉢Ⅰ・Ⅱ類)、27が魚住甕の胴部下～底部片、28が男瓦である。

５．第５面の遺構と遺物

第４面を構成していた貝砂層と土丹版築を除去すると、茶褐色粘質土が表出した。この土層は茶灰色粘質土ブロックと炭化物を含んだやや汚れたもので、あまり締まりのない中世地山の前位層にあたる堆積土と考えられた。調査区北東隅から西南隅にかけて幅２ｍ程の帯状に大小土丹塊を厚く敷きつめた範囲を確認することができた(第５Ｂ面溝２の範囲)。これが第５Ａ面とした生活面に相当する。海抜標高は、12.05ｍで調査区南壁に向かって緩やかに上がっている。厚さ10cm前後の前位層と土丹塊による埋土を掘り下げると、締まりの強い暗茶褐色粘質土の中世地山面が検出された。これが中世地山面にあたる第５Ｂ面である。海抜標高は、調査区東端約11.95ｍ、西端約11.75ｍを測り、中世地山面は荏柄天神参道に向かって傾斜していたことがわかる。

Ａ・Ｂ面の生活面で検出した遺構は、５Ａ面が柱穴列２条・溝１条・柱穴10口などであり、５Ｂ面が柱穴列１条・溝１条・柱穴約40口などである。出土遺物は、かわらけ、舶載磁器、常滑・渥美甕、瓦類、土製品、石製品、木製品などである。

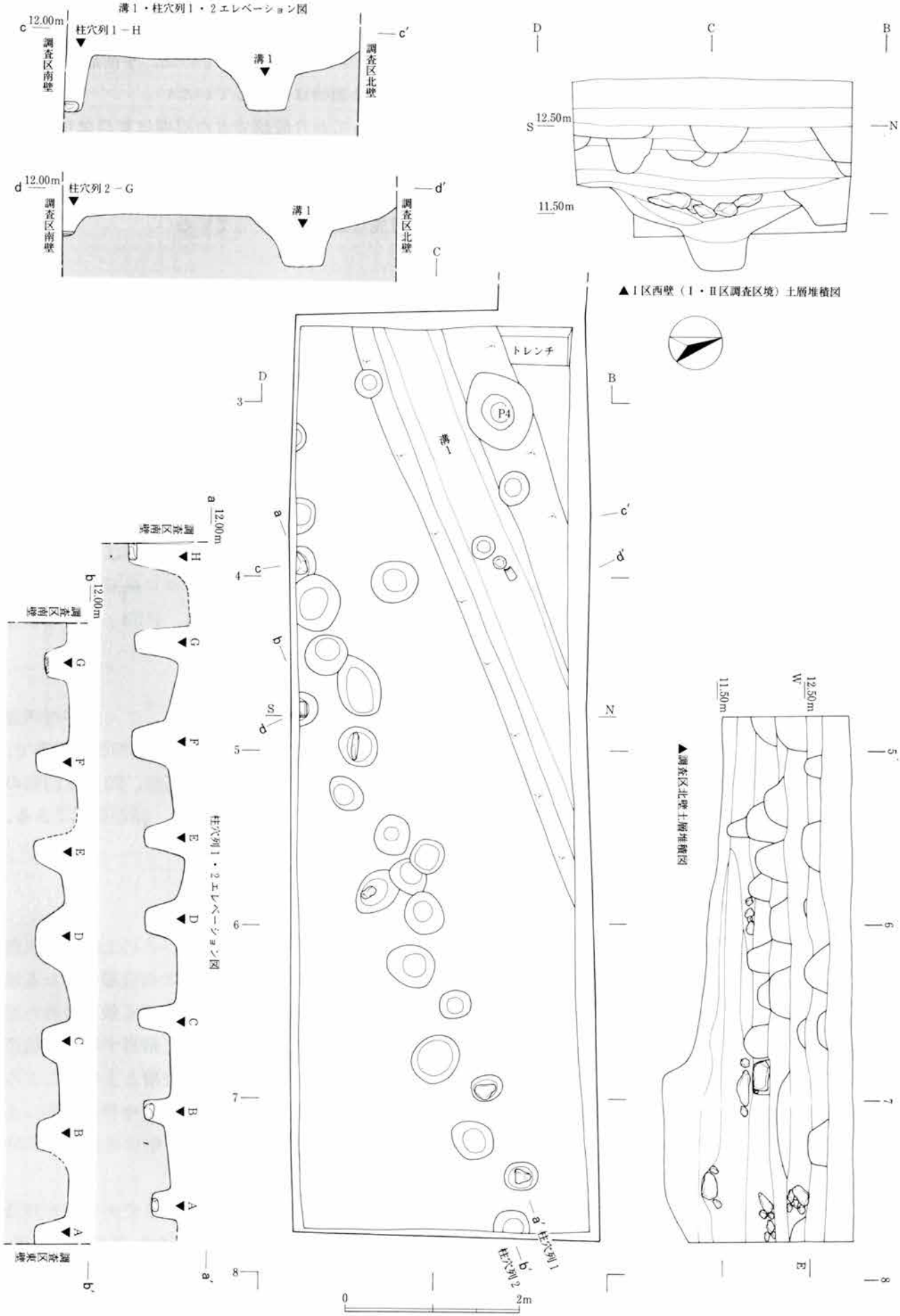

溝1・柱穴列1・2エレベーション図
柱穴列1－H
溝1
調査区南壁
調査区北壁
柱穴列2－G
▲I区西壁（I・II区調査区境）土層堆積図
トレンチ
P4
溝1
柱穴列1・2エレベーション図
▲調査区北壁土層堆積図
柱穴列1
柱穴列2
0
2m

図21　第５Ａ面全測図

第５Ａ面(図21 ～ 23 、図版８ ・ ９ ・13)

柱穴列１ ：調査区東壁の北端付近から調査区南壁の西端寄りにかけて東西位の方向を示しており、溝１に沿って平行した位置で検出された。南隣で柱穴列２との新旧関係は不明である。柱穴列の両端は調査区外に延びており、主軸方位はＮ－83-4083-40Ｅである。各柱穴は平面形状が円形または楕円形を呈し、規模は径35 ～ 50cm程、地山面からの推定した深さ約50 ～ 60cmを測る。柱穴掘り方の底面には、Ｂから楕円形の伊豆石と呼称している偏平な川原石、Ａ・Ｆ・Ｈからも偏平な土丹塊が柱受けとして、それぞれ据えられていた。図示しなかったが、それ以外の柱穴底面にも腐蝕の進んだ礎板の痕跡を調査中に確認している。柱穴間の芯々距離はそれぞれ 115cm前後であり、柱穴列の中心軸から溝１南側肩までの距離は160cm前後である。

出土遺物は(図22－１)、手捏ね成形かわらけの大皿である。

柱穴列２ ：調査区東壁の北端付近から調査区南壁の西端寄りにかけて東西位の方向を示し、柱穴列１の南側に近接した位置で検出された。柱穴列の両端は調査区外に延びており、主軸方位は柱穴列１とほぼ同じ主軸を示し、Ｎ－84-84-Ｅである。各柱穴は平面形状が円形または楕円形を呈し、規模は径30 ～ 40cm程、地山面からの推定した深さ約35 ～ 45cmを測る。柱穴掘り方の底面には、Ｅから偏平な伊豆石、Ｇからは礎板１枚が認められた。柱穴間の芯々距離はそれぞれ110cm前後であり、柱穴列の中心軸から溝１の南側肩までの距離は200cm程である。

出土遺物は(図22－２～４)、柱穴Ｂ－２が手捏ね成形かわらけの小皿、柱穴Ｄ－３が龍泉窯系青磁劃花文碗、柱穴Ｆ－４が東遠江系山茶碗の口縁部片と考えられる。

溝１ ：調査区北西域の位置で東西位の方向に走る箱薬研堀形の溝を検出した。東・西側は共に調査区外に延びている。主軸方位は柱穴列１・２とほぼ同じ方向を示している。両者は平行関係にあたり、犬走り状の空間を挟んで溝と柵列の組み合わせが想像できる。規模は、調査区内での長さ７ｍ以上であり、上端幅165cm 、下端幅45cm前後、確認面からの深さ約70cmである。調査区内の溝底面は比較的平坦に掘られており、海抜標高11.05ｍ前後である。掘り方は壁面中程までは斜め方向にやや緩やかに落ち込んでいるが、中位から底面に向かっては急激に落ち込んだ断面をみせている。調査区西壁やＩ区西壁面の土層堆積から、５Ｂ面に伴う溝２を埋め戻した後に本溝を開削したことが観察できる。覆土は上層が小土丹塊を少量含んだ茶灰色粘質土、下層が遺物・木屑片をやや多く含んだ茶褐色粘質土に分割された２層が認められた。

出土遺物は(図22－５～23)、５～７がロクロ成形かわらけの小皿、８～13が手捏ね成形かわらけの小皿、14 ～ 17が手捏ね成形かわらけの大皿である。18・19は龍泉窯系青磁劃花文碗、20が白磁合子身である。21が常滑甕、22の男瓦と23の女瓦は永福寺創建期瓦(男瓦Ａ類・女瓦Ａ類)と同類の製品である。この他の遺構として、調査区北西隅に近い位置で溝１を壊して掘られた柱穴(Ｐ４)が検出された。掘り方は平面形状が楕円形を呈し、規模が長径(東西位) 93cm、短径(南北位) 86cm、確認面からの深さ約65cmを測り、大型で深い掘り込みをもつ柱穴である。溝に架かる橋脚の可能性も推測されたので対岸や周辺の面土を精査したが、対をなす柱穴を検出することはできなかった。

出土遺物は、24がフイゴの羽口、27が女瓦、25が滑石製スタンプ片と思われるもの、26がチャート系の燧石である。

第４面下～５Ａ面出土遺物(図23 、図版13下段)

図23－１～５がロクロ成形かわらけの小皿、６・７がロクロ成形かわらけの大皿、８～11が手捏ね成形かわらけの小皿と大皿であり、12が白かわらけである。13・14は龍泉窯系の青磁劃花文碗の口縁部と下半片である。15 ～ 17は常滑窯製品である。15が山皿、16が小壺の胴部下位～底部片、17が甕

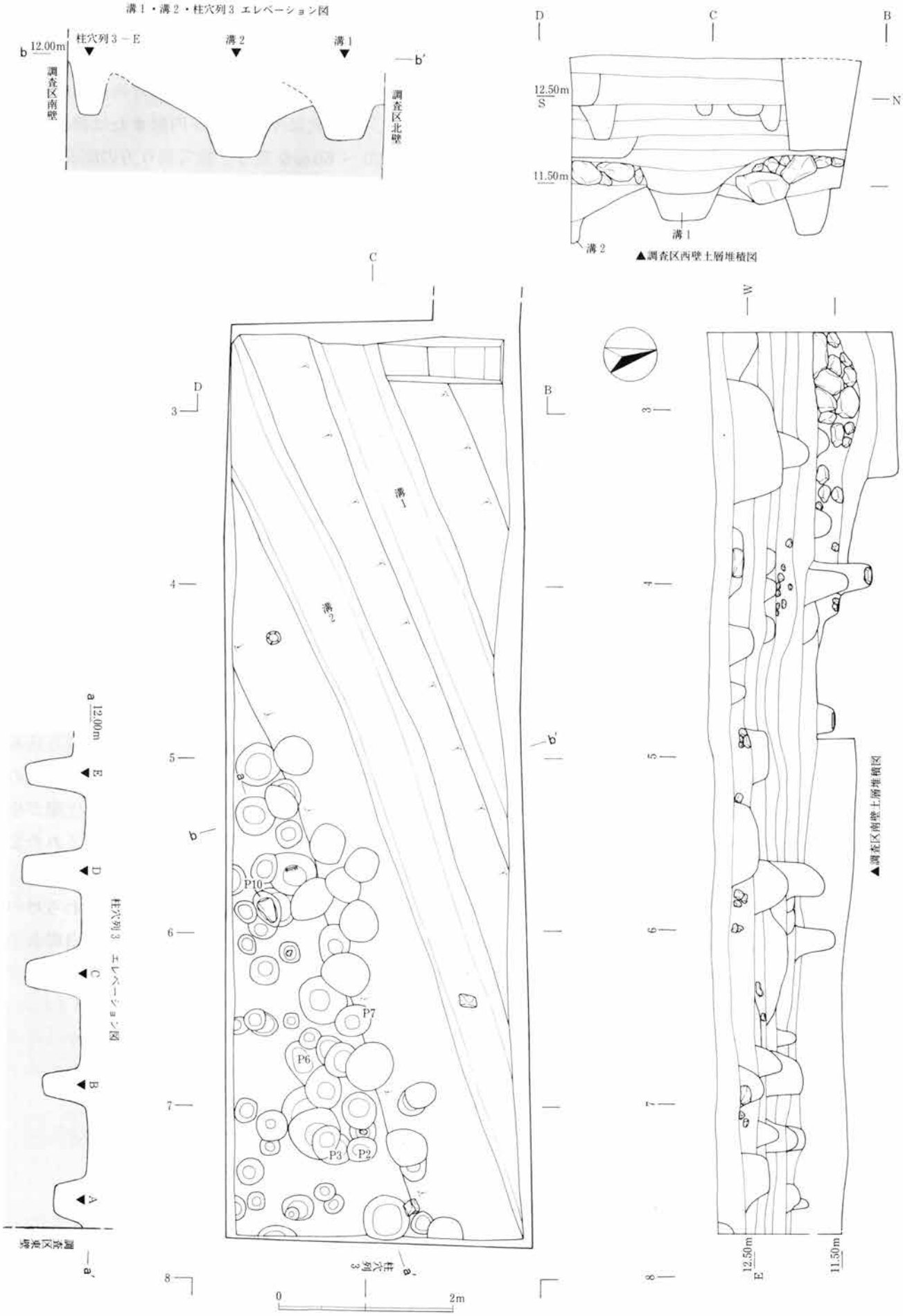


図22　第５Ａ面出土遺物（１）

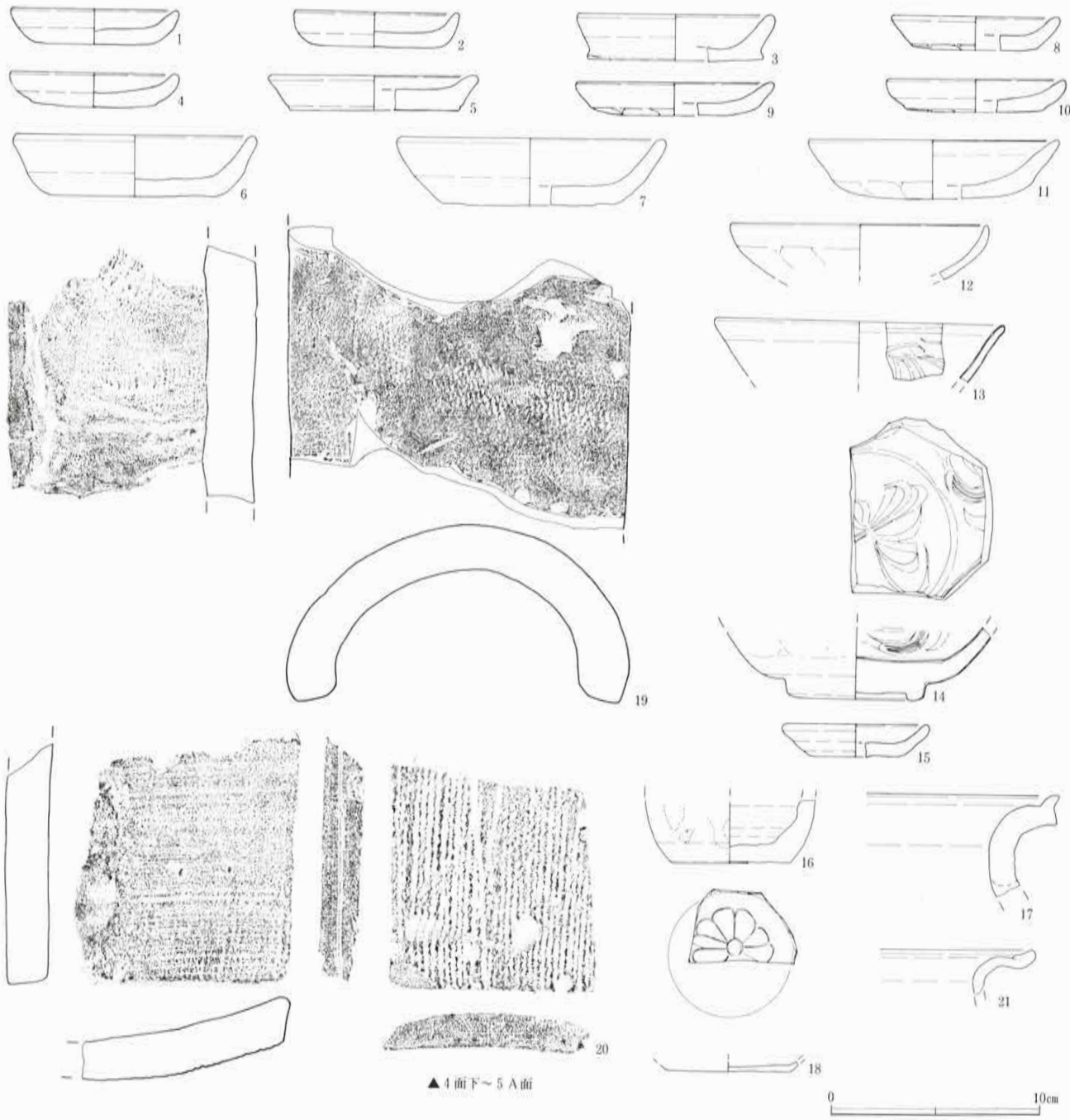


図23　第５Ａ面出土遺物（２）

の口縁部片である。21は伊勢系土鍋の口縁部片、18が瓦器皿の底部片、19・20は男瓦と女瓦であるが、永福寺創建期瓦（男瓦Ａ類・女瓦Ａ類）と同類のものである。

第５Ｂ面（図24 ～ 26、図版８・９・14）

柱穴列３：調査区東壁の中央付近から調査区南壁の中央寄りにかけて東西位の方向を示しており、溝２の南側肩に沿って検出された。柱穴列の両側は調査区外に延びているが、４間分が確認された。主軸方位はＮ－84-84-Ｅを測り、柱穴列１・２とほぼ同じ軸方位を示している。本柱穴列は、５Ａ面で検出した柱穴列２と重複しており、新旧関係をみると柱穴列２によって柱穴３ヶ所（柱穴Ｃ～Ｅ）が壊され

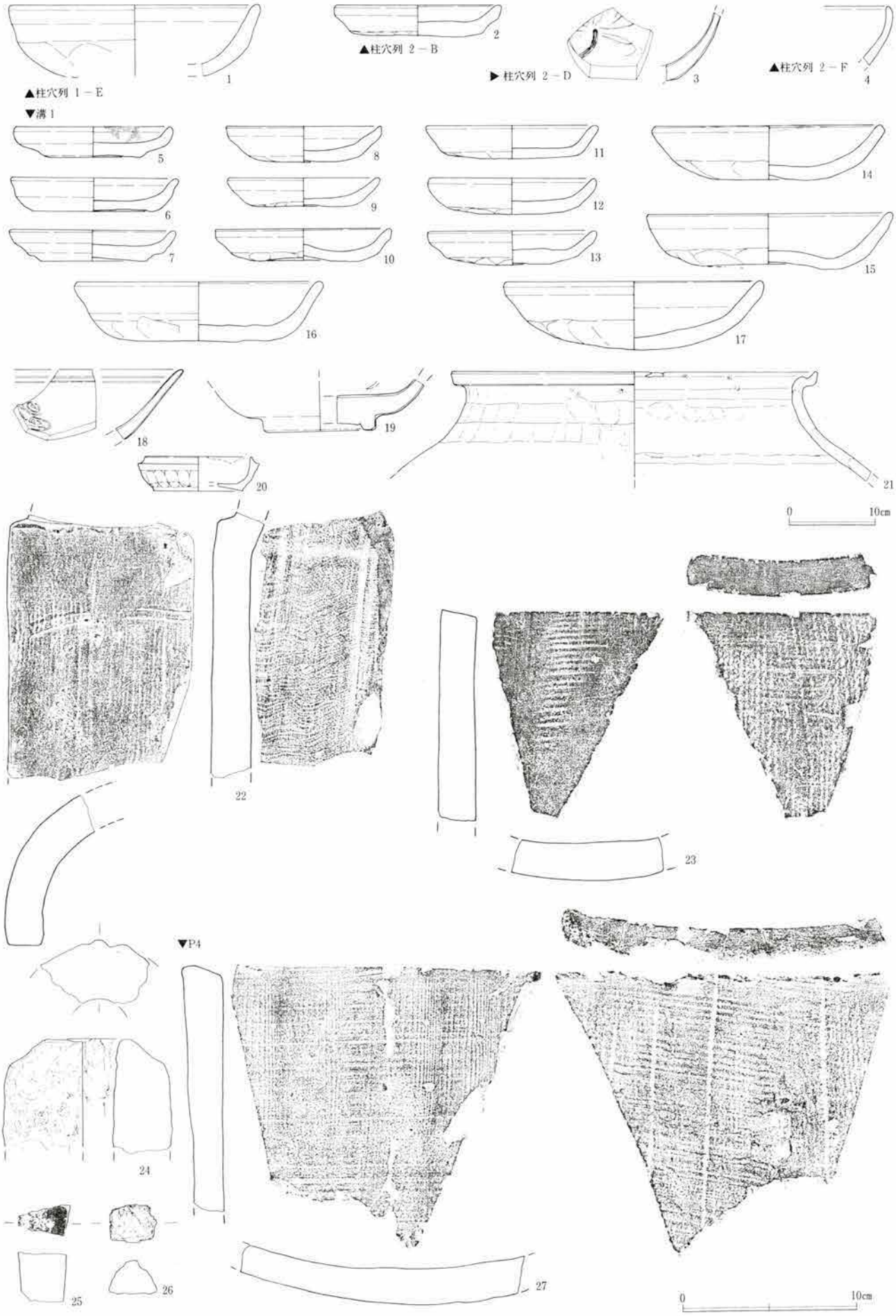

▲柱穴列 1－E
▼溝 1
▲柱穴列 2－B
▶柱穴列 2－D
▲柱穴列 2－F
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
0
10cm
22
23
▼P4
24
25
26
27
0
10cm

図24　第５Ｂ面全測図

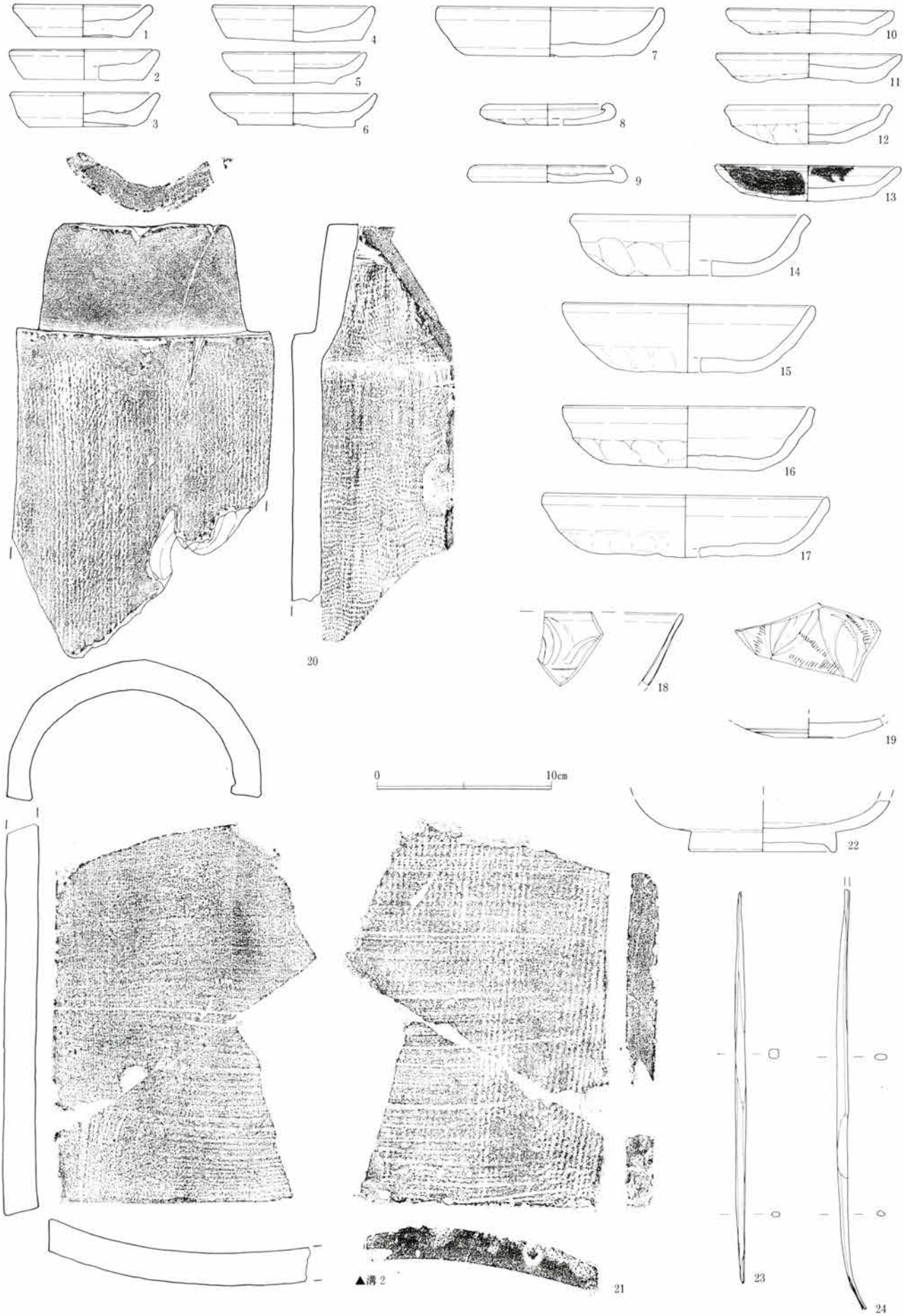


図25　第５Ｂ面出土遺物（１）

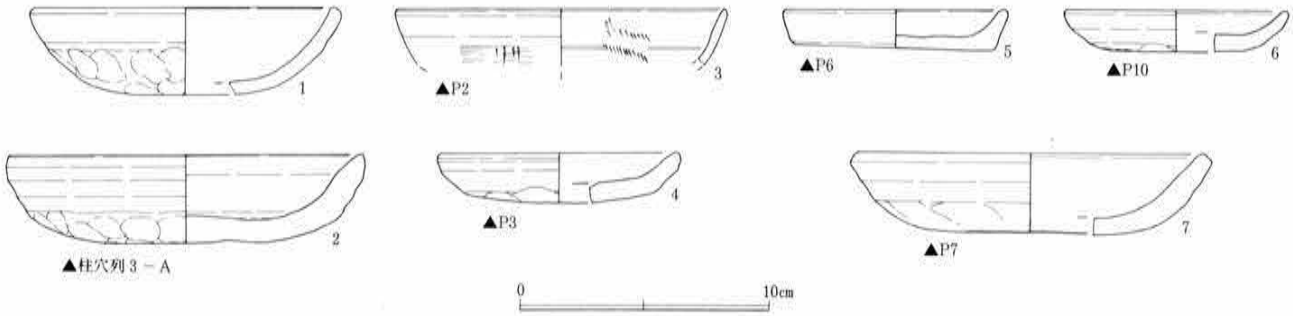


図26　第５B面出土遺物（２）

ていた。各柱穴は平面形状が楕円形を呈し、径45～55cm、確認面からの深さ40～70cm、柱穴間の芯々距離は120cm前後である。

出土遺物は(図26)、柱穴Ａ－１・２が手捏ね成形かわらけの大皿である。

溝２：調査区中央で東西位の方向に走る箱薬研堀形の大溝を検出した。東・西側は共に調査区外に延びている。５Ａ面の溝１や柱穴列１・２と同一方向を示しているが、溝南肩から柱穴列３の中心軸までの距離は約50cmと近接した位置であり、５Ａ面の溝・柱穴列の関係とは異なっていた。規模は、調査区内での長さ11ｍ以上であり、上端幅が215cm以上、下端幅が50cm前後、確認面からの深さ110cm程である。溝底面の海抜標高は、調査区の西端11.05ｍ・東端10.85ｍ程を測り、東方に向かって緩やかに傾斜している。掘り方は、壁面下位までは緩らかに落ち込んでいるが、下位から底面にかけて急激な落ち込みをみせている。覆土は上層が大小土丹塊による５Ａ面構築時の埋土が厚く認められ、中層がかわらけや木屑・木製品などの遺物を多く含む茶褐色粘質土がみられ、下層が暗茶灰色粘質土で藁状の植物繊維(図版８の下段左側)や木実・葉などを含んだ無遺物層になる。

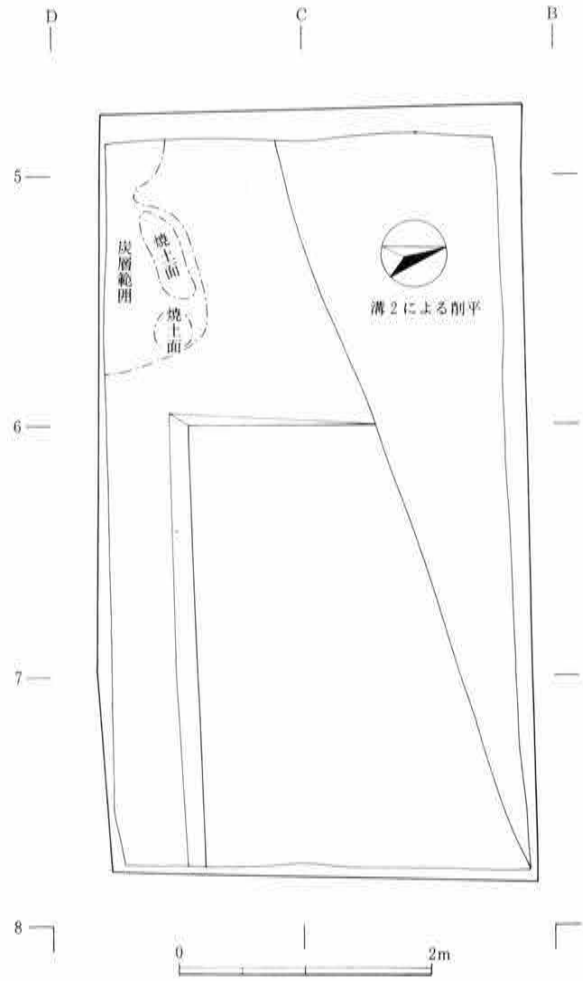


図27　中世地山トレンチ

出土遺物は(図25－１～24)、１～６がロクロ成形かわらけの小皿で７が大皿、８・９が手捏ねの内折れかわらけ、10・13が手捏ね成形かわらけの小皿で、14～17の大皿である。18は龍泉窯系青磁劃花文碗の口縁部片、19が同安窯系櫛描文皿の底部片である。20・21が男瓦・女瓦、22は漆器の黒漆塗無文椀、他に無文皿(図版８の下段右側)、23・24が箸である。

柱穴(図24・26)

各柱穴掘り方は、平面形状が円形又は楕円形を呈し、規模は径25～60cm、確認面からの深さ20～50cmである。柱穴の底面に土丹塊を据えたものが２例認められただけで、礎板を残したものはない。

出土遺物は、図26のＰ２－３が同安窯系櫛描文碗、Ｐ３－４が手捏ね成形かわらけの小皿、Ｐ６－５がロクロ成形かわらけの小皿、Ｐ10－６が手捏ね成形かわらけの小皿、Ｐ７－７が手捏ね成形かわらけの大皿でである。

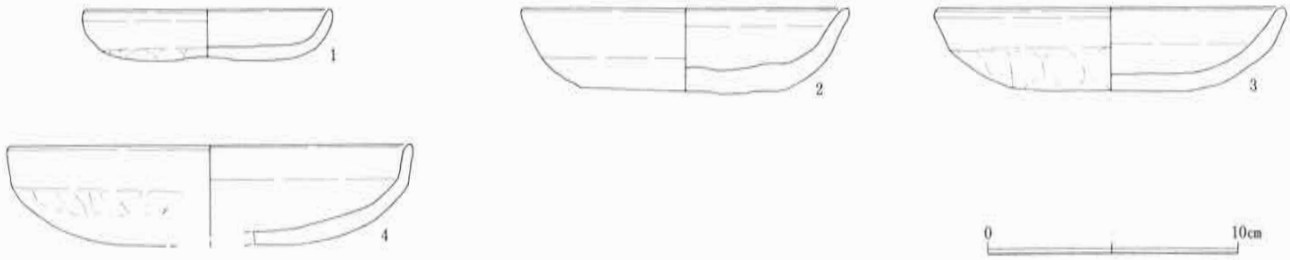


図28　中世地山トレンチ出土遺物

中世地山面トレンチ(図27・28、図版９・14)

Ｉ区調査の折、溝２の壁面途中に褐鉄層と薄い炭化物層が確認されたので中世生活面の調査終了後、調査区南壁沿いに幅約70cmのサブトレンチを設定して、中世地山を掘り下げたところ、深さ50～60cm程で褐鉄を含んでやや硬化した土層の拡がりが認められた。この直上には、調査区東端の一部で炭層、西端付近では炭層と焼土を確認することができた。そこで西端周辺の炭層と焼土の拡がる範囲を確認するため、拡張して掘り下げを行なった。その結果、図27で示したように比較的広い範囲で炭層が拡がっており、炭層域北側には二ヶ所に分かれた焼土層を確認することができた。海抜標高は、東端が11.50ｍ、西端が11.40ｍ前後である。なお、硬化していたトレンチの底面上や炭層・焼土の範囲に伴う遺物は、小片も含め１点も出土していないことから時期不明であるが、中世以前に遡る痕跡であることは確かであろう。

出土遺物は(図28)、１・３が手捏ね成形かわらけの小皿・大皿、２がロクロ成形かわらけの大皿であるが、これは遺構の掘り残しに伴うものと考えられる。４は溝２の南壁面の途中に近い地点から出土した土師器坏である。

第４章　調査のまとめ

調査地点の南側には、金沢から鎌倉へ通じる六浦道(現在の県道金沢鎌倉線)が走っている。この周辺をみると、西方には源氏三代の将軍御所にあたる「大倉幕府」と、その北側山裾に頼朝の法華堂が置かれている。現在も二階堂の地名を残し、奥州合戦において戦死した将士怨霊を鎮魂する目的で建立された二階堂永福寺があり、六浦道と滑川を挟んだ南方の大御堂ヶ谷には父義朝を弔った菩提寺としての勝長寿院といった頼朝ゆかりの遺跡が至近距離に所在している。また、頼朝入府の以前には創建されていたという杉本寺が六浦道を金沢方面に 350ｍ程進んだ北側の山中腹に位置しており、本調査地点の地名の由来にもなっている荏柄天神社は平安時代後期に勧請されたと伝えられている。市立第二小学校地内の向荏柄遺跡(馬淵他　1985)では、奈良・平安時代の住居跡と古代遺物、関取橋付近に位置した大倉幕府周辺遺跡内２ヶ所の調査地点〔雪ノ下大倉耕地569番１地点・二階堂字荏柄38番１地点〕(馬淵

図29　周辺調査地点の検出遺構

1990・1993)からは、前者が古墳時代後期の土器片、後者が同時期の住居跡や遺物が出土しており、この周辺が中世以前から人々の生活が営まれていた地域であったことがわかる。

調査の結果、鎌倉時代前期から南北朝時代までの５時期の生活面とそれに伴う遺構・遺物が検出された。第５Ａ・Ｂ面は中世地山(中世基盤層)ないしはその直上に生活面をもつ時期である。ここでは主に鎌倉時代前期の生活面にあたる第５Ａ・Ｂ面検出の溝や柱穴列の遺構について触れ、合わせて東隣した調査地点Ａ(二階堂字荏柄10番６外地点：福田　2000)と、荏柄天神社参道を挟んだ向かい側の調査地点Ｂ(雪ノ下大倉耕地565番４地点：菊川　1991)から検出された中世地山面の溝遺構を中心に軸方向や時期について比較検討を行なって調査のまとめにかえたい。なお本調査地点と、調査地点Ａ・Ｂの検出遺構については、図29に示したとおりである。

調査地点Ａ概要：鎌倉時代前期から室町時代までの５時期(第１～５面)に及ぶ生活面が検出された。Ｂ区の第５面(中世地山面)に伴う東西方向に延びた薬研溝、規模は上端幅150cm、下端幅約45cm、深さ約100cmを測る。溝底面は海抜標高約11.00ｍあり、主軸方位はＮ－84-84-Ｅ程である。時期は12世紀末葉～13世紀初頭に位置付けている。

調査地点Ｂ概要：鎌倉時代前期から南北朝時代までの３時期(第１～３面)の生活面が主体で、一部に室町時代(15世紀前半)まで下る遺物を混入している。トレンチ１の第３面(中世地山面)に伴う南北方向に延びた薬研溝、規模は上端幅160cm、下端幅約50cm、深さ約70cmを測る。溝底面は海抜標高約 10.45ｍあり、主軸方位はＮ－３°－Ｅ前後である。この溝に伴う遺物は出土していないが、年代観は第３面直上に伴う出土遺物から12世紀末葉～13世紀初頭の時期と捉えられている。

本調査地点で検出した溝１・２は、調査地点Ａの薬研溝と並行した関係にあり、溝２の南肩から調査地点Ａ検出の溝北肩まで約９ｍの距離を測ることができる。両調査地点検出の溝の主軸方位は、関取橋付近に位置した大倉幕府周辺遺跡内の調査地点(二階堂字荏柄38番１地点：馬淵　1993)で検出された二階堂大路と並行した軸方位を示している。さらに調査地点Ｂから検出された東西方向の溝は、直交した主軸方位を示しており、この周辺地域は鎌倉時代前期の段階おいて、二階堂大路を主軸とした地割を施していたことがわかる。

【引用・参考文献】

秋山哲雄　2002「大倉幕府周辺遺跡(No.49)二階堂字荏柄58番４外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査書18　平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会』

河野眞治郎　1995『中世都市鎌倉－遺跡が語る武士の都－』講談社選書メチエ49

菊川英政　1991「大倉幕府周辺遺跡(No.49)雪ノ下字大倉耕地565番４地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７　平成２年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会』

福田　誠　2000「横小路周辺遺跡(No.259)二階堂字荏柄10番６外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査書16　平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会』

馬淵和雄他　1985『向荏柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会

馬淵和雄　1990『大倉幕府周辺遺跡　雪ノ下字大倉耕地569番１地点発掘調査報告書』大倉幕府周辺遺跡発掘調査団

馬淵和雄　1993「大倉幕府周辺遺跡(No.49)二階堂字荏柄38番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査書９　平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会』

表１　遺物観察表（１）

図・遺物	種　類	a. 法量　b. 成形　c. 胎土　d. 素地　e. 色調　f. 釉薬　g. 備考
図５－１	かわらけ	a. 口径7.2cm 底径4.0cm 器高2.5cm b. ロクロ c. 微砂 e. にぶい黄褐色
2	土製品	a. 口径7.3cm b. ロクロ c. 微砂 白・赤色粒 e. 橙色 g. かわらけ質、コップ型
3	常滑　捏鉢	a. 高台径 (18.4cm) b. 輪積み c. 砂粒 長石 粗土 e. 灰色 自然釉 g. 捏鉢　類
4	かわらけ	a. 口径 (7.0cm) 底径4.0cm 器高2.2cm b. ロクロ c. 微砂 e. にぶい黄褐色
5	かわらけ	a. 口径7.6cm 底径4.3cm 器高2.8cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 明黄褐色
6	かわらけ	a. 口径 (7.8cm) 底径4.9cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 黄褐色
7	かわらけ	a. 口径11.0cm 底径6.6cm 器高3.2cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 明黄褐色
8	かわらけ	a. 口径12.0cm 底径7.7cm 器高3.2cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 橙色
9	かわらけ	a. 口径 (13.1cm) 底径8.0cm 器高3.9cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 明黄褐色
10	かわらけ	a. 口径13.4cm 底径7.5cm 器高3.8cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 明黄褐色
11	白磁　口兀碗	a. 口径 (15.2cm) 底径4.5cm 器高6.2cm d. 灰白色 f. 灰白色不透明
12	常滑　壺	a. 口径 (9.0cm) 器高 (8.5cm) c. 砂粒 長石 e. 内面黒褐色 外面褐色自然釉
13	常滑　甕	a. 口径 (51.2cm) 器高 (46.0cm) c. 砂粒 長石 e. 3赤褐色 口縁～肩部自然釉
14	かわらけ	a. 口径 (7.4cm) 底径5.5cm 器高1.8cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 橙色
15	白磁　口兀皿	a. 口径7.9cm d. 灰白色 堅緻 f. 灰白色不透明 気孔若干有 g. 内面型捺し草花文
16	かわらけ	a. 口径7.8cm 底径4.8cm 器高2.4cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
17	かわらけ	a. 口径 (13.8cm) 底径7.7cm 器高3.7cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
18	瀬戸　入子	a. 底径 (4.8cm) b. 外底ヘラ削り d. 灰色 精良緻密 g. 口縁～内底自然釉
19	常滑　捏鉢　Ⅱ類	a. 口径 (36.2cm) 底径14.8cm 器高14.8cm b. 輪積み c. 砂粒 長石粒 e. 赤褐色
20	鉄釘	a. 残存長7.8cm　4 mm角 g. 角釘
図６－１	かわらけ	a. 口径7.3cm 底径4.9cm 器高1.9cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 黄橙色
2	かわらけ	a. 口径7.1cm 底径3.9cm 器高2.2cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
3	かわらけ	a. 口径6.8cm 底径4.7cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 淡黄色
4	かわらけ	a. 口径11.5cm 底径6.4cm 器高3.7cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 淡橙色
5	かわらけ	a. 口径13.6cm 底径9.0cm 器高4.2cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 黄橙色
6	かわらけ	a. 口径 (13.8cm) b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. にぶい橙色
7	かわらけ	a. 口径8.0cm 底径6.2cm 器高1.4cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
8	かわらけ	a. 口径11.0cm 底径7.2cm 器高3.3cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
9	瀬戸　瓶子　Ⅰ類	a. 口径 (5.0cm) c. 灰色 良土 e. 灰釉ハケ塗り、部分的に剥落
10	かわらけ	a. 口径7.4cm 底径5.1cm 器高1.9cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
11	かわらけ	a. 口径 (12.5cm) 底径7.4cm 器高2.5cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
12	かわらけ	a. 口径7.5cm 底径6.0cm 器高2.5cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
13	かわらけ	a. 口径 (7.4cm) 底径5.7cm 器高1.8cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 黄褐色
14	青磁　無文碗	a. 口径 (13.3cm) d. 灰色 堅緻 f. オリーブ灰色透明 g. 龍泉窯系
15	青白磁　梅瓶蓋	a. 口径5.7cm 器高3.1cm d. 灰色 堅緻 f. 明緑灰色透明 g. 頂部外面櫛描文
16	かわらけ	a. 口径7.2cm 底径4.9cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. にぶい黄褐色
17	青磁　折縁盤	a. 口縁部 d. 灰色 堅緻 f. 緑灰色不透明 g. 龍泉窯系
18	かわらけ	a. 口径7.4cm 底径4.9cm 器高1.8cm b. ロクロ c. 微砂 土丹粒 e. 橙色
19	かわらけ	a. 口径12.5cm 底径7.0cm 器高3.4cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 黄褐色
20	かわらけ	a. 口径 (12.8cm) 底径9.3cm 器高3.3cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
21	かわらけ	a. 口径12.7cm 底径7.0cm 器高3.5cm b. ロクロ c. 微砂 e. 淡黄橙色
22	かわらけ	a. 口径7.6cm 底径6.5cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 淡黄橙色
23	かわらけ	a. 口径12.4cm 底径7.6cm 器高3.4cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
24	かわらけ	a. 口径13.3cm 底径7.1cm 器高4.1cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
25	かわらけ	a. 口径 (6.8cm) 底径4.1cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 黄褐色
26	かわらけ	a. 口径7.3cm 底径5.1cm 器高2.0cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
27	かわらけ	a. 口径6.6cm 底径4.3cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 橙色
28	かわらけ	a. 口径7.4cm 底径4.7cm 器高1.8cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 淡黄橙色
29	かわらけ　灯明皿	a. 口径7.8cm 底径4.3cm 器高1.8cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
30	かわらけ	a. 口径6.9cm 底径4.8cm 器高1.9cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色
31	かわらけ	a. 口径7.6cm 底径5.2cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 白針 e. 橙色

※（　）は推定数値を表わす

表1　遺物観察表（2）

図・遺物	種　類	a. 法量　b. 成形　c. 胎土　d. 素地　e. 色調　f. 釉薬　g. 備考
図6－32	かわらけ	a. 口径7.9cm 底径6.7cm 器高2.5cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 淡黄褐色
33	かわらけ	a. 口径11.7cm 底径7.4cm 器高3.4cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
34	かわらけ	a. 口径12.8cm 底径7.4cm 器高3.6cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 黄橙色
35	青磁　無文碗	a. 高台径5.0cm d. 灰色 f. 緑灰色透明 高台内露胎 g. 内底印花文 龍泉窯系
36	白磁　口兀碗	a. 口径（10.6cm） d. 灰色 堅緻 f. 灰白色不透明
37	瀬戸　入子	a. 底径4.1cm b. 外底ヘラ削り c. 灰色 精良緻密
38	常滑　甕	a. 口径52.4cm b. 輪積み c. 灰色 砂粒 長石粒 粗土 e. 表面黒褐色 外面自然釉
図8－1	かわらけ　内折	a. 口径5.4cm 底径5.0cm 器高1.0cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
2	白磁　口兀皿	a. 口径（7.8cm） d. 灰白色 堅緻 f. 灰白色不透明
3	白磁　口兀皿	a. 口径（9.6cm） d. 灰白色 堅緻 f. 灰白色不透明
4	白磁　口兀皿	a. 口径（5.8cm） d. 灰白色 堅緻 f. 灰白色不透明
5	土器質火鉢	a. 口径（40.0cm） c. 微砂 白針 赤色粒 e. 灰色
6	かわらけ	a. 口径12.6cm 底径7.6cm 器高3.6cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 淡黄橙色
7	白磁　口兀皿	a. 口縁部 d. 灰白色 堅緻 f. 灰白色不透明
8	青白磁　梅瓶	a. 高台径（8.8cm） d. 灰白色 気孔有 f. 明緑灰色不透明 気泡有 g. 外面３条沈線
9	青磁　鎬蓮弁文碗	a. 口縁部 d. 灰色 堅緻 f. 緑灰色半透明 g. 外面蓮弁文方切彫り 龍泉窯系
10	緑釉　盤	a. 口縁～体部下半 c. 黄灰色 石粒 粗土 f. 緑灰色不透明
11	かわらけ	a. 口径10.2cm 底径5.8cm 器高2.9cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 黄橙色
12	男瓦	a. 厚さ2.1cm b. 凸面縄目叩 縦位ナデ 凹面布目痕 離れ砂 c. 粗土　e. 淡黄橙色
13	土器質羽釜	a. 口径（20.6cm） c. 微砂 赤色粒 e. 黄橙色 g. 西国系
14	瓦器質黒縁皿	a. 口径（10.8cm） 底径（7.3cm） 器高2.9cm b. 手捏ね c. 微砂 石粒 e. 灰色
15	かわらけ	a. 口径12.0cm 底径6.1cm 器高3.7cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. にぶい橙色
16	かわらけ	a. 口径7.5cm 底径5.4cm 器高1.8cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
17	かわらけ	a. 口径7.8cm 底径5.6cm 器高1.9cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. にぶい橙色
18	青磁　無文碗	a. 高台径3.6cm d. 灰色 堅緻 f. 明緑灰色不透明 g. 外面残存部分無文
19	白磁　四耳壺	a. 口径12.2cm b. 折返した口縁 d. 灰白色 気孔・貫入有 f. 明緑灰色透明
20	かわらけ	a. 口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 e. 淡黄褐色
21	土器質火鉢	a. 口径（31.0cm） 底径（24.6cm） 器高9.5cm c. 微砂 赤色粒 e. 灰色
22	常滑　甕	a. 口縁部 b. 輪積み c. 褐灰色 砂粒 長石粒 石英粒 粗土
23	瓦質火鉢	a. 底部 b. 六角または八角 c. 灰色 砂粒 小石粒 e. 黒灰色 g. 下端２条沈線
24	土器質火鉢	a. 口縁部 c. 砂粒 小石粒 白色粒 e. 灰褐色
25	かわらけ	a. 口径7.6cm 底径5.6cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 淡橙色
26	かわらけ	a. 口径11.7cm 底径7.1cm 器高3.6cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 淡橙色
27	かわらけ	a. 口径12.8cm 底径7.8cm 器高3.4cm b. ロクロ c. 微砂 白針 土丹粒 e. 橙色
28	かわらけ	a. 口径（7.2cm） 底径（5.6cm） 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 淡 黄橙色
29	土器質火鉢	a. 口縁部 c. 砂粒 小石粒 赤色粒 e. 灰色
30	かわらけ	a. 口径（7.8cm） 底径5.2cm 器高1.9cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 橙色
31	青磁　鎬蓮弁文碗	a. 口縁部 d. 灰色 微砂 f. 明緑灰色不透明 g. 外面蓮弁文方切彫り 龍泉窯系
32	北宋銭	聖宋元宝　北宋　初鋳1101年
33	北宋銭	皇宋通宝　北宋　初鋳1039年
34	かわらけ　灯明皿	a. 口径11.8cm 底径7.2cm 器高3.4cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
図9－1	かわらけ	a. 口径6.8cm 底径3.9cm 器高1.5cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. にぶい黄褐色
2	かわらけ	a. 口径7.2cm 底径4.6cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
3	かわらけ	a. 口径7.4cm 底径5.3cm 器高1.5cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 橙色
4	かわらけ	a. 口径7.3cm 底径4.9cm 器高1.5cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 橙色
5	かわらけ	a. 口径7.0cm 底径4.9cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. にぶい黄褐色
6	かわらけ	a. 口径（7.4cm） 底径5.1cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 浅黄褐色
7	かわらけ	a. 口径7.7cm 底径5.2cm 器高1.9cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 橙色
8	かわらけ	a. 口径7.6cm 底径4.0cm 器高2.1cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 橙色
9	かわらけ	a. 口径7.2cm 底径5.6cm 器高1.3cm b. ロクロ c. 微砂 白針 石粒 e. 橙色
10	かわらけ	a. 口径（8.0cm） 底径（6.0cm） 器高1.5cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 浅黄褐色

表1　遺物観察表(3)

図·遺物	種　類	a.法量　b.成形　c.胎土　d.素地　e.色調　f.釉薬　g.備考
11	かわらけ	a.口径7.7cm 底径5.3cm 器高1.3cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.橙色
12	かわらけ	a.口径7.8cm 底径5.7cm 器高1.6cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.橙色
13	かわらけ	a.口径7.7cm 底径5.1cm 器高1.5cm b.ロクロ c.微砂 白針 石粒 e.橙色
14	かわらけ	a.口径7.4cm 底径5.7cm 器高1.5cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.にぶい橙色
15	かわらけ	a.口径7.7cm 底径4.9cm 器高2.5cm b.ロクロ c.微砂 白針 赤色粒 e.橙色
16	かわらけ(るつぼ?)	a.口径8.8cm 底径6.4cm 器高2.1cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.にぶい橙色
17	かわらけ	a.口径11.8cm 底径7.2cm 器高2.5cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.橙色
18	かわらけ	a.口径12.4cm 底径6.2cm 器高3.2cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.橙色
19	かわらけ	a.口径12.4cm 底径7.8cm 器高3.6cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.にぶい橙色
20	かわらけ	a.口径13.8cm 底径7.3cm 器高3.8cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.黄橙色
21	かわらけ	a.口径12.3cm 底径6.4cm 器高3.4cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.黄橙色
22	青磁　鎬蓮弁文碗	a.口縁部 d.灰色 微砂 f.明緑灰色透明 g.細蓮弁文方切彫り 龍泉窯系
23	青磁　鎬蓮弁文碗	a.口縁部 d.灰色 f.明緑灰色透明 気泡有 g.細蓮弁文方切彫り 龍泉窯系
24	青磁　鎬蓮弁文碗	a.口縁部 d.灰色 f.明緑灰色不透明 貫入有 g.太目蓮弁文方切彫り 龍泉窯系
25	青磁　鎬蓮弁文碗	a.口径(11.4cm) d.灰色 f.淡灰緑色不透明 g.細蓮弁文方切彫り 龍泉窯系
26	青磁　鎬蓮弁文碗	a.口径(16.0cm) d.灰色 f.緑灰色不透明 g.細蓮弁文方切彫り 龍泉窯系
27	青磁　鎬蓮弁文碗	a.底径5.6cm d.灰白色 f.明緑灰色半透明 g.内底面印花文 龍泉窯系
28	白磁　合子蓋	a.最大径7.3cm 器高1.6cm d.灰白色 堅緻 f.灰白色透明 気泡やや多い
29	白磁　口兀皿	a.口縁部 d.灰白色 f.水青灰色不透明
30	白磁　口兀皿	a.口径(8.8cm) d.灰白色 f.オリーブ黄色不透明 貫入有
31	白磁　口兀皿	a.口径13.0cm d.灰色 f.灰白色不透明
32	白磁　口兀皿	a.底径5.6cm d.灰白色 f.灰白色不透明
33	白磁　口兀皿	a.口径(7.2cm) 底径(4.0cm) 器高2.5cm b.ロクロ c.微砂 e.にぶい黄褐色
34	白磁　四耳壺	a.高台径(7.1cm) d.灰色 f.灰白色不透明
35	青白磁　梅瓶	a.高台径(9.3cm) d.灰色 f.明緑灰色透明 g.外面櫛状工具による渦巻文
36	瀬戸　洗	a.口径29.0cm d.灰色 f.黄緑灰色 刷毛塗り g.口縁玉縁状
37	瀬戸　四耳壺	a.高台径7.8cm b.貼付け高台 c.灰色 微砂
38	瀬戸　瓶子　Ⅱ類	a.底径13.4cm　c.灰白色 微砂 f.灰オリーブ色 刷毛塗り
39	瀬戸　入子	a.口径9.8cm 底径4.4cm 器高3.4cm c.灰白色 堅緻 f.灰オリーブ色自然釉
40	常滑　甕	a.口径(43.0cm) c.灰色 砂粒 長石・石英粒 粗土 e.表面褐色
41	常滑　甕	a.底径17.8cm c.灰色 砂粒 長石・石英粒 粗土 e.表面にぶい褐色
42	常滑　片口鉢	a.口縁部 b.短頸部 片口 c.灰色 砂粒 長石粒 良土 e.表面暗褐色
43	常滑　捏鉢　Ⅰ類	a.口径27.4cm 高台径12.4cm 器高12.7cm b.貼付高台 c.灰色 砂粒 石粒
44	常滑　捏鉢　Ⅰ類	a.口径22.4cm b.口縁下強いナデ c.灰色 砂粒 長石粒
45	常滑　捏鉢　Ⅰ類	a.口径24.0cm 高台径11.2cm 器高13.0cm b.貼付高台 c.灰色 砂粒 石粒
46	常滑　捏鉢　Ⅱ類	a.口径26.0cm b.口縁下強いナデ c.灰色 砂粒 長石粒 e.表面暗褐色
47	常滑　捏鉢　Ⅱ類	a.口径(15.4cm) c.灰色 砂粒 長石粒 e.表面にぶい褐色
48	土器質火鉢	a.口縁～底部 c.にぶい橙色 砂粒 白針 赤色粒 e.表面暗灰色
49	土器質火鉢	a.口縁部～体部 c.淡橙色 砂粒 白針 赤色粒 e.表面灰色
図11－50	女瓦	a.厚さ3.0cm 前後 b.凹面糸切・布目痕 離れ砂 凸面縄目叩 c.灰色 砂粒 良土
51	女瓦	a.厚さ2.5cm 前後 b.凹面糸切痕 凸面斜格子叩き c.黄橙色 砂粒 e.表面灰黒色
52	滑石鍋	a.口径(19.6cm) b.口縁下鍔 外面ノミ状工具削り加工 内面擦痕
53	滑石鍋	a.口径(20.8cm) b.口縁下鍔 外面ノミ状工具削り加工 内面工具削り 擦痕
54	滑石鍋	a.口径(16.8cm) b.口縁下鍔 外面ノミ状工具削り加工 内面工具削り 擦痕
55	砥石	a.残存長6.2cm 残存幅4.4cm 厚さ2.7cm c.砂岩質 e.灰色 g.荒砥 上面擦痕
56	砥石	a.残存長7.0cm 幅3.3cm 厚さ2.9cm c.凝灰岩質 e.灰白色 g.中砥 方柱状
57	北宋銭	熙寧元宝　初鋳1068年
図13－1	かわらけ	a.口径12.6cm 底径8.7cm 器高2.7cm b.ロクロ c.微砂 白針 赤色粒 e.黄褐色
2	白磁　口兀皿	a.口縁部 d.灰白色 堅緻 f.灰白色透明 貫入多い g.口縁露胎部に炭付着
3	白磁　口兀皿	a.口縁部 d.灰白色 堅緻 f.灰白色不透明 内面貫入
4	かわらけ	a.口径8.4cm 底径6.4cm 器高1.6cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.にぶい橙色

表１　遺物観察表（４）

図･遺物	種　類	a.法量　b.成形　c.胎土　d.素地　e.色調　f.釉薬　g.備考
図13－５	かわらけ	a.口径8.2cm 底径6.7cm 器高1.6cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.橙色
6	かわらけ	a.口径9.0cm 底径6.7cm 器高1.5cm b.ロクロ c.微砂 e.橙色
7	青磁　劃花文碗	a.口縁部 d.灰白色 堅緻 f.オリーブ黄色透明 g.口縁下２状方切り 龍泉窯系
8	青磁　鎬蓮弁文碗	a.口径16.4cm d.灰白色 堅緻 f.淡緑灰色半透明 g.外面蓮弁方切彫 龍泉窯系
9	かわらけ	a.口径7.5cm 底径5.0cm 器高1.6cm b.ロクロ c.微砂 白針 赤色粒 e.明黄褐色
10	かわらけ	a.口径13.3cm 底径9.2cm 器高3.0cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.にぶい橙色
11	常滑　捏鉢　Ⅱ類	a.口縁部 c.砂粒 長石・石英粒 e.灰色
12	女瓦	a.厚さ2.3cm b.凹面離れ砂 凸面斜格子叩目 c.灰白色 やや粗 e.表面灰黒色
13	かわらけ	a.口径8.5cm 底径6.6cm 器高2.0cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.明黄褐色
14	かわらけ	a.口径8.3cm 底径6.3cm 器高1.4cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.赤褐色
15	かわらけ	a.口径(7.8cm) 底径(6.5cm) 器高1.6cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.にぶい橙色
16	かわらけ	a.口径7.9cm 底径5.7cm 器高1.6cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.にぶい橙色
17	かわらけ	a.口径8.5cm 底径6.0cm 器高1.5cm b.ロクロ c.微砂 白針 赤色粒 e.明黄褐色
18	かわらけ	a.口径9.3cm 底径8.3cm 器高1.5cm b.手捏ね c.微砂 白針 赤色粒 e.明黄褐色
19	白磁　合子身	a.口径9.6cm 底径8.6cm 器高2.1cm d.白色 精良 f.白色透明 g.側面細蓮弁文
20	魚住　甕	a.口縁部 b.外面格子叩目 c.灰白色 微砂 e.灰色
21	かわらけ　極小	a.口径(5.8cm) 底径(4.6cm) 器高1.0cm b.ロクロ c.微砂 白針 赤色粒 e.橙色
22	かわらけ	a.口径8.6cm 底径3.0cm 器高1.6cm b.ロクロ c.微砂 白針 赤色粒 e.橙色
23	かわらけ	a.口径14.2cm 底径8.8cm 器高3.4cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.橙色
24	かわらけ	a.口径15.0cm 底径4.0cm 器高3.8cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.橙色
25	軽石	a.長さ4.9cm 幅4.4cm 厚さ3.2cm e.灰白色流紋岩質 g.表面擦痕・研磨痕
26	石製品	a.長さ8.6cm 幅8.6cm 厚さ1.3cm e.黒褐色安山岩質 g.方形板状 表面滑らか
27	かわらけ	a.口径11.3cm 底径6.9cm 器高3.4cm b.ロクロ c.微砂 白針 赤色粒 e.橙色
28	常滑　捏鉢　Ⅰ類	a.口径20.3cm 底径10.3cm 器高8.4cm b.貼付け高台 c.砂粒 石粒 e.黄褐色
29	土器質火鉢	a.口径30.8cm 底径23.0cm 器高9.7cm b.外面胴部櫛目痕 c.微砂 石粒 e.灰色
30	常滑　捏鉢　Ⅰ類	a.口縁～体部 c.灰色 微砂 石粒 e.灰オリーブ色 g.口唇～内面自然釉
31	土製品　陶丸	a.径3.6cm b.円球形 表面ナデ c.かわらけ質 微砂 白針 赤色粒 e.明黄褐色
32	かわらけ	a.口径9.0cm 底径6.3cm 器高1.7cm b.ロクロ c.微砂 e.明黄褐色
33	土製品　陶丸	a.径2.0cm b.円球形 表面ナデ c.かわらけ質 微砂 白針 良土 e.明黄褐色
34	石製品　砥石	a.残存長3.9cm 幅3.5cm 厚さ0.4cm以上 e.浅黄色粘板岩質 g.仕上砥
35	北宋銭	皇宋通宝　初鋳　1039年
図14－１	かわらけ	a.口径7.0cm 底径5.0cm 器高1.6cm b.ロクロ c.微砂 白針 赤色粒 e.明黄褐色
2	かわらけ	a.口径7.9cm 底径5.4cm 器高1.7cm b.ロクロ c.微砂 白針 赤色粒 e.赤橙色
3	かわらけ	a.口径12.7cm 底径8.8cm 器高2.9cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.にぶい橙色
4	青磁　鎬蓮弁文碗	a.口径12.6cm d.灰色 堅緻 f.淡緑灰色透明 g.外面蓮弁文方切彫り 龍泉窯系
5	青磁　劃花文碗	a.高台径6.6cm d.灰白色 微砂 f.淡緑灰色半透明 g.内底面劃花文 龍泉窯系
6	白磁　口兀皿	a.口径9.6cm d.白色 堅緻 f.白色透明 g.口唇部内外面露胎
7	白磁　口兀皿	a.口径9.6cm d.灰白色 黒色微砂 f.薄水色半透明 g.口唇露胎部に煤付着
8	白磁　口兀碗	a.口径13.6cm d.灰白色 黒色微砂 f.白色半透明 g.体部内面中位に一条沈線
9	瀬戸　入子	a.口径7.9cm 底径4.0cm 器高2.3cm b.外底糸切 c.灰色 微砂 e.口唇部自然釉
10	常滑　捏鉢　Ⅰ類	a.口縁部 c.微砂 石粒 e.灰白色
11	常滑　捏鉢　Ⅱ類	a.口縁部 b.外面口縁部横位ナデ c.灰白色 微砂 石粒 e.淡橙色
図16－１	かわらけ	a.口径7.8cm 底径6.0cm 器高1.4cm b.ロクロ c.微砂 e.明黄褐色
2	かわらけ	a.口径7.7cm 底径5.6cm 器高1.7cm b.ロクロ c.微砂 白針 赤色粒 e.淡橙色
3	女瓦	a.厚さ1.9 b.凹面縄目転写 離れ砂 凸面縄目叩 c.灰色 微砂 良土 e.灰黒色
4	青磁　鎬蓮弁文碗	a.高台径4.6cm d.灰色 堅緻 f.緑灰色半透明 g.外面蓮弁文 内底面印花文
5	常滑　捏鉢　Ⅰ類	a.口径25.0cm 高台径12.4cm 器高7.5cm b.貼付け高台 c.微砂 石粒 e.灰色
6	かわらけ	a.口径9.0cm 底径7.0cm 器高1.5cm b.ロクロ c.微砂 白針 赤色粒 e.淡橙色
7	常滑　甕	a.口縁部 c.にぶい黄褐色 微砂 石粒 e.褐色
8	男瓦	a.径(16.0cm) 厚さ1.8cm b.凸面縄目叩 凹面布目痕 c.灰白色 粗土 e.灰黒色
9	男瓦	a.厚さ1.8cm b.凸面縄目叩後縦位ナデ 凹面布目痕 c.灰色 粗土 e.灰黒色

表1　遺物観察表（5）

図・遺物	種　類	a. 法量　b. 成形　c. 胎土　d. 素地　e. 色調　f. 釉薬　g. 備考
図16－10	男瓦	a. 径16.0cm 厚さ2.0cm b. 凸面叩目ナデ消 凹面布目痕 c. 灰色 粗土 e. 灰黒色
11	かわらけ	a. 口径12.4cm 底径9.0cm 器高3.3cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 黄褐色
12	白かわらけ	a. 口径8.0cm 底径6.2cm 器高1.1cm b. ロクロ c. 微砂 精良土 e. 灰白色
13	かわらけ	a. 口径7.9cm 底径6.0cm 器高1.5cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 明黄褐色
14	かわらけ	a. 口径8.8cm 底径6.6cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 明黄褐色
15	かわらけ	a. 口径7.8cm 底径5.0cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
16	かわらけ	a. 口径8.0cm 底径6.0cm 器高1.5cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 明黄褐色
17	かわらけ	a. 口径14.6cm 器高4.0cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 赤色粒 e. 明黄褐色
18	かわらけ	a. 口径8.0cm 底径6.0cm 器高1.9cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 橙色
図17－1	かわらけ	a. 口径8.0cm 底径6.1cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 明黄褐色
2	かわらけ	a. 口径8.0cm 底径6.0cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 明黄褐色
3	かわらけ	a. 口径12.3cm 底径8.6cm 器高3.0cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
4	男瓦	a. 径（16.0cm）厚さ2.1cm b. 凸面縄目叩 凹面布目痕 c. 灰白色 粗土 e. 灰黒色
5	男瓦	a. 径（15.6cm）厚さ2.4cm b. 凸面縄目叩 凹面布目痕 c. 灰褐色 粗土 e. 灰黒色
6	宇瓦	a. 瓦当厚6.7cm 女瓦部厚さ2.8cm b. 顎部貼付け c. 良土 e. 灰黒色 g. 巴・珠文
7	男瓦	a. 径（15.0cm）厚さ2.0cm b. 凸面縄目叩後縦位ナデ 凹面布目痕 c. 微砂 e. 灰色
8	常滑　甕	a. 口径42.6cm b. 輪積 c. 灰色 微砂 石粒 e. オリーブ灰色
図18－1	石製品　硯	a. 長さ（8.5cm）幅6.2cm 高さ1.0 b. 周縁四葉形に加工 e. 灰色粘板岩
2	石製品　滑石鍋	a. 底部 b. 内外面・底部ノミ状工具削り加工
3	かわらけ	a. 口径8.3cm 底径5.9cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
4	かわらけ	a. 口径12.7cm 底径8.9cm 器高3.3cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
5	女瓦	a. 厚さ2.4cm b. 凹面離れ砂 凸面斜格子叩目 離れ砂 c. 灰白色 良土 e. 灰色
6	かわらけ	a. 口径8.0cm 底径7.0cm 器高1.4cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
7	かわらけ	a. 口径12.1cm 底径9.1cm 器高3.4cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 淡橙色
8	常滑　甕	a. 口縁部 b. 輪積 c. 灰オリーブ色 微砂 石粒 e. 暗褐色
9	かわらけ	a. 口径9.0cm 器高1.9cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 橙色
図19－1	かわらけ	a. 口径7.6cm 底径5.8cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 黄橙色
2	かわらけ	a. 口径7.8cm 底径6.1cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 黄橙色
3	かわらけ	a. 口径8.2cm 底径5.9cm 器高1.5cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 明黄褐色
4	かわらけ	a. 口径8.2cm 底径6.4cm 器高1.5cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 淡橙色
5	かわらけ	a. 口径8.2cm 底径6.4cm 器高1.8cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 淡橙色
6	かわらけ	a. 口径8.2cm 底径6.0cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 赤色粒 e. 淡橙色
7	かわらけ　灯明皿	a. 口径8.6cm 底径5.3cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 黄褐色
8	かわらけ	a. 口径8.4cm 底径5.1cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 淡橙色
9	かわらけ	a. 口径12.1cm 底径8.4cm 器高2.7cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
10	かわらけ	a. 口径12.3cm 底径8.1cm 器高2.9cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
11	かわらけ	a. 口径12.0cm 底径9.1cm 器高2.9cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
12	かわらけ　灯明皿	a. 口径12.5cm 底径8.8cm 器高3.3cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
13	かわらけ	a. 口径13.1cm 底径9.5cm 器高3.0cm b. ロクロ c. 微砂 白針 赤色粒 e. 橙色
14	かわらけ	a. 口径9.6cm 器高1.7cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 橙色
15	かわらけ	a. 口径9.2cm 器高2.2cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 橙色
16	かわらけ	a. 口径15.2cm 器高3.7cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 橙色
17	白かわらけ	a. 口径9.0cm 底径5.8cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 精良土 e. 灰白色
18	青磁　鎬蓮弁文碗	a. 口径14.6cm d. 灰白色 f. 淡灰緑色不透明 g. 外面蓮弁文方切彫り 龍泉窯系
19	青磁　櫛描文碗	a. 体部 d. 白色 堅緻 f. 水青色透明 g. 内面櫛描・劃花文 同安窯系
20	白磁　口兀皿	a. 口径10.6cm d. 灰白色 f. 明オリーブ灰色半透明 g. 口縁露胎部に煤付着
21	白磁　口兀皿	a. 口径13.8cm 器高2.7cm d. 灰白色 f. オリーブ黄色半透明 g. 口縁部露胎
22	白磁　口兀皿	a. 口縁部 d. 灰白色 f. 明オリーブ灰色不透明 g. 口縁部露胎
23	青白磁　合子蓋	a. 口径4.5cm 器高1.6cm b. 輪花型 d. 灰白色 f. 明青灰色半透明
24	常滑　捏鉢　Ⅱ類	a. 口径27.8cm c. 暗赤色 砂粒 石粒 e. 橙色
25	常滑　捏鉢　Ⅰ類	a. 高台径13.5cm b. 貼付け高台 c. 灰色 砂粒 石粒 e. 灰色

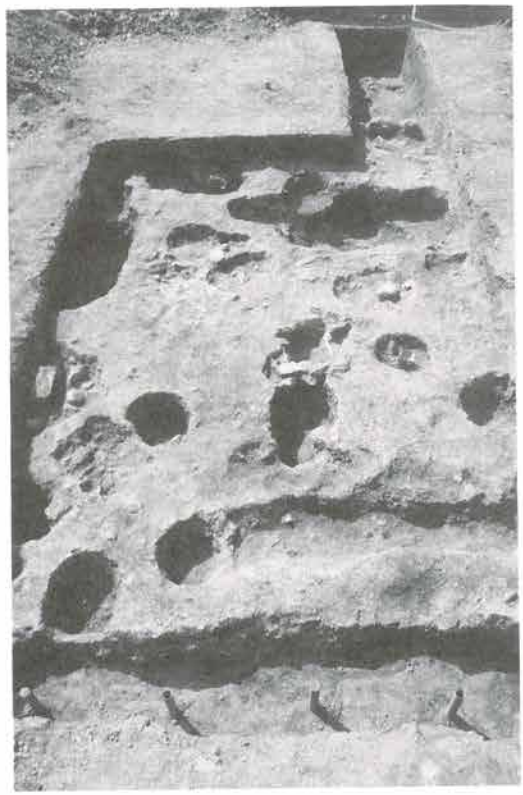
表1　遺物観察表(6)

図·遺物	種　類	a.法量　b.成形　c.胎土　d.素地　e.色調　f.釉薬　g.備考
図19－26	常滑　捏鉢　Ⅱ類	a.底径14.4cm 器高5.7cm c.明褐色 微砂 石粒 e.黒灰色 g.内面灰緑色自然釉
27	魚住　甕	a.底部～胴部下位 b.外面格子目 内面櫛状工具ナデ c.灰色 微砂 e.灰黒色
28	男瓦	a.厚さ2.3cm b.凸面縄目叩後縦位ナデ 凹面布目痕 c.砂粒 石粒　e.灰褐色
図20－29	男瓦	a.厚さ1.7cm b.凸面縄目叩 凹面布目痕 c.砂粒 石粒 e.灰色
30	女瓦	a.厚さ2.3cm b.凹面離れ砂 凸面縄目叩き c.砂粒 e.灰色 g.永福寺　期瓦
31	男瓦	a.厚さ2.8cm b.凸面縄目叩 凹面糸切痕 布目痕 c.砂粒 石粒 e.灰色
32	女瓦	a.厚さ2.3cm b.凹面離れ砂 凸面叩目後縦位ナデ c.砂粒 石粒 e.灰黒色
33	女瓦	a.厚さ2.0cm b.凹面ナデ 凸面斜格子叩目 c.砂粒 e.灰黒色　g.永福寺　期瓦
34	土器質火鉢	a.口径33.4cm b.口縁下強い横位ナデ c.微砂 石粒 e.明黄褐色
35	石製品　滑石鍋	a.口径(29.6cm) b.口縁下鍔 内外面ノミ状工具削り 擦痕
36	石製品　砥石	a.残存長6.9cm 幅5.9cm 厚さ4.0cm c.淡赤橙色砂岩質 g.中砥 四面使用
図22－1	かわらけ	a.口径14.2cm 器高4.0cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.浅黄橙色
2	かわらけ	a.口径9.4cm 器高1.7cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.浅黄色
3	青磁　劃花文碗	a.体部下半 d.灰色 f.灰オリーブ色透明 g.内面劃花文方切彫り 龍泉窯系
4	山茶碗	a.口縁部 b.ロクロ c.微砂 黒色粒 e.灰色 g.東遠江系
5	かわらけ	a.口径9.0cm 底径5.1cm 器高1.8cm b.ロクロ c.微砂 赤色粒 e.淡橙色
6	かわらけ	a.口径9.5cm 底径7.0cm 器高2.0cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.淡橙色
7	かわらけ	a.口径9.6cm 底径6.1cm 器高1.8cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.橙色
8	かわらけ	a.口径8.9cm 器高2.0cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.橙色
9	かわらけ	a.口径8.8cm 器高6.1cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.にぶい黄橙色
10	かわらけ	a.口径12.0cm 器高1.8cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.浅黄色
11	かわらけ	a.口径9.8cm 器高1.9cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.にぶい橙色
12	かわらけ	a.口径9.7cm 器高2.1cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.黄橙色
13	かわらけ	a.口径9.7cm 器高1.9cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.浅黄橙色
14	かわらけ	a.口径12.8cm 器高3.1cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.橙色
15	かわらけ	a.口径13.9cm 器高2.8cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.橙色
16	かわらけ	a.口径13.9cm 器高3.3cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.にぶい橙色
17	かわらけ	a.口径14.7cm 器高3.9cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.明黄褐色
18	青磁　劃花文碗	a.口縁部 d.灰白色 f.オリーブ灰色透明 g.内面劃花文方切彫り 龍泉窯系
19	青磁　劃花文碗	a.高台径6.0cm d.灰色 f.オリーブ灰色半透明 g.内面方切彫り文 龍泉窯系
20	白磁　合子身	a.口径7.0cm 底径5.2cm 器高2.0cm b.型作り d.白色 f.白色透明 g.蓮弁文
21	常滑　甕	a.口径42.0cm c.砂粒 石粒 e.褐灰色 g.頸部～肩部自然釉
22	男瓦	a.厚さ2.8cm b.凸面縄目叩 凹面糸切痕 布目痕 c.砂粒 石粒 e.灰色
23	女瓦	a.厚さ2.2cm b.凹面糸切痕 凸面縄目叩き c.砂粒 e.灰色 g.永福寺　期瓦
24	フイゴ羽口	a.径9.5cm b.表面指頭圧痕 c.砂粒 石粒 e.黄褐色 g.付根黒褐色ガラス状
25	滑石製スタンプ	a.残存長2.4cm 残存長3.0cm 高さ2.8cm b.鍔部加工 g.文様不明瞭
26	燧石	a.長さ2.7cm 幅2.1cm 高さ1.9cm e.白色石英質 g.稜部に打撃痕
27	女瓦	a.厚さ2.0cm b.凹面糸切痕 凸面縄目叩き c.砂粒 e.淡灰黒色 g.永福寺　期瓦
図23－1	かわらけ	a.口径8.0cm 底径5.9cm 器高1.7cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.橙色
2	かわらけ	a.口径7.8cm 底径6.2cm 器高1.7cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.にぶい橙色
3	かわらけ	a.口径9.4cm 底径8.2cm 器高2.3cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.浅黄色
4	かわらけ	a.口径8.0cm 底径5.3cm 器高1.6cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.にぶい橙色
5	かわらけ	a.口径9.9cm 底径8.1cm 器高1.7cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.にぶい黄橙色
6	かわらけ	a.口径12.5cm 底径8.2cm 器高3.0cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.明黄褐色
7	かわらけ	a.口径12.7cm 底径8.5cm 器高3.2cm b.ロクロ c.微砂 白針 e.浅黄色
8	かわらけ	a.口径8.0cm 器高1.6cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.橙色
9	かわらけ	a.口径9.4cm 器高1.6cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.にぶい橙色
10	かわらけ	a.口径8.7cm 器高1.6cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.浅黄色
11	かわらけ	a.口径12.0cm 器高2.0cm b.手捏ね c.微砂 白針 e.にぶい橙色
12	白かわらけ	a.口径12.4cm 器高3.4cm b.手捏ね c.微砂 e.灰白色
13	青磁　劃花文碗	a.口径13.8cm d.灰色 f.灰オリーブ色透明 g.内面劃花文方切彫り 龍泉窯系

表1　遺物観察表（7）

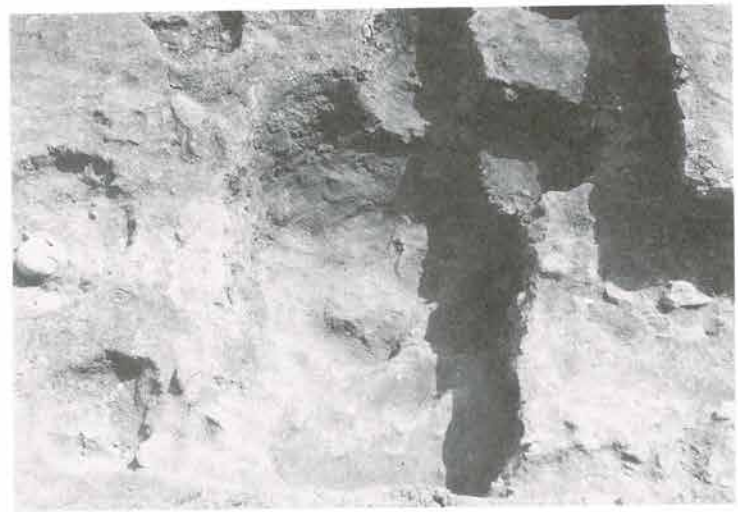
図・遺物	種　類	a. 法量　b. 成形　c. 胎土　d. 素地　e. 色調　f. 釉薬　g. 備考
図23－14	青磁　劃花文碗	a. 高台径6.8cm d. 灰色 f. 灰オリーブ色透明　g．内面劃花文方切彫り 龍泉窯系
15	常滑　山皿	a. 口径6.8cm 底径4.2cm 器高1.6cm b. ロクロ c. 微砂 石粒 e. 明褐灰色
16	常滑　小壺	a. 底径5.8cm b. 輪積 c. 灰色 微砂 石粒 g. 灰オリーブ色自然釉 鳶口壺か
17	常滑　甕	a. 口径（41.6cm） b. 輪積 c. 微砂 石粒 g. 灰オリーブ色自然釉
18	瓦器　皿	a. 底径5.9cm b. 内底９弁菊花文 c. 灰褐色 微砂 e. 表面黒褐色　g．楠葉系
19	男瓦	a. 径16.5cm 厚さ2.1cm b. 凸面縄目叩き 凹面布目痕 c. 灰色 砂粒 e. 黄橙色
20	女瓦	a. 厚さ2.1cm b. 凹面糸切痕 凸面縄目叩き c. 良土 e. 灰色 f. 永福寺　期瓦
21	伊勢系　土鍋	a. 口縁部 c. 砂粒 石粒 e. 灰褐色 g. 外面煤付着
図25－1	かわらけ	a. 口径7.9cm 底径5.4cm 器高1.9cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 黄橙色
2	かわらけ	a. 口径8.2cm 底径6.8cm 器高1.7cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 橙色
3	かわらけ	a. 口径8.7cm 底径6.0cm 器高1.9cm b. ロクロ c. 微砂 e. 黄灰色
4	かわらけ	a. 口径9.3cm 底径7.7cm 器高2.0cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 黄橙色
5	かわらけ	a. 口径8.3cm 底径4.7cm 器高1.8cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. にぶい黄色
6	漆器　皿	a. 口径9.1cm 底径6.7cm 器高2.0cm b. 平高台状 g. 黒漆塗無文
7	かわらけ	a. 口径12.7cm 底径7.2cm 器高2.8cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. にぶい橙色
8	白かわらけ　内折	a. 口径7.1cm 器高1.2cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 灰白色
9	かわらけ　内折	a. 口径7.8cm 器高1.2cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 橙色
10	かわらけ	a. 口径9.4cm 器高1.2cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 橙色
11	かわらけ	a. 口径10.4cm 器高1.4cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 浅黄灰色
12	かわらけ　内折	a. 口径9.2cm 器高2.2cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 赤褐色
13	かわらけ　灯明皿	a. 口径10.4cm 器高2.0cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 黄橙色
14	かわらけ	a. 口径13.3cm 器高3.4cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 黄橙色
15	かわらけ	a. 口径14.2cm 器高3.7cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 明黄橙色
16	かわらけ	a. 口径17.4cm 器高3.4cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. にぶい橙色
17	かわらけ	a. 口径16.0cm 器高3.4cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. にぶい黄色
18	青磁　劃花文碗	a. 口縁部 d. 灰白色 f. 灰オリーブ色透明　g．内面劃花文方切彫り 龍泉窯系
19	青磁　櫛描文皿	a. 底径3.8cm d. 灰白色 f. 明緑灰色透明　g．内面櫛描・劃花文 同安窯系
20	男瓦	a. 径14.6cm 厚さ1.5cm b. 凸面縄目叩き 凹面布目痕 c. 砂粒 良土 e. 灰色
21	女瓦	a. 厚さ1.8cm b. 凹面糸切痕 凸面縄目叩き c. 良土 e. 灰黒色 f. 永福寺　期瓦
22	漆器　椀	a. 高台径8.4cm b. 高い高台 g. 黒漆塗無文
23	木製品　箸	a. 長さ22.5cm 幅0.6cm 厚さ0.6cm g. 刃物削り加工
24	木製品　箸	a. 長さ（24.5cm） 幅0.7cm 厚さ0.4cm g. 刃物削り加工
図26－1	かわらけ	a. 口径12.9cm 器高3.4cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 橙色
2	かわらけ	a. 口径14.0cm 器高3.6cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 黄褐色
3	青磁　櫛描文碗	a. 口径13.0cm d. 灰白色 f. オリーブ黄色透明　g．内面櫛描文 同安窯系
4	かわらけ	a. 口径8.8cm 器高2.0cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 浅黄橙色
5	かわらけ	a. 口径8.7cm 底径8.0cm 器高1.5cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. にぶい橙色
6	かわらけ	a. 口径9.0cm 器高1.6cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 淡黄色
7	かわらけ	a. 口径13.1cm 器高4.2cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 明黄褐色
図28－1	かわらけ	a. 口径9.8cm 器高1.9cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. にぶい黄色
2	かわらけ	a. 口径13.0cm 底径8.3cm 器高3.3cm b. ロクロ c. 微砂 白針 e. 明黄褐色
3	かわらけ	a. 口径13.8cm 器高3.3cm b. 手捏ね c. 微砂 白針 e. 黄橙色
4	土師器　坏	a. 口径16.0cm 器高4.0cm c. 微砂 白針 赤色粒 e. 浅黄橙色

▲Ⅰ区第１面全景（東から）



▲Ⅱ区第１面全景（東から）

▲調査区西側拡張トレンチ
荏柄天神の参道や土塁確認を目的

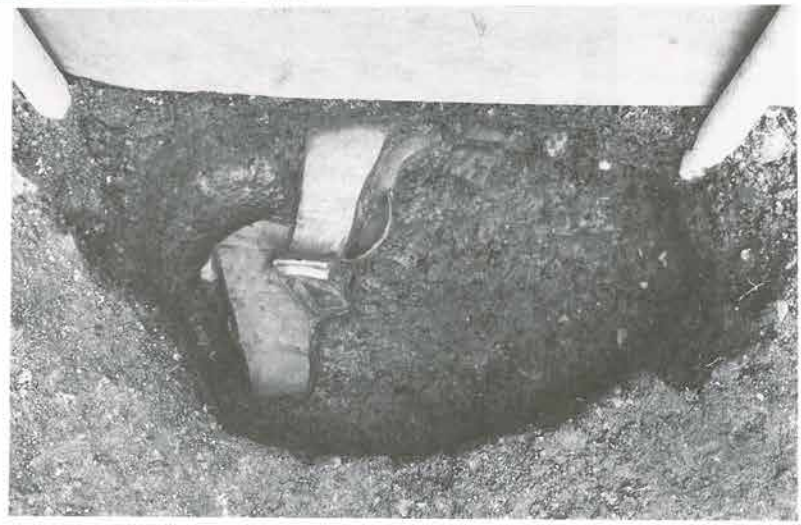


第１面土壙６（北から）▶

図版２

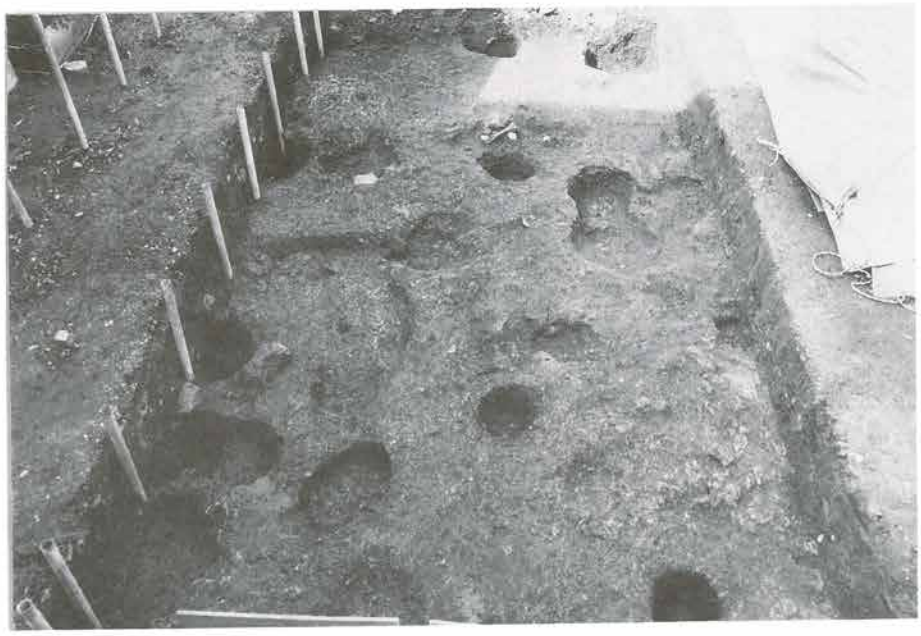
◀第１面土壙３（西から）

▼完掘状況
常滑据甕が潰れた
状態で土壙内から
出土



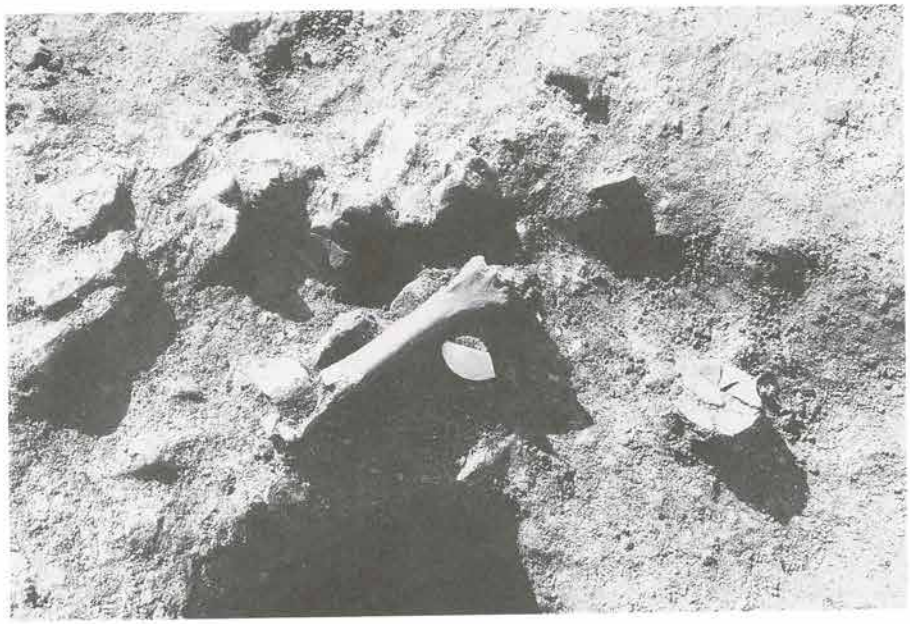
▲第１面 P29（北から）
（かわらけ出土状況）

▼第１面 P30（北から）
（かわらけ出土状況）



▲Ⅰ区第２面全景（東から）

▲Ⅱ区第２面全景（東から）



◀第２面土壙２（東から）
（獣骨・遺物出土状況）

図版４

▲第２面礎石列(西から)

▲第２面礎石列　礎石１(東から)

▲第２面礎石列　礎石２(東から)

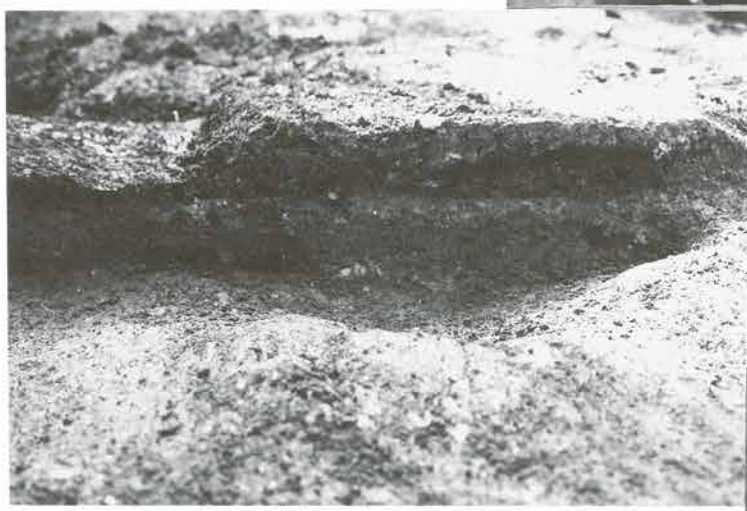
▲第２面上かわらけ出土状況(北から)

▲第２面上二彩盤出土状況(東から)

▲第２面土壙５(北から)

▲Ⅰ区第３面全景（東から）

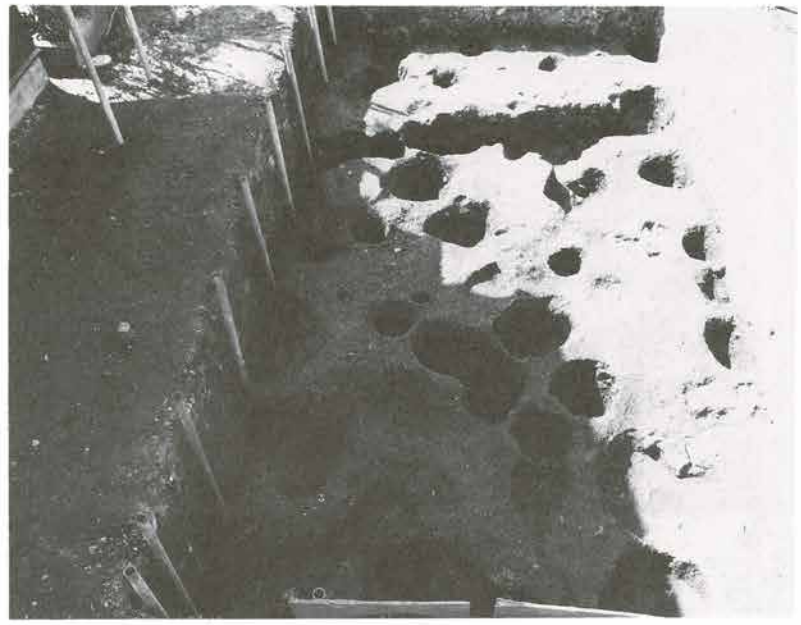
▼Ⅱ区第３面全景（東から）



▲第３面土壙１土層堆積（東から）

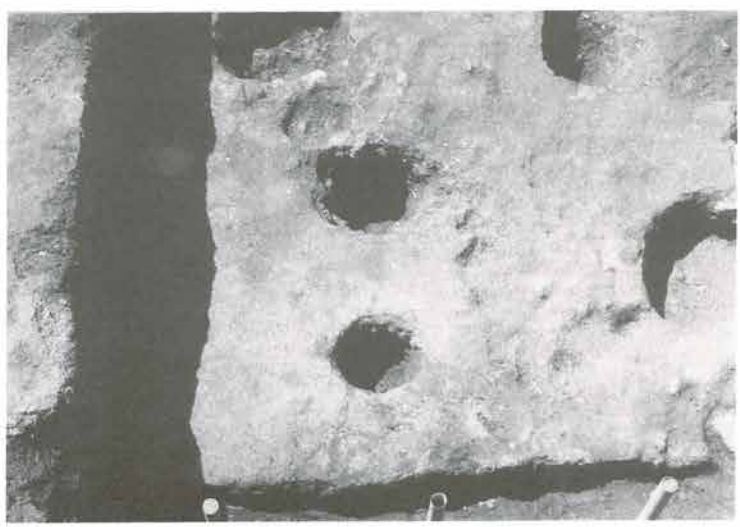
▼第３面 P30（東から）
石製品・かわらけ出土状況

図版６



▲Ⅰ区第４面全景（東から）

▲Ⅱ区第４面全景（東から）



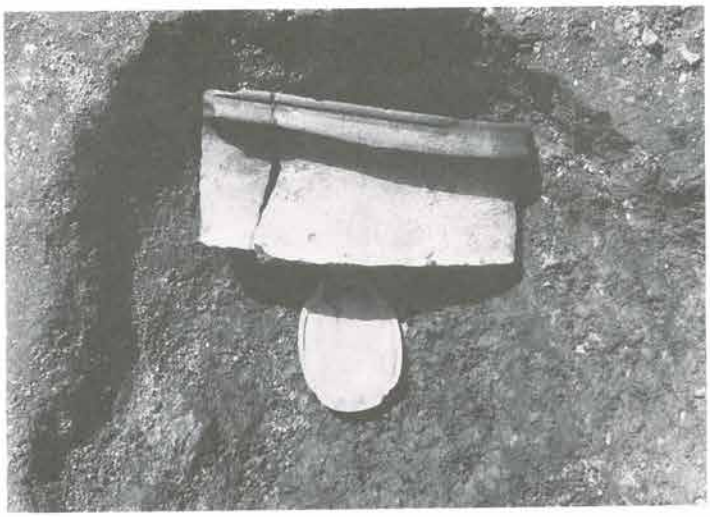
▲Ⅱ区第４面東南隅貝砂面（東から）

▼第４面柱穴列（南から）

▲第４面柱穴列(南から)

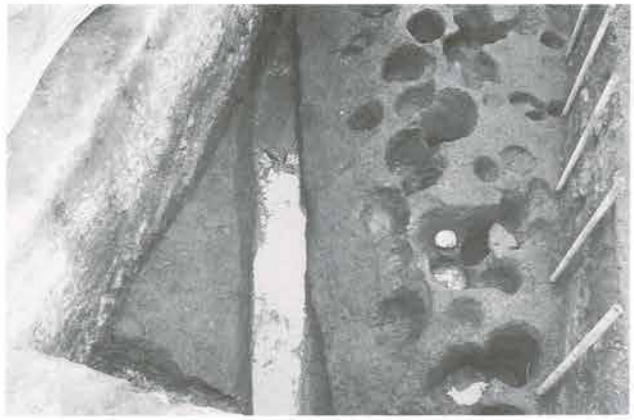
▲第４面 P49礎板(北から)

▲第４面 P42（北から）
巴珠文宇瓦出土状況



▲第４面 P46（東から）
常滑窯甕・硯出土状況

図版８



▲Ⅰ区第５A・B 面全景（西から）

▲第５A・B面溝２肩柱穴列（西から）

▲Ⅱ区第５A 面全景（東から）

▲Ⅱ区第５B 面全景（東から）

▲第５面溝２底（北から）
ワラ状植物繊維出土状況

▲第５B 面溝２（南から）
漆器皿出土状況

▲Ⅰ区中世地山トレンチ（北から）
地山中より焼土・炭面の拡がりを検出

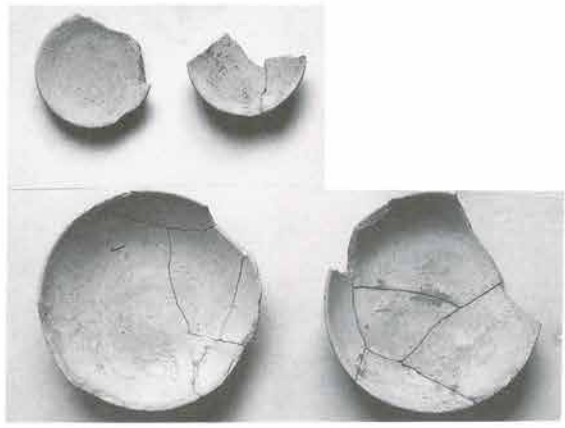
▲Ⅰ区調査区南壁土層堆積

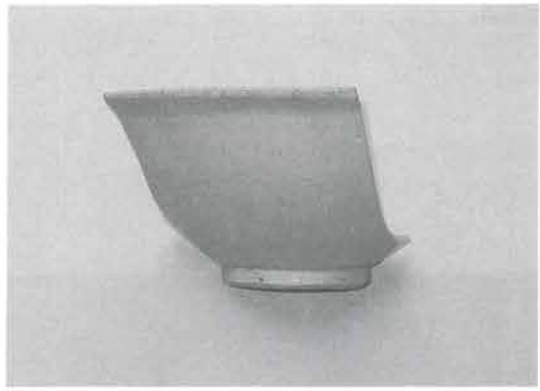
▲Ⅰ区調査区西壁土層堆積

▲Ⅰ区調査区北壁土層堆積

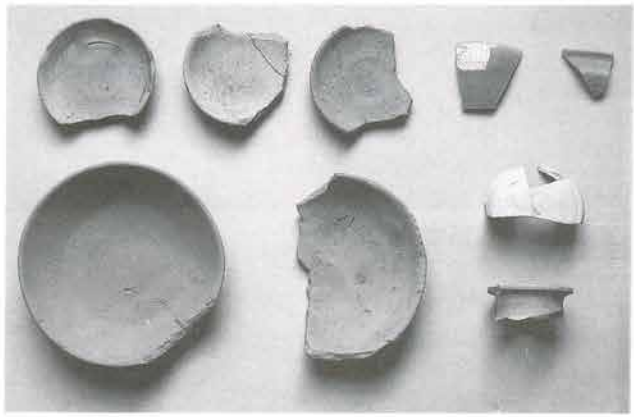
▲Ⅱ区調査区南西壁土層堆積

図版10

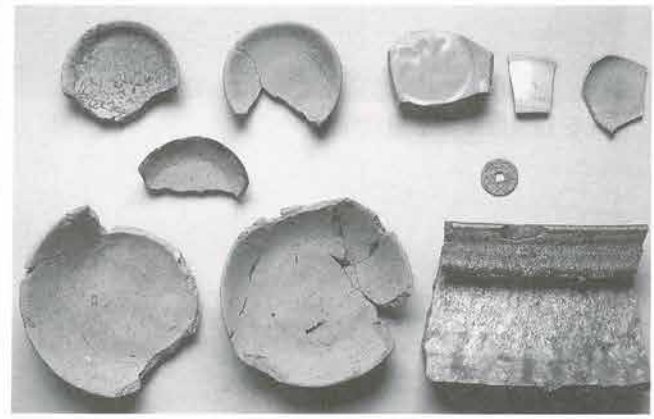




▲第１面土壙出土遺物

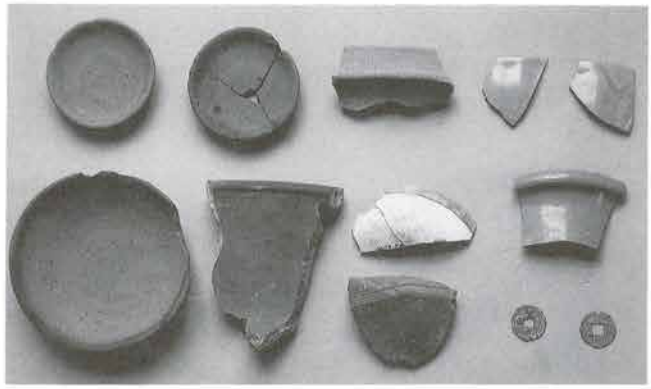


▲第１面柱穴出土遺物

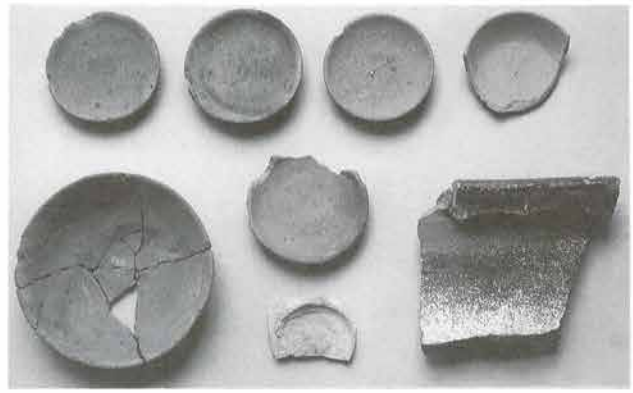


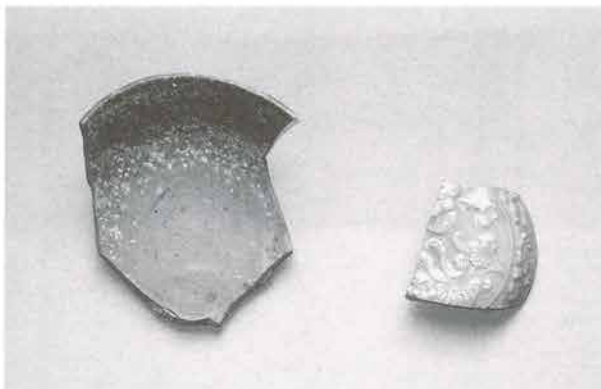
▲第１面包含層出土遺物

◀ 第２面土壙出土遺物 ▶



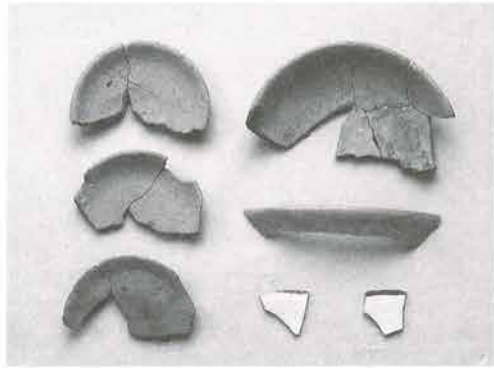
▲第２面柱穴出土遺物



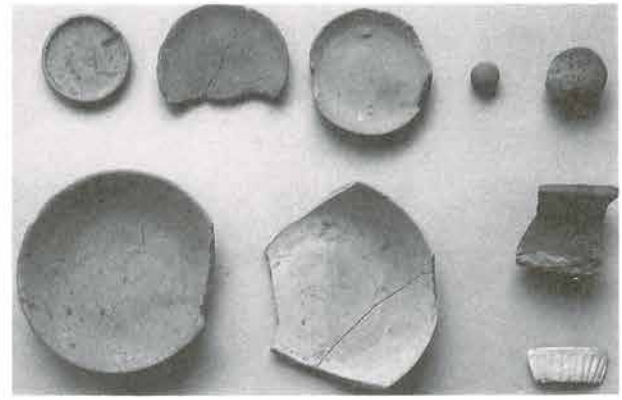


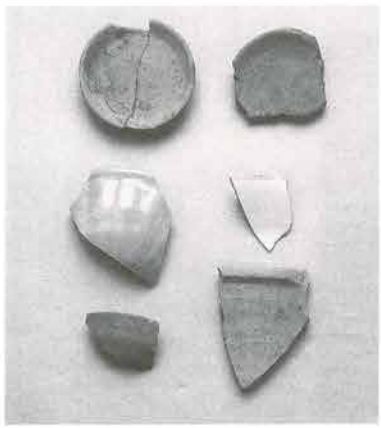
▲第１面下～２面出土遺物

図版12



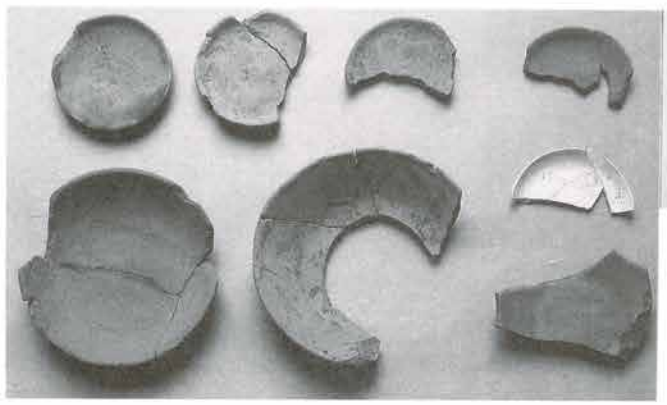
▲第３面土壙出土遺物

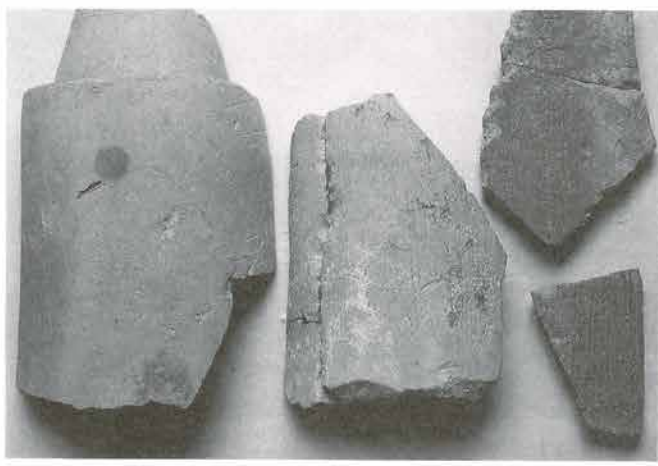




▲第２面下～３面出土遺物

▲第３面柱穴出土遺物

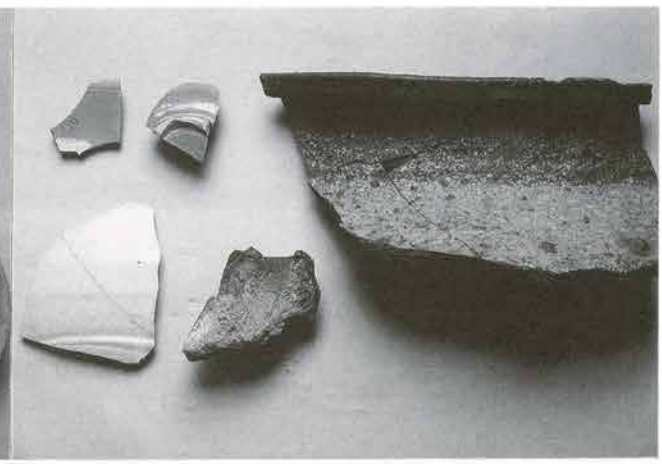




宇瓦の瓦当部製作法は、顎貼付技法による。

▲第４面柱穴出土遺物

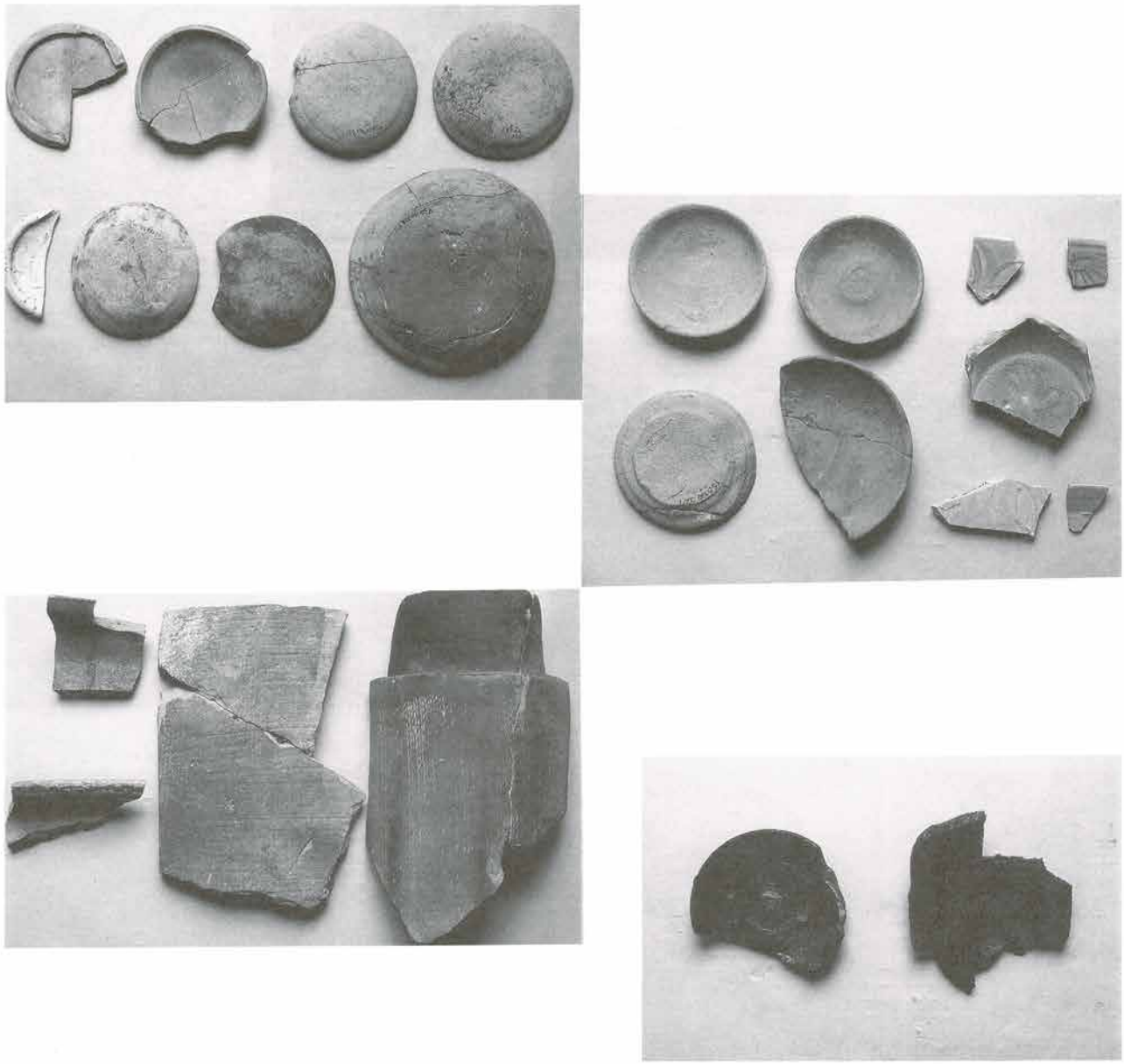
▲第３面下～４面出土遺物



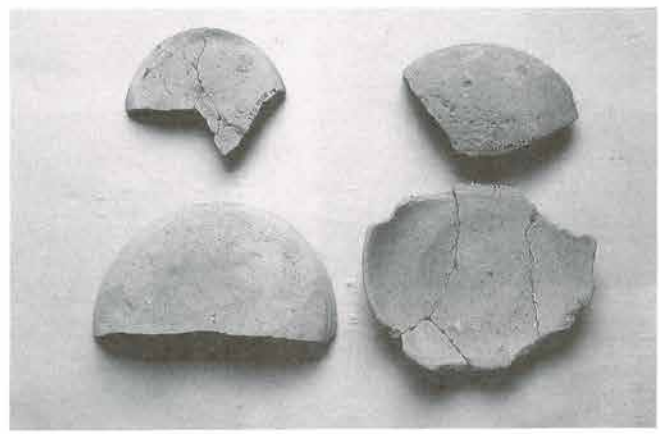
▲第５A 面溝１出土遺物

▲第４面下～５面出土遺物

図版14



▲第５Ｂ面溝２出土遺物



▲中世地山トレンチ出土遺物

しせきつるがおかはちまんぐうけいだい

史跡鶴岡八幡宮境内

雪ノ下ニ丁目39番３地点

例　言

1．本書は、鎌倉市雪ノ下二丁目39番３に所在する史跡鶴岡八幡宮境内にあるやぐらの緊急調査発掘調査報告である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
調査期間は平成13年3月2日～同年3月7日にかけて実施され、調査対象面積は12㎡である。出土遺物は鎌倉市教育委員会が保管している。

3．調査の主体　　鎌倉市教育委員会
調査担当　　宮田眞（鎌倉考古学研究所・日本考古学協会会員）
調査員　　滝澤晶子・堀川浩通
調査補助員　　安達澄代

4．本書の遺構･遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図　1／80・1／40（遺構図の水糸高は海抜高を示す。）
遺物実測図　1／3・1／6

5．遺物実測図には次の記号が使用されている。
釉の限界線　――-――-―― 使用痕の範囲
調整の変化点―― ―― ―― 加工痕の範囲

6．本書の執筆・編集は滝澤晶子が行なった。

7．本書の図版作成及び写真撮影は次の者が分担した。
遺構図版　滝澤晶子
遺構写真　滝澤晶子

8．また、発掘調査に際して多大な御協力を頂いた施主に深く感謝の意を表する。

目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……340
第２章　調査経過・グリッド配置……340
第３章　検出遺構……342
第４章　まとめ……342

図　版　目　次

図１　遺跡周辺図……338
図２　遺跡位置図……339
図３　グリッド配置図……340
図４　やぐら実測図……341

写　真　目　次

PL.1　A. 調査地点（遠景）……343
　　B. 調査地点（遠景）
PL.2　A. やぐら北壁……344
　　B. やぐら西壁
PL.3　A. やぐら南壁……345
　　B. やぐら東壁
PL.4　A. やぐら羨道部天井……346
　　B. やぐら羨道部西壁
PL.5　A. やくら床面 Pit……347
　　B. やぐら床加工面

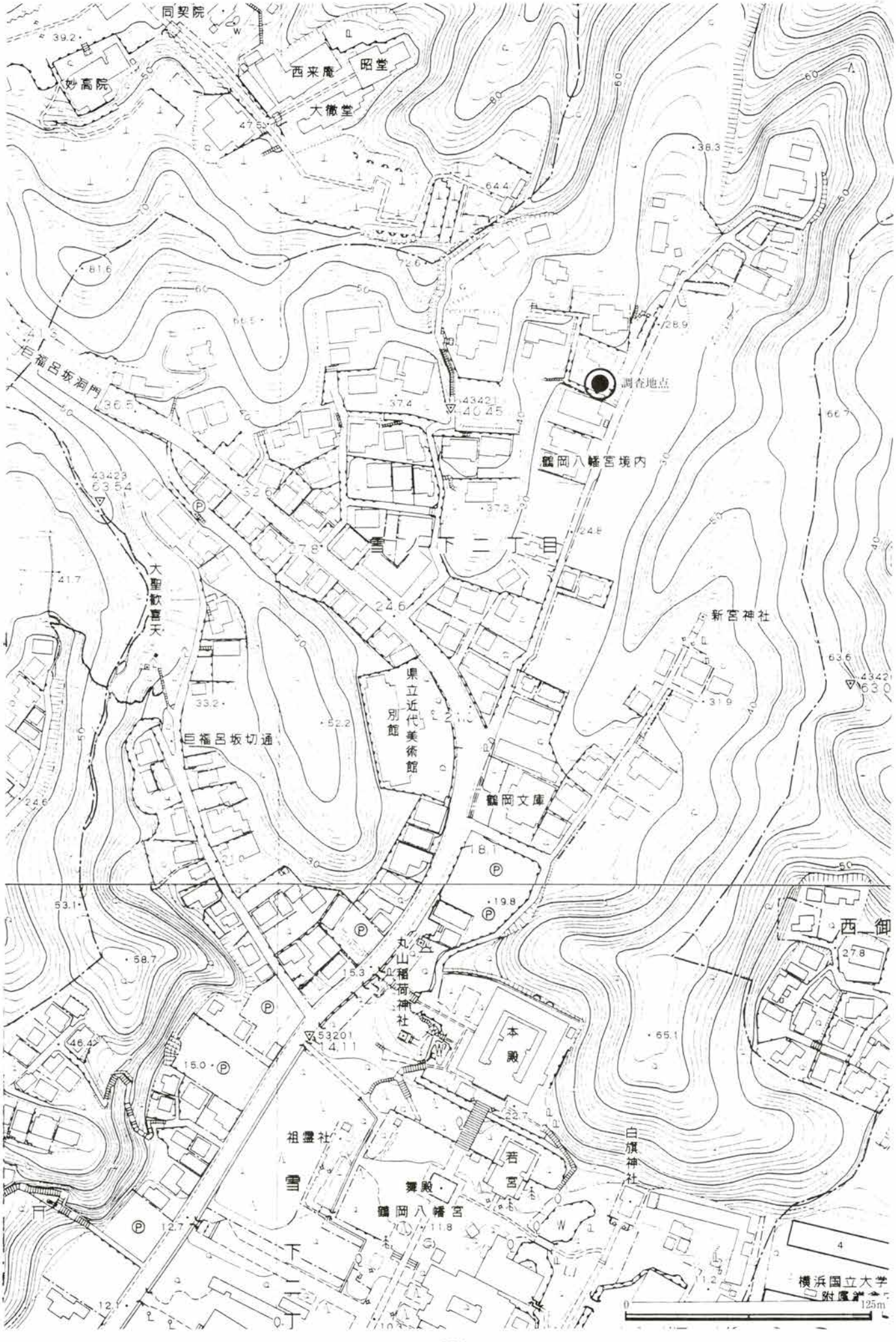

同契院
妙高院
西来庵
昭堂
大徹堂
調査地点
鶴岡八幡宮境内
雪ノ下二丁目
大聖歓喜天
巨福呂坂洞門
巨福呂坂切通
県立近代美術館
別館
鶴岡文庫
新宮神社
丸山稲荷神社
本殿
祖霊社
若宮
舞殿
鶴岡八幡宮
白旗神社
西御
雪ノ下一丁目
横浜国立大学
附属
0
125m

図1　遺跡周辺図

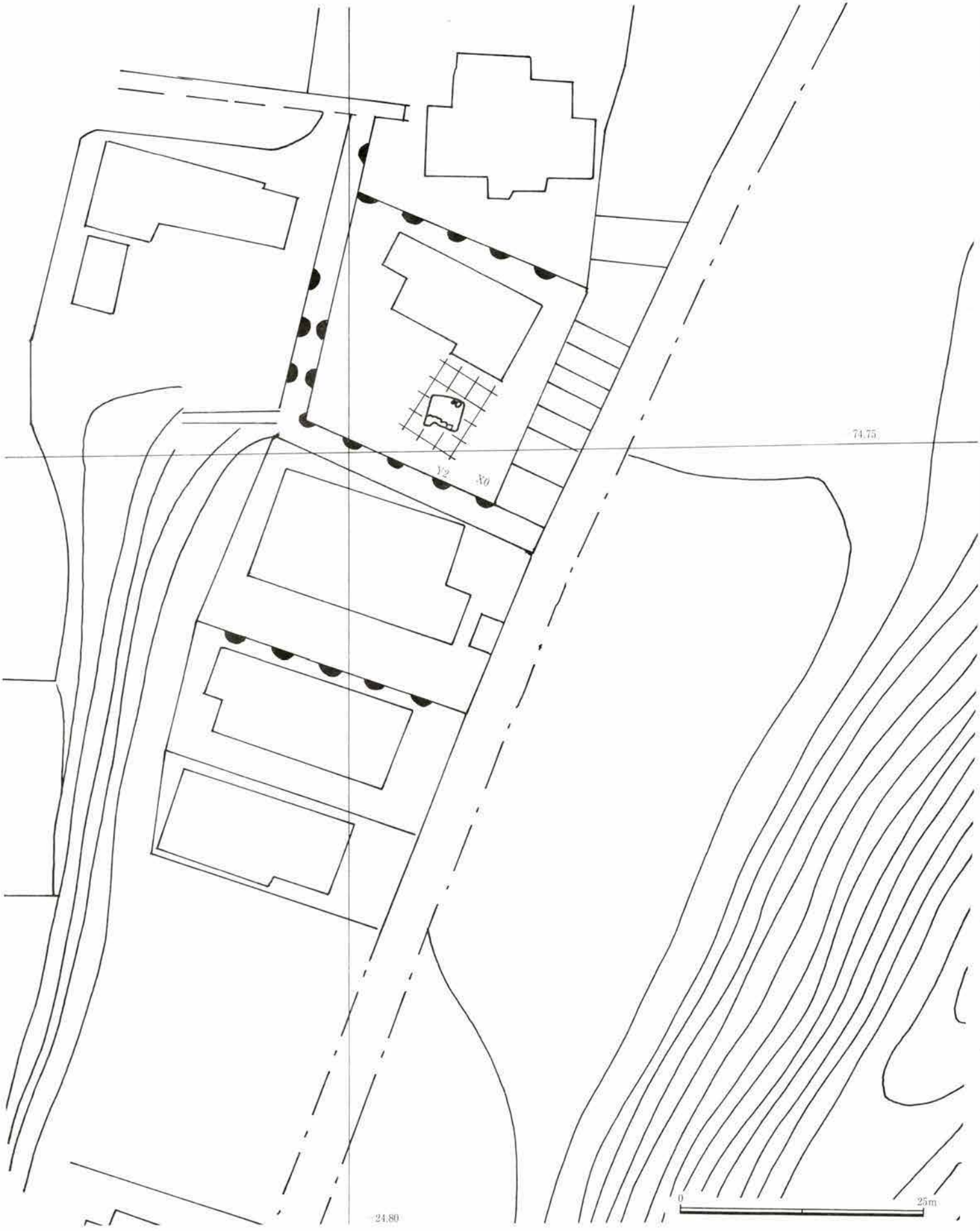


図２　遺跡位置図

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡は鶴岡八幡宮の西北裏、鎌倉から北鎌倉に抜ける巨福呂坂(主要地方道横浜　鎌倉線)の入口を北東に折れた谷戸内に位置するやぐらである。谷戸は細長く、南向きに開口している。

この谷戸は、鶴岡八幡宮本殿の北に位置する大臣山の背後にあたる。御谷(おやつ)と呼ばれ、北谷・東谷・西谷・南谷があり、二十五坊跡の中心地とされる。二十五坊跡とは、鶴岡八幡宮の西北にあたる地域一帯を指し、鎌倉時代初期(建久年間)から数の増減はあるものの、明治の神仏分離に到るまで鶴岡八幡宮の供僧坊があった地である。この地に昭和42年、市立授産所の建設が計画され、それに伴い、埋蔵文化財の事前発掘調査が行なわれた。その結果、鎌倉時代初期以降明治初年に至るまでの供僧坊の跡が良好に埋蔵されている事が確認された。その後、昭和42年4月24日に国指定史跡に指定され、今日に至っている。

今回調査を行なったやぐらはその御谷内、国指定史跡「鶴岡八幡宮境内」に所在している。

第２章　調査経過・グリッド配置

調査経過

調査は工事の過程で、偶然にやぐらが発見された事から開始された。調査期間は平成13年(2001) 3月2日～3月7日である。やぐらは南面した崖の中腹に位置し、入口は土砂によって完全に塞がれていた。東手から工事していたところ、やぐら羨道部壁面に穴が開き発見に至った。

2001.3.2　　調査開始　土砂除去
2001.3.5　　清掃・写真撮影
2001.3.7　　測量・調査終了

グリッド配置(図2・3)

グリッドは任意のものを使用している。南北方向をｘ軸、東西方向をｙ軸とし、北から南及び、東から西に＋方向となる。ｙ軸は磁北に対して59°52′00″西に傾く。グリッドと国土座標との位置関係は図2に示した通りである。また、国土座標(-74.75km，-24.80km)ラインを図示した。グリッド(0，0)＝国土座標(－74.751.059，-24.837.441)である。

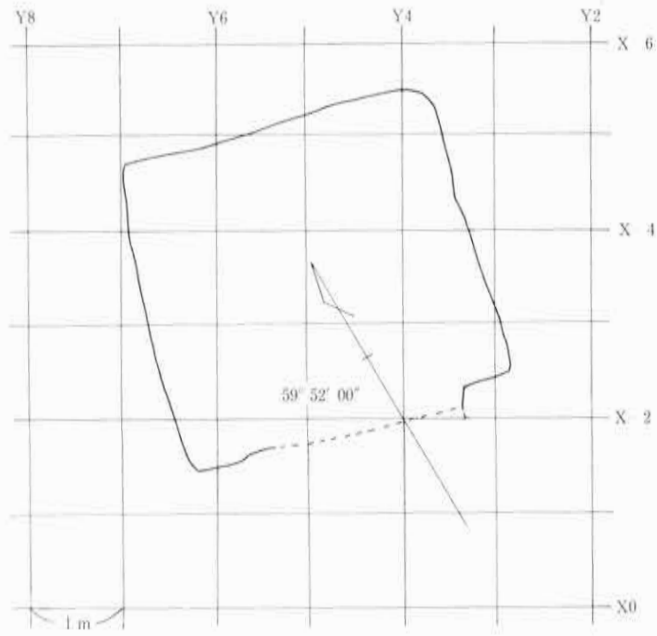


図３　グリッド配置

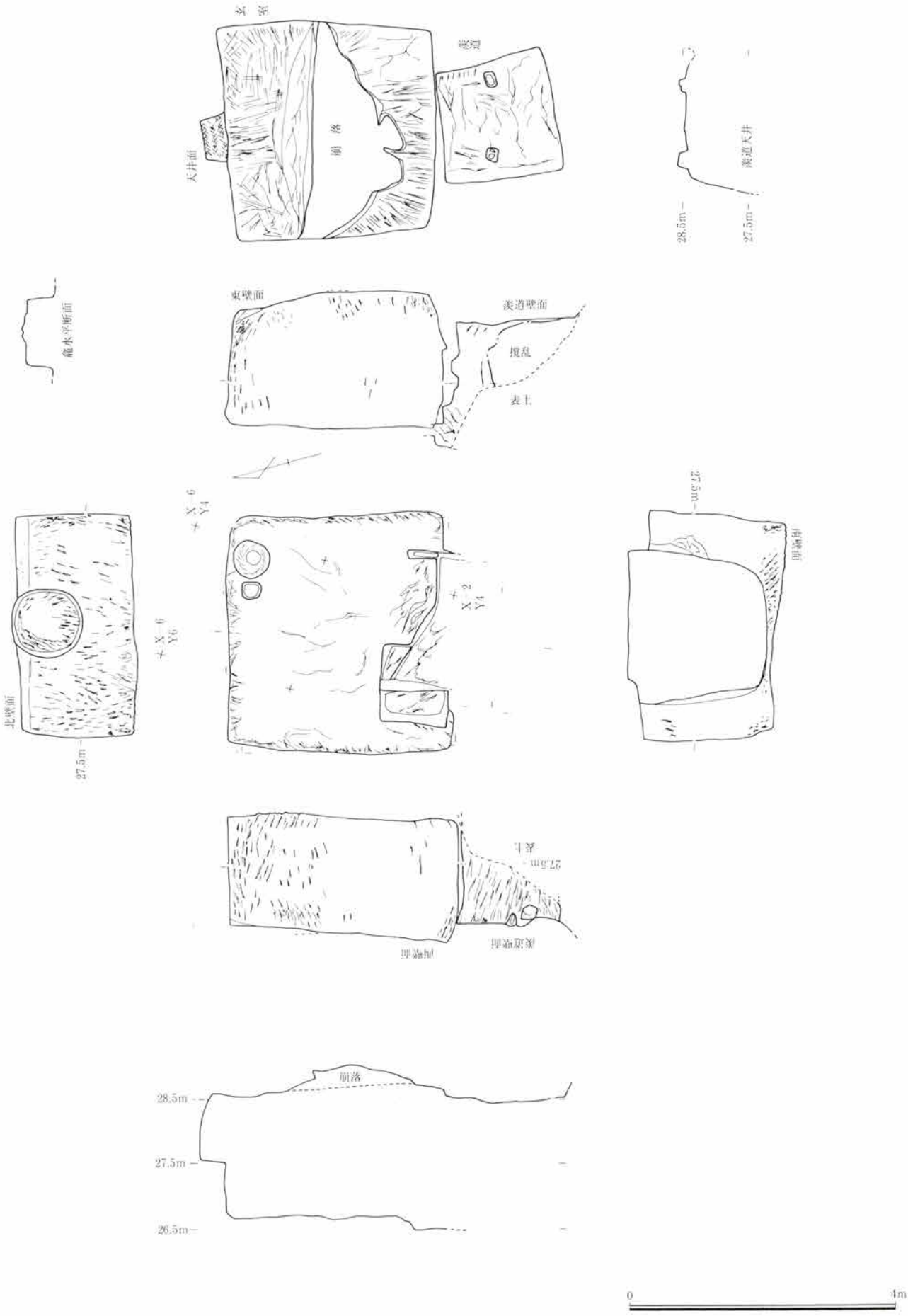

玄室
羨道
天井面
崩落
羨道天井
28.5m
27.5m
東壁面
羨道壁面
攪乱
表土
龕水平断面
北壁面
27.5m
X-6
Y4
X-6
Y6
X-2
Y4
27.5m
崩落
28.5m
27.5m
26.5m
0
4m

図4　やぐら実測図

第３章　検出遺構

やぐらは谷戸筋に対して、直行する枝道の南向き斜面に作られている。床面は現地表より1.5ｍほど低く、入口及び羨道部は完全に土砂で埋まっていた。やぐら内部には工事の過程で開いた羨道部東壁の穴から出入りする事になった。

やぐらの床面には2～3cm程度の現代のごみを含んだ土が堆積していた。調査は堆積土を除去する事から始められたが、羨道部には埋土が迫ってきており、調査は玄室を中心に行なわれた。

やぐらの床面の海抜は26.7ｍ前後、軸線方向はＮ－16°－Ｅである。南向きに開口している。

やぐらの玄室の床面の平面形は奥行き340cm、幅350cmを測り、ほぼ正方形を呈す。入口付近の床面は1段低くなっている。天井までの高さは一部崩落しているが、遺存状態のよいところで200cm前後を測る。床面北東隅にはPitがあく。平面形は円形を呈し、直径は56cm、深さは30cmを測る。そのすぐ西隣に方形の窪みがある。1辺が20cm、深さが4cmを測るごく浅いものである。ただし、いずれもやぐら造営時のものかどうかは疑わしい。

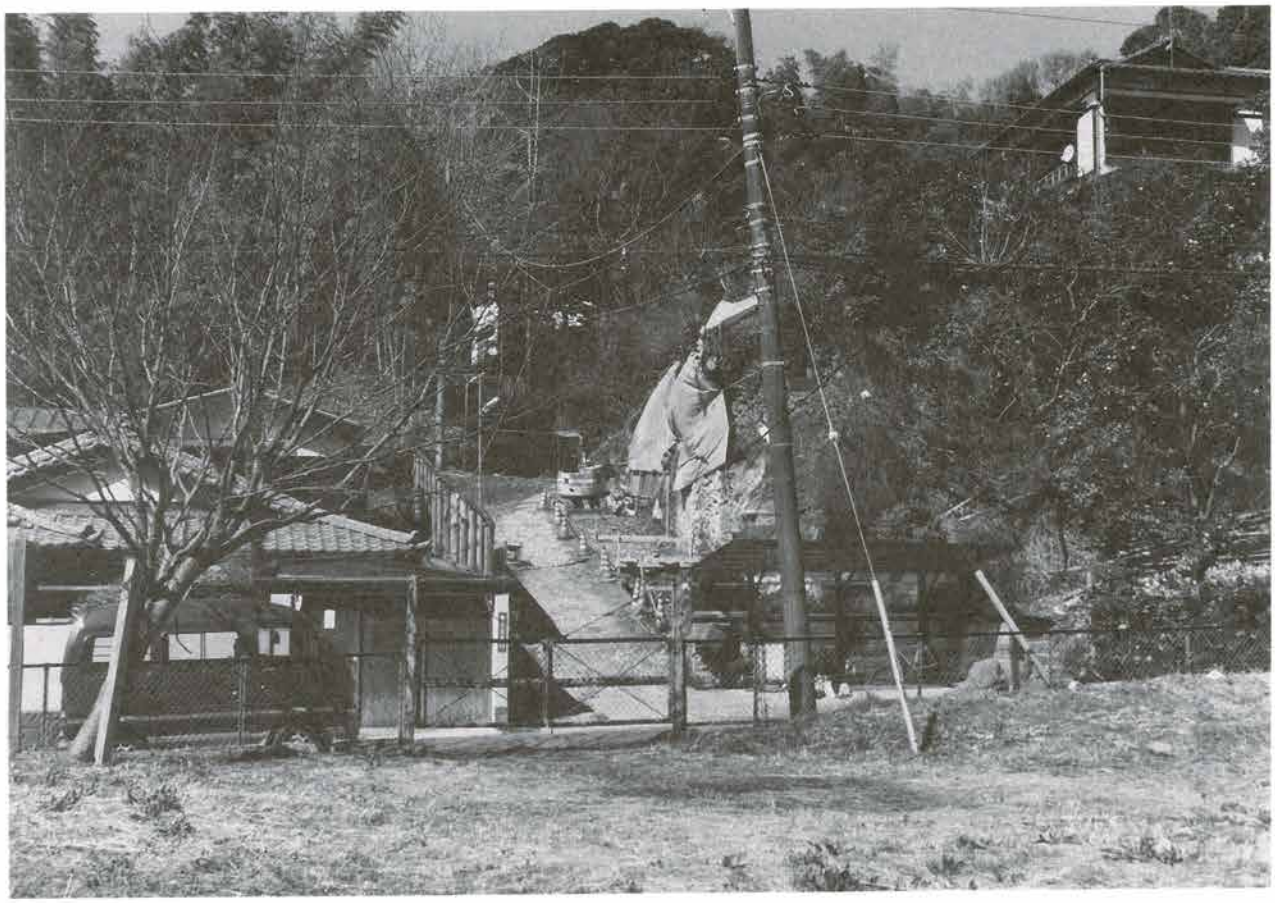
玄室奥壁中央には円形の龕が穿たれる。直径は100cm、奥行きは40cmを測る。

羨道部天井には入口施設と思われる痕跡が認められる。天井中央両端にPitが2口穿たれる。Pitは共に、平面形は方形を呈し、芯々間の距離は115cmを測る。羨道西壁には天井近くに1辺が20cm程度を測るPitがあく。東壁は撹乱で失われてしまっていた。床面等のその他詳細は埋土のため調査できなかった。

なお、遺物は出土しなかった。

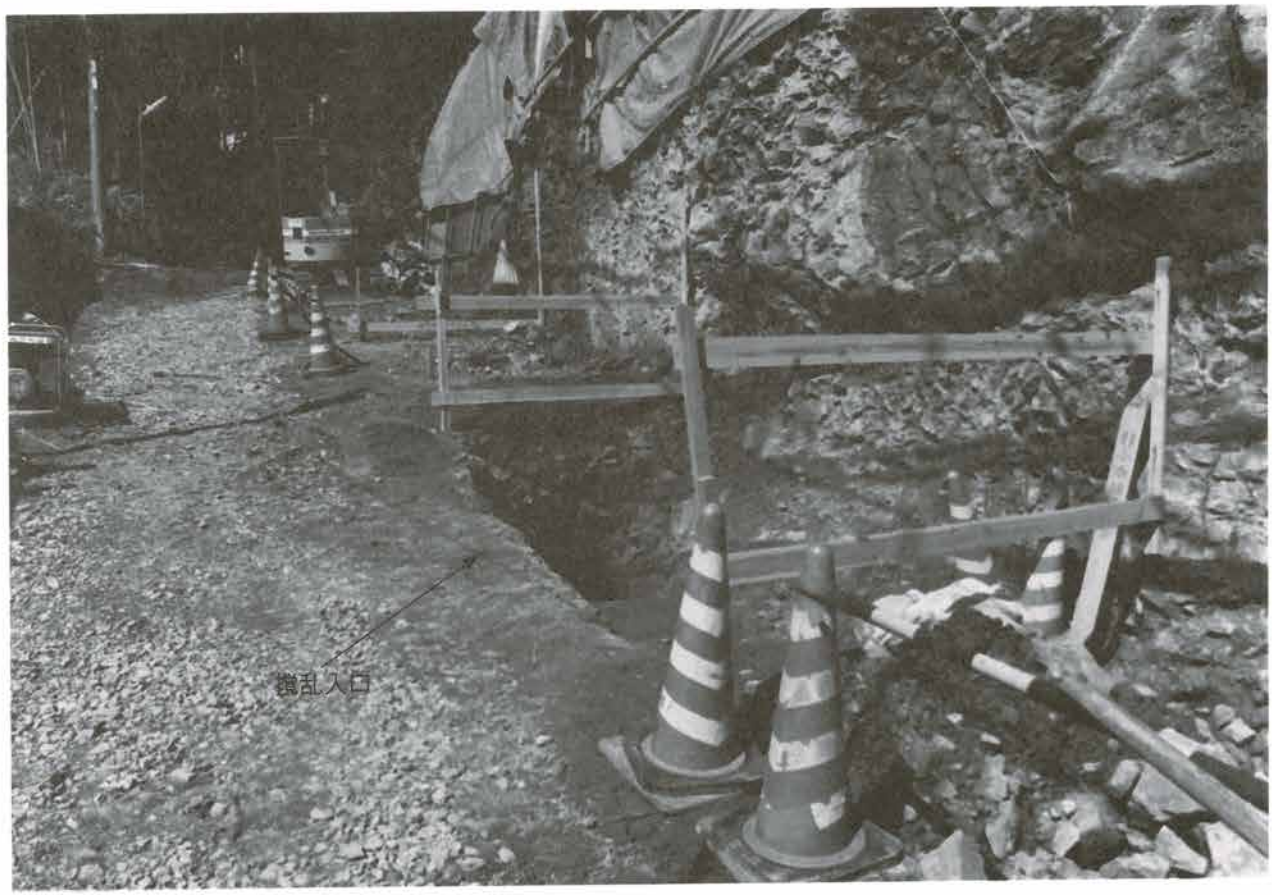
第４章　まとめ

今回の調査対象はやぐら1基に留まった。また、遺物が出土しなかったことから、その年代観は不明である。しかし、この地が二十五坊跡の御谷であることから、このやぐらは中世の二十五坊に関係するものといってよいであろう。また、この他に周囲には多数のやぐら及び遺跡があることは確実で、今後、何らかの調査で、明確にされていくであろう事に期待する。

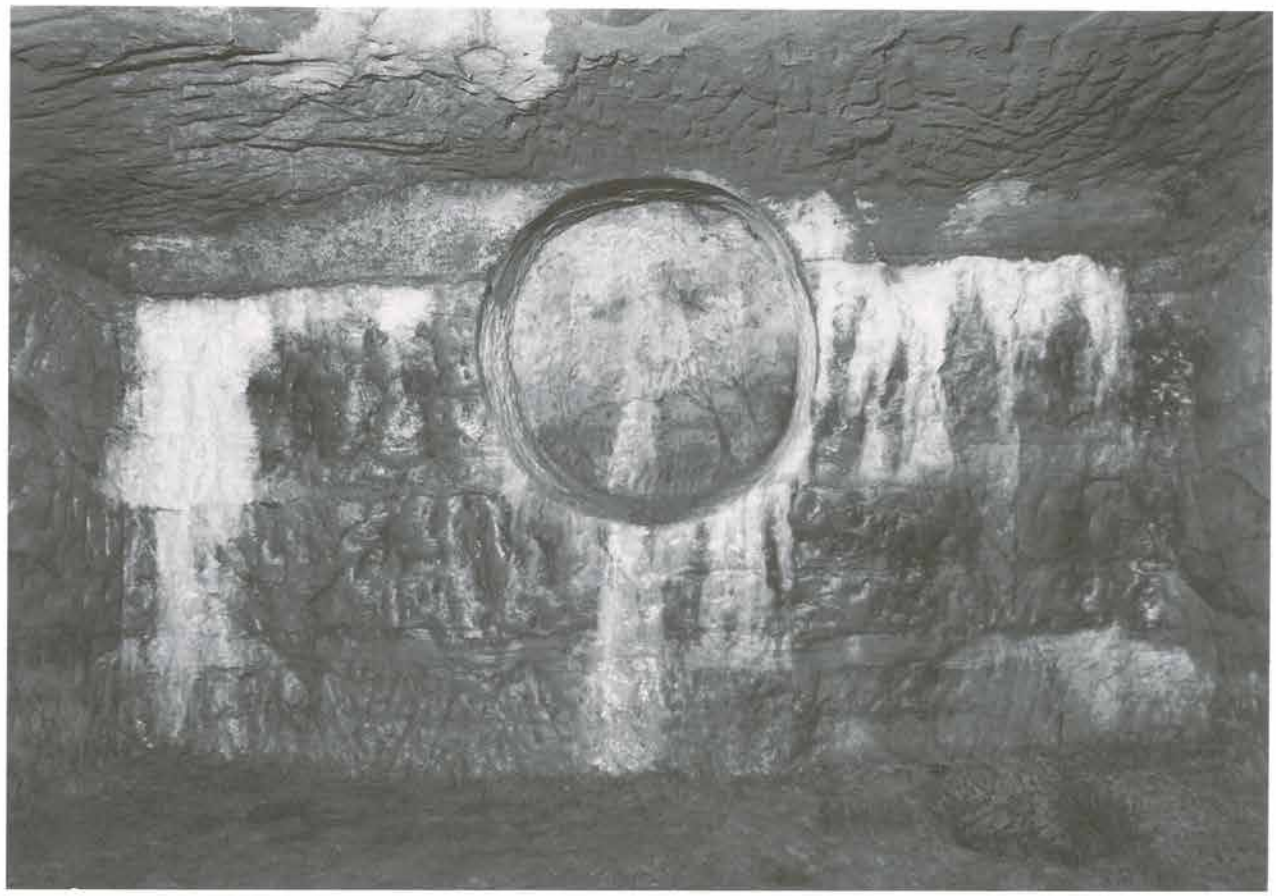


▲A．調査区地点(遠景)

▼B．調査地点(近景)

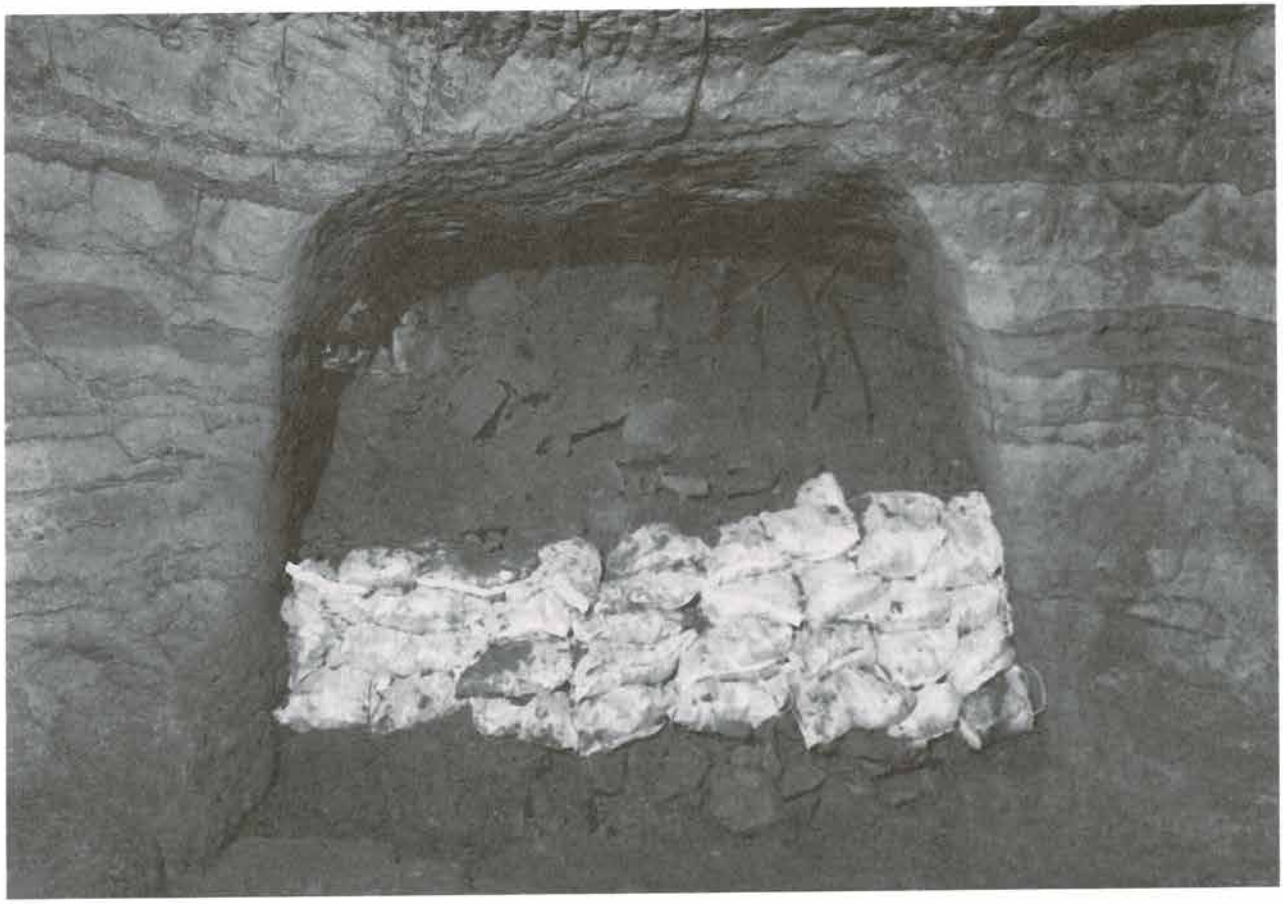


PL. 2



▲A．やぐら北壁

▼B．やぐら西壁



▲A．やぐら南壁

▼B．やぐら東壁

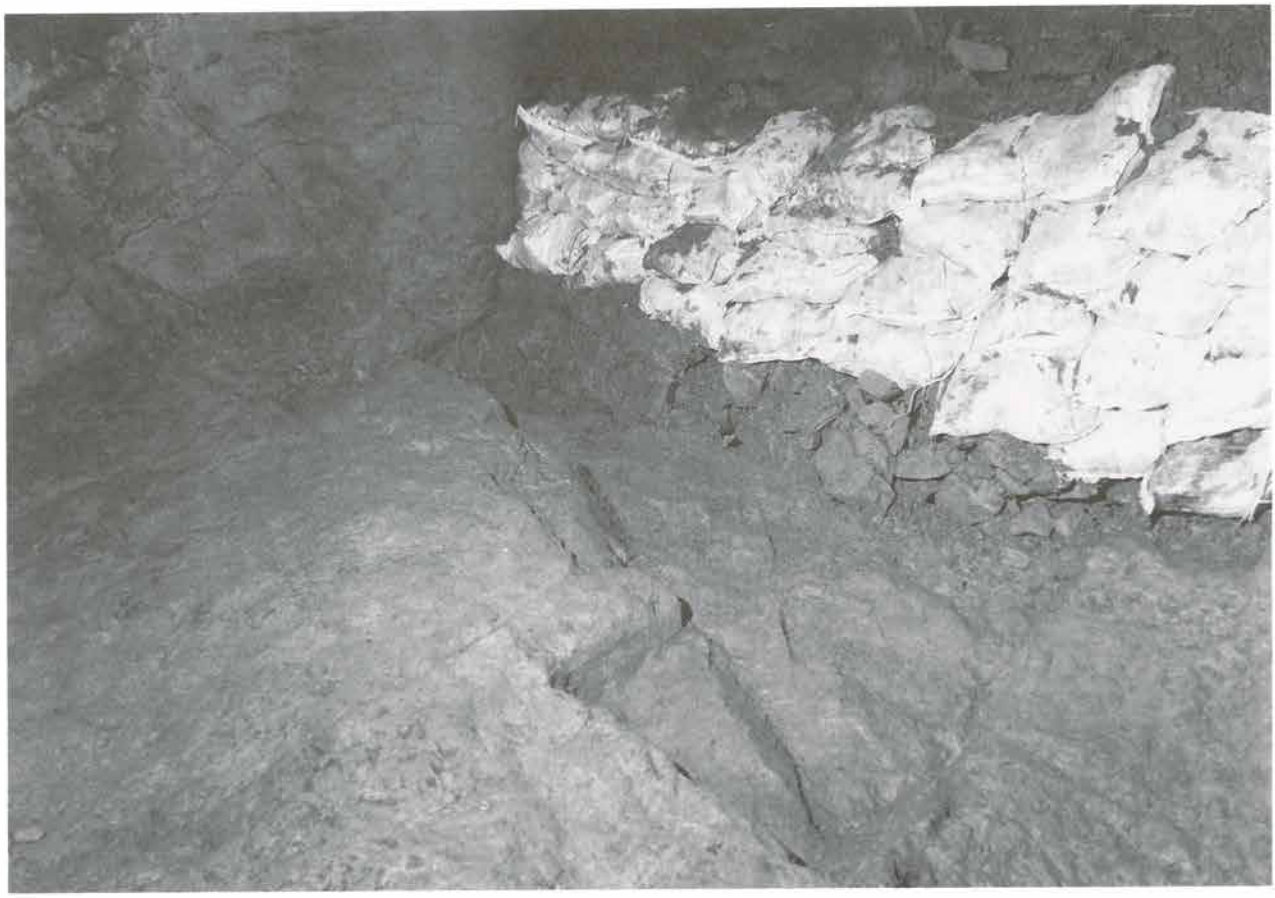
PL. 4

▲A．やぐら羨道部天井

▼B．やぐら羨道部西壁

▲A．やぐら床面 Pit

▼B．やぐら床加工面



なごえがやつ

名越ヶ谷遺跡(No.231)

大町三丁目2356番10地点

例　言

1．本報は鎌倉市大町三丁目2356番10地点に所在する個人専用住宅の新築に先だち行われた、名越ヶ谷遺跡(県遺跡台帳№231)の発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は平成13年５月６日から同年13年５月21日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3．本報使用の遺構図及び遺物実測図・観察表は調査員が分担し、原稿執筆・編集は福田が行った。
4．本報に使用した遺構全景写真・個別遺構写真・出土遺物写真は福田が撮影を行った。
5．発掘調査・整理の体制は以下の通りである。
　主任調査員　福田　誠(鎌倉市教育委員会嘱託)
　調　査　員　菊川　泉　神山晶子　須佐仁和　早坂伸市　本城　裕
　調査補助員　久保田裕美　栂岡渓音　古田土俊一　鈴村真理子　長友純子
　作　業　員　(社)鎌倉市シルバー人材センター
6．発掘調査資料(記録図面・写真・出土遺物)は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 352
第２章　調査の経過と層序 …… 354
第３章　検出した遺構と遺物 …… 354
第４章　まとめ …… 356

図１　遺跡位置図 …… 352
図２　周辺の調査地点 …… 353
図３　グリッド設定図 …… 355
図４　名越ヶ谷遺跡（大町三丁目2356番３地点）との合成図 …… 356
図５　平面図及び土層断面図 …… 357
図６　出土した遺物 …… 358
図７　出土した遺物 …… 359
図８　出土した遺物 …… 360
図９　出土した遺物 …… 361
図10　出土した遺物 …… 362
図11　出土した遺物 …… 363

表１　遺物観察表 …… 364

図版１　調査区全景 …… 367
図版２　セクション及び遺物出土状況 …… 368
図版３　出土した遺物 …… 369
図版４　出土した遺物 …… 370
図版５　出土した遺物 …… 371
図版６　出土した遺物 …… 372
図版７　出土した遺物 …… 373
図版８　出土した遺物 …… 374
図版９　出土した遺物 …… 375

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は相模湾に面した鎌倉の沖積平野を取り囲む標高100ｍ前後の丘陵の東方、名越ヶ谷の開口部に位置する。この谷は約600万年前の新生代第三紀に形成された凝灰砂岩と泥岩が侵食作用で削られ形作られたものである。縄文時代前期の海進期（約5,000～6,000年前）には、海面が現在より約10ｍ近く上昇し入り込んだ海水により鎌倉湾が形成され、現在の鶴岡八幡宮付近まで海岸線が迫っていたと考えられる。縄文時代後期の海後期（約4,000年前）よりしだいに平野部分の陸地化が進み、弥生時代（約2,000年前）にはさらに乾燥がすすみ、海岸線付近では堆積した砂によって砂丘が形成されていった。砂丘の背後（北側）にはラグーン（後背湿地）が形成され、旧市内を流れる最大の河川である滑川をはじめ逆川、二階堂川、扇川、佐助川などが流れ込んでいた。このころから砂丘の河川によって作られた自然堤防上に点々と人々が居住を始めたと考えられている。奈良時代には鎌倉郡の郡衙（郡役所）が置かれ、政治経済の重要な位置を占めていたと考えられる。平安期の鎌倉は、源頼義が石清水八幡宮を勧請したした元八幡宮、八幡太郎義家の生まれた甘縄の館、亀ヶ谷の頼朝の居館等の存在が知られ、源頼朝が鎌倉に入る1180年以前から源氏相伝の地であった。調査地点は大町三丁目2356番10地点に所在する。遺跡名の名越とは鎌倉の東南部一帯を指していたようで頼朝入府以前、名越は鎌倉の外であったと考えられている。鎌倉郷の東側にあった荏草郷の内にあり頼朝入府以降、鎌倉に併合されていったものと思われる。名越ヶ谷の南には、後に整備される名越切通しを経て三浦さらに上総へ通じる幹線（旧東海道）が通り交通の要所、鎌倉の出入り口防御の要として重要な位置を果たしていたと考えられる。入り組んだ名

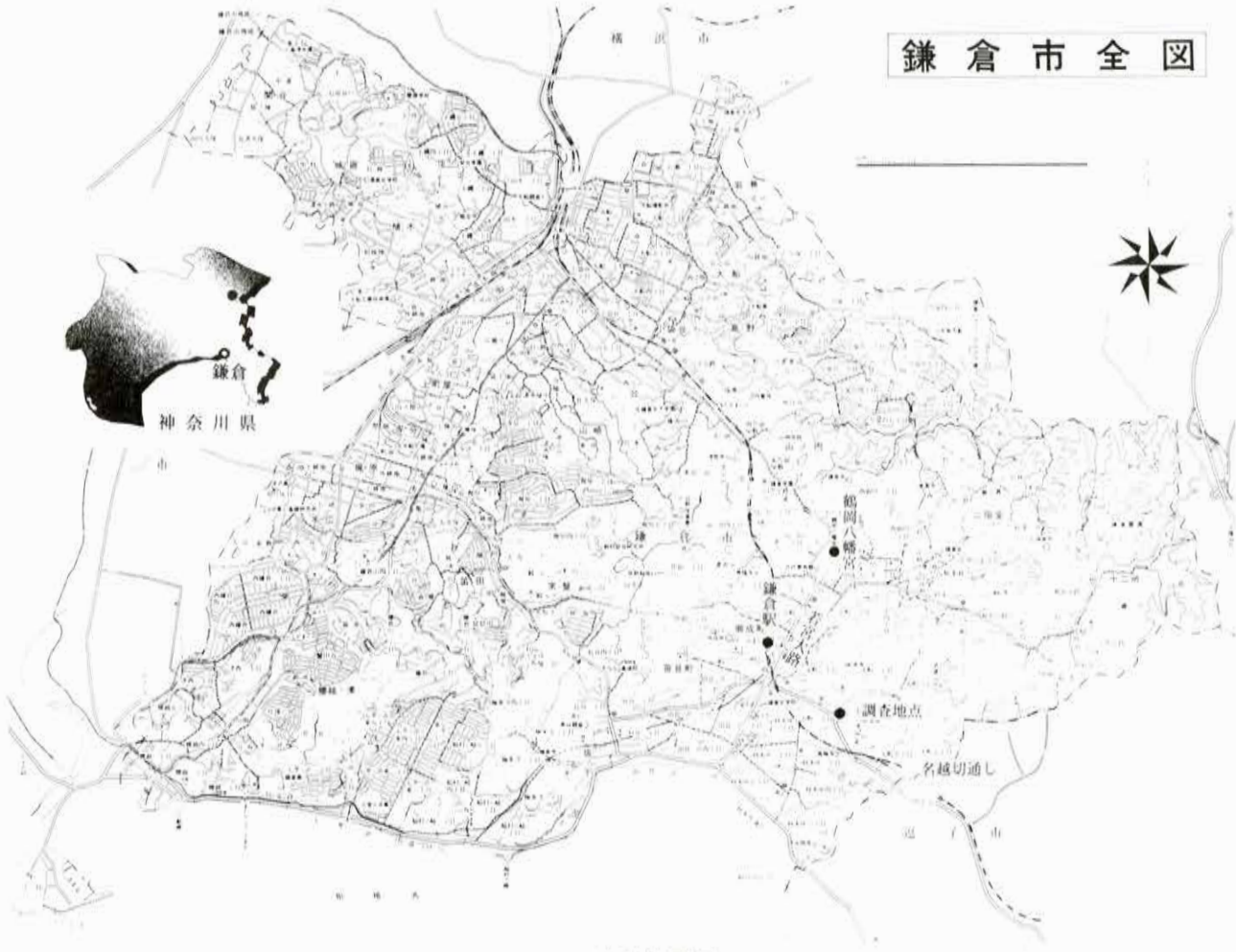


図１　遺跡位置図

越ヶ谷にはいくつかの支谷があり、その内の名越ヶ谷遺跡、山王堂跡、釈迦堂口には北条時政邸跡と推定される遺跡が存在している。このように谷間奥には枝分かれした支谷が開け、釈迦堂の切通しを抜けると大倉から朝比奈へ抜けられる。このように重要な位置を占めていた名越は鎌倉時代初期から拓け、北条時政邸、名越北条氏の居館をはじめ多くの御家人たちが居住していたと思われる。

（福田　誠）

参考文献

『鎌倉廃寺事典』　貫達人・河副武胤編有隣堂　1980年

『鎌倉市史』社寺編　鎌倉市教育委員会　吉川弘文館　1959年

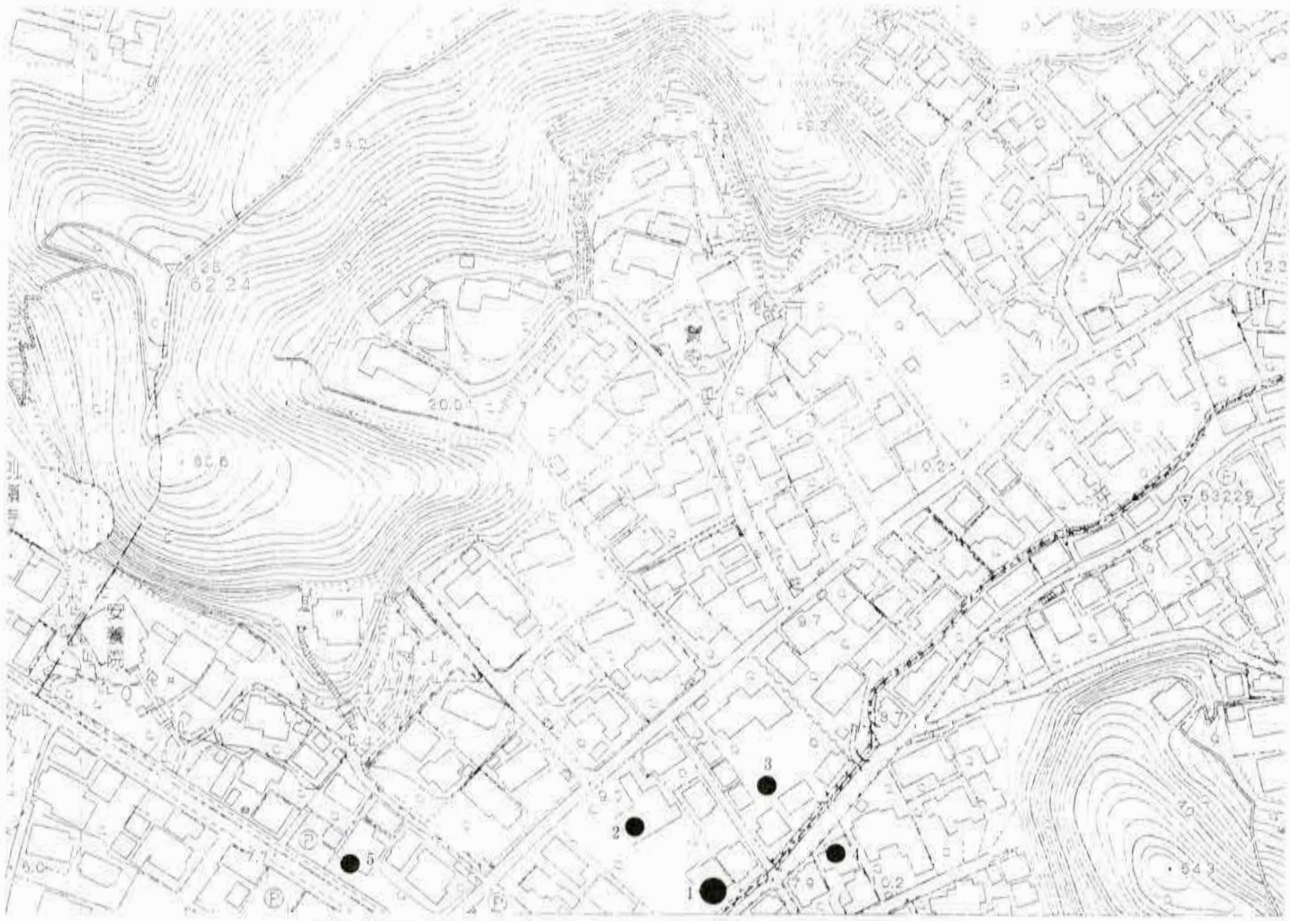
『としよりのはなし』鎌倉市教育委員会　1971年

「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第２分冊）』鎌倉市教育委員会　2002年3月

「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11（第１分冊）』鎌倉市教育委員会　1995年3月

「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11（第１分冊）』鎌倉市教育委員会　1995年3月

「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16（第２分冊）』鎌倉市教育委員会　2000年3月



1．名越ヶ谷遺跡　大町三丁目2356番10地点　　4．名越ヶ谷遺跡　大町四丁目1880番６地点
2．名越ヶ谷遺跡　大町三丁目2356番３地点　　5．名越ヶ谷遺跡　大町三丁目1217番１地点
3．名越ヶ谷遺跡　大町三丁目1826番９地点

図２　周辺の調査地点

第２章　調査の経過と層序

本遺跡の発掘調査は、平成13年５月６日から表土掘削及び機材の搬入を開始し、同年５月21日まで行った。周辺で行なわれた発掘調査結果を基に、重機で表土を約250～260cm掘り下げ第１面を検出した。グリッドは、建築予定範囲の東西軸方向にあわせて設定した。

調査地の在する住宅地の造成に先立って行われた取り付け道路部分の調査（大町三丁目2356番３地点）地点の東端より東南におよそ15m離れている。グリットは市内４級基準点の内DO11079（X＝-76,525.082 Y＝-24,813.416）と、DO11080（X＝-76,487.835 Y＝-24,772.307）を基準に、調査基準原点１（X＝-76,495.452 Y＝-24,806.609 Z＝9.044m）、原点２（X＝-76,505.442 Y＝-24,799.146）を設定したものである。

調査中に使用した仮原点の海抜は9.044mである。東西グリッドラインより北に37°　49′　19″が真北である。調査はまず現地表から表土を重機で掘削し、排土の大部分は掘削時に場外搬出した。調査中の発生土は周囲に山積みにした。調査地は南に向かって開口する名越ヶ谷の谷口あたりに位置し、調査地の東脇には逆川が谷の北奥より南に向かい流れ出る。調査区の東端では第１面が表土から約280cmの深さになり逆川の水面がほぼ同じであった。北壁面を利用して土層の堆積状況を観察した結果、この検出した第１面は僅かに谷の中央（西）に向かって下る。そして地表から第１面まではすべて近世の盛り土であることが確認された。この下で２時期にわたる土層が認められたがその多くが逆川の氾濫原と考えられた。５月21日に埋め戻しおよび器材の搬出も含め、全ての調査を終了した。検出した遺構・遺物の詳細は次章に譲る。

第３章　検出した遺構と遺物

地表下約280cm（海抜6.2m）で検出した面を第１面とした。西側に向かって落ち込む斜面堆積で、灰色砂泥（１層）、灰色粘質土（２層）、砂利層（３層）からなる。調査地の東脇を北から南に流れ下る近世逆川の河川敷と考えられる。西方に約15m隣接して調査された名越ヶ谷遺跡（大町三丁目2356番３地点）で検出された第１面は海抜8.3mであった。。特に砂利層中には遺物が多く含まれている。水摩した中世遺物と共に染付（幕末～明治）、煙管吸口等が出土していることから第１面は幕末～明治時代の年代が与えられる。地表下約370cm（海抜5.3m）で貝殻混じり灰白色砂層の中世地山層（７層）を確認した。名越ヶ谷遺跡（大町三丁目2356番３地点）の地山面の高さは海抜7.6mであった。2.3mも低いことになる。第１面の下から中世地山までの堆積は黒灰色砂質土（４層）、暗茶灰色砂質土（５層）、灰色砂（６層）、粗い砂層などからなり、その多くは河川流路中の堆積または氾濫原と考えられる。

３層中出土の遺物は、かわらけ、青磁碗、白磁皿、黄釉鉄絵鉢、瀬戸、常滑、染付で、かわらけは手捏ねが２点出土している。概ね13世紀中～後半、14世紀前半に位置づけられる遺物が目立つが青磁、白磁などは割れ口の角が水摩して丸くなり染付皿が併せて出土していることから、遺物の大半は氾濫原で流されて二次堆積したものと考えられる。

３層の下、４層から中世地山層である７層までに出土した遺物は、銅製品、漆皿、かわらけ、常滑、瀬戸、手焙り、舶載磁器、瓦片、砥石、硯である。この４層から７層までの間に面はなくすべて流路ないしは氾濫原と考えられる。特に調査区西側では西に向かって南北に長い落ち込みが検出されている。

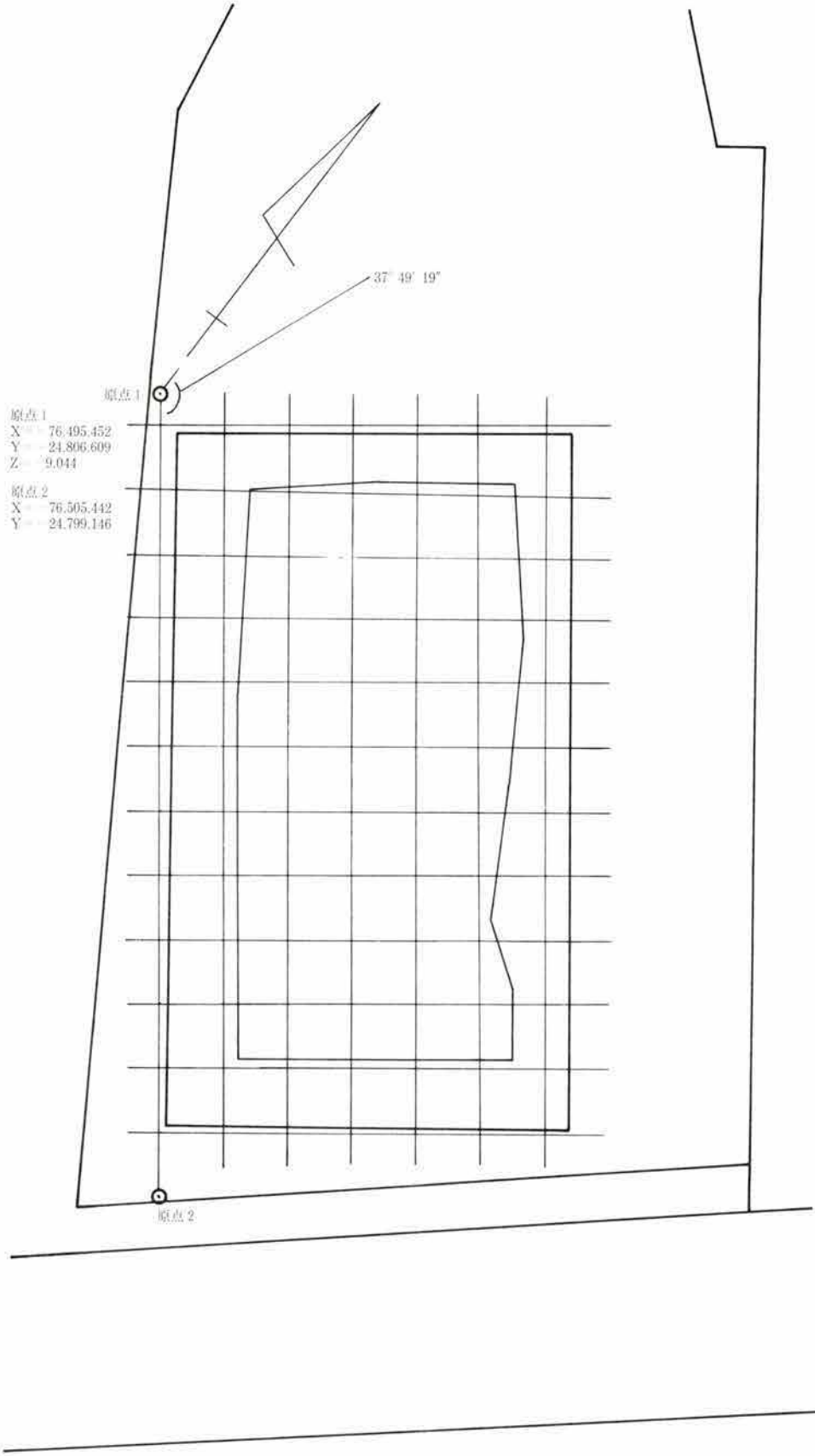

37° 49' 19"
原点 1
原点 1
X 76,495.452
Y 24,806.609
Z 9.044
原点 2
X 76,505.442
Y 24,799.146
原点 2

図３　グリッド設定図

第４章　まとめ

当遺跡は調査した範囲すべて河川の流路および氾濫原であった。隣接した大町三丁目2356番３地点遺跡では１面(14世糸己後半)、２面(13世紀末～14世紀前半)、３面(13世紀中葉～後半)が検出されている。３面は遺跡の最盛期で大形の礎板を有する掘立柱建物２棟を始め多くの柱穴、井戸が検出されていることから屋敷あるいは寺院の境内の可能性を指摘している。また建物遺構群の様相から西側が表、東側が裏手という推察がなされている。２面では建物は検出されずに砂利敷き面が検出され寺院の庭園の一部といった推察がなされた。２遺跡間の地山の高低差(2.1m)を考慮するならば相当な低地ということになる。

以上のことから当遺跡は屋敷あるいは寺院の境内の裏手、名越ヶ谷中央を北から南に流れ下る逆川西岸の河川敷といった様相が考えられる。

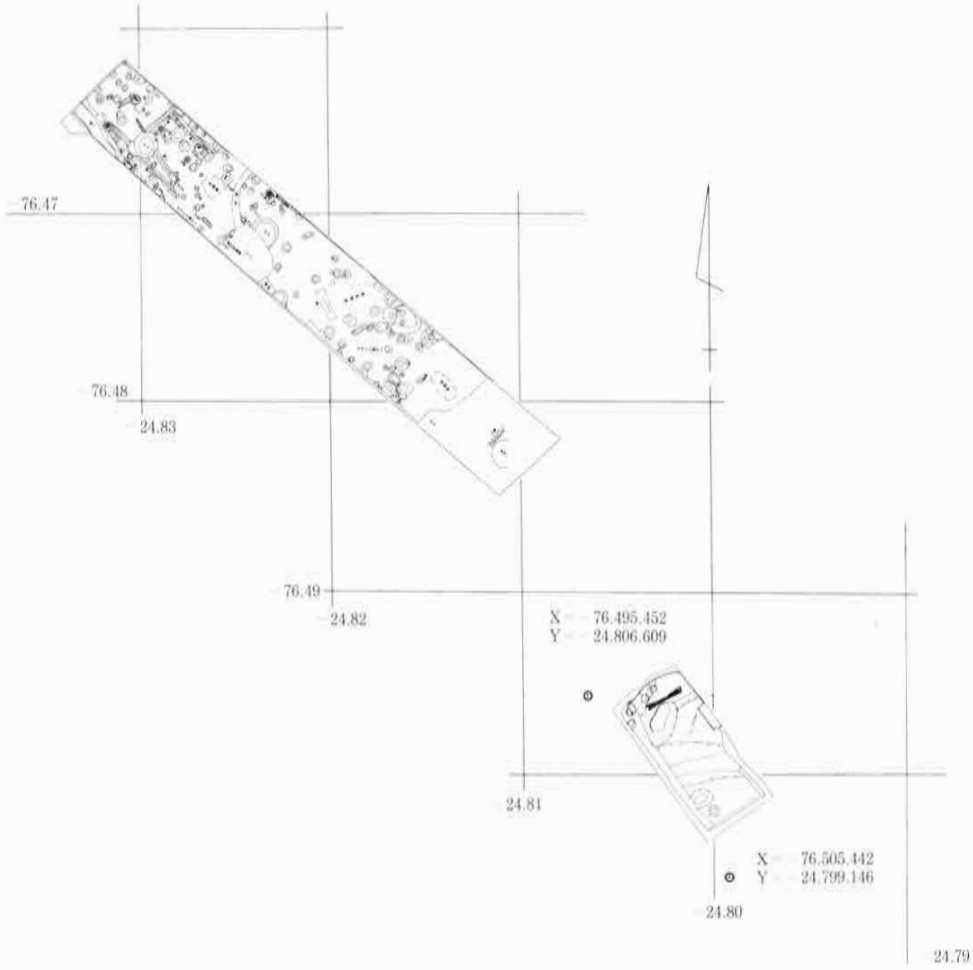
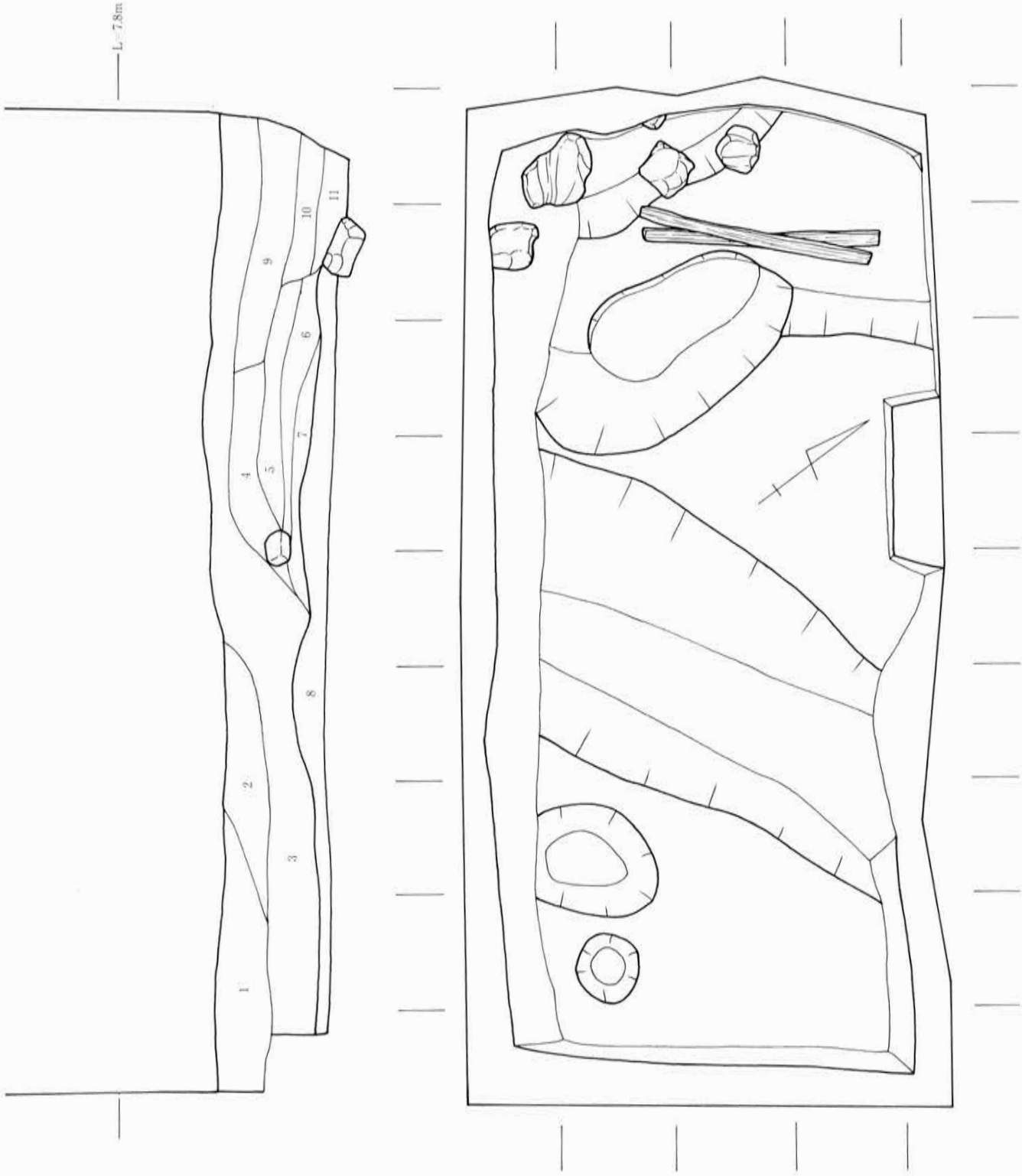


図４　名越ヶ谷遺跡(大町三丁目2356番３地点)との合成図



1．灰色砂泥（粘性あり）
2．灰色粘質土（1よりも砂っぽく細かい貝殻含む）
3．砂利層（粗い砂と5㎜～拳大の土丹を主体とする層
遺物が多く含まれ、中世遺物とともに染付、キセルの吸い口等江戸時代の遺物を服務
4．黒灰色砂質土
5．暗茶色砂質土（折敷片、箸等の木製品を多く含む）
6．灰色砂（かわらけ片、貝殻粒を含む）
7．黒灰色砂質土
8．灰白色砂層（貝殻多量に含む中世地山）
9．間層に砂を多く含む、拳大～人頭大の土丹層（砂は粗く水による堆積？）
10．灰色砂（多量の細かい土丹、かわらけ片等遺物を含む流路の中の堆積か？）
11．暗灰色砂（多量の細かい土丹、かわらけ片等遺物を含む流路の中の堆積か？）

S＝1/100

図5　平面図及び土層断面図

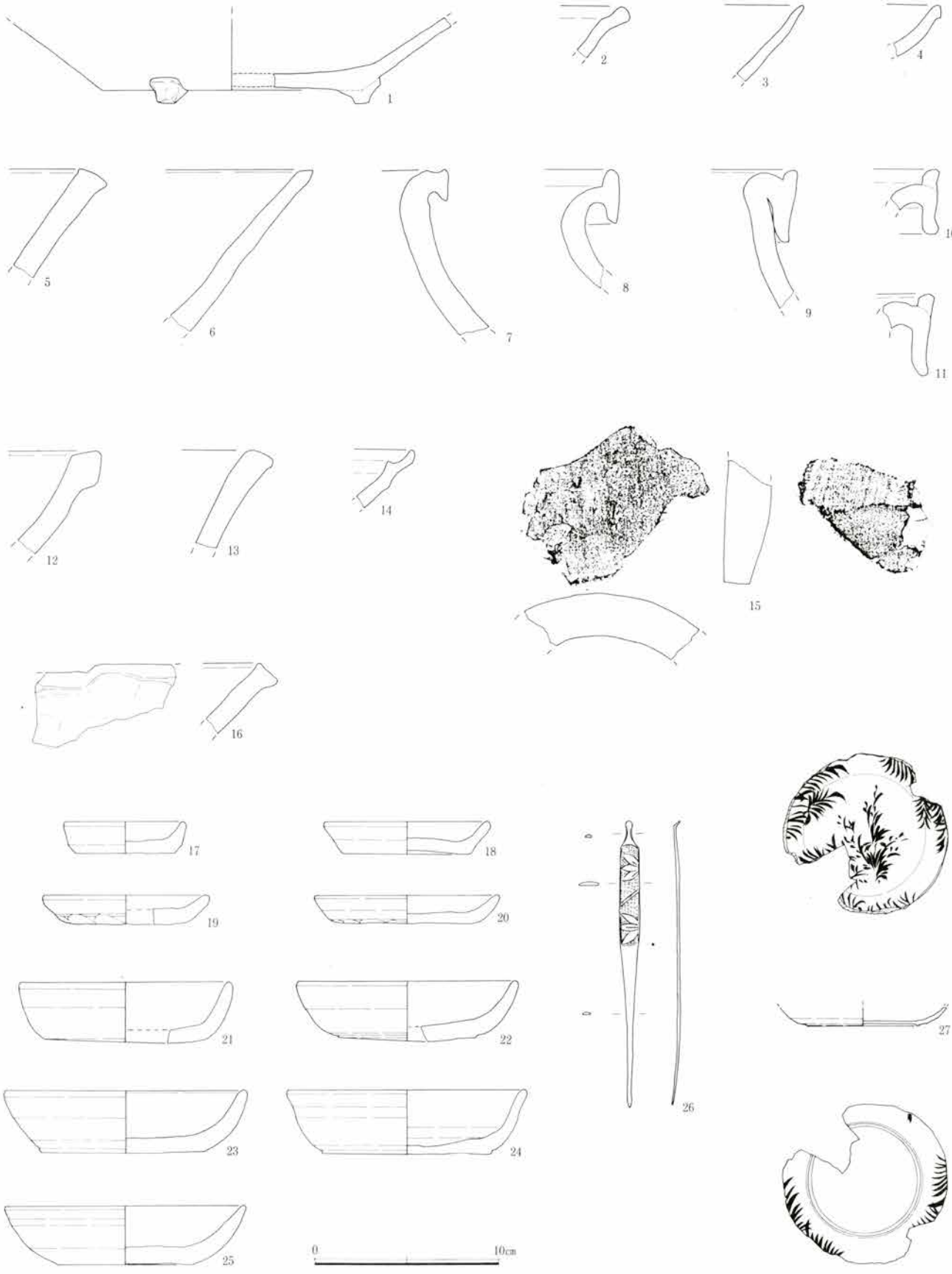

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

図6　出土した遺物

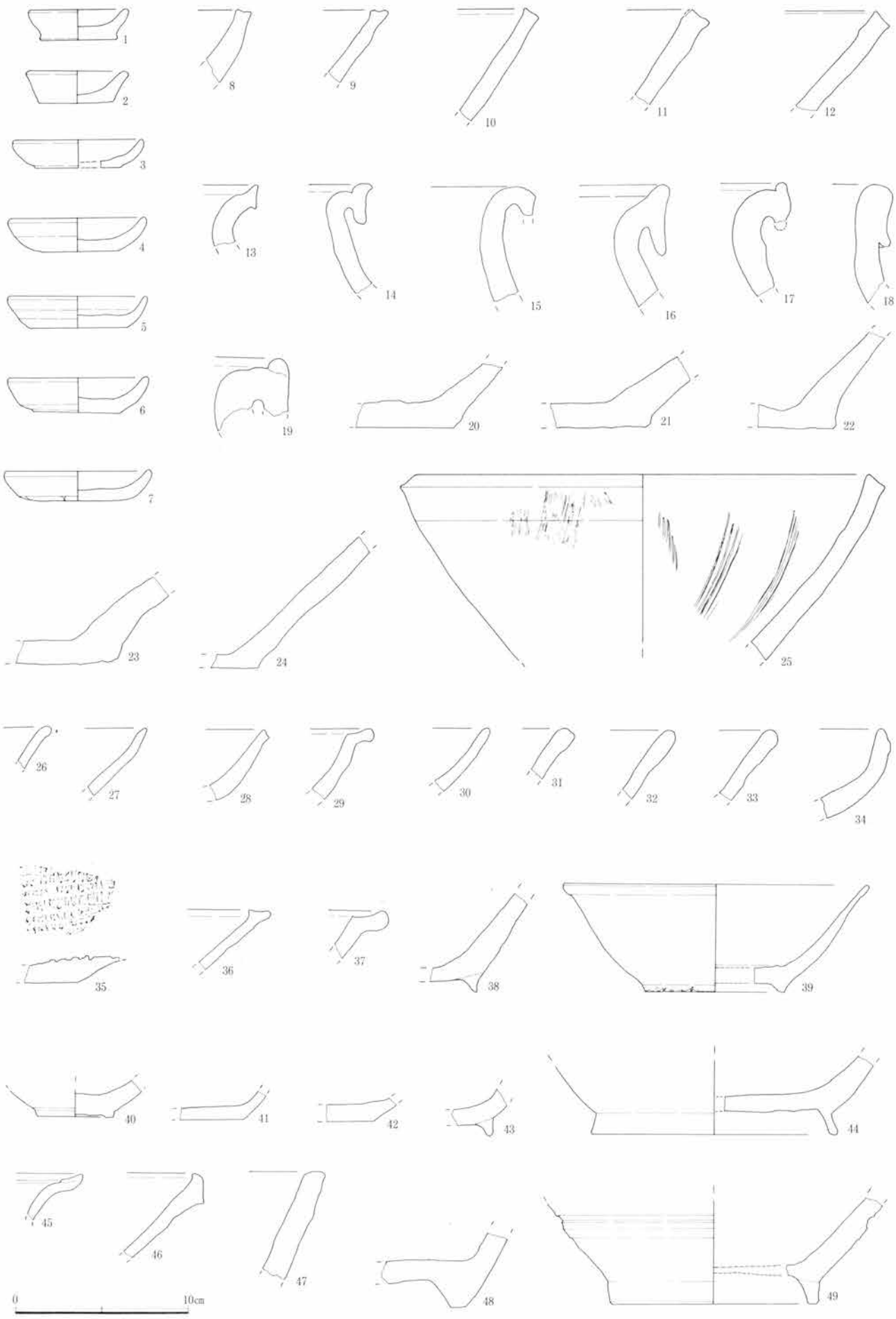

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
10cm

図７　出土した遺物

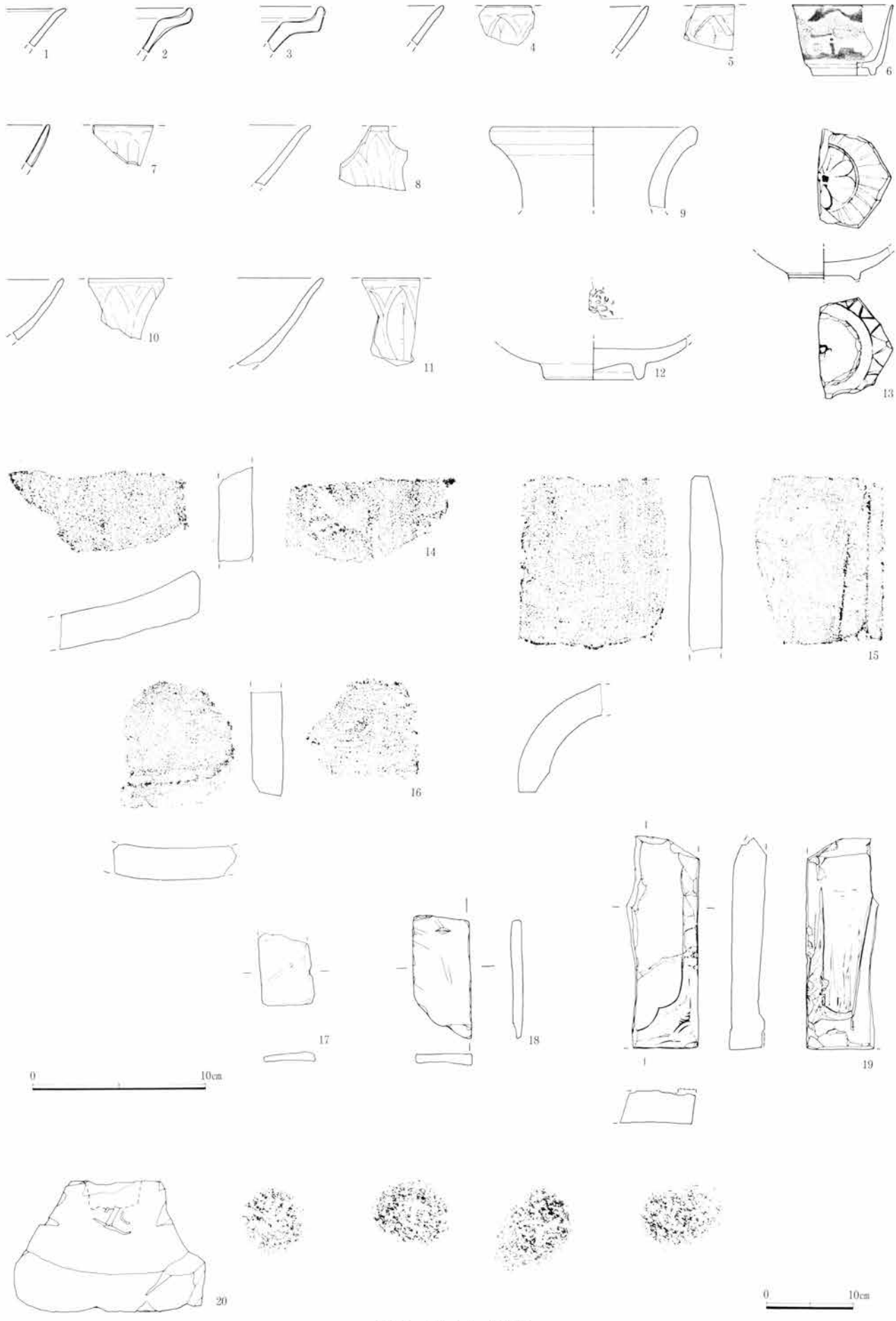


図８　出土した遺物

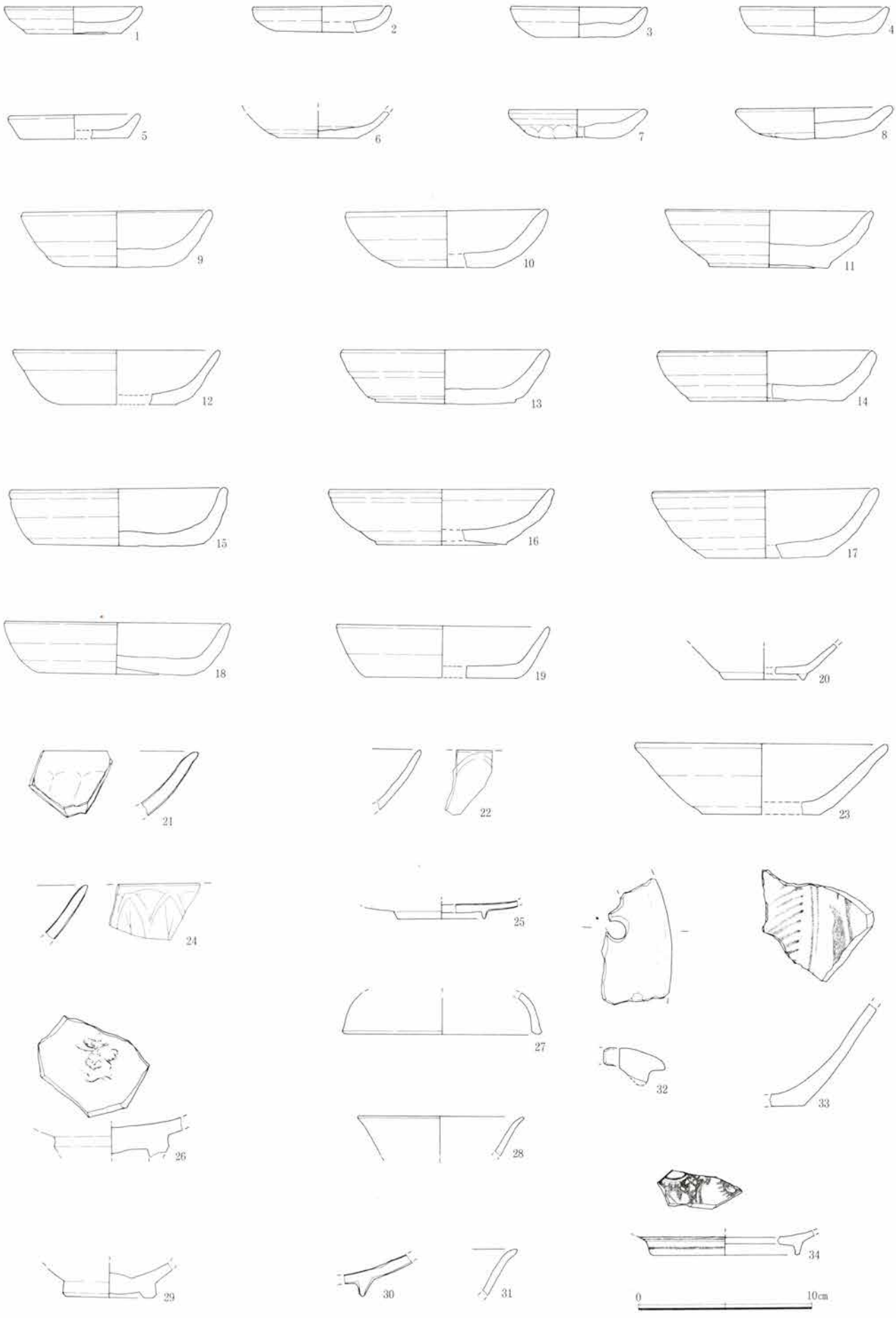

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
27
32
33
26
28
29
30
31
34
0
10cm

図９　出土した遺物

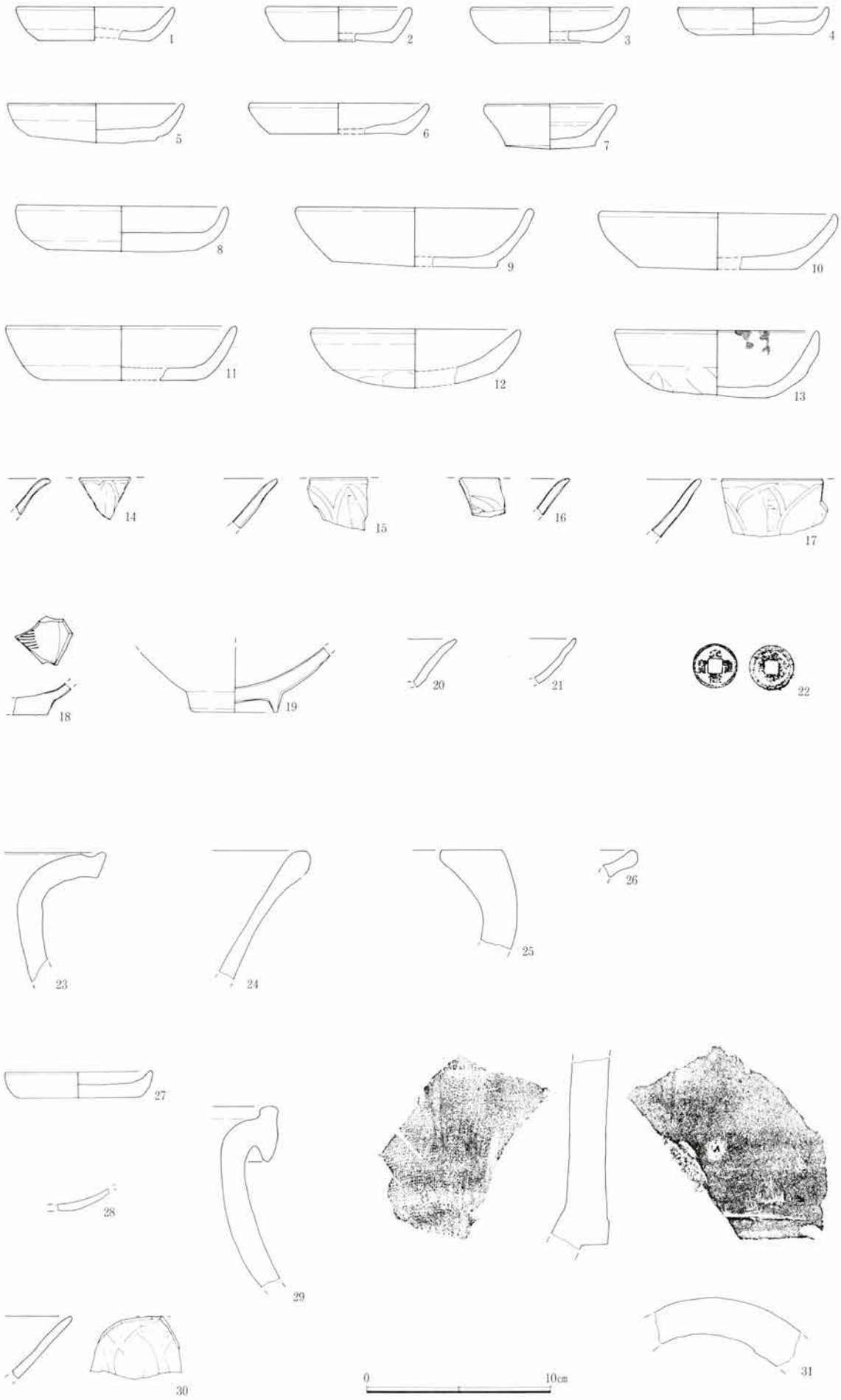

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
10cm

図10　出土した遺物

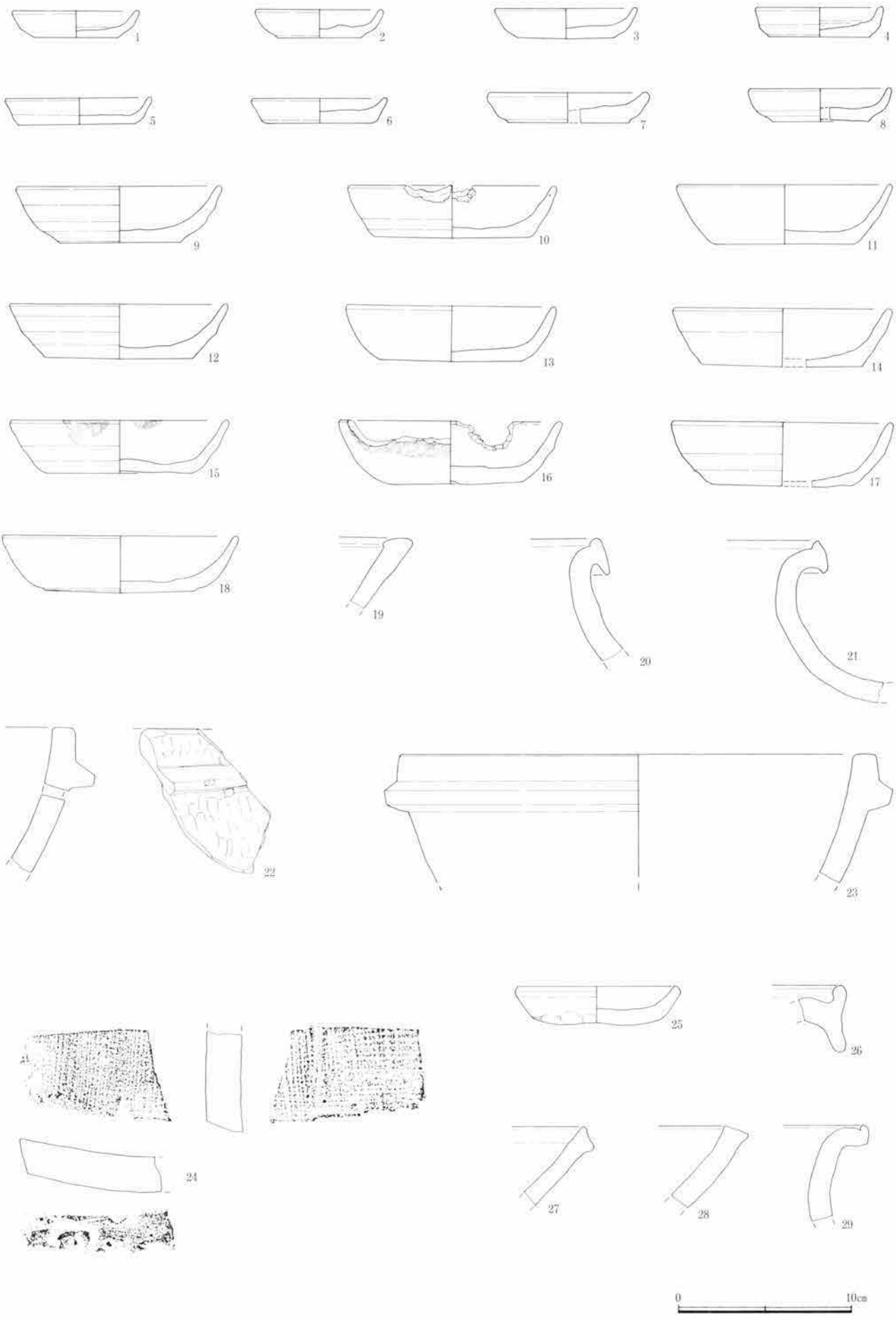

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

図11　出土した遺物

表1　遺物観察表

図6

（　）は復元　　単位はcm

No	器・種別	口径	底経	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	7.8	5.4	1.6	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	3層砂利層中
2	かわらけ	7.9	5.2	(1.6)	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	3層砂利層中
3	かわらけ	7.8	4.8	1.9	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	3層砂利層中
4	かわらけ	8.5	6.9	1.7	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	3層砂利層中
5	かわらけ	7.4	6.4	(1.4)	轆轤　胎土　精良　色調　橙灰褐色	3層砂利層中
6	かわらけ		4.7		轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	3層砂利層中
7	かわらけ	7.8		1.6	手捏ね　胎土精良　色調　にぶい黄橙色	3層砂利層中
8	かわらけ	8.6		1.8	手捏ね　胎土精良　色調　灰褐色	3層砂利層中
9	かわらけ	10.8	6.2	3.2	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	3層砂利層中
10	かわらけ	11.5	5.9	(3.3)	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	3層砂利層中
11	かわらけ	11.9	6.8	3.5	轆轤　胎土　精良　色調　灰黄色	3層砂利層中
12	かわらけ	11.8	6.4	(3.2)	轆轤　胎土　精良　色調　橙灰褐色	3層砂利層中
13	かわらけ	11.8	8.0	3.1	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	3層砂利層中
14	かわらけ	12.2	8.8	(2.9)	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	3層砂利層中
15	かわらけ	12.2	9.9	3.3	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	3層砂利層中
16	かわらけ	12.8	7.6	(3.2)	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	3層砂利層中
17	かわらけ	12.8	7.0	(3.9)	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	3層砂利層中
18	かわらけ	12.8	9.1	3.0	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	3層砂利層中
19	かわらけ	12.2	8.6	(3.0)	轆轤　胎土　精良　色調　淡灰色	3層砂利層中
20	美濃鵜山茶碗	底部片　胎土　灰白色　精良　高台貼り付け　復元高台径(4.7)				3層砂利層中
21	青磁鉢	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は明緑色　不透明　ごく粗い貫入あり　釉層ごく厚い				3層砂利層中
22	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は暗緑灰色　透明　釉層ごく薄く、蓮弁は縞がなく線描きに近い				3層砂利層中
23	山茶碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　粗い砂粒を少量含む　復元口径(14.3)　復元底径(6.8)　器高4.1				3層砂利層中
24	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は米色　透明　釉層は薄い				3層砂利層中
25	青白磁皿	底部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は水青色　透明　釉層はごく薄い　黒色微粒ごく少量含む　復元高台径(5.1)　高台部にカンナ痕　高台との境に砂付着				3層砂利層中
26	青磁碗	底部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は明緑灰色　透明　釉層は薄い				3層砂利層中
27	青白磁蓋	胎土　灰白色　精良　緻密　釉　水青色　不透明　二次焼成(？)　で表面に細かい気泡を多く持つ　復元最大径(11.5)				3層砂利層中
28	白磁口兀皿	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉　透明　釉層はごく薄い　復元口径(9.4)				3層砂利層中
29	白磁碗	底部片　胎土　灰白色　堅緻　釉は水青色　透明　ドット有り　黒色粒、気泡多く含む高台部に削り				3層砂利層中
30	青磁皿	底部片　胎土　灰白色　精良　緻密　わずかに気泡あり　釉は明緑青色　不透明　粗い貫入有り　釉層は厚い高台部露胎				3層砂利層中
31	白磁口兀皿	口縁部片　胎土　白色　精良　緻密				3層砂利層中
32	瓦質蓋(？)	胎土　黄灰色　白針、黒雲母含む				3層砂利層中
33	黄釉鉄絵鉢(盤？)	底部片　胎土　灰白色　細かい砂粒を多く含む　精良　緻密　釉は文様は鉄釉、地は黄釉　釉層はごく薄い　外面は釉なし				3層砂利層中
34	染付皿	底部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は透明　呉須　コバルト色の強い青色　高台部露胎で削り痕有り　復元高台径(8.5)				3層砂利層中

図7

No	器・種別	口径	底経	器高	成形・特徴	備考
1	瀬戸三足盤	底部片　胎土　灰黄色　精良　緻密　黄釉　釉層はごく薄い　内面は釉をハケ塗り　足は貼り付け				3層砂利層中
2	瀬戸折縁鉢	口縁部片　胎土　灰黄色　精良　釉は灰釉　透明				3層砂利層中
3	瀬戸碗	口縁部片　胎土　灰褐色　精良　釉は黄釉　釉層はごく薄い				3層砂利層中
4	瀬戸卸皿	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は緑灰色の灰釉　外体部は釉がはがれ落ちている				3層砂利層中
5	常滑捏鉢	口縁部片　胎土　灰白色　表面はにぶい赤褐色　1㎜～2㎜大までの粗い長石粒を少量含む　内面はかなり摩滅				3層砂利層中
6	常滑捏鉢	口縁～胴部片　胎土　暗灰色　細かい長石粒少量含む　表面は赤褐色　内面下部は自然降灰　かなり摩滅				3層砂利層中
7	常滑甕	口縁部片　胎土　灰色　砂粒少量含む　精良だがやや軟質　表面はにぶい赤褐色　口縁部・頸部下は降灰				3層砂利層中
8	常滑甕	口縁部片　胎土　灰色　大小の長石粒が目立つ　表面は赤茶褐色				3層砂利層中
9	常滑甕	口縁部片　胎土　暗灰色　長石粒を多く含む　表面は暗褐色　口縁の緑帯と頸上部の接合位置は不明瞭				3層砂利層中
10	常滑甕	口縁部片　胎土　暗灰色　長石の細粒を含む　精良　表面は灰赤色				3層砂利層中
11	常滑甕	口縁部片　胎土　にぶい橙色　中心部は暗灰色　粗い長石粒を含む　表面は褐色　口縁部に降灰				3層砂利層中
12	手焙り	口縁部片　胎土　明褐灰色　砂粒　クサリ礫多く含む				3層砂利層中
13	手焙り	口縁部片　胎土　褐灰色　細かい砂粒を多く含む				3層砂利層中
14	近世の陶器	口縁部片　胎土　淡黄色　精良　緻密　やや軟質(チョーク状)　釉は全体的に暗褐色(鉄釉か)　内面に少量の降灰付着				3層砂利層中
15	男甕	厚さ2.3　胎土　精良　ごく細かい砂粒少量含む　(永福寺で言えば1期)				3層砂利層中
16	常滑捏鉢	口縁部片　胎土　灰色　砂状の長石粒、砂利粒多く含む　粗い長石粒混入　内面褐灰色口縁部は降灰				3層砂利層中
17	かわらけ	6.6	5.2	1.7	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	地山層まで
18	かわらけ	8.9	6.9	1.8	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	地山層まで
19	かわらけ	8.8		(1.6)	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	地山層まで
20	かわらけ	9.9		1.5	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	地山層まで
21	かわらけ	11.2	8.8	(3.3)	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	地山層まで
22	かわらけ	11.8	7.4	(3.3)	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	地山層まで
23	かわらけ	13.0	9.2	3.4	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	地山層まで
24	かわらけ	12.9	9.2	3.5	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	地山層まで
25	かわらけ	12.9	7.4	3.2	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	地山層まで
26	銅製笄	長さ15.5　表面は魚子地　裏面は文様の加工なし				4層黒色砂質土
27	漆皿	底径6.2				4層黒色砂質土

表1　遺物観察表

図7

（　）は復元　　単位はcm

No	器・種別	口径	底経	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	5.4	4.6	1.8	轆轤　胎土　精良　色調　赤褐色	4～7層地山層
2	かわらけ	5.4	4.3	1.9	轆轤　胎土　精良　色調　明赤褐色	4～7層地山層
3	かわらけ	7.3	5.0	(1.7)	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	4～7層地山層
4	かわらけ	7.6	4.6	2.1	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	4～7層地山層
5	かわらけ	7.8	5.9	1.8	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	4～7層地山層
6	かわらけ	7.9	5.2	2.0	轆轤　胎土　精良　色調　淡橙色	4～7層地山層
7	かわらけ	8.1		1.8	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	4～7層地山層
8	常滑捏鉢	口縁部片　胎土　暗灰色　細かい長石粒を含む　精良　緻密　表層は赤黒～暗赤褐色				4～7層地山層
9	常滑鉢	口縁部片　胎土　暗赤褐色　1㎜～2㎜大の長石含み、硬質　釉は赤褐色				4～7層地山層
10	常滑鉢	口縁部片　胎土　にぶい赤褐色　非常にしまり良く硬質　やや粘性有り　素地に細かい長石粒をわずかに含む(～1㎜)				4～7層地山層
11	常滑甕	口縁部片　胎土　灰赤色　極めて硬質　2㎜大の長石含む				4～7層地山層
12	常滑甕	口縁部片　胎土　灰色　細かく硬質で、長石、石英を含む				4～7層地山層
13	常滑甕	口縁部片　胎土　灰色　ごく細かい砂粒含む　精良　緻密　表面は暗赤灰色				4～7層地山層
14	常滑甕	口縁部片　胎土　褐色　1～3㎜大の長石含む				4～7層地山層
15	常滑甕	口縁部片　胎土　黒褐色　精良　石英、長石多く含む				4～7層地山層
16	常滑甕	口縁部片　胎土　暗茶褐色　精良　石英、長石多く含む				4～7層地山層
17	常滑甕	口縁部片　胎土　にぶい赤褐色　1㎜大の長石含む				4～7層地山層
18	常滑甕	口縁部片　胎土　灰赤色　硬質				4～7層地山層
19	常滑甕	口縁部片　胎土　にぶい赤褐色　5㎜大の長石含む				4～7層地山層
20	常滑甕	底部片　胎土　灰褐色　2～3㎜小石含む				4～7層地山層
21	常滑甕	底部片　胎土　にぶい赤褐色　2～5㎜大の長石粒多く含む				4～7層地山層
22	常滑甕	底部片　胎土　黒褐色　釉は灰オリーブ色　硬質				4～7層地山層
23	常滑甕	底部片　胎土　褐灰色　非常に硬質　小石粒含む				4～7層地山層
24	常滑甕	底部片　胎土　褐灰色　精良				4～7層地山層
25	常滑甕	口縁部～底部片　胎土　灰褐色　細かい長石、石英粒を多く含む　外面は橙色　ワラの焼成文様(たて線)有り　復元口径25.9				4～7層地山層
26	瀬戸碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　釉は灰釉				4～7層地山層
27	瀬戸平碗	口縁部片　胎土　灰色　精良　釉は灰釉　淡灰緑色　透明　釉層は薄い				4～7層地山層
28	瀬戸卸皿	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　全体に灰釉 (外面は剥がれ落ちている)				4～7層地山層
29	瀬戸折縁鉢	口縁部片　胎土　淡黄色　精良　ややしまり悪くチョーク状　釉は残存部全体に灰釉　明緑灰色				4～7層地山層
30	山茶碗	口縁部片　胎土　灰色				4～7層地山層
31	山茶碗窯系捏鉢	口縁部片　胎土　灰白色				4～7層地山層
32	山茶碗窯系捏鉢	口縁部片　胎土　灰白色　長石粒を多く含む				4～7層地山層
33	山茶碗窯系捏鉢	口縁部片　胎土　灰白色　1㎜大の石英、石粒、長石を含む				4～7層地山層
34	瓦質火舎 (線香立て)	口縁部～胴部片　胎土　にぶい橙色　細かい砂粒を含む　精良　緻密　表面は灰色　弱い横みがき、珠文有り				4～7層地山層
35	瀬戸卸皿	胎土　淡黄色				4～7層地山層
36	瀬戸鉢	口縁部片　胎土　灰色　精良　釉は黄釉　釉層ごく薄い				4～7層地山層
37	瀬戸折縁鉢	口縁部片　胎土　灰白色　やや軟質				4～7層地山層
38	山茶碗窯系捏鉢	底部片　胎土　灰白色　2㎜大の長石粒、小石粒多く含む				4～7層地山層
39	山茶碗	胎土　灰白色　もみがら痕有り　口径17.5　底径4.0　器高(6.2)				4～7層地山層
40	瀬戸碗	底部片　胎土　灰白色　釉は灰釉　淡黄色　外面露胎　復元口径(4.3)				4～7層地山層
41	瀬戸折縁皿	底部片　胎土　釉は淡黄～淡緑色				4～7層地山層
42	瀬戸碗	底部片　胎土　灰白色　釉は淡黄色				4～7層地山層
43	山茶碗窯系捏鉢	底部片　胎土　灰白色　高台貼り付け				4～7層地山層
44	山茶碗窯系捏鉢	胎土　灰白色　小石粒、長石粒多く含む　高台径14.0　高台貼り付け				4～7層地山層
45	伊勢系土鍋	口縁部片　胎土　中心部は灰白色　1㎜大までの長石粒、砂粒、金雲母粒多く含む　内面はにぶい灰黄色　外面は全体的にスス付着				4～7層地山層
46	魚住捏鉢	口縁部片　胎土　暗灰色　細かい砂粒から成る　内面は口縁部から下に自然降灰で光沢をもつ				4～7層地山層
47	手焙り	口縁部片　胎土　濃灰色				4～7層地山層
48	手焙り	底部片　胎土　灰白色　5～7㎜大の小石粒含む				4～7層地山層
49	山茶碗窯系捏鉢	底部片　胎土　明オリーブ灰色　長石、石灰質の粒含み硬質　やや粘性有り　内面はガサガサ　高台摩滅　高台径11.9				4～7層地山層

図9

No	器・種別	口径	底経	器高	成形・特徴	備考
1	白磁口兀皿	口縁部片　胎土　灰白色　精良　釉は灰白色　透明　釉層は薄い				4～7層地山層間で
2	青磁折縁皿	口縁部片　胎土　灰白色　精良　釉はオリーブ褐色　透明　釉層ごく厚い				4～7層地山層
3	青磁折縁皿	口縁部片　胎土　灰白色　精良　釉は暗緑色　二次焼成で釉が溶けたり、気泡ができたりが著しい				4～7層地山層
4	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　釉は明灰オリーブ色　透明				4～7層地山層
5	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰色　精良　緻密　釉は灰オリーブ色　透明				4～7層地山層
6	染付	胎土　白色　呉須　青色　釉は透明　復元口径(5.7)　復元底径(高台径)　(3.6)　器高(4.1)　高台部露胎				4～7層地山層
7	青磁蓮弁文碗	小縁部片　胎土　灰白色　精良　明緑灰色　不透明　釉層ごく厚い				4～7層地山層
8	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰色　精良　緻密　釉はオリーブ色　透明　釉層ごく薄い				4～7層地山層
9	瀬戸四耳壺	口縁部片　胎土　淡黄色　精良　緻密　チョーク状　残存部全体に灰釉　復元口径(11.5)				4～7層地山層
10	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は明緑灰色　半透明　釉層は薄い				4～7層地山層
11	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は明緑灰色　透明　釉層は薄い				4～7層地山層
12	青磁印花文碗	底部片　胎土　灰色　精良　緻密　釉は明緑灰色　透明　釉層ごく薄い　細かい貫入有り　復元底径(5.3)　高台部露胎				4～7層地山層
13	染付	底部片　胎土　灰白色　精良　緻密　呉須　青色　色調はやや淡い　釉は透明、やや濁る				4～7層地山層
14	女瓦	厚さ2.3　胎土　精良　細かい砂含む　凸面に斜格子叩き				4～7層地山層
15	男瓦	厚さ1.9　胎土　やや粗く、2㎜大の石粒含む　凹面に縄目叩き				4～7層地山層
16	女瓦	厚さ1.8　胎土　細かくやや粘性のある胎土　5㎜大の石粒、2～3㎜大の長石含む　火を受けたのか赤味を帯びている				4～7層地山層
17	砥石	残存長4.2　幅3.0　厚さ0.5				4～7層地山層
18	砥石	残存長7.2　幅3.2　厚さ0.6				4～7層地山層
19	硯	残存長12.2　残存幅4.2　厚さ1.9				4～7層地山層
20	石塔(火輪)	高さ15.0　幅22.0　安山岩製　四面に種有り				4～7層地山層

図10

No	器・種別	口径	底経	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	8.4	5.8	(1.8)	轆轤　胎土　精良　色調　灰黄色	3層下地山砂層まで
2	かわらけ	7.8	5.8	(1.9)	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい橙色	3層下地山砂層まで
3	かわらけ	8.4	5.9	(1.9)	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	3層下地山砂層まで
4	かわらけ	8.0	6.2	1.5	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	3層下地山砂層まで
5	かわらけ	9.4	6.8	2.1	轆轤　胎土　精良　色調　灰黄色	3層下地山砂層まで
6	かわらけ	9.6	7.6	(1.8)	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい橙色	3層下地山砂層まで
7	かわらけ	7.0	4.9	2.5	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	3層下地山砂層まで
8	かわらけ	11.2	8.2	2.5	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	3層下地山砂層まで
9	かわらけ	12.4	9.0	(3.2)	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい橙色	3層下地山砂層まで
10	かわらけ	12.6	10.8	(3.2)	轆轤　胎土　精良　色調　灰黄色	3層下地山砂層まで
11	かわらけ	12.3	8.2	(3.0)	轆轤　胎土　精良　色調　明黄褐色	3層下地山砂層まで
12	かわらけ	11.0		(3.2)	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	3層下地山砂層まで
13	かわらけ	10.9		3.5	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい橙色	3層下地山砂層まで
14	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は淡緑色　透明　釉層は厚い				3層下地山砂層まで
15	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は淡緑色　透明				3層下地山砂層まで
16	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は淡緑色　透明				3層下地山砂層まで
17	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は水青色　透明　釉層は比較的薄い				3層下地山砂層まで
18	青白磁皿	底部片　胎土　灰白色　精良　緻密　黒色粒少量含む　釉は水青色　透明				3層下地山砂層まで
19	青磁蓮弁文碗	底部片　胎土　灰白(部分的ににぶい橙色)色　精良　緻密　釉は淡緑色　不透明　釉層厚い　貫入有り　蓮弁文だが釉層が厚く不鮮明　復元高台径(4.8)　高台部露胎				3層下地山砂層まで
20	白磁口九皿	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は透明　ドット有り				3層下地山砂層まで
21	美濃皿	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は灰釉(?)				3層下地山砂層まで
22	銭					3層下地山砂層まで
23	常滑甕	口縁部片　胎土　暗灰色　長石粒を多く含む　精良				3層下地山砂層まで
24	山茶碗窯系捏鉢	口縁部片　胎土　灰色　精良　緻密　口縁部付近は降灰				3層下地山砂層まで
25	手焙り	口縁部片　胎土　灰白色　精良　細かい気泡、砂を含む				3層下地山砂層まで
26	瀬戸折縁鉢	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は灰釉				3層下地山砂層まで
27	かわらけ	7.8	6.5	1.4	轆轤　胎土　精良　色調　淡灰褐色	表土一括
28	青白磁小皿	底部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は水青色　透明　底部露胎				表土一括
29	常滑甕	口縁部片　胎土　にぶい黄橙色(中心部は褐灰色)　表面はにぶい赤褐色				表土一括
30	青磁蓮弁文碗	口縁部片　胎土　灰白色　精良　緻密　釉は明オリーブ灰色　透明				表土一括
31	男瓦	胎土　精良　凹面に布目痕あり				表土一括

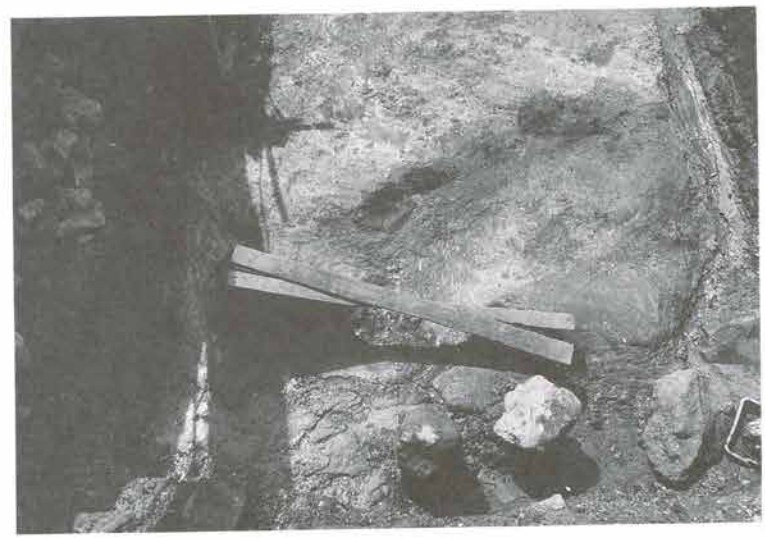
図11

No	器・種別	口径	底経	器高	成形・特徴	備考
1	かわらけ	7.1	4.9	1.5	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	調査区西端落込覆土中
2	かわらけ	7.2	4.8	1.6	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	調査区西端落込覆土中
3	かわらけ	8.0	5.6	1.8	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい橙色	調査区西端落込覆土中
4	かわらけ	7.2	5.8	1.7	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	調査区西端落込覆土中
5	かわらけ	8.2	6.1	1.5	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい橙色	調査区西端落込覆土中
6	かわらけ	7.5	6.3	1.4	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	調査区西端落込覆土中
7	かわらけ	9.0	7.0	1.8	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	調査区西端落込覆土中
8	かわらけ	8.2	5.5	1.9	轆轤　胎土　精良　色調　浅黄色	調査区西端落込覆土中
9	かわらけ	11.5	6.9	3.3	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	調査区西端落込覆土中
10	かわらけ	11.7	8.7	3.0	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい橙色	調査区西端落込覆土中
11	かわらけ	12.1	7.9	3.4	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい橙色	調査区西端落込覆土中
12	かわらけ	12.3	8.3	3.2	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい橙色	調査区西端落込覆土中
13	かわらけ	11.8	8.1	3.2	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい褐色	調査区西端落込覆土中
14	かわらけ	12.3	9.2	3.4	轆轤　胎土　精良　色調　全体が火を受けているため不明	調査区西端落込覆土中
15	かわらけ	12.3	8.2	3.0	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい橙色	調査区西端落込覆土中
16	かわらけ	12.6	7.5	3.6	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	調査区西端落込覆土中
17	かわらけ	12.4	8.0	3.7	轆轤　胎土　精良　色調　にぶい橙色	調査区西端落込覆土中
18	かわらけ	13.3	8.6	3.3	轆轤　胎土　精良　色調　橙色	調査区西端落込覆土中
19	手焙り	口縁部片　胎土　灰白色(中心部は暗灰色)　砂を多く含む　やや軟質				調査区西端落込覆土中
20	常滑瓦	口縁部片　胎土　暗灰色　粗い長石粒を多く含む　外面は暗赤褐色　口縁・外面下部に降灰				調査区西端落込覆土中
21	常滑瓦	口縁部片　胎土　灰色　部分的に灰褐色　内体面は灰褐～にぶい赤褐色　口縁部・肩部は降灰				調査区西端落込覆土中
22	滑石鍋	口縁部片　外面のみ全体にスス付着　穴と穴をつなぐ溝有り				調査区西端落込覆土中
23	滑石鍋	口縁部片　外体面はノミで形成したあと、横方向に磨いている　ススの付着はほとんど見られない　復元口径24.6　復元最大径29.0				調査区西端落込覆土中
24	女瓦	厚さ2.1　胎土　精良				調査区西端落込覆土中
25	かわらけ	9.2		2.1	手捏ね　胎土　精良　色調　にぶい黄橙色	3層下
26	常滑瓦	口縁部片　胎土　暗赤褐色				3層下
27	常滑瓦	口縁部片　胎土　褐灰色　精良				3層下
28	常滑瓦	口縁部片　胎土　暗赤褐色				3層下
29	常滑瓦	口縁部片　胎土　黒褐色				3層下

調査区全景(西から)

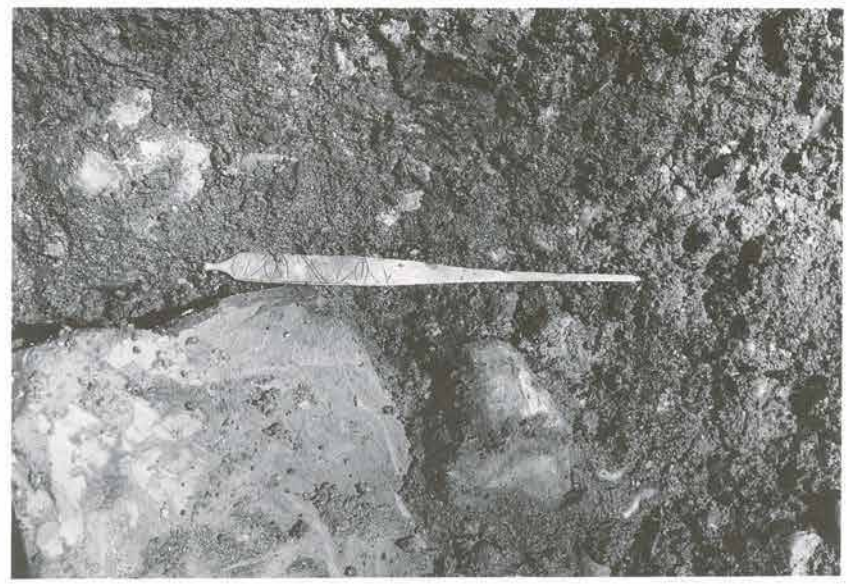
西端落ち込み

西端落ち込み



図版2

西壁セクション



遺物出土状況

遺物出土状況

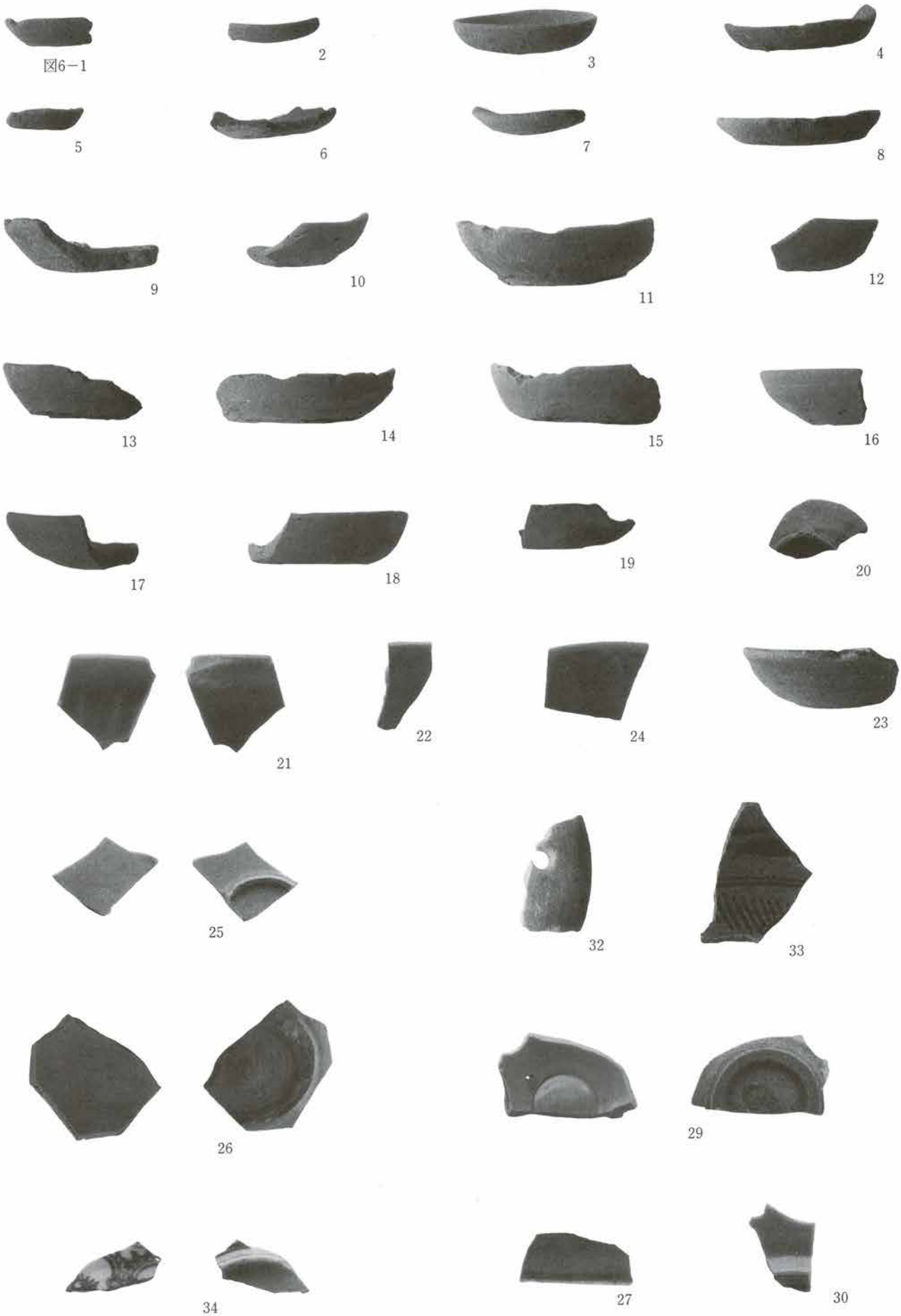


図6−1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
24
23
25
32
33
26
29
34
27
30

図版４

図7－1

2

3

4

10

9

5

6

7

8

12

13

15

11

16

14

27

26

17

18

19

20

20

22

23

24

25

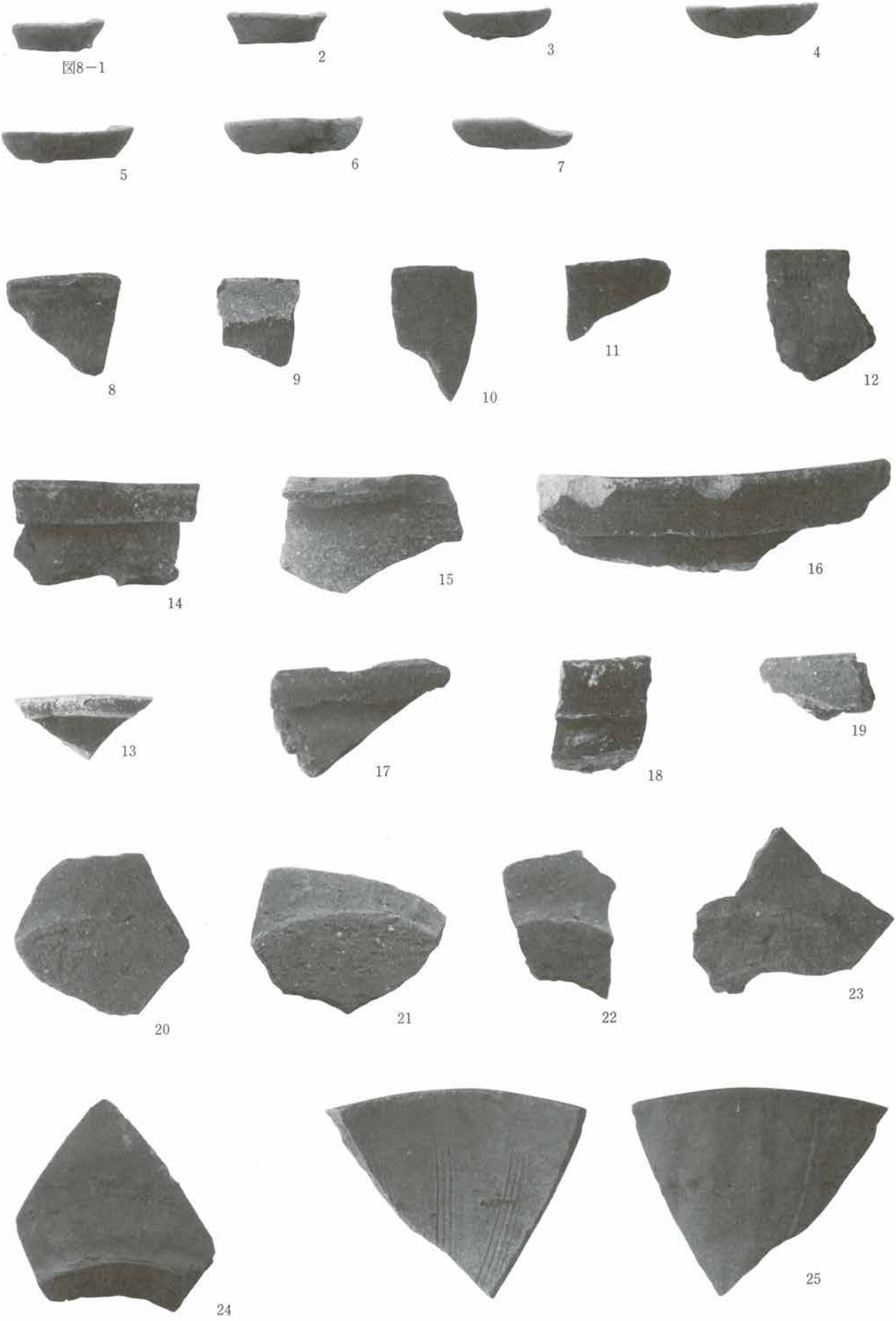


図8－1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
14
15
16
13
17
18
19
20
21
22
23
24
25

図版6

図8－26

27

28

29

30

31

32

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

図9−1

2

3

4

5

6

7

8

9

13

10

11

12

15

14

16

18

20

19

図版8

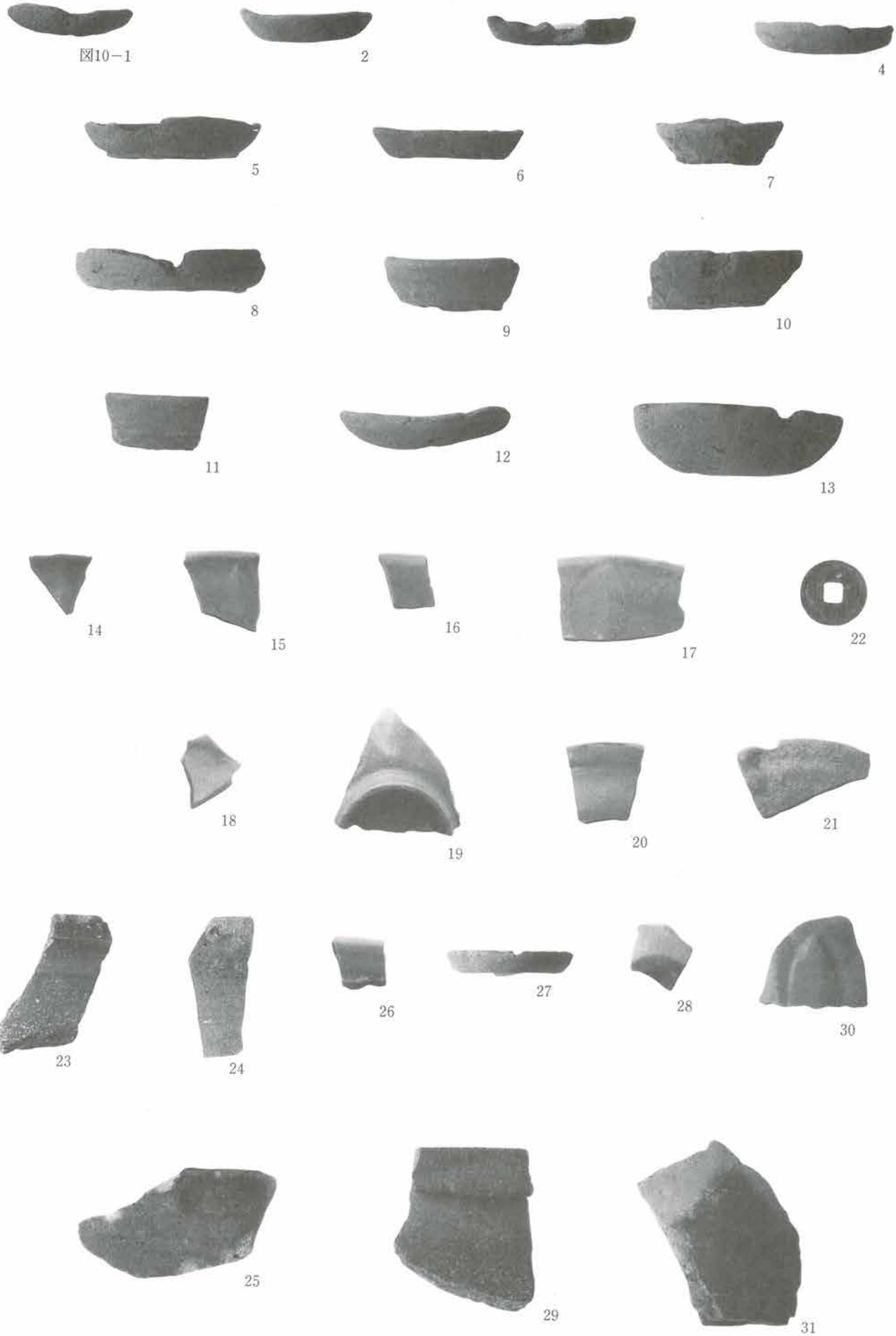


図10－1
2
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
22
18
19
20
21
23
24
26
27
28
30
25
29
31

図11－1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

25

26

23

22

24

27

28

29

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19
副書名	名越ヶ谷遺跡(大町三丁目2356番10)
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	福田　誠
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	平成15年３月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市大町三丁目2563番10	14204	231	35度18分36.6秒	139度33分38秒	20010506 ～ 20010521	59.94㎡	住宅建設に係わる事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名越ヶ谷遺跡	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	・土壙 ・溝	・かわらけ ・常滑甕 ・青磁 ・銭	

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19
副書名	名越ヶ谷遺跡(大町三丁目2356番~~10~~)
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	福田　誠
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	平成15年３月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
なごえがやつ 名越ヶ谷 いせき 遺跡	かながわけん 神奈川県 かまくらしおおまち 鎌倉市大町 三丁目~~2563番10~~ * 2356番10	14204	231	35度 18分 36.6秒	139度 33分 38秒	20010506 ～ 20010521	59.94㎡	住宅建設 に係わる 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
なごえがやつ 名越ヶ谷 いせき 遺跡	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	・土壙 ・溝	・かわらけ ・常滑甕 ・青磁 ・銭	

＊令和6年1月22日報告書本文の内容に訂正(鎌倉市教育委員会)

鎌倉市埋蔵文化緊急調査報告　19

平成14年度発掘調査報告

発　行　日　平成15年３月

編集・発行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　中川印刷株式会社